

KalpalatāとAvadānamālāの研究(14) : TJAM 第20章 ～第26章

岡野, 潔
九州大学 : 名誉教授

<https://hdl.handle.net/2324/7439365>

出版情報 : SOUTH ASIAN CLASSICAL STUDIES. 21, pp.1-292, 2026. 九州大学大学院人文科学府・文学部
インド哲学史研究室
バージョン :
権利関係 :



Kalpalatā と Avadānamālā の研究 (14) — TJAM 第20章～第26章 —

九州大学 岡野 潔

Tathāgatajanmāvadānamālā (TJAM) 『如来出生アヴァダーナマーラー』という作品は、全37章から成るゴータマ・ブッダの伝記として、梵語（サンスクリット）で書かれた仏伝文献である。この文献は17世紀にネパールで作られたと考えられ、その作品制作の中心にいた作者は Jayamuni という人物であると推測される。

私が最初にこのTJAMの作品に取り組んで第1章の校訂梵文テキストと和訳を発表したのは2014年である。それ以来これまでに、第1、第3、第4、第8、第13～第19章の梵文テキストと翻訳を『南アジア古典学』の雑誌上に発表した。今回、本稿でその続きの、第20章～第26章の7つの章の校訂テキストの全文とその和訳を提示したい。

この7つの章に関心を抱いてもらうために、少し内容を説明すると、それらの章は釈尊の前半生の中で最も興味深く、人気ある場面を扱う。TJAM 第20章（内容：菩薩が後宮の女たちの寝乱れた醜い姿を見て脱出を決意）と第21章（内容：菩薩の城からの脱出の出来事）と第22章（内容：馬丁のチャンドカと馬カンタカが城に戻る）の三つの章は、内容がほぼ Lalitavistara の第15章（出家品）に相当する。Lalitavistara の第15章は、その経の全27章の中でも最もボリュームがあり、この場面が当時の人々に最も人気があったことがその章の長さで書きぶりからうかがえる。釈尊が釈迦族の王位継承者でありながら夜中に城を抜け出して出家してしまったという出来事は、降魔（正覚直前での悪魔の軍との戦い）の場面とならぶ、民衆向けの仏伝としての語りの山場の一つをつくる。特に菩薩が夜中に城を出て出家する場面（TJAM 第21章）や、翌朝の王宮での人々の嘆き、馬丁チャンドカの帰還の場面を描く場面（TJAM 第22章）は説法師たる話し手にとっては聞かせどころで、自然に偈数が多くなる。第21章と第22章の両章は、他の章の約二倍も長く、偈数の多さに驚く⁽¹⁾。

TJAM という作品は全体的に Lalitavistara の伝承を依用することが多いが、TJAM の第17章・18章・21章・22章・23章・24章・25章では馬鳴の Buddhacarita (略号 Bc) を利用した箇所が多く出てくる。TJAM 第20章～第26章における Bc との関係の詳細は、本論文の最後に挙げた表を見てもらいたい。ここで短く説明しよう。TJAM 第20章と第

1. TJAM 第20章は213偈、第21章は539偈、第22章は484偈、第23章は217偈、第24章は163偈、第25章は231偈、第26章は241偈から成る。

21章はほぼ Lalitavistara に基づいて作られている⁽²⁾。TJAM という作品の成立時にすでにその作品中に Bc のテキストが利用されてあちこちで借用されていたことは間違いない。TJAM 第22章の後半部では Bc の第6章「馬丁を返す」と第8章「後宮での嘆き」のテキストが借用されている。次の第23章では Bc の第7章「苦行の森」を利用した偈が47偈ある。次の第24章はその章の全体が Bc の第9章「大臣と宮廷祭官の説得」をベースに作られていて、第9章との類似偈や同一偈を多くもつ。次の TJAM 第25章でも Bc の第10章「シュレーニヤ・ビンビサーラ王の来訪」に基づいた箇所があり、その類似偈が合計42偈もある。その次の TJAM 第26章はほぼ Lalitavistara 第17章に基づいていて、Bc の利用箇所は1偈しかない。

1. TJAM の Jayamuni 写本について

ネパールで作られたアヴァダーナマラー文献群と呼ばれる梵語で書かれた一連の仏教説話文学の諸文献について私が九州で研究を始めてもう20年が経った。その文献群をいかに校訂するかという問題に私は直面したが、これまでの私なりの手探りの学問的なアプローチの仕方を振り返ると、「17世紀の Jayamuni が筆写した諸写本に注目して校訂すること」が、自分なりに見つけたアヴァダーナマラー文献群の文献研究の進め方であった。ゴルカ朝による征服によってマッラ王朝が終焉を迎えてネワール族が政治的・経済的な実権を失った18世紀末から19世紀にかけて、ネワール族の梵語の学力が弱まり、彼らが書いた仏教の梵語写本は質が劣化してゆくが、そうなる前の時代のネパール・アヴァダーナ文献の形成期の写本として特に信頼が出来る紙写本を探しているうちに、パタンの Jayamuni が書いた諸写本に行き着いたわけである。

カトゥマンドゥ盆地の三王国（カトゥマンドゥ・パタン・バクタプル）分裂時代は1484年から1769年まで続く。その三王国時代の、特に17世紀を中心とする16世紀から18世紀前半までの時代は、ネワール族が独自の仏教文化の成熟した実を得た最後の栄光の時

2. ただし第21章の終わり近くで Bc 第6章からの長い借用が見られる。その借用箇所は TJAM 第21章の427, 436～490, 493～498, 529～532偈であり、Buddhacarita 第6章 1～68 にあたる。しかし TJAM の最古の写本 A（Jayamuni 筆写の写本）においては、ちょうどその Bc の長い借用箇所は、Jayamuni の書いた葉になく、新しい時代に差し替えられた葉（A2）の上だけに存在している。内容的に見てもそれは蛇足であるから、TJAM の第21章の本来のテキストの姿（Jayamuni が書いた形）では、その第6章の逐語的な借用は無かったと思われる。そもそも第21章におけるその Bc の長い逐語的な借用文は、奇妙にも次の TJAM 第22章で Jayamuni が書いた古い葉の上でその Bc の第6章の同じ箇所の長い借用がある（TJAM 22.352～413, 415～417）のと重なってしまうため、作品の編集上から判断して明らかなミスなのである。第21章で A 写本の差し替えの葉を書いた後の時代の写経生が、TJAM の第22章をよく読まずに Bc 第6章のテキストを書いた新しい葉に差し替えたせいで、このような重複が生じたようだ。

期であった。その時に彼らは、インドで滅亡した仏教が遺した多量の梵語文献の遺産を堅持しながら、文学の分野においてもアヴァダーナマーラー文献群に見られる様な独自の仏教文学を作り上げるに至った。その時にインドやチベットと異なる独自の仏教文学の創造をカトゥマンドゥ盆地のネワールの民は成し遂げたのであり、生み出されたそれらの文芸作品はネパール文化の誇りとして、忘れ去られるべきではない。

ネパールの梵語文学史において、新たな文献の創造のためにパタンの偉大な学者 Jayamuni が精力的に活動した17世紀という時代は、ネワール仏教文化の理解のために見過ごせない重要な時期である。その世紀に、従来の高価な貝葉という素材に取って代わる紙が一般に普及し、矢継ぎ早に紙写本として新たな梵文作品群が次々に自発的に書きおろされ、独自のスタイルをもつ文芸作品が多量に創造されるに到った。私はパタンの Jayamuni を中心とする人々が、このネパール独自のアヴァダーナマーラーという、紙写本を用いた新しい文学文献の創作運動を起こした集団であったと推測する。

Jayamuni とその協力者たちによる、釈尊（ゴータマ・ブッダ）の仏伝『如来出生アヴァダーナマーラー』Tathāgatajanmāvadānamālā (TJAM) という作品の創造は、パタンの地にある Jayamuni が属する仏教寺院 Mahābauddha（或いは Mahābuddha）の経済的支援でなされたようである³⁾。釈迦牟尼仏の聖地 Bodhigayā と関わる特殊な成り立ち故に「釈尊に帰れ」という独自の宗教的立ち位置を有したその寺院は、特に「マハーブッダ Mahābuddha（釈迦牟尼仏）の信仰へ」という宗教的使命感を強くもっていたようである。経済力に恵まれていたその寺院の運営者でもあった学者 Jayamuni の行った新写本創造の活動は、彼が若い頃から関心をもって行っていたインドのジャータカ・アヴァダーナや仏伝などの古写本の筆写・研究と、パタンの彼の周囲の多数のシャーキヤたちと共に推進する新たな釈迦牟尼仏信仰の方向性とが、うまく結びついて生じたものと思われる。

この TJAM という文芸作品は、全37章から成る仏教の開祖釈迦牟尼（即ちマハーブッダ）の詳細な伝記として、梵語で書かれた仏伝文献である。この文献は、17世紀にネパールのパタンの地で、最古のその紙写本（A 123/5）の筆写人たる Jayamuni が作品制作の中核的人物として働くことで作られたものと推測できる。この Jayamuni という人物は、ネパールが貝葉写本から紙写本へ移る転換期に、Mahāvastu などの仏教説話文学関係の梵語写本を丁寧に良心的に筆写し作成して、多くの重要な紙写本を現代まで遺してくれた偉大な功績がある学者として、現在の学界で特に大きな注目が集まっている。

この仏伝 TJAM の作者は、実に学者的な態度で、ネパールに伝わるインドの三つの梵語の仏伝、すなわち馬鳴の Buddhacarita と大乘経典 Lalitavistara と大衆部説出世部の

3. この TJAM という作品の第21章396偈に「マハーブッダ」という特殊な表現が見つかることは、この作品が Jayamuni の寺院との関わりで作られたことを証拠立てるものである。

律典 Mahāvastu を主な資料として、その三仏伝のそれぞれの良質の写本を探してきちんと読解し、それらの古代インドの権威的な仏伝伝承を踏まえながら、成立系統が異なるそれらの仏伝の諸伝承をうまく一本化して、今後のネワール族の釈尊信仰が基づくべき新しい学問的な仏伝を作ろうとした。最初の筆写人の Jayamuni は、恐らくパタンの地でネワール族の知識人や僧たちの子弟たちの釈迦牟尼仏信仰の強化という目的のため、この TJAM という長い釈尊の伝記作品を、恐らく数人の弟子たち・協力者たちと共に作ったのであろう。

この TJAM という新しい仏伝は、読者がインド古代の仏教混淆梵語という特殊なサンスクリット語に関する詳しい知識をもっていなくても、古典サンスクリットの知識があれば読める作品をめざしている。大部分がシュローカの韻律を用いた平易な作品であるが、仏伝として学問的に信頼できるものを作ろうと意図されている。その仏伝の内容をみると、作者がもつ、古いインドの仏典伝承にできるだけ忠実であろうとする学問的な態度に感心させられる。創作において彼は常に仏伝 Buddhacarita と Lalitavistara と Mahāvastu の良質の写本をかたわらに置いて、それらを正確に読んでいたことがうかがわれる。その3文献の写本を読みながらの執筆はなかなか大変な作業であったろう。TJAM の作者は自分の力でかなり難しい梵語で書かれたインドの三種類の異なる仏伝伝承を読み解き、うまく統合することで、詳しく正確な釈尊伝のネパールでの普及に役立つ作品にしようと試みたのである。

ネパールの仏伝アヴァダーナマーラーとして、TJAM のほかに Sambhadrakalpāvadāna mālā (SAM) と Bhadrakalpāvadāna (BKA) という二つの梵語の韻文作品が存在する。Jayamuni が筆写したのが TJAM と SAM である。まず Lalitavistara を作品の骨組みとして初転法輪までの仏伝を語る TJAM が完成した後、それに続く別の作品として、Mahāvastu を主な材料とする、初転法輪以後の釈尊の活動、特にカピラヴァストウにいる釈迦族における教化活動の出来事を語る作品である SAM が作られた。ネワール族のシャーキャと名乗る者たちにとって、それは大昔の自分たちの先祖たちの物語と感じられたであろうから、その古代の釈迦族の出来事を語って聞かせる仏伝作品がパタンで TJAM に続く仏伝アヴァダーナマーラーとして作られたのも自然な流れであったろう。パタンの大学者 Jayamuni が SAM の写本の筆写を完成させた年（1686年か）の後の数十年以内に、別の人物がその SAM の大がかりな増補改訂版として、作品全体を編集し直し、作品名も変えて、新しい作品として仕上げたものが BKA という仏伝なのであろう。Joel Tatelman (1996) は彼の博士論文として、ネパールの仏伝アヴァダーナマーラーの一つである BKA の内容を初めて本格的に研究した。その彼の優れた研究によって、BKA は SAM の作品にはなかった新しい特徴として、ヤショーダラーが主人公となる、彼女の試練と信仰の物語をその第2章～第9章で有していることが明らかになった。その追加された大きな物語においては、釈尊の妻ヤショーダラーが胎児ラーフラを六年

間妊娠したままでいた時期に、デーヴァダッタの陰謀によって苦しめられ死刑を課されるという大きな試練を味わった話が、BKA 第2章から第7章にかけて詳しく語られている。TJAM 第19章で、出家する直前の釈尊が初めて妻ヤショーダラーの妊娠を知った時、釈尊はその妻にプラティサラ女神の明呪を与えるが、釈尊がヤショーダラーに与えたそのプラティサラ女神の明呪が BKA の話では、死の危機にある彼女を護る力として、話の中で大事な役割を果たす。つまり TJAM において事前に設定された伏線の如く語られる、妊婦を護るプラティサラ護呪の挿話が、BKA のヤショーダラーの六年間の迫害物語において大事な道具立てとして使われているのであり、その点を見ても、BKA は TJAM という作品の延長上にあつて、TJAM の存在を前提としつつその後で作られた作品であることがわかる。

SAM と BKA の両作品はよく似た姉妹のように極めて近い関係にあるため、例えば BKA で詳しく語られるネパール独自の伝承としてのヤショーダラーの受難をめぐる物語が SAM ではどういう形になっているのかなど、両作品の間の内容の相違を詳しく比較する研究を今後進めてみるなら、SAM と BKA の関係が一層わかることであろう。BKA という新作品が登場すると、ネパールではそちらの写本が愛好されるようになり、それ以後、Jayamuni が書いた SAM の写本はあまり使われないうまま、しまい込まれたようである。SAM は、その写本からの写しが別に見つかっていない貴重な孤本の写本として、1912～1915年になされた高楠順次郎・河口慧海・長谷部隆諦によるネパール写本収集活動が運よくそれを入手する時まで、久しくひっそりと放置されていたように思われる。Jayamuni が恐らく晩年に手がけた最後の仕事であろう世界唯一の SAM の東大写本の全章の校訂と翻訳が今後望まれる。

TJAM に対するこれまでの研究をふりかえると、仏教の開祖ゴータマ・ブツダの初転法輪の出来事までの前半生の伝記たる、この全37章から成る梵文テキストは、榊亮三郎将来ネパール写本（京都大学所蔵）たる TJAM の 1 写本（Goshima・Noguchi 66）の、黒田新（1951）（1958）（1960）による第 5, 8, 10, 11 章のローマ字テキストの発表が恐らく世界で初めての研究であった。誤りの多い 1 写本だけを用いたその梵文転写の作業は大変辛い作業であったと思われる。彼が発表した 3 論文はただ梵文の転写テキストを提示するのみで、訳も内容梗概も付けられていなかったため、他の研究者には利用しづらく、研究の意義が理解されずに忘れられてゆき、その発表の後海外の学界ではその論文の元になった梵文作品についてほとんど気づかれていない状態が続いた。しかしやがて 1970年代に入るとドイツの学者たちの努力でネパールの梵語写本研究に一大転機が訪れた。1970年～2001年にネパールとドイツが共同で行った梵語写本の保存計画 Nepal-German Manuscript Preservation Project (NGMPP) があり、その計画によって梵文写本の宝庫が大きく開けられた。世界の研究者はネパールに存在するおびただしい数の写本を

マイクロフィルムで見る事が可能な状態になった。当時大学院で Lalitavistara を研究していた私はその伝との関連から TJAM (= Padya-lalitavistara) という作品に注目し、さっそくその作品の複数の写本のマイクロフィルムを得た。九州に移ってからその研究を開始し、まず入手できた NGMPP フィルムの諸写本を用いてその TJAM の諸章の校訂テキストの作成がうまく出来るかどうかを試してみた。校訂の仕事を進めてみると、ヘムラージ所蔵の TJAM の A 写本、特にその写本の筆写人 X (= Jayamuni) が筆写した部分（第26章以前の多くの諸章）の諸章を扱うなら、さほど苦勞せずに校訂が順調にゆきそうな見通しがついた。もしその信頼できる A 写本がなかったら、私は校訂を途中で諦めていたかもしれない。それほど A 以外の諸写本は悪く、どれも劣化した伝承を示す新しい時代の筆写本なのである。そこで私は原則的に A 写本を底本にして TJAM の校訂研究を開始し、2013年～2021年の間に TJAM の第1章、3章、4章、8章、13章、14章、15章、16章、17章、18章、19章を『南アジア古典学』に発表した。本論文では、それらの章の続きとして、第20章～26章の七つの章の校訂と和訳を示したい。それらの7つの章の内容とソース（源泉資料）については昨年、岡野 (2025) で学界に紹介した。

TJAM のこの第20章～第26章の校訂に際して私が用いた諸写本について説明する。第20章～第26章の七つの章の校訂で、私が使用したのは次の4写本である⁽⁴⁾。

A 写本 Kathmandu, NGMPP A 123/5; Newārī.

B 写本 Kathmandu, NGMPP B100/2; Devanāgarī.

D 写本 Kathmandu, NGMPP D43/4-44/1 (rephotograph = E 1321/2); Devanāgarī.

E 写本 Kathmandu, NGMPP A 123/3; Devanāgarī.

TJAM を読む時に全幅の信頼がおける唯一の写本は、恐らく現存する最も古い写本である Jayamuni が筆写した紙写本であって、略号としてそれを A と記す。私はこの A 写本が TJAM という作品が誕生した時の最初の写本、つまり原本そのものではないかと考えている。その A 写本に誤りがある場合、作者が下書きから A 写本へと清書する段階でうっかり誤った程度の小さな誤りにすぎないように思う。ただし問題点をいえば、その貴重な A 写本の内部に、Jayamuni よりも筆写年代がずっと後の新しい紙葉があちこちに入れられて、葉の差し替えが施されている箇所が存在することである。それ故 Jayamuni が書いた古い葉 (A) の部分と、新しい時代に差し替え用に別の人たちが書いた新しい葉 (A2) の部分とを、きちんと区別する必要があるが生じてくる。後者の、A2 という略号で記す葉は紙が新しいし、筆跡も違うので、A と A2 の判別自体は容易であ

4. TJAM のインドにある写本 Śāstrī No. 37(10754) は入手できなかった。入手しようとしたが Kolkata, The Asiatic Society から送られてきたフィルムは別の写本 (Jātakamālā) であった。

る。A2 は書かれた文字も A より読みやすいが、書かれた梵文そのものに誤りがとても多い。A2 においては残念ながら筆写人は梵文を十分に理解して写していない。A2 の写字生が安易な考えで、原本の A の何世代も後に書かれた誤りが多い新しい別の写本を見ながら写した結果、A にはなかった多くの誤りをもつ A2 の葉が生じたのであろう。

本論文で扱う第21と第22章ではその A 写本において次の様に X, Y, Z という 3 人の筆写人の筆跡を容易に識別できる。

- | | |
|-------------------------------------|-----------------|
| ①筆写人 X (= Jayamuni) が書いた第21章の末尾以外の葉 | 第136～148葉 |
| ②筆写人 Z が書いた第21章の最後の 3 枚の差し替え葉 | 第149, 150, 151葉 |
| ③筆写人 Y が書いた第22章の冒頭たる 1 枚の差し替え葉 | 第152葉 |
| ④筆写人 X が書いた第22章の残り全部の葉 | 第153葉以下 |

①と④が見るからに古い葉であり、②と③が見るからに新しい葉である。17世紀に書かれた①と④よりも恐らく100年～200年経ってから書かれた葉が②と③である。

私が A 写本と大きくくりで呼んでいる写本の内部でこのような新旧の葉を区別することは、校訂する上で必要であるため、私は異読情報を書く時に ①と④の如き筆写人 X すなわち Jayamuni が書いた古い葉を A と記し、②と③の如き筆写人 Y や Z が書いた新しい差し替え葉を（本来の A と区別して）A2 と記した。

A のあちこちに、新たな紙で差し替えがなされたのはなぜなのだろうか。Jayamuni が書いた A の古い葉が新しい A2 の葉に交換されたことの最大の原因として私が推測しているのは、A 写本で局所的にあちこちで生じたい紙面に広がる黒い汚損である。私は A の写本の現物を見ていないため、その文字が読めないほどの黒い汚損がカビによるものなのか、原因を確認できないが、その汚損によって、A の或る箇所では古い葉の判読が困難になったため、それらの箇所の葉の差し替え用に A2 が書かれて、A の古い葉と差し替えられたと私は考えている。汚損という外的な理由以外に、何か内容的な理由で差し替えられた場合があったかもしれないが⁵⁾、それは例外にすぎず、主な原因は外的なダメージであろう。恐らく A の差し替えを行う際に、すでに A の紙面の字が読みとりづらくなっていたため、A 以外の別の TJAM 写本を見ながら A の読めなくなった箇所を書く必要があったようであり、それ故に A2 には、A よりはるか後の世代の伝承が劣化した写本に由来する様な誤りが多いのであろうと私は推測する。

また新たな葉として A の中で差し替えがなされた A2 と呼ばれる部分も、その筆写は少なくとも二つの時期に分かれるようである。A2 上で少なくとも二人の筆写生 (Y,

5. 例えば、第21章の末尾の箇所の A2 では、筆写人 Z により 3 枚の葉の差し替えがなされて、その第436～490偈や第493～498偈において Buddhacarita のテキストが丸ごとコピーして貼り付けられている。

Z) の筆跡を区別できるわけであるが、第21章の章末から第22章の冒頭の、Z と Y の両者が関わった差し替え箇所をよく検討すると、Z と Y が同時に差し替えの仕事をしたのではなく、Z が第21章の章末の 3 葉の差し替え葉を入れた後、Y が第22章の冒頭の 2 葉の差し替えをしたことがわかる。Z が差し替えの必要を感じなかった葉も、Y の時代になると汚損が進行して差し替えの必要が出てきていたのではない。

A のほか、TJAM の新しい写本 B, D, E の 3 本の紙写本を、私は A 写本の補佐的な役割を担う写本として適宜利用したが、その 3 本はどれも元は A という原本から派生したもので、しかも不正確な筆写によって伝承の劣化がひどく進んだ新しい時代の写本である。特に B と D は字の読み誤りや欠損を共有していることが多いことから、或る時にひどく杜撰に筆記された 1 写本から生じた、同系統の写本であると判断できる。どちらも非常に誤りが多いため、校訂においては A が提供する読みに対しては参考的な役割にしか使えない写本である。ただし写本 E は TJAM の中のごく限られた数の章しか有しない写本であるが、E の第20章を写した 5 枚の葉を見ると、B や D よりもずっと誤りが少ないので、それなりに役立つ写本である。E の第21章の写本は 7 枚の葉から成るが、その章の前半部が失われており、後半部の第232偈から始まるテキストしか無いのは残念である。写本 E は異なる筆写人による複数の章の写しを集めて作られており、章によって出来不出来が激しいので、その点を注意する必要がある。

さて以下に、私が TJAM 第20～26章を校訂した時に気づいた、各章における諸写本の使用上の問題点などに関して、更に説明を行いたい。特に第21章は研究上の難処であったので、説明も細くなる。

第20章の写本と校訂

第20章では A 写本は第129葉の裏から始まる。最良の写本 A がこの章の全体にわたって欠けておらず、かつ字が明瞭に読みうる状態なので、校訂は楽である。私は A を底本としながら、補佐的に E 写本を見ながら校訂した。E 写本は（少なくとも第20章と21章は）B や D 写本よりずっと良い写本である。誤りが多い B と D の写本についてはテキストの字の疑念が生じた箇所で、念のために参照するだけに用いた。

第21章の写本と校訂

若き釈尊の都城からの出離（abhinīṣkramaṇa）つまり出家を語る第21章は A 写本では第136葉の表から始まる。第21章の最後の 3 葉（第149, 150, 151葉）⁶⁾は新しい差し替え

6. 第21章の最後の 3 葉の次に来る Y の筆写による 152葉は第22章の冒頭部分であって、第21章は 151葉裏で終わっている（その 151葉裏の上下の余白や右の余白に第533～539の偈を書くことで、なんとかうまく第21章のテキストをその葉で終わらせている）。なお差し替えの A2 の第149, 150, 151, 152葉の 4 枚の新しい葉では、第149, 150, 151 の 3 葉と、第152の 1 葉とはそれぞれ筆写生が異

葉（A2）で、その3葉は筆写人 Z が書いた葉である。第21章の末尾では、そこに本来あったはずの Jayamuni が書いた古い葉（A）の2葉が棄てられて⁷⁾、そこに Z が書いた差し替えとして新しい3葉が置かれている。その新しい差し替え葉の1枚目たる第149葉表は TJAM 第21章第425偈の途中から始まる。

その Z が差し替えた新しい3葉に書かれている内容を説明すると、その1枚目の第149葉表の1～2行にある TJAM 第425と426偈では Lalitavistara と Mahāvastu に由来する記事として、菩薩が釈迦族の国を出てからクロードゥヤ族の国を過ぎ、マッラ族の国を過ぎ、マイネーヤ族の国のアヌヴァイネーヤ村を過ぎて、森林に入り、十二ヨージャナを歩いてヴァシシュタ仙の庵に至ったことが語られる。その後第149葉表の2行目、第427偈では Buddhacarita 6.2 の1詩節がそのまま借用される。次の第428～435偈での内容はオリジナルの自由作文として、菩薩が一緒についてきた神々を去らせた事が語られる。その後の第436～490偈では Bc 6.4 ～ 6.58 の合計55詩節の借用が連続的に行われる。第149葉表6行目から第150葉裏6行目まで続いたその Bc の借用たる55の詩節が終わると、続く第491偈と第492偈では Bc の借用ではない自由作文として、菩薩が自ら切り捨てた髻を神々が得て、天界のチャイトヤ（塔廟）にそれを収めて祭りを催した出来事が語られる。その後第493～498偈で、第150葉裏7行目から第151葉表1行目まで Bc のテキストの借用が再びなされ、Bc 6.59 ～ 6.64 の6詩節を連続的に出す。

以上のように、筆写人 Z が書いた第21章章末にある3枚の差し替え葉では、第149葉表6行目から第151葉表1行目までの所に、Bc 第6章の合計62詩節のテキストが丸ごと借用されて書かれていることが、葉の内容として最も大きい。このように Z が書いた第149, 150, 151 葉の内容を見る時、その差し替え葉の3葉の大部分で Bc の詩節の連続的で逐字的な借用があるため、その借用を行うことを主な目的として Z は新しい3葉を書いたのではないかと疑うことが出来る。

TJAM の X が書いた古い葉を新しい紙に交換する作業は、第21章の章末にだけでなく、続く第22章の冒頭の箇所でも行われている。第21章の章末は筆写人 Z によって、第22章の冒頭部分は筆写人 Y によって、新しい紙に差し替えられている。このような連続的な差し替えの作業は、X が最初に書いた A の写本のその箇所の連続する葉において汚損が起こったためになされたものではないかと私は思う。筆写人 Z による差し替え

なっており、第152の1葉を書いているのは筆写生の Y である。私は岡野 (2021) の論文 85～86 頁で、差し替えの A2 の第149, 150, 151の3葉を書いた筆写生を Z と名付けた。

7. 差し替えの結果、本来あった筆写人 X (= Jayamuni) が書いた写本 A の葉が棄てられたが、写本 A の葉の右の余白に書かれた葉の番号（全葉の通し番号）から判断すると、A から A2 への差し替えによって、その箇所で棄てられた本来の A の葉は、第21章の章末の2葉（第149と150葉）と第22章の冒頭（151と152葉）の所の、合計4葉である。

がもしも「Bc の借用による増広」という内容的な改変を行うために A の第21章末の古いテキストを棄てて意図的になされたものであるなら、その第21章の直後の、第22章の冒頭部分でなされた筆写人 Y による差し替えの存在がなぜなのか、うまく説明がつかない。第21章は151葉で終わっているので、その次の第22章の初めの葉の内容までを書き直す必要は生じなかったはずだ。わざわざ第22章の冒頭にある葉までも差し替えられているのは、その A の古い葉の汚損が第21章の章末ばかりか第22章の最初の部分にまで及んでいたという、やむを得ぬ外的な理由があったからではないだろうか。

差し替えによって写本 A の本来の第21章の章末の部分が棄てられた時に、その古い葉には何が書かれていたのだろうか。その内容は筆写人 Z による新しい第21章の章末の差し替え葉の3葉の内容と全く同じだったのだろうか。いや、それはありえないと私は思う。この第21章の末尾において写本 A の筆写人 X (= Jayamuni) が Bc 第6章第2偈と第4～64偈のテキストの逐字的な借用を行っていたとは考えられない理由があるのである。なぜなら、写本 A では筆写人 X が次の第22章の第352～第414偈で、まさしくその同じ Bc 第6章第2～第64偈の逐字的な借用を行っているからである。仮に、筆写人 X が第21章と第22章の両方で、同じ Bc 第6章第2～第64偈の長い借用たる文を自らのペンで書いたなら、それを書きながら自分が作品の構成上の重大なミス犯了したことに気づかないはずであろうか。X のペンが第22章でその借用をしているということは、X が第21章の末尾ではその借用をしなかったことを意味する。長い借用テキストの重複というその大きなミスの原因としては、第21章章末の3枚の新しい差し替え葉で Bc 第6章第2と第4～第64偈の箇所をテキストを書いた人物（筆写人 Z）が、古い A 写本の第22章ですでに筆写人 X が Bc 第6章第2～第64偈からの借用を行っていたことに気づかなかったことが、考えられる。筆写人 Z が A 写本の第22章の内容をきちんと把握せずに、独断で第21章の章末の差し替えの3葉を作ったからこそ、第21章と第22章で同じ Bc 第6章第2～第64偈のテキストが繰り返されるというおかしな事態が生じてしまったのであろう。すると、差し替えられる前の、X が書いた第21章章末の古いテキストには、きっと Bc 第6章第2～第64偈とは別の内容のことが書いてあったに違いない。

筆写人 Z によって差し替えられる前にあったその A 写本の第21章末尾の古いテキストの姿を、もしかすると伝えている可能性があるかもしれないと思われるのが、TJAM の3写本 BDE に伝わる第21章末尾のテキストである。BDE を見るとこの第21章の終わりの部分のテキストが全く異なった内容のものになっている。Bc のテキストの借用の全部が BDE の方には欠けている。すなわち BDE では、TJAM の第435偈の次にいきなり第502偈が来るかたちになっていて、古い A 写本への新しい差し替え葉（A2）にある第436～第490偈と第493～第498偈、つまり Bc を丸ごと借用して作られた箇所が、

BDEには全部欠けている⁸⁾。続く第502～第528偈の箇所は部分的に Lalitavistara に依って書かれた偈が内容となるが、その後の第529～第532偈では再度、連続的に Bc の 6.65～6.68のテキストの丸ごとの借用が出てくる。それに対して、BDEにはその Bc の借用も全部見られない。

BDE の3写本で第21章の章末のテキストを読んでもみると、このように A 写本の新しい差し替え葉 (A2) に見られる如き Bc の借用が見られないという、実に大きな相違のほかに、もうひとつ、内容上の相違がある。それは、第529偈以降に相当する箇所において、BDE の3写本では A2 と全く別の内容をもつテキストが連続する28の偈として出てくることである。そのテキストの箇所を私は仮に「**第21章の章末の箇所のテキストの別バージョン (BDE 写本による)**」と名付けて、本稿では第21章の全文の校訂梵文テキスト (A と A2 に依るバージョン) を挙げた後に、その28箇の原文を挙げることにした。

BDE によるその28箇の偈のテキストの内容を短く紹介すると、次のようなものである。

第*1～*4 偈の内容 —— 菩薩が自ら刀で髻を切って、棄てると、帝釈天がその髻を天界に持って帰り、塔廟 (caitya) を作ってその髻を安置して祭り、祭日を設けて祝った。

第*5～*15 偈の内容 —— 剃髪を終えた菩薩は袈裟衣を欲し、歩いていると、浄居天が袈裟衣をまとった狩人の姿をとって、そこに現れたので、菩薩は彼を見て喜び、獵師の着ている袈裟衣と自分のカーシー座の衣とを交換する。その衣を得ると獵師はただちに空に昇り、浄居天へ帰って行く。離れた場所にいたチャンダカはそのすべてを目撃し、驚愕して拝礼すると、泣きながら都城に引き返した。浄居天で神々は塔廟を作ってその衣を安置し、喜びつつ常に祀った。

第*16～*27 偈の内容 —— 菩薩が出家したのを眺めて、歓喜した或る神々はこのように叫んだ。「かの菩薩は今や生類の益のために出家の誓戒を持した。これから彼は苦行によってあらゆる苦行者を凌駕する煩惱なき阿羅漢たる修行者となり、菩提樹の下に坐って魔軍に打ち勝ち、菩提を得るだろう。そしてカーシーに行き、法輪を転じ、衆生を悟りへの道に導くだろう。あらゆる人々の上に法雨をふらせるだろう。その正法の甘露を飲んで、すべての人々は菩提行の誓戒を持し、四梵住を有し、菩薩として生類の益のために行動し、やがて悟りの資糧を満たして、十地の自在者、守護主となろう。その福德の力で生類があらゆる住処において常に法の輝きのめでたい幸に励むことだろう。」その声を聞いて、三十三天の神々も大声を発すると、それが展転してアカニシュタ天まで届き、すべての神々を喜ばせた。

8. ただし、Bc からの借用ではない第491と492の二つの偈（神々が菩薩の切り捨てた髻を天界のチャイトヤに安置して祭りを催したことを語る偈）だけは A2 と DE との両方に存在する。

第*28 偈の内容 —— 袈裟衣をまとった菩薩はリシたちに会うために、光り輝きながら、そこから遊行した。

以上の内容を有するのが、BDE の 3 写本において見られる、28 箇の偈から成る第 21 章中の独自のテキストなのであるが、ここで大きな疑問が浮かぶ。そのテキストはもともとは筆写人 Z による差し替えの時に棄てられた A の第 21 章の章末にあったテキストに由来するものであるかどうか。すなわち、Z による差し替え以前に、古い A から写されていたため、BDE の写本系統で生き残ったテキストなのか。この問題は難しいが、しかし私は BDE に存在するその別のテキストは恐らく A の本来のテキストとはかなり違うものであろうと考えている。そう私が考える理由は一つで、BDE に有るこれらのたった 28 箇の偈では、A の第 21 章末の、差し替えによって失われた葉の 2 枚の内容としては分量的に半分にすぎず、偈の数が少なすぎるのである。28 の偈の分量では A 写本の 1 葉の表と裏を満たすことしか出来ない。本来の A 写本が伝えていたはずの第 21 章の章末にあったのは、2 枚の葉のはずである。その 2 葉の古いテキストは一部かあるいは全体が失われてしまい、本来の姿は知り得ないと判断すべきであろうと思う。

さてここで私は A の第 21 章末の失われた葉が 2 枚であったと記したが、なぜ 3 枚でなく 2 枚であるのか、説明が必要になるので、それについて以下に説明したい。

ここは A 写本の第 21 章末と第 22 章の冒頭の葉を同時に見てゆく必要がある。A の第 22 章では、冒頭の 2 葉が差し替えられていて新しい紙になっているが、その 2 葉以外の第 22 章の全部は、筆写人 X (= Jayamuni) が書いた古い葉である。その古い葉は A の第 153 葉から始まる。その第 153 葉は第 22 章の第 69 偈 pāda b から始まっている。その前にある第 22 章の第 1 偈から第 69 偈 pāda a までのテキストが、筆写人 Y が書いた新しい 2 枚の差し替え葉の内容である。その 2 葉の差し替え葉には、奇妙なことにどちらにも「152」と、同じ番号が記されている。Y による差し替えの第 152 葉の 1 枚目には第 1 偈から第 35 偈 pāda a までのテキストが書かれ、2 枚目の第 152 葉にはその続きの第 35 偈 pāda b から第 69 偈 pāda a までが書かれている。なぜここで 2 枚の葉がどちらにも「152」の数字になっているかというと、それは数字の単純な誤記ではなく、Y がそのように 2 回も「152」を書かざるをえなかった理由がある。その理由は簡単で、筆写人 Z により第 21 章の章末でなされた 3 枚の新しい差し替えの葉は第 149 葉で始まり第 151 葉で終わっている。その第 151 葉のため別の筆写人 Y による第 22 章冒頭の箇所の 2 枚の差し替えは「152」の数字から開始せざるを得なかった。しかし筆写人 X が書いた A 写本の古い葉は第 22 章の第 69 偈 pāda b から始まるが、その葉に X は「153」と数字を書いていた。その「153」と書かれた数字をもし変更してしまうと、A 写本の残るすべての葉の番号を 1 ずつ変える必要が生じるから、変えるわけにゆかない。筆写人 Y が第 22 章冒頭の 2 葉の差し替えを行ったのは、時期的に筆写人 Z の第 21 章の章末の 3 葉の差し替えよりも後であった。それ故に、先に Z が書いた葉の「151」と、X が既に書いた

ていた古い葉の「153」の間に挟まれるかたちで、筆写人 Y が 2 枚の葉から成る差し替えとして第22章の第1偈～第69偈のテキストを入れようとした時、その 2 枚の葉にはどちらにも「152」の数字を書かざるを得なくなってしまった。このように、Y が書いた葉に「152」が 2 枚あるのは、Y のミスではなく、Y より先に TJAM 第21章の章末を差し替えた Z が無理に 2 枚から 3 枚へと、1 葉を増やしたせいである。X が書いた本来の第21章の章末のテキストは 3 枚でなく 2 枚の分量から成っていたと思われる。Z はその X が書いた章末の 2 葉を棄てて差し替える時、差し替え葉に書く内容として、無理やり Bc からの長い借用を行うことを思いついたため、結果的に Z の差し替えは 2 枚ではおさまらず、3 枚になってしまった。本来 X が書いた第21章は第150葉で終わっていたのに、Z の書いた長い借用テキストによって 1 枚多い第151葉で第21章が終わることになり、その増大の結果、Z の後に Y が第22章の冒頭の 2 葉（本来は第151, 152葉だったはず）の差し替えを行う時に、困ったことに「152」の数字しか両葉に対して使えなくなった。

ではなぜ筆写人 Z は第21章の章末でわざわざ 1 葉を増やして Bc からの長い借用を行うということをしたのか。恐らく X が書いた 2 枚の葉の本来の第21章の章末のテキストが汚損して読めない状態になっており、その 2 枚の古いテキストをそのまま忠実に写すことが出来なかったため、第21章の章末の穴をなんとか別のテキストで埋める必要が生じたのではないか。そのため、その欠損を Bc からの長い借用で穴埋めすることを Z は考えついた。

そこで結論として次のようになる。—— 現在の A 写本が伝える第21章の章末の 3 葉（第149～第151葉）は、本来の A 写本の第21章の章末にあった 2 葉（第149～第150葉）の分量より増えてしまっている。しかも Bc 第6章第2～第64偈の借用は、X により第22章でなされているので、Z はこの第21章の章末で行う必要がなかった。このような理由により Z が書いた現在の 3 葉（第149～第151葉）は本来あった 2 葉（第149～第150葉）の内容と同じではないと考えられる。

私は上で、28箇の別の偈を伝える BDE の 3 写本も、本来の A 写本の第21章章末のテキストを忠実に伝えていないのではないかと推測したが、ではなぜ新しい時代に書かれた A の差し替え葉（A2）と、新写本 BDE とは、どちらも A 写本に本来あった第21章章末のテキストを忠実に伝えられなかったのか。それは差し替え前にあったであろう第21章の章末（第149～第151葉）と第22章の冒頭（152葉）の A の古い写本の紙葉の深刻な汚損が、それらの写本より前に起こったことが原因であったと私は推測する。A の153葉は差し替えを免れた葉であるが、その 153a の白黒写真の画像を見ると紙面が全体的に黒く汚れていて、X の書いた字が読みにくい。

TJAM 第21章の章末における筆写人 Z による 3 葉の差し替えを見てみると、それが Bc からの連続的な借用による増広という、内容的な改変を行うという動機により意図

的になされたものであると主張することも、たしかに可能かもしれない。しかし第22章の冒頭の2葉（152葉）の箇所ではなされた差し替えも一緒に合わせて考えると、A写本のダメージを受けた箇所の修復という動機を考えるほうが現実的であるように思える。Zが差し替えた葉の第21章の章末は151葉裏の末行で終わっているが、それに続く第22章の2枚の葉（152葉）までも筆写人Yによって差し替えられたのはなぜなのか。差し替えの動機として第22章の冒頭の内容を書き直すほどの内容的な変化があったとは考えられない。Yが第22章の冒頭だけではない多くの葉においてA写本の様々な箇所において差し替えをせざるをえなかったのは、実は葉の汚損という、写本の保存上のやむを得ぬ理由があったからではないか。Aの幾つかの葉に顕著に見られる黒ずみと新しい時代になされた葉の差し替えの間には因果関係がありそうだ。Yが写本の汚損のために葉を差し替えたと思われる箇所はA写本の新しい紙に書かれた作品後半部を中心に相当数ある。A写本の中のあまたのYによって差し替えられた葉はすべて古いA写本に起こった汚損が原因で書き直された可能性がある。

まとめると、以下のように私は推測している。ある時代に貴重な TJAM の作品の原本たる A 写本の中で、葉がほとんど字が読み得ないほどに汚損してしまった所がかなり出来た。その A の汚損した葉を交換する時、A の第21章の章末の2葉のテキストの汚損箇所については、A 以外の他の TJAM を伝承する新しい写本を参照しても書き直すことも出来なかったため、他の写本から写しとることを諦め、むしろ筆写人 Z は Bc から沢山の詩節を借用して入れることで、A の第21章末のテキストの欠損の穴を埋めることを考えた⁹⁾。Z は Bc の写本を利用することにより、第21章の章末に本来あった2葉（第149と第150葉）の代わりに、3葉（第149～第151葉）の差し替えテキストを新たに書き上げて、A に入れた。その後の時代に、別の筆写人 Y は A 写本の第22章の冒頭の2葉（第151と第152葉）にも汚損があるのを見て、その葉を新たに交換したが、その際に Y は他の TJAM を伝承する新しい写本を見ることで「152」の2枚の葉のテキストを写して入れた。その時 Y が利用した TJAM 写本は今の B や D や E の諸写本と同じく、質が劣化した伝承であり、テキストにかなり誤りが含まれたものであった。

他方、BDE の3写本の写本の祖先たる或る時代の TJAM の筆写人は、A の写本で第21章の章末の汚損した葉を見ても、写本 A そのものの穴埋めをまかされた筆写人 Z と

9. A 写本を作った筆写人 X すなわち偉大な学者 Jayamuni が第21章と第22章を自ら筆写しているが、その両方の章において同じ Bc 第6章第2～64偈の借用を繰り返してしまうということをしたのだろうか。彼ならそのような長いテキストの重複に気づかなかったはずはない。彼がそんな大きなミスをした可能性はありえない。そのミスを犯したとすれば後の時代に Bc 第6章第2～64偈の借用を含む第21章の章末の箇所、本来2葉であった X が書いた古い葉を棄てて、新たに差し替えの3葉を作った筆記人 Z であろう。これが私の推測である。

は立場が違って、A の欠損した葉の差し替えを行う必要はなかったので、大体 1 葉分の内容のテキストとして28箇の偈を自ら作文することで、第21章の章末のダメージ部分を埋めることにしたのではないか。—— 以上のように私は推測する。

さて話題は変わるが、A 写本に関して、この第21章には実に興味深い箇所がある。TJAM 第21章第107偈以下の箇所で、後宮の女たちの醜い寝姿の描写が色々となされているが、A 写本を見ると、その描写の箇所においてどうやら A 写本の筆写人 X すなわち Jayamuni が文の推敲に悩んだらしい痕跡があるのである。A の筆写人 X は、第107偈の後で 2 pāda（つまり 1 偈の半分、16字ほど）の文を後からすっかり削り取って、その削った空間を空白のスペースとして残した。第109偈でも 2 pāda の文を写本から削ってその削った痕を空白のままにしたが、最後の 5 文字 (ra?)natāśrayāḥ が削り残された。第110偈でも ardhani(śā?) の後に続く 5 文字か 6 文字を白く削って、その箇所を空白のままに放置した。第112偈でも pāda d であった箇所の字をすべて削って空白のままにその箇所を残している⁽¹⁰⁾。A 写本のこの箇所では以上のように一連の文字をあちこち削り取った後に、その箇所を空白のままに放置していることが見られるのであるが、それは、A の筆写人 X が TJAM という作品の原本たる A 写本を書きながらそれらの箇所の表現が気に入らず、どうするか悩んでいたことを示すものである。書きつつ悩んで偈文の生成に難渋している様子がうかがえるこれらの箇所は、A 写本を筆記した Jayamuni がしていたのは単なる写本の筆写という仕事ではなかったこと、すなわち彼が作者（の一人）として作文にも責任をもって文を自ら推敲しながら書いていたらしいことを推測させるものである。この箇所の苦しげな削除・添削の痕から、Jayamuni は筆写人以上の役割を果たしていたのではないか、この TJAM という仏伝作品の創作にあたって、彼はそのアヴァダーナマーラーの作品製作上の文の最終責任者ではなかったかと、そう疑うことが出来る。

第22章の写本と校訂

第22章は A 写本では第152葉から始まるが、筆写人 Y による第22章冒頭の「152」と数字を記した 2 枚の差し替えの問題については、上の第21章の解説において説明した。その差し替えられた箇所の梵文は誤りがとても多い。また B 写本には第22章のテキスト全体が欠けている。それは223～246葉が欠けているためである。また E 写本には第

10. B と D の写本は共通して第21章108～113偈のテキストが欠落したかたちで伝承しているので、この厄介な箇所の校訂においては A 以外の写本を参照することは出来ない。その箇所以外にも、B と D の写本は124偈aから189偈bまでは共通してテキストが欠けているし、また E 写本も第21章の前半が全部欠けていて、後半の232偈以降しか E を利用できないので、このように第21章の校訂においては A しか頼りにならない箇所が多い。

22章も、それ以降の章も存在しない。そのため第22章の校訂に使えるのは A と D 写本だけである。D の章末のコロフォンには第20章と書いてあるが、それが第22章にあたる。

さて A 写本には筆写人 Z の筆跡によって第22章第80偈の ab と cd の間に挿入すべきテキストとして、153a の写本の余白の上部に 5 箇の偈が書かれている（第 1 の挿入）。また第84偈の前後には Z によって A の153a の写本余白の下部と右横に 6 箇の偈が書かれたが、そこでは 1 箇の偈が第84偈の前の位置に、また 5 箇の偈が第84偈の後ろの位置に、挿入される（第 2 の挿入）。また更に第87偈の pāda c と pāda d の間に（つまり sarve と pratyāgatā の間に）挿入する 5 箇半の付加偈が A の153b の写本余白の上部に Z によって書かれた（第 3 の挿入）。また第88偈の後の位置に挿入する 2 箇の偈が Z によって A の153b の写本余白の上部に書かれた（第 4 の挿入）。更に第89偈の後の位置に第90偈 pāda ab の後ろに挿入する 6 箇の偈が Z によって A の153b の写本余白の下部に書かれた（第 5 の挿入）。また更に Z の筆跡によって第106偈の後に新たに挿入する 6 箇の偈が A の154a の写本の上下の余白に書かれた（第 6 の挿入）。また第127偈の後に挿入する偈として Z により A の154b の写本余白の上と下と155a の余白上部にかけて 6 箇の偈が書かれた（第 7 の挿入）。これらの A 写本の153a ～155a の紙の余白に書かれた沢山の新たな付加挿入の偈はすべて、D 写本では余白ではなく本文の中に入れられている。

以上の、筆写人 Z が A 写本の第22章上で行った、第 1 から第 7 までの 7 箇所の多数の偈の挿入は、いかに彼が A においてテキストの偈の付加増広を行うことに積極的であったかを示すものである。このような筆写人 Z が A に対して示す、じつに熱心に付加挿入を行う姿勢を考えると、恐らく A の第21章末で Z が新しく差し替えた 3 葉（現存する第149, 150, 151葉）の中身も、A の第21章末に元々あったであろうテキスト（失われた第149, 150葉の 2 葉）を忠実に写したものでなく、Bc からの大規模な付加増広を施すなどの処置が Z によってなされて、かなり大きく違ってしまった別のテキストであろうことを推測させるものである。

なお私がこれまでに作成した TJAM のローマ字に転写した校訂テキストでは、作業の基本方針として、Z などの新しい時代の筆写人によって A 写本の上下左右の余白の箇所に様々に施された新しい時代の付加たる沢山の偈（つまり X 以外の筆跡によって書かれたものではない偈）については、すべて除外している。私としては後代の付加偈を除いた、写生字 X (= Jayamuni) によって最初に書かれた TJAM という作品のオリジナルな私たちを示す梵文テキストの作成だけを優先させるという方針をとった。A の余白に書き込まれた沢山の後代の付加偈を私が校訂テキストから省いてしまったわけは、それらをすべて論文の中に注としてきちんと記録し始めると、写本の画像の上で時々うまく

読めない種々の個性的な小さな字の解読に時間がかかって、あまりに校訂上の作業量が増えてしまうためである。それらの付加偈の詳細な検討は後代の学者に任せたい。

第23章の写本と校訂

第23章も第22章と同様に、A 写本を底本としながら補佐的に D 写本を見るというやり方で私は校訂を行った。B は D と同系統の写本であり、その D の読みの確認用に B も時々見た。B 写本は第23章は第1～第16偈が欠けているが、それはその第246葉が欠けているためである。E 写本は第22章以降の章が無いため使えない。

A では第165葉裏の6～8行において第23章の第1～第6偈が筆写人 X によって書かれているが、それに続く第7～第34偈 pāda b の箇所は、筆写人 Y による第166葉の1枚の差し替えがなされたため、X が書いた古い第166葉が失われている。その Y による新しい第166葉（差し替え葉 A2）のテキストは実に誤りが多い。Y の梵語の学力が弱いだけではなく、恐らく A とは別にあった彼が依用した写本も質が悪かったのだろう。その A2 の第166葉の前にある古い A の第165葉の裏面はひどく紙が黒くなっていて、字を読み取るのに苦労する。第23章にはその1枚の差し替えが見られるだけであるが、その1葉が差し替えられた原因が、古い葉がカビ（？）の汚損によって駄目になったせいらしいことを、その前の第165葉にある紙に見られる奇妙な紙面の黒さはいかがわせる。

その他、この章で注意されるのは第61偈と第62偈の間に、筆写人 Z の筆跡で、付加すべき1偈が A の168a の写本の上部に書かれていることである。

第24章と第25章の写本と校訂

第24と第25章の両章では幸いなことに写本 A がどこも欠けていない。両章の全文が筆写人 X (= Jayamuni) による信頼できる筆写であり、新しい紙に差し替えられた葉はない。また両章では新しい写本 B と D を利用できるので、校訂にあたって私は A を主に利用しながら、補佐的に B と D を参照した。

第26章の写本と校訂

第26章の写本 A は第184葉裏の4行目から始まるが、筆写人 X によって書かれた古い葉があるのは第185葉までであり、次の第186葉（第26章第46偈）から後の部分がすべての新しい葉に差し替えられていて、第193葉で本章が終わる。写本 A ではこの第26章より後の章もすべて、ずっと筆写人 Y によって差し替えのために置き換えられた新しい葉（A2）になる。残念なことに、その筆写人 Y によって書かれた新しい差し替え葉は常にテキストにとっても誤りが多い。本章でこの Y による葉の差し替えが始まる第186葉の直前にある第185葉の裏は、紙面が全体的にひどく黒く、字が読みにくい状態になって

いる。それ故、第186葉以降の葉が全部 Y によって差し替えられたのは恐らく A の紙面のひどい汚損が原因と推測される。

第26章第46偈以降続く、A 写本における Y の書いた新しい葉を利用する時に私は A ではなく A2 と表記したが、それは X が筆写した古い葉の A と、Y が筆写した新しい葉の A2 とでは、まるで別の写本といえる程に、テキストの信頼度がまったく違うからである。誤りがどちらも多い A2 と D だけを用いて私はこの第26章を校訂せざるを得なかったが、頼りになる A が無いため判断が難しい箇所が多く、この章は他の章より校訂に二倍の時間がかかった。第27章以降の各章も、その校訂には苦労しそうであるが、出来なくはなさそうである。A2 と D の両写本の唯一の長所は、書かれた時代が新しいだけあって、字が読みやすいことである。他の写本の B には第1偈から第8偈 pāda c の箇所のみ第26章のテキストが残っており、それ以降の葉は欠けてしまって、B はそれで写本が終了している。

2. TJAM における菩薩と対話者の立場表明としての会話

TJAMの作者が登場人物の思想的・宗教的な立場を明らかにしようとする時、それは、菩薩と対話者が行う会話として表現されていることが多い。釈尊がいかなるインドの伝統的な思想的状況の中で新しい信念をもって出家し菩薩として活動しているのかが、それらの会話を通して読者に明らかになる。TJAM 第21章と第23～26章の中では以下のように幾つもの思想的な会話の箇所がある：

第21章での、馬丁チャンダカと菩薩の思想的な対話（21.22-98, 122-257）。

第23章での、ヴァシシュタ仙と菩薩の対話（23.66-82）。

婆羅門女パドマーとの対話（23.104-124）。

ライヴァタ仙との対話（23.132-177）。

ラージュヤカ仙との対話（23.182-187, 193-207）。

第24章での、故国から来た大臣と宮廷祭僧の二人と菩薩の対話（24.28-75）。

第25章での、アーラーダ・カーラーマと菩薩の対話（25.20-79）。

ビンビサーラ王との対話（25.121-225）。

第26章での、ルドラカ・ラーマプトラと菩薩の対話（26.16-44）。

村長の娘スジャーター（26.76-111）との対話。

それらの会話ではしばしば、インドの伝統的な四住期（人生の四期）の思想と仏教の出家の思想との、決定的な違いが強調される。一例を挙げると、第21章63～67で馬丁チャンダカは出家しようとする釈尊に対して、家住期の己が社会的義務を果たした後に年老いてから出家せよという、四住期の立場から、次のように忠告する。

「主よ、あなたのこれらの豊かな富は、神々でさえ得がたいものです。どうしてこれらを捨てることができましょうか。またどこでこれらが再び得られるのでしょうか。で

すから、あなたが若いうちは王位での生活に留まり、妻とともに自らの家系の主たる神を敬い、崇め、礼拝しなさい。物乞いたちには好きなだけ施しを与えつつ、自らも欲するものを楽しみながら、愛する女たちと共に愛欲に染まり、好きなだけ享樂し、快樂を味わいなさい。あなたが年老いて体が衰え、感官の対象への欲望が失われた時、王位での生活を捨てて、林棲の生活期に落ち着けばよいのです。その時に聖者の行（牟尼行）の誓戒を堅持して、三昧に心を置き、禪定の快さを味わいながら、集中して行をなされませ」(21.63-67)

また、第23章109～116で婆羅門女パドマーも、菩薩は次のような忠告をする。

「大きな天恵の人よ、あなたは若いのに、輪廻界での享樂を欲しないのですね。どうして王位を捨てて、この苦行林にやってこられたのですか。〔行者たちは〕誰もが王位を欲して、苦行林で修行しているのです。しかしあなたは王位を捨てて苦行をしようとしている。或る有徳の老王たちは、年老いて、輪廻界で享樂する欲望をなくし、自分の息子に即位の儀礼を行って、王位に就かせた後で、王位での生活を捨てて、人生の四目的を求める彼らは、林棲期に入り、苦行誓戒を行います。そのことをお考えになって、若いうちは王位での生活に留まり、妃と愛し合って、家系の世襲の仕事の誓戒を果たしなさい。体が老いに充ちたとき、息子を王位に就かせ、森林の住期に入って誓戒を行じなさい。こうすれば、あなたにはきつと常にあらゆる場所で、めでたい幸せがあるでしょう。この世で正法の安樂を享受し、来世では天界へ行くことでしょう。そのことをお考えになって、王位での生活に再び留まり、人民を護りながら、両親や妻と一緒にあなたの一族の誓戒を果たしなさい。」(23.116)

パドマーが語るこのような忠告に対して、菩薩は次のように答えている。

「母御よ、私は天界の神の幸せさえも望んではいません。むしろ菩提を得て、世の生類に益をもたらしたいのです。」(23.118)

菩薩とビンビサーラ王との会話でも、ビンビサーラ王が菩薩に対して行う忠告は、上記のチャンダカやパドマーの忠告と同じような四住期の生き方を勧めるものである。ビンビサーラ王は次のように語る。

「このように様々な危険がある場所で多様な苦しみを味わい、森の奥で苦行をしながら、いったい何のめでたい幸せが得られるというのですか。神々しい栄光と幸せの達成を捨てて、若くして出家して、いったい他にどんな幸せの達成を、いかに、どうやって、得ようというのですか。このように考えて、あまりにも苦しい出家の誓戒を捨てなさい。この誓戒の功德で、いかなる善趣の幸せが得られるのですか。もしあなたに、功德を積むことに強い望みがあるのなら、この苦行の誓戒を捨てて、家の世襲の仕事の誓戒を堅持し、専心して行いなさい。常に乞い求める者たちに施しを与え、嬉しく世の人々を益し、望むがままに幸せを享受して、家系の伝統の仕事の誓戒を行いなさい。その誓戒は大きな成就をもたらし、身内・他者・自分を益するものです。

この功德の力によって、常にこの世ではめでたい幸せとよき安楽があります。[そうすれば] 来世においても、人は常に天界で輝かしい栄光と幸せを得るでしょう。常に善趣に輪廻し、決して悪趣へ行くことはありません。このように考えて、大士よ、王位の生活期に留まり、私と一緒に幸せを享受しながら家系の伝統の仕事の誓戒を行いなさい。そうすれば、あなたにはこの世で常に幸運なよき安楽があり、来世においても常に天界で輝かしい栄光と幸せを得ることでしょう。」(25.170-178)

このような王の説得の言葉に対して、菩薩は次のように答える。

「善い哉、王よ、あなたは輪廻界での幸福を成し遂げる方法をお語りになりました。しかしながら、私はここで私の所願をお話します。どうかお聞きなさい。私は煩惱の炎に焼かれている三界に生まれた生類を見て、憐憫の思いが心に逼り、輪廻界の享受を厭うに至りました。王よ、彼らの苦悩の火の凄まじい熱さを、私は法という甘露の雨水を降らせることで鎮めて、世の生類にめでたい幸をもたらしたいと欲します。その目的のため、私は王位を捨て、正法を切望し、出家の禁戒を堅持しつつ、菩提を得んと強く思っているのです。」(25.180-183)

四住期の生き方は決して解脱と無数の他者への救済をもたらすものではない。個人を天界に導くだけのものである。しかし菩薩は憐れみの心により、一切の生類に安楽をもたらすために、個人的な幸福を捨て、出家して菩提の境地をめざす。TJAM では以上のような幾つもの会話によって、在家者の生き方と出家者の生き方の違い、リシたち（苦行者たちを含む）と仏教修行者の目的の違い、憐愍に基づく利他の志の違いが、聴衆に示される。TJAM のこのわかりやすい対話形式の思想的な立場表明は、この法話が語られるのを聞くネパールの聴衆に仏教の出家主義の立場を理解させるために役立ったであろう。

Tathāgatajanmāvadānamālā 第20章～第26章 梵文校訂と翻訳

略号 A = ms. of TJAM, NGMPP A 123/5. (104, 108～148 are written by the scribe X)

A2 = *104, 105～107 (i.e., additional new folios written by the scribe Y) in A

B = ms. of TJAM, NGMPP B100/2

Bc = JOHNSTON's Buddhacarita edition, 1936

D = ms. of TJAM, NGMPP D43/4-44/1 (rephoto = E1321/2)

H = Hokazono's Lalitavistara edition, i (1994), ii (2019), iii (2019)

L = LEFMANN's Lalitavistara edition, 1902

M = MARCINIAK's Mahāvastu edition, ii (2020), iii (2019)

S = SENART's Mahāvastu edition, i (1882), ii (1890), iii (1897)

TJAM = Tathāgatajanmāvadānamālā (= Padya-Lalitavistara)

以下の TJAM テキスト中の [] の数字は A 写本の葉を示し、例えば [104a5] は A の第104葉の表面5行目であることを示す。しかし [*104a] とアスタリスクが付けられている数字は、A 写本中の本来の筆写人 X (= Jayamuni) が記した葉ではなく別の筆写人 Y によって書かれた新しい葉（略号 A2）の104であることを示す。その新しい葉は古い葉である104とは別に存在するため、*104と表記する。（岡野（2021）論文、86頁を参照せよ。）

また TJAM テキスト中で仏伝 Lalitavistara と内容が密接に関係する箇所では、その詩節の右側に ≈ という「類似」を意味する記号を使って、梵文 Lalitavistara の Lefmann (1902) 校訂本（略号 L）と外蘭幸一 (1994-2019) 校訂本（略号 H）の両方の、参照すべき文の類似箇所を示した。例えば H i,686(vs.)22 とあるのは外蘭 (1994-2019) 校訂本の上巻 686頁の第22詩節をさす。i は上巻を、ii は中巻を意味し、(vs.) は詩節を意味する。(vs.) と記さずに単に H ii,40.3-4 とある場合は、散文の箇所であり、外蘭本の中巻40頁3-4行の散文を意味する。

また TJAM が仏伝 Mahāvastu と密接に関係する箇所では、同様に ≈ の記号を用いて、梵文 Mahāvastu の Senart (1882-1897) 校訂本（略号 S）と Marciniak (2019-2020) 校訂本（略号 M）の両方の、参照すべき文の類似箇所を示した。例えば S ii,133.15-18 とあるのは Senart 本の第2巻133頁の15-18行目をさす。M ii,171.6-9 ならば、Marciniak 本の第2巻の171頁6-9行目をさす。

TJAM が Buddhacarita を用いた箇所では、≈ の記号と = の記号を使い分けている。≈ が内容的な近似を意味するのに対し、= は「一致」すなわち詩節のほぼそのままの借用を意味する。

1. Tathāgatajanmāvadānamālā 第20章の校訂

A 129b4 ; B 193a ; D 154a5 ; E has no leaf number (this chapter has 6 folios)

- athāśoko mahīndro 'sau bhūpo 'pi samupāśritaḥ /
bhagavantam yatim natvā prārthyaivam sājñjalir mudā // 20.1
bhagavañ chrotum icchāmi tat samādeṣṭum arhati /
katham sa bhagavān rājyaṃ tyaktvā purād viniryayau // 20.2
iti samprārthitam tena śrutvā so 'rthan sudhīr yatiḥ /
tam aśokaṃ sabhāṃ cāpi samālokyavim ādiśat // 20.3
śṛṇv aśoka samādhāya yathāsau bhagavān purāt /
viniryayau tathāham te vakṣyāmy utsāhavṛddhaye // 20.4
evam śuddhodano rājā nijālaye samāśritaḥ /
snehaduḥkhāgnitaptātmā tam rātrim abhyanāmayat // 20.5
tataḥ prātaḥ samutthāya sarvāṃ chākyaṃ sabāndhavān / ≈ L(efmann) 200.15-16;
amātyān mantriṇo bhr̥tyān samāmantraivam ādiśat // 20.6 H(okazono) ii,44.15-16
bhavanto 'yam mahāsattvo bodhisattvo mamātmajaḥ /
bodhicaryāvratam dhartuṃ tyaktvāsmān pravrajed api // 20.7
tad yūyam iha sarvatra sthānasthāne samāśritaḥ /
sarve jāgaraṇam kṛtvā samtiṣṭhadhvaṃ divāniśam // 20.8
iti rājñā samādiṣṭam śrutvā te mantriṇo janāḥ /
sarve śākyagaṇāḥ seṣṭamitrabandhusuhṛtsakhāḥ // 20.9
tatheti prativijñāpya prāṇatvā tam nṛpaṃ tataḥ /
gatvā sarvatra sthā[130a]neṣu sāyudhā avatasthire // 20.10
pañcaśatāni śākyānām vīrāni prabalāni ca /
sāyudhāni purodvāre pūrvasminn avatasthire // 20.11 ≈ L 200.20-22; H ii,44.20-45.2
pañca pañca śatāny evam yāmye paścima uttare /
api punaḥ pratidvāre śākyānām avatasthire // 20.12 ≈ L 201.2-6; H ii,46.4-8
evam sarvatra deṣeṣu pañca pañca śatāny api /
caturaṅgalaiḥ sārddham śākyānām avatasthire // 20.13
vṛddhā mahallikāś cāpi bodhisattvābhirakṣaṇe /
vīthīcatvāramārgēṣu śṛṅgātakeṣu tasthire // 20.14 ≈ L 201.6-7; H ii,46.8-9
svayaṃ śuddhodano rājā śākyapañcaśataiḥ saha /
hayagajarathārūḍhair gṛhadvāre 'bhyatiṣṭhata // 20.15 ≈ L 201.7-9; H ii,46.9-14
amātyā mantriṇo bhr̥tyāḥ sasainyabalavāhanāḥ /
bodhisattvasya rakṣārtham prācalan vīkṣya sarvataḥ // 20.16
tathā paurāś ca sarve 'pi svasvagr̥hāṅganāśritaḥ /

niṣkramantaṃ mahāsattvaṃ draṣṭuṃ tasthuḥ samāhitāḥ // 20.17	
tathā sarvāḥ puraṇdhryo 'pi sakumārīkumārakāḥ /	
svasvagrhaḡavākṣeṣu taṃ draṣṭuṃ samupāśrayan // 20.18	
evam anye 'pi lokāś ca kṛpaṇā arthino 'pi ca /	
sahagantuṃ samīkṣantaḥ sarve tasthuḥ pramoditāḥ // 20.19	
tadā sā gautamī mātā galadaśruvilocanā /	
sarvāś ceṭīḥ samāmantrya sādaram evaṃ ādiśat // 20.20	≈ L 201.9-10; H ii,46.13
dvāreṣu sarvatra prāsādeṣu samantataḥ /	
dīpamālāṃ samujjvālyā saṃtiṣṭhata samāhitāḥ // 20.21	≈ L 201.11; H ii,46(vs.)11a
maṇiratnapradīptāgrān dhvajāṃś cātra samantataḥ /	
avaropya samucchrāyaṃ saṃprakāśayatenduvat // 20.22	≈ L 201.11; H ii,46(vs.)11b
sarveṣv api ca koṣṭheṣu gr̥heṣu layaneṣv api /	
pradīptamaṇiratnānāṃ mālā lambayatojjvalāḥ // 20.23	≈ L 201.12; H ii,46(vs.)11d
sasaṃgītaṃ mahotsāhaṃ kṛtvā nṛtya pravādanaiḥ /	
divāniśam avicchinnāṃ cārayata pramoditāḥ // 20.24	≈ L 201.13-14; H ii,46(vs.)12
dvāreṣv api sarveṣu kapātān dṛḍhayantritān /	
nibadhya sudṛḍhāṃ kṛtvā tiṣṭhata mābhimuñcata // 20.25	≈ L 201.17-18; H ii,46(vs.)14
ratnajālair imaṃ gehaṃ sarvaṃ ācchādya gopitaṃ /	
kṛtvā jāgartim ādhāya samālokyābhitiṣṭhata // 20.26	≈ L 201.19-20; H ii,46(vs.)15
yady ayaṃ niṣkramed ā[130b]śu yūyaṃ samutthitāḥ /	
sahasā taṃ samāliṅgya nivāryānayaata drutam // 20.27	≈ L 201.21-22; H ii,46(vs.)16
ity ādiṣṭaṃ prajāpatyā śrutvā tās ceṭikā api /	
tatheti prativijñāpya sarvās tato yayur drutam // 20.28	
yathādiṣṭaṃ tayā rājñyā tathā sarvaṃ vidhāya tāḥ /	
sarvāś ceṭyaḥ samāgatya tasyā evaṃ puro 'vadan // 20.29	
devi yathā samādiṣṭaṃ bhavatyā sarvaṃ vidhāya tat /	
bodhisattvasya rakṣārthaṃ sthāsyāmahe vayaṃ tathā // 20.30	
iti nivedya tās cetyaḥ sarvā antaḥpure tathā /	
sthāne sthāne samāśritya saṃtasthire vitandritāḥ // 20.31	
tataḥ sā gautamī mātā tā gopāpramukhāvdhūḥ /	
sarvāḥ putrapriyāḥ kāntāḥ samāmantryaivam ādiśat // 20.32	
ayaṃ vaḥ supriyo bhartā sāṃpratam pravrajed api /	
iti jāgaraṇaṃ kṛtvā sarvāḥ samupatiṣṭhata // 20.33	≈ L 202.5-6; H ii,50(vs.)19
veṇusugītisaṃrāvai rañjayitvābhirakṣitam /	
bhartāraṃ taṃ vaśīkṛtvā saṃsthāpayitum arhata // 20.34	≈ L 202.3-4; H ii,50(vs.)18cd
yady ayaṃ vaḥ priyo bhartā sahasā pravrajat tadā /	
sarvā yūyaṃ samāliṅgya nivāryānayatālaye // 20.35	
iti mātṛā samādiṣṭaṃ śrutvā tāḥ pativallabhāḥ /	

sarvās tatheti saṁdhāya tatrālaya upāśritāḥ // 20.36
 veṇusaṁgītisaṁrāvair bhartāraṁ taṁ vinoditam /
 kartuṁ sarvāḥ prasannās te rañjayituṁ samārabhan // 20.37
 tadā tadveṇusaṁrāvāt sarvabuddhānubhāvataḥ /
 imā gāthā viniḥsṛtya bodhisattvaṁ abodhayan // 20.38
 yat purā praṇidhiṁ dhṛtvā sarvāḥ pāramitāḥ kramāt /
 pūrayan bodhim āsādyā kartum aiccho jagaddhitam // 20.39
 tathā te sāmpratam sarvaṁ praṇidhānaṁ prasidhyate /
 tad āśu tvam samāgaccha kuruṣva trijagaddhitam // 20.40
 mā tvam kāmābhisaṁrakto bhūyo ramitum arhasi /
 pūrvaṁ buddhān anusmṛtvā bodhicaryāṁ prapūraya // 20.41
 anityaṁ bhavaśaṁcāraṁ kiṁ na paśyasi sāmpratam /
 yathā tvayā pratijñātaṁ tathādhunā prasidhyate // 20.42
 tat tvam satyaṁ pariñāya praṇidhānaṁ anusmaran / [131a]
 sambodhiññānaṁ āsādyā saddharmaṁ saṁprakāśaya // 20.43
 sarvasattvān pratiṣṭhāpya bodhimārge prabodhayan /
 jagad dharmamayam kṛtvā sunirvṛttiṁ samāpnu hi // 20.44
 sarvabuddhāḥ prasannās te varaṁ dātum samicchavaḥ /
 sudṛgbhis tvāṁ samikṣantaḥ saṁtiṣṭhante 'numoditāḥ // 20.45
 tvāṁ niṣkramantaṁ ālokya sarve devāḥ pramoditāḥ /
 sarve lokādhipās cāpi pūjayeyuḥ samāgatāḥ // 20.46
 iti matvā bhavān mātra vilambikartum arhati /
 sahasā niṣkraman buddhaḥ karotu trijagaddhitam // 20.47
 iti gītaravaṁ śrutvā bodhisattvaḥ samutsukaḥ /
 niṣkramituṁ samutthāya garbhāgārād viniryayau // 20.48
 nirgataṁ patiṁ dṛṣṭvā samutthāya yaśodharā /
 sahasā gāḍham āliṅgya vilapanty evaṁ abravīt // 20.49
 hā svāmin deva nātho 'si kathaṁ mām tyaktum icchasi /
 tyaktāhaṁ bhavatā kasya vrajeyaṁ śaraṇaṁ prabho // 20.50
 yady avaśyaṁ bhavān nātha pravrajituṁ samicchati /
 aham api tvayā sārdhaṁ vrataṁ caritum utsahe // 20.51
 tad bhavān mām samāgrhya pravrajatu yathepsitam /
 tvayā samaṁ vrataṁ dhṛtvā nirvṛttiṁ prāptum utsahe // 20.52
 yadi bhavān parityaktvā mām nārīm pravrajed api /
 aham api pravrajeyaṁ *tadā mṛtvā yamālayam // 20.53
 ity evaṁ vilapitvā sā yaśodharā pativratā /
 prabhoḥ pādāmbuje natvā tasthau pramohitendriyā // 20.54
 cirāc caitanyam āsādyā dhairyam ālambya vīkṣya tam /

bhartāraṃ gāḍham āliṅgya vilālāpa bhṛṣaṃ punaḥ // 20.55
 tadvilāparavaṃ śrutvā sarvās tāḥ pramadā api /
 utthāya sahasāgatya yaśodharālaye 'viśaṃ // 20.56
 tatra taṃ patim ālokya yaśodharābhiliṅgitam /
 sarvās tāḥ samupāśritya praṇatvaivaṃ vilepire // 20.57
 hā kānta katham asmāsu snehas te 'dya vinaśyate /
 yaṇ naḥ sarvāḥ parityajya pravrajituṃ samicchasi // 20.58
 yadi te 'sti dayā dharmo hy asmān api vratārthinīḥ /
 samanvāhṛtya saddharme saṃcārāya [131b] sahātmanā // 20.59
 vayam api samicchāmaḥ pravrajya bhavatā saha /
 bodhicaryāvrataṃ dhṛtvā saṃprāptuṃ parinirvṛtim // 20.60
 asmān yadi parityajya pravrajer hi vanāśrame /
 vayam api tanuṃ tyaktvā vrajemahi yamāśrame // 20.61
 nūnam iti pariññāya maikākī tvaṃ parivraja /
 asmābhiḥ saha saddharme samācara jagaddhite // 20.62
 tadvilāparavaṃ śrutvā sahasotthāya gautamī /
 sarvās ceṭīḥ samāmantrya paśyanty evaṃ abravīt // 20.63
 gacchata sahasā yūyaṃ paśyatāntaḥpure 'grataḥ /
 vilapanti striyaḥ sarvās tad dṛṣṭvā gacchata drutam // 20.64
 iti taduktam ākarṇya sarvās cetyas tatheti tāḥ /
 sahasāntaḥpure gatvā papracchuḥ sādaraṃ janān // 20.65
 bho bhavanta imāḥ kāntāḥ kimarthaṃ vilapanti hi /
 tannimittam yathābhūtaṃ samupākhyātum arhatha // 20.66
 iti ceṭībhir ākhyātaṃ śrutvā te 'ntaḥpurāśritāḥ /
 janās tā dāsikāḥ sarvāḥ samālokyaiṃ abravān // 20.67
 yuvarājāyaṃ utthāya pravrajituṃ samutsukaḥ /
 garbhāvāsād bahir gantuṃ saṃprasthitaś caraty api // 20.68
 prasthitam enaṃ ālokya sahasaivaṃ yaśodharā /
 devī bhartāraṃ āliṅgya vilāpaṃ kurute bhṛṣaṃ // 20.69
 tadvilāparavaṃ śrutvā sarvā imā api priyāḥ /
 sahaseha samāgatya dṛṣṭvaivaṃ vilapanti hi // 20.70
 iti tan niveditaṃ śrutvā tāḥ sarvāś ceṭikā api /
 vilapitvā bhṛṣaṃ tatra gautamyāḥ samupācaran // 20.71
 sarvās tāḥ samupāśritya vilapitvā bhṛṣaṃ śanaiḥ /
 sarvaṃ etat pravṛttāntaṃ gautamyāḥ saṃnyavedayan // 20.72
 tac chrutvā gautamī mātā sahasotthāya satvarā /
 tatra gopālaye yātā nandaṇaṃ taṃ vyalokayat // 20.73
 pravrajituṃ samicchantaṃ sarvakāntāsamāvṛtam /

dr̥ṣṭvopetyāśruliptāsyā samāliṅgyaivam abravīt // 20.74
 hā putra katham ajño 'si vicakṣaṇasudhīr api /
 yad etatsampadas tyaktvā pravrajitum samicchasi // 20.75
 yā prasūr janayitvā tvām sā māyā saptame dine /
 daivā[132a]t svadeham utsrjya nirdayeva divaṃ yayau // 20.76
 tadāhaṃ tvām samādhāya pālayantī prasūr yathā /
 tathā sampoṣayitvāśu vardhayāmi sudhāmśuvat // 20.77
 idānīm tvam yuvā prauḍho mām vṛddhām jīrṇitendriyām /
 vihāya pravrajes tāta kiṃ te dharmam idaṃ varam // 20.78
 hā deva kiṃ mayā pāpaṃ prakṛtaṃ hi na manyate /
 yat putreṇa parityaktā kiṃ kiṃ duḥkham avāpnuyām // 20.79
 hā prāṇajīrṇite kāye mamātra kiṃ sukhaṃ labhe /
 iti matvā samālokyā *tiṣṭha mā sāmpratam vraja // 20.80
 putro 'py ayaṃ parityajya mām vṛddhām jīrṇitendriyām /
 nirghṛṇaḥ pravrajen nūnaṃ tadā duḥkhāny avāpsyasi // 20.81
 ity evaṃ vilapitvā sā mātā samṃmohitāśayā /
 nyapatad bhūtale tatra chinnamūlo drumo yathā // 20.82
 tām bhuvi patitām dr̥ṣṭvā sarvās tāḥ pramadāḥ snuṣāḥ /
 upetya sahasāliṅgya samutthāpyaivam abruvan // 20.83
 mātār dhairyaṃ samālambya tiṣṭha mātṛa viṣṇuḥ /
 avaśyaṃ bhāvino bhāvā bhavanty eva na cānyatā // 20.84
 yadīdṛksumatir vijño bhartāpy ayaṃ viraktitaḥ /
 svadharmacāriṇīr bhāryā api tyaktum samicchati // 20.85
 tābhir ity uditam śrutvā sā mātā gautamī ciram /
 nandanam taṃ samālokyā sāsṛur atraivam abravīt // 20.86
 tātāsi tvam mahāsattvaḥ sarvaśāstravicakṣaṇaḥ /
 tat katham mūḍhavad bhāsi niṣṭhuro nirghṛṇāśayaḥ // 20.87
 yasya bījasamudbhūtas tvam prapuṣṭaḥ pravardhitaḥ /
 yuvedānīm mahāsattvaḥ sudhīr āsi maharddhitāḥ // 20.88
 janakaṃ taṃ jarākrāntam vṛddham durbalitendriyam /
 saśrīrājyaṃ samutsrjya pravrajyāvratam icchasi // 20.89
 iyaṃ te pravarā buddhir idaṃ te pravaram vratam /
 idaṃ śrīmadyaśolābham sanmate vada me punaḥ // 20.90
 yac cāpimāḥ satībhāryās tava dharmacāriṇīḥ /
 tyaktvā vanavratam kuryā idaṃ te pravaram vratam // 20.91
 yac cāpi svaprajās tyaktvā parān sampātum icchasi /
 idaṃ te sumater nītisaddharmaṃ vada me sudhīḥ // 20.92
 mahīndraśrīmamahāsampatsamṛddhisiddhisatsu[132b]kham /

hitvecchasi vane taptum idaṃ te jñānam uttamam // 20.93
 jñātibandhusuhṇmitrān hitvā duṣṭālaye vane /
 sthitvecchasi jagadbhadraṃ prajñeyaṃ pravarā tava // 20.94
 mahāindrabhāgyasampattiṃ hitvā bhikṣuḥ samantataḥ /
 yācitvecchasi bhikṣānnaṃ pratisaṃvid iyaṃ tava // 20.95
 kim atra bahunoktena bodhisattvo hi sanmatih /
 vicārayan pariñāya saṃcarasva śubhe vṛṣe // 20.96
 vayan api samādhāya tvadguṇasmṛtimānasāḥ /
 nirāhārās tapo dhṛtvā carīṣyāmaḥ tapasvivat // 20.97
 iti mātṛā samukte 'pi bodhisattvaḥ sa nandanaḥ /
 kiñ cid apy uttaraṃ naiva dadau mātur vilokayan // 20.98
 śāyyāsane samāśritya sarvān buddhān anusmaran /
 sarvasattvahitotsāhaṃ dhṛtvā tasthau samāhitaḥ // 20.99
 tataḥ sā gautamī mātā śāyyāsanasamāśritam /
 nandanaṃ taṃ samālokyā svālayaṃ samupācarat // 20.100
 tatas tāḥ sakalāḥ kāntās tatraiva samāśritāḥ /
 taṃ bhartāraṃ abhikṣantaḥ saṃtasthire samāhitaḥ // 20.101
 tathā ceṭyo 'pi tāḥ sarvās tato gatvā samāhitaḥ /
 svasvasthāne samāśritya tasthur vitandritāśayāḥ // 20.102
 etat sarvavṛttāntaṃ taṃ kāñcukīyair niveditam /
 samākarmaṇya pitā rājā janāṃs tāṃś caivam ādiśat // 20.103
 gacchata sahasā yūyaṃ sarvān sainyādhipāñ janān /
 sarvasthānāśritān paurān apy evaṃ pratibhāṣata // 20.104
 idānīm yuvarājo 'yaṃ niṣkramituṃ samutthitaḥ /
 tat samālokyā sarve 'pi samādhāyābhitiṣṭhata // 20.105
 niṣcarantaṃ tam ālokyā parivṛtya samantataḥ /
 bodhayitvā prayatnena nivārayitum arhatha // 20.106
 balena pravrajen nūnaṃ tadā dhṛtvā balād api /
 sarveṣv enaṃ samāhṛtya sahasānayatālaye // 20.107
 iti rājñā samādiṣṭaṃ śrutvā sarve 'pi te janāḥ /
 tatheti prativijñāpya prācaran sahasā tataḥ // 20.108
 evaṃ udghuṣya sarveṣu sthāneṣu te janāḥ pure /
 pracaranto nṛpādiṣṭaṃ śrutvā prāsārayan samantataḥ // 20.109
 tadudghoṣaṃ samākarmaṇya sarve sainyādhipā [133a] janāḥ /
 paurāḥ sarvāḥ puramdhryo 'pi sakumārakumārikāḥ // 20.110
 āgato 'yaṃ mahāsattva ity uktvā draṣṭum utthitāḥ /
 vilapitvā mahāghoṣaṃ uccāryābhiniṣedire // 20.111
 tadvilāpamahodghoṣaṃ śrutvā sarve purāśritāḥ /

sarve 'py arthijanā lokā hāhety uktvā pracerire // 20.112	
tadudghoṣam abhiśrutvā bodhisattvaḥ sa sarvavit /	
sarvān buddhān anusmṛtvā tasthau dhyātvā samāśritaḥ // 20.113	
tadā yakṣādhipo vajrī niṣkramituṃ samutsukaḥ /	
bodhisattvaṃ tam ālokyā sahasā *parṣadāśrayaḥ // 20.114	≈ L 202.9-11; H ii,50.11-13
yakṣasenāpatīn sarvān pāñcikapramukhān api /	
hāritīm sasutāñ cāpi samāmantryaivam ādiśat // 20.115	
adya mārṣā asau nūnaṃ bodhisattvo 'bhiniṣkramet /	
tad arhaṇopacārāṇi grhītvā vrajata drutam // 20.116	
iti tena samādiṣṭaṃ vajrabhṛtā niśamya te /	
sarve senādhipā yakṣās tatheti gantum ārabhan // 20.117	
tadā lokādhipās tatra catvāro 'pi pramoditāḥ /	
sahasā yakṣarājasya vajrapāṇer upācaran // 20.118	≈ L 202.13-14; H ii,50.15-17
tatra te samupāśritya vajrapāṇiṃ sabhāśritam /	
drṣṭvā taṃ sahasā natvā paśyanta evam abruvan // 20.119	
adya mārṣā mahāsattvo bodhisattvo 'bhiniṣkramet /	
tad aśvacaraṇān dhṛtvā khe pracārayata drutam // 20.120	
iti lokādhipaiḥ proktaḥ sarve yakṣā niśamya te /	
tāṃl lokādhipatīn samālokyavim ācira // 20.121	
vajrakāyo gariṣṭho 'sau sarvalokamahattaraḥ /	
tadvāhanapadau dhṛtvā carituṃ ko 'tra śaknuṃyāt // 20.122	≈ L 202.17-18; H ii,50(vs.)21ab
api meruṃ samuddhṛtya samdhartuṃ śakyate 'mbare /	
asau saddharmaśailendro dhārayituṃ na kena cid // 20.123	≈ L 202.19-20; H ii,52(vs.)21cd
iti taduktam ākarṇya śrutvā vaiśravaṇābhidaḥ /	
yakṣarājo mahārājāṃs tān paśyann evam abravīt // 20.124	
ye mānagarvitātmanas teṣāṃ atigurur bhavet /	
ye bhaktipravaṇātmanas teṣāṃ laghur asau prabhuḥ // 20.125	≈ L 203.2-5; H ii,52(vs.)22
iti bhaktiprasannena cittena taṃ jagadgurum /	
tadaśvacaraṇān dhṛtvā cārayata viḥāyasi // 20.126	≈ L 203.6; H ii,52(vs.)23b
mārge tasya purā duṣṭān nivārayaṃś caremahi /	
evaṃ niṣkrāmayitvemaṃ bodhisattvaṃ jagaddhite /	
bahupūṇyāni samprāpya prayāsyāmo jinālayam // 20.127	≈ L 203.7; H ii,52(vs.)23cd
iti [133b] lokādhipaiḥ sarvair apy ākhyātaṃ niśamya te /	
sarve devās tathety uktvā tatra gantuṃ mudācaran // 20.128	
śakro devādhipaś cāpi tridaśān sāpsarogaṇān /	
samālokyā prasannātmā sampaśyann evam ādiśat // 20.129	≈ L 203.8-9; H ii,52.14-15
adya mārṣā asau nūnaṃ bodhisattvo 'bhiniṣkramet /	
tad yūyaṃ tasya niryāṇe samarcayituṃ arhatha // 20.130	≈ L 203.9-10; H ii,52.15-16

etatpuṇyavipākena sarve 'pi nirmalendriyāḥ /	
sambodhicittam āsādhya bhaviṣyatha jinātmajāḥ // 20.131	
iti śakrasamādiṣṭam śrutvā sarve 'pi te surāḥ /	
sarvā apsarasasā cāpi tathā kartuṃ mudācaran // 20.132	
tatra śāntamatir nāma devaputraḥ pramoditaḥ /	
taṃ surendram upāsṛtya natvaivaṃ prāha sāñjaliḥ // 20.133	≈ L 203.9-11; H ii,52.17
tatra teṣāṃ mahendrāhaṃ pure kapilavastuni /	
prasvāpanaṃ kariṣyāmi sarveṣāṃ prāṇinām api // 20.134	≈ L 203.11-12; H ii,52.18
tac chrutvā lalitavyūho devaputraḥ prasāditaḥ /	
taṃ mahendraṃ praṇatvaivaṃ uvāca sāñjalir mudā // 20.135	≈ L 203.14-15; H ii,52.20-21
ahaṃ devendra sarveṣāṃ manuṣyāṇāṃ samantataḥ /	
samantardhāpayiṣyāmi paśūnāṃ pakṣiṇām api // 20.136	
tato vyūhamatir nāma devaputro 'numoditaḥ /	
devarājaṃ tam ānamya sāñjalir evam abravīt // 20.137	≈ L 203.16; H ii,52.22
ahaṃ devādhipākāśe mārgaṃ samabhiśodhaye /	
chattradhvajapatākādiratnapuṣpābhimaṇḍitam // 20.138	≈ L 203.16-17; H ii,52.22-54.1
sūryakāntimahāratnaprabhojjvalāvabhāsitam /	
sugandhidhūpanaiś cāpi śobhayiṣyāmi sarvataḥ // 20.139	≈ L 203.17-20; H ii,54.1-4
airāvaṇo gajendro 'pi tac chrutvā saṃpramoditaḥ /	
taṃ devādhipatiṃ natvā sampaśyann evam abravīt // 20.140	≈ L 203.21-22; H ii,54.5-6
ahaṃ devendra śuṇḍāyāṃ kūṭāgāraṃ mahattaram /	
uttamaṃ māpayiṣyāmi sarvaratnābhiśobhitam // 20.141	
yatrābhiruhya bhadraṅgā apsarasasḥ pramoditaḥ /	
saṃgītīnṛtyasaṃcārīḥ kariṣyanti mahotsavam // 20.142	≈ L 203.22-204.2; H ii,54.6-8
atha svayaṃ surendro 'pi suprasannānāno mudā /	
sarvāṃl lokādhipān paśyan devāṃś caivaṃ samādiśat // 20.143	≈ L 204.3-4; H ii,54.9-10
ahaṃ dvārāṇi sarvatra vivariṣyāmi tadgrhe /	
mārgaṃ prakāśayiṣyāmi tasyābhiniṣkrame 'mbare // 20.144	
tac chrutvā dharmacārī ca devaputraḥ [134a] pramoditaḥ /	
taṃ devādhipatiṃ natvā sampaśyann evam abravīt // 20.145	≈ L 204.5-6; H ii,54.11-12
aham antaḥpure sarvāḥ striyas tā vikṛtāśrayāḥ /	
kṛtvā ca darśayiṣyāmi bodhisattvaṃ viraktaye // 20.146	
tataḥ saṃcodako nāma bodhisattvo 'bhinanditaḥ /	
taṃ surendraṃ samālokya natvāhaivaṃ kṛtāñjaliḥ // 20.147	≈ L 204.7-8; H ii,54.13-14
ahaṃ taṃ śayanāsīnaṃ samutthāpya prabodhayan /	
abhiniṣkramaṇe 'py asya kariṣyāmi samutsukam // 20.148	
tac chrutvā varuṇo nāma nāgādhipo 'bhinanditaḥ /	
manasvī nāgarājo 'pi sāgarabhujagādhipaḥ // 20.149	≈ L 204.9-12; H ii,54.15-18

anantas takṣakaś cāpi mahāpadmaś ca vāsukih /
 padmaḥ karkoṭakaḥ śaṃkhaḥpālo 'py ahīśvaraś tathā // 20.150
 kulikākhyo 'pi nāgendro 'navataptahradādhipaḥ /
 anye 'pi nāgarājāś ca sarve saṃharṣitāśayāḥ // 20.151
 svasvasainyaṃ samālokya samāmantrya nyavedayan /
 vyaṃ api mahendrāśya bodhisattvasya niṣkrame /
 sarvasugandhivarṣāṇi varṣayiṣyāmi (!) tatpathe // 20.152
 evaṃ yakṣāś ca gandharvāḥ kuṃbhāṇḍāś cāpi kinnarāḥ /
 guhyakasiddhasādhyāś ca sarve vidyādhara api // 20.153 ≈ L 204.13-14; H ii,54.19-20
 vyaṃ api tathā sarve mahendrasya jagatprabhoḥ /
 pūjābhadrāmahotsāhaṃ cārayiṣyāmahe pathi // 20.154
 iti nivedya taṃ śakraṃ praṇatvā sampramoditāḥ /
 sarve 'pi te tato gatvā tanmārga samupācāraṇa // 20.155
 tadā saṃbodhikāmo 'sau bodhisattvaḥ samāhitāḥ /
 sarvasugatasamvṛttiṃ dhyātvaivaṃ samacintayat // 20.156 ≈ L 204.14-17; H ii,56.1-4
 yat sarvajñāpadaṃ prāptuṃ saṃbodhinihitāśayāḥ /
 sarvasattvahiṃ kartuṃ ity ahaṃ praṇidhiṃ vyadhāṃ // 20.157
 batāhaṃ bhavacāre 'tra sarvāṇa sattvāṇa prabandhitāṇa /
 samīkṣaṇa kṛpayoddhṛtya bodhayitvā prayatnataḥ // 20.158 ≈ L 204.17-22; H ii,56.4-10
 saddharmaṃ śrāvayaṇa kṛtvā nirmadagarvamānitāṇa /
 bodhimārga niyuktavāpi cārayeyaṃ sadā śubhe // 20.159
 tato 'haṃ sarvasattvānāṃ ajñānatimilāvṛtāṃ /
 drṣṭiṃ prajñāmrtaṇiḥ siktavā śodhayeyaṃ prayatnataḥ // 20.160 ≈ L 205.1-6; H ii,56.11-17
 tataḥ kleśābhiduṣṭānāṃ sāhaṃkārapramodināṃ /
 ātmagrahā[134b]bhiniṣṭānāṃ darśayeyaṃ sunirvṛttiṃ // 20.161 ≈ L 205.7-10; H ii,56.18-58.2
 tato nirvṛtikāmānāṃ teṣāṃ saṃbodhisādhanaṃ /
 saddharmaśaṃvarotsāhaṃ dāsyāmi trijagaddhite // 20.162 ≈ L 205.11-16; H ii,58.3-8
 ity evaṃ praṇidhiṃ smṛtvā sarvāṇa buddhāṇa anusmaraṇa /
 niṣkramituṃ samutsāhaṃ dhṛtvā tasthau vilokayaṇa // 20.163
 tatṣaṇe 'ntaḥpure tatra dharmacārī kha āśrayaṇa /
 kṛtvā bībhatsarūpāṅgāḥ sarvāḥ striyo 'bhidarśayat // 20.164 ≈ L 205.17-20; H ii,58.9-12
 bodhisattvaṃ mahāsattvaṃ taṃ abhiniṣkramotsukaṃ /
 samīkṣya samupāśritya sampaśyann evaṃ abravīt // 20.165 ≈ L 205.21-22; H ii,58(vs.)24
 katham asmiṇa mahāsattva pretāvāse sthitasya te /
 bhītir na jāyate kena ratir evābhijāyate // 20.166
 iti saṃcoditas tena devaputreṇa saddhiyā /
 bodhisattvaḥ sa saṃvikṣya sarvatraivaṃ vyalokayat // 20.167 ≈ L 206.1-2; H ii,58(vs.)25
 tatra śayyāśanāśīnāṃ gopāṃ prasvāpitendriyāṃ /

dr̥ṣṭvā sa bodhisattvas tā rāmā draṣṭum upācarat // 20.168	≈ L 206.3-4; H ii,60.1-2
tatra kāścīd vivastrāṅgāḥ kāścīd dhūtamūrdhajāḥ /	
vikīrṇābharaṇāḥ kāścīt kāścīn niśceṣṭitendriyāḥ // 20.169	≈ L 206.4-5; H ii,60.2-3
vibhraṣṭamakuṭāḥ kāścīt kāścīd vibhraṣṭitāmbarāḥ /	
kāścīd vikṣiptahastās ca vikṣiptacaraṇāḥ parāḥ // 20.170	≈ L 206.5-6; H ii,60.3-4
kāścīd viśaṃsthitāsyās ca kāścīd lālāśravanmukhāḥ /	
parivartitanetrās ca kāścīd ucchvāsītānanāḥ // 20.171	≈ L 206.6-7; H ii,60.4-6
kāścīd utkāśītāsyās ca kāścīt prahasītānanāḥ /	
kāścīt pralāpītāsyās ca khurukhurāyītānanāḥ // 20.172	≈ L 206.7-8; H ii,60.6-7
avaguṇṭhitavaktrās ca kāścīd udghāṭītānanāḥ /	
kāścīd vibhraṣṭasarvāṅgāḥ kāścīd vivartitānanāḥ // 20.173	≈ L 206.8-10; H ii,60.7-9
kāścīn nirghṛṣṭadantāsyāḥ kāścīd vilāpītonmukhāḥ /	
kāścīd bhūparivartāṅgāḥ kāścīc chayyāvivartikāḥ // 20.174	
kāścīn mṛdaṅgamuktāṅgāḥ kāścīd vīṇāśrītāśrayāḥ /	
kāścīc ca vallakīhastā veṇusaṃnīhitānanāḥ // 20.175	≈ L 206.12-14; H ii,60.11-14
kāścīt tūryamukhās cāpi kāścīn nṛtyābhilāsikāḥ /	
evam sarvā api rāmāḥ svasvavādyayutāśrayāḥ // 20.176	
nidrābhikrāntadehās tāḥ prasvāpanābhīmohitāḥ /	
niśceṣṭitendriyāḥ sarvā mṛtā iva bibhatsikāḥ // 20.177	
evam sarvā bibhatsā ^o ṅgā virūpā vikṛtāśra[135a]yāḥ /	
samīkṣya sa mahāsattvo 'py udvigna evam abravīt // 20.178	≈ L 206.18; H ii,60(vs.)26ab
aho rāmā imāḥ sarvāḥ kāntā me supriyā api /	
idānīm vikṛtīrūpā mṛtā iva viceṣṭitāḥ // 20.179	
katham atra sahemābhī ramamāṇaḥ pramoditāḥ /	
kiyat kālāṃ sukhaṃ bhuktvā tiṣṭheyaṃ nivasan gr̥he // 20.180	≈ L 206.19; H ii,62(vs.)26cd
avaśyaṃ mṛtyur āghrāya sarvā imā grahed api /	
mām api nirdayaḥ krūra āsāṃ puro hared api // 20.181	
iti matvā parityajya sarvā imāḥ priyā api /	
sunirvṛtim abhiprāptuṃ gantum arhasi sāmpratam // 20.182	
yadīmābhīḥ sahārakto bhuktvā kāmasukhāny api /	
tiṣṭheyaṃ suciraṃ tv atra bhava na sarvadā śubham // 20.183	
kṣaṇaṃ sukhaṃ kṣaṇaṃ duḥkhaṃ kṣaṇaṃ bhadramahotsavam /	
iti dr̥ṣṭvā ratiṃ bhoktum api nārhāmi sāmpratam // 20.184	
ratirāgābhiraktā ye te bālā mohitendriyāḥ /	
hitāhitān anabhijñātāḥ paśuvan nirguṇāśrayāḥ // 20.185	≈ L 206.20-22; H ii,62(vs.)27
te bhava 'tra nihanyante vadhyā ivāparādhinaḥ /	
bālās tatrābhirajyante 'medhyeṣu kṛmayo yathā // 20.186	≈ L 207.2-4; H ii,62.10-11
bālās tatrābhimajjanti pañkeṣu hastino yathā /	

lubdhās tatrābhirudhyante taskarā iva bandhane // 20.187	≈ L 207.4-5; H ii,62.11-13
mūdhās te 'bhiratā atra varāhā aśucau yathā /	
vigrahanti yathā śvānaḥ karaṃkakāmino 'tra te // 20.188	≈ L 207.5-7; H ii,62.13-14
mūrkhās te nipatanty atra pataṅgā iva hetīṣu /	
duṣṭās te 'trābhibadhyante kapayo lepanair yathā // 20.189	≈ L 207.7-8; H ii,62.14-16
bālās te 'trābhinaśyante jālotkṣiptā jhaṣā yathā /	
dhūrtās te parikuṭyante 'tra kīṭā muṣalair yathā // 20.190	≈ L 207.9-10; H ii,62.16-17
kliṣṭās te 'trāvasajjante śulāgre drohiṇo yathā /	
jīrṇās te 'trāvasīdanti jīrṇagajā ivāmbhasi // 20.191	≈ L 207.10-12; H ii,62.17-19
iha bālā vipadyante bhinnayānā yathāmbudhau /	
bālās te 'tra prapatante prapāte 'ndhā yathā gireḥ // 20.192	≈ L 207.12-13; H ii,62.19-20
bālās te 'trābhiśuśyante jalāśrayā yathā śucau /	
dhūmāyante 'tra bālās te kalpakṣaye yathā mahī // 20.193	≈ L 207.13-16; H ii,62.20-64.3
bhramyante kāminas te 'tra jātyandhā iva jaṅgale /	
bālās te parivartante nibaddhā iva markṭāḥ // 20.194	≈ L 207.16-18; H ii,64.3-5
mlāyante kāminas te 'tra grīṣme yathā tṛṇadrumāḥ /	
hīyante kāminas te 'tra kṣṇapakṣe yathā śaśī // 20.195	≈ L 207.18-19; H ii,64.5-6
ābhiḥ prabhrāmitā bālāḥ kulālacakravād bhṛṣam /	
kāmino bhakṣitā ābhir garuḍair iva pannagāḥ // 20.196	≈ L 207.19-20; H ii,64.7
narās te grahitā ābhir makareṇa yathā jhaṣāḥ /	
lupyante te narā ābhiś caurair yathā vaṇijjanāḥ // 20.197	≈ L 207.20-21; H ii,64.7-9
bhidante pramadā ābhir mahādrumā ivānilaiḥ /	
sudhīrā api hanyanta ābhir āśīviṣair yathā // 20.198	≈ L 207.21-22; H ii,64.9-10
kṣaṇyante svādalubdhās te madhudigdhaiḥ kṣurair yathā /	
uhyante unmadā ābhir jalaughair iva dāravah // 20.199	≈ L 208.1-2; H ii,64.10-12
ābhiḥ krīḍanti bālās te viṇmūtreṣu yathārbhakāḥ /	
vidhyante mānino 'py ābhir aṅkuśena gajā yathā // 20.200	≈ L 208.2-4; H ii,64.12-13
vañcante jñānino 'py ābhī dhūrtakair bālīśā yathā /	
ābhiḥ puṇyāni hanyante dyutāratair dhanam yathā // 20.201	≈ L 208.4-5; H ii,64.13-15
bhakṣante sādhave 'py ābhī rākṣasībhir ivārthinaḥ /	
kim ābhiḥ saha saṃbhuktā sukhaṃ pretālaye yathā // 20.202	≈ L 208.6; H ii,64.15-16
ity evaṃ tulayan sarvam antaḥpuraṃ vilokya saḥ /	
viraktātmā svakāye 'pi paśyann evaṃ vyacārayat // 20.203	≈ L 208.6-8; H ii,64.16-18
kāye 'musmin kiṃ śubhaṃ vastu hy aśucisaṃbhave 'śucau /	
aśucy eva samudbhūtam aśucisyanditaśravat // 20.204	≈ L 208.8-12; H ii,64.18-66.4
karmakṣetrasamudbhūtam tṛṣāmbuparivardhitam /	
dehaṃ matvāpi satkāyasamjñīkṛtam bhava naraiḥ // 20.205	≈ L 208.12-16; H ii,66(vs.)28
kiṃ kāyaṃ śarīraṃ me tad raktabījasamudbhavam /	

asthipañjalasaṃbaddhaṃ snāyusamabhinaddhitam // 20.206 ≈ L 208.17-22; H ii,66(vs.)29
 viṇmūtrāśrukaphasvedamastiṣkarudhirālayam /
 māṃsacarmāvṛtaṃ dantanakhakeśaiś ca śobhitam // 20.207
 aśucyudgāradurgandhipravāhitam rujāśrayam /
 jarākṣapācarībhogyam mṛtyusaṃtuṣṭubhojanam // 20.208
 dṛṣṭvā ko hīdṛśaṃ kāyaṃ vicakṣaṇo vicārayan /
 ripunibhaṃ durārādhyam manyet svakaṃ sukhāśrayam // 20.209
 evaṃ sarvārthasiddho 'sau bodhisattvo viraktitaḥ /
 kāye cānusrmṛtiṃ dhṛtvā tasthau dhyānasamāhitaḥ // 20.210 ≈ L 209.1; H ii,66.19
 etan mama purā *śrutam {or: kṛtyam} sāmpratam tan mayocyate /
 tvam apīdam samā[136a]karṇya suprasanno 'numodatu // 20.211
 śrutvā modanti ye 'pīdam antaḥpurābhilokanam /
 durgatiṃ tena gacchanti yānti sadgatim eva hi // 20.212
 iti śāstrā samādiṣṭam śrutvā*śokaḥ {or: śrutvānandaḥ} sa *bhūpatiḥ {or: sanmatiḥ} /
 evam iti pratijñāya prābhyanandat sapārśadaḥ // 20.213

// ity antaḥpurāvalokanābhiniṣkramaṇotsāhapravartano nāma viṃśatitamo 'dhyāyaḥ samāptaḥ //

Apparatus criticus of the chapter 20

1 note] In manuscript A, the words āsoko mahīndro show traces of later overwriting. The text of pāda a before being overwritten is presumably as follows: athānando yatīndro 'sau. Other manuscripts B, D and E also wrote athāśoko mahīndro 'sau. — In A this story was originally written in the Aśoka/Upagupta setting, then someone changed it to the Buddha/Ānanda setting, and then someone changed it back to the Aśoka=Upagupta setting.

3 note] In A, "aśokaṃ" is clearly letters of later overwriting.

4 note] In A, "aśoka" is letters of later overwriting.

6c mantriṇo] D: mantriṇā A.

20d ādiśat] corr.: ādiśa A.

33b api] E: ati A.

53d *tadā mṛtvā] ≡ ta[d]ā mṛtvāA: tenāpadhṛtvā B: tenāpadhūtvā E.

58c yan naḥ] corr.: ya[h] nnaḥ A: yas naḥ E.

65d janān] A: janāt E.

66c samupākhyātum] A: samupādeṣṭum E.

77b prasūr] corr.: prasū A E.

80b labhe] E: labheḥ A.

80d samālokya *tiṣṭha mā] ex conī: samālokya mā tiṣṭha A: samālo mamā tiṣṭha E.

82 chinnamūlo drumo] A: chinnamūlā drumā E.

85b bhartāpy ayaṃ] E: bhartāpīyaṃ A.
 90d punaḥ] A: puraḥ E.
 114b samutsukaḥ] E: samutsukaṃ A.
 114d *parṣadāśrayaḥ] ex con: parṣamāśrayan A E.
 115c hāritūṃ sasutāñ] A: hāsatīsasutām E.
 116c arhaṇopa°] = arhanopa° A B E.
 123c śailendro] corr.: śailendraś A: śaileṃdra E.
 138b °śodhaye] A(post corr.) E: °śodhayan A(ante corr.).
 139b °prabhøjvalāva°] corr.: °prabhøjvālāva° A E.
 150d ahīśvaraś tathā /] A(post corr.) E: ahīśvaraḥ / A(ante corr.).
 152f note] For prosodic reasons, varṣayiṣyāmi was used instead of -maḥ.
 159a śrāvayan] corr.: śrāvayaṃ A.
 164c bībhatsa°] corr.: bibhatsya° A E.
 164d 'bhidaśayat] corr. 'bhidaśayan A E.
 178a bibhatsā°] corr. (m.c. of bībhatsā°): bibhatsyā° A E.
 205b tṛṣāmbu] A: tṛṣṇāmbu E.
 211a *śrutam] ex con: kṛtyaṃ A B D.
 211 note] The text of pāda ab of A shows traces of later overwriting.
 213b śrutv*āśokaḥ sa *bhūpatiḥ] ex con: śrutvānandaḥ sa sanmatīḥ A B: śrutvānanda sa sanmatīḥ D. — In A, ānandaḥ and sanmatīḥ are letters of later overwriting.
 (Colophon:) iti antaḥpurā°] A: iti śrīlālitavistare antaḥpurā° A(marg.) E D || viṃśatitamo 'dhyāyaḥ samāptaḥ] A E: aṣṭādaso 'dhyāyaḥ D.

『後宮の女たちを見て出離を意欲する』という第20章

さて王中の王であるかのアショーカ王は {或いは：出家行者の王であるアーナンダは}、世尊・出家行者（ウパグプタ／釈尊）のそばに赴き、嬉しく合掌し拝礼して、次のようにお願いした。（20.1）

「世尊よ、私は〔再び〕聴聞いたしたく存じます。どうかご教示ください。かの世尊（釈尊）は、いかにして王権を捨てて都城から出離されたのでしょうか。」（20.2）

このように彼が求めるのを聞き、かの阿羅漢、知性勝れた出家行者は、アショーカ王とその会衆を見つめ、次のように説いた。（20.3）

アショーカよ、専心して聴聞しなさい。いかにしてかの世尊が都城から出離されたのか、あなたの熱心さを高めるために、その通りに語って聞かせよう。（20.4）

——かくして自分の住居に居たシュッドーダナ（浄飯王）は、愛情の苦しみの火に焼かれた心で、その夜を過ごした。（20.5）

その後、明け方に王は起きると、親族を含むすべての釈迦族の者たち、大臣や顧問官や従者たちを呼び集め、次のように命じた。(20.6)

「皆さん、私の息子、あの大士・菩薩は、菩提行の誓戒を堅持するため、我らを捨てて出家するかもしれない。」(20.7)

「それ故、あなた方は全員、ここのすべての場所でそれぞれ持ち場に就いて、昼も夜も見張りに立ちなさい。」(20.8)

このように王が命じたのを聞いて、彼ら顧問官や家臣たち、親しい友人や親族を含むすべての釈迦族の衆は、(20.9)

「そういたします」と答えて、かの王を拝し、其処から退くと、武器を持ってあらゆる場所に行って配置についた。(20.10)

五百人の強く勇敢な釈迦族の者たちが、武器を携え、東の城門に布陣した。(20.11)

同様に、南門・西門・北門にも、それぞれ五百人ずつの釈迦族が布陣し、(20.12)

このように、すべての場所でそれぞれ五百人ずつの釈迦族が四種軍（象・馬・車・歩兵）と共に陣を敷いた。(20.13)

また老人・長老たちも、菩薩を警護するために通りや十字路、三叉路に立った。(20.14)

シュッドーダナ王も自ら、馬や象や戦車に乗った五百人の釈迦族と一緒に、王宮の門に立った。(20.15)

大臣や顧問官や家来たちは、軍兵や乗り物獣を伴い、菩薩を警護するために諸方を注視しながら動き回った。(20.16)

また都民たちも皆、それぞれ自分たちの家の中庭にいて、出離しようとする大士（菩薩）を見張るため、一心に待ち構えていた。(20.17)

また少年少女を連れたあらゆる婦人たちも、彼を見張るためにそれぞれの家の窓辺に寄った。(20.18)

同様に他の人々、貧窮者たち、物乞いたちも皆〔彼と〕連れ立ってゆこうと、喜心を抱いて待ち構えていた。(20.19)

その時、かの継母ガウタミーは、目に涙を浮かべ、すべての侍女たちを呼び集めると、丁重に次のように命じた。(20.20)

「あらゆる門、宮殿の周囲のあらゆる場所に灯明の列を燃やして、一心に見張りなさい。(20.21)

「先端が宝石で輝く沢山の旗をあたり一面に、高く掲げ、月のように明るく照らし出さなさい。(20.22)

すべての小部屋・住まい・寝所にも、明るく輝く宝石の首飾りを吊り下げなさい。(20.23)

音楽を伴って大きな活気づけをして、踊って、昼夜絶やすことなく楽しく演奏をやらせなさい。(20.24)

すべての門の扉を頑丈な門で固く閉ざし、決して離れることなく、そこに留まりなさい。(20.25)

この家全体を宝石の網で覆って護り、寝ずの番をし、よく見張ったままでいなさい。」(20.26)

もし彼がすぐに出離しようとしたら、お前たちは立ち上がり、すぐに彼を抱きしめて引き止め、速やかに連れ戻しなさい。」(20.27)

こうプラジャーパティーが命じたのを聞いて、侍女たちも「承知いたしました」と答え、そこから皆急いで去っていった。(20.28)

その王妃から命じられた通りにすべてを侍女たちは実行し、皆戻ってきて、彼女の前で次のように報告した。(20.29)

「王妃様、すべて仰せの通りにそれを実行し、私たちは菩薩を警護するために、そのように待機いたします。」(20.30)

こう報告すると、侍女たちは皆後宮の中でそれぞれの場所に行き、怠ることなく見張りに就いた。(20.31)

その後かの母ガウタミーは、ゴーパー（ヤショードラー）を筆頭とするすべての妻たち、息子に愛される美女たちを呼び集めて、次のように指示した。(20.32)

「あなた方の最愛の夫は、今にも出家してしまうかもしれません。ですから、皆で寝ずの番をして、おそばに仕えなさい。(20.33)

笛の音や美しい歌声で喜ばせて、警護されたかの夫をうっとりさせ、ずっと留まらせるようにしなさい。(20.34)

もしあなたたちの愛するあの夫が急に出てゆこうとしたら、皆で彼を抱きしめて引き止め、住まいに連れ戻しなさい。」(20.35)

こう母が命じたのを聞き、夫に愛される彼女たちは皆、「そうします」と同意し、その住まいに留まった。(20.36)

彼女たちは朗らかな気持ちで皆、笛の音や合奏の響きで夫を楽しませ、魅了しようと努め始めた。(20.37)

するとその時、その笛の音の中から、あらゆる仏の威神力によって、次のような詩節が流れ出し、菩薩を呼び覚ました。(20.38)

「かつてあなたは誓願を堅持して順々にすべての波羅蜜を満たながら、やがて菩提（正覚）に達して世の生類を益しようと願った。(20.39)

そうして今や、あなたのその誓願すべてが成就されようとしている。だから、速やかに去って、三界の生類を益を施しなさい。(20.40)

あなたは欲望に愛着してこれ以上楽しむべきではない。まず最初に諸仏を憶念しつつ、菩提行を完成させなさい。(20.41)

輪廻的生存の流転が無常であることを、あなたは今見ないのか。あなたが誓ったその通りに、今や成就されるであろう。(20.42)

だからあなたは真理をはっきり認識し、誓願を憶念しつつ、菩提の知に到達して、正法を説き明かしなさい。(20.43)

一切衆生を悟りの道の上に立たせ、目覚めさせ、世の生類を善法から成るものに変えてから、よき涅槃を得なさい。(20.44)

あなたに恩恵を与えたいと願っている、心が清澄なすべての仏たちは、善き眼差しであなたを見つめながら随喜し、見守っている。(20.45)

あなたが出離するのを見れば、すべての神々も随喜し、護世王の神たちも皆集まって来て、供養することだろう。(20.46)

このように思っ、あなたはここでもはや躊躇してはいけない。速やかに出離し、仏となって、三界の生類に益をなすがよい。」(20.47)

この歌の響きを聞いて菩薩は心を躍らせ、出離せんがため立ち上がると、奥殿の寝室から出てゆこうとした。(20.48)

出て行く夫を見て、ヤショーダラーは立ち上がり、急に彼を強く抱きしめて、泣きながらこのように言った。(20.49)

「ああ、わが君、あなたは私の夫です。どうして私を捨てようとするのですか。わが君、あなたに捨てられたら、私は誰を依り処にしたらよいのですか。(20.50)

もし、わが君、どうしてもあなたが出家したいと願うなら、私もあなたと一緒に誓戒を行じたいと思います。(20.51)

ですから、私を連れたまま、願いどおりに出家なさって下さい。私はあなたと一緒に誓戒を持して、涅槃（寂滅の至福）を得たいのです。(20.52)

もしあなたが女である私を捨てて旅立つというなら、その時は私も死んでヤマの住まい（冥府）へと旅立ちます。」(20.53)

夫に献身的なヤショーダラーはこのように泣き嘆いて、夫の蓮華の両足にぬかずき、気を失ってその場に倒れた。(20.54)

やがてしばらくして意識を取り戻すと、健気な気丈な態度をとって彼を見つめ、再び激しく泣き悲しんだ。(20.55)

その嘆きの声を聞くと、かのすべての女たちも立ち上がって急いでやって来て、ヤショーダラーの住む所に入った。(20.56)

そこでヤショーダラーが抱きついてい、彼女たちは皆、近寄るとひざまずいて、このように嘆いた。(20.57)

「ああ、愛しいお方、どうして今日、私たちへの愛を失ってしまわれたのですか、私たちすべてを捨てて、出家したいと願われるとは。(20.58)

もしあなたに憐れみと法がおりになるなら、誓戒を欲する私たちをも受け入れて、ご自身と一緒に、正法での行をさせて下さい。(20.59)

私たちもあなたと一緒に出家して、菩提行の誓戒を持して、完全な涅槃を得たいと思っていますのです。(20.60)

もし私たちを捨てて、あなたが森の隠棲処に旅立たれるなら、私たちもこの体を捨てて、ヤマの住まい（冥府）へと旅立ちます。(20.61)

確かにこのことをよく理解なさり、どうかあなたお一人で出家なさらないで下さい。私たちと一緒に、世の生類を益するため正法において活動なさって下さい。」(20.62)

彼らの泣き嘆く声を聞いて、ガウタミーは急いで立ち上がり、すべての侍女たちを呼んで、見つめて次のように言った。(20.63)

「あなた方は急いで行って、まずは後宮で泣き嘆いているすべての女たちを見てきなさい。それを見て、すぐに戻ってきなさい。」(20.64)

彼女の言葉を聞いて、侍女たちは皆「承知しました」と言い、すぐに後宮へ行って、丁重にその人たちに尋ねた。(20.65)

「もし、皆様。これらの美しい方々は どうして泣き嘆いているのですか。そのわけをありのままにお話してください。」(20.66)

侍女たちにこのように尋ねられて、後宮にいるそれらの女たちはその婢女たち全員を見て次のように答えた。(20.67)

副王たるあの王子様が起き上がると出家することを欲し、出発して奥殿の住まいの外へ出ようと、歩き出されたのです。(20.68)

出立しようとした彼を見て、ヤショーダラー妃は急いで夫を抱きしめ、激しく泣き嘆いておられるのです。」(20.69)

その嘆く声を聞いて、これらの寵妃たちも皆、急いでここに集まって来て、見てこのように泣き嘆いているのです。」(20.70)

その報告を聞くと、その侍女たちも皆激しく泣きながら、かのガウタミーのところへ戻って来た。(20.71)

彼女たちは皆、やって来ると激しく泣いてから、しずかにその出来事のすべてをガウタミーに報告した。(20.72)

それを聞くと、母ガウタミーは急いで立ち上がり、大急ぎでゴーパー（ヤショーダラー）の住まいに行き、そこにいるかの息子を見つめた。(20.73)

その彼が、出家を欲しながらすべての愛妻たちに取り囲まれているのを見て、彼女は近づくと、涙に濡れた顔で彼を抱きしめ、次のように言った。(20.74)

「ああ、息子よ、賢明で聡明なはずのあなたが、どうしてこんなに世間知らずなのか、このような富と栄光を捨てて、出家したいと願うとは。」(20.75)

あなたを産んだ生母マーヤーは運命によって七日目に、まるで薄情なひとのように、自分の肉体を捨てて、天界へ去ってしまいました。(20.76)

その時私はあなたを引き受けて、実の母のように育て、あなたを満ちてゆく月のように速やかに成長させてきました。(20.77)

今や若者としてあなたは成長し、私は年老いて感官も衰えましたが、その私を捨てて、出家するというのですか、わが子よ。それがお前にとって最高の法なのですか。(20.78)

「ああ、神よ、私はどんな罪を犯したのです。この息子に捨てられたら、一体どれほど多くの苦しみを私が味わうことになるのか、考えられない。(20.79)

ああ、生命が尽きかけたこの体で、この場所で、どんな幸せが得られることだろう。そのことを考え、よく見て、どうか留まっておくれ。今は行かないでおくれ。(20.80)

この息子である人までが、年老いて感官の衰えた私を捨てて、無慈悲に出家してしまうなら、きっとその時あなたも苦悩を得るでしょう。」(20.81)

このように母は言って、泣き嘆き、意識を混濁させて、まるで根元を切られた樹木のように、その場の地面に倒れ伏した。(20.82)

彼女が地に倒れたのを見て、息子の妻たる女たちは皆急いで近づき、彼女を抱きかえ起こして、次のように言った。(20.83)

「お母様、気丈さを持たれて、お立ちになって下さい。ここで悲しく坐り込んでしまわないで下さい。起こるべきことは必ず起こるものであり、避けられるものではないのです。(20.84)

たとえこれほど聡明で賢い夫であっても、この方は離欲の心により、自分の義務を共に行うべき妻たちさえも捨てようと欲するのです。」(20.85)

彼女たちのこの言葉を聞いて、その母ガウタミーは長い間息子を見つめ、涙ながらにその場で次のように言った。(20.86)

「わが子よ、あなたは大士であり、あらゆる学問に精通しています。それなのに、どうして愚か者の如く、薄情で無慈悲な心の者のように振る舞うのですか。(20.87)

父王の種から生まれて、あなたは養われて成長し、今や若者となり、とても賢い、大威神力をもつ大士となりました。(20.88)

しかし年老いて老いに冒され、感官の力が衰弱したあの父王を、あなたは輝かしい王国とともに捨てて、出家の誓戒を得んと欲しています。(20.89)

これがあなたの卓越した思考、これがあなたの卓越した誓戒なのですか。これが輝かしい名誉の獲得となるのですか。善慧者よ、もう一度私に説明しなさい。(20.90)

また、あなたと社会的義務を共にすべきこれら貞淑な妻たちをうち捨てて、森で警戒を行じること、それがあなたの卓越した警戒なのですか。(20.91)

あなたは自国の民を捨てて、他の人々を救おうと欲しますが、それが善慧者たるあなたの政略であり正法なのですか。賢き者、私に説明しなさい。(20.92)

王たる栄光も大財も繁栄も成功も善き幸せも捨て去り、森で苦行することをあなたは欲しますが、それがあなたの最高の智慧なのですか。(20.93)

家族も親類も友人も仲間もうち捨てて、悪しき場所である森に住みつつ、世の生類の幸せをあなたは求めますが、それがあなたの卓越した智慧なのですか。(20.94)

「王たる恵まれた運命と富財をうち捨てて、あらゆる所で托鉢しながら施食を乞うこと、それがあなたの無礙解の智なのですか。(20.95)

ここでこれ以上多くを言って、何になるでしょう。善慧者たる菩薩として熟慮しつつ完全に知り、善行・徳行を行いなさい。(20.96)

私たちも専心してあなたの徳性の記憶に心を向けながら、食事を絶って苦行をなし、苦行者の如く暮らすことにします。」(20.97)

母がこのように語った時、息子であるかの菩薩は見つめながら母に一言の返事も返さなかった。(20.98)

彼は寝椅子の上に身を置くと、あらゆる仏を憶念しつつ、一切衆生に益をなすことへの意欲を持して、心を集中させて過ごした。(20.99)

その後、かの母ガウタミーは、寝椅子にいるその息子を見つめてから、自分の住まいへと戻った。(20.100)

その後すべての妻たちは同じ部屋に留まり、夫を絶えず見つめながら、心を集中させて過ごした。(20.101)

またすべての侍女たちはそこから立ち去ると、心を引き締めてそれぞれの持ち場につき、怠ることなく見張った。(20.102)

このすべての出来事を侍臣たちから報告され、聞いた父王は、家来たちに次のように命じた。(20.103)

「お前たちはすぐに発って、軍を指揮するすべての家臣たち、またあらゆる土地にいる都民たちにも、こう伝えなさい。(20.104)

今、副王たる王子が出離しようと、動き出した。それ故、全員がよく観て、気を引き締めて立ちなさい。(20.105)

もし彼が出て行くのを目撃したら、周りを取り囲み、努力して彼を説得し、引き止めなさい。(20.106)

もし彼が強引に出て行こうとするなら、力づくで彼をとりおさえて、速やかに住まいに連れ戻しなさい。」(20.107)

こう王が命じたのを聞き、すべての家来たちは皆「承知しました」と答え、そこから急いで動き出した。(20.108)

このように都のあらゆる場所で布告がなされ、王の命令を聞いたその人々は、周囲にその命令を広めた。(20.109)

軍の指揮官たちや家来たちのすべて、また都民たちや、幼い男女を連れたあらゆる婦人たちまでも、その布告を聞くと、(20.110)

「あの大士が来られる」と言って、眺めるために立ち上がり、泣きながら大声をあげたり、道を遮ったりした。(20.111)

その嘆き声や大きな声を聞き、都に住むすべての人々、また物乞いたちも「ああ、なんてこと」と言いながら、あちこち歩き回った。(20.112)

その布告の声を聞いても、一切知たる菩薩は、すべての諸仏を憶念し、禅定しながら過ごしていた。(20.113)

その時、出離を熱望している菩薩を観察して、葉叉の王である金剛手は、すぐさま眷属の会衆のもとへ行った。(20.114)

そしてパーンチカを筆頭とする葉叉の將軍たちすべてと、息子たちを連れたハーリティ（鬼子母神）を呼ぶと、次のように命じた。(20.115)

「皆さん、かの菩薩はきっと今日、出離されるであろう。それ故、ふさわしい供養の品々を持って、速やかに行きなさい。」(20.116)

こう金剛手が命じたのを聞き、すべての葉叉の將軍たちは「わかりました」と答え、出発し始めた。(20.117)

その時、喜んでいる護世王の神たち（四天王）も、すぐに葉叉の王である金剛手のいる所へやって来た。(20.118)

其処で彼らは、会堂の中に坐す金剛手のもとへ近づき、彼を見るとすぐ拝して、見つめながら次のように言った。(20.119)

「皆さん、今日、大士である菩薩が出家されよう。そこで、[彼が乗る]馬の四足を支え持ち、速やかに空中を歩ませなさい。」(20.120)

こう護世王の神々が命じたのを聞いて、その葉叉たちは皆、それら護世王の神々を見つめながら、次のように言った。(20.121)

「あの一切世界で最も偉大なお方は、金剛で出来た体を持ち、最も重い方です。その乗り物獣の足を支え持って歩むことなど、一体この世の誰にできるでしょうか。(20.122)

たとえメール山（須弥山）を持ち上げて空中で支えることは出来ても、正法の山王たるあのお方を支え持つことは、誰にも出来ません。」(20.123)

彼らがそう言うのを聞いて、ヴァイシュラヴァナ（毘沙門）という名の葉叉王はその護世王の神たちを見つめながら、次のように言った。(20.124)

「高慢な心を持つ者には、あのお方は極めて重くなる。しかし篤い信仰を捧げた心を持つ者にとって、あの主は軽いのだ。(20.125)

だから、信仰で澄んだ清らかな心をもって、その馬の足を支え持つて、かの生類の師を空中を歩ませなさい。(20.126)

あの方がゆかれる道では、われらは先立って、邪惡な者たちを遠ざけながら進むとしよう。このようにして世の生類の益のために菩薩を出離させることが出来れば、われらは多くの功德を得て、仏の住まいに赴くことができるだろう。」(20.127)

このように護世王の神たちの全員が語ったことを聞いて、あらゆる神々は「承知しました」と答え、嬉しくその地へと赴いた。(20.128)

また神々の王シャクラ（インドラ、帝釈天）も、明るく澄み切った心で、天女たちの群を伴った三十三天の神々を見つめながら、次のように命じた。(20.129)

「皆さん、かの菩薩は今日、きっと出家されよう。ゆえに、君たちは彼が出離される時に、彼を尊び供養しなさい。(20.130)

この功德の異熟により、君たちは皆、諸感官が清らかになり、菩提心を得て、仏子になるだろう。」(20.131)

こうインドラが命じたのを聞いて、神々すべて、天女たちすべては、「承知しました」と答え、と嬉しく行動にとりかかった。(20.132)

その場でシャーンタマティ（寂意）という名の神の子が、かの神々の王のもとに近づき、拝し、合掌して、このように言った。(20.133)

「大王よ、私は彼らのカピラヴァストウの都において、あらゆる生き物を深い睡眠へと落とすことにしましょう。」(20.134)

それを聞くと、ラリタヴューハ（遊戲莊嚴）という名の、心に淨信をもつ神の子も、インドラを拝し、合掌して、嬉しげに語った。(20.135)

神々の王よ、私は周囲すべての人間、獸、鳥たちの〔声や音が〕消えるようにいたしましょう。」(20.136)

すると次に、ヴューハマティ（嚴意）という名の天子も喜悅して、その神々の王を拝し、合掌して、このように言った。(20.137)

「神々の王よ、私は虚空にある通り道を清め、傘蓋や旗、宝石や花々で飾り立てることにしましょう。(20.138)

そして日長石（スーリヤカーンタ）の大宝石の輝きで明るく照らし、香ばしい薫香をもって至る所を美化いたしましょう。」(20.139)

象王アイラーヴァナもそれを聞いて喜悅し、かの神々の王を拝し、見つめながら次のように言った。(20.140)

「神々の王よ、私はこの鼻の上に、あらゆる宝石で飾られた、巨大な最高の重閣を造立しましょう。(20.141)

その重閣の上に、喜ぶ美しい天女たちが乗って、音楽や踊りによって大祝祭をなすことでしょう。」(20.142)

するとインドラ自身も、澄んだ明るい顔で、すべての護世王たちや他の神々を見つめ、次のように嬉しげに宣言した。(20.143)

「私は彼の住まいで、至る所、諸門を開け放とう。そして彼の出離における空中の道を照らし出そう。」(20.144)

それを聞くと、ダルマチャーリン（法行）という天子も喜悅して、かの神々の王を拝し、見つめて、次のように言った。(20.145)

「私は後宮のすべての女たちを醜悪なようすの体に変えてしまい、菩薩が離欲の心を抱くように、彼に見せてあげましょう。」(20.146)

すると次に、サムチョーダカ（勸発）という名の菩薩も喜悅し、神々の王を見つめ、拝し、合掌して、次のように言った。(20.147)

「私は寝椅子に坐っているあの方（菩薩）を覚醒させ、立ち上がらせ、彼が出離を意欲するように励ましましょう。」(20.148)

それを聞くと、喜悅したヴァルナという名の龍王、マナスヴィン龍王、サーガラ龍王、(20.149)

アナンタ、タクシャカ、マハーパドマ、ヴァースキ、パドマ、カルコータカ、シャンカパーラの龍王も、(20.150)

またクリカという名の龍王、アナヴァタプタ湖（無熱惱池）の主、またその他のすべての龍王たちも、歓喜の心を抱き、(20.151)

〔彼らは〕それぞれ自分の軍を眺めて、呼び集め、こう報じた。「神々の王よ、私たちもかの菩薩の出離の際、その道にあらゆる芳香の雨を降らせることにしよう。」(20.152)

同様に、葉叉、キンナラ（緊那羅）、クンバーンダ、ガンダルヴァ（乾闥婆）、グヒヤカ、シツダ、サードウヤ、ヴィディヤーダラたちも皆、(20.153)

「私たちも皆で、生類の主たる大王（菩薩）のため、通り道において、供養と吉祥の大祝祭をさせましょう」と、(20.154)

そう彼らはかのインドラに告げ、拝すると、喜んで誰もがそこを立ち去り、その〔菩薩の〕通り道へと集まり来た。(20.155)

その頃、悟りを求める菩薩は心を集中させ、すべての仏の共通の行為を瞑想し、次のように考えた。(20.156)

「一切知（仏陀）の境地に達するために、私は菩提（正覺）へと心を定め、一切衆生を益するために、私はかつて誓願を立てた。(20.157)

ああ、私はこの輪廻の生存という牢獄において拘束されている一切衆生を見ながら、憐愍をもって彼らを救い出し、努力して目覚めさせ、(20.158)

正法を聞かせながら高慢・傲慢・慢心なき者にし、悟りの道へと導き入れて、常に淨行をなさしめよう。(20.159)

その後、無知という暗翳（白内障）に覆われたあらゆる衆生の目に、智慧という不死の甘露を注いでやることで、努力して清めてあげよう。(20.160)

その後、煩惱に汚され、我執を喜び、自分の所有財に執着している者たちに、寂滅の至福を示してあげよう。(20.161)

その後、寂滅の至福を欲する彼らに、菩提を達成するための正法と禁戒への強い意欲を、三界の生類の益のため、私は与えてあげよう。」(20.162)

このように思い、かれは弘誓（宿願）を思い出し、すべての諸仏を憶念しながら、出離への強い意欲を保ち、観察をしながら過ごしていた。(20.163)

するとその瞬間、その後宮で空中にいた〔天子〕ダルマチャーリンは、すべての女たちの姿を醜惡なものに変えて、現し出した。(20.164)

そして彼は出離することを熱望しているかの菩薩・大士を見て、近づき、見つめながらこのように語りかけた。(20.165)

「大士よ、あなたはこの餓鬼の住まい（墓場）のような場所に留まっていて、どうして恐怖が生じないのでしょうか。快樂が生じるなんて、何故にありえましょう。」(20.166)

その賢い天子に勧発されて、かの菩薩はあたりいちめんを注視して、その通りに見た。(20.167)

其処でかの菩薩は寝椅子に坐ったまますっかり感官が眠らされているゴーパーを見てから、かの妻たちを見るために近づいた。(20.168)

其処では、或る女たちは体から衣がはだけていて、或る女たちは髪を振り乱した姿になっていた。或る女たちはつけた装身具を散乱させ、或る女たちは感覚を失ったかのように動かなかった。(20.169)

或る女たちは冠を落とし、或る女たちは衣が脱落しており、或る女たちは手を投げ出し、別の女たちは足を放り出していた。(20.170)

或る女たちは口を開けたままの姿、或る女たちはよだれを垂らしていた。或る女たちは目をむいて動かし、或る女たちは鼾をかいていた。(20.171)

或る女たちは咳きこむ顔をし、或る女たちは顔に笑いを浮かべ、或る女たちは口で謔言を言い、また喉をごろごろ鳴らしている女たちもいた。(20.172)

また顔を覆い隠している女たちや、口を開けたままにいる女たちがいた。或る女たちは手足を投げ出し、或る女たちは口を歪めて開いていた。(20.173)

或る女たちはぎりぎり歯噛みし、或る女たちは泣き顔を仰向けていた。或る女たちは床の上で肢体を転がし、或る女たちは寝台から転がっていた。(20.174)

或る女たちは小鼓（ムリダンガ）を体から投げ出し、或る女たちは琵琶（ヴィーナー）に寄りかかり、或る女たちはリュート（ヴァッラキー）を手に持ち、また笛を口に当てたままの女たちもいた。(20.175)

トゥーリヤ楽器に顔をうつむけている女たち、踊ろうと欲するかの様な女たち、また同様に、それぞれの楽器を抱きしめたすべての女たちがいた。(20.176)

彼女たちは、体が眠りに圧倒されてしまい、すっかり眠らされて意識を失い、四肢を動かすことなく皆、死人のように醜く横たわっていた。(20.177)

このように、あらゆる女たちの醜悪な手足、醜い容貌、変異した身体のさまを眺めて、大士（菩薩）は嫌悪を抱き、次のように呟いた。(20.178)

「ああ、これらの美女たち、私の好きな女たちも皆、今や変わり果てた姿になり、死人のように動かない。(20.179)

ここでどうして彼女たちと楽しみながら私は飲べるだろうか。私は今後どれほどの時の間、快楽を享受しながら家に住んで暮らせるだろう。(20.180)

死は必ず、これらすべての女たちを嗅ぎつけ、捕らえるだろう。情け容赦なく残酷な死は、彼女たちの目の前で私をも連れ去るだろう。(20.181)

このように考えるなら、私はこれらの愛する女たちをすべて捨てて、至福の寂滅（涅槃）を得るために、今すぐ出発すべきだ。(20.182)

もしこれらの女たちに愛著して、欲望の快楽を味わい、ずっと久しくここに留まるなら、それは決して清く正しい行為たり得ない。(20.183)

悦楽は一瞬、苦も一瞬、華やかな祝祭も一瞬だ。こう見れば、今享楽を味わっていることは、私にふさわしいことではない。(20.184)

快楽の欲望に執著する人たちは、感官に惑わされた愚か者だ。益と害とを認識できぬ獣のように卑しい徳性の者たちだ。(20.185)

彼らはこの輪廻的生存の中で、処刑される罪人のように殺され続けるが、愚か者は、糞便の中にいる虫たちのように、この生存に愛着している。(20.186)

愚か者たちは、泥沼の中の象たちのように、この生存で沈んでゆく。強欲な者たちは、牢獄の中にいる盗賊のように、そこに閉じ込められている。(20.187)

彼ら迷愚の者たちは、汚物の中にいる豚たちのように、この生存で楽しんでいる。骸骨を欲しがる犬のように、彼らはここで争い合っている。(20.188)

彼ら痴愚の者たちは、火の中に飛び込む蛾のように、この生存で落ちてしまう。彼ら悪しき者たちは、鳥もちの罠に捕まった猿のように、ここで捕縛される。(20.189)

彼ら愚か者たちは、網ですくい上げられた魚のように、この生存で殺される。彼ら悪い者たちは、杵でつかれる虫のように、ここで打ち碎かれる。(20.190)

彼ら煩惱に悩む者は、槍の先端で串刺しにされる凶悪犯のように、この生存で刺し貫かれる。彼ら老い衰えた者は、水の中の老いた象のように、ここで沈みゆく。(20.191)

愚か者は、海で難破した船のように、この生存で破滅する。彼ら愚か者は、山の崖から落ちる盲人のように、ここで転落する。(20.192)

彼ら愚か者は、夏に干上がる池のように、この生存で干上がってしまう。彼ら愚か者は、世界の終末に煙を上げ始める大地のように、ここで煙を上げる。(20.193)

彼ら愛欲に溺れた者は、密林の中の盲人のように、この生存で迷い歩く。彼ら愚か者は、縛られた猿のように、ここでぐるぐる回り続ける。(20.194)

彼ら愛欲の者は、乾期の草木のように、この生存で萎れて朽ちる。彼ら愛欲の者は、下弦の期間の月のように、ここで欠減してゆく。(20.195)

愚か者たちは、これらの女たちによって陶工の車輪のように激しく振り回される。愛欲の者たちは、ガルダ（金翅鳥）に喰われる龍のように、これらの女たちに喰われてしまう。(20.196)

彼ら男たちは、マカラ（怪魚）に吞まれる魚のように、これらの女たちに吞み込まれてしまう。彼ら男たちは、盗賊に襲われた商人のように、女たちに奪い尽くされる。(20.197)

彼ら男は、風に倒壊する巨木たちのように、美女たちによって破壊される。心強き者であっても、毒蛇のようなこれらの女たちによって殺される。(20.198)

美味を卑しく求めた彼らは、蜜が塗られたカミソリのように〔自分を傷つける〕鋭い傷を得る。放逸なる者たちは、これらの女たちによって、激流に流される木材のように流されてゆく。(20.199)

彼ら愚か者たちは、糞尿の中で戯れ遊ぶ幼児のように、これらの女たちと戯れ遊ぶ。高慢な者たちも、鉤棒で操られる象たちのように、これらの女たちに突かれ刺される。(20.200)

知恵ある者たちであっても、詐欺師に騙される愚か者のように、これらの女たちに欺かれる。〔彼らの〕多くの徳性が、博打に溺れた者の財産のように、これらの女たちによって失われる。(20.201)

聖人たちでさえも、羅刹女に喰われる商人たちのように、これらの女たちに喰われてしまう。まるで餓鬼たちの世界のような所で、これらの女たちと共に楽しんで、一体どんな幸せがあるというのか。(20.202)

このように彼は比喩をもって考えながら、後宮のすべてを観察してから、自分自身の身体に対しても嫌悪を感じ、眺め、次のように沈思した。(20.203)

不浄から生まれ出た不浄なるこの体に、何の美しいものがあるだろうか。不浄なものから排出されて流れる、〔不浄から〕生まれた不浄そのものではないか。(20.204)

『業』（カルマ）という畑から生じ、『渴愛』の水で育ったこの身体を、人々は輪廻の生存において「有身見」をなして、私の体と思い込んでいる。(20.205)

私の体、肉体とは何か。それは血の種子から生じ、骨格で組み立てられ、腱で縛られている。(20.206)

それは糞尿、涙、痰、汗、脳漿、血液をもつ容れ物であり、肉と皮に覆われ、歯や爪や髪で飾られているものだ。(20.207)

それは糞と嘔吐との悪臭を放ち、病気の棲み処であり、老いという女羅刹の餌食であり、死神を満足させる食べ物である。(20.208)

一体、賢者の誰が、身体をこのように見て判断するなら、まるで仇敵の如くうまくなだめ満足させることが難しいこの体が、自分の幸せの依り処であると思えようか。」(20.209)

このように、かの菩薩サルヴァールタシッダは、厭う心で、身体に対する憶念（身念処）を保ちながら、禪定に集中して過ごした。(20.210)

—— この、私がかつて聞いたこと（或いは：行ったこと）が、今、私によって語られました。あなたもこれを聞いて、澄んだ心で随喜なさい。(20.211)

この『後宮の観察』を聴聞して喜ぶ者たちは、それによって決して悪趣（悪い死後の世界）へは行かず、必ず善趣（善き死後の世界）へ赴く。(20.212)

師がこのように説かれたのを聞いて、かのアショーカ王は {或いは：善慧者アーナンダは} 「わかりました」と同意し、聴聞の衆と共に大いに喜んだ。(20.213)

後宮の女たちを見て出離を意欲する [という名の] 品、第20章 [終わる] 。

2. Tathāgatajanmāvadānamālā 第21章の校訂

A 136b2⁽¹¹⁾ ; B 203a ; D 164a5 ; E has no leaf number (this chapter has 7 folios)

athāśokaḥ {or: athānandaḥ} sa bhūpendraḥ {or: sadvijñāḥ} sājñaliḥ saṃpramoditaḥ /
bhagavantaṃ tam arhantaṃ praṇatvaivam abravīt // 21.1
bhadantāsau mahāsattvaḥ kathaṃ purād viniriyayau /
tad bhavān naḥ samākhyāya sambodhayitum arhati // 21.2

11. In Chapter 21, leaves 149a-151b are newly written leaves of A2, while the older leaves preceding them belong to A.

ity *aśokoditaṃ {or: ānandoditaṃ} śrutvā so 'rhan yatir mahāmuniḥ /	
aśokaṃ {or: ānandaṃ} taṃ sabhāṃ cāpi sampaśyann evaṃ ādiśat // 21.3	
śṛṇu rājan {or: śṛṇv ānanda} samādhāya yathāsau nirgataḥ puraḥ /	
tathāhaṃ te 'bhivakṣyāmi yuṣmān sarvān prabodhane // 21.4	
tadā 'sau śrīmahāsattvaḥ sambodhinihitāśayaḥ /	
nirgantum samayaṃ paśyaṃs tasthau śayyāsanāśritaḥ // 21.5	
tam evaṃ āśritaṃ dṛṣtvā devās te gagaṇāśritaḥ /	
dharmacāriṇaṃ āmantrya prāhur evaṃ samutsukāḥ // 21.6	≈ L 209.2; H ii,66.19-20
kiṃ mārṣa bodhisattvo 'yaṃ śayyāsanasamāśritaḥ /	
anudvigno vilokya strīrakta iva niṣīdati // 21.7	≈ L 209.3-4; H ii,68.1-2
gaṃbhīro 'yaṃ yathāmbhodhis tat ko 'sya manyate manaḥ /	
mā khalu viṣaye cittaṃ niḥsaṅgasyāsa sajjate // 21.8	≈ L 209.4-6; H ii,68.2-4
asaṃcodita eṣa śrīśukhāsakto 'maraiḥ khalu /	
vismaret tat pratijñātaṃ yat svayaṃ pūrvajanmasu // 21.9	≈ L 209.6-7; H ii,68.4-5
tac chrutvā dharmacārī sa devaputro vilokya tān /	
devaputrān samāmantrya sampaśyann evaṃ abravīt // 21.10	≈ L 209.8; H ii,68.6
kim asya manyate cittaṃ bodhicaryāvrataṃ purā /	
carato niḥsaṅgatā dāne yuṣmābhir abhidṛśyate // 21.11	≈ L 209.8-9; H ii,68.6-8
kim atra punar etarhi caramabhavajanmanaḥ /	
asya sambodhisattvasya saṅgo bhava bhaved api // 21.12	≈ L 209.9-10; H ii,68.8-9
nūnam eva mahāsattvo bodhisattvo jagaddhite /	
svapratijñān anusmṛtvā niṣkramed api sāmpratam // 21.13	
iti tat kathitaṃ śrutvā sarve te tridaśā mudā /	
niṣkramantaṃ mahāsattvaṃ taṃ draṣṭum samupāśrayan // 21.14	
tadā sarvārthasiddho 'sau bodhisattvaḥ samutthitaḥ /	
garbhāgārād viniṣkramya *prāsāde pariprācarat // 21.15	≈ L 209.11-12; H ii,70.1-2
tatra sa samupāśritya pūrvamukhaḥ kṛtāñjaliḥ /	
sarvān buddhān anusmṛtvā natvākāśaṃ vyalokayat // 21.16	≈ L 209.12-15; H ii,70.2-6
tatrākāse samālokya devendraṃ samupasthitam /	
pūjopacārasaṃyuktadevasaṃghasamanvitam // 21.17	≈ L 209.15-18; H ii,70.6-9
caturlokapālāṃś ca svasvasainyabalānvitān /	
kinnarān rākṣasān siddhān sādhyān vidyādharān api // 21.18	≈ L 209.18-21; H ii,70.9-12
sarvās tārāgrahāṃś cāpi garuḍān nāgādhipān api /	
sāpsarodevakanyaś ca savismayābhinanditāḥ // 21.19	≈ L 209.21-210.1; H ii,70.13-14
niśīthe puṣyanakṣatra upasthite samīkṣya saḥ /	
bodhisattvaḥ samāmantrya chandakam evaṃ ādiśat // 21.20	≈ L 210.1-3; H ii,70.14-15
chandaka yat suhr̥ṇ me 'si tac chr̥ṇu vacanaṃ hitam /	
suhṛd dhi sarvakāryeṣu svāmīno hitam ācaret // 21.21	≈ L 210.4-5; H ii,70(vs.)30

yad vibodhivratam dhṛtvā pratijñātam mayā purā /
 jagaddhite 'dhunā sarvaṃ pūrayitum samutsahe // 21.22
 yadi te 'sti mayi snehaḥ saddharṃe cābhivāñchasi /
 kanthakam aśvam ānīya sahasā saṃpradehi me // 21.23
 iti tena sudhīreṇa samākhyātam nīsamya saḥ /
 chandako 'śruviliptāsyah sampaśyann evaṃ abravīt // 21.24 ≈ L 210.6; H ii,72.3
 nātha svāminn ardharātre kutra gantum samicchasi /
 yady asti te mayi snehas tat satyaṃ samupādiśa // 21.25 ≈ L 210.7-8; H ii,72(vs.)31
 iti taduktam ākarṇya bodhisattvaḥ sa sanmatiḥ /
 chandakaṃ suhrdaṃ bhr̥tyaṃ sampaśyann evaṃ ādiśat // 21.26 ≈ L 210.14; H ii,72.15
 śṛṇu sakhe samādhāya yadarthe rājyāniḥspr̥haḥ /
 sarvān parigrahāṃs tyaktvā pravrajitum samutsahe // 21.27 ≈ L 210.15-17; H ii,72(vs.)33ab
 yad bodhipraṇidhiṃ dhṛtvā bodhicaryāvratam caran /
 sātmaparigrahaṃ dattvā dānapāramitāṃ gataḥ // 21.28
 tataḥ śīlaviśuddhātmā saṃbodhinihitāśayaḥ /
 puṇyakṣetreṣu tīrtheṣu sarvatra vratam ācaran // 21.29 ≈ L 210.18-19; H ii,74(vs.)33c
 tataḥ kṣāntivratam dhṛtvā sarvasattvahitāśayaḥ /
 caturbrahmacariṃ dhṛtvā samāhitaḥ sadā[137a]caran // 21.30
 tato vīryamahotsāhaṃ dhṛtvā saddharmalālasaḥ /
 sarvasattvahitārthāni kṛtvācaran sadā śubham // 21.31
 tataḥ samādhiśuddhātmā niḥkleśavimalendriyaḥ /
 buddhān smṛtvā jagadbhadraṃ dhyātvā tiṣṭhan samāhitaḥ // 21.32
 tataḥ prajñāmahāratnabhadraśrīsadguṇāptavān /
 mahāsattvo jagadbhartā bhavāmi sugatātmajaḥ // 21.33 ≈ L 210.18-19; H ii,74(vs.)33c
 tan me sarvaṃ prasidhyeta praṇidhānaṃ jagaddhite /
 sarvopāyavidhānair hi sarvān sattvān prabodhayan // 21.34 ≈ L 210.20-21; H ii,74(vs.)33d
 bodhimārgeṣu saṃsthāpya cārayeyaṃ sadā śubham /
 ato mārān vinirjitya sambodhiṃ prāptum utsahe // 21.35
 etan me 'bhīpsitaṃ kāryaṃ matvānumoditāśayaḥ /
 kanthakam samupānīya sahasā saṃpradehi me // 21.36
 iti tena samādiṣṭam bodhisattvena saddhiyā /
 śrutvā sa chandako dāso viṣaṇṇātmaivam abravīt // 21.37 ≈ L 211.1; H ii,74.6
 āryasvāmin bhavāñ jātamātra eva vicakṣaṇaiḥ /
 nimittajñaiḥ samālokyā samādiṣṭam nīsamya // 21.38 ≈ L 211.1-4; H ii,74.6-9
 ayaṃ śīśur mahāsattvaḥ sarvalakṣaṇamaṇḍitaḥ /
 cakravartī mahīndraḥ syāt saptaratnaiḥ samanvitaḥ // 21.39 ≈ L 211.5-6; H ii,74(vs.)34
 kumāro 'pi mahābhijñāḥ sarvavidyāguṇādhipaḥ /
 pravādivijayī vijño bhavet sarvahitārthabhṛt // 21.40

tato yuvā samālokyā sarvān sattvān bhavāśritān /
 kleśābhimānino duṣṭān kārūṇyābhihatāśayaḥ // 21.41 ≈ L 211.7; H ii,74(vs.)35ab
 rājyāśramaṃ parityajya vanāśrame samāśrayan /
 duṣkaratapasā jītvā sarvān api tapasvinaḥ // 21.42
 sarvān māragaṇāñ jītvā pariśuddhatrimaṇḍalaḥ /
 arhan sambodhim āśadya sambuddhapadam āpnuyāt // 21.43 ≈ L 211.8; H ii,74(vs.)35cd
 tataḥ sarvatra lokeṣu saddharmaṃ saṃprakāśayan /
 jagad bhadramayaṃ kṛtvā nirvṛtiṃ samavāpnuyāt // 21.44
 iti teṣāṃ suvijñānāṃ nimittajñānavādinām /
 satyam eva bhavadvākyam anyathā na bhavaty api // 21.45 ≈ L 211.9-10; H ii,74.19-20
 kiṃ tu svāmin bhavāṃs tāvat tārūṇyadaharo yuvā /
 rājyāśrame samāśritya prajārakṣāvratam caran // 21.46
 sarvasattvaśubham kṛtvā sarvadātra samantataḥ /
 yathā kāmam sukham bhuktvā saṃpramasva surendravat // 21.47
 yac cānye bahavaḥ santo rājalakṣmīsukhepsavaḥ /
 vividhāni vratāny evaṃ tapāṃsi vivi[137b]dhāny api // 21.48 ≈ L 211.10-14; H ii,76.1-5
 dhṛtvā jīnāmbārāḥ kṣīṇās tṛṇaparṇajalāśinaḥ /
 śuddhaśīlāḥ samādhāya saṃcarante sayauvane // 21.49
 taddaivād bhavatā labdham rājalakṣmīsukham mahat /
 tad anyam kiṃ mahat saukhyam labdhum tapovratam careḥ // 21.50 ≈ L 211.14-15; H ii,76.4-5
 idaṃ te nagaram ramyam devendrapurasam nibham /
 rājyam sphitam subhikṣam ca ramaṇīyam sumaṅgalam // 21.51 ≈ L 211.15-16; H ii,76.5-6
 udyānāni bahūny atra ramaṇīyāni santi te /
 sarvatra phalapuṣpādyair drumaiḥ saṃśobhitāny api // 21.52 ≈ L 211.16-17; H ii,76.6-8
 puṣkarīṇyo 'py anekāś ca padmotpalādiśobhitāḥ /
 aṣṭāṅgaṇasampannajalapūrṇā manoramāḥ // 21.53 ≈ L 211.17-21; H ii,76.8-12
 prāsādā mandirā ramyā vajjayantamanoramāḥ /
 sarvatra sukhasaṃvāsāḥ sarvālaṃkāraśobhitāḥ // 21.54 ≈ L 211.21-212.3; H ii,76.12-16
 etāś caranti te bhāryāḥ saṃvṛttiṃ dharmacārikāḥ /
 bhadrāśrīṇasampannāḥ pariśuddhendriyāśrayāḥ // 21.55 ≈ L 212.3-5; H ii,76.16-19
 sampado 'pi saṃrddhās te sarvadravyābhipūrikāḥ /
 sarvabhogyarāsā pūrṇāḥ śrīdasyeva mahattarāḥ // 21.56
 vāhanāny api sarvāni rathāni vividhāny api /
 chattradhvajapatākādisaṃśobhitāni santi te // 21.57
 yoddhṛsainyādhipā vīrāḥ sarvāstraśastrakovidāḥ /
 svāmīdharmānusaṃraktā asaṃkhyeyāś ca santi te // 21.58
 sarve 'py ete mahīpālāḥ suhr̥das te sahāyakāḥ /
 sevādharmānusaṃdhānāḥ snehānuraktamānasāḥ // 21.59

eko 'pi te ripur nāsti sarve 'pīṣṭasuhṛttamāḥ /	
dāsyo dāsās ca sarve 'pi bhr̥tyāś ca te priyaṃkarāḥ // 21.60	
sarve ca mantriṇo 'mātyāḥ sacivā ye sahāyakāḥ /	
janāḥ pauraḥ prajāś cāpi bhavadājñāśirovahāḥ // 21.61	
jñātayo bāndhavās cānye sarve 'pi te suhṛttamāḥ /	
arthisaṃghās ca sarve 'pi suhṛdas te hitaṃkarāḥ // 21.62	
etās te saṃpadaḥ svāmin devānām api durlabhāḥ /	
kathaṃ tvayā parityājyāḥ pratilabhyāḥ punaḥ kuhaḥ // 21.63	
tad bhavāṃs taruṇo yāvat tāvad rājyāśramāśritaḥ /	
sabhāryaḥ svakuleśānam abhyarcya prabhajan nama // 21.64	≈ L 212.5-8; H ii,76.19-78.1
dattvārthibhyo yathākāmaṃ bhuñjāno bhogyam ī[138a]psitam /	
kāntābhiḥ saha saṃraktaḥ kāmaṃ bhuktvā sukhaṃ rama // 21.65	
yadā bhavāñ jarākrāntadeho viṣayaniḥspr̥haḥ /	
tadā rājyāśramaṃ tyaktvā vanāśramasamāśritaḥ // 21.66	≈ L 212.10-11; H ii,78(vs.)36
municaryāvratam dhṛtvā samādhinihitāśayaḥ /	
dhyānasaukhyam prabhuñjānaḥ saṃcaratāṃ samāhitaḥ // 21.67	
iti tena subhṛtena chandakena niveditam /	
niśamya bodhisattvo 'sau kṣaṇam dhyātvā vilokayan // 21.68	
chandakaṃ taṃ samālokyā bhartṛsevānurāginam /	
sampaśyan samupālokyā sādaram evam ādiśat // 21.69	
sakhe satyam tvayākhyātam hitārthe me 'nucāriṇā /	
tathāpi samabhiprāyam śṛṇu me kathyate mayā // 21.70	
anityam bhavasamṣkāram adhruvam anavasthitam /	
aśāsvatam asāram ca vipariṇāmādharmikam // 21.71	≈ L 212.12-13; H ii,78.8-9
capalam pradrutam vegīśailanadījalam yathā /	
bhaṅguram acirasthāyi tṛṇapattrāmbubinduvat // 21.72	≈ L 212.13-14; H ii,78.9-10
riktaṃ tucchaṃ kṣaṇadhvaṃsi kadalīskandhadurbalam /	
āmabhājanasamṣkāsam kṣaṇabhedi hy aniṣṭhitam // 21.73	≈ L 212.14-15; H ii,78.10-11
śaradabhranibham vidyutsadṛśam acirasthiti /	
māyāmarīcisvapnābhasadṛśam kṣaṇadarśanam // 21.74	≈ L 212.15-20; H ii,78.12-17
iti dṛṣṭvā na me cittam saṃskāre ratim icchati /	
ratiḥ kāmālayā kleśaduḥkhamūlā bhayākarā // 21.75	
saraṇaḥ sabhayaḥ kāmāḥ samaṇikṣṇasarpavat /	
ambhobdhir iva duḥpūraḥ kṣārāmbuvat tṛṣākaraḥ // 21.76	≈ L 212.20-213.3; H ii,78.17-21
samadhukhadgadhāreva kalaṅkaś ca kalir yathā /	
iti kṣṇākaraḥ kāmo mīdhaghaṭo yathāśuciḥ // 21.77	≈ L 213.5; H ii,80(vs.)37ab
sadbhiḥ śuddhāśayaiḥ prājñair vigarhito vivarjitaḥ /	
iti vijñāya me cittam ratibhogam na vāñchate // 21.78	≈ L 213.6; H ii,80(vs.)37cd

tad ahaṃ bodhisamprāptyai pravrajitum samutsahe /
 iti matvā sahāyas tvam bhava me bodhisādhane // 21.79
 kanthakaṃ tad upānīya sahasā samprayaccha me /
 etatpunyānubhāvena tvam api nirmalendriyaḥ /
 bhadrāśīsadguṇādhāro bodhisattvo bhaver api // 21.80
 iti tena su[138b]dhīreṇa samākhyātāṃ niśamya saḥ /
 chandako 'śruvirūkṣākṣaḥ sampaśyann evaṃ abravīt // 21.81 ≈ L 213.7-8; H ii,80.7-8
 bho svāmin katham ajño 'si yat tvam bhāryām imāṃ satīm /
 mahiṣīm ramaṇīm kāntām parityaktum samicchasi // 21.82
 imāś ca sakalāḥ kāntās tava dharmānucārikāḥ /
 pativratāḥ subhadrāṅgāḥ katham tyaktum samicchasi // 21.83
 vedaśāstrādhīpaḥ śāstā so 'pi bhāryāsamanvitāḥ /
 brahmacaryāvratam dhṛtvā pracarate tapo vane // 21.84
 śirojaṭo maheśānaḥ so 'pi śaktisamanvitāḥ /
 yogacaryāvratam dhṛtvā saṃcarate jagaddhite // 21.85
 viśvambhāro harir viṣṇuḥ so 'pi lakṣmīsamanvitāḥ /
 rañjayan sasurāṃl lokān sarvān pāti sadā śubhe // 21.86
 evaṃ lokādhīpāḥ sarve svasvabhāryāsamanvitāḥ /
 svasvakulavratam dhṛtvā saṃcarante sadā śubhe // 21.87
 ṛṣayo 'pi tathā sarve svasvabhāryāsamanvitāḥ /
 svasvakulavratam dhṛtvā saṃcarante tapovane // 21.88
 evaṃ santo nṛpāḥ sarve svasvabhāryāsamanvitāḥ /
 tapovane samāśritya saṃcarante munivratam // 21.89
 evaṃ vijñāya rājendra yadi saṃbodhim icchasi /
 śaktyā saha samādhāya saṃcarasva kulavratam // 21.90
 śaktyā vinā na sīdhyanti sarvāṇy api vratāni hi /
 sarvāṇy api ca yajñāni tapāṃsi vividhāny api // 21.91
 iti svāmin pariñāya yaśodharām imāṃ satīm /
 mahiṣīm bhadrīkām bhāryām prabodhayitum arhati // 21.92
 enām śaktim satīm bhāryām paribodhya prasādayan /
 sarvā etāś ca te bhāryā paribodhya prasādayan // 21.93
 yady etā api sarvās te icchanti caritum vratam /
 etābhir api śaktibhiḥ saṃcarasva saha vratam // 21.94
 yadi sarvā na vāñchanti yā yā icchanti te vratam /
 tābhiḥ saha samādhāya saṃcarasva yathepitam // 21.95
 tās eva ekāpi vratam kā cin na vāñchati tvayā saha /
 ekām yaśodharām eva prabodhayitum arhati // 21.96
 etām śrīmahiṣīm devīm prabodhayan prasādhayan /

tadanujñāṃ samādāya pravrajasva yathepsitam // 21.97
 tathā cet te sadā bhadraṃ sarvatrāpi bhaved dhruvam /
 iti matvā tathā tāvad rājacaryāvratam cara // 21.98
 iti tenoditam śrutvā bodhisattvaḥ sa sarvavit /
 prabodhita ivālokyā chandakam evam abravīt // 21.99
 chandaka yat sahāyo 'si tat tvam yathātra bhāṣase /
 tathā sarvaṃ kariṣyāmi yaśodharāṃ prabodhaya // 21.100
 sarvās tā api kāntā me bodhayitvā prayatnataḥ /
 sahasātra samānīya pramodaya prasādayan // 21.101
 aham api samālokyā sarvā etāḥ priyā mama /
 bodhayitvā prasannās tāḥ kariṣyāmy anumoditāḥ // 21.102
 ity evaṃ svāminādiṣṭam śrutvā sa chandako mudā /
 tatheti tāṃ samālokyā yaśodharāṃ tathāvadat // 21.103
 bho devi svāmināhūtā tat sahasā samutthitā /
 purataḥ samupāsṛtya svāminaṃ draṣṭum arhati // 21.104
 ity āhūte 'pi tenāsau yaśodharā prasuptitā /
 prasvāpanamahānidrākrāntendriyā hy atiṣṭhata // 21.105
 tataḥ sa chandako gatvā svāmino ramaṇīḥ priyāḥ /
 samāhvātum upāsṛtya sarvās tāḥ samalokayat // 21.106
 kāścic chayyāsanāśīnāḥ kare niveśya gaṇḍakam /
 vīṇāṃ vihāya nidrād yāḥ prakupitā ivāsthitāḥ // 21.107 ≈ L 206.12-13; H ii,60.12
 (deletion of 2 pādas)⁽¹²⁾
 kāścīn mṛdaṅgam āliṅgya bhujābhyāṃ vallabhaṃ yathā /
 nidrābhikrāntaceṣṭās ca śayitā bhūtale 'parāḥ // 21.108 ≈ L 206.12; H ii,60.11-12
 *parā vikīrṇahārāṅgā vibhraṣṭakuṇḍalānanāḥ /
 (deletion) r[a]natāśrayāḥ /⁽¹³⁾
 kāścīd bhujalatāpāśair upaguhya parasparam // 21.109 ≈ L 206.4-5; H ii,60.3
 kāścīd sakhīṃ yathāliṅgya prasuptā parivādinīm /
 kāścīd *paṭṭāvākṣṭāṃśā *nimīlitadṛśo 'parāḥ /
 ardhani[śā] ...(traces of deletion)... [tsa]kucitānanāḥ⁽¹⁴⁾ // 21.110

12. There is a long blank space here in the manuscript A, which appears to be the result of the deletion of 2 pādas (approximately 16 akṣaras) by the scribe of A.

13. Here in A there is also a blank space of 2 pāda that has been deleted, but only the last 5 letters remain.

14. In A some letters have also been deleted here, with only the first 3 akṣaras and the last 6

kāścīt prakīrṇakeśās ca vikīrṇakusumasrajaḥ /	
jaghanamuktavastrāś ca vibhraṣṭabhūṣaṇāśrayāḥ // 21.111	≈ L 206.4; H ii,60.2-3
aparā hrīvīyuktāś ca kṣiptāṅghrihastavigrahaḥ /	
animīlitakundābhani(deletion).... ⁽¹⁵⁾ // 21.112	≈ L 206.9; H ii,60.8
vivṛtāsyapuṭāḥ kā[139b]ścin madaghūrṇitalocanāḥ /	
kāścīd vivṛttasarvāṅgāḥ sravallālākulānanāḥ // 21.113	≈ L 206.5-7; H ii,60.4-5
kāścīt praghṛṣṭadantāś ca pralāpanirgatānanāḥ /	
saṃprakāśītaguhyāś ca kāścīd gatāsusaṃnibhāḥ // 21.114	≈ L 206.8; H ii,60.6-7
evaṃ tāḥ sakalā rāmā niśceṣṭāḥ parimohitāḥ /	
vikṛtā bhīṣaṇākārā mṛtāḥ pretālaye yathā // 21.115	≈ L 206.15-16; H ii,60.15-16
*sa tāḥ sarvā mṛtākārā abhīkṣya bhinnamānasaḥ /	
punaḥ paśyan mahacchabdair āhūya muhur ācarat // 21.116	
āhute 'pi mahacchabdair chandakena muhur muhuḥ /	
ekāpi tadravaṃ śrutvā naiva jāgartim āyayau // 21.117	
evaṃ sarvā viceṣṭās tā dṛṣṭvā sa chandakaḥ punaḥ /	
vīkṣya śaṅkaviṣaṇṇātmā manasaivaṃ vyacintayat // 21.118	
yad imāḥ sakalā rāmā nidrākrāntābhīmohitāḥ /	
evaṃ mayā samāhūte 'py ekāpi na samutthitā // 21.119	
nūnaṃ devānubhāvena sarvā etā pramohitāḥ /	
prasvāpanamahānidrā niśceṣṭā abhiśerate // 21.120	
iti niścītya saṃvignaś chandakaḥ sa viṣāditaḥ /	
svāmināṃ samupāsṛtya sāñjalir evam abravīt // 21.121	
nūnaṃ devānubhāvena sarvā etā pramohitāḥ /	
kṣaṇād dhi pratibudhyerann anusmṛtya tava priyāḥ // 21.122	
yadaitāḥ supriyāḥ kāntās tava bhāryā vinidritāḥ /	
tadā sarvāḥ samutthāya prāgaccheyur ihādhunā // 21.123	
sarvā api samālokyā sudṛṣābhivinodayan /	
bodhayitvā śubhe dharme prācārāya niyojayan // 21.124	
tatas tābhiḥ sahārakto yāvad yuvā pramoditāḥ /	
kulacaryāvratam dhṛtvā saṃcarasva gṛhe sukhe // 21.125	≈ L 212.5-7; H ii,76.19-21
īdṛcchrīśukhasaṃpattir durlabhā tribhaveṣv api /	
sarvair lokādhīpaś cāpi saṃprāptum abhivāñchyate // 21.126	

akṣaras remaining. Here in A, 5 or 6 akṣaras following ardhani(śā?) are also erased, leaving the space blank.

15. A has a blank space in pāda d by deletion by the scribe.

tvaṃ tv īdṛcchrīsukhāpannāḥ sampattīs tava daivataḥ /
 *sambhūtās tṛṇavat tyaktvā pravrajitūṃ samicchasi // 21.127
 sarve santaḥ pumāṃso hi mahacchrīsukhalālasāḥ /
 vanāśrame samāśritya pracaranti tapovratam // 21.128 ≈ L 211.11-13; H ii,76.1-3
 tvaṃ tu prāptāṃ śriyaṃ hitvā tapaś caritum icchasi /
 etanma[140a]hattarī lakṣmī kutra sampatsyate tvayā // 21.129 ≈ L 211.14-15; H ii,76.4-5
 rājyaṃ te pṛthivī sarvā sarve nṛpāś ca sevakāḥ /
 saptaratnāni te santi sampadaḥ śrībharādhikāḥ // 21.130 ≈ L 211.15-16; H ii,76.5-6
 hā yāḥ *striyaḥ sahasrās te sarvāḥ śrīratisaṃnibhāḥ /
 caturaśītisahasrās ca dāsyas te śaraṇāśritāḥ // 21.131 ≈ L 212.3-5; H ii,76.16-19
 prāsādanilayā rāmā vaijyayantasamuttamāḥ /
 sarvāṇy api ca bhojyāni santi te surasāni ca // 21.132
 sarvāṇy api suvastrāṇi divyālaṃkaraṇāṇy api /
 dravyāni santi sarvāṇi kiṃ nāsti te mahīpateḥ // 21.133
 īdṛśīr api sampattīs tyaktvā vrajitum icchasi /
 kim anyat tapasālabdhum icchasi sāmpratam punaḥ // 21.134
 yadi gantum samīcchā te saṃcaritūṃ vane vratam /
 yadā vṛddhās tadāśritya vane vratam caremahi // 21.135
 yāvad yuvā mahārāja tāvad rājye samāśritaḥ /
 yathākāmaṃ sukhaṃ bhuktvā kāntābhiḥ saha saṃpraman // 21.136
 dānaṃ dattvā prajā rakṣa kulavratam samācara /
 evaṃ cen naḥ sadā bhadraṃ sarvatrāpi bhaved dhruvam // 21.137
 iti tena sumānena chandakena nivāditam /
 śrutvā sarvārthasiddho 'sau punar evaṃ abhāṣata // 21.138
 chandakānekakalyāṇikāmā bhuktā mayā purā /
 kleśaduḥkhākārā duṣṭā jarā rogāntaduḥkhaḍāḥ // 21.139
 kāmahetor asaṃkhyeyās tāḍanabandhanādayāḥ /
 hastapādādichedādiduḥkhā bhuktā mayā purā // 21.140
 kāmārthe 'haṃ purāraktaḥ kleśavyākulamānasaḥ /
 agamyāni ca karmāṇi kṛtvācaram pramādataḥ // 21.141
 daśapāpābhisamrakto bhuktvā kāmam sadācaran /
 etatpāpābhiliptātmā kleśavyākulitendriyaḥ // 21.142
 bhūyo 'bhikāmasamraktaḥ saddharmāṇy api nindayan /
 dāruṇapāpakarmāṇi prakṛtvā prācaran bhava // 21.143
 etatpāpāir mahātīvraduḥkhāgnidāhitendriyaḥ /
 narakeṣv api sarvatra patito duḥkhabhuktavān // 21.144
 nānāduḥkhāgnisamtapto 'tyasahyavedanāhataḥ /
 anutāpābhitaptātmā tasthau vihatamānasaḥ // 21.145

tadā dhairyam samālambya sambuddham [140b] duḥkhipālakam /
 anusmṛtvā samādhāya prānamam sāñjalir muhuḥ // 21.146
 tato 'sau trijagannātho dṛṣṭvā mām karuṇādrṣā /
 puṇyakaraiḥ samuddhṛtya sampraiṣayaj jinālayam // 21.147
 tatrāham samupāśritya triratnaśaraṇam gataḥ /
 śuddhaśīlavratam dhṛtvā prācaram sarvadā śubham // 21.148
 etatpuṇyaviśuddhātmā śrutvā dharmam samāhitaḥ /
 saṅghānām samupasthityā dānam dattvā mudābhajam // 21.149
 tatas tatpuṇyaliptātmā pariśuddhatrimaṇḍalaḥ /
 bodhicittam samāsādyā bodhicaryām samācaram // 21.150
 etatpuṇyābhiśuddhātmā surālayagataḥ sadā /
 divyaśrīśukhasampattīr bhuktivācaram sadā śubhe // 21.151
 tathāpi tṛptitam naiva mano me bodhisamratam /
 tatas cyutvā hitam kartum martyaloke samācaram // 21.152
 tatra śreṣṭhikule janma samāsādyā samṛddhimān /
 dānam sadārthibhyaḥ [*dattvā] prācaram sarvadā śubhe // 21.153 ≈ L 215.6-11; H ii,86(vs.)46ab
 etatpuṇyavipākena punar gatvā surālaye /
 apsarobhiḥ sahārakto bhuktivā kāmam sadāramam // 21.154 ≈ L 215.12-15; H ii,86(vs.)46c
 tatrāpi tuṣitam naivam mano me bodhilālasam /
 tatas cyutvā punar martye hitam kartum mudācaram // 21.155 ≈ L 215.16-22; H ii,86-88(vss.)46d-47a
 tatra vaiśyakule janma labdhvā śrīsampadānvitaḥ /
 dattvā dānam sukham bhuktivā kāntābhiḥ saha prāramam // 21.156
 evam rājakule janma labdhvā mahatsamṛddhimān /
 rāmābhiḥ saha samrakto bhuktivāramam tathā sukham // 21.157
 tathā dvijakule cāpi labdhvā janma samṛddhimān /
 vrataḥ dhṛtvā sadā kāmam bhuktivā bhāryānvito 'ramam // 21.158
 sarvajātikule cāpi labdhvā janma sahasraśaḥ /
 dattvā dānam ratiḥ bhuktivā kāntābhiḥ saha prāramam // 21.159
 cakravartikule cāpi labdhvā janma sahasraśaḥ /
 ramaṇīratīsamrakto dānam dattvāramam sukham // 21.160
 tathāpi tṛptitam naiva mano me bodhilālasam /
 saddharmaguṇasambhogam eva bhoktum abhīpsate // 21.161
 sarvatrāpy aham āsādyā janmānekasahasraśaḥ /
 pramadābhiḥ sahāsakto dānam dattvāramam sukham // 21.162
 sarvalokādhīpānām ca kulajanmāny aneka[141a]śaḥ /
 labdhvā śrīśukhasampattīr bhujāno 'ham mudāramam // 21.163
 anekaśaḥ surendro 'pi bhūtvāpsarogaṇaiḥ saha /
 divyaśrīśukhasampattīr bhuktivā reme yathāsukham // 21.164

tathā yāmādhīpo bhūtvā bahudhā tuṣītādhipaḥ /
 nirmāṇaratirājāpi vaśavartīśvaro 'pi ca // 21.165
 divyāśrīśukhasampattīr bhuktvā reme yathecchayā /
 tatrāpi sukhitaṃ naiva mano me bodhilālasam // 21.166
 rūpadhātuṣu sarvatra jāto 'haṃ śāntamānasah /
 dhyānasukhāni bhuñjanaḥ sampreme 'nekaśo mudā // 21.167
 ārūpyādhipatiś cāpi bhūtvā māheśvarīśriyam /
 anekaśaḥ prabhuktvāpi samtuṣṭaṃ naiva me manaḥ // 21.168
 brahmādayo 'pi kāmārthe brāhmaṇā munayo 'pi ca /
 yatayo yoginaś cāpi paribhraṣṭā nipātitaḥ // 21.169
 viśvambharo hariś cāpi kāmārthe kleśitāśayaḥ /
 rāmā hṛtvā chalenāpi hatvā śātrūn nipātitaḥ // 21.170
 śivāpi hi mahārudraḥ kāmārthe kleśitāśayaḥ /
 nirdayo vairiṇo hatvācarad unmattitendriyaḥ // 21.171
 evaṃ lokādhipaḥ sarve kāmakleśapramattitaḥ /
 kuladharmaparibhraṣṭā narakeṣu nipātitaḥ // 21.172
 evaṃ sarve grahāś cāpi kāmakleśābhimāninaḥ /
 lajjādharmaparibhraṣṭāḥ pracaranti vilāpitaḥ // 21.173
 tathā tāraś ca siddhāś ca sādhyā vidyādhara api /
 gandharvāḥ kinnarā yakṣā guhyakā rākṣasā api // 21.174
 kumbhāṇḍā garuḍā nāgā daityā devāś ca mānavāḥ /
 kāmahetoḃ bhavāraktāḥ kleśavyākulamānasāḥ // 21.175
 kulācāraṃ parityajya nirlajjāmattamānasāḥ /
 viruddhā vighrahaṃ kṛtvā nipātitaḥ anekaśaḥ // 21.176
 rājānaḥ kṣatriyāś cāpi kāmakleśābhimānitaḥ /
 viruddhā vighrahaṃ kṛtvā mṛtā yātā yamālayam // 21.177
 mantriṇo 'pi tathāmātyā yoddhṛsainyāś ca sevakāḥ /
 kāmārthe svāminaḥ kārye yuddhaṃ kṛtvā nipātitaḥ // 21.178
 tathā vaiśyāś ca kāmārthe dravyātilālasāśayaḥ /
 divānīśāparīśrāntā prakurvate dhanārjanam // 21.179
 vaṇijaḥ sārthavāhāś ca kāmārthe dravyasādhane /
 mahodadhiṃ samuttīrya duḥkhaṃ bhuktvā [141b] bhramanty api // 21.180
 śīlpino 'pi tathā sarve kāmārthe dravyalālasāḥ /
 divānīśam aviśrāntaṃ karmaduḥkhāni bhuñjate // 21.181
 dāsāś ca dāsikāś cāpi kāmārthe dravyalālasāḥ /
 divānīśam aviśrāntaṃ nighnitaḥ karma kurvate // 21.182
 bhāravāhāś ca kāmārthe bhārākrāntāśrayāḥ sadā /
 aviśrāntaṃ mahadbhāraṃ pravahantaś calanti vai // 21.183

kṛṣṇikarmakarāś cāpi kāmārthe satatodyatāḥ /
 śītalatātapokrāntadehā duḥkhāni bhuñjate // 21.184
 evaṃ sarve mahānto 'pi kāmārthe pramadāvaśe /
 sthitvā tuṣṭakulācārāś ca nandadāsavat sadā // 21.185
 paśavaḥ pakṣiṇāś cāpi kṛmikiṭādiḥprāṇinaḥ /
 kāmārthe nighnitāḥ sarve mṛgā yātāś ca nārake // 21.186
 sarvatraidhātukāsīnāḥ kāmakleśāgnitāpitāḥ /
 kulācāravratam tyaktvā caranti duriteṣv api // 21.187
 evaṃ kāmo jagadduṣṭaḥ satyācāravratāntakaḥ /
 duḥkhahetuḥ pāpabhartā sarvasattvāśubhārthabhṛt // 21.188
 iti matvā mahāvijñāir yatibhir brahmacāribhiḥ /
 garhito nindito duṣṭaśārya iva vivarjitaḥ // 21.189
 bodhimārge pratiṣṭhāpya sarvān sattvān prabodhayan /
 ko hi kāmagaṇāraktaḥ pramadāśaraṇe sthitaḥ /
 bodhicaryāvrataṃ dhṛtvā samādhāya śubhe caret // 21.190
 bodhicaryāvratī kāmam tyaktvā brahmavihārādhṛk /
 sarvasattvahiṇiṃ kṛtvā samāhitaḥ samācaret // 21.191
 tataḥ sa syān mahābhijño bodhisattvaḥ sudhīr yatiḥ /
 arhan mārāgaṇāṃ jitvā sambodhiṃ samavāpnuyāt // 21.192
 tataḥ sarvatra lokaṣu saddharmaṃ saṃpracārayan /
 jagad dharmamayaṃ kṛtvā sunirvṛtiṃ samāpnuyāt // 21.193
 evaṃ sarve 'pi saṃbuddhāś tyaktvā kāmāśrayaṃ gṛham /
 pravrajitvā vane taptvā pariśuddhatrimaṇḍalāḥ // 21.194
 jitvā mārāgaṇān sarvān saṃprāpya bodhim uttamān /
 traidhātukeṣu lokaṣu dattvā saddharmadeśanām // 21.195
 jagad dharmamayaṃ kṛtvā saṃyātāḥ parinirvṛtim /
 aham api tathā sarvaṃ bhadraṃ kartuṃ samutsukaḥ [142a] // 21.196
 rājyaṃ kāmāśrayaṃ tyaktvā pravrajitvā vanāśrame /
 suduṣkaraṃ tapas taptvā mārasaṃghān vinirjayan // 21.197
 saṃboddhijñānam āśādhya saṃbuddhapadam āpnuyān /
 tridhātukeṣu lokaṣu saddharmaṃ saṃprakāśayan // 21.198
 bodhimārge pratiṣṭhāpya sarvān sattvān prabodhayan /
 sarvaṃ dharmamayaṃ kṛtvā nirvṛtiṃ prāptum utsahe /
 iti matvāśvam ānīya sahasā saṃpradehi me // 21.199
 ity evaṃ svāminādiṣṭam samākarnya sa chandakaḥ /
 bodhisattvaṃ tam ālokya punar evaṃ abhāṣata // 21.200
 svāmin satyaṃ samādiṣṭam bhavatā bodhivāñchinā /
 tathāpi śṛṇu rājendra hitārthaṃ te mayoditam // 21.201

yadi kāmasukhe vāñchā bhavato na hi vidyate /
 saddharma eva vāñchāpi tat karotu mayoditam // 21.202
 yāvad yuvā mahārāja divyātisundaro yuvā /
 tāvad rājyāśrame sthitvā bodhicaryāvrataṃ caran // 21.203
 sarvalokahitaṃ kṛtvā pālāya putravat prajāḥ /
 dattvā dānaṃ sukhaṃ bhuktvā saṃcarasva yatheccchayā // 21.204
 pitā bhavati vṛddhas ta ātmajo 'pi na vidyate /
 sahodaro 'pi te bhrātā kaścin naiva hi vidyate // 21.205
 iyadrājyasamṛddhās te śakrarddhipratispardhinīḥ /
 pitur ante 'tra ko rājā saṃpālāyed imāḥ prajāḥ // 21.206
 iti bhavān yuvā yāvat tāvad rājyāśrame sthitaḥ /
 dattvārthibhyo yathākāmaṃ prajārakṣāvrataṃ cara // 21.207
 yadā vṛddho bhavān svāmin pravrajitvā vanāśrame /
 municaryāvrataṃ dhṛtvā saṃcārasva samāhitaḥ // 21.208
 evaṃ cet te sadā bhadraṃ sarvatrāpi bhaved dhruvam /
 yāvad bhava sukhaṃ bhuktvā prānte yāyāḥ sunirvṛtim // 21.209
 ity ākhyātaṃ sudhīreṇa chandakena niśamya saḥ /
 bodhisattvo mahāsattvaḥ punar evaṃ abhāṣata // 21.210
 sādho yadi na vidyante bhayāny aṣṭau gṛhāśrame /
 sthitvā yathā tvayākhyātaṃ tathā caritum utsahe // 21.211 ≈ S ii,146.7-17; M ii,186.12-187.3
 yad ahaṃ sarvadā prauḍho naivaṃ syāṃ jīrṇitendriyaḥ /
 svārogyaṃ me sadā dehe nākramed ruk kadācana // 21.212
 mṛtyur na saṃbhavej jīvaṃ sadā neṣṭaviyogatā /
 sarvā imā ra[142b]mā kāntā bhāryā me na jarākramet // 21.213
 īdṛg māheśvarī sampan na *vinaśyet kadācana /
 sarveṣāṃ api sattvānāṃ kleśāgnipraśamo bhavet // 21.214
 ihāpi bodhim āsādyā yadi nirvṛtim āpnuyām /
 nāhaṃ rājyaṃ parityajya pravrajeya vanāśrame // 21.215
 sadā rājyāśrame sthitvā dattvārthibhyo yathepsitam /
 kulacaryāvrataṃ dhṛtvā saṃcaritum samutsahe // 21.216
 ity aṣṭau yo 'tra śaknoti saṃpradātuṃ vanāśrame /
 tasyāhaṃ śaraṇe sthitvā sadā sevitum utsahe // 21.217
 ity evaṃ svāminākhyātaṃ śrutvā sa chandako 'rudat /
 svāminaṃ taṃ samālokya punar evaṃ abhāṣata // 21.218
 ko hi na jarasākrāntaḥ kaś ca rogair na pīḍyate /
 kaś ca na mṛtyunā grastaḥ kasya neṣṭaviyogatā // 21.219
 ko hi na yuvatir jīrṇā kasya sampat sthīrā sadā /
 kasya kleśo 'bhiśānto 'pi ko bodhim āptavān gṛhe // 21.220

sarve brahmādayo devāḥ sarve lokādhipā api /
 jīrṇitāṅgā rujākṛāntāḥ kāle 'pi mṛtyunā drutāḥ // 21.221
 sarve 'pi prāṇino jñātibandhuśokāgnitāpitāḥ /
 sarveṣāṃ api sampattir ghanā iva kṣaṇasthirāḥ // 21.222
 sarve 'pi kleśino mattāḥ kulacaryābhimāninaḥ /
 yatibhir yogibhiś cāpi bodhiṃ prāptuṃ na śakyate // 21.223
 iti matvā yuvā yāvad rājyāśrame samāśrayan /
 bodhicaryāvratam dhṛtvā saṃcarasva yathāsukham // 21.224
 yadā vṛddhas tadā tyaktvā rājyāśramam vanāśrame /
 pravrajya saṃvaram dhṛtvā saṃcarasva samāhitaḥ // 21.225
 evaṃ cet te sadā bhadram mahānandam bhaved dhruvam /
 bodhiṃ cāpi samāsādyā sunirvṛtiṃ samāpnuyāḥ // 21.226
 iti taduktam ākarṇya bodhisattvo mahāmatiḥ /
 chandakam taṃ samālokyā punar evaṃ samādiśat // 21.227
 chandakāsau mahāraudro mṛtyuḥ kasya vaśe bhavet /
 akasmāt sahasāghrāya grasate hi surān api // 21.228
 tathā so 'timahākrūro hy akasmāt sahasāgataḥ /
 prāghrāya mām graset *tvāpi *sarvā *rāmā i[143a]mā api // 21.229
 tadāhaṃ kiṃ kariṣyāmi tvam cāpi kiṃ kariṣyasi /
 imāś ca sajanā rāmāḥ kiṃ kariṣyanti me tadā // 21.230
 sarvāḥ śokamahāduḥkhavahniḥ pradāhitāśrayāḥ /
 stambhitā iva *hasteṣu tvam cāhaṃ ca tathā khalu // 21.231
 iti matvāham ālokyā rājyāśrame samāśritaḥ /
 kulacaryāvratam dhṛtvā carituṃ na samutsahe // 21.232
 kiṃ tu sarvaṃ jagallokaṃ kleśāgniparidāhitam /
 duḥkhodadhinimajjantaṃ bhramantaṃ bhavakānane // 21.233
 avidyāndham janurvyādhiparāmṛtyubhayānvitam /
 kṣuttṛṣṇā*gniṣu saṃtaptam duṣṭāripariveṣṭitam // 21.234
 aśaraṇam anāśvāstam anātham aparāyaṇam /
 aparīṇāyakaṃ nīcam saddharmaguṇavarjitam // 21.235
 duḥkhitāṃs tān ahaṃ drṣṭvā kāruṇyadayitāśayaḥ /
 bodhayituṃ prayatnena saṃbodhiṃ prāptum utsahe // 21.236
 etaddhetor mayā dānam kiṃ na dattam yathepsitam /
 suśīlasaṃvaram dhṛtvā kiṃ na saṃcaritam vratam // 21.237
 ābhedite svadehe 'pi kutra na prakṛtā kṣamā /
 sattvahitārthadharmaṣu kiṃ na vīryeṇa sādhitam // 21.238
 dhyātvā saṃbodhicittena sarve kleśāś ca nirjitāḥ /
 prajñā saṃbodhisampacchrīr api saṃsādhitā mayā // 21.239

tad idānīm jagallokaṃ bodhayitvā prayatnataḥ /
 bodhimārge pratiṣṭhāpya saṃcārayitum utsahe // 21.240
 iti rājyāśramaṃ tyaktvā pravrajitvā jināśrame /
 bodhicaryāvratam dhṛtvā jītvā sarvāṃś ca tīrthikān // 21.241
 sarvān māragaṇāṃś cāpi nirjitya nirmalendriyaḥ /
 arhan sambodhim āsādy sambuddhapadam āptavān // 21.242
 traidhātukeṣu lokeṣu saddharmaṃ saṃprakāśayan /
 jagad dharmamayaṃ kṛtvā nirvṛtiṃ prāptum utsahe // 21.243
 tad etatsamayaṃ prāptam yaṃ me saṃbhāvitam sadā /
 tad ahaṃ sāmpratam nūnam pravrajāmi jagaddhite // 21.244
 yadi te 'sti mayi snehaḥ saddharmaṃ vā yadicchasi /
 kanthakāśvam upānīya sahasā saṃpradehi me // 21.245
 ity evaṃ [143b] praguṇādiṣṭam niśamya chandako rudan /
 sāñjalis taṃ prabhuṃ natvā saṃpaśyann evaṃ abravīt // 21.246
 yadi te niścayaḥ svāmin pravrajitum jagaddhite /
 prātaḥ pitur mukhaṃ dṛṣtvā prāpyānujñāṃ pramoditaḥ // 21.247
 mātus cāpi mukhaṃ dṛṣtvā bhāryā yās ca prasādayan /
 svastyayanavidhiṃ dhṛtvā mahotsāhair mudā vraja // 21.248
 ity uktaṃ chandakenaitad bodhisattvo niśamya saḥ /
 sahāyaṃ chandakaṃ taṃ ca saṃpaśyann evaṃ ādiśat // 21.249
 katham evaṃ vrajeyāhaṃ yad dṛṣtvā mām pitā prabhuḥ /
 sabalaḥ sahasā dhṛtvā nivārayet prayatnataḥ // 21.250
 mātā sā gautamī cāpi bhāryā yaśodharāpi ca /
 mām dṛṣtvā sahasāliṅgya vārayetāṃ prayatnataḥ // 21.251
 evaṃ sarvā imā bhāryā saṃprasthitaṃ vilokya mām /
 sneharāgāgnidagdhāṅgā gaccheyur vā yamālayam // 21.252
 evaṃ sarve 'pi lokāś ca niṣkramantaṃ vilokya mām /
 sahasāvṛtya mārge 'pi kuryur vighnāni sarvataḥ // 21.253
 tadā kathaṃ vrajeyāhaṃ pravrajitum jagaddhite /
 rājādisarvaloko 'pi nivārayet prayatnataḥ // 21.254
 iti matvā niśīthe 'haṃ sarvaloke 'tinidrite /
 svayam evāśvam āruhya gantum icchāmi sāmpratam // 21.255
 yadi te 'sti mayi snehaḥ sarvārthabodhisādhini /
 tad aśvaṃ samupānīya sahasā saṃpradehi me // 21.256
 yadi cātra tvayānītaṃ sahasāhaṃ svayaṃ gataḥ /
 kanthakaṃ taṃ samāruhya nūnam vrajema sāmpratam // 21.257
 ity uktaṃ bodhisattvena śrutveśvaro 'mbarāśritaḥ /
 bodhisattvaṃ taṃ ālokya praśaṃsann evaṃ ādiśat // 21.258

dhanyo 'si tvam mahāsattva yathā tvam samprabhāṣase /
 tathā satyaṃ bhaven nūnaṃ tad idānīm viniṣkrama // 21.259
 maheśvaro 'pi tac chrutvā gagaṇasthaḥ pramoditaḥ /
 bodhisattvaṃ tam āmantrya sampaśyann evam ādiśat // 21.260
 niṣkramasva mahāsattva sāmpratam mā vilambathāḥ /
 sarvasattvahitārthāya dharmāmṛtaṃ pravarṣaya // 21.261
 tathā brahmāpi tac chrutvā [144a] gagane samupāśritaḥ /
 bodhisattvaṃ tam āmantrya sampaśyann evam ādiśat // 21.262
 abhiniṣkrama sarvajña saṃsidhyet te samīhitam /
 tad idānīm samāgaccha bodhivṛkṣaṃ samāśraya // 21.263
 yadi ca niṣkramas tvam hi cakravartinarādhīpaḥ /
 sarvadharmādhipo rājā mahīśvaro bhaver api // 21.264
 tathā śuddhādhivāsās ca devaputrā niśamya tat /
 bodhisattvaṃ tam āmantrya samālokyaim evam ādiśat // 21.265
 kāle tvam tuṣitāc cyutvā mātur garbhaṃ samāviśaḥ /
 kāle jāto 'si sarvajña tathā kāle 'bhiniṣkrama // 21.266
 bhavaddharmāmṛtaṃ pātum abhikāṅkṣanti sāmārāḥ /
 sarve lokā yathā meghaṃ durbhikṣe paritāpitāḥ // 21.267
 tad atra sahasā gatvā drumarājam upāśrayan /
 jītvā māragaṇān sarvān samprāpya bodhim uttamām // 21.268
 saddharmaṃ samupādiśya traidhātubhuvaneṣv api /
 sadā dharmamayaṃ kṛtvā sunirvṛtiṃ samāpnuhi // 21.269
 tadākāśagatā devās tan niśamyābhinanditāḥ /
 puṣpavṛṣṭiḥ samutsrjya praṇatā evam abruvan // 21.270
 jaya te sidhyate kāryaṃ yathā tvayā samīhitam /
 sarvathā tat samālokya pravrajyasva jagaddhite // 21.271
 na te 'bhirajyate cittaṃ viṣayeṣv api sarvadā /
 sarvasattvahiṣṭaṃ kartum saddharmam eva vāñchati // 21.272
 yadarthe bodhisambhāram abhipūrya yathākramam /
 tat sarvam iha te sidhyet tat sahasābhinīṣkrama // 21.273
 ity ebhir amaraiḥ khyātaṃ bodhisattvo niśamya saḥ /
 tān sarvān khāśritān devān vīkṣya saṃharṣitāśayaḥ // 21.274
 niṣkramyasamayaṃ cāpi pariññātvā samutsukaḥ /
 chandakaṃ taṃ sahāyaṃ ca samāmantryābhībodhayat // 21.275 ≈ L 217.10; H ii,92.12-13
 darśayaṃs tān surān sarvān gagaṇasamupāśritān /
 suprasannamukhāmbhojaḥ sampaśyann evam abravīt // 21.276
 paśya chandaka devān me saṃcodayitum āgatān /
 tan mā khedaya me cittaṃ chandaka sāmpratam punaḥ // 21.277 ≈ L 217.10-11; H ii,92.13

dehi me sahasāśvaṃ tvaṃ yadi saddharmam icchasi /	
yady atra ku[144b]ruṣe vighnaṃ tvaṃ pāpair abhilipsyate // 21.278	≈ L 217.11; H ii,92.13-14
yady atra sahasānīya dīyate me turāṅgamaḥ /	
bhadraśrīsadguṇādhāraṃ saddharmaṃ samavāpnuyāḥ // 21.279	
iti taduktam ākarṇya śāntamatiḥ surātmajaḥ /	
lalitavyūhābhidhaś cāpi viditvā tasya niścayam // 21.280	
bhūyaḥ prasvāpanaṃ kṛtvā sarveṣāṃ puravāsinām /	
antardhāpya janālāpaṃ cakratur nirjane yathā // 21.281	≈ L 217.12-15; H ii,92.15-18
naiṣkramyasamayaṃ matvā bodhisattvasya sānugāḥ /	
sarvalokādhīpās tatra nagare samupācaran // 21.282	
divyapūjopacārāṇi dhṛtvā svasvadigāgatāḥ /	
niṣkramantaṃ mahāsattvaṃ pūjayitum upācaran // 21.283	
tatra sarve 'pi te lokapālāḥ svasvajanaḥ saha /	
svasvadikkam upāśritya tasthuḥ sājñalayo natāḥ // 21.284	
gandharvāḥ koṭisāhasrāḥ saṅgītisampravādanaḥ /	
mahotsāhaṃ prakurvantaḥ prācyāṃ diśi samāśrayan // 21.285	≈ L 217.16-19; H ii,92.19-94.2
kumbhāṇḍāḥ koṭīlakṣāś ca dhṛtvā sarvamaṇisrajaḥ /	
divyāmbupūrṇakumbhāś ca dakṣiṇāṃ diśam āśrayan // 21.286	≈ L 217.20-218.3; H ii,94.3-7
nāgakōṭisahasrāṇi dhṛtvā nānāmaṇisrajaḥ /	
sugandhipuṣpavarṣāṇi kṛtvāśrayaṃś ca paścimām // 21.287	≈ L 218.4-8; H ii,94.8-13
yakṣakoṭisahasrāṇi jyotīrasamaṇisrajaḥ /	
dhṛtvā sarvāstraśastrāṃś ca kauberīm diśam āśrayan // 21.288	≈ L 218.9-14; H ii,94.14-20
śakro 'pi tridaśaiḥ sarvaiḥ pūjāṅgabhūṣaṇāny api /	
chattradhvajapatākāś ca grhītvāntaram āśrayat // 21.289	≈ L 218.15-18; H ii,94.21-96.4
yāmāś ca tuṣitāś cāpi nirmāṇaratayo 'pi ca /	
vaśavartīśvarāś cāpi sarve devāḥ samāgatāḥ // 21.290	≈ L 219.7-8; H ii,98(vs.)54
tathā brahmādayaḥ sarva ṛṣayo brahmacārīṇaḥ /	
niryātaṃ taṃ mahāsattvaṃ pūjayitum samutsukāḥ // 21.291	
divyapūjopacārāṇi grhītvā sahasāgatāḥ /	
antarīkṣaṃ samāśritya tasthuḥ saṃnanditendriyāḥ // 21.292	
vajrapāṇyādayo vīrā yogino guhyakā api /	
śiddhāḥ sādhyā grahāś tārā vidyādharaś ca kinnarāḥ // 21.293	
garuḍā rākṣasā daityāś tathā[145a]nye 'pi maharddhikāḥ /	
tasya niṣkramato mārge pūjayitum upāśrayan // 21.294	
tadā puṣyābhidhā tārā bhūtvā śrīsannibhākṛtiḥ /	
bodhisattvasya purata upasthitvaivam abravīt // 21.295	≈ L 219.19-20; H ii,100(vs.)60
sarvārthasiddha sarvārthāḥ sidhyante tava sāmpratam /	
puṣyarkṣo 'pi puras te 'tra tad gantuṃ samayo 'dhunā // 21.296	≈ L 219.21; H ii,100(vs.)61ab

aham api tvayā sārdham prācaritum samutsahe /	
yathā sadā pratijñātaṃ tathā sampratipūryatām // 21.297	≈ L 219.22; H ii,100(vs.)61cd
duḥkhaire hataṃ jagat sarvaṃ tārayāśu bhavadadhim /	
naiṣkramyasamayaṃ paśya sāmpratam samupasthitam // 21.298	≈ L 220.1-2; H ii,100(vs.)62
trāyastriṃśāḥ surāḥ sarve lokapālās ca sānugāḥ /	
sarve grahāḥ satārās ca sarve vīrās ca guhyakāḥ // 21.299	
gandharvāḥ kinnarā yakṣāḥ sarve vidyādhara api /	
kumbhāṇḍā rākṣasā nāgā garuḍā dānavā api // 21.300	
brahmādimunayaś cāpi mahāvijñā maharddhikāḥ /	
sarvatra samupāgatya gagane samupāśritāḥ // 21.301	≈ L 220.3-4; H ii,102(vs.)63
sarvalokāḥ prasuptās te ye pure 'tra nivāsītāḥ /	
hastyādivāhanās cāpi sarve 'pi paśupakṣiṇaḥ // 21.302	≈ L 220.5-8; H ii,102(vs.)64
rājā rājakumārās ca sarve śākyās ca mantriṇaḥ /	
amātyāḥ sainyabhṛtyās ca sarve paurās ca sevakāḥ // 21.303	≈ L 220.9-12; H ii,102(vs.)65
prasvāpanamahānidrākrāntendriyāḥ pramohitāḥ /	
eko 'py atra na jāgati sarve mṛtā ivāsthitāḥ // 21.304	
tad asau samayaḥ prāpto yaḥ sadāpy abhivāñchyate /	
tad idānīm samālokya pravraja trījagaddhite // 21.305	
iti taduktam ākarṇya bodhisattvo 'bhibodhitāḥ /	
chandakaṃ samupāmantrya saṃpaśyann evam ādiśat // 21.306	≈ L 220.13-14; H ii,104(vs.)66ab
chandakedaṃ samākhyātaṃ devais tam āśrutaṃ tvayā /	
tad aśvaṃ sahasānīya dehi me bodhisādhane // 21.307	≈ L 220.15; H ii,104(vs.)66c
mā kṛthā atra me vighnaṃ yadi saddharmam icchasi /	
yan me suhṛt sahāyo 'si tat kuruṣva hitodyamam // 21.308	≈ L 220.16; H ii,104(vs.)66d
ity evaṃ prabhuṇādiṣṭaṃ śrutvā sa chandako rudan /	
bodhisattvaṃ samālokya niḥśvasyaiva[145b]m abhāṣata // 21.309	≈ L 220.17; H ii,104(vs.)67a
samayañño bhavān svāmi tad akāle kuha vrajeḥ /	
dvārā hi pithitāḥ sarvās tat katham niṣkrameḥ kutaḥ // 21.310	≈ L 220.18-20; H ii,104(vs.)67bcd
iti tenodite śakro dvārāḥ sarvā dṛḍhārgalāḥ /	
kapāṭāḥ sahasodghātya vimuktāḥ samadarśayat // 21.311	≈ L 220.21; H ii,104(vs.)68a
tā dṛṣṭvā chandako duḥkhagaladbāṣpāvilānanaḥ /	
idānīm kim aham kuryām ity uktvā nyapatad bhuvi // 21.312	≈ L 220.22; H ii,104(vs.)68b
tataḥ svayaṃ samutthāya saṃpaśyann ambare surān /	
vismayavyākulasvānto vilalāpaivam unmukhaḥ // 21.313	
hā dhig mām kiṃsahāyo 'smi kuha dhāvāmi sāmpratam /	
svāminā yat samādiṣṭaṃ samdhāritum na śakyate // 21.314	≈ L 221.1-2; H ii,106(vs.)68cd
sā caturaṅginī senā kiṃ kuryād balavaty api /	
rājā ca mantriṇo 'mātyā naiva budhyanti ke cana // 21.315	≈ L 221.3-4; H ii,106(vs.)69ab

sarve śākyagaṇās cāpi sarvāḥ striyo 'pi sātmaṇāḥ /	
prasvāpanamahānidrākṛāntendriyāḥ prasuptitāḥ // 21.316	≈ L 221.5; H ii,106(vs.)69c
nūnaṃ gacchaty ayaṃ svāmī sidhyate 'sya samīhitam /	
trāyastriṃśāḥ surāḥ sarve pūjārthaṃ samupāgatāḥ // 21.317	≈ L 221.6; H ii,106(vs.)69d
tac chrutvā te surāḥ sarve brahmaśakṛādayo 'pi ca /	
chandakaṃ taṃ samālokyā samāmantryaivam abruvan // 21.318	≈ L 221.7; H ii,106(vs.)70a
chandaka mā kṛthā vighnaṃ sahasāśvaṃ samarpaya /	
nūnam eṣa mahāsattvaḥ pravrajat trijagaddhite // 21.319	≈ L 221.8; H ii,106(vs.)70b
paśya chandaka divyābhā gagane samprasāritā /	
bodhisattvā asaṃkhyeyā asya pūjārthaṃ āgatāḥ // 21.320	≈ L 221.11-12; H ii,106(vs.)71ab
paśyendraṃ sabalaṃ dvāre samsthitam apsaronvitam /	
trāyastriṃśās ca sarve 'sya pūjārthaṃ khe samāgatāḥ // 21.321	≈ L 221.13; H ii,108(vs.)71c
sarve lokādhipās cāpi sasainyabalavāhanāḥ /	
daityās ca rākṣasās cāsyā pūjārthaṃ gagane sthitāḥ // 21.322	≈ L 221.14; H ii,108(vs.)71d
brahmādimunayaś cāpi yatayo 'pi maharddhikāḥ /	
yogino 'py asya bhadrārthaṃ antarīkṣasamāśritāḥ // 21.323	
gandharvāḥ kinnarā yakṣā vidyādharās ca guhyakāḥ /	
kumbhāṇḍā garuḍā nāgāḥ pūjārthe 'sya kha āśritāḥ // 21.324	
evaṃ sarve 'pi saṃbuddhā daśadikṣu samāśritāḥ /	
bodhisattvās ca bhadrārthaṃ paśya[146a]nti sudṛśā mudā // 21.325	
tan mā khedaya bhūyas tvaṃ bodhisattvam imaṃ gurum /	
sahasāśvam upāniya dattvāsmāi dharmam āpnuhi // 21.326	≈ L 221.8; H ii,106(vs.)70b
ity ādiṣṭaṃ suraiḥ śrutvā chandakaḥ sa prabodhitaḥ /	
tatheti saṃpratiśrutyā kanthakāntikam ācarat // 21.327	
tatra sa chandako dṛṣṭvā tam aśvaṃ kanthakaṃ rudan /	
niḥśvasyābhimukhaṃ paśyaṃś cirād evam abhāṣata // 21.328	≈ L 221.15; H ii,108(vs.)72a
kanthaka tvaṃ vijānīhi yad ayaṃ trijagaddhite /	
svāmī rājyaṃ parityajya pravrajitum abhīpsati // 21.329	≈ L 221.16; H ii,108(vs.)72b
tad ehi sahasā vāhya svāminaṃ trijagadgurum /	
sarvadevagaṇaiḥ sārḍhaṃ caran nayer vanāśrame // 21.330	≈ L 221.18; H ii,108(vs.)72d
ity ukṭvā chandako dhṛtvā tam aśvaṃ kanthakaṃ rudan /	
antike samupāsthāpya svāmina evam abravīt // 21.331	
svāminn eṣa sujāto 'śva āgacchati prasīdatu /	
gacchatu trijagadbhadre saṃsidhyatu samīhitam // 21.332	≈ L 221.19-20; H ii,108(vs.)73ab
sarve vighnakarā duṣṭā vilayaṃ yāntu sarvataḥ /	
jayaśrīr bhadrāsiddhiś ca bhavatāṃ bhavato 'nuge // 21.333	≈ L 221.21-22; H ii,108(vs.)73cd
iti tenodite 'śvena kanthakena sucetasā /	
parimuktaṃ mahārāvaṃ rājādilokabodhane // 21.334	

tanmahoccaiḥ svareṇāpi naiva kaścit prabodhitaḥ /	
tadā so 'śvaḥ samālokya svāminam samupācarat // 21.335	
tam aśvam samupāyātam bodhisattvaḥ samīkṣya saḥ /	
samutthāya samāroddhum saṃpaśyan samupācarat // 21.336	
tadā sābdhinagā bhūmiḥ sarvā prakṣubhitācalat /	
puṣpavṛṣṭim pramuñcantaḥ sarve devā nanandire // 21.337	≈ L 222.1; H ii,108(vs.)74a
tadā sarvārthasiddhas tam aśvam pūrṇendusaṃnibham /	
samāruhya mudā svāntaḥpurāt saṃprasthito 'carat // 21.338	≈ L 222.2; H ii,110(vs.)74b
tatra caturmahārājā kanthakasya catuḥpadaḥ /	
grhītvā tam mahāsattvam prācārayat svamandirāt // 21.339	≈ L 222.3; H ii,110(vs.)74c
tataḥ samprasannātmābhiniṣkramya svamandirāt /	
puram pradakṣiṇīkṛtya prācarād gopurād bahiḥ // 21.340	
tatra tam samupāyātam dṛṣṭvā śakro 'bhimoditaḥ /	
abhyarcya purato mārgam saṃdarśayan mudācarat // 21.341	≈ L 222.4; H ii,110(vs.)74d
brahmāpi tam samāyā[146b]tam samīkṣya saṃpramoditaḥ /	
bhadrāśtutibhiḥ stutvā purataḥ prācarat pathi // 21.342	
niṣkramantaṃ tam ālokya devatā nagarāśrayā /	
sahasānuprasaṃsṛtya vilapanty evam abravīt // 21.343	≈ L 222.9-10; H ii,110(vs.)76
bho narendra mahāsattva bhadrāśīsadguṇāspadam /	
cakravartikulam tyaktvā niśīthe vrajase kuha // 21.344	
tvayedam nagaram ramyam rahitam nābhiśobhate /	
katham atrāham āśritya careyam sāmpratam sukham // 21.345	≈ L 222.11-12; H ii,110(vs.)77
nāntaḥpure sadotsāham saṃgītimaṅgalāravam /	
śroṣyāmi pakṣiṇām cāpi saṃrāvāṇi kadācana // 21.346	≈ L 222.13-14; H ii,112(vs.)78
bhavato darśanam bhūyo durlabham prāpsyate kuha /	
īdṛk sampatsukham bhuktvā kim anyat sukham āpsyasi // 21.347	≈ L 222.15-16; H ii,112(vs.)79
trāyastriṃśaḥ surāś cāpi samāgatyeḥ sarvadā /	
bhavato dharmam ākarṇya mudābhyarcyācarams tvayi // 21.348	
tvayātra nagare tyakte ko devaḥ samupācaret /	
sarvair lokādhipaiś cāpi nātra saṃdrakṣyate tathā // 21.349	≈ L 222.17; H ii,112(vs.)80b
sarvabhūpādhirājendravaṃśo vicchidyate 'dhunā /	
sarveṣām api śākyānām abhimāno vinaśyate // 21.350	≈ L 222.21; H ii,112(vs.)82
yat tam samīkṣya bhūmīndraś cakravartī nṛpo bhavet /	
ity ākhyātam nimittajñair bhavati tan mṛṣā vacaḥ // 21.351	≈ L 222.19-20; H ii,112(vs.)81
aham api tvayā sārddham samāyātum samutsahe /	
tan mām dṛṣṭvā kṛpādṛṣṭyā tatrābhinandum arhasi // 21.352	≈ L 223.1-2; H ii,114(vs.)83
idaṃ divyapurākāram tyaktvā gantum kuhecchasi /	
divyaśrīśobhitaṃ ramyam paśyeyam nagarottamam // 21.353	

prātar dṛṣṭvā mahārājaṃ janakaṃ mātaraṃ tathā /
 yaśodharāṃ satīm cāpi samālokyā samācara // 21.354
 etāḥ striyo 'pi te bhāryāḥ satyadharmānucārikāḥ /
 katham tyaktā nirutsāhī pravrajitūṃ tvam icchasi // 21.355
 yadi gantūṃ samicchā te bodhiṃ prāptūṃ jagaddhite /
 dṛṣṭvā sarvāḥ subhadrāṅgā bodhayitvā samācara // 21.356
 evaṃ me vacanaṃ kṛtvā gacchasi cej jagaddhite /
 pitror api ca bhāryāṇāṃ mahānandasukhaṃ bhavet // 21.357
 tavāpi ca mahānandasukhaṃ śrīmaṅgalottamam /
 kāryasi[147a]ddhir bhaven nūnaṃ trilokahitasādhane // 21.358
 iti taduktam ākarṇya bodhisattvo mahāmatih /
 devatāṃ tām purādhīnāṃ saṃpaśyann evaṃ ādiśat // 21.359 ≈ L 223.3; H ii,114(vs.)84ab
 nātrāhaṃ devate tāvad draṣṭum api samutsahe /
 yāvan na prāpyate bodhis trailokyabhadrasādhani // 21.360 ≈ L 223.4; H ii,114(vs.)84cd
 yadā saṃprāpyate bodhis tadāhaṃ prācarann iha /
 saddharmāmṛtavarṣāṇi kartūṃ samāvrajeya hi // 21.361 ≈ L 223.5-6; H ii,114(vs.)85
 gaccha tvam devate lokān saṃpālya pura āśraye /
 saṃbuddhapadam āsādyā samāyāsyāmy ahaṃ dhruvam // 21.362
 ity evaṃ bodhisattvena samādiṣṭaṃ niśamya sā /
 devatā taṃ mahāsattvaṃ samālokyāivam abravīt // 21.363
 tad atra kiṃ vadeyāhaṃ gaccha te bhavatāṃ śubham /
 tavājñāṃ śīrasāvāhya gamiṣyāmi svam ālayam // 21.364
 iti nivedya sā devī bodhisattvaṃ maheśvaram /
 samīkṣya sāñjalir natvā śanaiḥ svālayam āviśat // 21.365
 tato 'sau trijagadbhartā bodhisattvaḥ prabhāṃ sṛjan /
 niṣkramya pura ākāśe mahotsāhaiḥ samācarat // 21.366 ≈ L 223.7-8; H ii,116(vs.)86ab
 tatirāvataśuṇḍāyāṃ kūṭāgāreṣu saṃsthitāḥ /
 saṃgītīnṛtyasaṃcāraṃ kṛtvāpsarogaṇā mudā // 21.367
 bodhisattvaṃ samāyātāṃ dṛṣṭvā saṃharṣitāśayāḥ /
 prābhyarcya tuṣṭuvur evaṃ natvā sāñjalayo mudā // 21.368 ≈ L 223.8-10; H ii,116(vs.)86bcd
 eṣa śrīśadguṇādhāro bodhisattvo jagaddhite /
 saṃbodhipraṇidhānena dattvā dānaṃ yathepsitam // 21.369 ≈ L 223.11-12; H ii,116(vs.)87ab
 evaṃ śīlakṣamāvīryadhyānapāramitākramāt /
 suśīlapariśuddhātmā caturbrahmavihārikāḥ // 21.370 ≈ L 223.13-14; H ii,116(vs.)87cd
 jītenḍriyaḥ samācāraś caritvā poṣadhaṃ vratam /
 śānticaryāviśuddhātmā sarvasattvahitāśayaḥ // 21.371 ≈ L 223.15-16; H ii,116(vs.)88ab
 svaparātmasamācāro niḥkrodho nirmalendriyaḥ /
 mahāvīryavratāṃ dhṛtvā sarvasattvahitārthabhṛt // 21.372 ≈ L 223.17-18; H ii,116(vs.)88cd

avikhinnāśayo duṣṭāñ jītvā saddharmasādhakaḥ /	
kleśārīn durjayāñ jītvā parīsuḍḍhatrimaṇḍalaḥ // 21.373	≈ L 223.19-20; H ii,116(vs.)89ab
dhyātvā saṃbodhicittena samādhisukham āptavān /	
asaṅgacitta ātmajñāḥ prajñābhipāram āgataḥ // 21.374	≈ L 223.21-22; H ii,116(vs.)89cd
sarvajña[147b]jñānasadratanabhadraśrīsadguṇarddhimān /	
sarvasaṃbodhanābhijñāḥ sarvopāyavicaḥṣaṇaḥ // 21.375	
sarvasattvāhitādhānabodhipraṇihitāśayaḥ /	
duṣṭamārābhisaṃhāramahābalasaṃrddhimān // 21.376	
saddharmajñānasadratanāśrīmatkāntivirocanaḥ /	
sarvalokādhirājendraḥ sarvasattvaśivārthabhṛt // 21.377	
daśabhūmīśvaro nāthaḥ sarvavidyāguṇādhīpaḥ /	
nūnam eṣa mahāsattvo bodhisattvo maharddhikaḥ // 21.378	
pravrajyāsaṃvaram dhṛtvā sarvān ṛṣīn vinirjayan /	
tapasā duṣkareṇāpi jītvā sarvāṃs tapasvinaḥ // 21.379	
niḥkleśo 'rhan viśuddhātmā bodhicaryā*bhipūraḥ /	
jītvā māragaṇān duṣṭān saṃbodhiṃ samavāpnuyāt // 21.380	
tato 'yaṃ sugato buddhaḥ sarvajño 'rhan vināyakaḥ /	
sarvavidyādhīpaḥ śāstā dharmarājo munīśvaraḥ /	
mahābhijño jagannāthaḥ tathāgato bhaved api // 21.381	
tataḥ sarvatra lokeṣu saddharmaṃ saṃprakāśayan /	
svadehasukṛtābhābhīḥ śodhayitvā samantataḥ // 21.382	
sarvān sattvān samuddhṛtya bodhayitvā prayatnataḥ /	
bodhimārge pratiṣṭhāpya prācārayet sadā śubham // 21.383	
evaṃ bhādramayam kṛtvā sarvatra bhuvaneṣv api /	
samāpya saugataṃ kāryam tato nirvṛtim āpnuyāt // 21.384	
tenāyam trijagannāthaḥ śaraṇyo bhayanāśakaḥ /	
dīpo 'vidyātamovyāptagatīnām api sadgatiḥ // 21.385	≈ L 224.5; H ii,118(vs.)91a
layano vairibhir duṣṭair upadrute nirāśrame /	
roginām vaidyarājo 'yaṃ dvīpaḥ sarvasukhāśrayaḥ // 21.386	≈ L 224.6; H ii,118(vs.)91b
rājñām dharmādhipo rājā sahasrākṣo mahendravat /	
sarvaśāstrādhipaḥ śāstā brahmeva brahmacāriṇām // 21.387	≈ L 224.7-8; H ii,118(vs.)91cd
prājñāḥ śūro mahādhīraḥ sarvavādīpramardakaḥ /	
duṣṭatīrthikasamhartā mṛtānām api keśarī // 21.388	≈ L 224.9-11; H ii,118(vs.)92abc
suprasannāśrayo dāntacitto dhīro gajendravat /	
sarvasaṅghādhiprādhānyo gogaṇānām yatharṣabhaḥ // 21.389	≈ L 224.11-12; H ii,118(vs.)92cd
kleśāgnitāpadagdhanām prāhlādakṛc chuddhāṃśuvat /	
kāmamohatamohantā sahasraraśmibhāsvaraḥ // 21.390	≈ L 224.13-14; H ii,118(vs.)93ab
māyādharmarajo'liptaḥ paṅkaiḥ padmam ivāmbujam /	

aprakampyo yathā merur aśoṣyaḥ [148a] sāgaro yathā // 21.391 ≈ L 224.15-16; H ii,118(vs.)93cd
 sarvasattvopajīvyo 'yaṃ vasaṃdharā mahī yathā /
 tathāyaṃ sarvasattvānāṃ sanmitraḥ satsukhārthabhṛt // 21.392 ≈ L 224.16; H ii,118(vs.)93d
 eṣa ratnākaro 'kṣobhyo dharmasrīsadguṇārthabhṛt /
 viśuddhaśīlasaurabhyapavāhako 'nilo yathā // 21.393 ≈ L 224.17; H ii,118(vs.)93e
 kleśamārān dahed eṣa *skandhamārān vighātayet /
 mardayed devamārāṃś ca mṛtyumārāṃś ca nirjayet // 21.394 ≈ L 224.18-19; H ii,118(vs.)94ab
 eṣa śrīmān mahāsārthavāho dharmārthasaṃbharāḥ /
 kupathaprasthitānāṃ hi sanmārgadeśako bhavet // 21.395 ≈ L 224.20-21; H ii,118(vs.)94cd
 āśu niḥkleśasuddhātmā brahmacārī munīśvaraḥ /
 sarvajña 'rhan mahābuddho jino vināyako bhavet // 21.396 ≈ L 225.1-2; H ii,120(vs.)95ab
 saṃpratāṃ sarvalokeṣu sarve mārā viśāditāḥ /
 saṃtrāsakampitātmānas tiṣṭheyuḥ parīśaṅkitāḥ // 21.397
 saddharmāmṛtavarṣāṇi pravarṣayan samantataḥ /
 jagat sarvaṃ saṃtuṣṭaṃ nūnam eṣo 'bhinandayet // 21.398
 nūnaṃ sarvatra lokaṣu bhadraśrīsadguṇānvitam /
 jagad dharmamayāṃ sarvaṃ idānīm syāt sadā dhruvam // 21.399
 evaṃ stutvā jagannāthaṃ yat puṇyaṃ no 'tra vidyate /
 etatpuṇyavipākena vayaṃ sarve vikalpakāḥ // 21.400 ≈ L 225.3-4; H ii,120(vs.)95cd
 śuddhaśīlasamācārā niḥkleśā vimalendriyāḥ /
 bodhicaryāvrataṃ dhṛtvā saṃcaranto jagaddhite // 21.401
 asya trailokanāthasya śaraṇe samupasthitāḥ /
 saṃbodhijñānam āsādhya bhavema śrīguṇākaraḥ // 21.402
 evaṃ stutvā mahāsattvaṃ sarvās tā apsarogaṇāḥ /
 divyapūjopacārais taṃ samabhyarcya praṇamya ca // 21.403
 saṃgītīnṛtyasaṃcāraiḥ prakurvantyo mahotsavam /
 samālokya muhur natvā taṃ mudā prācaran punaḥ // 21.404
 evaṃ brahmāmarendrāditrāyatrimśāḥ surā api /
 sarvalokādhipās cāpi taṃ abhyarcya mudācaran // 21.405
 gandharvā api sarve taṃ samabhyarcya pramoditāḥ /
 saṃgītīnṛtyaprotsāhaṃ prakurvantyo mudācaran // 21.406
 kinnarā api sarve taṃ samabhyarcya pramoditāḥ /
 tūryasaṃgītisaṃcāraṃ prakurvantaḥ puro 'caran // 21.407
 yakṣā api ca sarve taṃ samabhyarcya pramoditāḥ /
 aṣṭasugandhisaurabhyaṃ dhūpayanto 'caran puraḥ // 21.408
 kumbhā[148b]ṇḍā api sarve taṃ samabhyarcya praharṣitāḥ /
 trāsayantāḥ puro duṣṭān saṃnivārya mudācaran // 21.409
 vidyādharās ca sarve taṃ praṇatvā prābhinanditāḥ /

sugandhipuṣṣamālābhiḥ samabhyarcya puro 'caran // 21.410
 grahā api ca sarve taṃ samabhyarcya satārakāḥ /
 parivṛtya samālokya prāsarann abhinanditāḥ // 21.411
 garuḍā api sarve taṃ samabhyarcya pramoditāḥ /
 divyasugandhivaṣantaḥ prācaran sarvataḥ pathi // 21.412
 nāgendrā api sarve taṃ samabhyarcyābhinanditāḥ /
 sapuṣpāmṛtavarṣantaḥ prācaran pathi sarvataḥ // 21.413
 rākṣasā api taṃ dṛṣṭvā prṣṭhataḥ samupāsṛtāḥ /
 samāramyāyane duṣṭān trāsayanto mudācaran // 21.414
 dānavā api taṃ dṛṣṭvā praṇatvā dūrato mudā /
 mahotsāhābhinandinaḥ samāsaran samantataḥ // 21.415
 bhūtapretapiśācāś ca taṃ dṛṣṭvā dūrato 'mbare /
 samṛtāsakampitātmānaḥ praṇatvaiva parāyayuh // 21.416
 tīrthikā apy abhijñāś ca vivādabhayaśaṅkitāḥ /
 pravrajantaṃ samālokya tasthuḥ sarve viśāditāḥ // 21.417
 ṛṣayo 'pi mahābhijñāḥ pravrajantaṃ vilokya tam /
 praṇamanto 'ñjalim dhṛtvā tasthuḥ sarve pramoditāḥ // 21.418
 yatayo yoginaś cāpi sarve 'pi brahmacāriṇaḥ /
 niṣkramantaṃ tam ālokya tasthur natvā pramoditāḥ // 21.419
 bodhisattvā mahāsattvā api sarve samīkṣya tam /
 sāñjalayaḥ samānamya tasthuḥ samabhinanditāḥ // 21.420
 sarve tathāgatāś cāpi niṣkramantaṃ samīkṣya tam /
 sudṛṣā prābhīpaśyantas tasthuḥ samanumoditāḥ // 21.421
 evaṃ śrīmān mahāsattvo bodhisattvo jagaddhite /
 niṣkramya svapurād rātrau mahotsāhair mudācaran // 21.422
 pūjyamāno 'maraiḥ sarvaiḥ sarvair lokādhipair api /
 stūyamāno 'psarobhiś ca prabhāsayan mudāsarāt // 21.423
 tatprabhābhipariṣṛtāḥ sarvalokāḥ pracitritāḥ /
 mahāsukhasamāpannā babbhūvur vimalendriyāḥ // 21.424
 evaṃ samabhiniṣkrānto [149a] bodhisattvo maharddhimān /
 krameṇa prācaraṇ chākyān kroḍyān mallān api kramāt /
 maineyān anuvaineyān atikramya yayau vanam // 21.425 ≈ L 225.5-7; H ii,120.5-7
 tataś caran sa sarvajño dvādaśayojanān tataḥ /
 vaśiṣṭhasya muneḥ prātar āśramāntikam āptavān // 21.426 ≈ S ii,164.18,189.10; M ii,206.16,235.14
 sūptaviśvastahariṇaṃ svasthasthitavihaṃgamam /
 viśrānta iva yad dṛṣṭvā kṛtārtha iva cābhavat // 21.427 = Bc 6.2
 tatra sa kanthakād aśvād avatīrya mahītale /
 sthitvā sarvān surendrādīṃl lokapālān vyasarjayat // 21.428 ≈ L 225.7-9; H ii,120.7-9

tatra brahmāmarendrāditrāyastrimśāḥ surās tathā /	
sarvalokādhipās cāpi sarvāpsarogaṇaiḥ saha // 21.429	
śrīghanam taṁ mahāsattvaṁ samālokyābhinanditāḥ /	
kṛtāñjalipuṭā natvā sādāram evam abravan // 21.430	
pravrajasva mahāsattva sidhyatu te samīhitam /	
jītvā māragaṇān āśu sambodhiṁ samavāpnuhi /	
śrīmatām bhajanaṁ kṛtvā mokṣaṁ yāsyāmahe vayam // 21.431	
iti te brahmaśakrāditrāyastrimśāḥ pramoditāḥ /	
tasya pūjām punaḥ kṛtvā natvāambarālayaṁ yayuḥ // 21.432	
sarve lokādhipās cāpi svasvasainyagaṇaiḥ saha /	
natvā jayāśisaṁ dattvā svasvakṣetre mudācaran // 21.433	
evam anye 'pi lokās ca yakṣagandharvakinnarāḥ /	
guhyakā garuḍā nāgā dānavās ca maharddhikāḥ // 21.434	
vidyādharā grahās tārā sarve 'pi saṁpramoditāḥ /	
bodhisattvaṁ tam ānatvā svasvālayaṁ mudācaran // 21.435	
avatīrya ca pasparśa nistīrṇam iti vājinam /	
chandakaṁ cābravīt prītaḥ snāpayann iva cakṣuṣā // 21.436	= Bc 6.4
imaṁ tārksyopamajavaṁ turamgam anugacchatā /	
darśitā saumya madbhaktir vikramaś cāyam ātmanaḥ // 21.437	= Bc 6.5
sarvathāsmi anyakāryo 'pi gṛhīto bhavatā hṛdi /	
bhartṛsnehaś ca yasyāyam īdṛśaḥ sakta eva ca // 21.438	= Bc 6.6
asnigdho 'pi samartho 'sti niḥsāmartho 'pi bhaktimān /	
bhaktimāṁś caiva śaktaś ca durlabhas tvadvidho bhuvi // 21.439	= Bc 6.7
tat prīto 'smi tavānena mahābhāgena karmaṇā /	
dṛśyate mayi bhāvo 'yaṁ phalebhyo 'pi parāṇmukhe // 21.440	= Bc 6.8
ko janasya phalasthasya na syād abhimukho janaḥ /	
janībhavati bhūyiṣṭhaṁ svajano 'pi viparyaye // 21.441	= Bc 6.9
/ kulārthaṁ dhāryate putraḥ poṣārthaṁ sevyate pitā /	
āśayāśliṣyati jagan nāsti niṣkāraṇā svatā // 21.442	= Bc 6.10
kim uktvā bahu saṁkṣepāt kṛtaṁ me [149b] sumahat priyam /	
nivartasvāśvam ādāya saṁprāpto 'smīpsitaṁ vanam // 21.443	= Bc 6.11
ity uktvā sa mahābāhur anusamśacikīrṣayā /	
bhūṣaṇāny avamucyāsmāi saṁtaptamanase dadau // 21.444	= Bc 6.12
mukutād dīpakarmāṇaṁ maṇim ādāya bhāsvaram /	
bruvan vākyam idaṁ tasthau sāditya iva maṇḍalaḥ // 21.445	= Bc 6.13
anena maṇinā chanda praṇamya bahuśo nṛpaḥ /	
vijñāpyo 'muktaviśrambhaṁ saṁtāpavinivṛttaye // 21.446	= Bc 6.14
jarāmarāṇanāśārthaṁ praviṣṭo 'smi tapovanam /	

na khalu svargatarṣeṇa nāsnehena na manyunā // 21.447	= Bc 6.15
tad evaṃ abhiniṣkrāntaṃ na mām śocitum arhasi /	
bhūtvāpi hi ciraṃ śleṣaḥ kālena na bhaviṣyati // 21.448	= Bc 6.16
dhruvo yasmāc ca viśleṣas tasmān mokṣāya me matiḥ /	
viprayogaḥ kathaṃ na syād bhūyo 'pi sva janādibhiḥ // 21.449	= Bc 6.17
śokatyāgāya niṣkrāntaṃ na mām śocitum arhasi /	
śokahetuṣu kāmeṣu saktāḥ śocyās tu rāgiṇaḥ // 21.450	= Bc 6.18
ayaṃ ca kila pūrveṣāṃ asmākaṃ niścayaḥ sthiraḥ /	
iti dāyādabhūtena na śocyo 'smi pathā vrajan // 21.451	= Bc 6.19
bhavanti hy arthadāyādāḥ puruṣasya viparyaye /	
pr̥thivyaṃ dharmadāyādā durlabhās tu na santi vā // 21.452	= Bc 6.20
yad api syād asamaye yāto vanam asāv iti /	
akālo nāsti dharmasya jīvite cañcale sati // 21.453	= Bc 6.21
tasmād adyaiva me śreyaś cetavyam iti niścayaḥ /	
jīvite ko hi viśrambho mṛtyau pratyarthini sthite // 21.454	= Bc 6.22
evamādi tvayā saumya vijñāpyo me pitā nṛpaḥ /	
prayatethās tathā caiva yathā mām na smared api // 21.455	= Bc 6.23
api nairguṇyaṃ asmākaṃ vācyaṃ narapatau tvayā /	
nairguṇyāt tyajyate snehaḥ snehatyāgān na śocyate // 21.456	= Bc 6.24
iti vākyam idaṃ śrutvā chandaḥ saṃtāpaviklavaḥ /	
bāṣpagrathitayā vācā pratyuvāca kṛtāñjaliḥ // 21.457	= Bc 6.25
anena tava bhāvena bāndhavāyāsadāyinā /	
bhartaḥ sīdati me ceto nadīpaṅka iva dvipaḥ // 21.458	= Bc 6.26
kasya notpādayed bāṣpaṃ niścayas te 'yam īdṛṣaḥ /	
ayomaye 'pi hṛdaye kiṃ punaḥ snehaviklave // 21.459	= Bc 6.27
vimānaśayanārhaṃ hi saukumāryam idaṃ kva ca /	
kharadarbhāṅkuravatī tapovanamahī kva ca // 21.460	= Bc 6.28
śrutvā tu vyavasāyaṃ te yad aśvo 'yaṃ mayāhṛtaḥ /	
balātkāreṇa tan nātha daivenaivāsmi kāritaḥ // 21.461	= Bc 6.29
kathaṃ hy ātmavaśo jānan vyavasāyam imaṃ tava /	
upā[150a]naye yaṃ turagaṃ śokaṃ kapilavāstunaḥ // 21.462	= Bc 6.30
tan nārhasi mahā sattva vihātuṃ putralālasam /	
snigdhaṃ vṛddhaṃ ca rājānaṃ saddharmam iva nāstikaḥ // 21.463	= Bc 6.31
saṃvardhanapariśrāntāṃ dvitīyāṃ tām ca mātaram /	
deva nārhasi vismartuṃ kṛtaghna iva satkriyām // 21.464	= Bc 6.32
garbhavatīm guṇavatīm kulaślāghyāṃ pativratām /	
devīm arhasi na tyaktuṃ klībaḥ prāptām iva śriyam // 21.465	= Bc 6.33
putraṃ yāsodharā garbhe yāsodharmabhṛtām varaḥ /	

bālam arhasi na tyaktum vyasanīvottamaṃ yaśaḥ // 21.466	= Bc 6.34
atha bandhum ca rājyaṃ ca tyaktum eva kṛtā matiḥ /	
mām nārhasi vibho tyaktum tvatpādaḥ hi gatiḥ mama // 21.467	= Bc 6.35
nāsmi yātum puram śakto dahyamānena cetasā /	
tvām araṇye parityajya vivikte ca mahābhaye // 21.468	= Bc 6.36
kiṃ hi vakṣyati mām rājā tvadṛte nagaram gatam /	
vakṣyāmy ucitadarśitvāt kiṃ tavāntaḥpurāṇi vā // 21.469	= Bc 6.37
yad apy ātthāpi nairguṇyam vācyam narapatāv iti /	
kiṃ tad vakṣyāmy abhūtaṃ te nirdoṣasya muner iva // 21.470	= Bc 6.38
hṛdayena salajjena jihvayā sajjamānayā /	
ahaṃ yady api vā brūyāṃ kas taṃ śraddhātum arhati // 21.471	= Bc 6.39
yo hi candramasas taikṣṇyam kathayec chraddadhīta vā /	
sa doṣāṃs tava doṣajña kathayec chraddadhīta vā // 21.472	= Bc 6.40
sānukrośasya satataṃ nityam karuṇavedinaḥ /	
snigdhatyāgo na sadṛśo nivartasva prasīda me // 21.473	= Bc 6.41
iti śokābhībhūtasya niśamya tasya bhāṣitam /	
svasthaḥ paramayā dhṛtyā jagāda vadatāṃ varaḥ // 21.474	= Bc 6.42
madviyogaṃ prati cchanda saṃtāpas tyajyatām ayam /	
nānābhāvo hi niyataṃ pṛthagjātiṣu dehiṣu // 21.475	= Bc 6.43
svajanaṃ yady api snehān na tyajeyam mumukṣayā /	
mṛtyur anyonyam avaśān asmān saṃtyājayaṣyati // 21.476	= Bc 6.44
mahatyā tṛṣṇayā duḥkhair garbheṇāsmi yayā dhṛtaḥ /	
tasyā niṣphalayatnāyāḥ kvāhaṃ mātuḥ kva sā mama // 21.477	= Bc 6.45
vāsavṛkṣe samāgamya vigacchanti yathāṇḍajāḥ /	
niyataṃ viprayogāntas tathā bhūtasamāgamaḥ // 21.478	= Bc 6.46
sametya ca yathā bhūyo vyapayānti balāhakāḥ /	
saṃyogo viprayogaś ca tathā me prāṇināṃ mataḥ // 21.479	= Bc 6.47
yasmād yāti [150b] ca loko 'yam vipralabhya parasparam /	
mamatvam na kṣamaṃ tasmāt svapnabhūte samāgame // 21.480	= Bc 6.48
sahajena viyujyante parṇarāgeṇa pādapāḥ /	
anyenānyasya viśleṣaḥ kiṃ punar na bhaviṣyati // 21.481	= Bc 6.49
tad evaṃ sati saṃtāpaṃ mā kārṣṭiḥ saumya gamyatām /	
lambate yadi tu sneho gatvāpi punar āvraja // 21.482	= Bc 6.50
brūyāc cāsmāsv anākṣepaṃ janaṃ kapilavastuni /	
tyajyatām tadgataḥ snehaḥ śrūyatām cāsyā niścayaḥ // 21.483	= Bc 6.51
kṣipram eṣyati vā kṛtvā jarāmṛtyukṣayaṃ kila /	
akṛtārtho nirārambo nidhanaṃ yāsyatīti vā // 21.484	= Bc 6.52
iti bhartur vacaḥ śrutvā kanthakas turagottamaḥ /	

prālihaj jihvayā pādaḥ bāṣpaṃ uṣṇaṃ vyamuñcata // 21.485	= Bc 6.53
jālinā svastikāṅkena cakramadhyena pāṇinā /	
āmarśya sa mahāsattvas tam aśvam abhyabhāṣata // 21.486	= Bc 6.54
muñca kanthaka mā bāṣpaṃ darśiteyaṃ sadaśvatā /	
mṛṣyatām saphalaḥ śīghraṃ śramas te 'yaṃ bhaviṣyati // 21.487	= Bc 6.55
mañitsaruṃ chandakahastasaṃsthaṃ	
tataḥ sa dhīro niśitaṃ grhītvā /	
kośād asiṃ kāñcanabhakticitraṃ	
bilād ivāśīviṣaṃ udbabarha // 21.488	= Bc 6.56
niṣkāśya taṃ cotpalapattranīlaṃ	
chitvā svayaṃ mūrdhajaṃ ātmanaḥ /	
vikīryamāṇāṃśukam antarīkṣe	
prodakṣipad dhaṃsam ivāmburāśau // 21.489	= Bc 6.57
pūjābhilāṣeṇa ca bāhumānyād	
divaukasas taṃ jagṛhuḥ praviddham /	
yathāvad enaṃ divi devasaṅghā	
divyair vidhānair abhipūjya cakruḥ // 21.490	= Bc 6.58
tatra nidhāya tāṃ cūḍāṃ garbhe caityaṃ mahattaram /	
mahotsāhaiḥ pratiṣṭhāpya samabhyarcya sadā bhajan // 21.491	
mahaś cāpi pratiṣṭhāpya prācārayan mahotsavam /	
adyāpi svargaloke taccūḍāmahaḥ pravartate // 21.492	
muktvā tv alaṃkāṇākalatravattām	
śrīvīpravāsaṃ śīrasaś ca kṛtvā /	
dr̥ṣṭvāṃśukam kāñcanahaṃsacihnaṃ	
vanyaṃ sa dhīro 'bhicakāṅkṣa vāsaḥ // 21.493	= Bc 6.59
tato mṛgavyādhavapur divaukā	
bhāvaṃ viditvāśya viśuddhabhāvaḥ /	
kāṣāyavastro 'bhiyayau samīpaṃ	
taṃ śākyarājaprabhavo 'bhyuvāca // 21.494	= Bc 6.60
śīvaṃ ca kāṣāyam ṛṣidhvajas te	
na yujyate hiṃsraṃ idaṃ dhanuś ca /	
tat saumya yady asti na saktir atra	
mahyaṃ prayacchedam idaṃ grhāṇa // 21.495	= Bc 6.61
vyādho 'bravīt kāmada kāmam ārād	
anena viśvāśya mṛgān nihatya /	
arthas tu śakropama yady anena hanta	
pratīcchānaya śuklam etat // 21.496	= Bc 6.62
pareṇa harṣeṇa tataḥ sa vanyaṃ	

jagrāha vāso 'ṁśukam utsasarja /
 vyādhas tu divyaṃ va[151a]pur eva bibhrat
 tac chuklam ādāya divaṃ jagāma // 21.497 = Bc 6.63
 tataḥ kumāraś ca sa cāśvagopas
 tasmimś tathā yāti visismiyāte /
 āraṇyake vāsasi caiva bhūyas
 tasminn akārṣṭāṃ bahumānam āśu // 21.498 = Bc 6.64
 tatra sa devaputras tadvastraṃ śuddhālaye mudā /
 darśayaṃs tat pravṛttāntaṃ prākhyāyānandayat surān // 21.499 ≈ L 226.10-13; H ii,122.13-16
 tatra nidhāya tad vastraṃ garbhe caityaṃ mahattaram /
 nidhāya saṃpratiṣṭhāpya mahotsāhaiḥ sadā bhajan // 21.500
 śuddhāvāsikalokeṣu *hy adyāpi saṃpratiṣṭhitaḥ /
 vastramahō mahācaityo devair bhaktyā prapūjitaḥ // 21.501
 tatra vimucya sa prājño bhūṣaṇāni hayaṃ ca tam /
 upasthāpya samāmantrya chandakam evam abravīt // 21.502 ≈ L 225.11-12; H ii,120.12-13
 chandakemāni sarvāṇi bhūṣaṇāni hayaṃ ca me /
 gr̥hītvā sahasā gaccha pure tatra svam ālayam // 21.503
 ity evaṃ svāminādiṣṭaṃ śrutvā sa chandako rudan /
 svāmino 'sya padāmbhoje nipatitvaivam abravīt // 21.504
 hā svāmin katham eko 'haṃ gaccheyaṃ bhavatā vinā /
 nūnaṃ sa nṛpatī rājā baddhvā māṃ tāḍayed ruṣā // 21.505
 katham etāni sarvāṇi bhūṣaṇāni hayaṃ ca te /
 gr̥hītvāhaṃ gamiṣyāmi tvacchokavyākule pure // 21.506
 ko māṃ tatra samāśvāsya saṃrakṣet karuṇānvitaḥ /
 sarve 'pi māṃ paritrāsya hanyeyur vā dviṣo yathā // 21.507
 kasyāhaṃ purato gatvā dāsyāmīmaṃ hayottamaṃ /
 sarvāṇīmāni sadratnamayāny ābharaṇāni ca // 21.508
 katham te janakasyāpi krodhāgnidahitānanam /
 gautamya api mātus ca paśyeyaṃ bhavatā vinā // 21.509
 gopāyā api bhāryāyāḥ śokāgnidahitaṃ mukham /
 paśyeyaṃ katham eko 'haṃ bhavantaṃ svāminaṃ vinā // 21.510
 anyāsām api bhāryānāṃ sarvāsāṃ vadanāni ca /
 paśyeyaṃ katham eko 'haṃ svāminā bhavatā vinā // 21.511
 mantriṇām api sarveśām amātyānāṃ mukhāny api /
 katham paśyeyam eko 'haṃ bhavatā svāminā vinā // 21.512
 tad ahaṃ bhavatā sārḍhaṃ caritum vratam utsahe /
 bhavato yā gatiḥ nātha tām eva prāptum utsahe // 21.513

naivaiko 'haṃ pure tatra nivartitum samutsahe /
 api martum samicchāmi [151b] hy avaśyaṃ maraṇaṃ *bhavet // 21.514
 iti tenoditaṃ śrutvā bodhisattvaḥ samīkṣya tam /
 chandakaṃ nṛpateḥ kopāt trāsitam cābravīt punaḥ // 21.515
 mā *bhaiṣīr nṛpateḥ kopād darśanāt te prasāditāḥ /
 pitā me sahasāmantrya tvāṃ pṛcchet kauśalaṃ mudā // 21.516
 mātā prajāpati cāpi bhāryā yaśodharāpi ca /
 amātyā mantriṇaś cāpi sarvāḥ kāntās tathāparāḥ // 21.517
 tathā paurāś ca sarve 'pi darśanāt te prasāditāḥ /
 sahasā samupāmantrya pṛccheyuḥ kauśalaṃ mama // 21.518
 tatra tvam kauśalaṃ teṣāṃ sarveṣāṃ purato 'diśan /
 sarvam etatpravṛttāntaṃ vistareṇa nivedaya // 21.519
 yāvan nāham ihāyātas tāvan me mahiṣī satī /
 yaśodharānivāryā hi macchokāj jīvitaṃ tyajeta // 21.520
 rakṣaṇīyā prayatnena pālaniyā hi garbhini /
 evaṃ sarvā api rāmā mātāpi ca prajāpati // 21.521
 macchokānalataptāṅgās tyajeyur jīvitaṃ mudhā /
 sarvāṃ lokāṃ ca macchokān nivārayan sadāvatu // 21.522
 arthino 'pi sadā pālyā dattvā dravyaṃ yathepsitam /
 sarvāny api ca rājyāni dharmeṇa pratipālaya // 21.523
 ahaṃ saṃbodhim āśādy saugataṃ padam āptavān /
 nūnaṃ tatrāgamiṣyāmi dharmāmṛtaṃ pravarṣitam // 21.524
 iti mayā samākhyātaṃ rājño me pītur agrataḥ /
 mātur yaśodharāyāś ca samākhyāya nivedaya // 21.525
 ity evaṃ sa mahāsattvaś chandakaṃ saṃvinodayan /
 sarvāny ābharaṇāny aśvaṃ dattvā tato vyasarjayat // 21.526
 sarvāny ābharaṇāny aśvaṃ ādāya chandako rudan /
 svāmināḥ pādayor natvā cirāc chanais tato 'carat // 21.527
 tato 'śvaḥ kanthakaś cāpi bodhisattvaṃ samīkṣya tam /
 natvā rudan viṣaṇṇātmā śanais tato nyavartata // 21.528
 chandaṃ tataḥ sāsrumukhaṃ visrjya
 kāṣāya*sambhṛd *dhr̥tikīrtibhṛt saḥ /
 yenāśramas tena yayau mahātmā
 saṃdhyābhrasaṃvīta ivā**dr̥**irājaḥ // 21.529 = Bc 6.65
 tatas tathā bhartari rājyanispr̥he
 tapovanaṃ yāti vivarṇavāsasi /
 bhujau samutkṣipyataḥ sa vājibhṛd
 bhṛśaṃ vicukrośa papāta ca kṣitau // 21.530 = Bc 6.66

vilokya bhūyaś ca ruroda sasvaram
 hayam bhujābhyām upaguhya kanthakam /
 tato nirāśo vilapan muhur muhur
 yayau śarīreṇa puram na cetasā // 21.531 = Bc 6.67
 kvacit pradadhyau vilalāpa ca kvacit
 kvacit pracaskhāla papāta ca kvacit /
 ato vrajan bhaktivaśena duḥkhitaś
 cacāra bahvīr **avaśaḥ** pathi kriyāḥ // 21.532 = Bc 6.68
 tam yatiṁ samupāyātam samikṣya vanadevatā /
 pūjāṅgaiḥ sahasābhyarcya praṇamyaivam abhāṣata // 21.533
 sidhyatu te mahāsattva samīhitam jagaddhite /
 āśu mārān vinirjitvā sambodhiṁ samavāpnuhi // 21.534
 iti bhadraśīṣam tasmai dattvā sā vanadevatā /
 sāñjaliḥ praṇatiṁ kṛtvā svāśrayam prayayau mudā // 21.535
 tataḥ sa bodhisattvo 'pi kāṣāyacīvarāvṛtaḥ /
 brahmacārī yatiḥ śrīmān samāhitas tato 'carat // 21.536
 iti śāstuh purāvṛttam kathitam sāmpratam mayā /
 tvam api ca mahārāja śrutvaitad anumodatām // 21.537
 śrutvedam ye 'numodanti pravrajyāvratacāraṇam /
 te 'pi sarve mahāsattvā bhaveyuh śrīguṇāśrayāḥ // 21.538
 iti śāstrārhatādiṣṭam śrutvāśokamahīpatiḥ { or: śrutvānando yatir mudā } /
 tatheti prativijñāpya prābhyānandat sapārśadaḥ // 21.539
 // iti purābhiniṣkramaṇaparivarto nāmaikaviṁśatitamo 'dhyāyāḥ //

Apparatus criticus of the chapter 21

- 1a °āśokaḥ sa bhūpendraḥ] A(post corr. marg.) B D: °ānandam sa sadvijñāḥ A(ante corr.).
 3a ity *aśokoditam] ex con: ity ānandoditam A B: iti nṛpoditam D.
 3c aśokam] D: ānandam A B.
 3 note] It appears that the word "ānanda" in A was later rewritten to "aśoka" by someone. In A this story was originally written in the Aśoka/Upagupta setting, then someone changed it to the Buddha/Ānanda setting, and then someone changed it back to the Aśoka/Upagupta setting.
 4a śṛṇu rājan] A(ante corr.) B D: śṛṇv ānanda A(post corr.).
 15d *prāsāde] ex con: prāsādo A.
 19d °bhinanditāḥ] corr.: °bhinanditaḥ A.
 27b niḥsprhaḥ] corr.: nisprhaḥ A.
 29d ācaran] corr.: ācaram A.

- 48b sukhepsavaḥ] A: sukhepsava D: sukhapsava B.
- 49a *jīrṇāmbārāḥ] ex coni: jīnāmbārāḥ A2 B D.
- 49b tṛṇaparnajalāśinaḥ] A2 D: tṛṇaparnajalāniśaḥ B.
- 55a caranti] corr.: calanti A.
- 61b sacivā ye] A(post corr. marg.): sacivāḥ A(ante corr.)
- 62bc cānye sarve] A(post corr. marg.): cā sarve A (ante corr.).
- 63d pratilabhyāḥ] B D: pratilabhyā A.
- 64c sabhāryaḥ] A B: svabhāryaḥ D.
- 82c ramaṇīm] corr.: ramiṇām A: ramaṇām D.
- 100d prabodhaya] A B: prabodhaye D.
- 103d tathāvadat] corr.: tathāvada[.](?) A: tathā vada B D.
- 110d *nimilitadṛśo] ex coni: nimilitādṛśo A.
- 116a *sa tāḥ sarvā] ex coni: tāḥ sarvā A.
- 127b sampattīs] corr. sampattis A.
- 127c *sambhūtās tṛṇavat] ex coni: *sambhūtām tṛṇavat A.
- 130a sarvā] corr.: sarvāḥ A.
- 131a hā yāḥ *striyaḥ sahasrās] ex coni: hā yāḥ [...] sahasrās A.
- 139a kalyāṇikāmā°] corr.: kalyāṇikāmā A.
- 149d mudābhajam] corr.: mudā bhajan A.
- 171cd hatvācarad unma°] corr.: hatvācarata unma° A.
- 172a sarve] corr.: sarvāḥ A.
- 189cd duṣṭa*śarya iva] ex coni: duṣṭasaryya iva A D.
- 206b °spardhiniḥ] corr.: °spardhinī A.
- 209b bhaved dhruvam] corr.: bhava sukhaṃ A: bhava dhruvaṃ B D.
- 210b niśamya] corr.: niśasya A: nisampa D.
- 214b *vinaśyet] ex coni: vinaśye A.
- 219c grastaḥ] corr.: grasta A: graste D.
- 223a kleśino mattāḥ] A: kleśanomattāḥ D.
- 228b vaśe bhavet] A: vaśe bhava D.
- 229cd graset *tvāpi *sarvā *rāmā] ex coni: gras te + + + vās mā api B: gras te 'pi lokā sarvās mā api D. This part of A from the word "graset" to "imā api" is so badly stained that it is illegible. B and D, which are derived from A, also inherit that damage of A.
- 231c stambhitā iva *hasteṣu] ex coni: stambhitā iva haṣṭe[m]u A: devāsuranarās cāpi D.
- 234c kṣuttrṣṇā*gniṣu sam°] ex coni: kṣuttrṣṇāgnisam° A. (metre!)
- 254a tvayānītaḥ] corr.: tvayānītaḥ A.
- 265a tathā] A E: tadā D.
- 272a 'bhirajyate] A: abhirakṣyate E.

310a dvārā hi] A E. (Is it the plural form of the feminine noun dvārā (cf. 311b dvārāḥ)? Or read *dvāro hi?

324d kha āśritāḥ] E: kha āśrite A.

347d āpsyasi] A D: āpayasi E.

349c sarvair] A: sarva D E.

350d vinaśyate] A: 'bhinaśyate D: bhinaśyate E.

352d tatrābhinandum] A: tatrābhinetum D: tatrābhiretum B.

354ab mahārājaṃ janakaṃ] A: mahārājajanaṃ D E.

364b bhavatāṃ śubhaṃ] corr.: bhavatāṃ chubaṃ A E: bhavatā chubaṃ D.

380b bodhicaryā*bhipūrakaḥ] ex coni: bodhicaryābhipūraye A D: bodhicaryābhipūrayet E.

385c 'vidyātamovyāpta°] A: vidyātamovyāpte E: vidyātamodhvānte D.

390d sahasraraśmibhāsvaraḥ] D: sahasraraśmiprabhāsvaraḥ A E.

394b *skandha°] ex coni: skanda° A D: skanda° E.

421c sudṛśā prābhīpaśyantas] D E: sudṛśā{ {sama} }bhīpaśyantas A.

427 note] The exact same strophe is found in TJAM 22.352.

429c sarvalokādhipāś cāpi] D E: sanārāyaṇabhūteśaḥ A2.

436 note] a largely identical strophe is found in TJAM 22.354.

437 note] = TJAM 22.355 (largely identical)

438d sakta eva] sic A2. (Cf. Bc 6.6 śaktir eva; TJAM 22.356 śakta eva)

438 note] = TJAM 22.356 (the same strophe)

439b niḥsāmartho] sic A2. (Cf. Bc 6.7 niḥsāmarthyo)

439 note] = TJAM 22.357 (the same strophe)

440c dṛśyate] sic A2. (Cf. Bc 6.8 yasya te)

440d parāṇmukhe] sic A2. (Cf. Bc 6.8 parāṇmukhaḥ; Cowell parāṇmukhe)

440 note] = TJAM 22.358 (the same strophe)

441 note] = TJAM 22.359 (the same strophe)

442c āśayāśliṣyati] sic A2. (Cf. Bc 6.10 āśayāc chliṣyati; Cowell āśayāśliṣyati)

442 note] = TJAM 22.360 (the same strophe)

443b sumahat] corr.: svamahat A2. (Cf. Bc 6.11 sumahat)

443d vanam] A2. (Cf. Bc 6.11 padam; Cowell vanam)

443 note] = TJAM 22.361 (the same strophe)

444 note] = TJAM 22.362 (the same strophe)

445d maṇḍalaḥ] A2. (Cf. Bc 6.13 and TJAM 22.363 mandaraḥ)

445 note] = TJAM 22.363 (the same strophe)

446c 'mukta°] corr.: 'mukti° A2. (Cf. Bc 6.14 vijñāpyo 'mukta°)

446 note] = TJAM 22.364 (the same strophe)

447a jarā°] A2. (Cf. Bc 6.15 janma°; Cowell jarā°)

447 note] = TJAM 22.365 (the same strophe)

448 note] = TJAM 22.366 (the same strophe)

449d °janādibhiḥ] A2. (Cf. Bc 6.17 °janād iti; Cowell °janādibhiḥ)

449 note] = TJAM 22.367 (the same strophe)

450 note] = TJAM 22.368 (the same strophe)

451c dāyāda°] A2. (Cf. Bc 6.19 dāyāda°; Cowell dāyāda°)

451 note] = TJAM 22.369 (the same strophe)

452 note] = TJAM 22.370 (the same strophe)

453 note] = TJAM 22.371 (the same strophe)

454 note] = TJAM 22.372 (the same strophe)

455b vijñāpyo me pitā nṛpaḥ] A2. (Cf. Bc 6.23 vijñāpyo vasudhādhipaḥ)

455 note] = TJAM 22.373 (the same strophe)

456a nairguṇyam] corr.: nirguṇyam A2.

456 note] = TJAM 22.374 (the same strophe)

457 note] = TJAM 22.375 (largely identical)

458d nadīpaṅka iva] corr.: nadīpaṅke iva A2.

458 note] = TJAM 22.376 (the same strophe)

459 note] = TJAM 22.377 (the same strophe)

460 note] = TJAM 22.378 (the same strophe)

461 note] = TJAM 22.379 (the same strophe)

462b idaṃ] corr. (cf. Bc 6.30 and TJAM 22.380): idaṃ A2.

462 note] = TJAM 22.380 (the same strophe)

463a mahāsattva] A2. (Cf. Bc 6.31 mahābāho)

463 note] = TJAM 22.381 (the same strophe)

464c deva] A2. (Cf. Bc 6.32 devīm; Cowell deva)

464 note] = TJAM 22.382 (the same strophe)

465a garbhavatīm] A2. (Cf. Bc 6.33 bālaputrām)

465 note] = TJAM 22.383 (the same strophe)

466a yāśodharāgarbhe] corr.: yāśodharāgarbhaṃ A2. (Cf. Bc 6.34 yāśodharaṃ ślāghyaṃ)

466b varaḥ] A2. (Cf. Bc 6.34 varam; Cowell varaḥ)

466 note] = TJAM 22.384 (the same strophe)

467 note] = TJAM 21.385 (the same strophe)

468d vivikte ca mahābhaye] A2. (Cf. Bc 6.34 sumantra iva rāghavam)

468 note] ÷ TJAM 21.386 (largely identical)

469 note] = TJAM 22.387 (the same strophe)

470 note] = TJAM 22.388 (the same strophe)

471d taṃ śraddhātum] sic A2. (Cf. Bc 6.39 tac chraddhātum)

471 note] = TJAM 22.389 (the same strophe)

472a taikṣṇyaṃ] corr. (cf. TJAM 22.390 = Bc 6.40 taikṣṇyaṃ): taikṣṇaṃ A2.

472 note] = TJAM 22.390 (the same strophe)
 473 note] = TJAM 22.391 (the same strophe)
 474b niśamya tasya] A2. (Cf. Bc 6.42 śrutvā chandasya)
 474 note] ≡ TJAM 22.392 (almost identical)
 475 note] = TJAM 22.393 (the same strophe)
 476b tyajeyam mumukṣayā] A2. (Cf. Bc 6.44 tyajeyam aham svayam; Cowell tyajeyam mumukṣayā)
 476 note] = TJAM 22.394 (the same strophe)
 477 note] = TJAM 22.395 (the same strophe)
 478 note] = TJAM 22.396 (the same strophe)
 479 note] = TJAM 22.397 (the same strophe)
 480b parasparam] sic A2: paramparam Bc. 6.48
 480 note] = TJAM 22.398 (the same strophe)
 481 note] = TJAM 22.399 (the same strophe)
 482a evam] corr. (cf. TJAM 22.400 = Bc 6.50 evam): eva A2.
 482 note] = TJAM 22.400 (the same strophe)
 483a brūyāc cāsmāsv anākṣepam] A2. (Cf. Bc 6.51 brūyāś cāsmatkṛtāpekṣam)
 483b °vastuni] A2. (Cf. Bc 6.51 °vāstuni; Cowell °vastuni)
 483 note] = TJAM 22.401 (the same strophe)
 484b jarāmṛtyu°] A2. (Cf. Bc 6.52 janmamṛtyu°)
 484c nirārambo] A2. (Cf. Bc 6.52 nirārambho; Cowell nirālambo; TJAM 22.402 nirārambho)
 484 note] = TJAM 22.402 (the same strophe)
 485a bhartur] A2. (Cf. Bc 6.53 tasya)
 485c prālihaj jihvayā] A2. (Cf. Bc 6.53 jihvayā lilihe)
 485d vyamuñcata] A2. (Cf. Bc 6.53 mumoca ca)
 485 note] = TJAM 22.403 (the same strophe)
 486cd āmarśya sa mahāsattvas tam aśvam abhyabhāṣata] A2. (Cf. Bc 6.54 āmamarśa kumāras tam babhāṣe ca vayasyavat)
 486 note] = TJAM 22.404 (the same strophe)
 487 note] = TJAM 22.405 (the same strophe)
 488 note] ≡ TJAM 22.406 (almost identical)
 489b chitvā svayam mūrdhaja ātmanaḥ] A2. (Cf. Bc 6.57 ciccheda citram mukuṭam sakeśam)
 489d prodakṣipad dhamṣam ivāmburāśau] A2. (Cf. Bc 6.57 cikṣepa cainam sarasīva haṁsam)
 489 note] = TJAM 22.407 (the same strophe)
 490d vidhānair abhipūjya cakruḥ] A2. (Cf. Bc 6.58 viśeṣair mahayām ca cakruḥ)
 490 note] ≡ TJAM 22.408 (almost identical)
 493a °kalatravattām] corr.: °kalatravatsām] A2. (Cf. Bc 6.59 °kalatravattām)
 495a °dhvajas] corr.: °dhvajam] A2. (Cf. Bc 6.61 °dhvajas)

495 note] ≡ TJAM 22.411 (almost identical)

496b nihatya] A2. (Cf. Bc 6.62 nihanmi; Cowell nihatya)

498d akārṣṭām] corr.: akāṣṭām A2. (Cf. Bc 6.64 akārṣṭām)

498 note] cf. TJAM 22.414 (somewhat similar strophe)

501ab °lokeṣu *hy adyāpi] ex conī: °lokeṣu adyāpi A2.

507c paritrāsyā] corr.: paritrassya A: paribhratsya D.

514d maraṇaṃ *bhavet] ex conī: maraṇaṃ bhave D: maraṇe bhave A2 E.

516a *bhaiṣīr nṛpateḥ] ex conī (or: bhīḥ *syā nṛpateḥ?): bhīṣṭā nṛpateḥ D E: bhīṣṭhāḥ nṛpateḥ A.

519d vistareṇa nivedaya] D E: vaidyair atroṣadhaṃ yathā A2.

529b °*saṃbhr̥d *dhṛti°] ex conī: °sambidvṛta° (or: °sambiddhṛta°) A2. (Cf. Bc 6.65 °saṃbhr̥d dhṛti°; Cowell °saṃvidvṛta°)

529d ivādrirājaḥ] A2. (Cf. Bc 6.65 ivodurājaḥ; Cowell ivādrirājaḥ)

532d avaśaḥ] A2. (Cf. Bc 6.68 avasa; Cowell avaśaḥ)

533b vanadevatā] A2 E: vadane devatāḥ B.

533c °bhycya] E B: °bhycyaḥ A2.

533d praṇamyaiṃ] A2 B: praṇatvaiṃ E || abhāṣata] A2 E: abhāṣate B.

534a sidhyatu] A2 D E: sidhyaṃtu B.

534b samīhitaṃ] A2 D E: samīhita B || jagaddhite] B D E: jagaddhitaṃ A2.

535ab tasmai datvā sā] B D E: datvā sā tasmai A2.

535c sāñjaliḥ] A2 B E: sāñjali D.

536d tato 'carat] ≡ tato carat D E: tato caran A2.

537ab iti śāstuḥ purāvṛttaṃ kathitaṃ sāmpratam] E: iti mama purāvṛttaṃ sāmpratam kathitaṃ A2 D.

537c mahārāja] E: mahāsatva A2 D.

538b °cāraṇaṃ] A2 E: °cāriṇaṃ D.

538d śrīguṇāśrayāḥ] D E: śrīguṇāśraye A2.

539b śrutvāśokamahīpatiḥ] E: śrutvānando yatir mudā D A2.

539d tatheti prativijñāpya] E A2: tathety abhyanumoditvā D.

(Colophon:) iti purā°] ex conī: iti śrīlālitavistare purā° A2 D || nāmaikaviṃśatitamo] A2: nāmonaviṃśatitamo D.

『都城から出離する』という第21章

さて王中の王であるかのアショーカ王は {或いは：よき賢者アーナンダは} 喜びながら合掌し、かの世尊・阿羅漢に拝礼して、次のように言った。(21.1)

「大徳よ、かの大士はどのように都城から出てゆかれたのでしょうか。あなた様はどうか私たちにそれを語り、よく理解を得させてください。」(21.2)

アショーカ王が〔或いは：アーナンダが〕こう語ったのを聞いて、阿羅漢たる行者、偉大な聖者である彼は、そのアショーカ王〔或いは：アーナンダ〕と会衆を見つめて次のように説いた。(21.3)

王よ〔或いは：アーナンダよ〕、専心して聴聞しなさい。かのお方がいかにして都城から出られたか、あなた方すべてによく理解を得させるため、その通りに語ろう。(21.4)

—— その時、悟りへと心を定めたかの光輝ある大士（菩薩、釈尊）は、出離する時を見計らいながら、寝椅子に身を置いていた。(21.5)

そのように留まっている彼を見て、空にいた神々は心配し、ダルマチャーリン（法行天子）に呼びかけて、次のように言った。(21.6)

「友よ、この菩薩は寝椅子にいて、憂悩することもなく眺め、まるで女に執着している者のように坐っている。(21.7)

この方は海のように深い。誰が彼の心を知り得よう。執着のない彼の心が、まさか快楽の対象に執着しているのではないだろうか。(21.8)

神々によって勧発されていないため、この方は栄光と安楽に執著し、かつて前世で自ら誓ったことを忘失しているのではないだろうか。」(21.9)

それを聞いて、天子ダルマチャーリンは彼らを見渡し、天子たちに次のように言った。(21.10)

「彼の心をどう思っているのか。かつて菩提行の誓戒を行いつつある時の、布施における無執着性を、あなた方は見てきたではないか」(21.11)

どうしてここで最後の輪廻的生存たる生にあるかの菩薩に、輪廻的生存への執着などあり得ようか。(21.12)

間違いなく、かの大士・菩薩は世の生類の益のために自らの誓願を憶念し、今や出離することだろう。」(21.13)

そう彼が語るのを聞くと、そのすべての神々は喜び、出離しようとする大士を見るために近くに集まり来た。(21.14)

その時、かの菩薩サルヴァールタシッダは立ち上がり、奥殿から出て高樓へと回り歩いた。(21.15)

そこにやってくると彼は東を向いて合掌し、すべての諸仏を憶念しつつ礼拝し、空を見上げた。(21.16)

彼はそこで虚空に帝釈天が控えているのを見た。供養の品々を持った神々の集団を伴っていた。(21.17)

またそれぞれの軍勢を率いた四護世王もおり、また緊那羅たち、羅刹たち、シッダたち、サーディヤたち、ヴィディヤードラたちもいた。(21.18)

すべての星々や惑星、金翅鳥たち、龍王たち、そして驚き喜んでいる天女や神々の娘たちもいた。(21.19)

深夜になり、プシャ星宿が出たのを見て、菩薩はチャンドカを呼んで、次のように命じた。(21.20)

「チャンドカ、お前は私の親友です。ゆえに、この有益な言葉を聞きなさい。親友として、あらゆる務めにおいて主人に益をなすべきです。(21.21)

昔私が世の生類の益のために誓った悟りへの誓願、それをすべて今、満たそうと私は欲する。(21.22)

もしお前が私に愛情をもち、また正法を望むなら、馬のカンタカをすぐに連れてきて、私に与えなさい」(21.23)

このように思慮深い彼によって語られた言葉を聞くと、チャンドカは顔を顔をいちめん涙で濡らして、彼を見つめながら次のように言った。(21.24)

「わが君、主よ、真夜中にどこへ行こうとなさるのですか。もしあなた様が私に愛情をおもちなら、その本当のことをお教えください」(21.25)

そう彼が言ったのを聞いて、善心を持つかの菩薩は、親友であり家来であるチャンドカを見つめ、次のように教示した。(21.26)

「友よ、いっしんにお聞きなさい。私が何を目的として、王権を望まず、一切の所有物を捨て、出家せんと欲しているのかを。(21.27)

私は悟りの弘誓を堅持し、菩提行の誓願を実行しながら、自分自身と所有物を与えて『布施』の波羅蜜を達成した。(21.28)

それから『戒』により自身を清め、悟りに心を定め置いて、福田（功德を生じる対象）や聖地、あらゆる場所で誓願を実行し、(21.29)

その後、『忍辱』の誓願を持し、すべての生き物たちの益を願い、四梵住（慈悲喜捨）の行を持して、常にいっしんに行って、(21.30)

その後、『精進』の大勇猛心を堅持し、正法を熱望し、すべての生き物たちの益となる事を行いながら、常に浄行を修してきた。(21.31)

その後、『禅定』によって心を清め、煩悩のない清らかな感官をもち、仏たちを念じ、世の生類の幸福を深く思いながら、精神の集中を持続し、(21.32)

その後、私は『智慧』という偉大な宝・吉祥なる光輝ある善き徳性を得たる大士、生類の守護者、善逝の息子（菩薩）となった。(21.33)

それ故、私のすべての誓願が世の生類の益のために成就されねばならない。あらゆる手段（方便）を用いて、すべての衆生を覚醒させて、(21.34)

悟りへの道に彼らをしっかりと安住させ、常に善行を歩ませよう。ゆえに、私は魔（マール）の群を打ち破り、無上正等覚を得ようと欲する。(21.35)

このことが私の果たすべき仕事であるとあなたは理解して、喜びの心を抱いて、カンタカを速やかに連れてきて私に与えなさい」(21.36)

勝れた知性ある菩薩がこのように命じるのを聞いて、従者のチャンダカは懊悩する心で、次のように答えた。(21.37)

高貴なるわが主よ、あなた様が生まれたばかりの時、賢い占相師たちがあなた様を見て予言したことを聞いております。(21.38)

『この赤ん坊は、あらゆる相好を具えている大士である。七宝を有する転輪聖王にもなりえよう。(21.39)

少年になった時も、偉大な通慧者として、あらゆる学問の徳目の王、論争に勝利する賢者として、あらゆる者に益と利をもたらすだろう。(21.40)

その後青年になると、輪廻的生存の中にいるすべての衆生が煩惱や驕慢をもち、墮落しているのを観て、憐れみの心に打たれるだろう。(21.41)

そして王位での生活を捨て、森の隠遁所に身を置き、なし難い苦行により、すべての修行者たちを凌駕するだろう。(21.42)

そしてすべてのマーラ（魔）の群を打ち破り、淨い三輪（身・口・意）を有する阿羅漢として正覚を成し遂げ、仏の位を得ることだろう。(21.43)

その後、諸世界、あらゆる場所において正法を説き明かし、世の生類を幸せな存在に変えて、涅槃を得るだろう』と。(21.44)

このように、勝れた智慧の占相師たちが語ったあなた様に関する言葉は、真実であり、外れることはないかもしれません。(21.45)

しかしながら、主よ、あなた様はまだ、瑞々しい若者なのです。今は王位での生活に留まり、民衆を守るという誓いを果たしつつ、(21.46)

ここで絶えずすべての衆生に広く普く善行をなし、欲するがままに幸せを享受し、インドラ神のように楽しみなさい。(21.47)

ほかの多くの善き人たちは、[来世の]王としての栄光と幸福を欲するため、様々な誓願や、様々な苦行を持して、(21.48)

ぼろぼろの衣をまとい、草や葉や水を食べて、やせ衰え、清らかな戒をもち、専心して若いのに遊歴しています」(21.49)

あなた様はその運命によって王としての大きな栄光と幸せを得たのです。それとは別の、何か大きな幸せを得るために苦行の誓戒を行うというのですか。(21.50)

あなた様のこの都城は楽しく、まるでインドラ神の都のようです。王国は繁栄して食物が豊かであり、快く、めでたさに満ちています。(21.51)

ここには多くの快い園林があります。至る所、果実や花などをつけた木々に美しく彩られています。(21.52)

多くの池もあり、それらは蓮や睡蓮などで彩られ、八功德水に満ちていて、心を喜ばせます。(21.53)

宮殿や邸宅は快く、天界のヴァイジャヤンタ宮殿のように快適で、どこでも安楽に過ごせ、あらゆる装飾で美しく飾られています。(21.54)

あなた様のこれらの妻たちは世俗法（世俗の義務）をなし、如法に行動し、吉祥なる光輝ある善き徳性を具え、清らかな感官の身体を持っています。(21.55)

あなた様がもつ富の豊かさは増大し、あらゆる物資に満ち、あらゆる美味の食に溢れ、それはクベーラ神が有するが如く、甚だ大きなものです。(21.56)

あなた様にはあらゆる乗り物もあり、種々の二輪戦車があり、日傘や旗や幢幡などで美しく飾られています。(21.57)

あなた様が有する数えきれないほど沢山の兵士や指揮官たちは勇敢であり、あらゆる刀剣の武器に精通し、主人への忠義を愛する者たちです。(21.58)

あのすべての諸王も、あなた様の親友であり協力者であり、奉仕の義務で固く繋がっており、誠実な愛情の心を持っています。(21.59)

あなた様に敵は一人もおらず、皆がとても親しい友人です。男女の召使いたちも家来たちも、皆あなた様を喜ばせようとしています。(21.60)

すべての王の顧問官、大臣、輔佐、助力の人たち、そして都民や〔地方の〕民は、あなた様の命令を頭に戴いています。(21.61)

親族や他の縁者たちも皆、あなた様にとって、とても親しい人たちです。物乞いの人たちも皆あなた様の親しい友であり、応援してくれる者たちです。(21.62)

主よ、あなたのこれらの豊かな富は、神々でさえ得がたいものです。どうしてこれらを捨てることができましょうか。またどこでこれらが再び得られるのでしょうか。(21.63)

ですから、あなた様が若いうちは王位での生活に留まり、妻とともに自らの家系の主たる神を敬い、崇め、礼拝しなさい。(21.64)

物乞いたちには好きなだけ施しを与えつつ、自らも欲するものを楽しみながら、愛する女たちと共に愛欲に染まり、好きなだけ享樂し、快樂を味わいなさい。(21.65)

あなた様が年老いて体が衰え、感官の対象への欲望が失われた時、王位での生活を捨てて、林棲の生活期に落ち着けばよいのです。(21.66)

その時に聖者の行（牟尼行）の誓戒を堅持して、三昧に心を置き、禪定の快さを味わいながら、集中して行をなされませ」(21.67)

このようにその忠実な従者チャンダカに告げられて、菩薩は少しの間、観察しながら瞑想すると、(21.68)

主人への奉仕を愛するチャンダカに視線を向け、見つめて、丁重に次のように教示した。(21.69)

「友よ、私の利益を願う従者であるお前が語ったことはもつともだ。しかし、私の意見を聞きなさい。私はそれを述べよう。(21.70)

現象世界の諸行（森羅万象）は無常であり、不変でなく、確固としたものでなく、永続せず、実体がなく、変わる性質のものである。(21.71)

それは山の急流の水のように激しくたちまち移り変わり、また草葉の上の露の滴りのように脆くて、長くは留まらない。(21.72)

それは空っぽで、空疎で、一瞬で壊れ、芭蕉の木の幹のように脆く、焼いていない器に似てたちまち壊れ、しっかりしたものではない。(21.73)

秋の雲に似て、また稲妻のように一瞬しか留まらず、魔術や蜃気楼や夢の現れのように、一瞬だけ現れ出る。(21.74)

このように見る時、私の心は諸行（森羅万象）の中に享樂を欲しない。欲望の居場所である享樂は、煩惱の苦しみの根源、恐怖の源泉だ。(21.75)

欲望は、宝石をもつ黒蛇（毒蛇）のように、鬭争を生じ、危険をもたらす。海の水のように満たされることがなく、塩水のように渴きを増させるものだ。(21.76)

それは蜜を塗った刀の刃の如く、また錆びや汚れの如くある。このように黒い姿をもつ欲望というものは、糞便の入った壺のように汚らしい。(21.77)

清らかな心を持つ有徳の者たち、賢者たちは、それを非難し、遠ざけてきた。このようにそれを認識して、私の心は快樂の享受を望まないのだ。(21.78)

それ故、私は悟りを得るために出家することを熱望している。このように考えて、私の悟りの達成を助ける者となりなさい。(21.79)

だからカンタカをすぐに連れてきて、私に与えなさい。この功德の力によって、お前も感官が清らかになり、吉祥なる光輝ある善き徳性の器たる者となり、菩薩ともなり得るだろう」(21.80)

その決意を固めた者が語った言葉を聞いて、チャンダカは涙で汚れた目で彼を見つめ、次のように言った。(21.81)

「ああ主よ、どうしてこれほど世間知らずなのですか。この貞淑な妻、やさしく美しい王妃様を捨てようと願われるとは。(21.82)

これらすべてのあなた様の妻たち、妻としての法に忠実で、夫に対する貞節のある、とても美しい肢体の女性たちを、どうして捨てようとなさるのですか。(21.83)

ヴェーダ聖典と学問論書の王たるかの師（梵天）であっても、妻を伴いながら、梵行の誓戒を守り、森で苦行を修めています。(21.84)

頭に螺髻を持つかの大自在天（シヴァ）も、シャクティを伴い、ヨーガ行の誓戒を守り、世の生類の益のために活動しています。(21.85)

一切を維持するかのハリ・ヴィシュヌも、ラクシュミーを伴い、常に淨行において神々を含む諸世界の者すべてを喜ばせながら、守っています。(21.86)

このように、護世王の神たちも皆、それぞれの妻を伴いながら、それぞれの伝統的な家族の誓戒を守りつつ、常に浄行において活動しています。(21.87)

すべての仙人たちも同様に、それぞれの妻を伴い、それぞれの伝統的な家族の誓戒を守りつつ、苦行森で活動しています。(21.88)

同様に、聖者たる王たちもすべてそれぞれの妻を伴い、苦行森に身を置くと、牟尼の誓戒を行っています。(21.89)

このように認識して、王中の王たるお方よ、もしあなたが悟りを欲するのであれば、シャクティ（神秘的な女性力をもつ配偶者）と共に、いっしんに伝統的な家族の誓戒を行じて下さい。(21.90)

なぜなら、シャクティなしには、すべての誓戒も、すべての供儀も、さまざまな苦行も、成就することがないからです。(21.91)

このように認識されて、わが主よ、あの貞淑なるお方、正妃にして善良な女性である、妻たるヤショードラー様を眠りから目覚めさせて下さい。(21.92)

あのシャクティたる、貞淑な妻たるお方を、よく納得させ、喜ばせてあげて下さい。そしてあれらのあなた様のすべての妻たちをも、覚醒させ、喜ばせて下さい。(21.93)

あの女性たちの全員、彼女たちも誓戒を行うことをもし望むなら、あなたはそれらのシャクティたちと共に誓戒を行って下さい。(21.94)

たとえ全員が望まなくとも、もしあなた様の誓戒を欲する女性たちがいるなら、望むように彼女らと一緒に、専心して行って下さい。(21.95)

あの女性たちの中に、あなた様と共に誓戒をなすことを欲する人がもし一人もいないのなら、ただ一人、ヤショードラー様だけは覚醒させてあげて下さい。(21.96)

あの尊い正妃であるお妃様を目覚めさせ、心の準備をさせ、彼女の許しを受け取ってから、あなた様は望みのまま、出家なさって下さい。(21.97)

もしそうなれば、あなた様には常にあらゆるところで、めでたい幸せがきつとありになるでしょう。このようにお考えになり、さしあたっては王としての務めという誓戒を行って下さい。」(21.98)

以上の彼（チャンダカ）によって語られた言葉を聞くと、一切知である菩薩は、納得させられたかのように見つめて、チャンダカにこう言った。(21.99)

「チャンダカよ、あなたは私の助力者だ。それ故、あなたがここで言う通りの、そのすべてを私は行おう。ヤショードラーを眠りから目覚めさせなさい。(21.100)

私の愛する女たちをも皆、努力して目覚めさせ、速やかにここへ連れてきて、満悦した気持ちにさせつつ、喜ばせてあげなさい。(21.101)

私もまた、これらのわが愛する女たちをすべて見ながら、覚醒させ、彼女たちが朗らかな心で同意するようにしよう。」(21.102)

このように主が命じたのを聞いて、チャンダカは嬉しく「承知いたしました」と答え、ヤショードラーを見つめて、彼女にこう告げた。(21.103)

「ああ、お妃様、旦那様がお呼びになっていますよ。ですからすぐ起きて、旦那様の前に出てゆき、お会いになって下さい。」(21.104)

彼によってそのように呼ばれても、ヤショードラーは深く眠り、眠りの深い昏睡に諸感覚を圧倒されたまま横たわっていた。(21.105)

その後チャンダカは行って、呼び集めるため主の美しい可愛い女たちに近づいて、彼女たちすべてを見つめた。(21.106)

その時或る女たちは寝椅子に坐り、頬に手を当て、眠りの故に琵琶を放り出し、まるで激怒している女のような有り様であった。(21.107)

或る女たちはムリダंगा太鼓を愛人のように両腕で抱きしめ、眠りに体の所作を支配されて、地面の上に横たわっていた。(21.108)

他の女たちは真珠の首飾りが散乱した肢体を示し、耳飾りが顔から落ちており、[欠損]体を屈めており、或る女たちは蔓草のような腕という縄をもってお互いに巻きつきあい、(21.109)

或る女たちは女友達を抱くかのように七弦琴を抱いて眠り、或る女たちは肩から絹紐ずり落ち、別の女たちは目を閉じて、真夜中に.....顔を歪めていた。(21.110)

或る女たちはひどく乱れた髪で、散り乱れた花輪をつけ、衣が腰から脱げ落ちて、体から装身具が外れていた。(21.111)

他の女たちは恥じらいも無く、手足を投げ出した体をみせ、[また別の女たちは]目を開いたまま白いジャスミンのような[白目をみせ]、(21.112)

或る女たちは口の穴を開けたままで、酔ったかのように目をうつろに転じ、或る女たちは四肢を露出し、だらだらと垂らした涎だらけの顔になっていた。(21.113)

或る女たちはぎりぎり歯噛みしており、また口からうわ言を発し、あるいは隠部をさらけ出し、或る女たちは死人のようになっていた。(21.114)

それらすべての美女たちはこのように身動きせず、意識を失い、まるで餓鬼たちの住処(墓場、尸林)にある死体のように、変わり果てた恐ろしい姿であった。(21.115)

彼はそれらの女たちがすべてが死体のような姿であるのを眺め、張り裂けそうな心で再び見つめつつ、大きな声で何度も呼びかけた。(21.116)

しかしチャンダカから何度も繰り返し大声で呼ばれても、その声を聞いて目覚める女は一人もいなかった。(21.117)

こうしてその女たちが皆、身動きせずに[昏睡して] いるのを見て、チャンダカは再び見渡ししながら、大きな不安に悩みつつ、心の中でこう考えた。(21.118)

「これらすべての美女たちは眠りに支配されて意識を失っている。私がこのように呼んでも、一人として起き上がらない。(21.119)

きっと神々の威神力によって、これらすべての女たちは迷乱させられ、深く眠らせる大きな眠りの中で身動きせずに横たわっているのだ。」(21.120)

このように確信し、ひどく動揺し憂悩したチャンダカは、主（菩薩）のそばに寄って合掌してこう言った。(21.121)

「神々の威神力によって、きっとすべてのこの女たちは意識の迷乱状態に陥っているのです。[ただし] 瞬時に、あなた様の愛しい女たちは、正しい意識を保って覚醒するかもしれません。(21.122)

あなた様のとても愛しい美しい妻たちが眠りから醒めた時、すべての女たちは起き上がると、今ここに来ることでしょう。(21.123)

すべての女たちを見つめ、美しい眼差しで不安を消してあげて、教え諭しながら、清浄なる法（ダルマ）の中に導き入れ、よく行なわせて下さい。(21.124)

今後[あなた様が] 若いうちは、彼女たちと共に愛に耽り、喜び、家の伝統的な行為の誓戒を保って、家の中で幸せに暮らして下さい。(21.125)

このような栄光と幸せの達成は、三界においてさえ得がたいものです。また護世王の神たちも皆、これを得ることを切望しています。(21.126)

それなのにあなた様は、運命のおかげで手に入れたこのような栄光と幸福の成就を、まるで草きれのように捨てて、出家しようと望んでいるのです。(21.127)

すべての善き人々は、大きな栄光と幸福を願う故、森の隠遁地に身を寄せて苦行の誓戒を行っているのです。(21.128)

しかしあなた様は、得ている栄光を捨てて苦行を行おうとしています。これほど大きな栄華を、どこであなた様は手に入れようというのでしょうか。(21.129)

あなた様の王国は大地すべてであり、あらゆる王たちはあなた様の従者です。あなた様には七宝があり、富財は『美と繁栄の女神（シュリー）という荷をもつ者』（王）を超えています。(21.130)

ああ、あなた様には数千の女たちがおり、彼女たちすべてがまるで女神シュリーや女神ラティのようです。八万四千の侍女たちはあなた様を寄る辺として頼っています。(21.131)

宮殿を住処とする美女たちは、まるでインドラ神の宮殿（ヴァイジャヤンタ）にいる最高女のように。あなた様のすべての食べ物も、とても美味です。(21.132)

美しい衣服のすべても、神々しい装身具、すべての財もあなた様のものです。大地の主たるあなた様に何が無いというのでしょうか。(21.133)

このような栄耀をさえ捨てて、去ろうと望むのですか。今さら、苦行によって他に何を得ようと望むのですか。(21.134)

もし森へ去って誓戒を行ぜんとする望みがおありにあるなら、年老いた時に私たちは森に身を寄せて誓戒を行いましょう。(21.135)

偉大な王様、若いうちは王国に留まり、欲するがままに幸せを享受し、愛する女たちと共に楽しみ下さい。(21.136)

施しを与え、民を守り、家系の誓戒を行って下さい。そうすれば、私たちにはきつと常にあらゆる所でめでたい幸せが生じるでしょう。」(21.137)

このようにチャンダカが敬意をもって語ったのを聞いて、再びかのサルヴァールタシッダは次のように語った。(21.138)

「チャンダカよ、かつて無数の幸福な欲望を私は享受してきた。しかしそれらは煩惱と苦しみの源であって、悪いものであり、老いと病と死の痛みを与えるものだ。(21.139)

欲望を原因とした、数え切れないほどの打擲や拘束などの、また手や足の切断などの痛みをかつて私は味わった。(21.140)

かつて私は欲望の対象に執着し、煩惱に心を乱され、なすべきではない行為をして、放逸に振る舞っていた。(21.141)

十悪に愛着し、いつも欲望を楽しんで行為し、その罪惡に汚された自己は煩惱によって諸感官を乱されていた。(21.142)

さらに一層、欲望に執着して正法をも誹謗しながら、恐ろしい罪深い行為をなしては、輪廻的生存の中を徘徊しつつ、(21.143)

その罪惡によって、大きく激烈な苦しみの炎に諸感官を焼かれ、諸地獄でもあらゆる場所に堕ちて、苦を味わった。(21.144)

様々な苦しみの火に焼かれ、とても耐え難い痛みにも包まれ、後悔に心を焦がし、打ち碎かれた心でずっといた。(21.145)

その時、私は確固たる心を抱いて、苦しむ者たちの守護者である仏陀を憶念し、いっしんに合掌して何度も礼拝した。(21.146)

すると、その三界の主は慈悲の眼差しで私を見て、功德の光線をもって私を引き上げ、仏の住まいへと送った。(21.147)

そこに着くと、私は三宝（仏・法・僧）に帰依をなし、清浄な戒における誓戒を堅持し、常に浄行をなした。(21.148)

その功德によって自心を清め、心集中して法を聴聞し、諸サンガ（僧団）に仕えるために布施をなし、喜び信奉した。(21.149)

その後、その功德が自心に付着した者、浄らかな三輪（施者・受者・施物）をもつ者となり、菩提心を得て、菩提行を私は行った。(21.150)

その功德により自心を浄め、常に天界の住まいにいて、輝かしい栄光と幸せの達成を味わいながら、常に浄行を私は行った。(21.151)

それでもなお正覺（菩提）を愛する私の心は満足しなかった。それ故、そこ（天界）から死没すると、益をなすために人間界に私はやってきた。(21.152)

其処で長者の家に誕生するを得て、豊かな富を有し、常に乞い求める者たちに施しを与え、常に浄行を行った。(21.153)

その功德の果報として、再び天界の住まいへ行き、天女たちと愛に染まり、欲望を享受して私は常に楽しんだ。(21.154)

其処でも、正覚を熱望している私の心は満足しなかった。それ故、死没して、再び益をなすために私は人間界に喜んでやってきた。(21.155)

其処でヴァイシャ（庶民）の家に誕生するを得て、栄光と富財を具えもち、施しを与えつつ快楽を享受し、愛する女たちと共に楽しんだ。(21.156)

また同様に、王家に誕生するを得て、大きな富楽を有し、美女たちと愛に染まり、そのように快楽を享受して私は楽しんだ。(21.157)

また同様に、婆羅門の家に誕生するを得て、富楽を有し、常に誓戒を保ちながら、妻を有して愛欲を味わい、私は楽しんだ。(21.158)

また私はあらゆるジャーティ（カースト的職業集団）の家においても数千回の誕生を得て、施しを与えつつ、愛欲を享受し、愛する女たちと共に楽しんだ。(21.159)

転輪王の家にも数千回の誕生を得て、美女との愛欲の行為に執着し、施しを与えつつ、私は快楽を楽しんだ。(21.160)

それでもなお、正覚を熱望する私の心は満足せず、正法の功德の享楽こそを享受したいと望んでいる。(21.161)

私はあらゆる所に至り、数千回の誕生を得て、美女たちと愛に染まり、施しを与えつつ、快楽を楽しんだ。(21.162)

私は何度も繰り返し、あらゆる護世王の神たち（四天王）の家に誕生を得て、栄光と幸せの達成を味わいながら、喜び楽しんだ。(21.163)

また何度も繰り返し神々の王（インドラ）にもなり、天女たちの群と共に、輝かしい栄光と幸せの達成を味わいながら、私は心ゆくまで快楽を楽しんだ。(21.164)

同じ様に、私は数多く、夜摩天（ヤーマの神々）の王となり、兜率天（トウシタの神々）の王となり、化乐天（ニルマーナラティの神々）の王、また他化自在天（ヴァンシャヴァルティンの神々）の王ともなって、(21.165)

輝かしい栄光と幸せの達成を享受して、欲するがままに私は楽しんだ。しかしそこでまた、正覚を熱望する私の心は満足を感じなかった。(21.166)

私は何度も繰り返し色界の天界においてあらゆる所に生まれ、寂静の心で禪定の快さを享受しながら、喜び楽しんだ。(21.167)

また何度も繰り返し無色界の神の王となり、大自在天としての栄光を享受しても、私の心は満足しなかった。(21.168)

梵天たちも、バラモンたちも、牟尼たちも、出家行者たちも、ヨーガ行者たちも、欲望のために、罪を犯した者、転落した者となる。(21.169)

神ヴィシュヌ・ハリも、欲望のために悩苦しめた心で、女たちを策略によって奪い、敵たちを殺して、転落した者となった。(21.170)

神シヴァ・マハーンドラでさえ、欲望のために悩苦しめた心で、情け容赦なく敵を殺し、感官を狂酔させた者として振る舞った。(21.171)

同じ様に、護世王の神たちも皆、欲望・煩惱に酔いしれ、家の伝統法を失って墮落し、諸地獄へと転落した。(21.172)

同じ様に、すべての惑星（グラハ）たちもまた、欲望・煩惱によって驕り高ぶり、羞恥の法を失って墮落して、悲嘆して歩む。(21.173)

同様に、星々も、シッダ（成就者）たちも、サードゥヤ神たちも、ヴィディヤダラたちも、ガンダルヴァたちも、キンナラたちも、薬叉たちも、グヒヤカたちも、羅刹たちも、(21.174)

クンバーンダたちも、ガルダ鳥たちも、ナーガ（龍）たちも、ダイティヤ（アスラ）たちも、神々も人間も、欲望を原因として輪廻的生存に執着し、煩惱に心乱されて、(21.175)

家の伝統法の行いを捨て、羞恥なく狂酔した心で、敵対し、争いを行い、何度も繰り返し転落した。(21.176)

王たち、クシャトリヤ（武士階級）たちも、欲望・煩惱に驕り高ぶり、敵対し、争いを行い、死んで閻魔の住まいへと行った。(21.177)

同様に、王の顧問官・大臣たちも、兵士・軍兵たちも、従者たちも、欲望のために主君の任務において戦いを行い、転落した。(21.178)

同様に、ヴァイシャ（庶民）たちも、欲望のために財物を過度に欲しがり、昼も夜も疲れ果てながら富の獲得をしている。(21.179)

商人たちや隊商主たちも、欲望のために財物を得ようと、大海を越え、苦しみを味わいながら遊歴している。(21.180)

職人たちもまた皆、欲望のために財物を欲しがり、昼も夜も休むことなく、労働の苦しみを味わっている。(21.181)

奴婢たちも、欲望のために財物を欲しがり、昼も夜も休むことなく、うち叩かれ、仕事をしている。(21.182)

また荷運び人たちも、欲望のために、常に重荷に体を押しひしがれ、休むことなく大きな荷を運びながら歩いている。(21.183)

また農夫たちも、欲望のために、常に労苦して暑さ・寒さに体を苛まれ、苦しみを味わっている。(21.184)

このように偉大な者たちも皆、欲望のために、女たちの支配下に留まり、家の伝統法に満足し、まるで喜ぶ奴隷のように過ごしている。(21.185)

獣も鳥も、様々な昆虫などの生き物たちも、欲望のために殺され、すべての野獣たちは地獄に堕ちる。(21.186)

三界に住む者たちは皆、欲望・煩惱の火に焼かれ、家の伝統法の誓戒すら捨てて、悪行においても働いている。(21.187)

このように、欲望は生類の過惡であって、正真の伝統法の誓戒を終わらせ、苦の原因となり、惡を養い、一切衆生に惡事をもたらすものである。(21.188)

このように考えられて、欲望は偉大な認識をもつ出家行者たちや梵行者たちによって咎められ、非難され、惡しき矢の如く避けられている。(21.189)

あらゆる衆生を正覺（菩提）への道に導いて安住させ、覺醒させつつあるならば、いったい誰が欲望の格別な性質に執着し、美女たちを寄る辺として留まるだろうか。菩提行の誓戒を守り、いっしんに淨行をなすべきだ。(21.190)

菩提行の誓戒をもつ者は、欲望を捨てて四無量心（梵住）を保ち、一切衆生に益をなしつつ、心集中して行をなすべきだ。(21.191)

そうすれば後に、その人は大きな神通力を持つ菩薩、勝れた知性の出家行者、阿羅漢となり、惡魔の軍勢を打ち破り、正覺を得るだろう。(21.192)

その後、一切世界において正法を広め、世の生類を善法から成る者に変え、すばらしい涅槃を得るだろう。(21.193)

このようにしてすべての仏たちも、欲望の拠り所である家を捨てて出家し、森で苦行を行い、淨らかな三輪を有する者となり、(21.194)

惡魔の軍勢すべてを打ち破り、無上の正覺を得て、三界から成る世界において法の教えを与え、(21.195)

世の生類を善法から成る者に変え、完全なる涅槃へと赴いたのだ。私もまた同様に、一切〔の生類〕を幸せな存在に変えることを切望している。(21.196)

私は欲望の拠り所である王位を捨てて、森の隱棲處で出家し、極めて困難な苦行を行い、惡魔の群を打ち破り、(21.197)

正覺の智慧に達し、仏の位を得て、三界から成る世界において正法を明らかにし、(21.198)

あらゆる衆生を正覺（菩提）への道に導いて安住させ、一切衆生を目覺めさせ、すべてを善法から成るものに変え、涅槃を得ることを熱望しているのだ。こう考えて、あなたは馬を速やかに引いてきて、私に与えなさい。」(21.199)

このようにかの主が命じたのを聞いて、かのチャンダカは菩薩を見つめ、再びこのように語った。(21.200)

「わが主よ、正覺を望むあなた様がお語りになられたことは真実です。それでも、大王様、あなた様の利益のために私が語ることをお聞きください。(21.201)

もし欲望の快樂への欲求があなた様に全くなく、正法への望みだけがあるのであつても、私の言う通りになさして下さい。(21.202)

大王様、あなた様が若くて、神々しい非常に美しい若者であるうちは、王位での生活に留まって、菩提行の誓戒を行いつつ、(21.203)

すべての生類に益をなし、民を自分の息子のようにお守り下さい。施しを与えて快樂を享受し、欲するがままに行動なさして下さい。(21.204)

父王は老いておられます。あなた様には息子もなく、ご兄弟もあなた様には一人もおりません。(21.205)

まるでインドラ神の〔天界の〕繁栄に匹敵する、これほどのあなた様の国での繁栄をもつこれらの人民を、父君の死後、誰がここで王となって守るのでしょうか。(21.206)

ですから、あなた様が若いうちは、王位での生活に留まり、乞い求める者たちに望みのままに布施をなしつつ、人民を保護するという誓戒を行って下さい。(21.207)

わが主よ、あなた様が年老いた時、森の隠棲処へと出家し、牟尼（聖者）の行の誓戒を守って、いっしんに行をなさして下さい。(21.208)

もしそうなれば、あなた様には常にあらゆるところで、めでたい幸せがきつとありになるでしょう。生きている間に快樂を味わい、生の終わりに、よき涅槃に赴かれて下さい。」(21.209)

賢いチャンダカがそう語った言葉を聞くと、菩薩・大士は、再びこのように語った。(21.210)

「よき友よ、家庭生活の人生期についてもし八つの懸念がなかったなら、あなたが語った通りに家に留まって、そう行動することを私は願うだろう。(21.211)

(1) 私が常に若々しく、諸感官が衰えることがないなら。(2) 私の体がいつも健康であり、病が決して襲わないなら。(21.212)

(3) 死が現れず、命があるなら。(4) ずっと愛する者との離別がないなら。(5) これらすべての愛らしく美しいわが妻たちを、老いが襲わないなら。(21.213)

(6) このような大自在天の世界のような繁栄が決して滅び去ることがないなら。(7) あらゆる生類がもつ煩惱の火が鎮まるなら。(21.214)

(8) もしここ（家）にいても正覚を得て、涅槃を得られるなら、私は王位を捨てて森の隠棲処へ出家することはない。(21.215)

ずっと常に王位での生活に留まり、乞い求める者たちに望みのままに与え、家の伝統の行為の誓戒を守って活動することを私は望むだろう。(21.216)

以上の八つをこの世界で与えることができる者が、もし森の隠棲処にいるならば、私はその者に帰依し、常に仕えることを欲する。」(21.217)

このように主によって語られたのを聞き、そのチャンダカは泣いた。そして彼の主を見つめ、再びこのように語った。(21.218)

「(1) 老いに襲われない者が誰かいるでしょうか。(2) 病に苦しめられない者が誰かいるでしょうか。(3) 死に呑み込まれない者が誰かいるでしょうか。(4) 愛する人との離別がない者が誰かいるでしょうか。(21.219)

(5) 若さが衰えない者が誰かいるでしょうか。(6) 繁栄がずっと続く者が誰かいるでしょうか。(7) 煩悩が鎮まった者が誰かいるでしょうか。(8) 家にいて正覚を得た者が誰かいるでしょうか。(21.220)

梵天をはじめとするあらゆる神々も、すべての護世王の神たちも、老いに体が衰え、病に侵され、時が来れば死に襲われます。(21.221)

どんな生き物であっても親族や友人たちの悲しみの火に焼かれます。すべての者の成功繁栄は雲の如く、わずかな間しか留まりません。(21.222)

誰もが煩悩をもち、慢心あり、家の伝統の行為により尊ばれています。出家行者やヨーガ行者たちは、正覚を得ることは出来ません。(21.223)

このように考えて、若いうちは王位での生活にとどまり、菩提行の誓戒を守りながら、好きなように行動しなさい。(21.224)

年老いた時に、王位での生活を捨てて、森の隠棲処で出家して禁戒を守り、専念して行をしなさい。(21.225)

そうすれば常にあなた様に幸いがあり、きっと大きな喜びがあるでしょう。正覚にも達し、よき涅槃を得られるでしょう。」(21.226)

このように彼が語ったのを聞いて、偉大な知性をもつ菩薩はそのチャンダカを見つめ、再びこのように教示した。(21.227)

「チャンダカよ、あの恐ろしい死は、誰の支配下にあるというのか。死は不意に嗅ぎつけて（最後のキスをして）、忽ちのうちに神々さえも飲み込んでしまう。(21.228)

そのようにあの極めて残酷な死は、不意に、突然やってきて、私を飲み込み、そしてあなたを、そしてこれらすべての女たちをも飲み込むだろう。(21.229)

その時、私は何ができよう。あなたも何ができよう。これらのわが親族や愛する女たちは、その時私のために何ができようか。(21.230)

〔看取る〕女たちは誰もが悲しみの大きな苦しみの炎に身を焼かれ、まるで沢山の手の中で抑えつけられているかのようになる。あなたも私も実に同様なのだ。(21.231)

このように考え、観るので、私は王位での生活に留まって家系の世襲の仕事を守りながら行動することを望まないのだ。(21.232)

だが煩悩の火に焼かれ、苦しみの海に沈み、輪廻的生存の森の中を彷徨っているこの世界のすべての生類、(21.233)

無明に盲目となり、誕生・病・老い・死という危難をそなえ、飢えと渇きの火に焼かれ、悪しき敵たちに囲まれている〔彼ら〕、(21.234)

依処なく、慰めもなく、庇護者なく、最後の避難所もなく、導いてくれる者もなく、卑しく、正法の徳性を欠いている〔彼ら〕、(21.235)

その苦しんでいる彼らを見て、憐憫と同情の心を抱く私は、悟らせるために、努力して正覚を得ることを欲するのだ。(21.236)

その目的のため、私はこれまで望む通りに布施を与えなかつただろうか。善き禁戒を守って、誓戒を実施しなかつただろうか。(21.237)

わが身が引き裂かれても、私は忍辱をどこで行わなかつただろうか。世の生類を益するための諸法において、精進を成し遂げなかつただろうか。(21.238)

菩提心に基づき禅定をなして、あらゆる煩惱が打ち破られた。悟りの成就という光輝ある智慧を、私は成し遂げた。(21.239)

それ故、今や私は、世のすべての生類を努力して覚醒させ、悟りの道へとしっかり導き、歩ませようと欲する。(21.240)

それ故、私は王位での生活を捨て、仏の隠棲処において出家し、菩提行の誓戒を守り、すべての外道たちに勝利し、(21.241)

あらゆる悪魔の軍勢を打ち破り、淨らかな感官を保ち、阿羅漢として悟りを得て、仏の位に達し、(21.242)

三界の世において正法を明らかにし、生類を善法から成る者に変え、涅槃を得ることを私は欲する。(21.243)

私がいつも想い描いてきたまさにその時が到来した。だから私は今まさに世の生類の益のために出家する。(21.244)

もしあなたが私に愛情をもつなら、あるいは、もし正法を望むなら、馬のカンタカを速やかに連れてきて私に与えなさい。」(21.245)

このように語る率直な教令を聞くと、チャンダカは泣きながら、合掌して彼の主に拝礼し、見つめながらこう言った。(21.246)

「わが主よ、もしあなた様が世の生類の益のために出家する決意をお持ちならば、あすの朝、父王のご尊顔を拝して許可を得て、心悦び、(21.247)

また母君のご尊顔をも拝し、妻たちをなだめて、幸運を祈る儀式を執り行つた後、心悦びつつ大きな熱意をもって旅立って下さい。」(21.248)

チャンダカがこのように語つたのを聞くと、菩薩は助力者たるそのチャンダカを見つめ、このように教示した。(21.249)

「どうしてそのように去ることができようか。主君である父が私を見れば、兵衆と一緒にすぐさま私を確保し、努力して引き止めることだろう。(21.250)

あのわが母ガウタミーも、妻ヤショードラーも、私を見れば突然抱きしめ、懸命に引き止めるだろう。(21.251)

同じ様にこれらすべての妻たちも、私が旅立つのを見れば、愛情と愛欲の炎に身を焼かれ、またヤマの住処（冥府）に赴くことだろう。(21.252)

同様にすべての民衆も、私が出て行くのを見れば、突然道を塞いで囲み、あらゆることで邪魔をするだろう。(21.253)

そうになったら、世の生類の益のために出家して旅立つことを、どうして敢行できようか。王をはじめとするすべての人々が全力で妨げることだろう。(21.254)

このように考えるので、私は今、すべての人々が深く眠っている真夜中に、自ら馬に乗って去ることを欲する。(21.255)

もしあなたに、あらゆる目的と菩提を成し遂げる者である私に愛情があるなら、あの馬を連れてきて、速やかに私に与えなさい。(21.256)

もしあなたがここに連れてきてくれれば、私は自発的に去った者として、直ちにかのcantakaに跨り、今こそきつと出発する。」(21.257)

菩薩がこのように語ったのを聞いて、空にいた神の王は、その菩薩を見つめ、称賛しながらこう教示した。(21.258)

「大士よ、あなたは幸あるお方だ。あなたがお語りになったことがきつとその通りに真実になるよう、今こそ出離しなさい。」(21.259)

大自在天もそれを聞き、空中にあつて喜び、その菩薩に呼びかけ、見つめながらこう教示した。(21.260)

「出離しなさい、大士よ、今です。遅滞してはいけない。あらゆる生類に益をなすために、法という不死の甘露を雨降らせて下さい。」(21.261)

同様に梵天もそれを聞き、空中にいて、その菩薩に呼びかけ、見つめながらこう教示した。(21.262)

「出離しなさい、一切知よ。あなたの望みは成就するだろう。それ故、今、行きなさい。菩提樹に行って坐りなさい。(21.263)

もしあなたが出離するならば、転輪の人王、一切法王、大地の支配者たる王となるだろう。」(21.264)

同様に、浄居天の天使たちもそれを聞くと、その菩薩に呼びかけ、見つめてこのように教示した。(21.265)

「あなたは時に適って兜率天から死没し、母の胎内に入りました。あなたは時に適って誕生しました。同じ様に、一切知よ、時に適って出離しなさい。(21.266)

あなたの法の甘露を飲むことを、神々を含むあらゆる衆生が、あたかも飢饉に苦しむ者たちが雨雲を待つように、切望しています。(21.267)

それ故、速やかにここを去り、樹木の王（菩提樹）のもとに行つて、すべての魔の軍勢を打ち破り、最高の悟りを得て、(21.268)

三界からなる世界において正法を教え、常に〔衆生を〕善法から成る者に変え、よき涅槃を達成しなさい。」(21.269)

そのとき虚空にいた神々は、それを聞いて歓喜し、花の雨を降らせ、拝礼してこのように語った。(21.270)

「勝利あれ！あなたが願う通りに、あなたのなすべき事が成就しますように！しっかりその事を見据えて、世の生類の益のために出家しなさい。(21.271)

あなたの心は常に決して五欲の対象に染まりません。すべての衆生に益をなすため、正法だけを欲しています。(21.272)

その目的のため、菩提の資糧を次第に満たしてきて、ここであなたのそのすべてが成就することでしょう。それ故、速やかに出離しなさい。」(21.273)

以上のそれらの神々によって語られたことを聞いて、菩薩は、空中にいるそれらすべての神々を眺め、歓喜に心を躍らせた。(21.274)

出離の時をはっきり知り、意欲して、彼は助力者であるかのチャンダカに呼びかけ、理解せしめた。(21.275)

空中にいるそれらすべての神々を指し示すと、とても清らかな睡蓮のような顔で、彼を見つめて、こう言った。(21.276)

「見よ、チャンダカ。私を促すために神々がやって来ている。だからチャンダカよ、今さら再び私の心を悩ませるな。(21.277)

もしあなたが正法を欲するなら、速やかに私に馬を与えなさい。もしあなたがここで妨害をするなら、あなたは罪惡に汚れることになる。(21.278)

もしここで速やかに連れてきて、私に馬を与えるなら、幸せと栄光とよき徳性の礎となる正法をあなたは得るだろう。」(21.279)

こう彼が言った言葉を聞いて、神の子シャーンタマテイ、ならびにラリタビューハという名の神の子も、彼の決意を知ると、(21.280)

さらに都に住むすべての人々を眠りにつかせ、人々の話し声を消し去り、無人の如き状態にした。(21.281)

菩薩の出離の時を思い、護世王の神たち（四天王）が皆、従者たちを連れて、その都に集まってきた。(21.282)

彼らは天界の供養の贈物を携え、それぞれの方角からやってきて、出離しようとする大士を供養するために近づいた。(21.283)

その場で護世王の神たちすべてがそれぞれの家来たちと共に、それぞれの方角に位置しつつ、合掌し拝礼して立った。(21.284)

幾千コーティの数のガンダルヴァたちは、歌詠や伎楽の演奏とともに大歓声をなして、東の方角に位置した。(21.285)

数十万コーティの数のクンバーンダたちは、あらゆる宝石の花鎖を携え、天の水に満ちた水瓶を持ち、南の方角に位置した。(21.286)

数千コーティの数の龍（ナーガ）たちは、様々な宝石の花鎖を携え、香ばしい花の雨を降らせ、西の方角に位置した。(21.287)

数千コーティの薬叉たちは、『光の露』の宝石の花鎖とあらゆる刀剣類を携え、北の方角に位置した。(21.288)

インドラ（帝釈天）もまた、供養の品や装身具、また天蓋・旗幟・幢幡を携えたすべての三十三天の神々と共に、中間に位置した。(21.289)

ヤーマ天、トゥシタ天、化楽天、他化自在天のあらゆる神々も集まり来た。(21.290)

同様に、ブラフマー（梵天）をはじめとするすべての神々、仙人、梵行者たちも、出離をなすかの大神を供養しようと欲し、(21.291)

天界の供養の贈物を携え、速やかにやってきて、空中に位置し、諸感官に歓びを漲らせて立った。(21.292)

金剛手をはじめとする勇ましい者たち、ヨーガ行者たち、グヒヤカたち、シッダたち、サードゥヤたち、諸惑星、星々、ヴィディヤーダラたち、キンナラたち、(21.293)

ガルダたち、羅刹たち、ダイティヤ（阿修羅）たち、また他の大神通力の者たちも、彼の出離する道において供養をなすために位置した。(21.294)

そのとき、プシヤという名の星宿が、シュリー（女神）に似た姿となり、菩薩の前に経ってこう言った。(21.295)

「サルヴァールタシッダよ、今やあなたのすべての目的が成就します。星宿プシヤもあなたの前にあります。それ故、今が出立すべき時です。(21.296)

私もまたあなたと共に活動することを欲します。常に誓っていた通りに、実現されますように。(21.297)

苦しみに打ちのめされているすべての生類を、速やかに輪廻的生存の海からお救い下さい。今や出離の時が到来したと、見て下さい。(21.298)

三十三天の神々も、また家来を伴った護世王の神々も、すべての星々を伴った惑星たちも、すべての勇ましいグヒヤカたちも、(21.299)

ガンダルヴァたち、キンナラたち、薬叉たち、すべてのヴィディヤーダラたちも、クンバーンダたち、羅刹たち、龍たち、ガルダたち、ダーナヴァ（阿修羅）たちも、(21.300)

梵天をはじめとする聖者たちも、偉大な智者たちも、大神通力を持つ者たちも、あらゆる場所から集まって、空中にいます。(21.301)

この都に住むすべての人は深く眠っています。象などの乗り物獣も、すべての獣や鳥たちも、(21.302)

国王、王家の青年たち、あらゆる釈迦族の人たち、大臣たち、長官たち、軍の兵士たち、すべての都民も、召使たちも、(31.303)

皆眠らされて、大きな眠りに諸感官が支配されて意識が迷乱した状態にいます。目覚めている者はここに一人もいません。皆、死人のように横たわっています。(21.304)

ですから、ずっと願われていた、その時が到来したのです。それ故、今、見逃さずに、三界の生類の益のために出家しなさい。」(21.305)

このようにその〔星宿の〕語った言葉を聞き、気づきを得た菩薩は、チャンダカに呼びかけ、見つめながらこう命じた。(21.306)

「チャンダカよ、神々が語ったその言葉をあなたは聞いた。だから、速やかに馬を連れてきて、悟りの達成のために私に与えなさい。(21.307)

もしあなたが正法を欲するなら、ここで私の妨げをしてはならない。あなたは私の親友であり、助力者なのだから、益するための努力をしなさい。」(21.308)

このように主が命じるのを聞き、かのチャンダカは泣きながら菩薩を見つめ、溜息をつき、こう語った。(21.309)

「わが主よ、あなた様は適時を知る者です。しかしこのような不適當な時に、どこへ行くというのですか。すべての門は閉じられています。どこから、どうやって出発するというのですか。」(21.310)

彼がそう言ったとき、インドラ神は強固な門がかけられたすべての門と扉をただちに開け、開け放たれた様子を示した。(21.311)

それらを見て、チャンダカは苦悩のあまり、溢れた涙で顔じゅうを汚して、「今、私は何をすればよいのか」と言って地面に倒れ伏した。(21.312)

その後自ら起き上がると、空にいる神々を眺め、驚嘆のあまり心を乱し、仰向いたまま、このように嘆いた。(21.313)

「ああ、私の情けなさよ！私はいかなる助力者たりえようか。今、どこへ走ってゆけばよいのか。主がお命じになったことを、引き止めることができない。(21.314)

あの四種の軍が強力であっても、何ができるだろう。王様も、王の顧問官や大臣たちも、誰も目覚めはしない。(21.315)

すべての釈迦族の男たちの集まりも、すべての女と子供たちも眠らされて、大きな眠りに諸感官が支配され、深く眠っている。(21.316)

きっとこの主人は去って行かれる。この方の望みは成就する。三十三天の神々も皆、その供養のために集まっているのだ。」(21.317)

それを聞いて、そのすべての神々、梵天やインドラをはじめとする者たちはかのチャンダカを見つめ、呼びかけてこう言った。(21.318)

「チャンダカよ、妨げをしてはならぬ。速やかに馬を与えよ。確かに、この大士は三界の生類の益のために出家されるであろう。(21.319)

見よ、チャンダカ、空に神々しい輝きが広がっている。数え切れないほどの菩薩たちが、彼の供養のためにやって来ているのだ。(21.320)

軍勢を連れ、天女たちを伴い、門の上にいるインドラを見よ。三十三天の神々も皆、彼を供養するために空に集まっている。(21.321)

軍勢と乗物獣を伴ったすべての護世王の神たち、またダイティヤ（阿修羅）も羅刹たちも、彼への供養のために空の上にいる。(21.322)

ブラフマー神（梵天）をはじめとする聖者たちも、大神通力をもつ出家行者たちも、ヨーガ行者たちも、彼の幸いを祈るため、空の上にいる。(21.323)

ガンダルヴァたち、キンナラたち、薬叉たち、ヴィディヤードラたち、グヒヤカたち、クンバーンダたち、ガルダたち、龍たちも、彼の供養のために空の上にいる。(21.324)

同様に、十の方角に位置するあらゆる仏たち、菩薩たちも、彼の幸いを祈るため、喜心をもってやさしい眼差しで見守っている。(21.325)

それ故、導師たるこの菩薩をこれ以上悩ませてはならぬ。速やかに馬を連れてきてこの方に与え、汝も法を得よ。」(21.326)

神々がこのように命じたのを聞くと、チャンダカは気づきを得て、「わかりました」と同意し、カンタカのそばへと歩み寄った。(21.327)

其処でチャンダカは、その馬カンタカを見て、泣きながら溜息をつき、馬と向かい合って見つめて、ついにようやく次のように語りかけた。(21.328)

「カンタカよ、お前は知りなさい。この三界の生類の益のため、わが主が王位を捨てて出家しようと望んでいる。(21.329)

それ故、さあ来なさい。速やかに三界の生類の師であるわが主をお運びしなさい。すべての神々の群と一緒に歩いて、森の隠棲処へお連れしなさい。」(21.330)

このように言って、チャンダカは泣きながらその馬カンタカを掴み、主のそばに立たせると、こう言った。(21.331)

「わが主よ、血統よきこの馬が参りました。どうかお乗りください。お発ちなさい。三界の生類の幸せへの希望を成就なさいますように。(21.332)

障礙をなすあらゆる悪しき者たちが、一切の場所で消えますように。勝利の栄光と、幸いの成就が、あなた様の後に続きますように。」(21.333)

そう彼が語ったとき、利口な馬カンタカが、王をはじめとする人々を目覚めさせるため、大きないななきを発した。(21.334)

その大きな音声によっても、誰も目覚めることはなかった。その時その馬はよく眺めて、主のそばに寄った。(21.335)

その馬がそばに来たのを見て、菩薩は立ち上がり、乗るために見つめながら歩み寄った。(21.336)

その時海と山を伴って大地がくまなく震動した。すべての神々は花の雨を降らせながら喜んだ。(21.337)

その時サルヴァールタシッダは、満月の〔光輝く〕姿に似たその馬の上に嬉しく乗り、自らの後宮から出発して進んだ。(21.338)

その場で四天王たちがカンタカの四足を持ちあげながら、その大士を彼自身の宮殿から進ませていった。(21.339)

そして明るく澄み切った心の彼は自分の宮殿から出離して、都城を右繞すると、城門の外へと進んだ。(21.340)

そこへやってきた彼を見て喜んだインドラ神は、彼に敬意を示すと、前方の道を指し示しながら、嬉しく進んだ。(21.341)

ブラフマー（梵天）もまた、彼がやってきたのを見て喜び、めでたい祝福と称賛の言葉で彼を称えと、道を先導して進んだ。(21.342)

出離しゆく彼を見て、都に棲む精霊の神（都の氏神）が速やかに後を追い、泣き嘆きながらこのように言った。(21.343)

「おお、人王よ、大士よ、幸と栄耀とよき徳質の依所たる方よ。転輪王の家系を捨て、真夜中にどこへ行くのですか。(21.344)

あなたがいなくては、この美しい都は輝きを失います。今や私はどうしてこの地にいて快適に活動することができましょう。(21.345)

後宮において、常に喜ばしく活気ある演奏のめでたい音曲を聞くことは、もうありません。鳥たちの囀りを聴くことも、もう決してないでしょう。(21.346)

あなたに再びお目にかかることは困難になり、どこでそれを得られるというのでしょうか。このような繁栄と幸せを享受した後に、それ以外のいかなる幸福が得られるのでしょうか。(21.347)

また三十三天の神々もかつていつもこの地に集まり、あなたの法を聞いて、あなたを恭敬し、嬉しく行動していました。(21.348)

あなたがこの都をお捨てになれば、どの神がやって来るでしょう。すべての護世神たちもまた同様に、この地を眺めることはないでしょう。(21.349)

すべての王たちの頂点に立つ、王中の王の家系が、今や途絶えようとしています。すべての釈迦族の人々の誇りも、滅びてしまいます。(21.350)

『彼〔の相〕を觀れば、彼は地上を支配する転輪王となられる』と、占相師たちによって告げられたその言葉も、偽りとなります。(21.351)

私もまたあなたと一緒にいくことを欲するのです。それ故憫れみの眼差しをもって私をご覧になって、その点で承諾なさってください。(21.352)

この天上の都のような姿を捨てて、あなたはどこへ行こうと望まれるのですか。神々しい栄光に飾られたこの美しい最高の都をご覧ください。(21.353)

どうか明朝、父の大王を訪ね、また母を、そして貞淑なヤショードラーを見て、行動なさってください。(21.354)

これらのあなたの妻である女たちも、夫を真実の法として従う者たちです。どうして気落ちした彼女たちを見捨てて、あなたは出家しようと望むのでしょうか。(21.355)

あなたがもし世の生類を益するため正覚（菩提）を達成せんとして立ち去ろうと願われるのであれば、これら全身が美しい女たちすべてをご覧くださいになり、目覚めさせてから行動なさってください。(21.356)

このような私の言葉をお聞き入れになった後、世の生類の利益のためにあなたが去られるならば、両親や妻たちに大きな喜びと安らぎがあることでしょう。(21.357)

あなたにも大きな喜びと安らぎ、最高の誉れと吉祥の幸運があることでしょう。三界の益を成し遂げる目的がきつと成就します。」(21.358)

その神によって語られた言葉を聞き、大きな思慮をもつ菩薩は、都を司るその精霊を見つめ、このように教示した。(21.359)

「精霊よ、三界への恵みを成し遂げる菩提が得られないうちは、私はここで〔彼らと〕会うことも欲しない。(21.360)

菩提が得られた時、その時私は遊歴しながら、正法という不死の甘露の雨を降らせるため、ここにやって来ます。(21.361)

精霊よ、あなたは戻りなさい。都に留まって人々を守りなさい。仏の位に到達して、私は必ず帰って来ます。」(21.362)

このように菩薩が教示した言葉を聞いて、その女神はその大士を見つめ、次のように答えた。(21.363)

「それではもうここで私は何を語りましょう。どうか行かれて下さい。あなたに浄福がありますように。あなたのお命じを頭頂に戴いて、私は自分の住まいへと戻ります。」(21.364)

このように申し上げて、その神は菩薩・大自在者を見つめ、合掌して拝礼し、静かに自分の住处へと入った。(21.365)

その後、三界の生類の保護者たる菩薩は光を放ちながら、都城を出離して、大きな意気込みをもって空中を進んだ。(21.366)

其処では、〔神象の〕アイラーヴァタの鼻の上の重閣に立った天女の群が嬉しく歌舞音曲をなし、(21.367)

菩薩がやってきたのを見て、歡喜に心を躍らせ、恭敬し、合掌しながら嬉しく拝礼し、次のように称えた。(21.368)

「この方は、光輝ある善き徳性の蔵である菩薩である。生類の益のため菩提の誓願によって、望みのままに施しを与え、(21.369)

かくして持戒・忍辱・精進・禪定の波羅蜜の順序に従って、すぐれた律に自己を清め、四無量心（四梵住）を具え、(21.370)

諸感官を制御して行動し、布薩の誓戒をなし、寂静の行によって自心を清め、すべての衆生の益を心にかけ、(21.371)

自他を平等として行動し、怒りなく、諸感官を清め、偉大な精進の誓戒を堅持し、すべての衆生を益するという目的を叶え、(21.372)

疲倦なき心を持ち、邪悪な者たちに勝って正法を成し遂げ、打ち勝ちがたい煩惱という敵を打ち破り、三輪（身口意）を清め、(21.373)

菩提心をもって禪定をなし、三昧の安樂を得、無執着の心を持ち、自己を知り、智慧の海の彼岸に到達し、(21.374)

一切知者たる智慧という真正の宝石、めでたい幸せと光輝と善い徳性と神通力を具え、すべてを理解せしめる通力を持ち、すべての方便に巧みであり、(21.375)

すべての衆生に益を与えることを菩提の誓願とする心を持ち、邪悪なマーラ（魔）を打ち滅ぼす偉大な力を十分に得て、(21.376)

正法の智慧という真正の宝石、めでたい幸せと美に輝き、一切世界の王中の王、すべての衆生に幸福という目的を叶える者、(21.377)

十地の自在主、守護者、すべての学問の諸徳性の王として、きつとこの大士、大神通力をもつ菩薩は、(21.378)

出家の禁戒を堅持し、あらゆる仙人たちを凌駕し、達成困難な苦行によってもすべての苦行者たちを凌駕し、(21.379)

無煩惱の阿羅漢として、浄らかなる自心を有し、菩提行を全く満たし、悪しきマーラ（魔）の群を打ち破って、菩提を得るでしょう。(21.380)

その後、この方は善逝、仏、一切知、阿羅漢、導師、一切の学問の王、師、法王、牟尼たちの王、大通慧者、生類の庇護主、如来となるでしょう。(21.381)

その後、一切世界に正法を明らかにし、自らの体で作った光の輝きによって普く至る所を浄化し、(21.382)

すべての衆生を救い出し、努力して目覚めさせ、菩提への道の上にしっかり立たせ、常に善行を行わせるでしょう。(21.383)

このように、どんな所においても世の生類を幸せな存在に変えてから、仏としての務めを終え、その後涅槃を得るでしょう。(21.384)

それ故、この方は三界の生類の庇護主、依るべき者、恐怖を消滅させる者、無明の闇に覆われた者たちのための灯火、善き者たちの道であり、(21.385)

邪な敵に襲われ抛り所のない者たちにとっての保護所、病める者たちにとっての良医の王、洪水時の島であるこの方は、すべての人の幸せの抛り所であり、(21.386)

王たちの中の法王、インドラのような千眼をもつ王であり、一切の学問の王、梵行者たちにとってのブラフマー神の如き師であり、(21.387)

智慧あり、英雄、大勇猛の者であり、すべての異論者たちの粉碎者、悪しき外道師たちの調伏者、死ぬ者たちにとってのライオン、(21.388)

澄んだ優しい心情をもち、自心をよく統制し、象王のように泰然自若として、極めて清らかな抛り所となっていた。雌牛の群の中の雄牛の如く、あらゆる集団において上首として卓越し、(21.389)

清らかな月光のように煩惱の熱火に焼かれた者たちに清涼を与え、千の光線をもって輝く太陽のように愛欲と迷妄という闇を滅ぼし、(21.390)

泥に染まらぬ蓮華のように、マーヤー（現象世界の幻惑）の法の塵穢に染まらず、[智慧が] 須弥山のように揺るぎなく、大海のように枯渴することがなく、(21.391)

この方は母神たる大地のように、その恵みの上に一切衆生が依って生きるべきお方であり、また同様に、この方は一切衆生に真の幸せを与えるという目的を叶える善友であり、(21.392)

この方は法の光輝と善き徳性という目的を叶える不動の宝蔵であり、風のように清らかな戒の芳香を運びくる者であり、(21.393)

この方は煩惱魔を焼き尽くし、五蘊魔を打ち破り、天魔たちを粉碎し、死魔たちに打ち勝つでしょう。(21.394)

この方は法という財を集めて運ぶ栄光ある偉大な隊商の長であり、また悪道に足を踏み入れた者たちに真正の道を教示する者となるでしょう。(21.395)

[この方は] 速やかに、無煩惱の清浄な心を持つ者、梵行をなす牟尼の王、一切知、阿羅漢、偉大な仏（マハーブッダ）、勝者、導師となるでしょう。(21.396)

今や一切世界において、すべてのマール（魔）たちは意気消沈し、恐れに慄く心もち、深い懸念を抱いて立ちつくしています。(21.397)

この方は必ず、あらゆる所に正法という不死の甘露の雨を降らせ、すべての生類を全く満足させ、喜ばせることでしょう。(21.398)

今からきつとあらゆる世界において、生類が皆、めでたい幸せと光輝と善き徳性を具えた、善法から成る者となって、いつまでもあり続けることでしょう。(21.399)

このように生類の守護主（菩薩）を称えることによって私たちが有する功德——その功德の異熟によって、私たち皆、未決定の者は、(21.400)

清らかな戒を行じ、煩惱なく、無穢の感官をもち、菩提行の誓戒を堅持し、生類の益のために活動して、(21.401)

この三界の守護主の庇護下にあつて、菩提の知に達して、光輝ある善き徳性の蔵を有する者に、私たちがなりますように！」(21.402)

このようにすべての天女の群は大士（菩薩）を讃嘆し、天の供養の作法をもって彼を恭敬供養し、拝礼し、(21.403)

また歌舞音曲を演じることで大祝祭をなしつつ、繰り返し彼を見つめ拝礼すると、嬉しく再び進んでいった。(21.404)

同様にブラフマー、インドラをはじめとする三十三天の神々、そしてすべての護世王の神たちも彼を恭敬供養して、嬉しく進んだ。(21.405)

ガンダルヴァたちも皆歓喜し、彼を恭敬供養し、歌舞音曲に励みながら、嬉しく進んだ。(21.406)

キンナラたちも皆歓喜し、彼を恭敬供養し、トゥーリヤ楽器で合唱・合奏を演じつつ、先頭を進んだ。(21.407)

葉叉たちも皆歓喜し、彼を恭敬供養し、八種の芳香を薫じながら、先頭を進んだ。(21.408)

クンバーンダたちも皆、ぞくぞくした歓喜を味わい、彼を恭敬供養して、邪惡な者たちを威嚇して遠ざけながら、嬉しく進んだ。(21.409)

ヴィディヤダラたちも皆大喜びして彼を恭敬供養し、香り豊かな花輪をもって恭敬供養し、先頭を進んだ。(21.410)

星々を伴って惑星（九曜星）たちも皆、彼を供養し、周囲を回って彼を見つめ、歓喜して進んだ。(21.411)

ガルダたちも皆歓喜して彼を礼拝供養し、道の至る所で天の芳香油を降らせながら、進んだ。(21.412)

龍王たちも皆歓喜して彼を礼拝供養し、道の至る所で花と甘露の雨を降らせながら、進んだ。(21.413)

羅刹たちも彼を見て、後ろから付き従い、道に潜む邪惡な者たちを脅かしながら、嬉しく進んだ。(21.414)

ダーナヴァ（阿修羅）たちも彼を見ると、遠くから嬉しく拝礼して、大変な熱意で飲んで、あらゆる方角から集まり来た。(21.415)

ブータ（魔物）やプレータ（餓鬼）やピシャーチャ（食肉鬼）たちは、空中で遠くから彼を見て、恐怖に身を震わせ、拝むや否や逃げ去った。(21.416)

神通力（通知）をもつ外道師たちも、論戦の恐怖に怯え、出家していく彼を見て、皆が意気消沈して立っていた。(21.417)

大神通力をもつ仙人たちは出家していく彼を見て、拝礼しながら手を合わせ、皆が歓喜して立っていた。(21.418)

出家行者たち、ヨーガ行者たち、梵行者たちも皆、彼が出離してゆくを見て、拝礼し歡喜して立っていた。(21.419)

菩薩たち・大士たちも皆、彼を見て手を合わせ、深く拝礼し歡喜して立っていた。(21.420)

あらゆる如来たちもまた、彼が出離しゆくを見て、美しい眼差しで見つめ、隨喜して立っていた。(21.421)

このようにして光輝あるかの菩薩・大士は、生類の益のために夜中に自分の城を出離すると、大いなる熱意をもって喜んで進みゆき、(21.422)

すべての神々やすべての護世王たちから供養され、天女たちから賛美されながら、明るく光り輝き、心悅びつつ〔馬で〕走っていった。(21.423)

その照らす光に触れられたあらゆる生き物たちは、色鮮やかに彩られ、大きな幸福感到満たされ、諸根（感覚器官）は清らかになった。(21.424)

このように大神通力をもつ菩薩は、順次に進んで、シャーキヤ（釈迦）族、クローディヤ族、マッラ族の地を次々と越え、マイネーヤ族のアヌヴァイネーヤ村をも通り過ぎて、森へと至った。(21.425)

その後かの一切知は十二ヨージャナ（由旬）を進み、さらに夜明け頃にヴァシシュタ仙人の庵の近くに到着した。(21.426)

Buddhacarita 6.2 の逐語的借用 (21.427)

其処で彼は馬カンタカから地面に降り、そこに立つと、インドラをはじめとする神々、護世神たちを去らせた。(21.428)

その場でブラフマー（梵天）やインドラ（帝釈天）をはじめとする三十三天の神々、そしてすべての護世神たち、随伴するすべての天女の群も、(21.429)

光輝の塊であるその大士を仰ぎ見て歡喜し、両手を合わせて拝礼すると、うやうやしく次のように言った。(21.430)

「出家なさって下さい、大士よ。どうかあなたの志が成就しますように。速やかにマーラ（魔）の群に打ち勝ち、菩提を得て下さい。われらは光輝あるあなたを奉侍することで、解脱に至ることが出来ます。」(21.431)

こう述べてから、ブラフマー神とインドラをはじめとする三十三天の神々は喜びつつ再び彼を恭敬供養し拝礼して、天空の住处へと去っていった。(21.432)

すべての護世王の神たちも、各自の軍勢とともに拝礼し、勝利の祝福の言葉を与えると、喜心をもってそれぞれ自分の領域へと帰っていった。(21.433)

同様に、他の生き物たち、葉叉やガンダルヴァやキンナラ、またグヒヤカやガルダや龍、そして大神通力のダーナヴァ（阿修羅）、(21.434)

ヴィディヤーダラ、また惑星や星々も、皆大いに歓喜し、かの菩薩に拝礼すると、それぞれの住处へ嬉しく帰っていった。(21.435)

Buddhacarita 6.4 の逐語的借用	(21.436)
Buddhacarita 6.5 の逐語的借用	(21.437)
Buddhacarita 6.6 の逐語的借用	(21.438)
Buddhacarita 6.7 の逐語的借用	(21.439)
Buddhacarita 6.8 の逐語的借用	(21.440)
Buddhacarita 6.9 の逐語的借用	(21.441)
Buddhacarita 6.10 の逐語的借用	(21.442)
Buddhacarita 6.11 の逐語的借用	(21.443)
Buddhacarita 6.12 の逐語的借用	(21.444)
Buddhacarita 6.13 の逐語的借用	(21.445)
Buddhacarita 6.14 の逐語的借用	(21.446)
Buddhacarita 6.15 の逐語的借用	(21.447)
Buddhacarita 6.16 の逐語的借用	(21.448)
Buddhacarita 6.17 の逐語的借用	(21.449)
Buddhacarita 6.18 の逐語的借用	(21.450)
Buddhacarita 6.19 の逐語的借用	(21.451)
Buddhacarita 6.20 の逐語的借用	(21.452)
Buddhacarita 6.21 の逐語的借用	(21.453)
Buddhacarita 6.22 の逐語的借用	(21.454)
Buddhacarita 6.23 の逐語的借用	(21.455)
Buddhacarita 6.24 の逐語的借用	(21.456)
Buddhacarita 6.25 の逐語的借用	(21.457)
Buddhacarita 6.26 の逐語的借用	(21.458)
Buddhacarita 6.27 の逐語的借用	(21.459)
Buddhacarita 6.28 の逐語的借用	(21.460)
Buddhacarita 6.29 の逐語的借用	(21.461)
Buddhacarita 6.30 の逐語的借用	(21.462)
Buddhacarita 6.31 の逐語的借用	(21.463)
Buddhacarita 6.32 の逐語的借用	(21.464)
Buddhacarita 6.33 の逐語的借用	(21.465)
Buddhacarita 6.34 の逐語的借用	(21.466)
Buddhacarita 6.35 の逐語的借用	(21.467)

Buddhacarita 6.36 の逐語的借用	(21.468)
Buddhacarita 6.37 の逐語的借用	(21.469)
Buddhacarita 6.38 の逐語的借用	(21.470)
Buddhacarita 6.39 の逐語的借用	(21.471)
Buddhacarita 6.40 の逐語的借用	(21.472)
Buddhacarita 6.41 の逐語的借用	(21.473)
Buddhacarita 6.42 の逐語的借用	(21.474)
Buddhacarita 6.43 の逐語的借用	(21.475)
Buddhacarita 6.44 の逐語的借用	(21.476)
Buddhacarita 6.45 の逐語的借用	(21.477)
Buddhacarita 6.46 の逐語的借用	(21.478)
Buddhacarita 6.47 の逐語的借用	(21.479)
Buddhacarita 6.48 の逐語的借用	(21.480)
Buddhacarita 6.49 の逐語的借用	(21.481)
Buddhacarita 6.50 の逐語的借用	(21.482)
Buddhacarita 6.51 の逐語的借用	(21.483)
Buddhacarita 6.52 の逐語的借用	(21.484)
Buddhacarita 6.53 の逐語的借用	(21.485)
Buddhacarita 6.54 の逐語的借用	(21.486)
Buddhacarita 6.55 の逐語的借用	(21.487)
Buddhacarita 6.56 の逐語的借用	(21.488)
Buddhacarita 6.57 の逐語的借用	(21.489)
Buddhacarita 6.58 の逐語的借用	(21.490)

その世界でその髻を内奥の小部屋に安置し、巨大なチャイティヤ（塔廟）を大きな歓びをもって建立すると、常に供養し崇め、(21.491)

祭日を設立し、盛大な祝祭を行った。今日でも天界ではその『髻の祭り』が行われている。(21.492)

Buddhacarita 6.59 の逐語的借用	(21.493)
Buddhacarita 6.60 の逐語的借用	(21.494)
Buddhacarita 6.61 の逐語的借用	(21.495)
Buddhacarita 6.62 の逐語的借用	(21.496)
Buddhacarita 6.63 の逐語的借用	(21.497)
Buddhacarita 6.64 の逐語的借用	(21.498)

その天子は浄居天でその衣を見せ、嬉しくその経緯を語って神々を喜ばせた。
(21.499)

その世界で、彼らはその衣を内奥の小部屋に安置し、巨大な仏塔を建立すると、大きな歓びをもって常に供養した。(21.500)

浄居天の世界では、今日でも『衣の祭日』が置かれ、大きなチャイティヤが神々により篤い信心をもって供養されている。(21.501)

さてかの智者（菩薩）はその地で装身具を外し、その馬を横に立たせ、チャンダカを呼び寄せて、こう語った。(21.502)

「チャンダカよ、これらすべての装身具と私の馬を連れて、速やかにあの都城の自身の住まいに帰りなさい。」(21.503)

このように主人が命じるのを聞いて、チャンダカは泣きながら、主人の足元にひれ伏すと、こう言った。(21.504)

「ああ、ご主人様、あなた様を欠いて、どうして私一人が帰れましょうか。きっとあの王様は、怒りのあまり私を捕縛し、打ちすえるでしょう。(21.505)

これらすべての装身具を持ち、あなたの馬を連れて、あなた様のことで悲しみに満ちている都城に、どうして私が帰れましょう。(21.506)

いったい誰があそこで私を慰めたり、憐憫をもって保護してくれるでしょう。誰もが私を脅して、仇敵のように殺そうとするでしょう。(21.507)

いったい私は誰の前に進み出て、この名馬とこれらすべての宝石で出来た装身具をお渡しすればよいのでしょうか。(21.508)

あなた様がいないのに、どうして見る事ができますでしょうか、あなた様の父君の怒りの炎に燃える顔を、また母君のガウタミー様のお顔を。(21.509)

またゴーパー奥様の悲しみの火に燃える顔を、主人であるあなた様がいないで、どうして私一人で見ることができません。(21.510)

またほかの御夫人がたのお顔を、主人であるあなたなしで、どうして私一人で見ることができません。(21.511)

また、すべての王の顧問官や大臣たちの顔を、主人であるあなたなしで、どうして私一人で見ることができません。(21.512)

ですから、私はあなた様と一緒に誓戒の修行をすることを望みます。わが主よ、あなた様の行かれる道こそを、私も得たいのです。(21.513)

私一人があのだ都城に戻る事など到底できません。私はいつそ死にたいです。[どっちみち] 死は避けられないでしょうから。」(21.514)

彼のこの言葉を聞いて、菩薩は彼を見つめ、王の憤怒を恐れているチャンダカに再び語りかけた。(21.515)

「王の怒りを恐れてはならない。彼らはお前の姿を見れば、澄んだ明るい気持ちになるだろう。わが父はすぐにお前を呼び寄せて、嬉しく私の無事を尋ねるだろう。」
(21.516)

「わが母プラジャーパティーや妻ヤショーダラー、また王の顧問官や大臣たちも、また他のすべての愛すべき女たちも、(21.517)

また都民たちも、皆お前の姿を見れば澄んだ明るい気持ちになって、すぐにお前を呼び寄せ、私の無事を尋ねるだろう。(21.518)

そこでお前は彼らすべての人の前で私の無事を教えて、この一部始終を詳しく報告してあげなさい。(21.519)

ただ、私があそこに戻らない限り、貞淑な妃ヤショーダラーは私への悲しみを抑えきれずに命を捨ててしまうかもしれない。(21.520)

身重の彼女を懸命に保護し、守ってあげなさい。同様に、すべての女性たちと母プラジャーパティーも、(21.521)

私への悲しみの火に身を焼き、虚しく命を捨ててしまうかもしれない。すべての者たちを私に対する悲しみから守ってやり、常に防いでやりなさい。(21.522)

乞い求める者たちには常に望み通りの財物を与え、保護しなさい。またすべての国の領土を法に従って守りなさい。(21.523)

私は菩提を得て、仏の位に達したら、法という不死の甘露の雨を降らせるため、きっとあの地へ戻って来よう。(21.524)

私がこのように言ったことを、私の父王、そして母とヤショーダラーの前で述べて、報告しなさい。」(21.525)

そう言い、このようにかの大士はチャンダカの苦悩を和らげてやりながら、すべての装身具と馬を与えると、そこから去らせた。(21.526)

全部の装身具と馬を受け取って、チャンダカは泣きながら主人の両足を拝むと、ゆっくり悄然としてその場を離れていった。(21.527)

すると馬カンタカもその菩薩を見つめ、頭を下げ、泣き声を発しながら落胆した心でとぼとぼと、その場から元の方へ戻っていった。(21.528)

Buddhacarita 6.65 の逐語的借用 (21.529)

Buddhacarita 6.66 の逐語的借用 (21.530)

Buddhacarita 6.67 の逐語的借用 (21.531)

Buddhacarita 6.68 の逐語的借用 (21.532)

或る森の精霊はその出家行者（菩薩）がやってくるのを眺めると、すぐに供養の様々な仕方でも敬意を示し、拝礼して次のように言った。(21.533)

「大士よ、生類の益のためのあなたの志が成就しますように。速やかにマーラ（魔）たちを打ち破り、菩提を獲得されますように。」 (21.534)

このように彼に吉祥の祝福を与えて、その森の女神は合掌し、拝礼して、嬉しく自らの住処へと戻っていった。 (21.535)

その後、袈裟衣を身に纏った菩薩は、梵行をなす輝かしい出家行者として、心集中してそこから歩いていった。 (21.536)

— 以上、師の過去の出来事を、今私は語りました。大王よ、あなたもこれを聞いてあなたも随喜を得ますように。 (21.537)

これを聞いて、出家誓戒の行について随喜する者たちは皆が大士（菩薩）となり、輝かしい徳性の依処となることでしょう。」 (21.538)

このように阿羅漢たる師が説かれたことを聴聞して、大地の支配主アショーカは {または：出家者アーナンダは喜心をもって}、「わかりました」と答え、聴聞した衆とともに歓喜した。 (21.539)

都城から出離する [という名の] 品、第21章 [終わる]。

第21章の章末にある B D E 写本による別ヴァージョンのテキスト

21章528偈の後に、3写本 B D E には、A2 写本（A 写本における筆写人 Z による差し替え葉）の529偈から532偈までの4偈（Buddhacarita 6.65～6.68 からの借用偈）の代わりに、次の28箇の偈（[*1]～[*28]）がある。それを以下に示す。

An alternative text at the end of Chapter 21 from B, D, and E

[After the verse 21.528, the manuscripts B D E have the following 28 verses instead of 21.529 to 532 of A2 manuscript.]

tataḥ sa bodhisattvo 'pi cūḍāṃ chittvāsinā svayam /

pravrajyāsaṃvaram dhṛtvā samācarat tato mudā // [*1]

taccūḍāṃ *khe samālokya śakro devaiḥ sahāgataḥ /

ādāya sahasā svarge mahotsāhair mudānayat // [*2]

tatra nidhāya tāṃ cūḍāṃ garbhe caityaṃ mahattaram /

mahotsāhaiḥ pratiṣṭhāpya samabhyarcya sadā bhajan // [*3] = TJAM 21.491

mahaś cāpi pratiṣṭhāpya prācārayan mahotsavam /

adyāpi svargaloke taccūḍāmahāḥ pravartate // [*4] = TJAM 21.492

tataḥ sa muṇḍito bhikṣur bodhisattvaḥ śubhendriyaḥ /

kāṣāyacīvarākāṅkṣī saṃpaśyan prācarat tataḥ // [*5]
 śuddhāvāsikadevas taṃ samīkṣya brahmacāriṇaṃ /
 lubdhakarūpadhṛk tatra prāyayau cīvarāvṛtaḥ // [*6]
 taṃ dṛṣtvā samupāyātaṃ bodhisattvo 'bhinanditaḥ /
 sahasā samupāsṛtya lubdhakam evam abravīt // [*7]
 sādho kāṣāyavastraṃ me praśobhanaṃ prayaccha tat /
 idaṃ me kāsikaṃ vastraṃ dāsyāmi te praśobhanaṃ // [*8]
 iti tatprārthitaṃ śrutvā lubdhakaḥ samupāsaran /
 svaraktacīvaraṃ tasmai yataye *pradadhe mudā // [*9]
 ādāya bodhisattvas tat kāṣāyacīvaraṃ mudā /
 svavastraṃ kāsikaṃ tasmai lubdhakāya dadau mudā // [*10]
 tatpradattaṃ samādāyāsau vastraṃ kāsikaṃ mudā /
 lubdhakaḥ sahasākāśāc chuddhāvāsālayaṃ yayau // [*11]
 etat sarvaṃ dadarśāsau chandako dūrataḥ sthitaḥ /
 tataḥ sa vismito natvā rudañ chanair nyavartata // [*12]
 tatra sa devaputras tadvastraṃ śuddhālaye mudā /
 darśayaṃs tatpravṛttāntaṃ prākhyāyānandayat surān // [*13] = TJAM 21.499
 tatra nidhāya tadvastraṃ garbhe caityaṃ mahattaraṃ /
 vidhāya saṃpratiṣṭhāpya mahotsāhaiḥ sadā bhajan // [*14] = TJAM 21.500
 tatcaityasumahaś cāpi pratiṣṭhāpya pramoditāḥ /
 sarve śuddhālayā devā mahotsāhaiḥ sadābhajan // [*15]
 bodhisattvaṃ taṃ ālokya pravrajitaṃ jagaddhite /
 sarve 'bhinanditā devās tadaivaṃ samudāharan // [*16]
 adya sarvārthasiddho 'sau bodhisattvo jagaddhite /
 pravrajyāsaṃvaram dhṛtvā saṃcarati samāhitaḥ // [*17]
 tapasā duṣkareṇāyaṃ jītvā sarvāṃs tapasvinaḥ /
 niḥkleśo vimalātmā*rhan brahmacārī yatir bhavet // [*18] ≈ TJAM 21.379cd, 380ab
 tato bodhidrumāsīnaḥ samādhiniścalendriyaḥ /
 jītvā māragaṇān sarvān saṃbodhiṃ samavāpnuyāt // [*19] ≈ TJAM 21.380cd
 tataḥ kāśīpure gatvā dharmacakraṃ pravartayan /
 sa devāsuraṃānuṣyān bodhimārga vinodayet // [*20]
 tathā sarvatra lokeṣu dharmāmṛtaṃ pravarṣayan /
 bhadrāśrīsadguṇāpannān sarvāṃl lokān kariṣyati // [*21]
 tatsaddharmāmṛtaṃ pītvā sarve lokāḥ prabodhitāḥ /
 bodhicaryāvrataṃ dhṛtvā pracareyuḥ sadā śubhe // [*22]

tataḥ sarve 'pi lokās te caturbrahmavihāriṇaḥ /
 bodhisattvā mahāsattvā carīṣyanti jagaddhite // [*23]
 tataḥ sambodhisambhāram pūrayitvā yathākramam /
 daśabhūmīśvarā nāthā bhaviṣyanti jinātmajāḥ // [*24]
 etatpūṇyānubhāvena sarvatra bhuvaneṣv api /
 dharmāśrīmaṅgalotsāhaṃ bhaved dhi sāmpratam sadā // [*25]
 etacchabdam samākarma trāyatrimśatsurā mudā /
 sarve 'py eva mahodghoṣaṃ sarvatra prāpya *sārayan // [*26]
 krameṇaitac chubhodghoṣaṃ akaniṣṭhabhuvam tataḥ /
 sarvatrāpi samāśritya sarvān devān vyanodayat // [*27]
 tatra sarvārthasiddho 'sau kāṣāyacīvarāvṛtaḥ /
 ṛṣṇāṃ darśanaṃ kartuṃ tato 'carat prabhāsayan // [*28]

Apparatus criticus

- *1a sa bodhi°] E: sambodhi° B D.
- *2a: taccūḍāṃ *khe] ex con: taccūḍā kha B D E.
- *2b sahāgataḥ] corr.: sahāgato: B sahāgataḥ D E.
- *2d: mudānayat] E: mudārayat B D.
- *3a: nidhāya] A2 (cf. TJAM 21.491a): vidhāya B D E.
- *3b garbhe] A2 (cf. TJAM 21.491b): garbha B D E.
- *3d: bhajan] A2 (cf. TJAM 21.491d) E: jagat D: bhajagat B.
- *8c kāśikaṃ] B E: kauśikaṃ D.
- *9b lubdhakaḥ B E: lubdhakaṃ D || samupāsaran] B E: samupāsarat D.
- *9c svarakta°] D E: svarakti° B.
- *9d yataye] corr.: yatayo D: yatayau B E || *pradadhe] ex con: prataye B D E.
- *10a tat] D E: tata B.
- *10c kāśikaṃ B E: kauśikaṃ D.
- *11a samādāyāsau] D E: samādāya sau B.
- *11b kāśikaṃ] B E: kauśikaṃ D.
- *12a dadarśāsau] D E: dadarśā B.
- *12c tataḥ sa vismito] E: tataḥ sarvasmito D: tatsarvaṃ vismito B.
- *12d rudañ chanair] rudaṃ chanair B: rudaṃc chanai D; rudaṃś chanair E.
- *13b tadvastraṃ] D E: tavastra B
- *13d °ānandayat] B D: °ānandaya E.
- *14b garbhe caityaṃ mahattaraṃ] A2: garbhacaityaṃ mahattaraṃ B D E.

- *15a taccaityasumahaś] B E: taiś caityasumahaś D.
- *15b pratiṣṭhāpya] D E pratiṣṭhā B.
- *16b pravrajitaṃ] E: pravrajitū B D.
- *16d tadaivaṃ] D E: tadevaṃ B || samudāharan] E: samudāharet B D.
- *17c pravrajyasaṃvaram] B: pravrajyasamvaram E: pravajyasamvaram D.
- *17d saṃcarati] corr.: saṃcaram taṃ B D E.
- *18c vimalātmā*rhan] ex conī: vimalātmāhaṃ B D E
- *19b nīscalendriyaḥ] B E: nīscarendriyaḥ D.
- *24a saṃbodhi] E: sa bodhi B D.
- *24c °īśvarā nāthā] E: °īśvaro nātho B D.
- *25a etatpuṇyānubhāvena] D E: etattatpuṇyānubhāvena B.
- *26c eva mahodghoṣaṃ] B E: evaṃ mahotghoṣaṃ D.
- *26d sārāyan] ex conī: sārāyat B D E.
- *27a chubhodghoṣaṃ] E: chubhāghoṣaṃ B: chubhotghoṣaṃ D.
- *27d devān] B E: devā D.
- *28a °siddho 'sau] B: °siddhākhyāḥ E: °siddhārthi D.

Note *28] The verses *1 to *28 are the common text of manuscripts B, D, and E, which differ significantly from A2. From the verse following *28 onwards, the text of B E become the same as A2's text from verse 533 onwards. However, in D, *28 cd and 533 are missing.

第21章の章末の別伝承テキスト

以下、上に示した B, D, E 写本による第21章の最後の箇所テキスト異本の和訳。

TJAM 第21章529～532偈の4つの偈（これは Buddhacarita 6.65～6.68 からの逐語的な借用にすぎない）の箇所に、B, D, E 写本においては次の28箇の偈（[*1]～[*28]）が書かれている。28箇の偈のうち、[*3]と[*4]と[*15]の三つの偈は TJAM 21.491, 492, 500偈と同一であるが、それ以外は内容が異なる。このような梵文テキストの差し替えが確認できるわけであるが、A 写本の第21章529～532偈は A 写本の最初の筆写人 X が書いたものではなく新しい時代の筆写人 Z によって追加された新しい葉（A2）に含まれているテキストなので、その4つの偈と B, D, E 写本の28箇の偈のどちらが古いのかは判断が難しい。しかし私はこの28箇のテキストは捨てないほうがよいと思う。以下に示すのは、その28箇の偈の和訳である。

その後かの菩薩は自ら刀で髻を切ると、出家の誓戒を守りながら、その後、嬉しく歩みを進めていった。（[*1]）

空中に投げられたその髻を見て、神々を伴ったインドラ（帝釈天）がそれを受け取り、速やかに天界へと、大きな興奮を伴って嬉しく運んだ。([*2])

その天界で、彼はその髻を内奥の小部屋に安置し、巨大なチャイティヤ（塔廟）を大きな歓びをもって建立し、常に供養し崇め、([*3]) (= 21.491)

祭日を設立し、盛大な祝祭を行った。今日でも天界ではその『髻の祭り』が行われている。([*4]) (= 21.492)

その後、剃髪して清らかな感官をもつ比丘となったかの菩薩は、袈裟衣を手に入れたいと思い、あたりを見ながら歩みを進めた。([*5])

浄居天の神はその梵行者を観察して、獵師の姿をとると、袈裟を身に纏ってそこに来た。([*6])

その彼がやってきたのを見て菩薩は歓喜し、さっそく獵師に歩み寄って、このように話した。([*7])

「善き人よ、私にその立派な袈裟衣を下さいませんか。代わりに、私のこの立派なカーシー産の衣をあなたにあげましょう」([*8])

そう彼が求めるのを聞いて、獵師は近づき、自分の赤色の衣をその出家行者に喜心をもって与えた。([*9])

菩薩はその袈裟衣を嬉しく受け取り、自らのカーシー産の衣をその獵師に喜心をもって与えた。([*10])

与えられたそのカーシー産の衣を嬉しく受け取ると、その獵師はすぐに空に昇って浄居天の住まいへと去って行った。([*11])

かのチャンダカは遠くに立っていて、この一部始終をすべて見ていた。彼は驚愕し、拝礼すると、泣きながらゆっくり引き返していった。([*12])

その天子は、その浄居天の住まいで嬉しくその衣を示し、そのいきさつを語って神々を喜ばせた。([*13])

その世界で、彼らはその衣を内奥の小部屋に安置し、巨大な仏塔を建立すると、大きな歓びをもって常に供養した。 (= 21.500) [*14]

そのチャイティヤの祭日を定めて、すべての浄居天の神々は歓び、大きな熱意をもって常に供養した。([*15])

生類の益のためにその菩薩が出家したのを見て、すべての歓喜した神々は次のように言葉を発した。([*16])

「今日、かのサルヴァールタシッダ菩薩は、生類の益のため、出家の誓戒を守り、心集中して歩んでおられる。([*17])

この方は、なし難い苦行であらゆる苦行者を凌駕し、煩悩のない清浄な心の阿羅漢、梵行者たる出家行者となるであろう。([*18])

そして菩提樹の下に坐り、三昧の中で諸感官の活動を鎮め、マーラ（魔）のすべての群を打ち破って、完全な悟りを得るであろう。([*19])

それからカーシーの都（ヴァーラーナシー）へ行き、法輪を転じながら、神や阿修羅や人間たちを悟りの道へと導くであろう」。([*20])

そのようにして、一切世界に法という不死の甘露を雨降らせ、全ての生き物たちを、幸せと輝きとよき徳質をそなえた者へと変えるであろう。([*21])

その正法という不死の甘露を飲んで、全ての生き物たちは覚醒し、菩薩行の誓戒を守って、常に善き道を歩むであろう。([*22])

それからすべての生き物たちは四梵住（四無量心）に住して、菩薩・大士として、生類の益のために活動するであろう。([*23])

そして完全な悟りのための資糧を順次満たして、十地の支配者、庇護主、仏の後継ぎたちとなるであろう。([*24])

この「言葉の」功德の威力によって、今まさにあらゆる世界において、法の輝きと吉祥の道への意欲が常に現れんことを！」。([*25])

この声を聞いて、三十三天の神々は皆嬉しく大音声をあげて、あらゆる所へそれを広めた。([*26])

その清らかな音声は順次に「天界を昇り」、色究竟天に至り、あらゆる所に響き渡って、全ての神々を悦ばせた。([*27])

「一方」地上で、袈裟衣をまとったかのサルヴァールタシッダは、仙人たちに会うために、光り輝きながらそこから歩みを進めていった。([*28])

3. Tathāgatajanmāvadānamālā 第22章の校訂

A 152a1⁽¹⁶⁾ ; B (totally missing) ; D 184a1

[152a] athā*śoko *mahīpatiḥ {or: athānando mahāsattvaḥ} sājñaliḥ samupāsṛitaḥ /
bhagavantam tam arhantaṃ punar natvaivam abravīt // 22.1
bhagavan sa mahāsattvas tataḥ kutra samācarat /
pravrajitaḥ sa ekāki kutrāśrame samāśrayat // 22.2
tasmiñ cāntaḥpuram tyaktvā niṣkrānte nagarād bahiḥ /

16. In Chapter 22, only the first leaf (152a-152b) is a new leaf of A2, while the following 13 leaves (153a-165b) belong to A. The new leaf of A2 corresponds to śloka 1-68 of Chapter 22.

*kenāsau prathamam *jñāto niṣkrānto nagarād iti // 22.3

kadā sā śayanāsīnā yaśodharābhībodhitā /

bhartāram tam *apaśyantī katham *vaidhuryam āyayau // 22.4

rājā śuddhodanaś cāpi jñātvātmajam vinirgatam /

katham śokāgnisaṃtaptā vimohitāśayo 'bhavat // 22.5

mātāpi gautamī śrutvā nandanam abhinirgatam /

katham ca snehaduḥkhāgnisaṃtaptā vyalapad bhṛṣam // 22.6

*anyā api priyāḥ kāntā niṣkrāntam svāminam priyam /

śrutvāśokāgnisaṃtaptā vilepire katham bhṛṣam // 22.7

etat sarvaṃ samākhyāya bhadanto 'tra mahāmate /

asmākam api tacchokam jātam iva vinodaya // 22.8

iti saṃprārthitam tena śrutvā so 'rhan mahāmatih /

aśokam *tatsabhāṃ cāpi sampaśyann evam ādiśat // 22.9

śṛṇv aśoka samādhāya yathā me guruṇoditam /

tathāham te pravakṣyāmi śrutvāśoka vinodaya // 22.10

tadyathāsau mahāsattvo niṣkrānto nagarād bahih /

śakraprabhāvato dvārāḥ pithitāś ca babhūvire /

prāgdvāra evāpithitaḥ sindūrakusumārcitaḥ // 22.11

tadā sā śayanāsīnā yaśodharābhībodhitā /

sahasotthāya *nāpaśyad bhartāram tam samantataḥ /

apaśyantī nijāgāre bahir draṣṭum upācarata // 22.12

vivṛtam dvāram ālokya nūnam eṣo 'bhinirgataḥ /

iti niścitya sā mugdhā nipapāta yaśodharā // 22.13

tataś cirāt samutthāya samabhīkṣya samantataḥ /

hā svāmin *kva *prayāsi tvam ehīti vyalapad bhṛṣam // 22.14

tadvilāparavaṃ śrutvā sarvāḥ kāntāḥ prabodhitāḥ /

sahasotthāya gopāyā ālaye samupācaran // 22.15

tatra prabhum apaśyantaḥ sarvatrāpi pramohitāḥ /

nyapatan bhūtale sarvāś chinnamūlā iva drumāḥ // 22.16

tataś ceṭīprayatnais tās cirāt saṃprāptacetanāḥ /

bhartāran tam anusmṛtvā bhrāntā iva vi[152b]lepire // 22.17

hā svāmin kva prayāsi tvam tyaktvā*smāñ *charaṇasthitān /

samehi no mukham nātha *darśaya priyatam smaran // 22.18

kāś cit keśān pratikṣipyā bhujābhyāṃ vyalapan bhṛṣam /

kāś cid vaktram samāchādyā vāsasā prārūdan bhṛṣam // 22.19 ≈ L 227.14; H ii,124.20;126.2 (!)

bhujābhyāṃ svaśiraḥ kāś cit tāḍayantyo vilepire /

pāṇibhyāṃ hṛdayam kāś cit parāhatyārūdan bhṛṣam // 22.20 ≈ L 227.12-13; H ii,124.17-19

kāścid *ūrū bhujābhyāṃ prasphoṭayantyo vilepire /

kāścid *bāhū svahastābhyāṃ tāḍayantyo 'rudan bhṛśam // 22.21	≈ L 227.11-12; H ii,124.17-18
pāṃśubhiḥ svaśiraḥ kāścid avakīryāhatāśayāḥ /	
kāścid vikṣiptakeśāś ca *viluñcantyaś ca mūrdhajān // 22.22	≈ L 227.13-14; H ii,124.19-20
kāścid utkṣiptapādāś ca kāścid utkṣipta*bāhavaḥ /	
kāścit samutthitā uccair utkrośantyo vilepire // 22.23	≈ L 227.14-15; H ii,124.20-126.1
kāścid rudatpradhāvantyo viṣadigdhā mṛtā iva /	
kāścit kampitasarvāṅgā kāścid dṛṣṭāḥ parasparam // 22.24	≈ L 227.15; H ii,126.1-2
kāścin nipatitā bhūmyāṃ vātabhagnā ivāṅghripāḥ /	
parivartya rasāyāñ ca jālotkṣiptā jhaṣā yathā // 22.25	≈ L 227.17-19; H ii,126.4-6
kāścid ūrdhvamukhā kāścid adhomukhā parāṇmukhāḥ /	
kāścit sēcīmukhā kāścid vivṛttākṣyo vilepire // 22.26	≈ L 227.10; H ii,124.16-17
evam nānāvīdhākāraiḥ sarvā utkṣiptamānasāḥ /	
svāminam eva saṃsmṛtvā nāma proccārya cukruśuḥ // 22.27	
tadvilāparavaṃ śrutvā prajāpatī prabodhitā /	
utthāya sahasā ceṭiṃ samāmantryaivam abravīt // 22.28	
kiṃ bho vilāpanirghoṣam antaḥpure pravartate /	
tac chrutvābhisamālokyā sahasā tvam ihāsara // 22.29	
iti *bhartryā prajāpatyā samādiṣṭaṃ niśamya sā /	
ceṭi tatheti vijñāpya sahasāntaḥpure 'carat // 22.30	
tatra sā samupāsṛtya vilapantīṃ yaśodharām /	
samīkṣya praṇatīṃ kṛtvā papracchaivam puraḥsthitā // 22.31	
bhadre yaśodhare mātāḥ kimarthe 'tra prarodīṣi /	
gautamā preṣitā mātṛā tat praṣṭuṃ ta ihāgatā // 22.32	
ity ukte 'pi tayā cetyā prarudantī yaśodharā /	
ceṭikāṃ tām vilokyaiva kiñ cin na pratyabhāṣata // 22.33	
tatrānyā ceṭikā tasyā gopāyāḥ samupasthitāḥ /	
ceṭikāṃ tām prajāpatyāḥ samālokyāivam abruvan // 22.34	
bhadrike 'syāḥ prabhur bha[*152a]rtā nāntaḥpure pravidyate /	
niṣkrānto vā kuhāsīno naivābhīdṛśyate 'dhunā // 22.35	
itīyaṃ svāminī bhartur adarśanāt samantataḥ /	
abhiniṣkrāntaśaṃkyārtā vilapantī praroditi // 22.36	
tadvilāparavaṃ śrutvā sarvā imāḥ prabodhitāḥ /	
bhartur niṣkrāntaśaṃkārtā rudanti sāmpratam bhṛśam // 22.37	
iti taduktam ākarṇya sā ceṭi sahasāgatā /	
gautamāḥ pūrato gatvā rudanty evam abhāṣata // 22.38	
svāmini nandanas te 'sau nāntaḥpure 'dhunā khalu /	
bhartur adarśanād gopā vilapantī praroditi // 22.39	
tadvilāparavaṃ śrutvā sarvāḥ kāntāḥ prabodhitāḥ /	

bhartur adarśanād evaṃ prarudanti vidhūrītāḥ // 22.40
 iti cetyā tayākhyātāṃ niśamya sā prajāpatī /
 hā heti vilapanty eva nipapāta mahītale // 22.41
 tataś ceṭīprayatnāt *sā cirād *āptasvacetanā /
 hā prāṇa kva prayātas tvam ehīti vyalapad bhṛśam // 22.42
 hā jīvavallabho me 'si naivāsti nandano 'paraḥ /
 tat smṛtvā mām jarākrāntāṃ mātaram sahasāvraja // 22.43
 hā putra katham ekas tvam tyaktvā mām jīṇitendriyām /
 nirdayo vrajase kutra dehi me mukhadarśanam // 22.44
 hā deva katham atrāhaṃ virāga*darśanā kṣaṇam /
 tiṣṭheyaṃ me mano nūnaṃ samicchen maraṇaṃ dhruvam // 22.45
 hā prāṇa katham etās te bhāryāḥ kāntā ramopamāḥ /
 niḥspṛhatṛṇavat tyaktvā vrajase kutra sāmpratam // 22.46
 etadrājyamahālakṣmīsampattisukhasampadaḥ /
 tyaktvānyat kiṃ sukhaṃ paśyan vrajase kutra sanmate // 22.47
 he mahendrādhikaśrīmān ko 'tra *rājye 'dhunā bhavet /
 ko 'tra sampālayel lokān sampaśyan kṛpayā sadā // 22.48
 rājā te janako vṛddho rājyaśrīsukhaniḥspṛśaḥ /
 tvadvīyogamahāśokavahnidagdho hy asūn tyajet // 22.49
 yaśodharā 'pi te bhāryā jīvet katham tvayā vinā /
 nūnaṃ te smṛtim ādāya tyaktvātmānaṃ yame vrajet // 22.50
 etās te pramadāḥ kāntā yathākāmānucārikāḥ /
 sneha[*152b]duḥkhāgnisaṃtaptā jīveyur na tvayā vinā // 22.51
 amātyā mantriṇo bhṛtyā sapaurā anujīvinaḥ /
 katham bhadre careyur hi vinā tvaddharmaśāsanam // 22.52
 ko 'tra saṃtoṣayed dravyaṃ dattvārthino yathepsitam /
 nūnaṃ sarve 'pi bhagnāśā yāyus te kṛpaṇā yame // 22.53
 nūnaṃ sarve 'pi te vairāś careyur abhinanditāḥ /
 sāmpratam suhṛdaḥ sarve bhaveyur nihatotsavāḥ // 22.54
 hā daiva katham evaṃ tannaimittajñavaco mṛśā /
 yat samrāṭsampadaṃ tyaktvā yatir bhavitum icchasi // 22.55
 hā sarve svakuleśānā nirdayā yat svabhaktikam /
 apathaṃ taṃ mahīnātham upekṣanto 'bhyavanti naḥ // 22.56
 hā daiva kiṃ mayā pāpaṃ prakṛtaṃ kutra janmani /
 yad evaṃ putrasōkāgnidagdā yāsyē yamālayam // 22.57
 kasyāhaṃ śaraṇaṃ yāsyē ko mām rakṣet prabodhayan /
 tam evaṃ nandanaṃ smṛtvā maraṇaṃ prāptum utsahe // 22.58
 ity asau gautamī mātā vilapantī ciraṃ bhṛśam /

putraviyogaduḥkhāgnisaṃtaptā nyapatad bhuvi // 22.59
 tāṃ bhuvi patitaṃ dṛṣṭvā sarvās ceṭyaḥ samutthitāḥ /
 sametya sahasāliṅgya pravilepur mahatsvaram // 22.60
 tadvilāparavaṃ śrutvā śuddhodanaḥ prabodhitaḥ /
 utthāya sahasāmantrya janam evaṃ samādiśat // 22.61
 antaḥpure mahotpātaṃ vilāpaśabdam utthitam /
 tad gaccha sahasā śrutvā samīkṣyāśu samāvraja // 22.62
 ity ādiṣṭaṃ narendreṇa śrutvā janas tatheti saḥ /
 sahasāntaḥpure gatvā ceṭikāṃ paryapṛcchata // 22.63
 bho bhaginyaḥ kim arthe 'tra sarvā yūyaṃ vidhīritāḥ /
 vilapantyo mahacchabdai ruditha tat pravakṣyatām // 22.64
 tena pṛṣṭe janeneti tāś ceṭyaḥ samupāśritāḥ /
 taṃ janam sahasāmantrya śanair evaṃ vaco 'srjan // 22.65
 sādho sarvārthasiddho 'tra yuvarājo na vidyate /
 niṣkrānto vā kuhāsīno mṛgyamāno na dṛśyate // 22.66
 iti ceṭyuditaṃ śrutvā sa janāḥ sahasā tataḥ /
 narendrasya puro gatvā rudann evaṃ nyavedayat // 22.67
 deva sarvārthasiddho 'sau yuvarājo na vidyate /
 sarvatrāntaḥpure tatra mṛgyamāno na dṛśyate // 22.68
 iti tenoditaṃ śrutvā [153a] rājā śuddhodano rudan /
 sahasāntaḥpure gatvā gautamīm evaṃ abravīt // 22.69
 kadā syād abhiniryātaḥ kathaṃ tvayā na dṛśyate /
 etāsāṃ katham ekā 'pi na paśyate tad adbhutam // 22.70
 ity uktaṃ svāminā śrutvā prajāpatī samutthitā /
 svānipādāmbujaṃ natvā nipapāta mahītale // 22.71
 dṛṣṭvā tāṃ patitāṃ bhūmyām sahasā sa prabhur nṛpaḥ /
 svayaṃ dhṛtvā samutthāpya samāśvāsyāivam abravīt // 22.72
 mā śuco dhairyam ālambya tiṣṭha kiṃ te viṣadatā /
 sarvatra mārgayitvāhaṃ darśayiṣyāmi taṃ dhruvam // 22.73
 ity etat svāminādiṣṭaṃ śrutvā sā gautamī bhṛśam /
 ruditvā prabhum ālokya praṇatvaivam abravīt // 22.74
 hā svāmin sahasānīya darśaya nandanam mama /
 kṣipraṃ putreṇa bhūmīndra samaṅginīm kuruṣva mām // 22.75
 ātmajaṃ te mahārāja nagare 'tra pureṣv api /
 grāmeṣu pavanodyāne mārgayāśu samantataḥ // 22.76
 yāvan na dṛśyate putras tāvan na bhokṣyate mayā /
 naiva yāsyāmi yānam ca śayyām na śayanāsane // 22.77
 yadi na dāsyate putradarśanam me nṛpādhipa /

tam eva nandanam smṛtvā nūnam martuṃ samutsahe // 22.78
 iti prītir dayā sneho mayi te 'sti yadi prabho /
 svātmaprāṇasamaṃ putraṃ mārgayāśu samantataḥ // 22.79
 iti bhāryoditaṃ śrutvā rājā śuddhodano rudan /
 sahasā mantriṇo 'mātyān samāmantryaivam ādiśat // 22.80
 śṛṇudhvaṃ mantriṇo 'mātyāḥ putro me 'tra na vidyate /
 puradvārāṇi sarvāṇi dṛṣṭvā pithayata drutam // 22.81
 tataḥ sarvatra geheṣu krīḍodyānavaneṣv api /
 maṭheṣv api ca sarvatra sattreṣu maṇḍapeṣv api // 22.82
 devālayeṣu sarvatra vṛkṣeṣu pavaneṣu ca /
 śūnyālayeṣu sarvatra mārgayadhvaṃ samantataḥ // 22.83
 iti rājñā samādiṣṭaṃ śrutvā sarve 'pi mantriṇaḥ/
 amātyāḥ sajanā bhrtyās tathety uktvā tato 'caran // 22.84
 tathā te sahasā gatvā sarvāṇi gopurāṇy api /
 pithitāny eva samvīkṣya samanveṣuḥ samantataḥ // 22.85
 krīḍodyānavanārāme vṛkṣeṣu maṇḍapeṣv api /
 devālayeṣu [153b] sattreṣu maṭhaśūnyālayeṣv api // 22.86
 sarveṣv api ca deṣeṣu mṛgayāṇāḥ samantataḥ /
 apaśyantas tataḥ sarve pratyāgatā nṛpāntike // 22.87
 sarve te samupāsṛtya śuddhodanasya bhūpateḥ /
 pādābje praṇatiṃ kṛtvā samīkṣyaivam nyavedayan // 22.88
 deva sarvatra deṣeṣu nātra paśyāmahe pure /
 niṣkrānto hi mahāsattvo bhavet sa bhavadātmajaḥ // 22.89
 iti tadgaditaṃ śrutvā rājā śuddhodano rudan /
 sādinaḥ sahasāmantrya saṃpaśyann evam ādiśat // 22.90
 bhavantaḥ sādinaḥ sarve gacchata sahasā puraḥ /
 bahiḥ sarvatra deṣeṣu mārgayata mamātmajam // 22.91
 sarvatrāpi samālokyā gṛhītvanayata drutam /
 yāvan na dṛśyate tāvan mātra sarve nivartata // 22.92
 ity ādiṣṭaṃ mahīndreṇa śrutvā sarve tatheti te /
 javino 'śvān samāruhya sahasā nirayauḥ purāt // 22.93
 purāt te nirgataḥ sarve samālokyā samantataḥ /
 mṛgayāṇāḥ samīkṣanto naivāpaśyan kuhāpi tam // 22.94
 tataḥ sarve 'pi te khinnāḥ pratyāgatāḥ samantataḥ /
 nṛpateḥ pura āsṛitya praṇatvaivam nyavedayan // 22.95
 rājan sarvatra deṣeṣu mṛgayāṇo nirantaram /
 naivābhīdṛśyate 'smābhiḥ kutrāpi bhavadātmajaḥ // 22.96
 iti taduktam ākarṇya śuddhodano nṛpo rudan /

bhūyas tān samupāmantrya sarvān evaṃ samādiśat // 22.97
 pūrvadvāreṇa niryāyād ity ādiṣṭaṃ vicakṣaṇaiḥ /
 tat sarve maṅgaladvārān nirgatyā vrajata drutam // 22.98
 dvāre 'pi sahasā gatvā samādṛṣṭvā janān api /
 samantataḥ samālokyā mārgayata niranṭaram // 22.99
 yāvan na dṛśyate kvāpi tāvan mābhiniṣvartata /
 yatrāsau tiṣṭhate tatra sarve 'pi carata drutam // 22.100
 tatra taṃ samupāśṛtya bodhayitvā prayatnataḥ /
 balair api samāgrhya sarvathānayatā drutam // 22.101
 ity ādiṣṭaṃ narendreṇa śrutvā sarve 'pi te janāḥ /
 tatheti prativijñāpya sahasā samprasthitās tataḥ // 22.102
 svasvam aśvaṃ samāruhya maṅgaladvārato drutam /
 nirga[154a]tā divyapuṣpāṇi kīrṇāni dadṛśuḥ pathi // 22.103
 tāni puṣpāṇi te dṛṣṭvā sarve te vismayānvitāḥ /
 yathānenābhiniṣkrānto nūnam iti vyacintayan // 22.104
 tataḥ sarve 'pi te 'mātyā anena nirgataḥ khalu /
 iti sambhāṣya vīkṣantaḥ samcodyāśvān adhāvayan // 22.105
 tatas te dūrato gatvā chandakaṃ samupāgatam /
 dṛṣṭvā sarve sametyāśu papracchur evaṃ ādarāt // 22.106
 chandaka kuta āyāsi nṛpātmajo gataḥ kuha /
 satyam etat pravṛttāntaṃ samupākhyātum arhasi // 22.107
 iti taiḥ prārthitaṃ śrutvā chandakas tatpuraḥ sthitaḥ /
 galadaśruvirūḥṣākṣas tān paśyann evaṃ abravīt // 22.108
 bhadantaḥ śrūyatāṃ vākyasamāsato mayocyate /
 devair vinodyamāno 'sau niśīthe nirgato 'mbarāt // 22.109
 prātaḥ prāpto vaśiṣṭasya maharṣer āśramāntike /
 tatra devaiḥ parityaktaḥ keśāṇ chittvāsinā svayam // 22.110
 tato lubdhakadattena kāṣāyavāsasāvrtaḥ /
 pravrajyāsaṃvaram dhṛtvā yatir arhaṇ jīvendriyaḥ // 22.111
 ṛṣīṇāṃ darśanaṃ kartuṃ pravrajati tapovane /
 mayaitad dṛśyate nūnam tato nivartito 'smy aham // 22.112
 imāny ābharaṇāny aśvaṃ imaṃ dattvātmanaḥ svayam /
 piṭṭbhir bodhane bhartrā preṣito 'ham ihāvraje // 22.113
 iti tenoditaṃ śrutvā sarve te chandakaṃ punaḥ /
 sarvaṇy ābharaṇāny aśvaṃ samālokyaiṣam abruvan // 22.114
 chandaka manyase yatra pravrajate tato hi saḥ /
 nivartayitum asmābhiḥ śakyate kiṃ balair api // 22.115
 iti taiḥ kathitaṃ śrutvā chandaka evaṃ abravīt /

kenāpi śakyate nāsau bodhayitum dṛḍhāśayaḥ // 22.116
 evaṃ hi gaditaṃ tena sudhīreṇānivartinā /
 nātrāham āgamiṣyāmi yāvad bodhim anāptavān // 22.117
 yadā tu prāpyate bodhis tadeha prathamam mayā /
 svajñātibandhumitrāṇaṃ saddharmam upadekṣyate // 22.118
 iti tena sudhīreṇa dṛḍhavīryeṇa bhāṣitam /
 yathākhyātaṃ tathā satyam eva syān nānyathā khalu // 22.119
 iti teno[154b]ditaṃ śrutvā sarve te vihatotsukāḥ /
 chandakam aśvarājaṃ ca paśyanta evam abruvan // 22.120
 chandakāśvaṃ gṛhītveṃsaṃ sarvāṇy ābharaṇāṇy api /
 śanaiḥ paścāt samāyāhi vayaṃ gacchāmahe drutam // 22.121
 ity uktvā te sametyāśu sarve saṃprasthitāḥ tataḥ /
 sahasāśvān samāruhya nagaram pratyāyayur drutam // 22.122
 tatra sarve 'pi te rājñāḥ śuddhodanasya bhūpateḥ /
 upetya pādayor natvā purataḥ samupāśrayan // 22.123
 tatra te sarvavṛttāntaṃ chandakena yathoditam /
 tathākhyāya narendram taṃ samāśvāsya vyanodayan // 22.124
 tatpravṛttāntam ākarṇya prajāpatī yaśodharā /
 sarvā rāmāś ca cetvo 'pi pravilepur bhṛśaṃ punaḥ // 22.125
 tac chrutvā paurikāḥ sarve sastrīdārakadārikāḥ /
 hā svāmin kva prayāto 'smāṃs tyaktveti pravilepire // 22.126
 tasminn avasare tatra gṛhītvaśvaṃ sa chandakaḥ /
 pratyāgato viṣaṇṇātmā tadudyāna upāviśat // 22.127
 chandakam sāsvaṃ āyātam samikṣyodyānapālakaḥ /
 sahasā nṛpater agre praṇatvaivaṃ nyavedayat // 22.128
 chandako 'sau mahārāja gṛhītvaśvaṃ ihāgataḥ /
 udyāne samupāviśya tiṣṭhate bhītamānasaḥ // 22.129
 iti taduktam ākarṇya śuddhodano narādhipaḥ /
 sahasā janam āhūya punar evaṃ samādiśat // 22.130
 gaccha tvaṃ sahasodyāne chandakam sāsvaṃ āgatam /
 samāhūya mamāgre 'tra prabodhayan samānaya // 22.131
 iti rājñā samādiṣṭaṃ niśamyodyānapālakaḥ /
 tatheti pratijñāpya sahasodyānam āviśat // 22.132
 tatra sa sahasopetya chandakam saṃprabodhayan /
 sāsvaṃ prāhūya rājño 'gre sādaram samupānayat // 22.133
 tatra sa chandakaḥ sāsvo narendrasya purogataḥ /
 pādayoḥ prarudan natvā viṣaṇṇātmā samāśrayat // 22.134
 tataḥ sa nṛpatir dṛṣṭvā chandakam sahayam rudan /

ātmajasya pravṛttāntaṃ papracchaivaṃ samādarāt // 22.135
 chandaka satyam ācakṣa yad asau me priyātmajaḥ /
 kadā kathaṃ viniṣkrānto vrajate sāmpratam kuha // 22.136
 iti rājñā samādiṣṭaṃ śrutvā sa chandako rudan /
 taṃ na[155a]rendraṃ praṇatvā 'dhomukha evam abhāṣata // 22.137
 kṣamasva me mahārāja vidyate nāparādhata /
 śṛṇusvaitat pravṛttāntaṃ vistareṇa mayoditam // 22.138
 niśīthe sa mahāsattvaḥ svayam āhūya mām puraḥ /
 chandaka sahasā me 'śvaṃ dehīti samayācata // 22.139
 tathāśvaṃ yācitam śrutvā praṇatvāham kṛtāñjaliḥ /
 mahātmānaṃ tam ālokyā paryapṛccham samādarāt // 22.140
 svāminn aśvaṃ niśīthe 'tra yācane kiṃ prayojanam /
 prasuptāḥ sakalā lokā bhavān gantuṃ kuhecchasi // 22.141
 iti matkathitaṃ śrutvā bodhayitvā bhavatsutaḥ /
 sādaram mām upāmantrya saṃpaśyann evam ādiṣat // 22.142
 chandakāham samicchāmi bodhim prāptuṃ jagaddhite /
 tad aśvaṃ sahasā dehi mahyaṃ dharmam yadīcchasi // 22.143
 iti tatpraṇayaṃ śrutvā bhūyo 'ham evam abruvam /
 yady evam icchate gantuṃ prātar yātu bhavān iti // 22.144
 kṛtvā saṃdarśanam pitroḥ prāpyānujñāṃ guror api /
 yaśodharāṃ satīm bhāryāṃ samutthāpyābhībodhayan // 22.145
 sarvās cāpi priyā rāmā bhavaddharmānucārikāḥ /
 sarvās tā api saṃpaśyan bodhayitvābhigacchatu // 22.146
 iti mayoditam śrutvā bodhisattvo 'vadat punaḥ /
 evaṃ na śaknuyāṃ gantuṃ pitā hi mām nivārayet // 22.147
 prajāpatī svasā mātur bhāryā yaśodharāpi me /
 snehaduḥkhāgnisaṃtaptā tyajeyur vā svajīvitam // 22.148
 amātyā mantriṇo bhrtyāḥ sarve sainyādhipā api /
 dhṛtvā nivārayeyur mām parivṛtya samantataḥ // 22.149
 tadāham katham ekas tām bahūn jītvā vajeya hi /
 tan me 'śvaṃ sahasā dehi mātṛa vighnaṃ sakhe kuru // 22.150
 ity evaṃ svāminādiṣṭe śakro lokādhipā api /
 gaganasthāḥ surāḥ sarve mām samīkṣyaivam ādiśan // 22.151
 chandaka mā kṛthā vighnaṃ yadi saddharmam icchasi /
 sahasāśvaṃ upānīya dehy asmai trijagaddhite // 22.152
 ity evaṃ bahudhā devaiḥ paribodhyābhicoditaḥ /
 rudann aśvaṃ upānīya tasya mahātmano 'dadām // 22.153
 tatrāśvo 'pi parijñāya svāmināś citsamīhitam /

sarvajanaprabodhārthaṃ uccaiḥ śabdaṃ vyamuñcata [155b] // 22.154
 taduccair hresitonnādair ekāpi nābhībodhitā /
 tadā dvāraḥ surendreṇa vivaritāḥ samantataḥ // 22.155
 tad dṛṣṭvā sa mahāsattvaś codyamāno 'marair muhuḥ /
 sahasāśvaṃ samāruhya svamandirād viniriyayau // 22.156
 tatra sarvāṇ janān paurān sainyāṃs tāṃś ca prasuptitān /
 paśyan saṃcārayann aśvaṃ gopurān niriyayau drutam // 22.157
 tatra sametya catvāro lokādhipāḥ pramoditāḥ /
 aśvaṃ pado gṛhītvāśu prācarayan viḥāyasi // 22.158
 aham api tathākāśe pṛṣṭhato 'śvaṃ vilokayan /
 sarvadevagaṇaiḥ sārddhaṃ prācaraṃ vismayānvitāḥ // 22.159
 tatra taṃ samupāyātaṃ bodhisattvaṃ samīkṣya te /
 sarvadevāḥ samabhyarcya natvā tuṣṭā mudācaran // 22.160
 airāvatasya śuṇḍāyāṃ kūṭāgāreṣu moditāḥ /
 saṃgītīnṛtyakurvantyāḥ prācarann apsarogaṇāḥ // 22.161
 tadā vidyādhairair muktā puṣpavṛṣṭir viḥāyasā /
 divyasaugandhisamṃmuktā nyapatat tasya mūrdhani // 22.162
 gandharvāḥ sarvavādyāni pravādantaḥ purogatāḥ /
 kinnarās tūryasaṃgītair modayantaḥ puro 'caran // 22.163
 grahās ca tārakāḥ sarvāḥ parivṛtya mudācaran /
 siddhasādhyagaṇāś cāpi saṃstuvanto 'vrajan puraḥ // 22.164
 brahmaśakrādayaḥ sarve lokādhipāḥ pramoditāḥ /
 trāyastriṃśāḥ surāḥ sarve saṃstuvantaḥ purāśaran // 22.165
 guhyakā rākṣasāś cāpi kumbhāṇḍāś ca maharddhikāḥ /
 yakṣāś ca sarvato duṣṭān vārayanto mudācaran // 22.166
 garuḍanāgadaityendrā rocayanto maṇiprabhaiḥ /
 sugandhivārī varṣantaḥ sapuṣpaṃ prācaran pathi // 22.167
 supuṣparasavāhantaḥ sudhīragatayo 'nilāḥ /
 suśītalāḥ sukhasparśāḥ prāsevya pṛṣṭhato 'nugāḥ // 22.168
 ṛṣibhir yatibhiś cāpi yogibhiś ca maharddhibhiḥ /
 stūyamāno mudākāśāt prācarat sa prabhāśayan // 22.169
 evaṃ saṃbodhisattvaḥ sa devair lokādhipair mudā /
 sevyaṃ mahotsāhaiḥ prāṇmukhaḥ sahasācarat // 22.170
 prātar ṛṣer vaśiṣṭhasya saṃprāpta āśramantike /
 tatra lokādhipāḥ sarve sadevās taṃ mahītale // 22.171
 avatā[156a]rya hayāt tatra sarve te samupasthitāḥ /
 mahotsāhaiḥ samabhyarcya praṇatvaivaṃ babhāṣire // 22.172
 siddhyatu te mahāsattva samīhitāṃ jagaddhite /

gacchatu sahasā bodhim sādhayatu samāhitaḥ // 22.173
 iti siddhāśiṣaṃ dattvā brahmaśakrādayo 'marāḥ /
 sarve lokādhipāś cāpi svasvāśiṣaṃ udācaran // 22.174
 trāyastriṃśāś ca sarve 'pi sarvāpsarāgaṇā api /
 grahās tārāgaṇāś cāpi sarve vidyādharā api // 22.175
 gandharvā kinnarā yakṣā guhyakā rākṣasā api /
 kumbhāṇḍā garuḍā nāgā daityendrāś ca maharddhikāḥ // 22.176
 ṛṣayo yatayaś cāpi yogino brahmacāriṇaḥ /
 pratyekasugatāś cāpi bodhisattvā jinātmajāḥ // 22.177
 evaṃ sarve mahāvijñāḥ samabhyarcya tam īśvaram /
 natvā siddhāśiṣaṃ dattvā tasmai svasvāspadaṃ yayuḥ // 22.178
 tataḥ sa prācarat kiṃcid dūre 'raṇye samāśritaḥ /
 mām paśyan samupāmantrya purata evaṃ ādiśat // 22.179
 chandakāśvaṃ gṛhītvaivaṃ sarvāṇy ābharaṇāṇy api /
 sahasā tvaṃ samādhāya nivartasva pure 'dhunā // 22.180
 tatra svanagare gatvā janakasya puro mama /
 imāṇy ābharaṇāṇy aśvaṃ samarpyaivaṃ nivedaya // 22.181
 ātmajas te 'bhiniṣkrānto bodhiprāptyai jagaddhite /
 tad atra mā kṛthāḥ śokaṃ sukhaṃ bhuktvā samācara // 22.182
 sadā te kauśalaṃ prṣtvā kṛtvā ca prañatiṃ smaran /
 gacchāmi trijagadbhadraṃ kartuṃ sambodhiprāptaye // 22.183
 tad atra mā kṛthāḥ śokaṃ saṃsidhyen me samāhitam /
 sadā sarvatra lokaṣu maṅgalaṃ kartum utsahe // 22.184
 iti mārāgaṇāñ jītvā saṃprāpya bodhim uttamām /
 pitroḥ saṃdarśanaṃ kartum āgamiṣyāmy ahaṃ dhruvam // 22.185
 yaśodharā nivāryā hi macchokāj jīvitam tyajet /
 yāvan nāham ihāyātas tāvan me mahiṣī satī /
 rakṣaṇīyā prayatnena pālaniyā hi garbhiniḥ // 22.186
 mātā prajāpatī cāpi nivāryā mama śokataḥ /
 adhīritā tyajet prāṇaṃ rakṣaṇīyā prayatnataḥ // 22.187
 sarvā api ca rāmā me nivāryāḥ śokaduḥkhataḥ /
 gaccheyur maraṇaṃ mugdhā rakṣitavyāḥ prayatnataḥ // 22.188
 sarve lokāś ca macchokaduḥkhāgniparitāpitāḥ /
 tyajeyu[156b]r jīvitam kecit tat tām nivārya rakṣatu // 22.189
 arthino 'pi sadā pālyā dattvā dravyaṃ yathepsitam /
 sarvāṇy api ca rājyāni dharmanītyānuśāstv api // 22.190
 iti mayā samākhyātaṃ pitur mātur puraḥ svayam /
 gopāyāś cāpi sarvāsāṃ purataḥ saṃnivedaya // 22.191

ity ādiśya vimucyāṅgāt sarvāṇy ābharaṇāṇy api /
 aśvaṃ samarpya me haste sahasā mām vyasarjayat // 22.192
 tatra rudamś cireṇāśya sarvāṇy ābharaṇāṇy aham /
 natvā pādāv imaṃ cāśvaṃ dhṛtvā śanais tato 'caram // 22.193
 so 'pi samprasthitas tasmād araṇye samupāviśat /
 devatā samupāyātam samīkṣya taṃ mudācarat // 22.194
 tad dṛṣṭvāhaṃ rudamś tasmāt kiṃcid dūre vane sthitaḥ /
 muhuś taṃ pṛsthataḥ paśyaṃś tatraiva samupāśrayam // 22.195
 tatrāsau nirjane 'raṇye cūḍāṃ chittvāsinā svayam /
 pṛthivyām tām samādāya prākṣipat sahasāmbare // 22.196
 tatprakṣiptām samālokyā gagane tām surā mudā /
 praṇatvā sahasādāya tato 'caran viḥāyasi // 22.197
 tadaiko lubdhakas tatra kāṣāyācīvarāvṛtaḥ /
 tasyaiva samupāgatya saṃmukhaḥ samupāśrayam // 22.198
 taṃ dṛṣṭvā saṃmukhāsīnaṃ kāṣāyācīvarāvṛtam /
 sahasā samupāśṛtya cīvaram taṃ ayācata // 22.199
 taddattaṃ sa samādāya kāṣāyācīvaram mudā /
 sa tasmai kāśikaṃ vastraṃ vimucyāṅgād ayacchata // 22.200
 tat pradattaṃ svakaṃ vastraṃ kāśikaṃ lubdhako mudā /
 praṇatvā sahasādāya tato 'carad viḥāyasi // 22.201
 tataḥ sa bodhisattvas tatkāṣāyācīvarāvṛtaḥ /
 ṛṣṇām darśanaṃ kartuṃ saṃbhāsayan mudācarat // 22.202
 etat sarvaṃ samālokyā vismito 'haṃ tataś cirāt /
 samprasthito 'śvaṃ samādāya śanair ihāsare prabho // 22.203
 tad atra mā kṛthāḥ śokaṃ dhairyam ālambya tiṣṭhatu /
 saṃbodhiṃ sa samāsādya nūnam iha samāsaret // 22.204
 imāṇy ābharaṇāṇy aśvaṃ samādāya prasīdatu /
 mātra viṣṭatām rājan saṃsidhyet tatsamīhitam // 22.205
 ity etat sarvavṛttāntaṃ chandakena niveditam /
 nīśamya sa pi[157a]tā rājā tūṣṇībhūtvābhyatiṣṭhata /
 tāni cābharaṇāṇy aśvaṃ dṛṣṭvaiva na samādade // 22.206
 tataḥ sa chandako natvā pādayor nṛpates tataḥ //
 sarvāṇy ābharaṇāṇy aśvaṃ gṛhītvāntaḥpure 'carat / 207
 tatra taṃ chandakaṃ dṛṣṭvā gṛhītvā 'śvaṃ samāgatam /
 *cety ekā sahasā gatvā prāhaiva tām yaśodharām // 22.208
 prasīda chandako devi gṛhītvāśvaṃ ihāgataḥ /
 nūnaṃ bhartāpi te svāmī samāgata ihādhunā // 22.209
 iti tayā samākhyātaṃ nīśamya sā yaśodharā /

apratītā samālokya tām ceṭīm evam abravīt // 22.210
 yad asau vigatakleśo dṛḍhapratijñā ātmavit /
 tat saṃbodhim anāsādyā naivāgacched ihādhunā // 22.211
 iti tayā samākhyātaṃ śrutvā sā ceṭikā tataḥ /
 gatā taṃ chandakaṃ dṛṣṭvā sahasaivam aprcchata // 22.212
 kutra sa chandaka svāmī tvam eva katham āgataḥ /
 satyam eva samākhyāya gopāṃ devīm prabodhaya // 22.213
 iti cetyā tayākhyātaṃ taṃ śrutvā sa chandako rudan /
 viṣaṇṇātmā vibhinnāsyo yaśodharālaye 'carat // 22.214
 tatra śayyāsanāsīnāṃ yaśodharāṃ samīkṣya sā /
 chandako dūrato natvā paśyann ekāntam āśrayat // 22.215
 tatraikāntasamāsīnaṃ chandakaṃ taṃ samīkṣya sā /
 yaśodharā prabhuṃ smṛtvā vilalāpa bhṛśaṃ ciram // 22.216
 tato dhairyam samālambya viniśvasya cireṇa tam /
 chandakaṃ tam upāmantrya paśyantyaivam abhāṣata // 22.217
 hā chandaka sujāto 'si mama bhartuḥ suhṛt sakhā /
 kva tvayā sa mama svāmī nīto katham kuto 'carat // 22.218 ≈ S ii,189.4-6; M ii,235.8-11
 hā niḥkārūṇyacitto 'si kiṃ mayā prakṛtaṃ tvayi /
 yan mām abodhayitvaivaṃ prabhur me hriyate tvayā // 22.219
 gacchamānaḥ prabhuś cāpi mām prasuptām abodhayan /
 katham utsṛjya niryāto rūṣitātmeva nirdayaḥ // 22.220 ≈ L 235.9-10; H ii,146(vs.)131
 iyaṃ kāntāratim tyaktvā kena niṣkrāmitaḥ purāt /
 yatra so 'nugataḥ svāmī dhanyā tadvanadevatā // 22.221 ≈ L 235.11-12; H ii,146(vs.)132
 chandakaitatmahadvīryam saṃdarśitaṃ mayi tvayā /
 hṛdayena sahākṣiṇī proddhṛtya mad dhṛte mama // 22.222 ≈ L 235.13-14; H ii,146(vs.)133
 hā divyātisundaraḥ kāntaḥ [157b] sarvalokamanoharaḥ /
 subhadralakṣaṇādyāṅgo bhadrāśrīsadguṇāśrayaḥ // 22.223
 sarvavidyādhīpaḥ śāstā sarvasattvāhitārthabhṛt /
 sarvadevāsuraṇāṃ lokaiḥ pūjito vanditastutaḥ // 22.224
 rājyaśrīramaṇīs tyaktvā pravrajase vane kuha /
 etāḥ sarvā anusmṛtvā sahasā vraja nijālaye // 22.225
 hā dhig saṃsārasaṃcāraṃ vidyunmeghanaṭopamam /
 riktam anātmakaṃ sūnyam iti tena sadocyate // 22.226
 atra janmajarāvvyādhimaraṇamakarālaye /
 bhavadadhau nimagnānāṃ samuddhartā sukho 'pi kaḥ // 22.227
 māyāmayam idaṃ sarvaṃ bhavasamparivartanam /
 matvā ko hi mahāsattvaḥ samicchec caritaṃ bhava // 22.228
 dharma eva trilokeṣu nātho bhartā suhṛt sakhā /

ity ākhyātam satā tena svāminā me puraḥ sadā // 22.229
 tad dharmāṇām varām bodhim samprāptum sa samicchati /
 tad abhivāñchitam sarvaṁ saṁsidhyatām jagaddhite // 22.230
 saṁbodhim sa samāsādyā sahasātra samāyatu /
 tatsaddharmāmṛtaṁ pītvā yāsyāmahe sunirvṛtim // 22.231 ≈ L 235.19-20; H ii,148(vs.)136
 iti tayā samākhyātām śrutvā sa chandako rudan /
 svāmināḥ sarvavṛttāntam vistareṇa nyavedayat // 22.232
 tataḥ samarpya gopāyai sarvāṇy ābharaṇāni saḥ /
 chandakaḥ praṇatim kṛtvā gautamā nilaye 'carat // 22.233
 tatra taṁ samupāyātām dṛṣtvā sā gautamī mudā /
 sahasā samupāmantrya śuddhāsane nyaveśayat // 22.234
 tatra sa samupāsṛtya praṇatvā tām prajāpatim /
 āsane samupāviśya sarvavṛttam nyavedayat // 22.235
 sarvam etat pravṛttāntam nandanasya niśamya sā /
 niḥśvasyābhigaladbāspā tasthau tadgatamānasā // 236
 tathā sa chandakaḥ sarvā rāmā natvā samīkṣya tāḥ /
 sarvam etat pravṛttāntam nivedya paryabodhayat // 22.237
 tathā sa sarvalokānām purataḥ samupāsṛtaḥ /
 sarvam etat pravṛttāntam vistareṇa nyavedayat // 22.238
 tac chrutvā paurikāḥ sarve saddharmaśravaṇotsukāḥ /
 āśu saṁbodhim āsādyā samāyātv iti prāvadan // 22.239
 tatra sā mahiṣī gopā sarvāṇy ābharaṇāny api /
 samīkṣya svayam ādāya praṇatvaivābhyamūrchata // 22.240
 tām mūrhitām samālokya sarvās tāḥ [158a] paricārikāḥ /
 sahasāliṅgya śītāmbu pāyayitvā nyabodhayan // 22.241
 paśyantī sā tato gopā sarvāṇy ābharaṇāni ca /
 svāminam samanusr̥tvā vilalāpa vidhīritā // 22.242
 tām rudantīm samīkṣyantyāḥ sarvā rāmā vidhīritāḥ /
 bhartāram tam anusmr̥tvā pravilepur bhṛṣam ciram // 22.243
 tadvilāparavaṁ śrutvā prajāpatī samutthitā /
 sahasāntaḥpure gatvā dadarśa tām yaśodharām // 22.244
 tām rudantīm samālokya rudantī sāpi gautamī /
 sahasāliṅgya paśyantī samāśvāsyaiḥ abravīt // 22.245
 yaśodhare samādhāya tiṣṭha mātra viśīda tat /
 yad asau bodhim āsādyā prathamam ācared iha // 22.246
 tadā tasya munīndrasya sametya śaraṇam vayam /
 sadā dharmāmṛtaṁ pītvā mahānandaṁ labhemahi // 22.247
 iti matvā sadā bhadre saṁcarasva samāhitā /

avaśyaṃ bhāvino bhāvā bhavanty eva bhave dhruvam // 22.248
 iti mātroditaṃ śrutvā yaśodharā samutthitā /
 tasyāḥ pādāmbuje natvā vilapantyaivam abravīt // 22.249
 hā mātā nandanam tatra sahasānīya darśaya /
 yāvad asau mama svāmī nāyātaḥ sukhataḥ kuha // 22.250
 tāvad bhuñje na bhogyāni praṇītasurasāny aham /
 surasāmṛtapānāni na pibeyaṃ kadācana // 22.251
 na kāyaṃ maṇḍayeyāhaṃ vicitravastrabhūṣaṇaiḥ /
 sugandhitailacūrṇaiś ca prasādhayeya nāśrayam // 22.252
 khaṭvātūlāsananāhaṃ na śayīya kadācana /
 saṃgītīnṛtyasaṃcāraṃ darśayeyaṃ kadāpi na // 22.253
 naiva saṃdhārayeyaṃ ca vicitrakusumasrajaḥ /
 bhartāram eva saṃsmṛtvā dhyātvā careya sarvadā // 22.254
 yādāsau bodhim āsādyā samāyāto nijāśrame /
 tadāsyā vratam āsādyā saṃprayāyāṃ sunirvṛtim // 22.255
 iti mātuḥ puras tasyā vilapitvā yaśodharā /
 sarvāṇy ābharaṇāny agre saṃsthāpyābhidadau svayam // 22.256
 tataḥ prabhṛti sā gopā śvetavastrā vimaṇḍanā /
 paṭim evam anusmṛtvā vidhaveva sadācarat // 22.257
 tāni sā gautamī dr̥ṣṭvā sarvāṇy ābharaṇāny a[158b]pi /
 samīkṣya svayam ādāya rudantī svālaye 'carat // 22.258 ≈ L 229.12-14; H ii,130.5-7
 tatra sā bhadrikāṃ nāma kumārāṃ śākyanandanam /
 samupāmantrya taiḥ sarvair bhūṣaṇaiḥ samabhūṣayat // 22.259
 sa śākyanandanas tāni bhūṣaṇāni jagatprabhoḥ /
 iti kāye svake dhartum anīpsur na samādade // 22.260
 tataḥ sā gautamī tāni sarvāṇy ābharaṇāni ca /
 aniruddhakumārāya saṃkalpya samadhaḥkayat // 22.261
 so 'niruddhaḥ kumāro 'pi tāni vīkṣya jagatprabhoḥ /
 katham dhartum praśaknuyām iti naiva samādade // 22.262
 tato 'nyasmai kumārāya tāni dadau prajāpatī /
 so 'pi dr̥ṣṭvā na śaknuyām dhartum iti na praikṣata // 22.263
 evaṃ sarvakumārebhyo dadau tāni prajāpatī /
 sarve 'pi te kumārāś ca dhartum naiva prasehire // 22.264 ≈ L 229.14-18; H ii,130.7-11
 tataḥ sā gautamī tāni sarvāṇi bhūṣaṇāny api /
 samīkṣya svayam ādāya rudanty evaṃ vyacintayat // 22.265
 yāvad imāni sarvāṇi bhūṣaṇāni gr̥he 'tra me /
 tāvad dr̥ṣṭvā muhuḥ śokaḥ pravardhito na śāmyate // 22.266
 itīmāni samādāya bhūṣaṇāni sarasy aham /

prakṣipyāmbunidhisthāne sthāpayeyaṃ suguptike // 22.267	
iti niścītya sā tāni sarvāṇy ābharaṇāny api /	
puṣkariṇyāṃ jale gādhe prakṣīpya saṃnyadhāpayat // 22.268	≈ L 229.18-19; H ii,130.11-13
adyāpy ābharaṇaśrīmatpuṣkariṇīti viśrutā /	
ataḥ prabhṛti sā sarvamahātīrtho 'bhyarājata // 22.269	
tataḥ sā gautamī śrutvā chandakasamprabhāṣitam /	
nandanasya pravṛttāntaṃ bhūyaḥ śokaṃ vyanodayat // 22.270	
tato yaśodharā bhartṛsnehaśokāvilāśayā /	
saṃvīkṣya kanthakaṃ chandaṃ sāśrunetraivam abravīt // 22.271	
prasuptaṃ niśi mām tyaktvā chandaka kva gataḥ patiḥ /	
upāgate tvayi sāsve 'tra mano me 'pi nidahyate // 22.272	≈ Bc 8.32
anāryāsniḡdhaduḥkarma kṛtvā kim iha rodiṣi /	
bāṣpaṃ niyaccha samtuṣṭamānaso bhava sāmpratam // 22.273	≈ Bc 8.33
tvayā me 'tra sahāyena sādhunā hitakāriṇā /	
saha sa me patir yātaḥ kva gato hy anivṛttaye // 22.274	≈ Bc 8.34
ramasva sāmpratam diṣṭyā saṃcarasva yathāsukham /	
prakṛtaṃ yad dhi[159a]taṃ kāryaṃ tacchramaḥ saphalas tava // 22.275	≈ Bc 8.33d
varam prājño ripur nṛṇāṃ naiva mitram durāśayaḥ /	
yat tvayā suhṛdājñena kṛto 'smatkulaviplavaḥ // 22.276	≈ Bc 8.35
imā nirbhūṣaṇāḥ śocyāḥ sāśruraktavilocanāḥ /	
patyau sthite 'pi niḥśobhā vidhavā iva hi striyaḥ // 22.277	≈ Bc 8.36
vimānapaṅktayaś cemāḥ prasaktadīrghanīḥsvarāḥ /	
sahāvarodhanais tena rudantīva bhṛṣaṃ vinā // 22.278	≈ Bc 8.37
eṣo 'pi kanthako dhūrto janasyāsyā hy anarthakṛt /	
jahāra mama sarvasva niśi supte jane 'rivat // 22.279	≈ Bc 8.38
soḍhum iṣuprahārāṃs tvaṃ samarthaḥ kiṃ punaḥ kaśāḥ /	
kaśāpātabhayād dhṛtvā kva gato me śriyaṃ *samam // 22.280	≈ Bc 8.39
kim adya heṣase 'nārya nagaraṃ pūrayann iva /	
yadā me nirgate prāṇe tadā mūko 'bhavaḥ katham // 22.281	≈ Bc 8.40
aheṣiṣyo mahānādaṃ yadi janaṃ prabodhayan /	
khurair vā prālīkhan bhūmyāṃ prākariṣyo yadi dhvanim // 22.282	≈ Bc 8.41ab
hanusvanaṃ mahānādaṃ vā janayiṣya uttamaṃ /	
abhaviṣyan na me duḥkham īdṛṣaṃ prāṇahāraṇam // 22.283	≈ Bc 8.41cd
ity ākhyātaṃ tayā devyā śrutvā sa chandako 'rudan /	
yaśodharāṃ mahādevīm sāñjalir evam abravīt // 22.284	≈ Bc 8.42
mā vigarha mahādevi kanthakaṃ svāmisevakam /	
mayi ca roṣatāṃ kartuṃ nārhasi nau hy adūṣaṇam // 22.285	≈ Bc 8.43
asau devi mahāsattvo devavad gagaṇe gataḥ /	

ahaṃ jānaṃ nṛpājñāṃ hi balāt kṛtaḥ surair api // 22.286	≈ Bc 8.44ab
devaiḥ saṃcoditas tūrṇam imam aśvaṃ upānayam /	
anvagacchaṃ tathākāśe 'py adhvani vigataśramaḥ // 22.287	≈ Bc 8.44cd
vrajann ayaṃ hayendro 'pi khurāgrair nāsprśan mahīm /	
nāheṣata tathā kiṃcid dhanusvanaṃ na vākarot // 22.288	≈ Bc 8.45
yadā sa nirgato gehāt dvāram apāvṛtaṃ svayam /	
nistamodiksamālokaṃ tad daivavidhi manyatām // 22.289	≈ Bc 8.46
yaj jano 'tra pure rājñāḥ śāsanasthaḥ sahasraśaḥ /	
nābuddhyata tadaiko 'pi tad daivavidhir eṣa hi // 22.290	≈ Bc 8.47
yac cāpi cīvaram tasmai *pravrajyāvṛata*sambhṛtaṃ /	
saṃpradattaṃ mudā devais tad daivavidhi manyatām // 22.291	≈ Bc 8.48
tad āvām doṣatā nātra vidyate mā vigarhaya /	
daivavidhir ayaṃ nūnam iti matvā prasīdatām // 22.292	≈ Bc 8.49ab
[159b] na mama kāmākāro 'yaṃ na cāsyā vājino 'pi hi /	
daivaiḥ kṛtānuyātro 'sau mahotsāhair gato 'mbarāt // 22.293	≈ Bc 8.43cd
iti tasya prayāṇaṃ tā niśamya bahudhādbhutam /	
sarvāḥ striyo 'pi niḥśokā iva vismayam āyayuh // 22.294	≈ Bc 8.50ab
pravrajanādbhutā sarvā striyaḥ kāntā madānvitāḥ /	
ratismṛtirāgārtā manojvaram pralebhire // 22.295	≈ Bc 8.50cd
viśādapāriplavalocanā tataḥ	
pranaṣṭapotā kuraṛīva duḥkhitā /	
vihāya dhairyam virurāva gautamī	
tatāma caivāśrumukhī jagāda ca // 22.296	= Bc 8.51
mahormimanto mṛdavo 'sitāḥ śubhāḥ	
prthakprthagmūlaruhāḥ samudgatāḥ /	
praveritās te bhuvī tasya mūrdhajā	
narendramaulīpariveṣṭanakṣamāḥ // 22.297	= Bc 8.52
pralambabāhur mṛgarājavikramo	
maharṣabhākṣaḥ kanakojjvaladyutiḥ /	
viśālavakṣā ghanadundubhisvanas	
tathāvidho 'py āśramavāsam arhati // 22.298	= Bc 8.53
abhāginī nūnam iyaṃ vasuṃdharā	
tam āryakarmāṇam anuttamaṃ patim /	
yātas tato 'sau guṇavān hi tādṛśo	
nṛpaḥ prajābhāgyaguṇaiḥ prasūyate // 22.299	= Bc 8.54
sujātajālāvatatāṅgulī mṛdū	
nigūḍhagulphau bisapuṣpakomalau /	
vanāntabhūmiṃ kaṭhināṃ kathaṃ nu tau	

sacakramadhyau caraṇau gamiṣyataḥ // 22.300	= Bc 8.55
vimānaprṣṭhe śayanāsanocitaṃ mahārhastraḡgurucandanārcitaṃ / kathaṃ nu śītoṣṇajalāgameṣu tac charāram ojasvi vane bhaviṣyati // 22.301	= Bc 8.56
kulena sattvena balena varcasā śrutena lakṣmyā vayasā ca garvitaḥ / pradātum evā bhyudito na yācitum kathaṃ sa bhikṣāṃ parataś carīṣyati // 22.302	= Bc 8.57
śucau śayitvā śayane hiraṇmaye prabodhyamāno niśi tūryaniḥsvanaiḥ / kathaṃ bata svapsyati so 'dya me vratī paṭaikadeśāntarite mahītale // 22.303	= Bc 8.58
imaṃ pralāpaṃ karuṇaṃ niśamya tā bhujaiḥ pariṣvajya parasparaṃ striyaḥ / vilocanebhyaḥ salilāni tatyajur madhūni puṣpebhya iveritā la[160a]tāḥ // 22.304	= Bc 8.59
tato dharāyām apatad yaśodharā vicakravākeva rathāṅgasāhvayā / śanaś ca tat tad vilalāpa viklavā muhur muhur gargadaruddhayā girā // 22.305	= Bc 8.60
sa mām anāthāṃ sahadharmacārīṇīm apāśya dharmāṃ yadi kartum icchati / kuto 'sya dharmāḥ sahadharmacārīṇīm vinā tapo yaḥ paribhoktum icchati // 22.306	= Bc 8.61
śṛṇoti nūnaṃ sa na pūrvapārthivān mahāsudarśaprabhṛtīn pitāmahan / vanāni patnīsahitān upeyuṣas tathā sa dharmāṃ madṛte cikīrṣati // 22.307	= Bc 8.62
makheṣu vā vedavidhānasamskṛtau na daṃpatī paśyati dikṣitāv ubhau / samaṃ bubhuḥṣū parito 'pi tatphalaṃ tato 'sya jāto mayi dharmamatsaraḥ // 22.308	= Bc 8.63
dhruvaṃ sa jānan mama dharmavallabho manaḥ priye py ākalahaṃ muhur mithaḥ / sukhaṃ vibhīr mām apahāya roṣaṇāṃ mahendraloke 'psaraso jighrkṣati // 22.309	= Bc 8.64
iyam tu cintā mama kīdrṣaṃ nu tā	

vapurguṇaṃ bibhrati tatra yoṣitaḥ /
 vane yadārthaṃ sa tapāṃsi tapyate
 śriyaṃ ca hitvā mama bhaktim eva ca // 22.310 = Bc 8.65
 na khalv iyaṃ svargasukhāya me sprhā
 na taj janasyātmavato 'pi durlabham /
 sa tu priyo mām iha vā paratra vā
 kathaṃ na jahyād iti me manorathaḥ // 22.311 = Bc 8.66
 abhāginī yady aham āyatekṣaṇaṃ
 śucismitaṃ bhartur udikṣitaṃ mukham /
 na mandabhāgyo 'rhati **dārako** 'py ayaṃ
 kadācid aṅke parivartitaṃ pitaḥ // 22.312 = Bc 8.67
 aho nṛśaṃsaṃ sukumāravarcaśaḥ
 sudāruṇaṃ tasya manasvino manaḥ /
 kalapralāpaṃ dviṣato 'pi harṣaṇaṃ
 śiśuṃ sutaṃ yas tyajati dṛṣaṃ bata // 22.313 = Bc 8.68
 mamāpi kāmaṃ hṛdayaṃ sudāruṇaṃ
 śilāmayam vāpy ayaso 'pi vā kṛtaṃ /
 anāthavac chrīraḥite sukhocite
 vanaṃ gate bhartari yan na dīryate // 22.314 = Bc 8.69
 itīha devī patiśokamūrchitā
 ruroda dadhyau vilalāpa cāsaḥ /
 svabhāvadhrāpi hi sā satī śucā
 dhṛtiṃ na sasmāra cakāra no hriyam // 22.315 = Bc 8.70
 tatas tathā śokavilāpaviklavām
 yaśodharāṃ prekṣya vasuṃdharāgatām /
 mahāravindair iva vṛṣṭi[160b]tāḍitair
 mukhaiḥ sabāṣpair vanitā vicukruśuḥ // 22.316 = Bc 8.71
 samāptajāpyaḥ kṛtahomamaṅgalo
 nṛpas tu devāyatanād viniryayau /
 janasya tenārtaraveṇa cāhataś
 cacāla vajradhvanineva vāraṇaḥ // 22.317 = Bc 8.72
 niśāmya ca chandakakanthakāv ubhau
 sutasya saṃśrutya ca niścayaṃ sthiram /
 papāta śokābhīhato mahīpatiḥ
 śacīpater vṛtta ivotsave dhvajāḥ // 22.318 = Bc 8.73
 tato muhūrtaṃ sutaśokamohito
 janena tulyābhijanena dhāritaḥ /
 nirīkṣya dṛṣṭyā jalapūrṇayā hayaṃ

mahītalastho vilālāpa pārthivaḥ // 22.319	= Bc 8.74
bahūni kṛtvā samare priyāṇi me mahat tvayā kanthaka vipriyaṃ kṛtam / guṇapriyo yena bataiṣa me priyaḥ priyo 'pi sann apriyavatpraveritaḥ // 22.320	= Bc 8.75
tad adya mām vā naya tatra yatra sa vraja drutaṃ vā punar enam ānaya / ṛte hi tasmān mama nāsti jīvitaṃ vigāḍharogasya sadauśadhā iva // 22.321	= Bc 8.76
suvarṇaniṣṭhīvinī mṛtyunā hṛte suduṣkaraṃ yan na mamāra saṃjayaḥ / ahaṃ punar dharmaratau sute gate mumukṣur ātmānam anātmavān iva // 22.322	= Bc 8.77
vibhor daśakṣatrakṛtaḥ prajāpateḥ parāparajñasya vivasvādātmanaḥ / priyeṇa putreṇa satā vinākṛtaṃ kathaṃ na muhyed dhi mano manor api // 22.323	= Bc 8.78
ajasya rājñas tanayāya dhīmate narādhipāyendrasakhāya me sprhā / gate vanaṃ yas tanaye divaṃ gato na moghabāṣpaḥ kṛpaṇaṃ jijīva ha // 22.324	= Bc 8.79
pracakṣva me bhadra tadāśramājiraṃ hṛtas tvayā yatra sa me jalāñjaliḥ / ime parīpsanti hi tat pipāsavo mamāsavaḥ pretagatiṃ yiyāsavaḥ // 22.325	= Bc 8.80
iti tanayaviyogajātaduḥkhaḥ kṣītisadrṣaṃ sahajaṃ vihāya dhairyam / daśaratha iva rāmaśokavaśyo bahu vilālāpa nṛpo viśaṃjñakalpaḥ // 22.326	= Bc 8.81
śrutavinayaguṇānvitas tatas taṃ matisacivaḥ pravayā purohitaś ca / avadhṛtam idam ūcatur yathāvan na ca paritaptamukhau na cāpy aśokau // 22.327	= Bc 8.82
tyaja naravara śokam ehi dhairyam kudhṛtir ivārha[161a]si dhīra nāśru moktum / srajam iva mṛditām apāsyā lakṣmīm bhuvi bahavo hi nṛpā vanāny abhīyuh // 22.328	= Bc 8.83
api ca niyata eṣa tasya bhāvaḥ	

smara vacanaṃ tad r̥ṣeḥ purāsitasya /
 na hi sa divi na cakravartirājye
 kṣaṇam api vāsayituṃ sukhena śakyaḥ // 22.329 = Bc 8.84
 yadi tu nṛvara kārya eva yatnas
 tvaritam udāhara yāvad atra yāvaḥ /
 bahuvīdham iha yuddham astu tāvat
 tava tanayasya vidheś ca tasya tasya // 22.330 = Bc 8.85
 narapatir **api** tau śaśāsa tasmād
 drutam ita eva yuvām abhiprayātam /
 na hi mama hṛdayaṃ prayāti śāntiṃ
 vanaśakuner iva putralālasasya // 22.331 = Bc 8.86
 paramam iti narendraśāsanāt tau
 yayatur amātyapurohitau vanaṃ tat /
 kṛtam iti savadhūjanaḥ sadāro
 nṛpatir api pracakāra **śokaśāntim** // 22.332 = Bc 8.87
 tataḥ śuddhodano rājā bhūyo 'py āmantrya chandakam /
 ātmajasya pravṛttāntaṃ sampraṣṭum evam ādiśat // 22.333
 chandaka mama putrasya tvam eva hi suhṛt sakhā /
 tan me satyaṃ samākhyāya manaḥ samabhibodhaya // 22.334
 katham asau mahāsattvo puradvārād dhi nirgataḥ /
 niśīte 'śvaṃ samāruhya tamovyāpte kuhācarat // 22.335
 idānīm sa yatir bhūtvā katham eko vane gataḥ /
 kasyarṣer āśrame vṛkṣamūle vā samupāśritaḥ // 22.336
 iti satyaṃ samākhyāhi yadi me prītim icchasi /
 suhṛd bhr̥tyo hi satyena vipriyaṃ vāpi prāvadet // 22.337
 ity ādiṣṭaṃ narendreṇa niśamya chandako rudan /
 svāminaṃ nṛpatiṃ natvā sāñjalir evam abravīt // 22.338
 niśīte 'sau bhavatputraḥ svayam āgatya me puraḥ /
 bahudhā prañayaṃ kṛtvā samayācata mām hayaṃ // 22.339
 tasya matvā *manovṛttim pṛṣṭvāham aśvakāraṇam /
 bahuśo yācyamāno 'pi naivam adāṃ hayaṃ cirāt // 22.340
 tadā khashthair suraiḥ sarvair bahudhāhaṃ pracoditaḥ /
 *rudann aśvam upāhṛtya prādāṃ tasmai mahātmane // 22.341
 aheṣata hayaḥ proccaiḥ khurair bhūmiṃ vidārayat /
 aham api mahotkrośaiḥ sarvāḥ strīḥ parya[161b]bodhayam //342
 tathāpi tāḥ striyaḥ sarvā yaśodharādayo 'pi hi /
 prasvāpanamahānidrākrāntendriyā na coditaḥ // 22.343
 śakreṇa sahasā dvāram udghāṭitaṃ samantataḥ /

tad dr̥ṣṭvā sa mahāsattvo hayam āruhya nirayau // 22.344	
taddhayacaraṇān dhṛtvā caturlokādhipā api /	
mahotsāhair suraiḥ sārddham pracārayad viḥāyasi // 22.345	
aham api tathā tasya hayaraśmim samādadhan /	
prācaram gagaṇe bhūmyām iva devaiḥ samanvitaḥ // 22.346	
tatra so 'bhyarcitaḥ sarvair devaiḥ sahāpsarogaṇaiḥ /	
saṃgītītūryasaṃvādyaiḥ saha saṃmānito 'carat // 22.347	
tatra devagaṇāt sṛṣṭā puṣpavṛṣṭiḥ pracāritā /	
sugandhivāri meghāś ca prāvarṣanta suśītaḥ // 22.348	
evam nānāvidhotsāhaiḥ samanvitaḥ prabhāsayan /	
viḥāyasāvrajan prātar mahāraṇye samāptavān // 22.349	
tatra śakrādayo devāḥ sarve lokādhipā api /	
pranātva taṃ mahāsattvaṃ tataḥ svasvāspadaṃ yayuḥ // 22.350	
tataś caran muhūrtāt sa samudite divākare /	
samīpe bhārgavasyarṣer āśramaṃ samapaśyata // 22.351	≈ Bc 6.1
suptaviśvastahariṇaṃ svasthasthitavihaṅgamam /	
viśrānta iva yad dr̥ṣṭvā kṛtārtha iva cābhavat // 22.352	= Bc 6.2
sa viśmayanivṛttiyarthaṃ tapaḥpūjārtham eva ca /	
svām cānuvartitaṃ rakṣann aśvapṛṣṭhād avātarat // 22.353	= Bc 6.3
avatūrya ca pasparśa nistīrṇam iti vājinam /	
tato mām cāvadāt prītaḥ snāpayann iva cakṣuṣā // 22.354	= Bc 6.4
imaṃ tārksyamahāvegam turaṅgam anugacchatā /	
darśitā saumya madbhaktir vikramaś cāyam ātmanaḥ // 22.355	= Bc 6.5
sarvathāsmi anyakāryo 'pi gr̥hīto bhavatā hṛdi /	
bhartṛsnehaś ca yasyāyam īdr̥ṣaḥ śakta eva ca // 22.356	= Bc 6.6
asnigdho 'pi samartho 'sti niḥsāmarthyo 'pi bhaktimān /	
bhaktimāṃś caiva śaktaś ca durlabhas tvadvidho bhuvi // 22.357	= Bc 6.7
tat prīto 'smi tavānena mahābhāgena karmaṇā /	
dr̥śyate mayi bhāvo 'yaṃ phalebhyo 'pi parāṇmukhe // 22.358	= Bc 6.8
ko janasya phalasthasya na syād iha mukho janaḥ /	
janībhavati bhūyiṣṭhaṃ svajano [162a] 'pi viparyaye // 22.359	= Bc 6.9
kulārthaṃ dhāryate putraḥ poṣārthaṃ sevyate pitā /	
āśayāśliṣyate jagannāsti niṣkāraṇā svatā // 22.360	= Bc 6.10
kim uktvā bahu saṃkṣepāt kṛtaṃ me svamahat priyam /	
nivartasvāśvam ādāya saṃprāpto 'smīpsitaṃ vanam // 22.361	= Bc 6.11
ity uktvā sa mahābāhur anuśaṃsacikīrṣayā /	
bhūṣaṇāny avamucyādān mahyaṃ saṃtaptacetase // 22.362	= Bc 6.12
mukuṭoddīpakarmāṇaṃ maṇim ādāya bhāsvaram /	

bruvan vākyam idaṃ tasthau sāditya iva mandaraḥ // 22.363	= Bc 6.13
anena maṇinā chanda praṇamya bahuśo nṛpaḥ /	
vijñāpyo 'muktaviśrambhaṃ saṃtāpavinivṛttaye // 22.364	= Bc 6.14
jarāmarāṇanāśārthaṃ praviṣṭo 'smi tapovanam /	
na khalu svargatarṣeṇa nāsnehena na manyunā // 22.365	= Bc 6.15
tad evaṃ abhiniṣkrāntaṃ na mām śocitum arhasi /	
bhūtvāpi hi ciraṃ śleṣaḥ kālena na bhaviṣyati // 22.366	= Bc 6.16
dhrūvo yasmāc ca viśleṣas tasmān mokṣāya me matiḥ /	
viprayogaḥ kathaṃ na syād bhūyo 'pi svajanādibhiḥ // 22.367	= Bc 6.17
śokatyāgāya niṣkrāntaṃ na mām śocitum arhasi /	
śokahetuṣu kāmeṣu saktāḥ śocyās tu rāgiṇaḥ // 22.368	= Bc 6.18
ayaṃ ca kila pūrveṣāṃ asmākaṃ niścayaḥ sthiraḥ /	
iti dāyādabhūtena na śocyo 'smi pathā vrajan // 22.369	= Bc 6.19
bhavanti hy arthadāyādāḥ puruṣasya viparyaye /	
prṛthivyāṃ dharmadāyādā durlabhās tu na santi vā // 22.370	= Bc 6.20
yad api syād asamaye yāto vanam asāv iti /	
akālo nāsti dharmasya jīvite cañcale sati // 22.371	= Bc 6.21
tasmād adyaiva me śreyaś cetavyam iti niścayaḥ /	
jīvite ko hi viśrambho mṛtyau pratyarthini sthite // 22.372	= Bc 6.22
evamādi tvayā saumya vijñāpyo me pitā nṛpaḥ /	
prayatethās tathā caiva yathā mām na smared api // 22.373	= Bc 6.23
api nairguṇyam asmākaṃ vācyam narapatau tvayā /	
nairguṇyāt tyajyate snehaḥ snehatyāgān na śocyate // 22.374	= Bc 6.24
iti vākyam idaṃ śrutvā rudan saṃtāpaviklavaḥ /	
bāṣpagrathitayā vācā pratyavadaṃ kṛtāñjaliḥ // 22.375	= Bc 6.25
anena tava bhāvena bāndha[162b]vāyāsadāyinā /	
bhartaḥ sīdati me ceto nadīpaṅka iva dvipaḥ // 22.376	= Bc 6.26
kasya notpādayed bāṣpaṃ niścayas te 'yam īdṛṣaḥ /	
ayomaye 'pi hṛdaye kiṃ punaḥ snehaviklave // 22.377	= Bc 6.27
vimānaśayanārhaṃ hi saukumāryam idaṃ kva ca /	
kharadarbhāṅkuravatī tapovanamahī kva ca // 22.378	= Bc 6.28
śrutvā tu vyavasāyam te yad aśvo 'yaṃ mayāhṛtaḥ /	
balātkāreṇa tan nātha daivenaivāsmi kāritaḥ // 22.379	= Bc 6.29
kathaṃ hy ātmavaśo jānan vyavasāyam imaṃ tava /	
upānayeyaṃ turagaṃ śokaṃ kapilavāstunaḥ // 22.380	= Bc 6.30
tan nārhasi mahāsattva vihātuṃ putralālasam /	
snigdhaṃ vṛddhaṃ ca rājānaṃ saddharmam iva nāstikaḥ // 22.381	= Bc 6.31
saṃvardhanapariśrāntāṃ dvitīyāṃ tām ca mātaram /	

deva nārhasi vismartuṃ kṛtaghna iva satkriyām // 22.382	= Bc 6.32
garbhavatīm guṇavartīm kulaślāghyām pativratām /	
devīm arhasi na tyaktuṃ klībaḥ prāptām iva śriyam // 22.383	= Bc 6.33
putraṃ yāsodharāgarbhe yaśodharmabhṛtām varaḥ /	
bālarhasi na tyaktuṃ vyasanīvottamaṃ yaśaḥ // 22.384	= Bc 6.34
atha bandhuṃ ca rājyaṃ ca tyaktum eva kṛtā matiḥ /	
mām nārhasi vibho tyaktuṃ tvatpādau hi gatiṃ mama // 22.385	= Bc 6.35
nāsmi yātuṃ puraṃ śakto dahyamānena cetasā /	
tvām arāṇye parityajya sumitra iva rāghavam // 22.386	= Bc 6.36
kiṃ hi vakṣyati mām rājā tvadṛte nagaraṃ gatam /	
vakṣyāmy ucitadarśitvāt kiṃ tavāntaḥpurāṇi vā // 22.387	= Bc 6.37
yad apy ātthāpi nairguṇyaṃ vācyaṃ narapatāv iti /	
kiṃ tad vakṣyāmy abhūtaṃ te nirdoṣasya muner iva // 22.388	= Bc 6.38
hṛdayena salajjena jihvayā sajjamānayā /	
ahaṃ yady api vā brūyāṃ kas taṃ śraddhātum arhati // 22.389	= Bc 6.39
yo hi candramasas taikṣṇyaṃ kathayec chraddadhīta vā /	
sa doṣāṃs tava doṣajña kathayec chraddadhīta vā // 22.390	= Bc 6.40
sānukrośasya satataṃ nityaṃ karuṇavedinaḥ /	
snigdhatyāgo na sadṛśo nivartasva prasīda me // 22.391	= Bc 6.41
iti śokābhībhūtasya niśamya mama bhāṣitam /	
svasthaḥ paramayā dhṛtyā jagāda vadatām varaḥ // 22.392	= Bc 6.42
madviyogaṃ prati cchanda saṃtāpas tyajyatām ayam /	
nānābhāvo hi niyataṃ pṛthagjātiṣu dehiṣu // 22.393	= Bc 6.43
[163a] svajanaṃ yady api snehān na tyajeyam mumukṣayā /	
mṛtyur anyonyam avaśān asmān saṃtyājayaṣyati // 22.394	= Bc 6.44
mahatyā tṛṣṇayā duḥkhair garbheṇāsmi yayā dhṛtaḥ /	
tasyā niṣphalayatnāyāḥ kvāhaṃ mātuh kva sā mama // 22.395	= Bc 6.45
vāsavṛkṣe samāgamya vigacchanti yathāṇḍajāḥ /	
niyataṃ viprayogāntas tathā bhūtasamāgamaḥ // 22.396	= Bc 6.46
sametya ca yathā bhūyo vyapayānti balāhakāḥ /	
saṃyogo viprayogaś ca tathā me prāṇinām mataḥ // 22.397	= Bc 6.47
yasmād yāti ca loko 'yaṃ vipralabhya parasparam /	
mamatvaṃ na kṣamaṃ tasmāt svapnabhūte samāgame // 22.398	= Bc 6.48
sahajena viyuḍyante paṇḍarāgeṇa pādapāḥ /	
anyenānyasya viśleṣaḥ kiṃ punar na bhaviṣyati // 22.399	= Bc 6.49
tad evaṃ sati saṃtāpaṃ mā kārṣiḥ saumya gamyatām /	
lambate yadi tu sneho gatvāpi punar āvraja // 22.400	= Bc 6.50
brūyāc cāsmāsv anākṣepaṃ janaṃ kapilavastuni /	

tyajyatām tadgataḥ snehaḥ śrūyatām cāsyā niścayaḥ // 22.401	= Bc 6.51
kṣīpram eṣyati vā kṛtvā jarāmṛtyukṣayaṁ kila /	
akṛtārtho nirārambho nidhanaṁ yāsyatīti vā // 22.402	= Bc 6.52
iti bhartur vacaḥ śrutvā kanthakas turagottamaḥ /	
prālīhad jihvayā pādaḥ bāṣpam uṣṇaṁ vyamuñcata // 22.403	= Bc 6.53
jālinā svastikāṅkena cakramadhyena pāṇinā /	
āmarśya sa mahāsattvas tam aśvam abhyabhāṣate // 22.404	= Bc 6.54
muñca kanthaka mā bāṣpam darśiteyaṁ sadaśvatā /	
mṛṣyatām saphalaḥ śīghraṁ śramas te 'yaṁ bhaviṣyati // 22.405	= Bc 6.55
maṇitsarum yan mama hastasaṁsthaṁ	
tataḥ sa dhīro niśitaṁ grhītvā /	
kośād asim kāñcanabhakticitraṁ	
bilād ivāśīviṣam *udbabarha // 22.406	= Bc 6.56
niṣkāsyā taṁ cotpalapattranīlaṁ	
chittvā svayaṁ mūrdhajaṁ ātmanaḥ saḥ /	
vikīryamāṇaṁśukam antarīkṣe	
prodakṣipad dhaṁsam ivāmburāṣau // 22.407	= Bc 6.57
pūjābhilāṣeṇa ca bāhumānyād	
divaukasas taṁ jagṛhuḥ praviddham /	
yathāvad enaṁ divi devasaṅghā	
divyair vidhānair abhipūjayeyuḥ // 22.408	= Bc 6.58
muktvā tv alaṁkāṛakalatravattām	
śrīvīpravāsaṁ śirasaś ca kṛtvā /	
dr̥ṣṭvāṁśukam kā[163b]ñcanahaṁsacihnaṁ	
vanyaṁ sa dhīro 'bhicakāṅkṣa vāsaḥ // 22.409	= Bc 6.59
tato mṛgavyādhavapur divaukā	
bhāvaṁ viditvāsyā viśuddhabhāvaḥ /	
kāṣāyavastro 'bhiyayau samīpaṁ	
taṁ śākyarājaprabhavo 'bhyuvāca // 22.410	= Bc 6.60
śivaṁ ca kāṣāyam ṛṣidhvajaṁ te	
na yujyate hiṁsram idaṁ dhanuś ca /	
tat saumya yady asti na saktir atra	
mahyaṁ prayacchedam idaṁ grhāṇa // 22.411	= Bc 6.61
vyādho 'bravīt kāmada kāmam ārād	
anena viśvāsyā mṛgān nihanmi /	
arthas tu śakropama yady anena	
hanta pratīcchānaya śuklam etat // 22.412	= Bc 6.62
pareṇa harṣeṇa tataḥ sa vanyaṁ	

jagrāha vāso 'śukam utsasarja /
 vyādhas tu divyaṃ vapur eva bibhrat
 tac chuklam ādāya divaṃ jagāma // 22.413 = Bc 6.63
 tataḥ sa dhīro 'py aham enam eva
 divaṃ prayātaṃ *hy abhivīkṣya tatra /
 sthitau sacitrau vyavalokantau
 cāranyake vāsasi sābhilāṣau // 22.414 ≈ Bc 6.64
sa māṃ tataḥ sāsrumukhaṃ viśṛjya
 kāṣāya**samvid** dhṛtikīrtibhṛt saḥ /
 yenāśramas tena yayau mahātmā
 saṃdhyābhraśaṃvīta ivā**drir**ājāḥ // 22.415 = Bc 6.65
 tatas tathā bhartari rājyanisṛṣṭhe
 tapovanaṃ yāti vivarṇavāsasi /
 bhujau samutkṣīpya **rudan sa vājis**
tato caran tadgata mānaso 'ham // 22.416 = Bc 6.66
 vilokya **tam eva rudamś ca** sasvaraṃ
 hayaṃ bhujābhyāṃ upaguhya **niḥsvaśan** /
 tato nirāśo vilapan muhur muhur
yayāmi dehena puraṃ na cetasā // 22.417 = Bc 6.67
 ity evaṃ sa mahāsattvo bahudhā paribodhya māṃ /
 samarpya me hayaṃ haste sahasā prācarad vanam // 22.418
 atrāparādhataḥ rājan nāsti me tat prasīdatu /
 yady asti me 'parādhataṃ tathāpi kṣīpyatāṃ prabho // 22.419
 avaśyaṃ bhāvino bhāvā bhavanti jagatāṃ bhava /
 tad aham atra kiṃ kuryāṃ kuryāt kiṃ vā bhavān api // 22.420
 daivādhīnaṃ jagat sarvam iti matvā prasīdatu /
 nūnaṃ sa bodhim āsādy bauddhacaryaṃ samācaran /
 saddharmaṃ samupādeṣṭuṃ sasāṃghika ihācaret // 22.421
 tadā dharmāmṛtaṃ pītvā bodhicaryāvrataṃ caran /
 sarvasattvahiṭaṃ kṛtvā saṃcaratāṃ sadā sukham // 22.422
 eta[164a]tpuṇyavipākena paśuddhendriyo bhavān /
 api saṃbodhim āsādy saṃbuddhapadam āpsyati // 22.423
 iti tenoditaṃ śrutvā tatheti paribodhitaḥ /
 sa rājā śokasaṃtāpaṃ tyakto dharmam samāyayau // 22.424
 tataḥ sa nṛpatiḥ chandaṃ samāchādya suvāsasā /
 praṇītaiḥ surasair bhojayaiḥ sāmṛtaiḥ samatoṣayat // 22.425 ≈ S ii,189.17; M ii,236.1-2
 saurasyaṃ api tadbhojyaṃ bhuktvāpi nābhinanditaḥ /
 chandakas taṃ prabhuṃ smṛtvā vidhīritāśayo 'carat // 22.426

tathāśvaṃ kanthakaṃ cāpi samīkṣya sa narādhipaḥ /
 bhojārhaṃ saurasam bhojyaṃ bhokayitum upācarat // 22.427 ≈ S ii,189.18-190.1; M ii,236.2-4
 tadbhojyaṃ kanthako vīkṣya bhoktuṃ naivābhyavāñchata /
 svāminam eva taṃ smṛtvā dhyātvā tasthau yatir yathā // 22.428
 tathānye mantriṇo 'mātyā api tasya hayasya ca /
 sarvapaurasya bhogyāni purataḥ samaḍhaukayan // 22.429
 tāny api so 'sva ālokya naivam bhoktuṃ samaicchata /
 tam eva svāminam smṛtvā tasthau sāśruvilocanaḥ // 22.430
 tathānyāḥ purikāḥ sarvāḥ striyo 'pi taṃ hayottamam /
 sudūsyakomalair vastraiḥ samācchādyābhyamodayan // 22.431 ≈ S ii,190.1-5; M ii,236.4-8
 kāścīt tasyānane 'śrūṇi prāmārjayan suvastrakaiḥ /
 kāścīt grīvān śīraḥ kāścīt kāścīt skandham amārjayan // 22.432
 kāścīt bāhū tathā prṣṭhaṃ saṃdhiṃ vā tathā parā /
 kāścīt ca vāladhiṃ tasya hayendasyābhyamārjayan // 22.433
 padāny api tathā kāścīt tasya *saṭām amardayan /
 kāścīt rājārhabhogyāni praṇītasurasāny api // 22.434
 sugandhipuṣpapattrāṇi phalāni vividhāni ca /
 mūlaśākadalaskhandhabijādisurasāni ca // 22.435 ≈ S ii,190.5-8; M ii,236.8-11
 kāścīt *pātrodakānekaprakārasurasāni ca /
 vividhāny api pānāni kāścīt pañcāmṛtāni ca // 22.436
 evaṃ sarvāḥ striyas tasya kanthakasya puraḥ sthitāḥ /
 sarvāṇy etāni bhogyāni purataḥ samaḍhaukayan // 22.437
 tataḥ sarvāḥ striyas tās ca kanthakaṃ taṃ hayottamam /
 samīkṣya purataḥ sthitāḥ sādaram evam abruvan // 22.438
 kanthakemāni bhogyāni pānā[164b]ni surasāni ca /
 yathepsitaṃ samāhṛtya sukhaṃ tiṣṭha viśīda mā // 22.439
 evaṃ tābhir api strībhiḥ sarvābhiḥ *samudīritaḥ /
 kanthakas tāni bhogyāni bhoktuṃ naiva samaicchata // 22.440
 draṣṭuṃ naiva samutsehe kutas tadbhogyapraśanam /
 tam eva svāminam smṛtvā tasthau dhyātvā yatir yathā // 22.441
 evaṃ taṃ kanthakaṃ bhogyaniḥsprhaṃ vīkṣya chandakaḥ /
 purataḥ samupāśritya sādaram evam abravīt // 22.442
 kanthaka bhuñkṣva bhyogyāni yatre te rocate manaḥ /
 na hi bhogyam vinā dhairyam kāye vīryam ca jīvitam // 22.443
 tad īpsitaṃ samāhṛtya bhogyeṣu ca yathācchayā /
 dhairyam ālambya taṃ nātham anusmaran samācara // 22.444
 ity uktvāpi tridhā tena chandakena sa kanthakaḥ /
 tam evānusmaran nātham tasthāv adhomukho rudan // 22.445

evam sa kanthako 'bhuktvā svāminam tam anusmaran / dhyātvā deham parityajya surālayam samāyayau // 22.446	≈ S ii,190.8-9; M ii,236.11-12
tatra sa śikhaṇḍisaṃjñāsya devasya nandano 'bhavat / divyaśrīmahadaiśvaryaguṇabhadrasukhānvitaḥ // 22.447	≈ S ii,190.10-12; M ii,236.13-14
tam aśvam nirgataprāṇam matvā sa chandako rudan / sahasā nṛpater agre prāṇatvaivam nyavedayat // 22.448	
deva sa kanthako bhartuḥ śokenaiva mṛto 'dhunā / yathāvidhi tad asyāśu saṃskārayitum arhati // 22.449	
iti niveditam tena niśamya sa nṛpo rudan / janān āśu samāmantrya sampaśyann evam ādiśat // 22.450	≈ S ii,190.9-10; M ii,236.12-13
bho janāḥ sahasāśvasya kanthakasya śārīrakam / samabhyarcya mahātūrthe saṃnidhāpayata drutam // 22.451	
ity ādiṣṭam narendreṇa śrutvā sarve 'pi te janāḥ / tatheti pratīvijñāpya tato 'śvanilaye 'caran // 22.452	
tatra te tam samālokyā samabhyarcya yathāvidhi / śībikāyām samāropya samāvāhyānayan bahiḥ // 22.453	
tato nītvā mahātūrthe nidhāya taddhayāśrayam / caityavat saṃpratiṣṭhāpya mahotsāhair apūjayan // 22.454	
tac chrutvāntaḥpure sarvāḥ striyas tacchokatāpitāḥ / bhūyo bhartuḥ smṛtisnehaduḥkhātūrā vilepire // 22.455	
tathā sa chanda[165a]ko 'py aśvam kanthakam tam anusmaran / śāyāsanasamāsīnas tasthau taddhyānamānasah // 22.456	
tanniśī devatā tasya chandakasya puraḥsthitā / bhavati kanthako devaputra iti samādiśat // 22.457	
evam taddevatādiṣṭam śrutvā sa vismayānvitaḥ / chandakaḥ prātar utthāya dhyātvāivam samacintayat // 22.458	
aho yad devatādiṣṭam tat satyam bhavati dhruvam / iti niścitya tacchokam tyaktvā sa chandako mudan // 22.459	
tataḥ sa chandako gatvā sahasā nṛpateḥ puraḥ / sarvam etat pravṛttāntam vistareṇa nyavedayat // 22.460	
rājāpi tadvacaḥ śrutvā satyam iti vicintayan / tacchokaduḥkham utsrjya mudam āpābhībodhitaḥ // 22.461	
tataḥ sa chandakaś cāntaḥpure gatvā yaśodharām / devīm natvā puraḥsthitvā sāñjalir evam abravīt // 22.462	
devi śokam kṛthā mātra saṃprasīda prabodhitā / yad devatā samupāsṛtya mamaivam vadate niśi // 22.463	
kanthako 'sau mahābhāgadevaputro maharddhimān / divyaśrīmahadaiśvaryasukham bhuktvā 'bhimodate // 22.464	

devatayā samādiṣṭaṃ satyam iti vicintayan /
 bhavatyā api tacchokavinodārtham idaṃ vade // 22.465
 tac chokaṃ mā kṛthā devī prasīda sampramoditā /
 drakṣase hy acirān nūnaṃ bodhiprāptam ihāgatam // 22.466
 ye sukr̥tānugantāraḥ śocitavyā na te bhava /
 so 'pi puṇyābhiraktātmā tac chokaṃ mā kṛthāḥ punaḥ // 22.467
 mātūr garbhe praviṣṭo 'smatsaṃjāte 'pi samantataḥ /
 nirutpātaṃ śubhotsāhaṃ samācaran niranantaram // 22.468
 evaṃ tasmin mahābhāge niṣkrānte 'pi vihāyasi /
 nirutpātaṃ śubhotsāhaṃ prāvartata niranantaram // 22.469
 sāpsarastridaśair sarvaiḥ sarvair lokādhipair api /
 pūjyamāno mahotsāhaiḥ stūyamāno 'bhinanditaḥ // 22.470
 bhāsayan sa mahābhijñāḥ kurvan bhadraṃ samantataḥ /
 saṃbodhipraṇidhiṃ kṛtvā prācaran trijagaddhite // 22.471
 nūnaṃ sa bodhim āsādy saṃbuddhaḥ śrāvakānvitaḥ /
 ihāgatya jagadbhadraṃ saddharmaṃ samupādi[165b]śet // 22.472
 tadā tasya jagadbhartur jagacchāstur jagadguroḥ /
 śaraṇe bhajanaṃ kṛtvā dharmāṃ śrutvā mudācara // 22.473
 etatpuṇyavipākena tvam apy evaṃ samṛddhimān /
 nūnaṃ saṃbodhim āsādy saṃbuddho 'pi bhaviṣyasi // 22.474
 ye tasya trijagacchāstur jagadbhadra jagatprabhoḥ /
 śaraṇe bhajanaṃ kṛtvā dharmāṃ śrutvāśrayanty api // 22.475
 te sarve vimalātmāno pariśuddhatrimaṇḍalāḥ /
 bodhisattvā mahābhijñā bhadraśrī sadguṇāśrayāḥ // 22.477
 krameṇa bodhisambhāraṃ pūrayitvā jagaddhite /
 arhanto bodhim āsādy saṃbuddhapadam āpnuyuḥ // 22.477
 iti devī parijñāya tyaktvā śoka*viśadatām /
 tatsmṛtibhajanaṃ kṛtvā saṃcarasva samāhitā // 22.478
 iti tenoditaṃ śrutvā yaśodharā prabodhitā /
 saṃsmṛtibhajanaṃ kṛtvā bhartur eva samācarat // 22.479
 tathāntaḥpurikāḥ sarvāḥ striyo mātāpi gautamī /
 chandakasya vacaḥ śrutvā prabodhitā prasedire // 22.480
 iti me guruṇādiṣṭaṃ purā yathā mayocyate /
 tvam apy evaṃ mahāsattva saṃśrāvaya prajā api // 22.481
 etatpuṇyavipākena tvam apy evaṃ viśuddhadhīḥ /
 bodhisattvo mahāsattvo bhadraśrī sadguṇāśrayaḥ // 22.482
 krameṇa bodhisambhāraṃ pūrayitvā caraṇ chubhe /
 arhan saṃbodhim āsādy saṃbuddho 'pi bhaviṣyati // 22.483

iti śāstā samādiṣṭaṃ śrutvāśoko nṛpo {or: śrutvānando yatir} mudā /
tathety abhyanumoditvā prābhyanandat saparśadaḥ // 22.484

// iti chandakanivartanasarvāntaḥpurikāśokavinodanakanthakasvargābhirohanaparivarto
nāma dvāviṃśatitamo 'dhyāyaḥ samāptaḥ //

Apparatus criticus of the chapter 22

- 1a athā*śoko *mahīpatiḥ] ex con: athānando mahāsattvaḥ A2 B.
3c *kenāsau] ex con: tenāsau A2 D || *jñāto] ex con: jñānā A2 D.
7a *anyā api priyāḥ] ex con: anye 'pi priyāḥ A (metre!).
8b mahāmate] D: mahāmateḥ A2.
9c aśokaṃ *tatsabhāṃ] ex con: a[śo]kaṃ tātsabhā A2: asmākaṃ taṃ sabhāṃ D.
10a śṛṇv aśoka] corr.: śṛṇu aśoka A2 D.
11c °prabhāvato] D: °prabhāvatā] A2.
11e prāgdvāra evāpithitaḥ] A2: prāgdvāraś caiva pithitaḥ D.
12c *nāpaśyad] ex con: sāpaśyad A2: sāparāpa D.
12e apaśyantī] D: apaśyantā A2.
14c *kva prayāsi] ex con: kṛpayāsi A2 D.
15b sarvāḥ] D: sarvā A2.
16c sarvāś] corr.: sarvān A2: sarvā D.
18b tyaktvā*smāñ *charaṇasthitān] ex con: tyaktvāsmā charaṇe sthitān A2: tyaktvāsyā charaṇe sthitān D.
19c vyalapan] corr.: vyalapad D: vyapacad A2.
21a *ūrū] ex con: uru A2 D.
21c *bāhū] ex con: bāhu A2 D.
21d tāḍayantyo] D: tāḍayantya A2.
22b avakīryā°] A2: avatīryā° D.
22d *viluñcantyaś] ex con (cf. LV): vilapantyaś A2 D.
23b °*bāhavaḥ] ex con.: °vāhanaḥ A2 D.
23d utkrośantyo] corr.: utkrośantya A2 D.
24a kāścid rudan pradhāvanto] D: pradhāvanto rudan kāścid A2.
24d dṛṣṭāḥ] corr. dṛṣṭā D: dṛṣṭvā A2.
26d kāścid *vivṛttākṣyo] ex con: kāści vṛttokṣyo A2: kāścid vivṛttokṣo D.
27a nānāvidhā°] D: tā tā vidhā° A2.
30a *bhartryā] ex con: bhartā A2 D.
30d 'carat] D: 'carata A2.
31a samupāsṛtya] D: saṃmukhā sṛtya A2.

- 31b vilapantīm] corr.: vilapantī A2 D.
- 31d puraḥsthitā] corr.: purasthitā A2 D.
- 32d ta ihāgatā] corr.: te ihāgatāḥ D: te ihāgatā A2.
- 33b prarudantī] D: pradudantī A2.
- 33d kiñ cin na] D: kiñ cin naṃ A2.
- 35c kuhāsīno] corr.: kuhāsīnā A2 D.
- 36ab itīyaṃ svāminī bhartur adarśanāt] corr.: itīyaṃ svāminī bharttaṃ na darśanāt D: iti yaṃ svāminī bhartuṃ na darśanāt A2.
- 37c rudanti] D: rudantī A2.
- 38b sahasāgatā] corr.: sahasāgataḥ A2 D.
- 38d rudanty evaṃ] corr.: rudantyaivam A2 D.
- 39b 'dhunā] D: 'dhuno A2.
- 41b niśamya] corr.: nisamya A2 D.
- 42ab ceṭīprayatnāt *sācirād *āptasvacetanā] ceṭīprayatnātmā ciraṃ dāhopacetanīm A2: ceṭīprayatnātmā cirād āsopacetanā D.
- 42c kva prayātas] D: ko prayātas A2.
- 43c jarākrāntāṃ] corr.: jarāṃ krāntāṃ A2 D.
- 45b virāga*darśanā kṣaṇaṃ] ex conī: virāgadarśanakṣaṇaṃ A2: virātadarśanaṃ kṣaṇaṃ D.
- 46b bhāryāḥ kāntā ramopamāḥ] corr.: bhāryā kāntā ramopamāḥ A2: bhāryā kāntā ramoyamāḥ D.
- 48b *rājye 'dhunā] ex conī: rājo 'dhunā A2 D.
- 49b rājyaśrī°] corr.: rājyaḥ śrī° A2 D.
- 49d asūn tyajet] corr.: asun tyajet D: asūk tyajet A2.
- 50c nūnaṃ te] A2: nūnaṃ taṃ D.
- 55c tyaktvā] A2: tpaktkā D.
- 57c yad evaṃ] A2: yady evaṃ D.
- 57d yāsyē] corr.: yasye A2 D.
- 58b prabodhayan] corr.: prabodhayat_ A2 D.
- 60b ceṭyaḥ] corr.: ceṭyā A2 D.
- 64a bhaginyaḥ] A2: bhaginya D.
- 65b samupāśritāḥ] corr.: samupāśritā A2: samupāśritaḥ D.
- 66c niṣkrānto] A2: niṣkrāntā D.
- 67d nyavedayat] corr.: nyavedayan D. — The text of A2 for the śloka 67-68 is clearly damaged, so I read it using text of D instead of A2.
- 82a tataḥ sarvatra] corr.: tatas sarvatra A.
- 91d mārgayata] māgaryata A: māgaryata D || mamātmajaṃ A: samātmajaṃ D.
- 98c tat sarve] A: tat sarvaṃ D.
- 99b samādr̥ṣtvā] A: samāpr̥ṣtvā D.
- 106c sametyāśu] A: samaityāśu D.

- 114b punaḥ A: puraḥ D.
- 121a gr̥hītvemaṃ A: gr̥hītveyaṃ D.
- 127d tadudyāna A: tadudyāne D.
- 155d vivaritaḥ] A: viceritaḥ D. Cf. Lalitavistara 15.116a, "śakreṇa dvārā vivarita yantrayuktāḥ".
- 168a °vāhantaḥ] A (metri causa = °vahantaḥ): °vāhanta D.
- 169c mudākāśāt] A: mudākāśān D.
- 181d samarpyaivaṃ] A: samarpyaiva D.
- 196c pr̥thivyāṃ tām] corr.: pr̥thivyāṃs tām A D.
- 200c kāśikaṃ] A: kauśikaṃ D.
- 201d tato 'carad] corr.: tato caran A D.
- 202d saṃbhāsayan] A: saṃbhāṣayan D.
- 204a mā kṛthāḥ] corr.: mā kṛthā A D.
- 205c viṣīdatām] corr.: viṣīdatā (or viṣādatā) A.
- 205d saṃsidhyet] corr.: saṃsidhye A.
- 206c °tiṣṭhata] corr.: °tiṣṭhataḥ A D.
- 206e tāni cābharaṇāny] D: tāny ābharaṇāny A.
- 208c *ceṭy ekā] ex coni: caṭyaikā A: ceṭikā D.
- 215d āśrayat] A: āśrayaḥ D.
- 222c saḥākṣiṇī] A, saḥākṣiṇi D.
- 224d vanditastutaḥ] A: vanditastuteḥ D.
- 229a dharma eva] A: dharmam eva D.
- 231a saṃbodhiṃ sa] A: saṃbodhiṃ ca B.
- 251a tāvad] A: yāvad D.
- 280d *samam] ex coni: mana A(ante corr.): manaḥ A(post corr.) D.
- 282c prālīkhan] corr.: prālīkhaḥ A D.
- 289c °diksamālokaṃ] B: °dik[sam]ālokaṃ A.
- 291b *pravrajyāvṛata*saṃbhṛtaṃ] ex coni: pravrajya vrataṣaṃbhṛte A: pravrajya vrataṣaṃbhṛṣaṃ D.
- 293a kāmākāro] D: kāmamkāro A.
- 297b °pr̥thagmū°] A. (Cf. Bc 8.52 pr̥thañmū; Cowell °pr̥thagmū°)
- 299c yātas] A. (Cf. Bc 8.54 gatas)
- 302c evābhyudito] A. (Cf. Bc 8.57 evābhyucito; Cowell evābhyudito)
- 303b °niḥsvanaiḥ] A. (Cf. Bc 8.58 °nisvanaiḥ)
- 305d gargada°] sic A. (Cf. Bc 8.60 gadgada°)
- 307d tathā sa] A. (Cf. Bc 8.62 tathā hi; Cowell tathā sa)
- 308c parito] A. (Cf. Bc 8.63 parato)
- 309b priye 'py ākalahaṃ] A. (Cf. Bc 8.64 priyersyākalahaṃ; Cowell priye 'py ākalahaṃ)
- 312c dārako] A. (Cf. Bc 8.67 rāhulo)

320c bataiṣa] A. (Cf. Bc 8.75 vane sa)

325c hi tat] A. (Cf. Bc 8.80 hi taṃ; Cowell hi te)

327c avadhṛtam] A. (Cf. Bc 8.82 samadhṛtam; Cowell avadhṛtam)

328d bahavo hi nṛpā vanāny abhīyuh] A. (Cf. Bc 8.83 bahavo nṛpā vanāny atīyuh; Cowell bahavo hi nṛpā vanāny abhīyuh)

331a api tau] A. (Cf. Bc 8.86 atha tau)

331c prayāti] corr.: prāyānti A (metre!). (Cf. Bc 8.86 prayāti)

332d śokaśāntim] A. (Cf. Bc 8.87 śeṣakāryam)

340a *manovṛttim] ex conī: manāvṛttim A D.

341c *rudann aśvam] ex conī (cf. 153c): rudadaśvam A D.

346b hayaraśmim] corr.: hayaraśmi A: hayaṃrasmi D

348b °vṛṣṭiḥ pracāritā] corr.: °vṛṣṭiḥ pracāritāḥ A: °vṛṣṭipracāritāḥ D.

352 note] The exact same strophe is found in TJAM 21.427.

354c tato māṃ cāvadāt] A. (Cf. Bc 6.4 chandakaṃ cābravīt)

354 note] ≡ TJAM 21.436 (largely identical)

355a tārksyamahāvegāṃ] A. (Cf. Bc 6.5 tārksyopamajavāṃ)

355 note] ≡ TJAM 21.437 (largely identical)

356d śakta eva] A. (Cf. Bc 6.6 śaktir eva; Cowell śakta eva)

356 note] = TJAM 21.438 (the same strophe)

357 note] = TJAM 21.439 (the same strophe)

358c dṛśyate] A. (Cf. Bc 6.8 yasya te; Cowell dṛśyate)

358d parāṇmukhe] sic A. (Cf. Bc 6.8 parāṇmukhaḥ; Cowell parāṇmukhe)

358 note] = TJAM 21.440 (the same strophe)

359b iha mukho] A. (Cf. Bc 6.9 abhimukho)

360c āśayāśliṣyate] A. (Cf. Bc 6.10 āśayāc chliṣyati ; Cowell āśayāśliṣyate)

360 note] = TJAM 21.442 (the same strophe)

361b svamahat] A. (Cf. Bc 6.11 sumahat)

361d vanam] A. (Cf. Bc 6.11 padam; Cowell vanam)

361 note] = TJAM 21.443 (the same strophe)

362b anuśaṃsa°] corr.: ānṛśaṃsa° A. (cf. Bc 6.12 anuśaṃsa°; TJAM 21.444 anuśaṃsa°)

362cd avamucyādān mahyaṃ saṃtaptacetase] A. (Cf. Bc 6.12 avamucyāsmāi saṃtaptamanase dadau)

362 note] = TJAM 21.444 (the same strophe)

363a mukuṭoddīpaka°] A. (Cf. Bc 6.13 mukuṭād dīpaka°; Cowell mukuṭoddīptak°)

363 note] = TJAM 21.445 (the same strophe)

364c vijñāpyo] A. (Cf. Bc 6.14 vijñāpyo)

364 note] = TJAM 21.446 (the same strophe)

365a jarāmarāṇa°] A. (Cf. Bc 6.15 janmamarāṇa°; Cowell jarāmarāṇa°)

365b tapovanam] corr.: tapovane A. (cf. Bc 6.15 and TJAM 21.447 tapovanam)

365 note] = TJAM 21.447 (the same strophe)

366 note] = TJAM 21.448 (the same strophe)

367d svajanādibhiḥ] A. (Cf. Bc 6.17 svajanād iti; Cowell svajanādibhiḥ)

367 note] = TJAM 21.449 (the same strophe)

368 note] = TJAM 21.450 (the same strophe)

369c dāyāda°] A. (Cf. Bc 6.19 dāyādyā°; Cowell dāyāda°)

369 note] = TJAM 21.451 (the same strophe)

370c dāyādā] A. (Cf. Bc 6.20 dāyādāḥ; Cowell dāyādā)

370 note] = TJAM 21.452 (the same strophe)

371 note] = TJAM 21.453 (the same strophe)

372 note] = TJAM 21.454 (the same strophe)

373b vijñāpyo me pitā nṛpaḥ] A. (Cf. Bc 6.23 vijñāpyo vasudhādhipaḥ)

373 note] = TJAM 21.455 (the same strophe)

374 note] = TJAM 21.456 (the same strophe)

375b rudan] A. (Cf. Bc 6.25 chandaḥ)

375d pratyavadaṃ] A. (Cf. Bc 6.25 pratyuvāca)

375 note] = TJAM 21.457 (largely identical)

376 note] = TJAM 21.458 (the same strophe)

377 note] = TJAM 21.459 (the same strophe)

378 note] = TJAM 21.460 (the same strophe)

379 note] = TJAM 21.461 (the same strophe)

380 note] = TJAM 21.462 (the same strophe)

381a mahāsattva] A. (Cf. Bc 6.31 mahābāho)

381 note] = TJAM 21.463 (the same strophe)

382c deva] A. (Cf. Bc 6.32 devīm; Cowell deva)

382 note] = TJAM 21.464 (the same strophe)

383a garbhavatīm] A. (Cf. Bc 6.33 bālāputrām)

383 note] = TJAM 21.465 (the same strophe)

384a yāśodharāgarbhe] A2. (Cf. Bc 6.34 yāśodharaṃ ślāghyaṃ)

384b varaḥ] sic A2. (Cf. Bc 6.34 varam; Cowell varaḥ)

384 note] = TJAM 21.466 (the same strophe)

385 note] = TJAM 21.467 (the same strophe)

386d sumitra] A. (Cf. Bc 6.34 sumantra; Cowell sumitra)

386 note] = TJAM 21.468 (largely identical)

387 note] = TJAM 21.469 (the same strophe)

388 note] = TJAM 21.470 (the same strophe)

389d taṃ śraddhātum] sic A. (Cf. Bc 6.39 tac chraddhātum)

- 389 note] = TJAM 21.471 (the same strophe)
- 390 note] = TJAM 21.472 (the same strophe)
- 391 note] = TJAM 21.473 (the same strophe)
- 392b niśamya mama] A. (Cf. Bc 6.42 śrutvā chandasya)
- 392 note] ≡ TJAM 21.474 (almost identical)
- 393 note] = TJAM 21.475 (the same strophe)
- 394b tyajeyaṃ mumukṣayā] A. (Cf. Bc 6.44 tyajeyam ahaṃ svayam; Cowell tyajeyaṃ mumukṣayā)
- 394 note] = TJAM 21.476 (the same strophe)
- 395 note] = TJAM 21.477 (the same strophe)
- 396 note] = TJAM 21.478 (the same strophe)
- 397 note] = TJAM 21.479 (the same strophe)
- 398b parasparam] sic A: paramparam Bc. 6.48
- 398 note] = TJAM 21.480 (the same strophe)
- 399 note] = TJAM 21.481 (the same strophe)
- 400c yadi tu sneho] corr.: yadi sneho A (metre!). (cf. Bc 6.50 and TJAM 21.482)
- 400 note] = TJAM 21.482 (the same strophe)
- 401a brūyāc cāsmāsv anākṣepaṃ] A. (Cf. Bc 6.51 brūyāś cāsmatkṛtāpekṣaṃ)
- 401b °vastuni] A. (Cf. Bc 6.51 °vāstuni; Cowell °vastuni)
- 401c tyajyatām] corr. (cf. Bc 6.51): tyajatām A.
- 401 note] = TJAM 21.483 (the same strophe)
- 402b jarāmṛtyu°] A. (Cf. Bc 6.52 janmamṛtyu°)
- 402 note] = TJAM 21.484 (the same strophe)
- 403a bhartur] A. (Cf. Bc 6.53 tasya)
- 403c prālihaḥ jihvayā] A. (Cf. Bc 6.53 jihvayā lilihe)
- 403d vyamuñcata] A. (Cf. Bc 6.53 mumoca ca)
- 403 note] = TJAM 21.485 (the same strophe)
- 404cd āmarśya sa mahāsattvas tam aśvam abhyabhāṣata] A. (Cf. Bc 6.54 āmamarśa kumāras taṃ babhāṣe ca vayasavata)
- 404 note] = TJAM 21.486 (the same strophe)
- 405 note] = TJAM 21.487 (the same strophe)
- 406a yan mama] A. (Cf. Bc 6.56 chandaka)
- 406d *udbabarha] ex con; urddhabarhaḥ A. (Cf. Bc 6.56 udbabarha)
- 406 note] ≡ TJAM 21.488 (almost identical)
- 407b chitvā svayaṃ mūrdhajaṃ ātmanaḥ] A. (Cf. Bc 6.57 ciccheda citraṃ mukuṭaṃ sakeśam)
- 407d prodakṣipad dhaṃsam ivāmburāśau] A. (Cf. Bc 6.57 cikṣepa cainaṃ saraśīva haṃsam)
- 407 note] = TJAM 21.489 (the same strophe)

408d vidhānair abhipūjayeyuḥ] A. (Cf. Bc 6.58 viśeṣair mahayāṃ ca cakruḥ; TJAM 21.490 vidhānair abhipūjya cakruḥ A2)
 408 note] = TJAM 21.490 (almost identical)
 409 note] = TJAM 21.493 (the same strophe)
 410 note] = TJAM 21.494 (the same strophe)
 411a °dhvajam] sic A. (Cf. Bc 6.61 °dhvajas)
 411 note] = TJAM 21.495 (almost identical)
 412b nihanmi] A(post corr. marg.): nihatya A(ante corr.). (Cf. Bc 6.62 nihanmi; Cowell nihatya; TJAM 21.496 nihatya)
 412 note] = TJAM 21.496 (almost identical)
 413 note] = TJAM 21.497 (the same strophe)
 414b prayātaṃ *hy abhivīkṣya] ex con: prayātaṃ abhivīkṣya A D (metre!).
 414 note] cf. TJAM 21.498 (somewhat similar strophe)
 415a sa māṃ] A. (Cf. Bc 6.65 chandaṃ)
 415b kṣāyasaṃvid] A. (Cf. Bc 6.65 kṣāyasaṃbhr̥d)
 415d ivādrirājaḥ] A. (Cf. Bc 6.65 ivodurājaḥ; Cowell ivādrirājaḥ)
 416c rudan sa vājis] A. (Cf. Bc 6.66 tataḥ sa vāji+bhr̥d)
 416d tato caran tadgatamānaso 'ham] A. (Cf. Bc 6.66 bhr̥śaṃ vicukrośa papāta ca kṣītau)
 417a tam eva rudaṃś ca] A. (Cf. Bc 6.67 bhūyaś ca ruroda)
 417b niḥsvaśan] A. (Cf. Bc 6.67 kanthakam)
 417d yayāmi dehena] A. (Cf. Bc 6.67 yayau śarīreṇa)
 422b caran] D: can_ A.
 425b suvāsasā] A: subhāsasā D.
 436a *pātrodakāneka] ex con: pādakāneka A (metre!).
 440b *samudīritaḥ] corr.: samudīri A: samudīrito A(marg.).
 442b niḥspṛhaṃ] corr.: nisṛhaṃ A.
 455a °ntaḥpure] corr.: °ntapure A D.
 470c mahotsāhaiḥ] corr.: mahotsāhai A.
 481ab iti me guruṇādiṣṭaṃ purā yathā mayocyate] A(marg.): iti me pūrvakarmedaṃ sāmpratam
 [...] mayocyate A: iti me pūrvakarmmedam āvratam mas mayocyate D.
 (Colophon:) iti chandaka°] A: iti śrīlalitavistare chandaka° A(marg.) D || dvāviṃśatitamo] A:
 viṃśatitamo D.

『チャンドカが帰還してすべての後宮の女たちの悲しみを慰め、カンタカが昇天した』という第22章

さて大地の守護者アショーカは合掌してそばに赴き、かの世尊・阿羅漢に再び拝礼して、次のように言った。(22.1)

世尊よ、かの大士（菩薩）はその後どこへ行かれたのでしょうか。たった一人で出家して、どこかの隠遁地に身を寄せられたのでしょうか。(22.2)

また彼が後宮を捨てて城外へ出離された時、彼が城から出たことを最初に知ったのは誰でしょうか。(22.3)

また寝台に横たわっていたヤショーダラーはいつ目を覚まし、かの夫がいないのを見て、いかに動揺したのでしょうか。(22.4)

また父王シュッドーダナも、息子が去ったことを知り、どのように悲しみの火に焼かれ、心を乱されたのでしょうか。(22.5)

また母君ガウタミーも、息子が去ったことを聞いて、どのように愛情と悲しみの火に焼かれて激しく嘆いたのでしょうか。(22.6)

他の愛された妻たちも、愛する夫が出離したことを聞いて、悲しみの火に焼かれ、どのように激しく嘆いたのでしょうか。(22.7)

大智の尊き方よ、これらの事のすべてをお語り下さい。私たちにもその悲しみが生じるように、聞く楽しみをお与え下さい」(22.8)

かの王による求めを聞いて、その大智慧の阿羅漢は、アショーカとその集会を見渡して、次のように語り出した。(22.9)

専心して聞きなさい、アショーカよ。私の師が語った通りに、私はあなたに語ろう。アショーカよ、これを聞いてしばしの楽しみとしなさい。(22.10)

かくの如くである。かの大士（菩薩）が都城の外へと出離する時、インドラ神の力によって諸門が閉じられ、東門（吉祥の門）だけがシンドゥーラの花で飾られて開いていた。(22.11)

その時、寝台にいたヤショーダラーは目を覚まし、急いで起き上がったが、どこにも夫の姿が見えなかった。自分の部屋にいないので、外を見ようと歩み出た。(22.12)

開け放たれた門を彼女は見て、『あの方はきっと出て行かれた』と確信すると、迷悶した心でかのヤショーダラーは倒れた。(22.13)

その後しばらく経って彼女は起き上がり、あたりを見回し、『ああ、わが君、あなたはどこへ行ったのです。戻ってきて』と言い、激しく泣いた。(22.14)

その嘆きの声を聞いて、美しい妻たちは皆目を覚まし、急いで起き上がるとゴーパー（ヤショーダラー）の部屋に駆けつけた。(22.15)

その場に彼女たちの主人（菩薩）の姿がどこにも見当たらなかったのも、彼女たちは皆、惑乱した状態となって、根元から切り倒された木々のように地上に倒れた。(22.16)

その後、侍女たちの介抱により彼女らはようやく意識を取り戻し、主人のことを思い出しては、狂ったように嘆き悲しんだ。(22.17)

「ああ、わが主、どこに行ってしまったの、あなただけを依り処としている私たちを見捨てて。主よ、戻ってきて。可愛がってくれたことを思い出して、お顔を見せて」(22.18)

或る女たちは両腕で髪をかき乱して激しく泣き嘆き、或る女たちは衣で顔を覆いながら激しく泣いた。(22.19)

或る女たちは両腕で自らの頭を打ち叩きながら嘆き、或る女たちは両のこぶしで胸を打ち叩きながら激しく泣いた。(22.20)

或る女たちは両腕で自分の両の腿を叩きながら泣き嘆き、或る女たちは自分の掌で両の上腕を叩きながら激しく泣いた。(22.21)

打ちのめされた心の或る女たちは自分の頭の上に砂塵をふりかけ、また髪を振り乱した或る女たちは、髪の手をむしり取った。(22.22)

或る女たちは足を投げ上げ、或る女たちは腕を差し上げ、或る女たちは立ち上がったまま大声を張り上げて嘆き悲しんだ。(22.23)

或る女たちは泣きながら走り、また「或る女たちは」まるで毒を塗られて死んだようになった。或る女たちは全身を震わせ、或る女たちは互いに見つめ合った。(22.24)

或る女たちは風に折られた木のように地面に倒れ伏し、「或る女たちは」網から投げ上げられた魚のように地の上で展転し、(22.25)

或る女たちは仰向いた顔で、また或る女たちは顔をうつ向け、或る女たちは顔を背け、或る女たちは顔を斜めに傾け、或る女たちは目を剥いて、嘆き悲しんだ。(22.26)

このように、ひどく心を乱したすべての女たちが様々な姿でひたすら主のことを思い出し、その名前を呼びつつ泣き叫んだ。(22.27)

その泣き嘆く声を耳にして、プラジャーパティーは目を覚まし、急いで起き上がると、侍女を呼んでこう言った。(22.28)

「これはどうしたことでしょう。後宮内に泣き嘆く声の響きがあります。それを聞いて、何が起きたかよく見て、急いでここに戻ってきなさい」(22.29)

そう女主人プラジャーパティーが命じたのを聞いて、その侍女は『承知いたしました』と答え、急いで後宮へと歩を進めた。(22.30)

其処で彼女は泣き嘆いているヤショードラーに近づくと、観察して、彼女の前に立って礼拝し、こう尋ねた。(22.31)

「お方様、ヤショードラー奥様、なぜそのような泣いておられるのですか。ガウタミー奥様から私はその理由を尋ねるよう遣わされて、ここに参りました」(22.32)

そう、その侍女に言われても、号泣し続けるヤショードラーは、ただその侍女を見つめるだけで、何も答えなかった。(22.33)

するとゴーパー付きの別の侍女たちがそこに近づいて来て、プラジャーパティーの侍女にこう言った。(22.34)

「姉様、この方の夫君たる旦那様が後宮におられません。出離されたのか、それともどこかにおられるのか、今は全く見当たらないのです。(22.35)

それで、この奥様はどこを探してもかの旦那様のお姿が見えないため、出離されたのではないかと不安に襲われ、このように嘆いて泣いておられるのです。」(22.36)

この方の泣き声を聞いて、これらの方々もまた目を覚まし、皆、旦那様が出離されたという不安に襲われ、今、激しく泣いているのです」(22.37)

その彼女の言葉を聞くと、急いでその侍女は戻って、ガウタミーの前に進み出て、泣きながらこう告げた。(22.38)

「奥様、あなたのご愛息は、今、後宮におられません。ゴーパー様は彼女の夫の姿が見えないため、嘆いて泣いております。(22.39)

あの方の嘆きの声を聞いて、すべての妃たちも目を覚ましましたが、旦那様の姿が見えないため、同じように激しく泣き、取り乱しております。」(22.40)

その侍女がそう語ったのを聞き、プラジャーパティーは『ああ、なんと』と泣き叫んで、嘆きながら、地面に倒れ伏した。(22.41)

その後、侍女たちの介抱によって彼女はようやく意識を取り戻すと、『ああ、私の命よ、どこへ行ったの。戻ってきておくれ』と激しく嘆き悲しんだ。(22.42)

「ああ、お前は私の命よりも大切な存在。お前のほか息子はいない。そのことを思い出し、老いに触まれたこの母のもとへ、すぐに戻っておくれ。(22.43)

ああ、息子よ、どうしてお前は諸感官が衰えた私を捨てて、たった一人無慈悲にどこかへ行くのか。お前の顔を見せておくれ。(22.44)

ああ、王子よ、どうして私は無情の眼で見られることに一瞬でも堪えられようか、それなら私の心はきっと今すぐにでも死ぬことを望む。(22.45)

ああ、我が命よ、女神のように美しいこれらのお前の妻たちを、欲しくない草のように捨てて、今どこへ行くというのか。(22.46)

この王国の偉大なる栄耀・繁栄・幸福の完全達成を打ち捨てて、他にどんな幸せを見ながら、どこへ行こうというのか。善き心の者よ。(22.47)

ああ、インドラを凌いで光り輝く者よ、今、誰がこの王国にいるというのか。誰が常に慈しみを持って人々を見て、保護できるというのか。

お前の父たる王様は年老いて、王国での栄耀や快樂に関心がなくなった。お前の離別という大きな悲しみの火に焼かれ、命を捨ててしまわれることだろう。(22.49)

お前の妻たるヤショーダラーも、お前なしでどうして生きていけるだろう。お前の思ひ出を抱いたまま、命を捨てて冥府に赴くことだろう。(22.50)

これらのお前の美しい妻たちも、お前の望みに従ってきた者たちだ。愛の苦しみという火に焼かれ、お前を欠いては生きていけないだろう。(22.51)

大臣や顧問官や家来たち、そして都民など、下に生きる者たちは、勝れた人よ、お前の法による統治なしに、どのようにやってゆけるのか。(22.52)

この地で誰が、乞い求める人たちに望み通りの物を与えて満足させるだろうか。あの哀れな貧窮者たちはきっと誰もが希望をうち砕かれ、死王の許へ赴くだろう。(22.53)

きっとあの敵である者たちは皆、大喜びの振舞いをなし、友人たちは今や誰もが大きな歓びを失ってしまうことだろう。(22.54)

ああ、運命よ、どうしてこのようにあの占相師たちの言葉は嘘となったのか。至高の王たる栄光を捨てて、お前が出家行者になることを欲するなんて。(22.55)

ああ、われら一族のすべての主たち（先祖の神）は無慈悲だ。自分たちが慕うあの王子が道ならぬ道に行くのを放置し、我らを守ろうとしないとは。(22.56)

ああ、運命よ、私はいつの生においてどんな罪を犯したというのか。このように息子への悲しみの火に焼かれて、ヤマの住処（冥府）に赴くことになるとは。(22.57)

私はこれから誰を依り処とすればよいのか、誰が私を諭し、守ってくれるのか。こうしてあの息子のことを思い出しながら、私は死にたい」(22.58)

このようにかの母ガウタミーは、長い間激しく嘆いて泣き続け、息子との別離という悲しみの火に焼かれ、地面に倒れ伏した。(22.59)

彼女が地面に倒れたのを見て、すべての侍女たちは立ち上がり、すぐさま彼女を抱きしめ、大きな声で嘆き悲しんだ。(22.60)

その嘆きの声を聞いて、シュッドーダナ王は目を覚まし、急いで起き上がると、部下を呼んでこう命じた。(22.61)

「後宮で大きな異変が、嘆きの声が起きている。それ故すぐに行って、聞き、状況を見て、すぐ戻ってきなさい。」(22.62)

王がそう命じるのを聞くと、その部下は『承知いたしました』と答え、急いで後宮へ行き、侍女に尋ねた。(22.63)

「さあ、ご婦人がた、ここであなた方は皆、なぜひどく取り乱しているのか。あなた方が大声で嘆いて泣いているそのわけを話しなさい」(22.64)

そう、その部下から尋ねられ、侍女たちは彼のそばに近づくと、すぐにその部下に話しかけ、声を潜めてこう言った。(22.65)

「よきお方よ、サルヴァールタシッダ副王様がここにおられません。出離されたのか、或いはどこかにおられるのか、探しても見つからないのです」(22.66)

その侍女の言葉を聞くとすぐにその部下は王の前に行き、泣きつつこう報告した。(22.67)

「王よ、あのサルヴァールタシッダ副王様がおられません。後宮の至るところが探されておりますが、そこに見つかりません」(22.68)

その言葉を聞くと、シュッドーダナ王は嘆きながらすぐに後宮へ行き、ガウタミーにこう尋ねた。(22.69)

「いつ出て行ったのか。なぜお前は見ていなかったのか。これほど大勢の者がいながら、ただの一人も見えていないとは、信じがたいことだ」(22.70)

夫である王がそう言うのを聞いてプラジャーパティーは起き上がり、夫の蓮華の両足を拝すと、再び地面に倒れた。(22.71)

彼女が地面に倒れたのを見て王はすぐに自ら抱きかかえて起こし、慰めてこう言った。(22.72)

「悲しんではならぬ。しっかりと心を保ち、落ち着きなさい。なぜそのように絶望するのか。私が至る所を搜索させて、必ず彼の姿を示してあげよう」(22.73)

王たる夫がそう言ったのを聞いて、かのガウタミーは激しく泣きながら、王を見つめ、拝してから、こう言った。(22.74)

「ああ、わが主、すぐにあの子を連れてきて、私にお見せ下さい。王よ、どうか早く息子に会わせて、私を何も欠けるところのない幸せな女にして下さい。(22.75)

大王よ、どうかあなたの息子を、この都でも、あちこちの都城でも、村々でも、森や園林でも、あらゆる所を今すぐ搜索させてください。(22.76)

息子が見つからない限り、私は食事を摂りません。乗り物にも、寝台にも、寝椅子の上にも乗りません。(22.77)

もし私が息子を見ることを叶えていただけないのであれば、王よ、私はあの子のことだけを思い出しながら、今死んでしまいたいのです。(22.78)

「王よ、もし私に対して情けや同情、愛情があるのなら、どうか私自身の命にも等しい息子を今すぐ至る所で搜索させて下さい」(22.79)

妻のその言葉を聞き、シュッドーダナ王は泣いてすぐに王の顧問官や大臣たちを呼び寄せ、こう命令した。(22.80)

「聞きなさい、顧問官・大臣たちよ。私の息子がここにおらぬ。見て確認し、都城のすべての門を速やかに閉じよ。(22.81)

それからすべての家々、遊楽の園林、森林、また諸宗教の道場や保護所、旅の休息小屋、(22.82)

あらゆる寺院、樹々の下、林の中や空き家に至るまで、くまなく四方八方を搜索せよ」(22.83)

そう王が命じるのを聞いて、すべての王の顧問官や大臣たち、家来を伴う家臣たちは『承知いたしました』と言って、そこから動き出した。(22.84)

命じられた通りに彼らはすぐに行ってすべての都城の門が閉じられているのを見て確認した上で、四方八方を搜索し始めた。(22.85)

遊楽の園林、森林、庭園、樹々、旅の休息小屋、宗教者の宿泊所や道場、空き家まで、(22.86)

あらゆる場所をくまなく探したが、どこにも彼を見つけることができず、皆が王の許へと戻ってきた。(22.87)

彼らは皆、シュッドーダナ王の蓮華の両足を拝すると、王を見つめてこう報告した。(22.88)

「閣下、あらゆる所を探しましたが、この都城では見つけられませんでした。かの大士、あなた様の御子息は、すでに出離されたのでしょうか」(22.89)

この彼らの報告を聞き、王シュッドーダナは嘆きながら、すぐに騎兵たちを呼び寄せ、彼らを見つめてこう命じた。(22.90)

「騎兵たちよ、お前たちは皆、急いで都城より出よ。外のあらゆる場所でわが息子を搜索せよ。(22.91)

あらゆる場所をよく見て探し、彼を捉えて、すぐに連れ戻せ。見つかるまで、誰一人ここに戻ってきてはならぬ」(22.92)

王がそう命じるのを聞いて、彼らは皆『承知いたしました』と言い、俊足の馬に跨って、急いで都城から出て行った。(22.93)

都城の外に出た彼らは、四方を見渡し、隈なくよく探したが、どこにも彼を見つけることは出来なかった。(22.94)

その後彼らは皆疲れ果ててしまい、あらゆる方角から戻ってきて王の前に進み出て、拝し、こう報告した。(22.95)

「王よ、あらゆる場所を隈なく探しましたが、あなた様の御子息はどこにも見つかりませんでした」(22.96)

その言葉を聞くと、シュッドーダナ王は嘆きながら再び彼らを呼び集め、皆にこう命じた。(22.97)

「『あの方は東門から出たはずだ』と賢者たちが教示した。それ故、皆、急いで吉祥の門（東門）から出て進め。(22.98)

「急いでその門を出て、人々をもよく見て、四方を見渡し、隈なく搜索せよ。(22.99)

どこにも見つからぬ間は、戻って来てはならぬ。皆、彼がいる場所へ急いで向かえ。(22.100)

其処で彼に近づいてから、懸命に説得し、力づくで掴まえてでも何としても、速やかに連れ戻せ」(22.101)

王がそのように命じるのを聞いて、それらすべての家来たちは「承知いたしました」と答え、直ちにそこから出発した。(22.102)

彼らはそれぞれの馬に乗り、吉祥の門（東門）から速やかに外に出た。すると道の上に天上の花々が撒き散らされているのを見た。(22.103)

それらの花々を見て、彼らは皆驚きに満たされて、「きっとあの方はここを通って出離されたのだ」と考えた。(22.104)

その後その大臣たちも皆、「あの方は確かにここから出てゆかれたのだ」と話し合い、よく見回しながら、馬たちを駆り立てて走らせた。(22.105)

その後彼らが遠くまで進むと、やって来るチャンダカを発見し、皆がすぐに集まって、丁重に次のように尋ねた。(22.106)

「チャンダカ、君は一体どこから来たのか。王子はどこへ行かれたのか。この起こったことの事実を詳しく語ってほしい」(22.107)

彼らの求めを聞いて、それらの人たちの前に立っていたチャンダカは、涙で目を潤ませながら、彼らを見つめてこう言った。(22.108)

「勝れた方々、お聞きください。話すべきことを短くまとめて申し上げますと、あの方は神々に励まされながら、真夜中に空を通して出て行かれたのです。(22.109)

そして夜明け頃にヴァシシュタ大仙の隠棲処の近くに到着されました。其処で神々とお別れになったあの方は、髪を自ら剣で切り落とされました。(22.110)

その後、獵師から与えられた袈裟衣を身に纏い、出家の禁戒を守りながら出家行者、感官を制御した阿羅漢となったのです。(22.111)

仙人たちと会うため、あの方は苦行の森に進んでゆかれました。私は確かにそれを見届け、その後引き返してきたのです。(22.112)

これらの装身具とこの馬を、あの方が自ら私に与えられました。ご父母にわかっていただくため、わが主によって遣わされて私はここに戻って参りました」(22.113)

彼がそのように語ったのを聞き、彼らは皆、装身具のすべてと馬を見てから、再びチャンダカにこう言った。(22.114)

「チャンダカ、あの方が行かれた場所から我々は強引に彼を連れ戻すことができると思うか」(22.115)

彼らが尋ねた言葉を聞くと、チャンダカはこう答えた。「強い意志を持つあの方を説得できる者は誰もいません。(22.116)

心堅固で不退転であるあの方は、このようにおっしゃったのです、『菩提を得るまでは、私はここへは戻らない。(22.117)

しかし菩提が得られたら、ここで最初に私の親族や親しい人々のために私は正法を説くであろう』と。(22.118)

決心がかたくて、堅固な精進力をお持ちになるあの方がこのように言ったからには、言った通りに真実となるのであって、決して他のようにはなりはしないでしょう」(22.119)

彼がそう語ったのを聞いて、期待が潰えた彼らは皆、チャンダカと馬王を見ながら、こう言った。(22.120)

「チャンダカよ、この馬と全ての装身具を持って、ゆっくり後から来い。我々は急いで戻ることにする」(22.121)

そう言って彼らはすぐに集合し、そこから皆で出発した。速やかに馬に乗って急いで都へと戻っていった。(22.122)

彼らはその都で大地の主たるシュッドーダナ王のもとに近づくと、皆でその両足を拝して、御前に控えた。(22.123)

其処で彼らはチャンダカが語った通りの全ての出来事を報告し、その王を慰め、励まそうとした。(22.124)

その出来事の話を知ると、プラジャーパティーやヤショーダラー、全ての妻たちや侍女たちも、再びまた激しく泣き嘆いた。(22.125)

都の人々も皆それを伝え聞くと、妻や息子や娘と共に、「ああ、わが君、我らを捨ててどこへ行ってしまわれたのか」と言って泣き嘆いた。(22.126)

その頃、チャンダカは馬を連れてその地に戻ってきて、憂悩した心でその園林に坐り込んだ。(22.127)

チャンダカが馬と一緒に戻って来たのを見て、園林の番人は直ちに王の前で跪拝すると、このように報告した。(22.128)

「大王様、あのチャンダカが馬を連れてここに戻って来ております。園林に坐り込み、恐怖心を抱いてとどまっております。」(22.129)

その言葉を聞くと、人王シュッドーダナは直ちに家来たちを呼び、再びこのように命じた。(22.130)

「すぐ園林に行き、馬と共に戻って来たチャンダカを呼び出し、説得してこの私の前に連れてきなさい」(22.131)

王がそう命じるのを聞き、園林の番人は「承知いたしました」と答え、直ちに園林の中に入った。(22.132)

そこから彼は急いでチャンダカのもとに行くと、彼を説得して、馬と一緒に王の前に恭しく連れてきた。(22.133)

その場でチャンダカは馬と一緒に王の前に進み、泣きながら王の両足に跪拝すると、悩苦する心で、控えた。(22.134)

するとその王は馬を伴ったチャンダカが泣いているのを見て、丁寧に息子の身に起こった事をこのように尋ねた。(22.135)

「チャンダカよ、事実を語りなさい。わが愛するあの息子は、いつ、どのようにして出離をなし、今どこに進んでいるのか。」(22.136)

王がそう命じるのを聞くと、チャンダカは泣きながら王に深くお辞儀をして、うつむきながらこう話した。(22.137)

「大王よ、お赦し下さい。私に過失はないのです。私が詳しく語りますこの出来事をお聞き下さい。(22.138)

真夜中に、あの大王は自ら私を前にお呼びになり、『チャンダカよ、直ちに私に馬を与えよ』と、お頼みになったのです。(22.139)

そのように馬をお頼みになったのを聞き、私は礼拝し、合掌して、その気高い方を見つめ、丁寧に尋ねいたしました。(22.140)

「御主人様、真夜中にここで馬をお求めになるのは何のためでしょうか。全ての人が眠っていますが、あなた様はどこへ行こうと欲するのですか」と。(22.141)

その私の言葉を聞くと、あなた様の御子は私を説得させるように、丁寧に私を呼びかけ、見つめてこう命じられました。(22.142)

「チャンダカ、私は世の生類の益のため、菩提を得んと欲している。もしお前が正法を願うなら、直ちに私に馬を与えなさい」と。(22.143)

その懇望を聞きました私は再びこう言いました。『そのように、もし行きたいと願われるのでしたら、どうかあなた様は夜が明けてから行かれませ。(22.144)

御父母様たちと御目にかかって、尊上のお二人から許しを得て、また貞淑な女性であるご伴侶ヤショードラーを起こして、納得させてから、(22.145)

またあなた様[の言葉]を法として従うすべての愛しい美しい妻たち、その全員にも、見つめて説得してから、どうか行かれますように』と。(22.146)

その私の言葉を聞くと、菩薩は再びおっしゃいました。『そのようにしては、行くことができなくなる。父は私を引き止めるだろう。(22.147)

[亡き]母の妹であるプラジャーパティーも、妻ヤショードラーも、愛情ゆえの悲しみの火に焼かれ、自らの命を捨てるかもしれない。(22.148)

大臣たちや顧問官たち、家来たち、全ての軍の指揮官たちも、私を確保し、周りを取り囲んで引き止めることだろう。(22.149)

その時、私一人がどうしてその多数の者たちに打ち勝って、去ってゆくことができようか。だから友よ、直ちに私に馬を与えなさい。ここで邪魔をしてはいけない』と。(22.150)

このように主人がお命じになった時、かの世界の王であるインドラ神も、虚空にいた全ての神々も、私を見ながらこう命じました。(22.151)

『チャンドカ、もしお前が正法を欲するなら、邪魔をしてはならぬ。三界の生類の益のために、直ちに馬を引いてきて、このお方に与えよ』と。(22.152)

このように神々によって様々に説得され、促された私は泣きながら馬を連れてきて、あの気高い方に捧げました。(22.153)

するとその場で、馬は主が心で欲していることをよく理解し、全ての人々を目覚めさせようとして、高い声でいなくなりました。(22.154)

しかしその高いいなきの声によっても、一人として目覚める者がいませんでした。その時、神々の王によって〔住居の〕諸門があらゆる場所で開かれました。(22.155)

それを眺めて、かの大士は神々から何度も促されながらすぐ馬に乗ると、ご自分の住居から出て行かれたのです。(22.156)

其処で熟睡している全ての家来たち、都民や兵士たちを見ながら、彼は馬を進め、速やかに一つの都城の門から出て行かれました。(22.157)

其処で集まり来た四人の護世王の神たちが喜びながら空中で足をつかんで、馬を速やかに進ませました。(22.158)

私も同様に虚空にいて馬を背後から見守りながら、あらゆる神の群と一緒に、驚嘆しながら進みました。(22.159)

其処で、やって来た菩薩を見ると、かのすべての神々は敬意を示し、礼拝し、満足して、喜心をもって進みました。(22.160)

アイラーヴァタ象の鼻の上にある諸々の楼閣にいて喜ぶ天女の群が、歌舞音曲を行いながら、進みました。(22.161)

またその時ヴィディヤータたちが空から降らした花の雨が、天の芳香を放ちながら、あのお方の頭上に降り注ぎました。(22.162)

またガンダルヴァたちは、あらゆる楽器を奏でながら前方を進んでゆき、キンナラたちも、トゥーリヤ楽器の合奏で楽しませながら、前方を進みました。(22.163)

あらゆる惑星たちや星々も、嬉しく周囲を回りながら進み、シッダやサーディヤの群も、讃嘆しながら前方を行きました。(22.164)

ブラフマーやインドラをはじめとする神々、喜ぶすべての護世王の神々、三十三天の神々も皆、讃嘆しながら前方を進みました。(22.165)

グヒヤカや羅刹たち、大神通力を持つクンバーンダ、そして葉叉たちも、あらゆる所で邪悪な者たちを退けながら、嬉しく進みました。(22.166)

ガルダや龍やダイティヤ（阿修羅）の王たちは宝石の輝きで照らしながら、また花々とともに芳しい水を降らせながら、道を進みました。(22.167)

おごそかに進み行く風たちは、花の液汁を運びながら、とても涼しく、心地よい感触を与え、奉仕しながら背後から随従しました。(22.168)

大きな神通力を持つ仙人や出家行者やヨーギンたちによって讃嘆されながら、あの方は虚空から光を放ちつつ嬉しく進みました。(22.169)

このように、かの菩薩は神々や護世王たちによって大きな意気込みをもって仕えられながら、嬉しく東に向かって速やかに進んだのです。(22.170)

明け方に、ヴァシシュタ仙人の隠棲処の近くに到着しました。其処ですべての護世王たちと神々があの方を地面に、(22.171)

馬から降ろしてあげて、其処で、かしずいている彼らが皆大きな熱意をもって敬意を示し、礼拝し、こう言いました。(22.172)

「大士よ、世の生類の益のためのあなた様の願いが成就しますように。速やかに菩提に至りますように。専念して成し遂げられますように」(22.173)

そう、成就のための祝福の言葉を与え、ブラフマーやインドラなどの神々やすべての護世王たちもそれぞれが自ら祝福の言葉を発しました。(22.174)

すべての三十三天の神々、すべてのアプサラスの群も、また惑星たちや星々の群も、すべてのヴィディヤダラたちも、(22.175)

またガンダルヴァやキンナラたち、薬叉やグヒヤカや羅刹たち、またクンバーンダやガルダや龍たち、大きな神通力をもつダイティヤの王たちも、(22.176)

また仙人や出家行者たち、ヨーギンや梵行者たちも、また独覚や、仏の息子である菩薩たちも、(22.177)

また同様にあらゆる偉大なる賢者たちも、かの自在者（菩薩）に敬意を示し、礼拝して、成就の祝福の言葉を与えると、それぞれの住処へと帰って行きました。(22.178)

その後あの方は少し遠くにある森に歩いていって、お坐りになりました。私を見つめながら呼びよせると、私の前でこう命じられました。(22.179)

「チャンダカ、直ちに馬を引き、すべての装身具も持って、お前は今すぐ都城へ戻りなさい。(22.180)

あの自分の都に行ったら、私の父の前でこれらの装身具と馬を渡して、このように伝えなさい。(22.181)

『あなたの息子は生類の益のため菩提を得るべく出離しました。それ故、ここで悲しむことなく、幸せを享受しつつお過ごし下さい。(22.182)

私は常にあなたの安穩を心中に問いつつ跪拝をなし、思い出しながら、三界の生類に恵みを与えるために、菩提の獲得のために、進んでゆきます。(22.183)

ですからここで悲しまないで下さい。私の願いは成就するでしょう。私は常にどんな世界においても幸せをもたらすことに努めます。(22.184)

そしてマーラ（魔）の群に打ち勝ち、最高の悟りを得て、私はきつとあなた方両親と再会するために戻ってきます。(22.185)

ヤショードラーは私への悲しみのあまり命を捨ててしまうかもしれないので、それを引き止めて下さい。貞淑な私の妃である彼女は、私がここへ戻ってくるまで全力で守られ、身重の体は保護されねばなりません。(22.186)

わが母プラジャーパティーも、私への悲しみにより、心の堅固さを失って命を捨ててしまうかもしれないので、それを防止し、よくよく守ってあげて下さい。(22.187)

わが愛するすべての妻たちも、悲しみと苦しみから途方にくれ、死を選んでしまうかもしれないので、それを引き止めて、しっかり守ってあげて下さい。(22.188)

また、私への悲しみの火に焼かれて苦しむ他のすべての者たちも、誰か命を捨てる者がいるかもしれないので、防止して、彼らを守って下さい。(22.189)

また乞い求める者たちも、いつも守られるべきです。どうか望む通りの財を与えて下さい。そしてどの国々も正法の政治によって統治なさって下さい。(22.190)

このように私が今語ったことをあなたは自ら父母の前で報告し、またゴーパーやすべての女たちの前で報告しなさい』と、(22.191)

このようにお命じになると、体から全部の装身具を外し、馬も私の手に託して、直ちに私を去らせたのです。(22.192)

その地で私はずっと泣きながら、あの方の両足に跪拝し、すべての装身具を持ち、この馬を連れて、そこからゆっくりと歩いてゆきました。(22.193)

あの方もまたそこから歩き出して、森の中にお坐りになりました。あの方がやってきたのを見て、一人の〔森の〕精霊が喜んで歩み出てきました。(22.194)

それを目撃して、私は泣きつつそこから少し離れた森にいて、何度もあの方を背後から眺めていたのですが、その場所に近づきました。(22.195)

その人里離れた森の中で、あの方は自ら剣で髻を切り、それを地上から拾い上げ、直ちに空へと投げられました。(22.196)

ひとけのないその森の中であの方は自ら剣で髻を切って、それを地面から拾い上げると、すぐさま空にお投げになられました。(22.196)

空に投げられたそれを見て、神々はすぐさまそれを受け取ると、嬉しくお辞儀して天空に去って行きました。(22.197)

その時、その所に袈裟衣を身に纏った一人の獵師がおり、近づいて来ると、あの方と向かい合い、そばに控えましたが、(22.198)

袈裟衣を纏って真向かいにしゃがんだその彼を見ると、あの方は直ちに近づき、その衣を求められました。(22.199)

あの方(菩薩)は彼から与えられたその袈裟衣を嬉しく受け取ると、カーシー産の衣服を体から脱いで、彼にお与えになりました。(22.200)

彼のご自身のカーシー産の衣服が与えられて、獵師は嬉しくすぐさま深くお辞儀して受けとり、その後、空へと去って行きました。(22.201)

その後、かの菩薩はその袈裟衣を身に纏うと、仙人たちに会いに、輝きながら嬉しく進んでゆかれました。(22.202)

これらすべてを私は驚愕して見届けまして、王様、その後しばらく経って馬を連れてそこから出発し、ぐずぐずしながらも、ここへ戻ってまいりました。(22.203)

そこで、どうかお悲しみにならず、この地に泰然自若としてお暮らしになって下さい。あの方は菩提に達して、きっとここへ戻ってこられることでしょう。(22.204)

どうかこれらの装身具と馬をお受け取りになって、安らかなお心をお持ちになってください。王よ、ここで気落ちなさらないで下さい。あの方の願いは成就することでしょう。」(22.205)

こうチャンダカが報告したそのすべての出来事を聞くと、かの父王はずっと黙ったままであった。そしてそれらの装身具や馬を見ても、受け取ろうとはしなかった。(22.206)

その後そのチャンダカは王の両足に跪拝し、すべての装身具と馬を掴むと、後宮の中に歩いていった。(22.207)

其処で、馬を引いてやってきたチャンダカを見て、一人の侍女が早速ヤショードラーのもとに赴き、こう告げた。(22.208)

「お妃様、どうかご安心下さい。チャンダカが馬を連れてこちらに参りました。きっとあなた様の夫であるご主人様も今ここに戻られたのでしょうか」(22.209)

彼女がそう告げたのを聞いて、かのヤショードラーは理解できない様子でその侍女を見て、こう言った。(22.210)

「あの方は煩惱を離れ、誓いも固く、慎重なお心のお方です。ですから菩提に達せずして、今ここへ戻ってくるはずがありません」(22.211)

彼女がそう言ったのを聞くと、その侍女はそこから立ち去って、チャンダカを見て直ちにこう尋ねた。(22.212)

「チャンダカ、ご主人様はどこにいるの。なぜお前だけが来たの。まさに本当の事を語って、お妃のゴーパー様を納得させなさい」(22.213)

そうその侍女が言ったのを聞くと、そのチャンダカは泣きつつ、懊悩の心で苦しげな表情を見せつつ、ヤショードラーの部屋に入っていった。(22.214)

そこで寝椅子に坐っているヤショードラーを見て、チャンダカは遠くからお辞儀をし、彼女を見つめながら部屋の片隅に控えた。(22.215)

其処で片隅に坐っているチャンダカを眺めると、ヤショードラーは主人を思い出して長い間激しく泣いた。(22.216)

その後彼女は気丈さを取り戻すと、長くため息をついて、チャンダカを呼んで、彼を見つめながらこう言った。(22.217)

「ああ、チャンダカ、お前は良家の出で、わが夫の親友たる朋友です。お前は私の主をどこへ連れて行って、彼はどのように、どこに進んでいったのですか。(22.218)

ああ、お前はなんと無慈悲な心の持ち主でしょう。いったい私がお前に何をしたというのですか。お前が私を起こしめせず、このようにわが主を連れ去ってしまうとは。(22.219)

どうしてわが主は、行こうとする時、眠っている私を起こさずに、捨てて出てゆかれたのでしょうか、まるで怒っているかのように、無慈悲に。(22.220)

この美しい人たちとの快楽を捨てさせ、いったい誰が都から彼を脱出させたのですか。あの主が随行されて行った、その場所にいる森の女神は幸せでしょうね。(22.221)

チャンダカ、お前は私にこの大層勇敢な努力を見せつけてくれました。私の心臓と共に、両眼までもえぐり取って、私から奪って。(22.222)

ああ、神々しく、この上なくハンサムで美しく、あらゆる人の心を惹きつけ、めでたい特徴などを全身に具え、幸と栄耀とよき徳質の依拠たるお方、(22.223)

あらゆる学問の王であり、導師であり、あらゆる衆生の益という目的を担い、すべての神やアスラや人から供養され、賞讃・讃嘆される方である、(22.224)

あなた様は王国の繁栄と美女たちを捨てて、森のどこへ出家されるのですか。どうか、これらすべてのものを思い出し、すぐに自分の住まいにお戻り下さい。(22.225)

ああ、なんと惨めなことだ。——輪廻というものの転変変移は、稲妻や雲や芝居のように空虚で、無我で、空であると、あの方は常に語っておられた。(22.226)

この、生・老・病・死という海獣が住む場所である輪廻的生存の海に沈んでいる者たちを引き上げてくれる安らかな者、それはどなた？(22.227)

この輪廻的生存の変転は、全てがマーヤー（幻影）のようなものだと考えるなら、いかなる大士がこの輪廻的生存の中で彷徨いたいと願うだろうか。(22.228)

あのわが主が『法こそ、三界における守護者、主人、親友、仲間である』と、いつも私の前でお語りになっていた。(22.229)

それ故、諸々の法の最高のもの、菩提（正覚）を得ることをあの方は切望されているのだ。その望みの全てが、生類の益のために成就されますように。(22.230)

あの方が菩提に達したら、直ちにここへ来られますように。その正法という不死の甘露を飲んで、私たちは真の安らかな至福を得られるでしょう」(22.231)

彼女がそう語ったのを聞き、チャンダカは泣きながら、主人に起こったすべての出来事を詳しく報告した。(22.232)

そしてゴーパーにすべての装身具を渡すと、チャンダカは礼拝して、ガウタミー（王妃プラジャーパティー）の住まいへと歩いていった。(22.233)

彼がそこへやって来たのを見ると、ガウタミーは喜び、直ちに呼んで、清い座席に坐らせた。(22.234)

其処に近づくと、彼はそのプラジャーパティーに跪拝してから、座に坐り、すべての出来事を報告した。(22.235)

息子に起こったそのすべての出来事を聞き、彼女はため息をつき、涙を流しながらずっと彼のことだけを心に思っていた。(22.236)

同様にチャンダカは〔後宮の〕そのすべての妻たちに拝礼すると、見つめながら、その起こったすべての出来事を報告して、彼女たちを納得させた。(22.237)

また同様に、彼はあらゆる人々の前に進み出ると、起こったそのすべての出来事を詳しく報告した。(22.237)

それを聞くと、都民たちは皆、正法を聞くことを欲する者として「速やかに正覚を得られて、戻ってこられますように」と口々に語った。(22.239)

さてかの妃ゴーパーは、その部屋ですべてのその装身具を見つめながら自ら手に取り、拝すると気を失って倒れた。(22.240)

彼女が気を失ったのを見て、その侍女たちは皆で直ちに抱きかかえ、冷たい水を飲ませて正気に戻した。(22.241)

するとゴーパーはそのすべての装身具を見つめながら主人を思い出し、取り乱して泣き悲しんだ。(22.242)

彼女が泣いているのを見て、他のすべての妻たちも心を乱し、主人を思い出して、長い間激しく泣き嘆いた。(22.243)

その泣き嘆く声を聞くとプラジャーパティーは立ち上がり、すぐ後宮へ赴いて、かのヤショードラーを見た。(22.244)

彼女がひどく泣きじゃくっているのを見て、ガウタミーもまた泣きながら直ちに抱擁し、見つめ、慰めてこう言った。(22.245)

「ヤショードラー、心をしっかり保ったまま暮らさない。ここで気落ちしてはならない。あの方が菩提を得たら、真つ先にここへ戻ってこられることでしょう。(22.246)

その時、私たちはその牟尼たちの王（仏陀）に帰依して、絶えず法という不死の甘露を飲み、大いなる歓喜を得るのです。(22.247)

美しい人よ、いつもそう考え、心をしっかり定めてお過ごしなさい。人の運命として起こるべきことは、この輪廻的生存において、必ず起こるものなのだから」(22.248)

義母がそう語るのを聞くと、ヤショードラーは立ち上がり、彼女の蓮のような両足に跪拝し、呻き泣いてこう言った。(22.250)

その時が来るまで、私はもう美味しい上等の食事は食べません。美味しい甘露のような飲み物も決して飲みません。(22.251)

色とりどりの衣服や装飾品で身を飾ることもいたしません。香油やおしろいで体に化粧を施すこともいたしません。(22.252)

ベッドや綿の座布団の上に横になることも決してしません。合奏や舞踏が演じられるのを見ることも決してしません。(22.253)

色鮮やかな花鎖の冠をつけることもいたしません。ただ夫だけを思い出し、思いに耽って常に過ごします。(22.254)

あの方が菩提を得て、自分のすまいに戻れたら、その時あの方から誓行を得て、私も真の安らかな至福（涅槃）へと至りましょう」(22.255)

このように母の前で泣きじゃくり、ヤショードラーは全部の装身具をその前に置いて、自ら与えた。(22.256)

その時以来、ゴーパーはいつも装身具をつけず、白い衣のみを着て、夫を思い出しながら、未亡人のように生きるようになった。(22.257)

さてガウタミーはそれらすべての装身具を見て自らの手で受け取ると、嘆き泣きながら自分の住まいに向かった。(22.258)

其処で彼女は、バドリカという名の釈迦族の王族青年を呼び寄せると、その全部の〔手渡された〕装身具で彼を飾ろうとした。(22.259)

しかしその釈迦族の青年は「それらは『世の生類の主』の装身具である」と思って、自分の体につけることを望まず、受け取らなかった。(22.260)

そこでガウタミーはそれらすべての装身具を王族青年アニルツダに与えようと決めて、それを贈った。(22.261)

そのアニルツダ青年もまた、『世の生類の主』のものであるそれらを見て、「どうして自分が着用能耐えられよう」と思い、決して受け取らなかった。(22.262)

そこでプラジャーパティーは、それらを別の王族青年に与えたが、その者もまた見ると「私には着用出来ない」と考え、忍受しようとしなかった。(22.263)

同じようにして、プラジャーパティーはすべての青年貴族たちにそれらを与えようとしてみたが、どの青年たちも身につけることに耐えられなかった。(22.264)

そこでガウタミーはそれらの装身具すべてを自ら受け取って眺めて、嘆きながらこう考えた。(22.265)

「これらすべての装身具がこの私の家にある限り、それを見るたびますます悲しみが増して、鎮まることがない。(22.266)

だから私はこれらの装身具を取って池の中に投げ入れ、水中の伏蔵たる隠された場所にとどめ置こう」(22.267)

こう決心すると、彼女はそれらの装身具すべてを蓮池の深い水の中に投げ入れて、沈め置いた。(22.268)

今日でもその池は「装身具の聖なる蓮池」としてよく知られている。それ以来、それは「全く偉大な聖地」として輝いた。(22.269)

その後そのガウタミーは、チャンダカが語った、息子に起こった出来事を聞いて、更に自心の悲しみを慰めた。(22.270)

しかしその後ヤショダラーは、夫への愛情による悲しみのあまり心を濁らせ、目に涙を浮かべてカンタカ（馬）とチャンダカを見つめながら、こう言った。(22.271)

「チャンダカ、私の夫は夜中に眠っている私を捨てて、どこに立ち去ったのでしょうか。お前が馬と共にここに戻ってきて、私の心は焼き尽くされてしまっています。(22.272)

下劣で無情な、ひどい行いをしておきながら、あなたはなぜここで泣いているのです。涙を止めて、今や満足した心でいなさい。(22.273)

此処で正直で役立つ私の助力者であったお前と一緒に、私の夫は去ってしまった。もう戻ってこないように、どこへと立ち去ったのか。(22.274)

今は楽しみなさい、運よくうまくいったので、存分に気持ちよく過ごすがよい。有益な仕事が遂げられ、お前の苦労は報われたのです。(22.275)

人にとって、賢い敵の方が愚かな考えをもつ友よりもましです。無知な親友であるお前によって私たちの一族に災禍がもたらされたのですから。(22.276)

装飾品を外し、涙で目を赤くしている哀れなこれらの女たちは、夫がどこかにいるとしても、まるで輝きを失った暗い未亡人たちのようではないか。(22.277)

あの方を失って、これらの立ち並ぶ諸宮殿も、まるでいつまでも続く長い長いため息を漏らしながら、後宮の女たちと共に激しく泣いているかのようです。(22.278)

またこの馬カンタカも邪悪で、ここの人々にとって害をもたらす者です。人々が夜に眠っている間に、仇敵のように私の宝物を奪い取っていったのです。(22.279)

お前は矢に打たれても我慢できる馬というのに、ただの鞭が我慢できなかったはずがありません。鞭が振り下ろされることを恐れて、わたしの栄光を伴って、どこへ去ったのですか。(22.280)

卑しい馬よ、なぜ今日になって都中に声を響かせるかのようになんていないのですか。私の命たる人が出て行ったとき、なぜお前は黙ったままだったのですか。(22.281)

もし人々を目覚めさせようとするなら、大きないななき声があげられたはずです。あるいは蹄で地面を叩き搔いて、音を立てられたはずです。(22.282)

あるいは顎を鳴らして、高い音を立てられたはずです。そうすれば、私の命を奪うほどのこんな苦しみは起きずにすんだのに。」(22.283)

妃がそう言ったのを聞いて、チャンダカはむせび泣きつつ、ヤショーダラー大妃に合掌し、こう言った。(22.284)

「大妃様、主人に仕えるカンタカをどうかお叱りにならないで下さい。また私に対しても、お怒りになられないで下さい。私と馬に落ち度はないのです。(22.285)

お妃様、かの大士は神の如くに虚空を行かれたのです。私は王様の命令を知っていましたが、神々によって無理矢理従わされ、(22.286)

神々からひどく促されて、急いで私はこの馬を連れてゆきました。虚空の道にあっても、疲労なく、あの方の後ろに従ってゆきました。(22.287)

この馬王も進みゆく時、蹄の先で地面に触れることがありませんでした。いななきもせず、また少しも顎の音を立てませんでした。(22.288)

あの方が家から出られる時、一つの門が自ずから開きました、闇なき方角への眺めをもつ門が。それを運命の定めとお考えください。(22.289)

この都城にいる何千もの王の命令に従う人々が、その時一人として目覚めなかったことを考えると、それもこの運命の定めなのでしょう。(22.290)

またあの方に与えられた袈裟衣は、出家の戒行の準備のため神々が嬉しく授けたものです。それも運命の定めとお考えください。(22.291)

ですから、私と馬に落ち度はなく、お責めにならないで下さい。これはきつと運命の定めであると考えて、お心をお鎮め下さい。(22.292)

これは私がした勝手な行為ではなく、この馬の勝手な行為でもありません。神々によってお供をされて、あの方は大変な意欲をもって虚空から去って行かれたのです。」(22.293)

このように多くの不思議な出来事と共にあの方の旅立ったことを聞くと、すべての女たちも悲しみを忘れたかのように、驚きに包まれた。(22.294)

出家の希有事を知ったあらゆる美女たちは情欲をもち、性愛の記憶と欲情に苦しめられて、心に熱悩を得た。(22.295)

Buddhacarita 8.51 の逐語的借用	(22.296)
Buddhacarita 8.52 の逐語的借用	(22.297)
Buddhacarita 8.53 の逐語的借用	(22.298)
Buddhacarita 8.54 の逐語的借用	(22.299)
Buddhacarita 8.55 の逐語的借用	(22.300)
Buddhacarita 8.56 の逐語的借用	(22.301)
Buddhacarita 8.57 の逐語的借用	(22.302)
Buddhacarita 8.58 の逐語的借用	(22.303)
Buddhacarita 8.59 の逐語的借用	(22.304)
Buddhacarita 8.60 の逐語的借用	(22.305)
Buddhacarita 8.61 の逐語的借用	(22.306)
Buddhacarita 8.62 の逐語的借用	(22.307)
Buddhacarita 8.63 の逐語的借用	(22.308)
Buddhacarita 8.64 の逐語的借用	(22.309)
Buddhacarita 8.65 の逐語的借用	(22.310)
Buddhacarita 8.66 の逐語的借用	(22.311)
Buddhacarita 8.67 の逐語的借用	(22.312)
Buddhacarita 8.68 の逐語的借用	(22.313)
Buddhacarita 8.69 の逐語的借用	(22.314)
Buddhacarita 8.70 の逐語的借用	(22.315)
Buddhacarita 8.71 の逐語的借用	(22.316)
Buddhacarita 8.72 の逐語的借用	(22.317)
Buddhacarita 8.73 の逐語的借用	(22.318)
Buddhacarita 8.74 の逐語的借用	(22.319)
Buddhacarita 8.75 の逐語的借用	(22.320)
Buddhacarita 8.76 の逐語的借用	(22.321)
Buddhacarita 8.77 の逐語的借用	(22.322)
Buddhacarita 8.78 の逐語的借用	(22.323)
Buddhacarita 8.79 の逐語的借用	(22.324)
Buddhacarita 8.80 の逐語的借用	(22.325)
Buddhacarita 8.81 の逐語的借用	(22.326)
Buddhacarita 8.82 の逐語的借用	(22.327)
Buddhacarita 8.83 の逐語的借用	(22.328)
Buddhacarita 8.84 の逐語的借用	(22.329)
Buddhacarita 8.85 の逐語的借用	(22.330)

Buddhacarita 8.86 の逐語的借用 (22.331)

Buddhacarita 8.87 の逐語的借用 (22.332)

その後シュッドーダナ王は再びチャンダカを呼び寄せると、息子の〔都城からの出離の〕出来事を尋ねるため、このように命じた。(22.333)

「チャンダカ、お前こそ私の息子の親友、なじみの友だ。だから、私に真実を語って、この心を納得させてくれ。(22.334)

どうやってあの大士は都城の門から出て行ったのか。真夜中に馬に乗って、闇に覆われた中をどこへと進んだのか。(22.335)

今彼は出家行者となり、どのように一人で森に去ったのか。どの仙人の隠棲処に身を寄せ、または樹の根元にいるのか。(22.336)

それらについて真実を語ってくれ、もし私の歓びを欲するなら。親友や部下は、たとえ不快なことでも、真実であれば伝えるべきだ。」(22.337)

王がそう命じるのを聞いて、チャンダカは泣きながら、主人である王にお辞儀すると、合掌してこう言った。(22.338)

「真夜中に、あなた様の御子は自ら私の前にやってこられて、何度も懇望されて、私に馬を求められました。(22.339)

あの方の心で起こっていることを思いながら、馬が必要な理由をお尋ねして、私は何度求められても長い間、馬を与えませんでした。(22.340)

その時、空にいたすべての神々から色々と促されたので、私は泣きながら馬を連れてきて、あの大士にお与えしました。(22.341)

馬は高い声でいななき、蹄で地面を掻き裂きました。私もまた大声を張り上げて、すべての女たちを目覚めさせようと思いました。(22.342)

しかしそれによっても、ヤショーダラー様をはじめとする女性たちは皆、昏睡させる大きな眠りに感覚を奪われて、起きることはありませんでした。(22.343)

インドラ神によってすぐさま一つの門が完全に大きく開かれました。あの大士はそれをご覧になり、馬に乗って出離されました。(22.344)

四護世王（四天王）も、大きな意気込みをもつ神々と一緒に、あの方の馬の足を持って、空中を歩ませました。(22.345)

私もまたその状態で、その馬の手綱を握ったまま、まるで地上にいるかのように、神々と一緒に空を歩みました。(22.346)

その空の上で、あの方は天女の群を含むあらゆる神々から尊重され、合唱やトゥーリヤ楽器の演奏を伴い、敬意を払われてお進みになられました。(22.347)

其処では神々の群から放たれた花の雨が降り注ぎ、雲が芳香ある雨水をととても涼しく降らせました。(22.348)

このように様々なかたちで興奮に包まれ、輝きを放ちながら、あの方は空の上を通り、明け方には大きな森に到着されました。(22.349)

その場所で、インドラなどの神々や護世王の神たちのすべては、あの大士に跪拝すると、それぞれの住処へ去って行きました。(22.350)

その後太陽が昇る中、あの方はしばらく歩まれて、近隣にパールガヴァ仙人の隠棲処を見つけられました。(22.351)

Buddhacarita 6.2 の逐語的借用	(22.352)
Buddhacarita 6.3 の逐語的借用	(22.353)
Buddhacarita 6.4 の逐語的借用	(22.354)
Buddhacarita 6.5 の逐語的借用	(22.355)
Buddhacarita 6.6 の逐語的借用	(22.356)
Buddhacarita 6.7 の逐語的借用	(22.357)
Buddhacarita 6.8 の逐語的借用	(22.358)
Buddhacarita 6.9 の逐語的借用	(22.359)
Buddhacarita 6.10 の逐語的借用	(22.360)
Buddhacarita 6.11 の逐語的借用	(22.361)
Buddhacarita 6.12 の逐語的借用	(22.362)
Buddhacarita 6.13 の逐語的借用	(22.363)
Buddhacarita 6.14 の逐語的借用	(22.364)
Buddhacarita 6.15 の逐語的借用	(22.365)
Buddhacarita 6.16 の逐語的借用	(22.366)
Buddhacarita 6.17 の逐語的借用	(22.367)
Buddhacarita 6.18 の逐語的借用	(22.368)
Buddhacarita 6.19 の逐語的借用	(22.369)
Buddhacarita 6.20 の逐語的借用	(22.370)
Buddhacarita 6.21 の逐語的借用	(22.371)
Buddhacarita 6.22 の逐語的借用	(22.372)
Buddhacarita 6.23 の逐語的借用	(22.373)
Buddhacarita 6.24 の逐語的借用	(22.374)
Buddhacarita 6.25 の逐語的借用	(22.375)
Buddhacarita 6.26 の逐語的借用	(22.376)
Buddhacarita 6.27 の逐語的借用	(22.377)
Buddhacarita 6.28 の逐語的借用	(22.378)
Buddhacarita 6.29 の逐語的借用	(22.379)
Buddhacarita 6.30 の逐語的借用	(22.380)
Buddhacarita 6.31 の逐語的借用	(22.381)
Buddhacarita 6.32 の逐語的借用	(22.382)
Buddhacarita 6.33 の逐語的借用	(22.383)
Buddhacarita 6.34 の逐語的借用	(22.384)

Buddhacarita 6.35 の逐語的借用	(22.385)
Buddhacarita 6.36 の逐語的借用	(22.386)
Buddhacarita 6.37 の逐語的借用	(22.387)
Buddhacarita 6.38 の逐語的借用	(22.388)
Buddhacarita 6.39 の逐語的借用	(22.389)
Buddhacarita 6.40 の逐語的借用	(22.390)
Buddhacarita 6.41 の逐語的借用	(22.391)
Buddhacarita 6.42 の逐語的借用	(22.392)
Buddhacarita 6.43 の逐語的借用	(22.393)
Buddhacarita 6.44 の逐語的借用	(22.394)
Buddhacarita 6.45 の逐語的借用	(22.395)
Buddhacarita 6.46 の逐語的借用	(22.396)
Buddhacarita 6.47 の逐語的借用	(22.397)
Buddhacarita 6.48 の逐語的借用	(22.398)
Buddhacarita 6.49 の逐語的借用	(22.399)
Buddhacarita 6.50 の逐語的借用	(22.400)
Buddhacarita 6.51 の逐語的借用	(22.401)
Buddhacarita 6.52 の逐語的借用	(22.402)
Buddhacarita 6.53 の逐語的借用	(22.403)
Buddhacarita 6.54 の逐語的借用	(22.404)
Buddhacarita 6.55 の逐語的借用	(22.405)
Buddhacarita 6.56 の逐語的借用	(22.406)
Buddhacarita 6.57 の逐語的借用	(22.407)
Buddhacarita 6.58 の逐語的借用	(22.408)
Buddhacarita 6.59 の逐語的借用	(22.409)
Buddhacarita 6.60 の逐語的借用	(22.410)
Buddhacarita 6.61 の逐語的借用	(22.411)
Buddhacarita 6.62 の逐語的借用	(22.412)
Buddhacarita 6.63 の逐語的借用	(22.413)

その後、かの豪胆な方（菩薩）と私は、彼（獵師）が天界へと去ったのを見て、二人は驚き眺めながら立っていました、〔彼が与えた〕その森に住むための衣（袈裟衣）に喜心を抱いて。(22.414)

Buddhacarita 6.65 の逐語的借用	(22.415)
Buddhacarita 6.66 の逐語的借用	(22.416)
Buddhacarita 6.67 の逐語的借用	(22.417)

こうしてかの大王は幾度も私を教え諭し、馬を私の手に預けると、さっさと森の中に歩いてゆかれました。(22.418)

王様、ここに私が犯した罪はありませんので、私をお赦し下さい。しかしそれでも、もし私に咎むべき罪があるのでしたら、わが主よ、私を罰して下さい。(22.419)

生類にとって、運命として起こるべきことは、この輪廻的生存において必ず起こるものなのです。それ故、そこで私に何がなせるものでしょうか。またあなた様も何をなせるでしょうか。(22.420)

『あらゆる生類は運命に従う』とお考えになって、寛容であられて下さい。必ずあの方は菩提を得て、仏としての行いをなしながら、正法を教えるために弟子の集団（僧伽）と共にここへ戻ってこられるでしょう。(22.421)

その時、あなた様は法という不死の甘露を飲み、菩提行の誓戒をなしつつ、あらゆる衆生に益を施し、いつまでも幸せにお過ごし下さい。(22.422)

その功德の異熟により諸感官を清められたあなた様は、いつか菩提を得て、仏の位に達することでしょう。」(22.423)

そう、彼の言ったことを聞いて、「その通りだ」と十分納得したかの王は、悲しみの熱苦を捨てて、法に専心した。(22.424)

その後、王はチャンダカに良い服を着せてやり、上等で美味な、まるで甘露のような食事で満足させた。(22.425)

その食事は美味であったが、しかしチャンダカは食べても歡喜することなく、あの主人を思い出しては意気阻喪して暮らした。(22.426)

かの王は同様に、馬のカンタカを見て、味わうに価する美味の食べ物を給するよう、指示した。(22.427)

カンタカはその食べ物を見ても、食べようとしなかった。ただかの主人のことだけを思い出し、深く思いに耽って、まるで出家行者のように過ごした。(22.428)

ほかの人々、王の顧問官や大臣たち、あらゆる都民たちも、その馬のために食べられるものをその前に持参した。(22.429)

馬はそれらを見ても、決して食べようとしなかった。ただかの主人だけを思い出し、目に涙を浮かべて過ごした。(22.430)

そこで都のほかの女たちは皆、その名馬を最上等の綿布の柔らかな衣で覆ってあげて、喜ばせようとした。(22.431)

ある女たちはその顔の涙を上等な布で拭いてあげた。ある女たちはその首を、ある女たちは頭を、ある女たちは肩を拭い清めてあげた。(22.432)

ある女たちは前足や背中、あるいは関節を、またある女たちはその馬王の尾を拭い清めた。(22.433)

またある女たちは後足を、ある女たちはそのたてがみを拭い清めた。ある女たちは王に供するに価するほどの上等で美味な食事、(22.434)

香りがよい花や花卉、様々な果物、食用の根、野菜、葉や莖や種など美味なるものを、(22.435)

ある女たちは器に入れた水、様々な種類のおいしい飲み物、また五種の甘露（乳・醃酵乳・バター・蜜・砂糖）を持ってきた。(22.436)

このようにして、すべての女たちがカンタカの前に立って、そのすべての食べられるものを彼の前に差し出した。(22.437)

そしてそれらの女たちは皆、目の前に立っているその名馬カンタカを見つめながら、恭しくこう言った。(22.438)

「カンタカ、これらのおいしい食べ物や飲み物を欲するままに取って、安らかに過ごしなさい。気落ちしないで。」(22.439)

このようにあらゆる女たちから語りかけられても、カンタカはそれらの食べ物を決して食べようとしなかった。(22.440)

馬はそれらを見ようとさえしなかった。まして食することなど、ありえようか。かの主人のことばかりを思い出し、深く思いに耽って、まるで出家行者のように過ごした。(22.441)

このように食事を欲することがないそのカンタカを見て、チャンダカは彼の前に歩み寄って、敬意を込めてこう言った。(22.442)

「カンタカ、お前の心が欲する好きなものを食べなさい。食事なしには、剛勇心も、体の強健さも、命も保てない。(22.443)

だから、何でも好きな食べ物を取り、心の気丈さを保ち、あの主人を思い出しながら暮らしなさい。」(22.444)

かのチャンダカが三度このように言っても、カンタカはあの主人ばかりを思い出しながら、下を向いて、泣きながら立っていた。(22.445)

このようにカンタカは食事を摂らず、かの主人のことばかりを思い出し、思いに耽り、ついに身体を捨てて〔転生し〕神々の住まい（天界）に来了。(22.446)

其処で彼はシカンディンという名で神の子となり、天の栄光と大きな支配力、徳性とめでたい幸せと快樂に満たされた。(22.447)

チャンダカはその馬が命終したのに気づくと、泣きながらすぐ王の前で跪拝して次のように報告した。(22.448)

「閣下、あのカンタカは主人への悲しみから今、亡くなりました。すぐにしかるべき儀礼による葬儀をあの馬のために行って下さい。」(22.449)

そう彼が報告するのを聞き、王は泣きながら、すぐに家臣たちを呼び集め、彼らに向かつて次のように命じた。(22.450)

「おお家臣たち、すぐ馬のカンタカのなきがらを恭敬供養し、大聖地に速やかに埋葬せよ。」(22.451)

王が命じられたことを聞き、すべての家臣たちは「承知いたしました」と答え、馬小屋へと向かった。(22.452)

其処で彼らは馬を眺めると、しかるべき儀礼をもって恭敬供養した後、上輿に乗せて、外へと運び出した。(22.453)

その後大きな聖地へと運んで、その馬の遺骸を安置し、塔廟の如くに建立して、大変な熱心さをもって祀り供養した。(22.454)

それを聞いて、後宮の女たちは皆その馬への悲しみに心が焼かれ、再び主人を思い出しては愛情の苦しみに悩んで泣き嘆いた。(22.455)

同じ様に、かのチャンダカも馬のカンタカの思い出に耽り、寝椅子に坐ったまま、彼を深く思う心を抱いて過ごした。(22.456)

するとその夜、神霊がチャンダカの前に現れ、「カンタカは〔天界で〕神の子となっている」と告げた。(22.457)

このようにその神霊が告げたことを聞いてチャンダカは驚き、翌朝起きると、沈思してこのように考えた。(22.458)

「ああ、神霊がお告げになったこと、それは疑いなく本当のことであろう」——そう確信すると、チャンダカはかの馬を悲しむのをやめ、悦びながら、(22.459)

そこからすぐにチャンダカは王の前に行って、その出来事をすべて詳細に報告した。(22.460)

その言葉を聞き、王は「本当のことだ」と考え、認識を得て、そのことを悲しむ苦しみを捨て、喜びを得た。(22.461)

その後チャンダカは後宮へ行って、ヤショードラー妃にお辞儀して前に立ち、合掌してこのように述べた。(22.462)

「お妃様、もう悲しまないで下さい。どうか気づきを得て、安らかなお心になって下さい。真夜中に、神霊が来て、私にこう語ったのです、(22.463)

『あのカンタカは、大神通力をもつ、大きな天恵をもつ天子となり、天の栄光と大きな自在力と快樂を享受して喜んでいる』と。(22.464)

私はこの神霊によって告げられたことを本当のことと考えて、あなた様の馬への悲しみを消散するため、これをご報告しました。(22.465)

お妃様、どうかお悲しみにならないで下さい。安らかな心を得て、お喜び下さい。あなた様はきつと遠からずして、菩提を得てここへ帰ってきたあの方とお会いになるでしょう。(22.466)

善行という道に従いゆく者は皆、この輪廻的生存の中でも悲しむべきではありません。あの方もまた、福德を愛するお心の持ち主です。ですから、もう悲しまないでください。(22.467)

御母（マヤー）の胎内に入られたお方（菩薩）が私たちのためにお生まれになった時も、彼は災いのない、清らかな喜びの高揚を絶え間なく作りました。(22.468)

同様に、あの大きな天運をお持ちの方（菩薩）が空から出離された時も、災いのない、清らかな喜びの高揚が絶え間なく起こりました。(22.469)

あの方はあらゆる天女や三十三天の神々、あらゆる護世王たちによって、大きな歡喜をもって尊崇され、讃えられ、喜ばれました。(22.470)

大通智者たるあの方は、輝きながら、いたるところに幸いをもたらし、菩提の誓願をなして、三界の生類の益のために活動しながら、(22.471)

必ずや菩提を得て、あの方は弟子たちを伴ったみ仏として、ここに戻って来られ、生類にとって善き正法をお教えになられるでしょう。(22.472)

その時にあなた様は、生類の主・生類の教師・生類の尊師であるあの方を帰依処として尊崇し、法を聴聞して、嬉しくお暮らしなさいませ。(22.473)

その功德の異熟によって、あなた様も同じ様に豊かな成功を得て、きっと菩提に達し、仏となられることでしょう。(22.474)

また、三界の生類の師であり、生類の賢聖・生類の主であるあの方を帰依処として、尊崇し、法を聴聞して、頼っているところの者たち、(22.475)

彼らは皆、汚れのない心を持ち、清浄なる三輪（身口意）をもち、大通智ある菩薩となり、めでたい幸せと光輝と善き徳性の依拠となります。(22.476)

彼らは生類の益のためにやがて段階的に菩提の資糧を満たし、阿羅漢として菩提を得て、仏の位に到達することでしょう。(22.477)

お妃様、このようによく知って、悲しみと落胆を捨て、あの方の記憶を尊びながら、思いを定めてお過ごし下さい。」(22.478)

このように彼が語ったことを聞いて、ヤショードラーはよく覚知を得て、夫の記憶を尊びながら暮らした。(22.479)

同じ様に、後宮のすべての女たち、そして母であるガウタミーも、チャンダカの言葉を聞いて納得し、静かに澄んだ気持ちになった。(22.480)

— 以上、私の師がお説きになったとおりに私は語りました。大士よ、あなたもこのように、民にもお聞かせなさい。(22.481)

そのことの功德の異熟によって、あなたもこのように清らかな智慧を持ち、菩薩、大士として、めでたい幸せと光輝と善き徳性の依拠となるでしょう。(22.482)

あなたはやがて段階的に、菩提の資糧を満たしつつ善行を積み、阿羅漢として菩提を得て、仏にもなられるでしょう。(22.483)

このように師が教示されたのを聞き、アショーカ王は {或いは：阿難は} 「わかりました」と随喜して、集まりの聞き手たちと共に喜んで信受しました。(22.484)

チャンダカが帰還してすべての後宮の女たちの悲しみを慰め、カンタカが昇天した [という名の] 品、第22章 [終わる] 。

4. Tathāgatajanmāvadānamālā 第23章の校訂

A 152a1 ; B 247a (the beginning part of this chapter is missing) ; D 210a1

athāsoko {or: athānando} mahāsattvaḥ sājñaliḥ samupāsritaḥ /

bhagavantam guruṃ natvā saṃpaśyann evaṃ abravīt // 23.1	
bhadanto 'sau mahāsattva pravrajitvā svayaṃ tataḥ /	
vane kutrāśrame gatvā saṃpracere tapovratam // 23.2	
iti tasya jagacchāstuḥ saṃbodhijñānasādhanaṃ /	
tapovratam samādiśya sarvān naḥ paribodhaya // 23.3	
iti saṃprārthite tena so 'rhan yatir mahāmatih /	
upaguptas {or: śākyasiṃhas} *tadāśokaṃ {or: tam ānandaṃ} saṃpaśyann evaṃ ādiśat // 23.4	
sādhū śṛṇu mahāsattva yathā me gurutaḥ śrutam {or: mayā purākṛtam} /	
tathā 'han te pravakṣyāmi sarvalokābhībodha[166a]ne // 23.5	
tataḥ sarvārthasiddho 'sau bodhisattvaḥ prabhāsayan /	
saṃprasthito vaśiṣṭhasya maharṣer āśramaṃ yayau // 23.6	
tatra sa samupāviṣṭo yatir api praśobhitaḥ /	
ṛṣiṇām api sarveṣāṃ jahāra locanāni vai // 23.7	≈ Bc 7.2
kṛṣikarmakarāḥ sarve taṃ yatim samupāgatam /	
dṛṣṭvātivismitasvāntā samīkṣanto 'bhitasthire // 23.8	≈ Bc 7.3
phalamūlasamitpuṣpapavitravāhakā vanāt /	
prāgatās tam upāyātaṃ samīkṣya vismayaṃ yayuḥ // 23.9	≈ Bc 7.4
mayūrā api taṃ dṛṣtvā kekā mumucur unmadāḥ /	
mṛgā api tam ālokya tasthur abhimukhā mudā /	
gāvo 'pi taṃ samālokya prasusruvuḥ payāḥ svayaṃ // 23.10	≈ Bc 7.5; 7.6
vasūnām aṣṭamo 'yaṃ hi syād *aśvino 'paro hy ayam /	
uccerur iti *taceṣṭasaṃdarśanāt *tapasvinaḥ // 23.11	≈ Bc 7.7
evaṃ vismāpayan sarvān sa praviṣṭas tapovanam /	
kṛtsnam *saṃdyotayām āsa divākara ivoditaḥ // 23.12	≈ Bc 7.8
tatra tair ṛṣibhir vipraiḥ samāmantrya samarcitaḥ /	
teṣāṃ dharmabhṛtāṃ vṛttiṃ draṣṭum āsīt samutsukaḥ // 23.13	≈ Bc 7.9
tataḥ puṇyārthibhir lokaiḥ *samākīrṇitam āśramaṃ /	
so 'nucaran mahāsattvo draṣṭum tapoviṣeṣatām // 23.14	≈ Bc 7.10
tatra tapasvinām dṛṣtvā nānāvidhatapovratam /	
dṛṣtvā tattvaṃ vijijñāsuḥ *kaṃcid evaṃ apricchata // 23.15	≈ Bc 7.11
eṣāṃ saumya na jāne 'haṃ tapovidhiṃ phalāni ca /	
etatsarvaṃ pravṛttāntaṃ bhavān me vaktum arhati // 23.16	≈ Bc 7.12
tac chrutvā sa dvijaśreṣṭhas tasmai saddharmavāñchine /	
krameṇa kathayām āsa tapovidhiṃ phalāni ca // 23.17	≈ Bc 7.13
agrāmyam annaṃ salile prarūḍhaṃ	
parṇāni toyaṃ phalamūlam eva /	
yathāgame vṛttir iyaṃ munīnām	
bhinnās tu te te tapasāṃ vikalpāḥ // 23.18	= Bc 7.14

uñchena jīvanti khagā ivānye tṛṇāni kecin mṛgavac caranti / kecid bhujamgaiḥ saha vartayanti valmīkabhūtā iva mārutena // 23.19	= Bc 7.15
asmat prayatnārjitavṛtta[166b]yo 'nye kecit svadantāpahatānnabhakṣāḥ / kṛtvā parārthaṃ śrapaṇaṃ tathānye kurvanti kāryaṃ yadi śeṣaṃ asti // 23.20	= Bc 7.16
kecij jalaklinnajaṭākālāpā dvipā vakam juhvati mantrapūrvam / mīnaiḥ samaṃ kecid apo vigāhya vasanti kūrmoḥlikhitaiḥ śarīraiḥ // 23.21	= Bc 7.17
evaṃvidhaiḥ kālacitais tapobhiḥ pare divaṃ yānty apare nṛlokaṃ / duḥkhena mārgēṇa sukhaṃ kṣipanti dukhaṃ hi dharmasya vadanti mūlaṃ // 23.22	= Bc 7.18
ity evamādi dvipadendravatsaḥ śrutvā vacas tasya tapodhanasya / adṛṣṭatattvo 'pi na saṃtutoṣa śanair idaṃ cātmagataṃ jagāda // 23.23	= Bc 7.19
duḥkhātmaṃ naikavidhaṃ tapaś ca svargaṇaḥpradhānaṃ tapasaḥ phalaṃ ca / lokāś ca sarve pariṇāmaṇṭaḥ svalpe śramaḥ khalv ayam āśramaṇāṃ // 23.24	= Bc 7.20
śriyaṃ ca bandhūn viṣayāṃś ca hitvā ye svargahetoḥ niyamaṃ caranti / ye vipramuktāḥ khalu gantukāmā mahattaraṃ bandhanaṃ eva bhūyaḥ // 23.25	= Bc 7.21
kāyāklamair yaś ca tapo vidhānaiḥ pravṛttim akāṅkṣati kāmahetoḥ / saṃsāradoṣān aparikṣamāṇo duḥkhena so 'nvicchatī duḥkhaṃ eva // 23.26	= Bc 7.22
trāsaś ca nityaṃ maraṇāt prajānāṃ yatnena cecchanti punaḥprasūtim / satyāṃ pravṛttaṃ niyataś ca mṛtyuś tatraiva magnā yata eva sītāḥ // 23.27	= Bc 7.23
ihārthaṃ eke praviśanti khedaṃ	

svargārtham anye śramam āpnuvanti /
 sukhārtham āśākṛpaṇo 'kṛtārthaḥ
 pataty anarthe khalu jīvalokaḥ // 23.28 = Bc 7.24
 na khalv ayaṃ garhita eva yatno
 yo hīnam utsṛjya viśeṣagāmī /
 prājñaiḥ samānena pariśrameṇa
 kāryaṃ tu tad yatra punar na kāryam // 23.29 = Bc 7.25
 śārīrapīḍā tu yadiha dharmah
 sukhaṃ śārīrasya bhavaty adharmah /
 dharmeṇa cāpnoti sukhaṃ **tad asmāt**
 tasmād adharmam phalaṭīha dharmah // 23.30 = Bc 7.26
 yataḥ śārīraṃ manaso vaśena
 pravartate **vāpi** nivartate **vā** /
 yukto damaś cetasa eva tasmāc
 cittād ṛte kāṣṭhasamaṃ śārīram // 23.31 = Bc 7.27
 āhāraśuddhyā yadi puṇyam iṣṭam
 tasmān mṛgāṇām api puṇyam asti /
 ye cāpi bāhyāḥ puruṣāḥ phalebhyo
 bhāgyāparādhena parāṇmukhārthāḥ // 23.32 = Bc 7.28
 duḥkhe 'bhisamdhis tv atha puṇyahetuḥ
 sukhe 'pi kāryo nanu so 'bhisamdhiḥ /
 atha pramāṇam na sukhe 'bhisamdhir
 duḥkhe pramāṇam nanu nābhisamdhiḥ // 23.33 = Bc 7.29
 tathaive**ha** karmaviśuddhihetoḥ
 sprśanty a[167a]pas tīrtham iti pravṛttāḥ /
 tatrāpi toṣo hṛdi kevalo 'yaṃ
 na pāvayiṣyanti hi pāpam āpaḥ // 23.34 = Bc 7.30
 sprṣṭam hi yad yad guṇavadbhir ambhas
 tat tat pṛthivyāṃ yadi tīrtham iṣṭam /
 tasmād guṇān eva paraimi tīrtham
 āpas tu niḥsaṃśayam āpa eva // 23.35 = Bc 7.31
 iti sma tat tad bahuyuktiyuktaṃ
 jagāda cāstaṃ ca yayau vivasvān /
 tato hav**ir**dhūmavivarṇavṛkṣam
 tapaḥpraśantaṃ sa vanam viveśa // 23.36 = Bc 7.32
 abhyuddhṛtaprajvalitāgnihoṭraṃ
 kṛtābhiṣekarṣjanā**bhik**īrṇam /
 jāpyasvanākūjitadevakoṣṭhaṃ

dharmasya karmāntam iva pravṛttam // 23.37	= Bc 7.33
kāścīn niśās tatra niśākarābhaḥ parīkṣamāṇās ca tapāmsy uvāsa / sarvaṃ parikṣepya tapaś ca matvā tasmāt tapaḥkṣetratalāj jagāma // 23.38	= Bc 7.34
anvavrajann āśramaṇas tatas taṃ tadrūpamāhātmyagatair manobhiḥ / deśād anāryair abhibhūyamānān maharṣayo dharmam ivāpayāntam // 23.39	= Bc 7.35
tato jaṭavalkacīrakhelāṃs tapodhanāṃś caiva sa tān dadarśa / tapāṃsi caiṣāṃ anurudhyamānas tasthau śive śrīmati mārgavṛkṣe // 23.40	= Bc 7.36
athopasṛtyāśramavāsinas taṃ manuṣyavaryaṃ parivārya tasthuḥ / vṛddhaś ca teṣāṃ bahumānapūrvam kalena sāmnā giram ity uvāca // 23.41	= Bc 7.37
tvayy āgate pūrṇa ivāśramo 'bhūt sāmpadyate śūnya eva prayāte / tasmād imaṃ nārhasi tāta hātum jīviṣor deham iveṣtam āyuh // 23.42	= Bc 7.38
brahmaṛṣirājarṣisurarṣijūṣṭaḥ puṇyaḥ samīpe himavān hi śailaḥ / tapāṃsi tāny eva tapodhanānāṃ yatsaṃnikarṣād bahulībhavanti // 23.43	= Bc 7.39
tīrthāni puṇyāny abhitas tathaiva sopānabhūtāni nabhastalasya / jūṣṭāni dharmātmabhir ātmavadbhir devarṣibhiś caiva nṛparṣibhiś ca // 23.44	= Bc 7.40
itaś ca bhūyaḥ kṣamam uttaraiva dik sevituṃ dharmaviśeṣahetoḥ / na tu kṣamaṃ dakṣiṇato budhena padaṃ bhaved ekam api prayātum // 23.45	= Bc 7.41
tapovane 'sminn atha niṣkriyo vā saṃkīrṇadharmāpatito 'śucirvā / dṛṣṭas tvayā yena na te vivatsā tad brūhi yāvad rucito 'stu vāsaḥ // 23.46	= Bc 7.42
ime hi vāñchanti tapaḥsahāyaṃ	

taṇidhānapratimaṃ bhavaṃtaṃ / vāsaṃ tvaṃ [167b] hīndrasameṇa sārḍhaṃ br̥haspater abhyudayaṃvahaḥ syāt // 23.47	= Bc 7.43
ity evaṃ ukte sa tapasvimaḍhye tapasvimaḍhyeṇa maṇīṣimaḍhyaḥ / bhavaṃpraṇāśāya kṛtapratijñāḥ svaṃ bhāvaṃ antargataṃ ācacaḁṣe // 23.48	= Bc 7.44
r̥jvātmaṇāṃ dharmabhr̥tāṃ muṇīṇāṃ iṣṭātithitvāt svajanopamaṇāṃ / evaṃvidhair māṃ prati bhāvajātaiḥ pr̥tiḥ parātmajanitaś ca mārgaḥ // 23.49	= Bc 7.45
snigdhābhir ābhir hṛdayaṃgamābhiḥ saṃāsataḥ snāta ivāsmi vāgbhiḥ / ratiś ca me dharmanavagrahasya vispaṇḍitaṃ saṃprati bhūya eva // 23.50	= Bc 7.46
evaṃ pravṛttāṇ bhavataḥ śaraṇyāṇ atīva saṃdarśitapakṣapātāṇ / yāsyāmi hitveti maṃāpi duḥkhaṃ yathaiva baṇdhūṃṣ tyajatas tathaiva // 23.51	= Bc 7.47
svargāya yuṣmākamaṃ ayaṃ tu dharmo maṃābhiḥlāśas tv apuṇarbhavāya / asmiṇ vane yena na me vivatsā bhinnāḥ pravṛtṭyā hi nivṛttidharmaḥ // 23.52	= Bc 7.48
taṇ nāratir me na parāpacāro vaṇād ito yena parivrajāmi / dharme sthitāḥ pūrvayugāṇurūpe sarve bhavanto hi mahar̥ṣikalpāḥ // 23.53	= Bc 7.49
tato vacaḥ sūṇṛtaṃ arthavac ca suślakṣṇaṃ ojasvi ca garvitaṃ ca / śrutvā sudhīrasya tapasvinaṃ te viśeṣayuktaṃ baḥumaṇaṃ īyuh // 23.54	= Bc 7.50
kaścid dvijaṃ tatra tu bhasmaśāyī prāṃsuḥ śikhī dāravacīravāsāḥ / āpiṇḡalākṣas taṇudīrghaghoṇaḥ kuṇḍaikaḥasto giramaṃ ity uvāca // 23.55	= Bc 7.51
dhīmaṇṇ udāraḥ khalu nīscayaṃ te yas tvaṃ yuvā jaṇmaṇi dṛṣṭadoṣaḥ / svargāpavargau hi vicārya samyag	

yasyāpavarge matir asti so 'sti // 23.56	= Bc 7.52
yajñais tapobhir niyamais ca tais taiḥ svargaṃ yiyāsanti hi rāgavantaḥ / rāgeṇa sārdhaṃ ripuṇeva yuddhvā mokṣaṃ parīpsanti tu sattvavantaḥ // 23.57	= Bc 7.53
tad buddhir eṣā yadi niścītā te tūrṇaṃ bhavān gacchatu vindhyakoṣṭhaṃ / asau munis tatra vasaty arāḍo yo naiṣṭhike śreyasi labdhacakṣuḥ // 23.58	= Bc 7.54
tasmād bhavān chroṣyati tattvamārgaṃ satyāṃ rucau sampratipatsyate ca / yathā tu paśyāmi matis tavaiśā tasyāpi yāsyaty avadhūya buddhim // 23.59	= Bc 7.55
spāṣṭoccaḥṇaṃ vipulāyatākṣaṃ tā[168a]mrādharausthaṃ sitatīkṣṇadamṣṭram / idaṃ hi vaktuṃ tanuraktajihvaṃ jñeyārṇavaṃ pāsyati kṛtsnam eva // 23.60	= Bc 7.56
gambhīratā yā bhavatas tv agādḥā yā dīptatā yāni ca lakṣaṇāni / ācāryakaṃ prāpsyasi tat pṛthivyām yan narṣibhiḥ pūrvayuge 'py avāptam // 23.61	= Bc 7.57
paramam iti tato nṛpātmajas tam ṛṣijanaṃ pratinandya nirayau / vidhivad anuvidhāya te 'pi taṃ praviviśur āśramaṇas tapovanam // 23.62	= Bc 7.58
tatas taṃ nirgataṃ matvā vaśiṣṭho munibuddhimān / upetya samupāmantrya sampāśyan paryapṛcchata // 23.63	≈ S ii,195.12-16; M ii,243.13-17
bhadrāsudhāmśusamkāśa kas tvam devo 'si vā naraḥ / yuvātra kiṃnimittaṃ vā tapovane samāgataḥ // 23.64 iti tenārṣiṇā pṛṣṭe bodhisattvaḥ samīkṣya tam / vaśiṣṭhaṃ munim ātmajñāṃ sampāśyann idam abravīt // 23.65	≈ S ii,197.10-18; M ii,245.16-24
ikṣvākukulasamjātaśuddhodano nṛpātmajaḥ / tasyātmajo 'ham utsṛjya rājyam iha samācare // 23.66 jagat kleśānalair dagdhaṃ drṣṭvāhaṃ niḥsprho bhave / tat tyaktvā viṣayān sarvān mokṣārthaṃ abhiniṣkrame // 23.67 yatra na sprśyate kleśijanmavyādihjarādibhiḥ / sadābhadrasukhotsāhaṃ tatpadaṃ prāptum ācare // 23.68 iti tenoditaṃ śrutvā vaśiṣṭho vismayānvitaḥ /	

bhūyo 'pi taṃ mahāsattvaṃ saṃpaśyann evaṃ abravīt // 23.69
 sādho bhavati rājendraḥ śuddhodanaḥ pitā tava /
 tat kathaṃ tvaṃ samutsrjya rājyaṃ iha samāgataḥ // 23.70
 yāvad yuvā nṛpo bhūtvā lokān dharmeṇa pālayan /
 svaparātmahitaṃ kṛtvā sukhe carādhunā vraja // 23.71
 yadā hi tvaṃ jarākrāntaśarīro viratas tadā /
 sarājyān viṣayān sarvāṃs tyaktveha samupācara // 23.72
 śuddhaśīlaḥ samādhāya tapovrataṃ yathepsitam /
 dhṛtvā dhyānasukhaṃ bhuktvā saṃcarasva sadā sukham // 23.73
 etatpuṇyavipākena pariśuddhatrimaṇḍalaḥ /
 niḥkleśaḥ pariśuddhātmā brahmalokaṃ avāpsyasi // 23.74
 iti tenārṣiṇākhyātaṃ niśamya sa mahāmatih /
 bodhisattvo vaśiṣṭhaṃ punar evaṃ samabravīt // 23.75
 maharṣe brahmaloke 'pi nāhaṃ gantuṃ samutsahe /
 a[168b]pi tu sadvratam dhṛtvā jivā māragaṇān api /
 saṃbodhijñānam āsādyā saddharmaṃ saṃprakāśayan // 23.76
 lokadhātuṣu sarveṣu dharmāmṛtaṃ pravarṣayan /
 jagad dharmamayaṃ kṛtvā nirvṛtiṃ prāptum utsahe // 23.77
 etaddhetor maharṣe 'haṃ tyaktvā sarvān parigrahān /
 bodhicaryāvrataṃ dhṛtvā bodhiṃ prāptum ihācare // 23.78
 yadi tvayi maharṣe 'sti saṃbodhijñānam uttamam /
 samupādiśya me dehi yena kuryāṃ jagaddhitam // 23.79
 iti tenoditaṃ śrutvā vaśiṣṭho munisattamaḥ /
 bodhisattvaṃ tam ālokyā vismita evaṃ abravīt // 23.80
 sādho na vidyate 'smāsu bodhicaryāvrataṃ kvacit /
 tad anyatsaṃvaraṃ sarvaṃ dāsyāmi te yad icchasi // 23.81
 iti tenārṣiṇākhyātaṃ niśamya sa mahāmatih /
 bodhisattvo mahāsattvo dhyātvaivaṃ samacintayat // 23.82
 yadi na vidyate hy atra bodhicaryāvrataṃ kvacit /
 kim evaiśāṃ tapaḥpuṇyaṃ yena na syāj jagaddhitam // 23.83
 tad atrāhaṃ uṣitvā kiṃ yatra bodhir na vidyate /
 bodhyarthe rājyaṃ utsrjya pravrajāmi jagaddhite // 23.84
 iti dhyātvā mahāsattvo bodhisattvaḥ sa sanmatih /
 vaśiṣṭhaṃ munirājaṃ taṃ samāmantryaitam abravīt // 23.85
 maharṣe 'haṃ gamiṣyāmi bodhiṃ prāptum jagaddhite /
 bhavān api jagadbhadraṃ kṛtvācaratu sarvadā // 23.86
 ity ukte bodhisattvena vaśiṣṭho munisattamaḥ /
 tatheti taṃ praṇatvā sa svāśramaṃ samupāśrayat // 23.87

gacchāsu sidhyatām vāñchā bhadraṃ bhūyāt sadā tava /
 sarvatra jayasiddhiś ca bhavatu ca samīhitam // 23.88
 iti bhadraśīsaṃ dattvā tasmai sambodhisādhine /
 vaśiṣṭhaḥ suprasannātmā svāśramam samupāviśat // 23.89
 tataḥ sa bodhisattvo 'pi samprasthitaḥ prabhāsayan /
 sarvāṃs tapasvino draṣṭum anyatra samupācarat // 23.90
 tam āyātaṃ samālokya śaktyākhyā brāhmaṇī mudā /
 sahasā samupāgatyā sampāśyanty evam abravīt // 23.91 ≈ L 238.5-6; H ii,158.10-11
 svāgataṃ te mahābhāga samehi tvaṃ mamālaye /
 adya rātrau vuṣitvātra prātar gaccha yathepsite // 23.92
 iti tayodi[169a]taṃ śrutvā bodhisattvas tatheti saḥ /
 prabodhitas tayā sārdham tatrāśramam upāviśat // 23.93
 tatra sā brāhmaṇī śaktiḥ parṇakūṭyāṃ tṛṇāsane /
 bodhisattvaṃ samāmantrya samādaraṃ nyaveśayat // 23.94
 tatrāsanāsamāsīnaṃ drṣṭvā sā brāhmaṇī mudā /
 sapañcāmṛtabhākṣena samabhyarcyābhyatoṣayat // 23.95
 tato rātrau sa śuddhātmā tṛṇāsanyāsasamāśritaḥ /
 pūrvabuddhān anusmṛtvā tasthau dhyānasamāhitaḥ // 23.96
 tataḥ prātaḥ samutthāya bodhisattvaḥ prabhāsayan /
 anyatrāśramaṇāṃ draṣṭum tapovidhiṃ mudā carat // 23.97
 drṣṭvā taṃ samupāyātaṃ padmākhyā brāhmaṇī mudā /
 sahasā samupāśṛtyā sampāśyanty evam abravīt // 23.98 ≈ L 238.7-8; H ii,158.12-13
 svāgataṃ te mahābhāga samehi tvaṃ mamāśrame /
 adya rātrāu uṣitvātra pratar gaccha yathepsite // 23.99
 iti tayoditaṃ śrutvā bodhisattvas tatheti saḥ /
 prabodhitaḥ prasannātmā tadāśramam upācarat // 23.100
 tatra sā brāhmaṇī padmā bodhisattvaṃ samādarāt /
 parṇakūṭyāṃ samāmantrya tṛṇāsane nyaveśayat // 23.101
 tam āsanāsamāsīnaṃ drṣṭvā sā brāhmaṇī mudā/
 sapañcāmṛtabhākṣena surasenābhyatoṣayat // 23.102
 tataḥ sā brāhmaṇī drṣṭvā taṃ bhogyābhipratoṣitam /
 purataḥ samupāśṛtya papracchaivaṃ samādarāt // 23.103
 sādho kasya bhavān putraḥ kasya hetor ihāgataḥ /
 etat satyaṃ samākhyāya mām bodhayitum arhati // 23.104
 tayeti prārthitaṃ śrutvā bodhisattvaḥ sa sanmatiḥ /
 tām padmāṃ brāhmaṇīm paśyan bodhayitum samādiśat // 23.105
 yaḥ śākyakulasambhūtaḥ śuddhodano nṛpādhipaḥ /
 tasyātmajo 'ham utsṛjya rājyaṃ sarvān parigrahān // 23.106

sarvasattvahitaṃ kartuṃ sambodhijñānalāsaḥ /
 ṛṣiṇāṃ saṃvaram draṣṭuṃ iha samācare mudā // 23.107
 iti tena samākhyātaṃ śrutvā sā brāhmaṇī tataḥ /
 bodhisattvaṃ samālokya vismitaivam abhāṣata // 23.108
 yuvā bhavān mahābhāga saṃsārabhogyaṇiḥsṛhaḥ /
 kathaṃ rājyaṃ samutsrjya samāyāsi tapovane // 23.109
 sarve rājyābhilāṣeṇa pracaranti tapova[169b]ne /
 tvaṃ tu rājyaṃ samutsrjya tapoś caritum icchasi // 23.110
 kecit santo nṛpā vṛddhāḥ saṃsārabhogyaṇiḥsṛhāḥ /
 svātmājam abhiṣiñcyāpi pratiṣṭhāpya nṛpāsane // 23.111
 rājyāśramaṃ parityajya caturvargābhikāṅkṣiṇaḥ /
 vanāśrame samāśritya saṃcarante tapovratam // 23.112
 iti matvā yuvā yāvat tāvad rājyāśramāśritaḥ /
 mahiṣyā saha saṃraktaḥ kulacaryāvratam cara // 23.113
 yadā jarāparītāṅgas tadātmajaṃ nṛpāsane /
 pratiṣṭhāpya samāśritya vanāśrame vratam cara // 23.114
 evaṃ cet te sadā bhadraṃ sarvatrāpi bhaved dhruvam /
 iha dharmasukhaṃ bhuktvā paratra svargatiṃ vrajeḥ // 23.115
 iti matvā punā rājyāśrame sthitvā kulavratam /
 pitṛbhyāṃ bhāryayā sārddhaṃ saṃcarasva prajā avan // 23.116
 iti tayā samākhyātaṃ śrutvā sa bhavaniḥsṛhaḥ /
 bodhisattvaḥ samālokya tāṃ padmām evam abravīt // 23.117
 nāhaṃ mātāḥ samicchāmi svargadivyasukhāny api /
 api tu bodhim āśādy kartum eva jagaddhitam // 23.118
 etaddhetor ahaṃ tyaktvā mahadrājyasukhāny api /
 munināṃ vratavaiśeṣyaṃ draṣṭuṃ iha samācare // 23.119
 kiṃ cāpi sarvajantūnāṃ mṛtyuḥ sarvatra saṃmukhaḥ /
 tad ahaṃ vīkṣya saṃvigno nirvṛtiṃ prāptum utsahe // 23.120
 iti tenoditaṃ śrutvā padmā sā sāśrulocanā /
 bodhisattvaṃ tam ālokya punar apy evam abravīt // 23.121
 sādho jagaddhitārthena yadi sambodhim icchasi /
 siddhyatu te manovāñchā bhavatu ca sadā śivam // 23.122
 tatra bauddhāśrame gatvā triratnaśaraṇaṃ gataḥ /
 bodhicaryāvratam dhṛtvā saṃcarasva samāhitaḥ // 23.123
 yadā saṃbodhim āśādy sambuddhapadam āptavān /
 tadātrāpi samāgatya dharmam ādeṣṭum arhasi // 23.124
 iti tayoditaṃ śrutvā bodhisattvas tatheti saḥ /
 pratiśrutya tato 'nyatra gantuṃ saṃharṣito 'carat // 23.125

tato 'nyatrāśramāvāsī maharṣī raivatābhidhaḥ /
 dūratas tam upāyātaṃ samīkyaivaṃ vyacintayat // 23.126 ≈ L 238.9-10; H ii,158.14-15
 ko 'yam iha samāyātaḥ prabhāsayan surendravat /
 sūryo vātha sudhāṃśur vā brahmā vā śaṃkaro 'tha vā // 23.127
 viṣṇur vāgnir yamo vāyaṃ nairṛtir varuṇo 'pi vā /
 vāyur vā [170a] yakṣarājā vā bhūteśo vātha kinnaraḥ // 23.128
 gandharvā vātha guhyendraḥ siddho 'tha vā maharddhikaḥ /
 sādhyo 'tha vā vasur vāpi vidyādharo 'tha dānavaḥ /
 nāgendro vā suparṇo vā tadanyo vā maharddhikaḥ // 23.129
 ko 'yaṃ prabhāsayan atra mamāśrame samāgataḥ /
 iti vitarkamāno 'sau saṃpaśyan raivato 'carat // 23.130
 tatra taṃ samupāyātaṃ bodhisattvaṃ sa raivataḥ /
 muniḥ sametya saṃpaśyan mudāmantryaivam abravīt // 23.131
 kasmād iha tvam āyāsi yuvā divyātisundaraḥ /
 viṣayān parigrahāṃś ca tyaktvā pravrajase katham // 23.132
 mātā kā te pitā kaś ca bhāryāpi kā nu vidyate /
 kasya ca viṣaye deśa etat satyaṃ samādiśa // 23.133
 iti tenarsiṇādiṣṭaṃ bodhisattvo niśamya saḥ /
 raivataṃ taṃ mahābhijñāṃ saṃpaśyann evam abravīt // 23.134
 yaḥ śrīmān bhūpatī rājā śuddhodanaḥ sa me pitā /
 mātā māyābhidhā devī bhāryā yaśodharābhidhā // 23.135
 puraṃ bhūtilakākāraṃ bhadraśrīsadguṇāśrayam /
 tasmād ahaṃ pravrajyātra tapo draṣṭuṃ mudācare // 23.136
 jagat kleśāgnisaṃtaptam dṛṣṭvā saṃsāraniḥspṛhaḥ /
 bodhicaryāvrataṃ dhṛtvā sarvasattvahitārthabhṛt // 23.137
 jītvā māragaṇān sarvān saṃprāpya bodhim uttamām /
 jagad dharmamayam kṛtvā nirvṛtiṃ prāptum utsahe // 23.138
 etadarthe 'ham utsṛjya viṣayān saparigrahān /
 pravrajyāsaṃvaram dhṛtvā bodhiṃ prāptum ihāvraje // 23.139
 iti tenoditaṃ śrutvā raivato munir ātmavit /
 bodhisattvaṃ mahāsattvaṃ taṃ paśyann evam abravīt // 23.140
 sādho bhadrasamīcchā te tathāpi me vacaḥ śṛṇu /
 yad dhitārthaṃ pravakṣyāmi tat tvam saṃdhātum arhasi // 23.141
 yas tvam mahīpateḥ putro yuvā divyātisundaraḥ /
 samrāṇmāheśvarīsaṃpatsukhaṃ tyaktvā pravrajase // 23.142
 katham māraṃ vinirjitya niḥkleśo bodhim āpsyasi /
 katham bodhim anāsādyā saṃbuddhapadam āpsyasi // 23.143
 bauddhapadam anāsādyā katham kuryāj jagaddhitam /

jagad bhadram akṛtvaiva kiṃ gatvāpi sunivṛtim // 23.144
 iti [170b] matvā mahābhāga tyaktvā sambodhilālasam /
 saṃsārasatsukhaṃ bhoktuṃ saṃcarasva tapovratam // 23.145
 māro hi durjayo jetuṃ devair api na śakyate /
 tvayā nareṇa yūnātra jetuṃ kathaṃ sa śakyate // 23.146
 sarve lokādhipāś cāpi māravaśasamāsthitaḥ /
 tvam eko hi yuvā martyas tadvaśena careḥ katham // 23.147
 brahmā sarvaśiśāstāpi māravaśasamāśritaḥ /
 kleśāgniparitaptātmā carate svecchayāpathe // 23.148
 evaṃ maharṣayo dhīrā api kleśāgnitāpitāḥ /
 mārasya vaśagā bhraṣṭāś caranti bahavo bhava // 23.149
 tat kathaṃ tvam yuvā kāntāś cakravartinṛpātmajaḥ /
 saṃsāraratisaṃbhogaṃ tyaktvā tapaḥ samācareḥ // 23.150
 nūnam sa madano māro dṛṣṭvā tvāṃ navayauvanam /
 dṛṣṭvāśu puṣpabāṇena hatvā kāntāvaśe kṣipet // 23.151
 tadā tvāṃ pramadāḥ kāntā vaśīkṛtya prayatnataḥ /
 kāmabhogānusaṃcārai ramayeyur yathāsukham // 23.152
 tataḥ kāmasukhāsaktaḥ snehapāśābhibandhitaḥ /
 pramadāśaraṇe sthitvā pracares tvam yatheccchayā // 23.152
 tato madābhīmānāndhaḥ kleśāgnitāpitāśayaḥ /
 agameṣv api saṃpraktaḥ pracarethāḥ pramoditaḥ // 23.153
 tataḥ pāpānuraktātmā daśākuśalasamrataḥ /
 dāruṇeṣv api niḥśaṅkaḥ pātakeṣu mudācareḥ // 23.154
 etatpāpābhiliptātmā rāgāgnidahitendriyaḥ /
 asahyavedanākrāntadehātiduḥkhopīḍitaḥ // 23.155
 evaṃ cirāturas tīvraduḥkḥāgnidahitendriyaḥ /
 kṛcchreṇa kāyam utsrjya yamālaye vrajer api // 23.156
 tatra tvam sahasādhr̥tvā yamadūtair bhayaṃkaraiḥ /
 prakṣipto narake 'vīcau bhuñjānaḥ svakṛtaṃ vaseḥ // 23.157
 tataś cirāt samutthāya sarvatra narakeṣv api /
 bhraman svakṛtabhogyāni bhuñjāno nighnito vaseḥ /
 cirāt tadduḥkhamuktātmā pariśuddhāśayo bhavaḥ // 23.158
 evaṃ matvā mahābhāga tāvad yuvā nṛpāśrame /
 sthitvārthibhyo yathākāmaṃ dattvā dānaṃ vrataṃ cara // 23.159
 śuddhaśīlaḥ samādhāya caturbrahmavihārakaḥ /
 dharmeṇa pālayaṃl lokān kulacaryāvrataṃ cara // 23.160
 etatpuṇyavi[171a]śuddhātmā bhuktveha satsukhaṃ sadā /
 ante devaiḥ saha svarge ramer divyasukhānvitaḥ // 23.161

yadi mokṣe 'sti te vāñchā yadā jarāhatendriyaḥ /
tadā rājyāśramaṃ tyaktvā vanāśrame samāśrayan // 23.162
indriyāṇi vinirjitya samādhinihitāśayaḥ /
municaryāvratam dhṛtvā saṃcarasva samāhitaḥ // 23.163
etatpunyābhisuddhātma niḥkleśo nirmalendriyaḥ /
sadā dhyānasukhaṃ bhuktvā prānte brahmālayaṃ vrajeḥ // 23.164
evaṃ matvā yuvā yāvat tāvat kulavratam cara /
vṛddho munivratam dhṛtvā saṃcarasva tapovane // 23.165
evaṃ cet te sadā bhadrasukhaṃ bhavet samantataḥ /
prānte nirvṛtim āsādy svāyambhuvaṃ padaṃ vrajeḥ // 23.166
iti tenārṣiṇākhyātaṃ śrutvā sa bodhimānasaḥ /
bodhisattvo mahāsattvas tam ṛṣim evam abravīt // 23.167
maharṣe 'haṃ viraktātmā saṃsāraratiniḥspṛhaḥ /
tasmān mārāśrayaṃ tyaktvā bodhicaryāvratam care // 23.168
tat sarvabhūpatīśānacakravartinṛpaśriyam /
api tyaktvā jagad bhadraṃ kartuṃ bauddhavratam care // 23.169
nāham icchāmi svarge ca devendraśrīsukhāny api /
brahmaloke 'pi necchāmi svāyambhuvaṃ mahatsukham // 23.170
mārān na śakyate jetuṃ bodhisattvo jitendriyaḥ /
mārāñ jītvā caraty eva bodhisattvo jagaddhite // 23.171
tathāhaṃ bodhisambhāraṃ pūrayitvā yathākramam /
bodhisattvo jagad bhadraṃ kartuṃ icchāmi sāmpratam // 23.172
tena sambodhim āsādy saddharmaṃ saṃprakāśayan /
jagad dharmamayam kṛtvā gantum icchāmi nirvṛtim // 23.173
etadarthe 'ham utsṛjya cakravartinṛpaśriyam /
bodhiṃ prāptyai bhavaddharmaṃ samīkṣitum ihāvraje // 23.174
iti tena samākhyātaṃ śrutvā sa raivato muniḥ /
vismitas taṃ mahāsattvaṃ sampāśyann evam abravīt // 23.175
dhanyo 'si tvaṃ mahāsattvo bodhisattvo jagaddhite /
mārāñ jītvāpi sambodhiṃ saṃprāptuṃ yat samicchasi // 23.176
gaccha bhadra samādhāya bauddhacaryāvratam cara /
bhavatu te sadā bhadraṃ saṃsidhyatu samīhitam // 23.177
iti bhadraśīṣaṃ dattvā tam abhyarcyārhabho[171b]janaiḥ /
toṣayitvā prasannātmā raivataḥ svāśramaṃ yayau // 23.178
tataḥ sa bodhisattvo 'pi kurvan bhadraṃ samantataḥ /
samācarat tathānyatra pūrṇendur iva bhāsayan // 23.179
tatra taṃ samupāyātaṃ dattrimadaṇḍikātmajaḥ /
rājyakākhyo muniśreṣṭho durataḥ samalokayat // 23.180

≈ L 238.10-11; H ii,158.15-16

dṛṣṭvā taṃ samupāyātaṃ rājyaka ṛsir utthitaḥ /
 sahasā samupāsṛtya sampaśyann evaṃ abravīt // 23.181
 svāgato 'si mahābhāga kaś tvam kuta ihāgataḥ /
 yuvātisundaraḥ kāntaḥ kathaṃ pravrajase vane // 23.182
 iti tenārṣiṇā prṣṭe bodhisattvaḥ samīkṣya taṃ /
 rājyakaṃ samupāsṛtya sampaśyann evaṃ abravīt // 23.183
 maharṣe 'haṃ suto rajñāḥ śuddhodhanasya bhūpateḥ /
 jagat kleśāgnisaṃtaptam dṛṣṭvā saṃsāraniḥspṛhaḥ // 23.184
 tadduḥkhābhīsamīkartuṃ tyaktvā rājyaṃ parigrahān /
 pravrajitvā svayaṃ bodhicaryāvrataṃ samācare // 23.185
 sambodhijñānam āsādyā jītvā mārān sudurjayān /
 jagad dharmamayaṃ kṛtvā prāptum icche sunirvṛtim // 23.186
 ity arhan bhavatām atra tapovidhiṃ samīkṣitum /
 saddharmāṇāṃ viśeṣaṃ ca samadhigantum āvraje // 23.187
 taduktam iti sa śrutvā dhanyo 'si tvam mahāmati /
 ity uktvātra samāmantrya svāśrame 'nayaḍ ādritaḥ // 23.188
 tatrāsane pratiṣṭhāpya taṃ abhyarcya sa moditaḥ /
 supraṇītena bhogyena sādaraṃ samatoṣayat // 23.189
 tato rātrau samāśritya paṇakutyāṃ tṛṇāsane /
 dhyātvā buddhān anusmṛtya tasthau saṃbodhimānasaḥ // 23.190
 tataḥ prātaḥ samutthāya bodhisattvaḥ prasannadhīḥ /
 taṃ maharṣiṃ samāmantrya tato 'carat prabhāsayan // 23.191
 taṃ carantaṃ mahāsattvaṃ bodhisattvaṃ samīkṣya saḥ /
 tadguṇāraktacittaś ca samupetyaivam abravīt // 23.192
 ahaṃ api tvayā sārdham caritum vrataṃ utsahe /
 tan māṃ tvam saugate dharme saṃcārayitum arhasi // 23.193
 iti saṃprārthitaṃ tena bodhisattvo niśamya saḥ /
 rājyakaṃ taṃ samālokyā vihasann evaṃ abravīt // 23.194
 ma[172a]harṣe yadi te vāñchā vrate 'sti bodhisādhane /
 saṃbodhipraṇidhānena dānavrate samācara // 23.195
 tataḥ sudhīr viśuddhātmā śīlacaryāvrataṃ cara /
 tato jagat samaṃ matvā kṣānticaryāvrataṃ cara // 23.196
 tato jagaddhitādhānaṃ vīryacaryāvrataṃ cara /
 tataḥ kleśān vinirjitya dhyānacaryāvrataṃ cara // 23.197
 tataḥ saddharmaśāstrābhdhau prajñāratnaṃ samarjaya /
 tena sattvahitārthena saṃbodhiprāptum utsaha // 23.198
 tato māragaṇāṇ jītvā saṃprāpya bodhim uttamām /
 jagad dharmamayaṃ kṛtvā sunirvṛtiṃ samāpnuyāḥ // 23.199

iti matvā maharṣe tvam sambodhisāadhanam vratam /
 yadicchasi samādhāya sattvahitavratam cara // 23.200
 triratnaśaraṇam kṛtvā nityam bhaja sadā smara /
 etatpunyānubhāvena bodhicittam samāpnuyāḥ // 23.201
 tataḥ sudhīr viśuddhātmā bodhisattvo jagaddhite /
 bodhicaryāvratam dhṛtvā samācaret sadā bhava // 23.202
 iti tena samādiṣṭam śrutvā sa ṛṣir ātmavit /
 duṣkaram bodhisamprāpyai vratam iti vyacintayat // 23.203
 tataḥ sa ṛṣir ālokya bodhisattvam praṇamya saḥ /
 sāñjaliḥ suprasannātmā sampaśyann evam abravīt // 23.204
 sanmate 'ham na śaknomi caritum bodhisāadhanam /
 bodhicaryāvratam hy asmāt tat kṣamasva prasīda me // 23.205
 sidhyatu te mahāsattva vratam sambodhisāadhanam /
 gaccha tvam āśu sambodhiṃ sādhyā trijagaddhite // 23.206
 sambodhijñānam āsādyā saddharmaṃ samprakāśayeh /
 ihāpi samupāgatya samupādeṣṭum arhasi // 23.207
 iti tenoditam śrutvā bodhisattvas tatheti saḥ /
 tūṣṇībhāvena saṃśrutyā tato 'carat prabhāṣayan // 23.208
 tato 'nyeṣāṃ ṛṣīṇāṃ ca draṣṭum nānāvidhivratam /
 bodhisattvo 'carat tatra sarveṣv apy āśrameṣu saḥ // 23.209
 evaṃ taṃ samupāyātaṃ dṛṣtvā sarve maharṣayaḥ /
 sametya sahasāmantrya saṃpūjya samatoṣayan // 23.210
 tataḥ sarvatra sampaśyan bodhisattvas tapovratam /
 bodhicaryāvratam kvāpi na dadarśa samantataḥ // 23.211
 tataḥ so 'parituṣṭātmā bodhisattvo 'bhiniṣkraman /
 bodhi[172b]vṛkṣam samālokya samāśritum mudācarat // 23.212
 tatra sa samupāśritya sambodhinihitāśayaḥ /
 sarvān buddhān anusmṛtya dhyātvā tasthau samāhitaḥ // 23.213
 tatra dhyātvā samāśīnam taṃ pūrṇendum ivojjvalam /
 dṛṣtvā sarve 'dhvagā natvā dūrato 'pi mudācaran // 23.214
 iti me *pūrvaśrutam taṃ sāmpratam gaditam mayā /
 {or: iti me pūrvavṛttāntam sāmpratam gaditam mayā /}
 tvam apy etan mahāvijñā śrutvānumodito bhava // 23.215
 śrutvedaṃ ye 'numodanti te sarve nirmalendriyāḥ /
 bhadrāśrīsadguṇāpannā bhavyeḥ sugatātmajāḥ // 23.216
 iti tenārhatādiṣṭam śrutvā*śoko *bhūpo {or: śrutvānando yatir} mudā /
 tatheti prativijñāpya prātyanandat sa satyakah // 23.217

Apparatus criticus of the chapter 23

- 1a athāśoko] A(post corr. int. lin.): athānando A(ante corr.) D.
4c upaguptas] A(post corr. marg.): śākyasiṃhas A(ante corr.) D || *tadāśokaṃ] ex conī: tam aśokaṃ A(post corr. int. lin.): tam ānandaṃ A2(ante corr.) D.
5b me gurutaḥ] A(post corr. marg.): mayā purākṛtaṃ A(ante corr.) D.
7a samupāviṣṭo] corr.: samupāviṣṭa A2 D.
7 note] From strophe 7 to strophe 34, A is replaced by A2, which is written on new papers. It means that the most reliable A cannot be used here.
9d yayuḥ] A2: yayau D.
10b unmadāḥ] corr.: unmadā A2: unmudāḥ D.
11b *aśvino 'paro] ex conī: aśvināparo A2 D.
11c *taceṣṭa°] ex conī: *tāceṣṭa° A2: vāceṣṭa° D.
11d *tapasvinaḥ] ex conī: tapasvināṃ A2: tapasvinīm D.
12c *saṃdyotayāṃ] ex conī (cf. Bc 7.8): saṃpātayāṃ A2: saṃghātayāṃ D.
14d *samākīrṇitaṃ āśramaṃ] ex conī: samākīrṇaṃ tavaśramaṃ A2: samākīrṇatavāśramaṃ D.
15a *tapasvino] corr.: tapasvināṃ A2: tapaśvināṃ D.
15c vijijñāsuḥ] A2: vijijñāsu D.
15d *kaṃcid] ex conī: kecid A2 D.
16b °vidhiṃ] D: °vidhi A2.
17d vāñchine] A2: vāñchime D.
18a salile] corr.: salilaṃ A2 D. (Cf. Bc 7.14 salile)
19d iva mārutena] A2 D. (Cf. Bc 7.15 vanamārutena)
20a asmatpra°] sic A2 D. (Cf. Bc 7.16 aśmapra°)
20a °vṛttayo 'nye] corr.: °vṛttamānye A2 D. (Cf. Bc 7.16 °vṛttayo 'nye)
20b °pahatānna] corr.: °pahatānta° A2 D. (Cf. Bc 7.16 °pahatānna°)
20c śrapaṇaṃ] corr.: śravaṇaṃ A2 D. (Cf. Bc 7.16 śrapaṇaṃ)
20d śeṣaṃ asti] corr.: śeṣayasti A2 D. (Cf. Bc 7.16 śeṣaṃ asti)
21a jalaklinnajaṭā°] D: jalatkintataṭā° A2. (Cf. Bc 7.17 jalaklinnajaṭā°)
21b dvipāvakaṃ] D A2. (Cf. Bc 7.17 dviḥ pāvakaṃ)
21b juhvati] D: jahvati A2. (Cf. Bc 7.17 juhvati)
21d kūrmoḥlikhitaiḥ] corr.: kūrmoḥlikhitaiḥ D: kūrmoṣṭikhite A2. (Cf. Bc 7.17 kūrmoḥlikhitaiḥ)
22b pare divaṃ yānty apare] D. (Cf. Bc 7.18 parair divaṃ yānty aparair)
22c kṣipanti] D: kṣiyaṃti A2. (Cf. Bc 7.18 hy upaiti)
22d dukhaṃ] D A2. (Cf. Bc 7.18 sukhaṃ)

22 note] A2 contains so many errors that from this strophe onwards I should present only the readings of D. It would be useless to list all the different incorrect readings of A2.

23a dvipadendra°] corr.: dviparendra D. (Cf. Bc 7.19 dvipadendra°)

23b vacas] corr.: caras D. (Cf. Bc 7.19 vacas)

23c °tattvo 'pi] corr.: °tatpāpi D. (Cf. Bc 7.19 °tattvo 'pi)

23d jagāda] D. (Cf. Bc 7.19 babhāṣe; Cowell jagāda)

24d svalpe śramah] corr.: svalpaśrama D. (Cf. Bc 7.20 svalpe śramah)

25a śriyaṃ] D. (Cf. Bc 7.21 priyāṃś; Cowell śriyaṃ)

25a viṣayāṃś] corr.: viṣayās D. (Cf. Bc 7.21 viṣayāṃś)

25c ye vipramuktāḥ] D. (Cf. Bc 7.21 te viprayuktāḥ)

26a tapovidhānaiḥ] D. (Cf. Bc 7.22 tapo'bhidhānaiḥ)

26c aparīkṣamāṇo] corr.: aparīkṣamāṇā D. (Cf. Bc 7.22 aparīkṣamāṇo)

26d so 'nvicchati] corr.: sānvicchati D. (Cf. Bc 7.22 so 'nvicchati)

27a trāsaś] corr.: trāśaś D. (Cf. Bc 7.23 trāsaś)

27b punaḥpra°] corr.: puraḥpra° D. (Cf. Bc 7.23 punaḥpra°)

27c satyāṃ] corr.: satyā D. (Cf. Bc 7.23 satyaṃ)

27d sītāḥ] D. (Cf. Bc 7.23 bhītāḥ)

28b anye] corr.: anya D. (Cf. Bc 7.24 anye)

28c āśākṛpaṇo] corr.: āṇākṛpaṇo D. (Cf. Bc 7.24 āśākṛpaṇo)

30a dharmah] corr.: dharma D. (Cf. Bc 7.26 dharmah)

30c sukhaṃ tad asmāt] D. (Cf. Bc 7.26 sukhaṃ paratra)

31b vāpi nivartate vā] D. (Cf. Bc 7.27 cāpi nivartate ca; Cowell vāpi nivartate vā)

32b bāhyāḥ puruṣāḥ] corr.: bāhyā puruṣā D. (Cf. Bc 7.28 bāhyāḥ puruṣāḥ)

33d duḥkhe] corr.: duḥkha D. (Cf. Bc 7.29 duḥkhe)

34d tathaiveha] D. (Cf. Bc 7.30 tathaiva ye)

34 note] From pāda b of this verse we can again use the reliable A manuscript. Therefore from this verse onwards I read only A.

36c havirdhū°] corr.: havidhū°] A. (Cf. Bc 7.32 havirdhū°)

37b janābhikīrṇam] A. (Cf. Bc 7.33 °janāvakīrṇam)

39d °yāntam] corr.: °yātaṃ A. (Cf. Bc 7.35 °yāntam)

40d mārgavṛkṣe] A. (Cf. Bc 7.40 vṛkṣamūle; Cowell mārgavṛkṣe)

41d giram] corr.: girim A. (Cf. Bc 7.37 giram)

44b sopāna°] corr.: saupāna° A. (Cf. Bc 7.40 sopāna°)

44d nṛparśibhiś] A. (Cf. Bc 7.40 maharśibhiś)

45b dik sevituṃ] corr.: dik saṃsevitum A. (Cf. Bc 7.41 dik sevituṃ)

49d parātmajanitaś ca mārgaḥ] A. (Cf. Bc 7.45 parā me janitaś ca mānaḥ; Cowell parātmajanitaś ca mārgaḥ)

50d viṣpanditā] corr.: viṣpanditā A.

- 54c sudhīrasya] A. (Cf. Bc 7.50 kumārasya)
- 57b yiyāsanti] corr.: yiyāsyanti A. (Cf. Bc 7.53 yiyāsanti)
- 59c tavaiṣā] A. (Cf. Bc 7.55 tathaiṣā; Cowell tavaiṣā)
- 60b °daṃṣṭram] corr.: °draṣṭram A D.
- 63b munibuddhimān] A: munivṛddhimān D.
- 66d samācare] A: samācara D.
- 67b niḥspr̥ho] corr.: nispr̥ho A.
- 75d evaṃ samabravīt] A(post corr. marg.) D: evam abravīt A(ante corr.).
- 87c taṃ praṇatvā sa] A(post corr. marg.) B D: suprasannātmā A(ante corr.).
- 88d samīhitam] A: samīhite B D.
- 98b padmākhyā] A: padamākhyā B: tamām̐khyā D.
- 98c samupāsṛtya] A B: samupāsṛitya D.
- 98d sampaśyanty] A: sampaśyann B D.
- 100d upācarat] A B: upāviśat D.
- 108b tataḥ] corr.: tataṃ A: yataṃ B D.
- 109b °niḥspr̥haḥ] corr.: °nispr̥haḥ A.
- 114c samāśṛtya] A B: samāśṛitya D.
- 114d vanāśrame vrataṃ cara] A: vanāśramacara B: vanāśrame samācara D.
- 116b kulavratam] A: kule vrataṃ D.
- 117b °niḥspr̥haḥ] corr.: °nispr̥haḥ A.
- 118a mātāḥ] A: bhogaṃ D.
- 124c samāgatya] A: samāgamya B D.
- 130d raivato carat] A: naivātācarat B: naivam ācarat D.
- 133c deśa etat] A: deśe etan B: deśe etat D.
- 134b niśamya] A D: miśamya B.
- 137b °niḥspr̥haḥ] corr.: °nispr̥haḥ A.
- 141a °samīcchā] A: °samīkṣā B D.
- 142c samrāṇmāhe°] corr. (or samrāḍmāhe°): samrāgmāhe° A B D.
- 148d svecchayāpathe] ≡ svecchayā 'pathe A B D.
- 154c niḥśaṅkaḥ] A: niḥśakaḥ B: niḥkleśaḥ D.
- 155d °dehāti°] A: tehoti° B: sahoti° D.
- 158d bhuñjāno] corr.: bhuñjānā B: bhuñjānā A D.
- 170d devendraśṛisukhāny] A: devendradevalokasukhāny B D.
- 180b *datṛima°] ex conī: datṛma° A: dṛṣṭvā sa D: - (missing letters) B.
- 184d °niḥspr̥haḥ] corr.: °nispr̥haḥ A.
- 185a °duḥkhābhiśamīkartuṃ] A: °duḥkhā hi samākartuṃ B: °duḥkhā hi samīkartuṃ D.
- 187a arhan] corr.: arhaṃ A.
- 201d samāpnuyāḥ] A: samāpnuyāt B D.

207c ihāpi] A: ihopi B D.

215ab *pūrvaśrutaṃ taṃ sāmpratāṃ gaditaṃ mayā] ex conī: iti me [pūrvavṛttāntāṃ sāmpratāṃ gaditaṃ mayā] A; iti me pūrvavṛttāntāṃ tadyathā sāmpratāṃ yayā B D. — In A, letters of pūrvavṛttāntāṃ sāmpratāṃ gaditaṃ mayā are newly overwritten letters by the hand of a person other than the original scribe of A.

217b śrutvā*śoko *bhūpo] ex conī: śrutvānando yatir A B: śrutvānunandati D.

(Colophon:) iti maharṣi°] A: iti śrīlālitavistare maharṣi° A(marg.) B D || trayaviṃśatitamo] A: trayaviṃśatitamo B: caikaviṃśatitamo D.

『大仙たちの苦行の誓戒を観る』という第23章

大士アショーカは {或いは：阿難は}、合掌してそばに赴き、世尊・尊師に拝礼して、見つめながらこのように言った。(23.1)

「尊師よ、かの大士(釈尊)は自ら出家した後、森のどこの隠棲処へ行き、どのような苦行誓戒を行じられたのでしょうか。(23.2)

かの生類の師がかつてなされた、悟りの智慧の成就法としての苦行誓戒についてお示しになり、私たちすべてによく理解させて下さい。」(23.3)

彼にそう請われて、大慧者たる阿羅漢、出家行者ウパグプタは {或いは：釈尊は}、かのアショーカを {或いは：阿難を} 見つめてこのように説いた。(23.4)

「よろしい、大士よ、よく聞きなさい。私が師から聞いた通りに {或いは：私がかつてなした行為をその通りに}、あらゆる人によく理解させるために、あなたに語りましょう。—— (23.5)

その後、かの菩薩、サルヴァールタシッダは輝きながら出発し、大仙人ヴァシシュタの隠棲処に至った。(23.6)

其処で彼が坐っている姿は、出家行者としても美しく立派に見え、すべての仙人たちの目を奪った。(23.7)

農作業をしていた者たちは皆、そのやってきた出家行者を見て、内心非常に大きな驚きをもち、彼を見つめて立ち尽くした。(23.8)

また果物や根、薪や花、浄化のクシャ草を運んで森から戻ってきた者たちも、やってきた彼を見て驚きに包まれた。(23.9)

孔雀たちも彼を見て、興奮してケーカーと声を発し、鹿たちも彼を見つめて、顔を向けたまま嬉しげに立っていた。牝牛たちも彼を眺めて、自発的に乳を流した。(23.10)

苦行者たちは彼の所作を眺めると、「この者は、ヴァス神群の第八神か、アシュヴィン双神の片方か」と、そう [驚きの] 声を発した。(23.11)

このようにしてすべての人を驚かせながら苦行林に入った彼は、まるで昇った太陽のように、その所のすべてを照らした。(23.12)

其処で彼ら仙人（リシ）たちや婆羅門たちに招かれ、敬意を示された彼は、法を保持している者たちの活動を見たいと欲した。(23.13)

その後かの大士は功德を求める人々であふれている隠棲処（アーシュラマ）を歩き回って、苦行の種々性を観察した。(23.13)

その場で苦行者たちの様々な形の苦行誓戒を見ながら、真実を見て知りたいと思った彼は、ある人にこのように尋ねた。(23.15)

「親しき友よ、私はこれらの苦行法と、その果報を知りません。それらの内容すべてを、私に語っていただけませんか。」(23.16)

それを聞くと、最高のバラモンたる彼は、正法を求める彼に対して、順々に苦行のしかたと果報を語った。(23.17)

Buddhacarita 7.14 の逐語的借用	(23.18)
Buddhacarita 7.15 の逐語的借用	(23.19)
Buddhacarita 7.16 の逐語的借用	(23.20)
Buddhacarita 7.17 の逐語的借用	(23.21)
Buddhacarita 7.18 の逐語的借用	(23.22)
Buddhacarita 7.19 の逐語的借用	(23.23)
Buddhacarita 7.20 の逐語的借用	(23.24)
Buddhacarita 7.21 の逐語的借用	(23.25)
Buddhacarita 7.22 の逐語的借用	(23.26)
Buddhacarita 7.23 の逐語的借用	(23.27)
Buddhacarita 7.24 の逐語的借用	(23.28)
Buddhacarita 7.25 の逐語的借用	(23.29)
Buddhacarita 7.26 の逐語的借用	(23.30)
Buddhacarita 7.27 の逐語的借用	(23.31)
Buddhacarita 7.28 の逐語的借用	(23.32)
Buddhacarita 7.29 の逐語的借用	(23.33)
Buddhacarita 7.30 の逐語的借用	(23.34)
Buddhacarita 7.31 の逐語的借用	(23.35)
Buddhacarita 7.32 の逐語的借用	(23.36)
Buddhacarita 7.33 の逐語的借用	(23.37)
Buddhacarita 7.34 の逐語的借用	(23.38)
Buddhacarita 7.35 の逐語的借用	(23.39)
Buddhacarita 7.36 の逐語的借用	(23.40)
Buddhacarita 7.37 の逐語的借用	(23.41)
Buddhacarita 7.38 の逐語的借用	(23.42)
Buddhacarita 7.39 の逐語的借用	(23.43)
Buddhacarita 7.40 の逐語的借用	(23.44)

Buddhacarita 7.41 の逐語的借用	(23.45)
Buddhacarita 7.42 の逐語的借用	(23.46)
Buddhacarita 7.43 の逐語的借用	(23.47)
Buddhacarita 7.44 の逐語的借用	(23.48)
Buddhacarita 7.45 の逐語的借用	(23.49)
Buddhacarita 7.46 の逐語的借用	(23.50)
Buddhacarita 7.47 の逐語的借用	(23.51)
Buddhacarita 7.48 の逐語的借用	(23.52)
Buddhacarita 7.49 の逐語的借用	(23.53)
Buddhacarita 7.50 の逐語的借用	(23.54)
Buddhacarita 7.51 の逐語的借用	(23.55)
Buddhacarita 7.52 の逐語的借用	(23.56)
Buddhacarita 7.53 の逐語的借用	(23.57)
Buddhacarita 7.54 の逐語的借用	(23.58)
Buddhacarita 7.55 の逐語的借用	(23.59)
Buddhacarita 7.56 の逐語的借用	(23.60)
Buddhacarita 7.57 の逐語的借用	(23.61)
Buddhacarita 7.58 の逐語的借用	(23.62)

その後聖者の智を有するヴァシシュタ仙は、〔苦行林を〕立ち去った彼に近づくと、呼び招いて、見つめながら尋ねた。(23.63)

「めでたい月のような〔輝かしい〕姿をしたあなたは、神ですか、それとも人間でしょうか。いかなるわけでお若いあなたはこの苦行林にやって来られたのですか。」(23.64)

そう、その仙人に尋ねられると、菩薩は彼を見つめ、自己知を有する牟尼ヴァシシュタをまっすぐ見て、こう言いました。(23.65)

「王の息子としてイクシュヴァークの家系に生まれたシュッドーダナがおりますが、その王の息子である私は、王権を捨てて、ここに参りました。(23.66)

生類が煩惱の火によって焼かれているのを見て、私は輪廻的生存を厭うに至りました。それ故、五官の快樂の対象をすべて捨てて、解脱のために〔世俗を〕出離しました。(23.67)

苦ある誕生・病・老いなどによって冒されず、常に幸せと安楽と活力のある、その境地を求めてやって来ました。」(23.68)

彼が言ったことを聞いて、ヴァシシュタは驚き、再びその大士を見つめてこう言いました。(23.69)

「善き人よ、王中の王であるシュッドーダナがあなたの父であるのに、なぜあなたは王国を捨てて、ここへ来られたのですか。(23.70)

若い間はあなたは王となって正法によって民を守り、自と他に益をなし、安樂に暮らしなさい。今は帰りなさい。(23.71)

老いに冒され、あなたの身体が力を失った時、王位や身体的快樂の対象すべてを捨て、ここへ来なさい。(23.72)

専心して清浄な戒を守り、随意に苦行誓戒を守り、禪定の安樂を味わい、常に快適に過ごしなさい。(23.73)

その功德の異熟によって、清浄な三輪（身口意）をもち、煩惱なく、清らかな心のあなたは、ブラフマー神たちの世界（梵天界）に到達するでしょう。」(23.74)

そう、その仙人が述べたことを聞くと、かの大慧者たる菩薩は、再びヴァシシュタに次のように言いました。(23.75)

「大仙よ、私はブラフマー神たちの世界であっても行くことを望みません。むしろ、正しい誓戒を堅持し、マーラ（魔）の群に打ち勝ち、菩提の智慧を得て、正法を明らかに示し、(23.76)

一切世界の上に法という甘露を雨降らせ、世の生類を善法から成る者に変えてから、涅槃を得たいと願っています。(23.77)

それ故に、大仙よ、私はあらゆる所有物を捨て、菩提行の誓戒を堅持し、菩提を得るために、ここに来たのです。(23.78)

大仙よ、もしあなたに最高の悟りの智慧があるのでしたら、それを私に教示して、与えて下さい。それによって私は世の生類に益したいのです。」(23.79)

そう彼が語ったことを聞くと、牟尼の最高者であるヴァシシュタは菩薩をみつめ、驚愕してこのように言った。(23.80)

「善き人よ、われわれの中には菩提行の誓戒はどこにも存在しないのです。それ故、もしあなたが望むなら、他のすべての禁戒を与えましょう。」(23.81)

そう、その仙人が言ったことを聞き、大慧者たる菩薩・大士は深思して、次のように考えた。(23.82)

「もしここに菩提行の誓戒がどこにも無いなら、世の生類の益にならない彼らの苦行の功德に何の意味があるのだろうか。(23.83)

菩提が存在しない場所であるこの地に留まって、私は何をなすというのか。菩提のために王国を捨て、世の生類の益のために私は出家したのだ。」(23.84)

このように深思すると、善慧者たる大士・菩薩は、その牟尼の王ヴァシシュタに別れを告げ、こう言いました。(23.85)

「大仙よ、世の生類の益のために菩提を得るべく、私は旅立ちます。あなたもまた、常に生類に恵みをなしつつ、お過ごし下さい。」(23.86)

菩薩がそう言うと、牟尼の最高者であるヴァシシュタは、「そうしなさい」と答えて彼に拝礼し、自分の隠棲処に戻りゆき、(23.87)

「すぐに行きなさい。あなたの望みが成就しますように。常にあなたに幸いがありますように。至る所で勝利と達成があり、望みが叶いますように。」(23.88)

そう言って、ヴァシシュタはとても澄んだ心で、菩提を達成しようとする彼のために吉祥の祝福を与えると、自分の隠棲処の中に入った。(23.89)

その後、かの菩薩は輝きを放ちながら出発し、ほかのあらゆる苦行者たちを見るため、別の土地に近づいていった。(23.90)

シャクティという名のバラモン女は、彼がやってくるのを眺め、すぐに嬉しく歩み寄って、彼を見つめながら、こう言った。(23.91)

「あなたはようこそいらっしゃいました、大きな天恵の方よ。私の家にいらして下さい。今夜はここに泊まって、明日の朝、随意に旅立たれて下さい。」(23.92)

彼女が言ったことを聞くと、かの菩薩は「そうしましょう」と答え、納得して彼女と共にその隠棲処に入りました。(23.93)

その木葉で作った菴で、そのバラモン女シャクティは丁重に菩薩を招いて草の座に坐らせました。(23.94)

そこに彼が坐ったのを見て、そのバラモン女は嬉しく五種の甘露（乳・醃酵乳・バター・蜜・砂糖）を含む食べ物をもってねんごろにもてなし、満足させました。(23.95)

その後夜になると、清らかな心を持つ彼は草の寝床に身を置き、過去の諸仏を憶念しながら、禅定に集中して過ごしました。(23.96)

そして明け方に立ち上がり、菩薩は輝きを放ちながら、ほかの場所に隠棲処をもつ行者たちの苦行の法式を見るため、嬉しく歩いてゆきました。(23.97)

彼がやってくるのを嬉しく眺めて、パドマーという名のバラモン女はすぐに歩み寄り、彼を見つめてこう言いました。(23.98)

「ようこそいらっしゃいました、大きな天恵の方。私の庵にいらして下さい。今夜はここに泊まって、明日の朝、随意に旅立たれて下さい。」(23.99)

彼女の言葉を聞くと、かの菩薩は「そうしましょう」と答え、納得し、明るく澄み切った心でその時、隠棲処に向かいました。(23.100)

その木葉で作った菴で、そのバラモン女パドマーは丁重に菩薩を招くと、草の座に坐らせました。(23.101)

そこに彼が坐ったのを嬉しく見て、そのバラモン女は五種の甘露を含む美味の食べ物をもって彼を満足させました。(23.102)

その後、彼が食事で十分に満足したのを見て、そのバラモン女は彼の前に進み出て、丁重にこのように尋ねました。(23.103)

「善き人よ、あなたは誰の息子なのでしょうか。また、いかなる目的でここへいらしたのですか。その本当のことを語って、私にわからせて下さい。」(23.104)

彼女にそう請われて、善慧者たる菩薩は、そのバラモン女パドマーを見つめ、理解させるために教えました。(23.105)

「釈迦族に生まれた人としてシュッドーダナ王がいますが、その彼の息子が私です。私は王国とすべての所有物を捨て、(23.106)

すべての衆生に益するため、菩提の智慧を欲している私は、仙人たちの禁戒を見るために、嬉しくここに歩いて参りました。」(23.107)

そう彼が語ったのを聞くと、そのバラモン女は菩薩を見つめ、驚愕して次のように言いました。(23.108)

「大きな天恵の人よ、あなたは若いのに、輪廻界での享樂を欲しないのですね。どうして王位を捨てて、この苦行林にやってこられたのですか。(23.109)

「行者たちは」誰もが王位を欲して、苦行林で修行しているのです。しかしあなたは王位を捨てて苦行をしようとしている。(23.110)

或る有徳の老王たちは、年老いて、輪廻界で享樂する欲望をなくし、自分の息子に即位の儀礼を行って、王位に就かせた後で、(23.111)

王位での生活を捨てて、人生の四目的（法・愛・財・解脱）を求める彼らは、林棲期に入り、苦行誓戒を行います。(23.112)

そのことをお考えになって、若いうちは王位での生活に留まり、妃と愛し合って、家系の世襲の仕事の誓戒を果たしなさい。(23.113)

体が老いに充ちたとき、息子を王位に就かせ、森林の住期に入って誓戒を行じなさい。(23.114)

こうすれば、あなたにはきっと常にあらゆる場所で、めでたい幸せがあるでしょう。この世で正法の安樂を享受し、来世では天界へ行くことでしょう。(23.115)

そのことをお考えになって、王位での生活に再び留まり、人民を護りながら、両親や妻と一緒にあなたの一族の誓戒を果たしなさい。」(23.116)

彼女が述べたことを聞き、輪廻的生存を欲しない菩薩は、そのパドマーを見つめながら、こう言いました。(23.117)

「母御よ、私は天界の神の幸せさえも望んではいません。むしろ菩提を得て、世の生類に益をもたらしたいのです。(23.118)

その目的のため、私は大きな王権の幸せも捨てて、仙人たちの卓越した誓戒の行を見るために、ここに來たのです。(23.119)

さらにまた、すべての生き物にとって死は常に目の前にあります。そのことを見ると私は戦慄し、涅槃を得たいと望むのです。」(23.120)

彼が語ったことを聞いて、パドマーは目に涙を浮かべ、その菩薩を見つめて再びこう言いました。(23.121)

「善き人よ、もし世の生類の益のために悟りを望むなら、あなたの心の願いが成就しますように。常に至福に恵まれますように。(23.122)

仏教徒のアーシュラム（住処）のあるあの地に行き、三宝に帰依し、菩提行の誓戒を堅持し、心を集中させて行をなしなさい。(23.123)

菩提に達して仏の位を得た時には、どうかここにも來られて、法をお説き下さい。」(23.124)

彼女が語ったことを聞き、菩薩は「そういたします」と約束し、満足した彼は別の場所へ行くために出発した。(23.125)

その後、別の土地で隱棲処に住むライヴァタという大仙人が、遠くから彼がやってくるのを見て、このように考えた。(23.126)

「こちらにやってくる、インドラ神のように光り輝いているあの者は何者だろう。太陽神か、あるいは月神か。ブラフマー神か、あるいはシヴァ神か。(23.127)

ヴィシュヌ神か、火神か、ヤマ（閻魔）か。あるいは羅刹ナイルリタか、ヴァルナ神か。あるいは風神か、葉叉の王（クベーラ）か。あるいはブータの王か、キンナラか。(23.128)

あるいはガンダルヴァか、グヒヤカの王か。あるいはシツダか、大神通の者か。あるいはサーディヤか、ヴァス神か。あるいはヴィディヤダラか、ダーナヴァ（阿修羅）か。あるいは龍王か、ガルダか、あるいはそれ以外の大神通力をもつ者か。(23.129)

一体、この地で光り輝きながら私の隠棲処にやってくるこの者は誰なのか。」—— こうあれこれ考えながら、ライヴァタは見つめて、歩き出した。(23.130)

そこにやってきたその菩薩に、そのライヴァタ仙人は歩み寄って見つめ、嬉しく招いて、こう語った。(23.131)

「なぜ、神々しくとても美しい若者であるあなたが、ここへいらしたのですか。あなたはどのようにして五官の快樂の対象や所有物を捨てて、出家したのですか。(23.132)

あなたの母君はどなたで、父君はどなたですか。また妻としておられるのはどなたですか。誰の国と領地におられるのですか。その本当のことを教えてください。」(23.133)

その仙人がそう尋ねるのを聞いて、菩薩はその大通慧者ライヴァタを見つめてこう言いました。(23.134)

「栄光ある国土の主、シュッドーダナ王が私の父です。王妃たる母はマーヤーという名、妻はヤショーダラーという名です。(23.135)

その都は大地〔という女神〕の額飾のごとき様相を示し、めでたい幸せと光輝と善き徳性の依拠する地です。そこから私は出家し、ここでの苦行を見るために嬉しく歩いて来ました。(23.136)

生類が煩惱の火に焼かれているのを見て、輪廻界を欲せず、菩提行の誓戒を堅持して、一切衆生への益という目的を担い、(23.137)

すべての魔の群を打ち破り、至高の悟りを得て、生類を善法から成る者に変えてから、涅槃に到りたいと欲しています。(23.138)

その目的のため、私は五官の快樂の対象とすべての所有物を捨て、出家の禁戒を持ち、菩提を得るためにここにやって来ました。」(23.139)

そう彼が語ったことを聞いて、自己知をもつ牟尼ライヴァタは、菩薩・大士を見つめてこのように言いました。(23.140)

「善き人よ、あなたの願いは立派なものです。しかし、私の言葉を聞きなさい。あなたの益のために語ることを、あなたは心にしっかり置くべきです。(23.141)

王の息子であり、神々しいとても美しい若者であるあなたは、大王・大権力者の富財と安樂を捨てて、出家されたのですね。(23.142)

しかしあなたはいかにしてマーラ（魔）を打ち破り、煩惱を離れ、悟りを得られますか。悟りに達することが出来なければ、あなたはどのようにして仏の位を得るでしょうか。(23.143)

仏の位を得られないなら、どうやって世の生類に益することが出来るでしょうか。生類を幸せに出来ないなら、善き涅槃へ至ろうと、それが何になるでしょう。(23.144)

そのように考えて、大きな天恵の人よ、菩提への熱望を捨て、輪廻にある幸福を享受する目的のために、苦行誓戒を行じなさい。(23.145)

マーラは打ち勝つのが難しく、神々でさえ勝つことが出来ません。人間であり若者であるあなたが、どうして彼に勝つことが出来ましょうか。(23.146)

あらゆる護世王の神たちですらもマーラの支配力の下にあります。一人の若い人間であるあなたが、どうやって彼の支配下にあって行動できるでしょうか。(23.147)

すべての仙人たちの師であるブラフマー神も、マーラの支配力の下にいて、煩惱の火に焼かれた心を持ち、おのが願望に従い、正道に反する道を歩んでいます。(23.148)

同じ様に、心堅固な大仙人たちでさえ、煩惱の火に焼かれ、マーラの支配下に陥って墮落し、多くが輪廻的生存の中を彷徨っています。(23.149)

それ故、若くて美しい、転輪王の息子であるあなたが、どうして輪廻界の悦楽を味わうことを捨てて、苦行をなしうるでしょうか。(23.150)

きっとあの愛欲の神（マーラ）は、青春の盛りのあなたを見て、すぐに花の矢で射て、愛する女の支配下へと投げ入れるでしょう。(23.151)

その時、美しい艶やかな女たちが懸命にあなたを支配下に置き、欲望の享楽を共になすことにより、あなたを望むとおりに楽しませるでしょう。(23.152)

その後、愛欲の快楽に耽り、愛情の縄に縛られ、女たちを生きる依り処として、あなたは欲するがままに生きることでしょう。(23.153)

その後、傲慢と自惚れによって盲目となり、心は煩惱の火に焼かれ、禁じられた人たちのもとでも欲望を娛しみ、飲んで過ごすでしょう。(23.154)

そのことの罪に心が汚され、愛欲の火で焼かれた感官をもち、耐え難い痛みに襲われた身体の激しい苦しみに悩まされ、(23.155)

そのようにして長い間患い、激しい苦痛の炎で諸根を焼かれて、やっとのことで肉体を捨て、ヤマの住まい（冥府）へ行くことでしょう。(23.156)

其処であなたは、恐ろしいヤマの使卒たちに捕らえられ、阿鼻地獄に投げ込まれ、自分が作った業を味わいながら住むことになります。(23.157)

久しい時が経って、そこから脱しても、別のあらゆる諸地獄の中を彷徨いながら、自らの行為の報いを享受しながら打ち叩かれて、住むことになります。そして久しい時の後に、あなたはその苦しみから心が解き放たれ、清浄な心をもつでしょう。(23.158)

このように考える時、大きな天恵の人よ、若いうちは王である生活期にとどまり、乞い求める者たちには望みに従って施しを与え、誓戒を行いなさい。(23.159)

専心して清らかな戒をもち、四梵住（慈悲喜捨）を修し、正法によって民を統治し、家系の世襲の仕事の誓戒を実行しなさい。(23.160)

この功德によって清められた心をもつあなたは、この世でいつも正しい快樂を享受し、生が終わってから神々とともに天界で天上の快樂を享けて楽しみなさい。(23.161)

そしてもし、あなたに解脱への望みがあるなら、老衰によって諸感官が害された時に、王位での生活を捨てて、林住での生活期に入り、(23.162)

諸感官を統御し、三昧に心を置き、牟尼の行の誓戒を堅持して、心を集中させて過ごしなさい。(23.163)

その功德によって清められた心をもつあなたは、煩惱を離れ、無垢の感官をもち、常に瞑想の安樂を享受して、生が終わってから梵天の神々の住まい（梵天界）へ赴くことでしょう。(23.164)

このように考えて、あなたは若いうちは一族の誓戒を行い、年老いてからは牟尼の誓戒を堅持し、苦行林で過ごしなさい。(23.165)

そうするなら、あなたにはいつも、至る所でめでたい幸せの安樂があることでしょう。生の最後には涅槃を得て、スヴァヤンブー神（「自己発生者」たる大梵天）の位に達するでしょう。」(23.166)

このようにその仙人が説いたことを聞くと、悟りを求める心を持つ菩薩・大士は、その仙人にこう言いました。(23.167)

「大仙人よ、私の心は欲望を離れ、輪廻界の快樂を望みません。それ故、マーラの居場所（快樂）を捨てて、菩提行の誓戒を行じています。」(23.168)

私は、あらゆる王中の王である転輪王の栄光も捨てて、世の生類を幸せにするために諸仏の誓戒を行じています。(23.169)

私は天界における神々の王（インドラ）の安樂すら望みません。また梵天たちの世界におけるスヴァヤンブー（大梵天）の大きな安樂をも望みません。(23.170)

感官を制御した菩薩を、マーラ（魔）たちが打ち負かすことは出来ません。菩薩はマーラたちに打ち勝ち、世の生類の益のために行動します。(23.171)

こうして私は悟りに必要な資糧を順次に満たしてきて、今や、菩薩として世の生類を幸せにすることを欲します。(23.172)

それ故、菩提を得て正法を宣揚し、世の生類を善法から成る者に変えた後、涅槃に入ることを私は望んでいます。(23.173)

この目的のため、私は転輪王の栄光を捨て、菩提を得るため、あなた方の教法を見ようとしてここへやって来たのです。」(23.174)

そう彼が語ったのを聞いて、かの牟尼ライヴァタは驚愕し、その大士を見つめてこのように言った。(23.175)

「常に恵みあるお方だ、大士・菩薩であるあなたは、世の生類の益のため、マーラたちに打ち勝ってまでも、あなたは菩提を得ようことを望んでおられる。(23.176)

幸ある人よ、さあ行きなさい。専心して諸仏の行の誓戒を行いなさい。あなたに常に幸いあらんことを。望みが成就しますように。」(23.177)

このようにめでたい祝福を与え、またふさわしい食事をもって彼を供養して満足させると、ライヴァタは明るく澄み切った心で自らの隠棲処へ帰っていった。(23.178)

その後、その菩薩もまた、至る所でめでたい幸をもたらし、満月の如くに輝き照らしながら、ほかの場所へと進んでいった。(23.179)

ダットリマ・ダンディカの息子たるラージュヤカという最高の牟尼が、その土地にやってきた彼を、遠くから見つめた。(23.180)

彼が近づいてくるのを見て、ラージュヤカ仙は立ち上がり、すぐに歩み寄ると、彼を見つめてこのように言った。(23.181)

「ようこそいらっしゃった、大きな天恵の人よ。あなたはどなたですか。どこからここにいらしたのですか。神々しいとても美しい若者であるあなたは どうして森へと出家したのですか。」(23.182)

このようにその仙人に尋ねられ、菩薩は彼を見つめ、ラージュヤカに近づいて、正視しつつこのように述べた。(23.183)

「大仙よ、私はシュッドーダナ王の息子です。世の生類が煩惱の火に焼かれているのを見て、輪廻を厭うに至りました。(23.184)

彼らの苦しみを鎮めるために、私は王権も所有物も捨てて自ら出家し、菩提行の誓戒を行じています。(23.185)

私は菩提の智慧を得て、打ち負かし難いマーラたちに打ち勝ち、世の生類を善法から成る者にした後、涅槃を得たいと望んでいます。(23.186)

こう思って、阿羅漢よ、あなた方のここでの苦行のしかたを見るため、また正法の秀でた性質を理解するため、私はやってきました。」(23.187)

彼の言葉を聞いて、その仙人は「あなたは常に恵みあるお方だ、大慧者よ」と言って、彼を招いて、恭しく自らの隠棲処へと導いた。(23.188)

其処で座に坐らせて、その仙人は嬉しく彼を供養し、丁重に最上等の食事をもって満足させた。(23.189)

その後、夜のあいだ菩薩は草庵において草の座で禅定しつつ、諸仏を憶念し、悟りに心を向けて過ごした。(23.190)

そして明け方に立ち上がると、明るく澄み切った思考を持つ菩薩は、その大仙に別れを告げ、そこから輝きながら、歩いていった。(23.191)

歩いてゆくその大士・菩薩を見て、その徳性に愛著の心を生じたその仙人は、近づいて行って、このように言った。(23.192)

「私もあなたと一緒に〔菩薩行の〕誓戒を行じることを望みます。それ故、あなたは諸仏の法（善逝の教法）に私をお導き下さい。」(23.193)

彼がそのように求めるのを聞くと、菩薩はそのラージュヤカを見つめ、微笑んでこのように言った。(23.194)

「大仙よ、もしあなたが菩提達成のための誓戒をもたんと欲するなら、菩提への弘誓によってまず布施の誓戒を実行しなさい。(23.195)

その後、立派な知性と清らかな心をもつあなたは、持戒の行の誓戒を実行しなさい。その後、どの生類も平等とみなしつつ、忍辱の行の誓戒を実行しなさい。(23.196)

それから、世の生類に益をもたらす、精進の行の誓戒を実行しなさい。その後、諸煩惱を克服して、禅定の行の誓戒を実行しなさい。(23.197)

それから、正法を知る学問書の海において智慧という宝を蓄えなさい。それ（智慧）を用いて、衆生を益するという目的のために悟りを得ようと意欲しなさい。(23.198)

その後、マーラの軍勢に打ち勝ち、最高の悟りを得れば、世の生類を善法から成る者に変えた後、あなたは涅槃に至ることでしょう。(23.199)

大仙よ、このように考えて、菩提を達成する誓戒をもしあなたが望むのであれば、専心して衆生を益する誓戒を実行しなさい。(23.200)

三宝（仏法僧）をおのが帰依処となし、いつも尊崇供養をなし、絶えず念じなさい。その功德の力によって、菩提心が得られるでしょう。(23.201)

その後、善慧者で清らかな心をもつ菩薩として、世の生類の益のため、菩提行の誓戒を堅持し、絶えずこの輪廻的生存の中で行動するのです。」(23.202)

彼がそう教えたのを聞くと、自己知をもつその仙人は、「菩提を得るための誓願は〔私に〕なし難い行だ」と考えた。(23.203)

そこでその仙人は、菩薩を見つめて礼拝し合掌して、澄み切った心で正視し、このように言った。(23.204)

「気高い心の方よ、私には菩提を達成するための菩薩行の誓願をなすことは出来ません。それ故、その事をご有恕くださり、私に寛容であられて下さい。(23.205)

大士よ、菩提を達成せんとするあなたの誓願が成就しますように。どうかあなたは速やかに菩提へと到って下さい。三界の生類の益のために、成し遂げて下さい。(23.206)

どうか菩提の智慧を得て、正法をご顕示下さい。この地にも戻って来られて、教示して下さいませ。」(23.207)

こう彼が述べたことを聞いて、かの菩薩は「わかりました」と沈黙をもって同意を示し、聞きとどけると、そこから輝きながら歩み去った。(23.208)

その後、ほかの仙人たちの様々な行のやり方や誓戒を見るため、菩薩はその地にあるすべての隠棲処を巡り歩いた。(23.209)

同様に、やってきた彼を見ると、すべての大仙たちは、すぐに集まって挨拶し、供養してもてなし、満足させた。(23.210)

その後、菩薩は至る所で苦行誓戒を見学したが、どこにも菩提行の誓戒を見出すとはなかった。(23.211)

その後、菩薩は不満足な心でそこを出てゆきながら、一本の菩提樹を見つけて、そこに身を寄せてとどまろうと、嬉しく歩み寄った。(23.212)

其処で彼は、正しい悟りに心を定めて、すべての仏を念じ、瞑想して、心を統一してずっと留まった。(23.213)

その場所で瞑想しながら坐っている彼の満月の様に輝く姿を見て、すべての旅人たちは遠くからでも拝礼して、嬉しく通り過ぎた。(23.214)

— 以上、私が過去に聞いたことを、今私は語りました。 {或いは：以上、私の過去の出来事を、今私は語りました。} 大王よ、あなたもこれを聞いてあなたも随喜を得なさい。(23.215)

これを聴聞して随喜する者たちは皆、感官が清らかになり、めでたい幸せと光輝と善き徳性を具えた仏子となるであろう。(23.216)

以上の、阿羅漢が説いたことを聞き、アショーカ王 {或いは：比丘アーナンダ} はとして、「わかりました」と嬉しく答えて、実直な彼は大いに喜んだ。(23.217)

大仙たちの苦行の誓戒を觀る [という名の] 品、第23章 [終わる]。

5. Tathāgatajanmāvadānamālā 第24章の校訂

A 172b3 ; B 255b5 ; D 221a1

athāśoko mahīpālo {or: mahāsattvo} bhūya *upāsrito mudā /
bhagavantam yatim natvā sājñalir evam abravīt // 24.1
bhadantāsau mahāsattvas tataḥ kutra samācarat /
tad bhavān naḥ samākhyāya sambodhayitum arhati // 24.2
iti samprārthitam tena śrutvā so 'rhan mahāmatiḥ /
tam aśokaṁ sabhāṁ cāpi sampāśyann evam ādiśat // 24.3
śṛṇv aśoka tadā rājā kapilākhye pure muhuḥ /
śokapāvakadagdhāṅgo vilālāpa gatasmr̥tiḥ // 24.4 ≈ Bc 8.81
ity evam asti bhūmīndraḥ kumāradaśanotsukaḥ /
purohitam amātyaṁ ca babhāṣe 'nveśyatām iti // 24.5 ≈ Bc 8.86
tadānuśāsanam dhṛtvā rājño mantripurohitau /
gacchantau bhārgavasyarṣer āśramam samupeyatuḥ // 24.6 ≈ Bc 8.87,9.1,9.2
tatra tau samupāyātau samīkṣya bhārgavo mudā /
sahasā samupāmantrya tṛṇāsane nyaveśayat // 24.7 ≈ Bc 9.3
tatra tāv āsanāsīnau bhārgavo vanyavṛttibhiḥ /
phalamūlādibhir bhogyaiḥ pratipūjyābhyamodayat // 24.8
tatas tau bhārgavam natvā mantripurohitāv api /
purataḥ samupāśritya paśyantāv evam ūcatuḥ // 24.9 ≈ Bc 9.3
maharṣe nandanāḥ kāntaḥ śuddhodanasya bhūpateḥ /
jarāmṛtyubhayatrastaḥ saṁsārarati*niḥsprhaḥ /
viśayān parigrahān rājyaṁ tyaktvāśrame ihāgataḥ // 24.10 ≈ Bc 9.5
kutrasau bhagavan yāti tiṣṭhatīha ca vā kuha /

imam anveṣitum hy āvām sahaseha samāgatau // 24.11	≈ Bc 9.5
tad bhavān samupāhūya tam ātmajaṃ mahīpateḥ /	
sahasā purato 'smākaṃ saṃdarśayitum arhati // 24.12	
iti saṃprārthitaṃ tābhyāṃ śrutvā [173a] sa bhārgavo munīḥ /	
mantripurohitau tau saṃpaśyann evaṃ abhāṣata // 24.13	
āyāto 'tra mahātmā sa divyātisundaro yuvā /	
pravrajya saṃvaram dhṛtvā saṃcarate samāhitaḥ // 24.14	≈ Bc 9.6
ekarātrim uṣitvātra dṛṣṭvāsmākaṃ tapovratam /	
asaṃtuṣṭāśayo yātas tato 'mutra tapovane // 24.15	≈ Bc 9.6
iti tenarṣiṇākhyātaṃ śrutvā mantripurohitau /	
ubhau taṃ bhārgavaṃ natvā niśceratus tato drutam // 24.16	≈ Bc 9.7
tatra tau pathikān mārge dṛṣṭvāmantrya sametya tān /	
yuṣmābhir dṛśyate bhikṣur yuveti paryapṛcchatām // 24.17	
tac chrutvā te 'dhvagāḥ sarve sametya samupāśritāḥ /	
tau mantribhrāhmaṇau dṛṣṭvā praṇatvaivam abhyabruvan // 24.18	
dṛṣṭo 'smābhir yuvā kānto bhikṣur eko 'tisundaraḥ /	
amusminn āśrame bodhivṛkṣamūlasamāśritaḥ // 24.19	
iti taiḥ kathitaṃ śrutvā tau mantribrāhmaṇau mudā /	
sahasā tatrābhigacchantau dūratas tam apaśyatām // 24.20	≈ Bc 9.8
tau taṃ dṛṣṭvābhībhāśantaṃ saṃpūrṇendum ivotkare /	
sahasā saṃharṣitau tatra bodhivṛkṣe 'bhijagmatuḥ // 24.21	≈ Bc 9.9
tatra tau samupāyātau dṛṣṭvā sa yatīḥ sanmatīḥ /	
*āha hy atra *samāyātau sametaṃ sādhu tiṣṭhatam // 24.22	≈ Bc 9.10
kaccid vām kauśalaṃ *kāye nṛpasyāpi pitur mama /	
mātur yaśodharāyās ca sarvatrāpi subhadratā // 24.23	
iti tena sudhīreṇa pṛṣṭe mantripurohitau /	
ubhāv api tam ālokya praṇatvaivam abhāṣatām // 24.24	
kaccit te kauśalaṃ kāye kauśalaṃ nau bhavaty api /	
mātus te mahiṣyās ca pitū rājño 'pi sarvataḥ // 24.25	
iti nivedya kauśalyaṃ sarveṣām api tāv ubhau /	
mantripurohitau tasya samupāśritya tasthatuḥ // 24.26	
tatas taṃ vṛkṣamūlasthaṃ saumyendriyaṃ prabhāsvaram /	
mantripurohitāv evaṃ saṃpaśyantau babhāṣatuḥ // 24.27	≈ Bc 9.11
sādho āvām yadarthe 'tra samāyātau nigadya te /	
tac chrutvānumodanāṃ kṛtvā prasīdatu bhavān api // 24.28	≈ Bc 9.12
yat pitā bhavato rājā tvacchokāgnipratāpitaḥ /	
muhur vimohitātmā 'sau bhūmitale nipātitaḥ // 24.29	≈ Bc 9.13
tataś cirāt samutthāya [173b] tava guṇam anusmaran /	

galadaśrvabhiliptāsyas tvām praty evam abhāṣata // 24.30	≈ Bc 9.13
jānāmi te matiṃ dharmasattvahiṭārthasādhane /	
tvayy akāle vane yāte dahye 'śokāgninā tv aham // 24.31	≈ Bc 9.14
tad ehi sāmpratam gehe kuru dharmam kulocitam /	
tyaja buddhim imām vatsa hy akāle kiṃ vrataṃ vane // 24.32	≈ Bc 9.15
katham sthātum saher durge jantuduṣṭāsrapāśraye /	
śītavātātapāsāravidyutsampātabhīṣaṇe // 24.33	≈ Bc 9.16
tat tāvad yauvanād *bhuṅkṣva cakravartinṛpaśriyam /	
yadi dayāmatī te 'sti vṛddho vane vrataṃ cara // 24.34	≈ Bc 9.17
vana eva na siddho hi dharmo gehe 'pi siddhyate /	
svabhāvasuddhataḥ siddhyed vrataṃ kiṃ liṅge vane 'pi kim // 24.35	≈ Bc 9.18
parisuddhasvabhāvais tu rājyadharmāśritair api /	
gr̥hasthair api samprāpto mokṣadharmāḥ subuddhibhiḥ // 24.36	≈ Bc 9.19
aneke 'pi mahīpālā rājyadharmavratamcarāḥ /	
satyadharmaśamācārā gr̥hasthā api nirvṛtāḥ // 24.37	≈ Bc 9.20
tyam apy evam samāśritya rājyadharme samāhitaḥ /	
nṛpa*śrīṣu sukham bhuktvā prānte yāhi śivām gatim // 24.38	≈ Bc 9.21
icchāmi tvām mahāsattvam abhiṣiñcyā nṛpāsane /	
pratiṣṭhāpya mahināthaṃ kṛtvā dhātum vane vrataṃ // 24.39	≈ Bc 9.22
ity abravīd bhavantaṃ sa vākyena pṛthivīpatiḥ /	
tat priyārthaṃ pituḥ śrutvā bhavān vidhātum arhati // 24.40	≈ Bc 9.23
bhavacchokāgnisamtaptaḥ pitā sa pṛthivīpatiḥ /	
agādhe sudhṛtātmāpi duḥkharṇave nimajjati // 24.41	≈ Bc 9.24
tad bhavān sahasā gatvā samuttārya svayaṃ gurum /	
bhadrasthāne samāśvāsya samsthāpayitum arhati // 24.42	≈ Bc 9.24
yathā bhūpātmañaiḥ sarvaiḥ kṛtaṃ karma pituḥ priyam /	
bhavān api tathā kartum arhatīṣṭaṃ mahāmate // 24.43	
tvacchokāgnitaptāṅgīm mātaraṃ dṛksudhāmśubhiḥ /	
amṛtair api samsiñcyā samjīvayitum arhati // 24.44	
yaśodharāṃ subhadrāṅgīm bhāryāṃ svadharmacārīṇīm /	
sametya darśanenāpi sambodhayitum arhati // 24.45	
tvacchokānalasamtaptaṃ sarvaṃ sāntaḥpuram janam /	
sudhāmśudarśanenaiva prahlādīkartum a[174a]rhati // 24.46	
ity ādiśya narendreṇa bhavaty āvām samīritau /	
tat pituḥ śāśanaṃ dhṛtvā darśanaṃ dātum arhati // 24.47	
iti tābhyām samākhyātaṃ bodhisattvo niśamya saḥ /	
dhyātvā muhūrtam ālokya tau paśyann evam abravīt // 24.48	≈ Bc 9.30
avaimi snehabhāvaṃ hi pitur tasyātmaje mahat /	

jarāvyādhivipadbhītas tyaktvā care vane vratam // 24.49	≈ Bc 9.31
ko na draṣṭuṃ samīcheta svajanamitrabāndhavān /	
saṃsāre 'tra sadā na syād yadi priyaviyogātā // 24.50	≈ Bc 9.32
yadā bhūtvātra saṃyogo viyogaḥ syāt kṣaṇāt bhava /	
iti matvā guruṃ snigdham api tvaktvā vratam care // 24.51	≈ Bc 9.32
yac ca śokaṃ pitū rajño maddhetukaṃ tad ucyate /	
kaḥ saṃtapyed viyoge 'tra svapnākārasamāgame // 24.52	≈ Bc 9.33
evaṃ te niścayaṃ praitu buddhir dṛṣṭvā bhava vidhim /	
pitā putraḥ suhṛc chatrur ity ajñānābhīmūḍhatā // 24.53	≈ Bc 9.34
adhvagānāṃ yathākāle viyogo niyato bhava /	
sarveṣāṃ api jantūnāṃ mṛtyur abhimukhaḥ sadā // 24.54	≈ Bc 9.35
evaṃ vijñāya saṃsāre daivayogānuvartini /	
viiyoge ko bhajec chokaṃ prājñāḥ saṃvidvicakṣaṇāḥ // 24.55	≈ Bc 9.35
ihaiti svajanaṃ hitvā paratrāpi pralabhya ca /	
punaḥ prayāti hitvātra svajanaṃ ca paratra ca // 24.56	≈ Bc 9.36
evaṃpravṛttisaṃcāre bhava daivānuyogataḥ /	
saṃyoge 'pi viyoge ca ko janair anurudhyate // 24.57	≈ Bc 9.36
garbhāt prabhṛti jantūnāṃ mṛtyuḥ puro 'bhivartate /	
tad akāle 'pi saddharmaṃ sādhanīyaṃ bhava naraīḥ // 24.58	≈ Bc 9.37
akālo viṣayaprāptau tathā kālo 'rthasādhane /	
jagat karṣet sadā kālāḥ sarvakālas tu sadvrate // 24.59	≈ Bc 9.38
rājyalakṣmīm pradattvā me pitā vratam yadīcchati /	
tad apy udārasādrīyaṃ pituḥ saddharmasādhane // 24.60	≈ Bc 9.39
api pitrā pradattaṃ tadrājaṃ nādātum utsahe /	
lobhād gatvā punā rāje bhoktuṃ na kuśalaṃ mama // 24.61	≈ Bc 9.39
kathaṃ mohāśrayaṃ rājaṃ pratipattuṃ punar mayā /	
parapīḍā sadodvego yatra madaḥ kaliśramaḥ // 24.62	≈ Bc 9.40
jambūnadagrhaṃ dīptaṃ saviṣaṃ surasāśanam /	
grāhākulaṃ saro ramaṃ rājaṃ hi vyasanā[174b]śrayam // 24.63	≈ Bc 9.41
itthaṃ matvāsukhādharmaṃ rājaṃ pūrve 'pi bhūmipāḥ /	
vṛddhatve saghṛṇās tyaktvā vane gatvācaran vratam // 24.64	≈ Bc 9.42
vane bhuktvā tṛṇāny eva vrate kartuḥ sukhaṃ varam /	
na tu rāje yathākāmaṃ bhoktur api sukhaṃ varam // 24.65	≈ Bc 9.43
ślāghyaṃ hitvā hi rājyāni rājñāṃ vanāśramāśrayam /	
na tu vanāśramaṃ hitvā rājyāśramāśrayam śivam // 24.66	≈ Bc 9.44
yo jātaḥ sukule dhīmān praviṣṭas tapase vanam /	
punaḥ kāśāyam utsṛjya salajjaḥ ko vrajed divam // 24.67	≈ Bc 9.45
lobhān mohād bhayenāpi yo vāntaṃ bhoktuṃ icchati /	

sa dharmāśrayam utsrjya punaḥ kāmāśraye ramet // 24.68	≈ Bc 9.46
prāḍīptāc charaṇād yaś ca kathaṃcin nirgato bahiḥ /	
so hi kliṣṭo vanaṃ tyaktvā mohād bhoktum gr̥he vrajet // 24.69	≈ Bc 9.47
nāsti saṃdhir jalasyāgneḥ satyasyaivaṃ śaṭhasya ca /	
*śamasyāpi ca daṇḍasya dharmaṇaḥ pāpināpi ca // 24.70	≈ Bc 9.48
yā ca śrutir nr̥pā mokṣakāmās tena gr̥hāśritāḥ /	
mokṣaḥ śamapradhāno hi rājadharmas tu daṇḍabhṛt // 24.71	≈ Bc 9.48
manoratiḥ śame yasya tasya rājye matir na hi /	
rājyadharmamatir yasya tasya śame ratir na hi // 24.72	≈ Bc 9.49
na śamataikṣṇyayoḥ saṅgaḥ kvacic chītoṣṇayor iva /	
dhūrtasajjanayor naiva saṅgo 'gnijalayor iva // 24.73	≈ Bc 9.49
iti santo mahīpālā rājyaṃ tyaktvā śamārthināḥ /	
vanāśrame samāśritya prācaran vratam uttamam // 24.74	≈ Bc 9.50
māyāpāśam ahaṃ chittvā nirbandho vratam ācare /	
punā rājyābhidhe cāre praveṣṭum na samutsahe // 24.75	≈ Bc 9.51
ity ātmavijñānaguṇānurūpaṃ	
muktaspr̥haṃ hetumad ūrjitaṃ ca /	
śrutvā narendrātmajam uktavantam	
pratyuttaram mantradharmo 'py uvāca // 24.76	= Bc 9.52
yo niścayo mantravaras tavāyaṃ	
nāyaṃ na yukto na tu kālayuktaḥ /	
śokāya hitvā pitaram vayahṣtham	
syād dharmakāmasya hi te na dharmah // 24.77	= Bc 9.53
[175a] nūnaṃ ca buddhis tava nātisūkṣmā	
dharmārthakāmeṣv avicakṣaṇā vā /	
hetor adṛṣṭasya phalasya yas tvam	
pratyakṣam artham paribhūya yāsi // 24.78	= Bc 9.54
punar bhavo 'stīti ca kecid āhur	
nastīti kecin niyatapratijñāḥ /	
evaṃ yadā saṃśayito 'yam arthas	
tasmāt kṣamaṃ bhoktum upāsthitā śrīḥ // 24.79	= Bc 9.55
bhūyaḥ pravṛttir yadi kācīd asti	
raṃsyāmahe tatra yathopapattau /	
atha pravṛttiḥ parato na kācit	
siddho 'prayatnā jagato 'sya mokṣaḥ // 24.80	= Bc 9.56
astīti kecit paralokam āhur	
mokṣasya yogaṃ na tu varṇayanti /	
agner yathā hy auṣṇam apāṃ dravatvaṃ	

tadvat pravṛttau prakṛtiṃ vadanti // 24.81	= Bc 9.57
kecit svabhāvād iti varṇayanti śubhāśubhaṃ caiva bhavābhavau ca / svābhāvikaṃ sarvam idaṃ ca yasmād ato 'pi mogho bhavati prayatnaḥ // 24.82	= Bc 9.58
yad indriyāṇāṃ niyataḥ pracāraḥ priyāpriyatvaṃ viṣayeṣu caiva / saṃyujyate yaj jarayārtibhiś ca kas tatra yatno nanu sa svabhāvaḥ // 24.83	= Bc 9.59
adbhir hūtāśaḥ śamam abhyupaiti tejāṃsi cāyaḥ śamayanti śoṣam / bhinnāni bhūtāni śarīrasaṃsthāny aikyaṃ ca dattvā jagad udvahanti // 24.84	= Bc 9.60
yat pāṇipādodarapṛṣṭhamūrdhnā nirvartate garbhagatasya bhāvaḥ / yad ātmanas tasya ca tena yogaḥ svābhāvikaṃ tat kathayanti tajjñāḥ // 24.85	= Bc 9.61
kaḥ kaṇṭakasya prakaroti taikṣṇyaṃ vicitrabhāvaṃ mṛgapakṣiṇāṃ vā / svabhāvataḥ sarvam idaṃ pravṛttaṃ na kāmakāro 'sti kutaḥ prayatnaḥ // 24.86	= Bc 9.62
sargaṃ vadantīśvaratas tathānye tatra prayatne puruṣasya ko 'rthaḥ / ya eva hetur jagataḥ pravṛttau hetur nivṛttau niyataḥ sa eva // 24.87	= Bc 9.63
kecid vadanty ātmanimittam eva prādūrbhavaṃ caiva bhavakṣayaṃ ca / prādūrbhavaṃ tu pravadanty ayatnād yatrena mokṣādhighamaṃ bruvanti // 24.88	= Bc 9.64
naraḥ pitṛṇāṃ anṛṇaḥ prajābhir vedair ṛṣiṇāṃ kratubhiḥ surāṇāṃ / utpadyate sārdham ṛṇais tribhis tair yasyāsti mokṣaḥ kila tasya mokṣaḥ // 24.89	= Bc 9.65
ity evam etena vidhikrameṇa mokṣaṃ sayatrasya vadanti tajjñāḥ / prayatna[175b]vanto 'pi hi vikrameṇa mumukṣavaḥ khedaṃ avāpnuvanti // 24.90	= Bc 9.66
tat saumya mokṣe yadi bhaktir nāsti	

nyāyena sevasva vidhiṃ yathokam /	
evaṃ bhaviṣyaty upapattir asya	
santāpanāśaś ca narādhipasya // 24.91	= Bc 9.67
yā ca pravṛttā bhava doṣabuddhis	
tapovanebhyo bhavanaṃ praveṣṭum /	
tatrāpi cintā tava tāta mā bhūt	
pūrve 'pi jagmuḥ svagrhaṃ vanebhyaḥ // 24.92	= Bc 9.68
tapovanastho 'pi vṛtah prajābhir	
jagāma rājā puram ambarīṣaḥ /	
tathā mahīṃ viprakṛtām anāryais	
tapovanād etya rarakṣa rāmaḥ // 24.93	= Bc 9.69
tathaiva sālvaḍhipatir drumākṣo	
vanāt sasūnur nagaraṃ viveśa /	
brahmārṣibhūtaś ca muner vaśiṣṭhād	
dadhre śriyaṃ sāmkr̥tir antidevaḥ // 24.94	= Bc 9.70
evaṃ vidhā dharmayaśaḥ pradīptā	
vanāni hitvā bhavanāny abhīyuh /	
tasmān na doṣo 'sti grhaṃ prayātum	
tapovanād dharmanimittam eva // 24.95	= Bc 9.71
tato vacas tasya niśamya mantriṇaḥ	
priyaṃ hitaṃ caiva nṛpasya cakṣuṣaḥ /	
anūnam avyastam asaktam adrutaṃ	
dhṛtau sthito rājasuto 'braviḍ vacaḥ // 24.96	= Bc 9.72
ihāsti nāstīti ya eṣa saṃśayaḥ	
parasya vākyair na mamātra niścayaḥ /	
avetya tattvaṃ tapasā śamena vā	
svayaṃ grahīṣyāmi yad atra niścitam // 24.97	= Bc 9.73
na me kṣamaṃ saṃgaśataṃ hi darśanaṃ	
grahītum avyaktaparamparāhatam /	
buddhaḥ parapratyayato hi ko vrajej	
jano 'ndhakāre 'ndha ivāndhadeśikaḥ // 24.98	= Bc 9.74
adr̥ṣṭatattvasya sato 'pi kiṃ tu me	
śubhāśubhe saṃśayite śubhe matiḥ /	
vṛthāpi khedo ' pi varam śubhātmanaḥ	
sukhaṃ na tattve 'pi vigarhitātmanaḥ // 24.99	= Bc 9.75
imaṃ tu dr̥ṣṭvāgamam avyavasthitaṃ	
yad uktam āptais tad avehi sādhv iti /	
prahīṇadoṣatvam avehi cāptatām	

prahīṇadoṣo hy anṛtaṃ na vakṣyati // 24.100	= Bc 9.76
gṛhapraveśaṃ prati yac ca me bhavān uvāca rāmaprabhṛtīn nidarśanam / na te pramāṇaṃ na hi dharma niścayeṣv alaṃ pramāṇāya parikṣatavratāḥ // 24.101	= Bc 9.77
tad evam apy eva ravir mahīm pated api sthiratvaṃ hi[176a]mavān giris tyajet / adr̥ṣṭatattvo viṣayonmukhendriyaḥ śrayeya na tv eva gṛhān pṛthagjanaḥ // 24.102	= Bc 9.78
ahaṃ viśeyaṃ jvalitaṃ hutāśanam na cākṛtārthaḥ praviśeyam ālayam / iti pratijñāṃ sa cakāra garvito yatheṣṭam utthāya ca nirmamo yayau // 24.103	= Bc 9.79
tataḥ sabāṣpau sacivadvijāv ubhau niśamya tasya sthiram eva niścayam / viṣaṇṇavaktrāv anugamya duḥkhitau śanair agatyā puram eva jagmatuḥ // 24.104	= Bc 9.80
tatsnehād atha nṛpateś ca bhaktitas tau sāpekṣaṃ pratiyayatuś ca tasthatuś ca / durdharṣaṃ rāvim iva dīptam ātmabhāsā taṃ draṣṭuṃ na hi pathi śekatur na moktum // 24.105	= Bc 9.81
tau jñātuṃ paramagater gatiṃ tu tasya pracchannāṃś carapuruṣāñ chucīn vidhāya / rājānaṃ priyasutalālasaṃ nu gatvā drakṣyāvaḥ katham iti jagmatuḥ kathamcit // 24.106	= Bc 9.82
tatra tau samupāsṛtya śuddhodanasya bhūpateḥ / sarvam etat pravṛttāntaṃ vistaraṃ samacakṣatām // 24.107 taṃ niśamya narendro 'pi hā putreha kadāvrajat / iti bruvan rudan bhūmau nipapāta vimohitaḥ // 24.108 tataś cirāt samutthāya saṃpaśyan mantriṇo janān / sahasā samupāmantrya sādaram evam ādiśat // 24.109 pratyahaṃ puruṣāṃs tatra tasyātmajasya me sadā / kuśalākuśalaṃ jñātuṃ saṃpreṣayitum arhatha // 24.110 iti rājñā samādiṣṭaṃ śrutvā te mantriṇo janāḥ / puruṣān sahasāmantrya sādaram samupādiśan // 24.111 bho puruṣā nṛpādeśaṃ dhṛtvā yūyaṃ samāhitāḥ / yatrāsau bhikṣur āsīnaḥ prayātaḥ saṃsthito 'pi vā // 24.112 tatra tatra samālokyā gatvā tasya mahāmateḥ /	

kuśālācārasaṃvṛttiṃ dṛṣṭvāyāta drutaṃ tataḥ // 24.113
 iti mantriḥjanādiṣṭaṃ śrutvā te puruṣā mudā /
 tatheti pratibhāṣitvā tataḥ saṃprasthitā yayuḥ // 24.114
 tatas te puruṣā yatra bodhisattvaḥ samāśritaḥ /
 śrutvā tatrābhigacchantaḥ samīkṣya samupāśrayan // 24.115
 tān sarvān samupāsīnān bodhisattvaḥ samīkṣya saḥ /
 svajanān puruṣān matvā [176b] papraccha jñātikausalam // 24.116
 tac chrutvā puruṣās te 'pi bodhisattvaṃ praṇamya tam /
 bhavato 'pi śivaṃ kaccid iti papracchur ādaram // 24.117
 svāminn eko bhavān atra vane vrataṃ kathaṃ caret /
 tad vayaṃ bhavatā sārddham icchāmaś caritum vrataṃ // 24.118
 yad bhavān naḥ prabhuḥ śāstā sevakā bhavato vayaṃ /
 tad asmān api saddharme sahāyān kartum arhati // 24.119
 iti taiḥ prārthitaṃ śrutvā bodhisattvaḥ samīkṣya saḥ /
 tān bhadravāñchino matvā sampaśyann evam ādiśat // 24.120
 yadi yūyaṃ mayā sārddham vrataṃ caritum icchatha /
 sāmpratam atra yusmābhiś caritum nābhiśakyate // 24.121
 yadā saṃbodhim āsādyā saddharmaṃ saṃprakāśayan /
 tatra pure samāgatya dharmam deksyāmi saugatam // 24.122
 tadā yūyaṃ samāgatya śrutvā me dharmam uttamam /
 pravrajyāsaṃvaram dhṛtvā saṃcaradhvaṃ mayā saha // 24.123
 idānīm svapure gatvā sarve yūyaṃ samāhitāḥ /
 triratnasmaraṇam dhṛtvā saṃcaradhvaṃ gr̥he vrataṃ // 24.124
 ity evaṃ samupādiśya bodhisattvaḥ sa utthitaḥ /
 tataḥ saṃprasthito 'nyatra jagāma saṃprabhāsayan // 24.125
 tam evaṃ prasthitaṃ dṛṣṭvā sarve te puruṣā api /
 anugantum abhīcchantas tatraiva tasthur unmukhaḥ // 24.126
 bodhisattvo 'pi tān sarvān anvāgantum samīcchīnaḥ /
 vijñāya sahasāraṇye praviṣṭo 'ntarhito yayau // 24.127
 tatas te puruṣāḥ sarve taṃ praviṣṭaṃ mahāvane /
 samālokyā vibhagnāśās cirāt pratyācarams tataḥ // 24.128
 śanaiḥ pratyāgatāḥ sarve puruṣās te nṛpālaye /
 upetya pādāyā rājñāḥ praṇatvā samupāśrayan // 24.129
 tatas te puruṣāḥ sarve yathoktaṃ tena bhikṣuṇā /
 tathā sarvaṃ pravṛttāntaṃ rājñāḥ puro nyavedayan // 24.130
 rājāpi tat samākarnya tadāgatīnirāśayā /
 niścalaṃ suciraṃ dhyātvā tasthau tadgatamānasah // 24.131
 tatpravṛttāntam ākarnya prajāpatīyaśodharāḥ /

sarvās tā yoṣitaś cāpi ni[177a]rāṣitā vilepire // 24.132
 evaṃ sa janako rājā tasyātmajasya bhadratām /
 ājñātum pratyahaṃ tatra puruṣāḥ preṣitāḥ sadā // 24.133
 puruṣā api te gatvā tasyātmajasya bhūpateḥ /
 upetya kauśalaṃ dṛṣṭvā pratyāgatāḥ nyavedayan // 24.134
 evaṃ sa janako rājā svātmajasya niranteram /
 kauśalyaṃ pratyahaṃ śrutvā tathau dhairyasamāhitāḥ // 24.135
 tathā tatkauśalaṃ śrutvā prajāpatī yaśodharā /
 sarvās tā yoṣitaś cāpi dhairyaṃ ālambya tathire // 24.136
 evaṃ sarve 'pi lokāś ca śrutvā tat kauśalaṃ mudā /
 saddharmaṃ śrotum icchantaś cerus tatsiddhilālasāḥ // 24.137
 tato 'nyatra prayāto sa bodhisattvaḥ prabhāṣayan /
 tatrāpi sa mahāsattvaḥ sarvair lokaiḥ samārcitaḥ // 24.138
 yatra yatrābhiyāto so bodhisattvaḥ prabhāṣayan /
 tatra tatrāpi satkārair ṛṣibhir api pūjitaḥ // 24.139
 evaṃ sarvatra saṃdraṣṭum ṛṣīṇāṃ āśrameṣu saḥ /
 pracaran sa mahāsattvaḥ saṃstuto 'bhūt surair api // 24.140
 evaṃ sa bodhisattvo 'pi saṃbhāṣayan samantataḥ /
 pūjyamāṇaḥ śubhaṃ kurvan pracacāra jagaddhite // 24.141
 evaṃ sarvatra lokaṣu bodhisattvasya tadyaśaḥ /
 prasāritaṃ samākarma sarvalokāḥ prasedire // 24.142
 sarvalokādhipāś cāpi tasya yater mahāmateḥ /
 saudhairyaguṇamāhātmyaṃ dṛṣṭvā prābhīnanandire // 24.143
 tathā sarvā mahī cāpi sābdhikānanaparvatā /
 taddhairyaguṇam ālokyā nanditā cācalat tadā // 24.144
 meghā api samālokyā taddairyaguṇam uttamam /
 sugandhirajitāṃ puṣpavṛṣṭiṃ prāvarṣayan mudā // 24.145
 vāyavo 'pi samālokyā tatsaddharmaṃ mahattaram /
 sahimamakarandais taṃ saṃpūjitaṃ śanair vayoḥ // 24.146
 tadā sarvā diśaś cāpi dṛṣṭvā tasya sudhīratām /
 sudṛṣṭisuprasannāsyāḥ prābhyanandann iva striyaḥ // 24.147
 jyotiṃṣi cāpi sarvaṇi dṛṣṭvā tasya sudhīratām /
 mudātīrucim utsrjya taṃ saṃdrakṣum ivācaran // 24.148
 sarvagrahāḥ satārāś ca samīkṣya tatsudhīratām /
 saṃrakṣitaṃ taṃ ātmajñaṃ saṃpaśyanto mudācaran // 24.149
 evaṃ [177b] siddhāś ca sādhyāś ca rudrā vidyādharaḥ api /
 vasavo yakṣagandharvakumbhāṇḍakinnarā api // 24.150
 guhyakā garuḍā nāgā danujā rakṣasā api /

taddhairavīryam ālokya praśaśaṃsuḥ praṇāmitāḥ // 24.151
 yogina ṛṣayaś cāpi yatayo brahmacāriṇaḥ /
 taddhairyasusthiraṃ vīkṣya vismayaṃ samupāyayuḥ // 24.152
 arhanto bhikṣavaś cāpi pratyekasugatā api /
 dṛṣṭvā taccittavaimalyaṃ prāmodyaṃ samupāyayuḥ // 24.153
 bodhisattvā mahāsattvāḥ sarve 'pi sugatātmajāḥ /
 tatsudhīrānubhāvatvaṃ vīkyāsann abhinanditāḥ // 24.154
 sarve 'pi sugatā buddhā dṛṣṭvā tasya mahāmateḥ /
 caittaṃ niḥkleśasaṃśuddhaṃ sampaśyantaḥ samabhyavan // 24.155
 evam asau mahāsattvo bodhisattvo jagaddhite /
 bodhicaryāvrataṃ dhṛtvā tapo draṣṭuṃ vane 'carat // 24.156
 saṃcarantaṃ tam ālokya sarve lokāḥ prasāditāḥ /
 satkṛtya samabhiṣṭūya natvābhyarcyābhyandanayan // 24.157
 evaṃ sarvārthasiddho 'sau brahmacārī jitendriyaḥ /
 bodhicaryāvrataṃ dhṛtvā pracacāra jagaddhite // 24.158
 taṃ bodhinihitātmānaṃ bodhisattvaṃ śubhendriyam /
 dṛṣṭvā mārāgaṇāḥ sarve bhayānvitā viṣedire // 24.159
 tasya puṇyaprabhāsprṣṭāḥ sarve lokāḥ śubhānvitāḥ /
 saddharmaśravaṇāraktā babhūvur bodhimānasāḥ // 24.160
 iti me *guruṇākhyātaṃ śrutam mayā tathocyate /
 {or: iti me *guruṇākhyātaṃ sāmpratam gaditam mayā /}
 tac chrutvā mudito nāma saṃcarasva sadā śubhe // 24.161
 śrutvedaṃ me 'numodanti te sarve vimalendriyāḥ /
 bhadraśrīsadguṇādhārā bhaveyur bodhicāriṇaḥ // 24.162
 iti śāstrārhatādiṣṭaṃ śrutvāśoko mahīpatiḥ {or: °ānando mahāmatiḥ} /
 tathety abhyanumoditvā prābhyanandat prabodhitaḥ // 24.163

 // iti bodhisattvānveṣaṇābhibodhanaparivarto nāma caturviṃśatitamo 'dhyāyaḥ samāptaḥ //

Apparatus criticus of the chapter 24

- 1a athāśoko] A(ante corr.) B D: athānando A(post corr.) || mahīpālo A: mahāsatto B D.
 1b *upāśrito] ex con: upāśritā A B D.
 2a bhadantāsau] A: bhadantosau B D.
 2b samācarat] A: samācaran B D.
 2c naḥ] A: taḥ B D.
 4d vilalāpa] A B: vīgalāpa D.
 10d *niḥsprhaḥ] nisprhaḥ A.

- 22c *āha hy atra] ex conī: ā atra A B || *samāyātau] ex conī: samāyātaḥ A B.
- 23a *kāye] ex conī: kāya A: kāyai B.
- 30d tvām] B: tvā A.
- 34a *yauvanād *bhuṅkṣva] ex conī: yauvanān bhuṅkṣva A.
- 37b vrataṃcarāḥ] m.c. for vratacarāḥ.
- 38c *śrīṣu] ex conī: śrīsut A.
- 50a samīcheta] sic A (= samiccheta).
- 51c vrataṃ care /] A(post corr. marg.): vrataṃ / A(ante corr.)
- 60ab pradattvā me pitā] A(post corr. marg.): pradattvā pitā A(ante corr.).
- 70c *śamasyāpi] ex conī: śamasyāpi A.
- 72d ratir] corr.: rati A.
- 73a °taikṣṇyayoḥ] corr.: °taikṣṇayoḥ A.
- 77a mantravaras] A. (Cf. Bc 9.53 dharmavidhau; Cowell mantravaras)
- 77c hitvā] A. (Cf. Bc 9.53 dattvā; Cowell hitvā)
- 77c vayahsthāṃ] corr.: vayasthāṃ A. (Cf. Bc 9.53 vayahsthāṃ)
- 79c saṃśayito] corr.: śaṃśayito A. (Cf. Bc 9.55 saṃśayito)
- 79d upāsthītā] A. (Cf. Bc 9.55 upasthitā)
- 80b raṃsyāmahe] corr.: rasyāmahe A. (Cf. Bc 9.56 raṃsyāmahe)
- 81b auṣṇyam] corr.: oṣṇyam A. (Cf. Bc 9.57 auṣṇyam)
- 84b śamayanti] A. (Cf. Bc 9.60 gamayanti)
- 84d dattvā] ≡ datvā A. (Cf. Bc 9.60 gatvā; Johnston's Ms. datvā; Cowell dattvā)
- 85a °mūrdhnā] A. (Cf. Bc 9.61 °mūrdhnām; Cowell °mūrdhnā)
- 92a bhava°] A. (Cf. Bc 9.68 tava; Cowell bhava°)
- 94a drumākṣo] A. (Cf. Bc 9.70 drumākhyo; Cowell drumākṣo)
- 94b viveśa] corr.: niveśa A. (Cf. Bc 9.70 viveśa)
- 94d dadhre] A (post corr. marg.): vavre A(ante corr.). (Cf. Bc 9.70 dadhre)
- 94d sāmkr̥tir] corr.: sākṛtir A. (Cf. Bc 9.70 sāmkr̥tir)
- 95b abhīyuh] A. (Cf. Bc 9.71 atīyuh; Cowell abhīyuh)
- 97a nāstīti] A (post corr. marg.): nāstī A(ante corr.). (Cf. Bc 9.73 nāstīti)
- 97c śamena vā] A. (Cf. Bc 9.73 śamena ca; Cowell śamena vā)
- 98a saṃgaśataṃ] A. (Cf. Bc 9.74 saṃśayajam; Cowell saṃgaśataṃ)
- 98b °paramparā°] A. (Cf. Bc 9.74 °parasparā°; Cowell °paramparā°)
- 98d buddhaḥ] A. (Cf. Bc 9.74 budhaḥ; Cowell buddhaḥ)
- 99c khedo 'pi] A. (Cf. Bc 9.75 khedo hi; Cowell khedo 'pi)
- 100b avehi] corr.: avaihi A. (Cf. Bc 9.76 avehi)
- 101b rāma°] A(ante corr.): rāja° A(post corr. marg.). (Cf. Bc 9.77 rāma°)
- 101c na te] corr.: na teḥ A. (Cf. Bc 9.77 na te)
- 102b himavān] corr.: himavan A. (Cf. Bc 9.78 himavān)

104b niśamya] corr.: niśasya A. (Cf. Bc 9.80 niśamya)
 105c durdharṣaṃ] corr.: duddharṣaṃ A. (Cf. Bc 9.81 durdharṣaṃ)
 106a gaṭiṃ tu tasya] corr.: gaṭiṃ tasya A. (Cf. Bc 9.82 gaṭiṃ tu tasya)
 106d drakṣyāvah] corr.: drakṣyāmaḥ A. (Cf. Bc 9.82 drakṣyāvah)
 116a samupāsīnān] D: samāsīnān A.
 131c niścalaṃ] corr.: niścaraṃ A: niściraṃ B.
 139d ṛṣibhir] A: ṛṣibhir B.
 142c prasāritaṃ samāka°] A(post corr. marg.) B D: prasāritaṃ āka° A(ante corr.).
 157c samabhiṣṭūya] corr.: samabhistūya A.
 161a iti me *guruṇākhyātaṃ] ex con: iti me pūrvavṛttāntaṃ A D: iti te pūrvavṛttānta B. — Note.
 Letters of pūrvavṛttāntaṃ of A are overwritten letters. Letters of the original scribe are lost by the overwrit-
 ten letters by the second scribe.
 161b śrutaṃ mayā tathocyate] A: sāmprataṃ gaditaṃ mayā A(marg.) B D.
 161c mudita nāma] A(ante corr.): muditānanda A(post corr.) D: muditānandā B.
 163b °āsoko mahīpatiḥ] A(ante corr.): °ānando mahāmatīḥ A(post corr.) B D.
 (Colophon:) iti bodhisattvā°] A: iti śrīlālitaṃ vistare bodhisattvā° A(marg.) B D || caturviṃśatita-
 mo] A D: dvāviṃśatitamo D.

『菩薩を搜索して説得をなした』という第24章

さて大地の守護者アショーカ王は、再び嬉しく世尊・出家行者（ウバグブタ）のもとに赴き、拝礼し合掌して、このように言った。(24.1)

「尊師よ、かの大士はその後、どこに行かれたのですか。あなた様はそれを私たちに説き明かして、よく理解を得させて下さい。」(24.2)

彼がそう求めるのを聞き、大慧者であるその阿羅漢は、そのアショーカ王と集会の人々を見つめて、このように説いた。(24.3)

「アショーカよ、聞きなさい。—— その時カピラという名の王都では、王が悲しみの火に幾度も身を焼かれ、正念を保つ力を失い、悲嘆に暮れた。(24.4)

このように王子との再会を切望していた王は、一人の宮廷祭僧と一人の大臣に『搜索せよ』と命じた。(24.5)

王からのその命令を担って、大臣と宮廷祭僧の二人は去ってゆき、バールガヴァ仙の隠棲処にたどり着いた。(24.6)

其処でバールガヴァはやってきた二人を眺めると、嬉しくすぐに招き入れて草の座に坐らせた。(24.7)

バールガヴァは其処で座に坐っている二人に、森での生活を支える果物や根などの食べ物をもって供養し、喜ばせた。(24.8)

その後、その大臣と宮廷祭僧はバールガヴァ仙に拝礼して、その前に控えると、正視しつつこのように語った。(24.9)

「大仙よ、シュッドーダナ王の美しい息子が、老いと死の恐怖に戦慄し、輪廻界の快樂を厭い、感官の快の諸対象も私有財産も王位も捨てて、ここの隠棲処へと来られたと思います。(24.10)

尊師よ、彼はどこへ行ったのでしょうか。ここか、或いはどこかの所に居るのでしょうか。彼を探し出すために、私たち二人は急いでここへ来ました。(24.11)

そこで、あなたは王様のその御子息を呼び出して、私たちの前にすぐお示し下さいませ。」(24.12)

二人がそのように懇願するのを聞き、バールガヴァ仙は大臣と宮廷祭僧を見つめて、このように述べた。(24.13)

「その気高い心の、神々しい極めて美しい若者はここに来ました。彼は出家して禁戒を保ち、専念して行をしています。(24.14)

ここに一晚泊まり、私たちの苦行誓戒を見学しましたが、不満足な心を抱いて、その後あちらの苦行林に去っていきました。」(24.15)

そうその仙人が答えたのを聞いて、大臣と宮廷祭僧の二人はそのバールガヴァに拝礼すると、速やかにその地から出ていった。(24.16)

その道中、二人は旅人たちを見ると、彼らを招いて近づき、「あなた方は若い比丘を見かけませんでしたか」と尋ねた。(24.17)

それを聞くと、旅人たちは皆集まり、近づいてきて、その大臣とバラモンを見て、お辞儀してこう答えた。(24.18)

「私たちは一人の甚だ美男子である、美しい若い比丘を見ました。あちらの隠棲処で菩提樹の根元に坐っていました。」(24.19)

そう彼らが言ったのを聞いて、大臣とバラモンの二人は、すぐに嬉しくそこへ進んでゆくと、遠くに彼（菩薩）の姿を見つけた。(24.20)

雲上の満月の如く光り輝いている彼を見て、二人は大いに喜び、急いでその菩提樹へと近づいた。(24.21)

そこに近づいてきた二人を見て、善慧者たるその出家行者は、「ここにやって来られたお二人、いらっしゃい。さあ、お坐りなさい」と言った。(24.22)

「あなた方お二人は、お体は健やかであられますか。わが父たる国王、また母とヤショーダラーは全く無事でお過ごしでしょうか。」(24.23)

ひどく落ち着いた心のその彼に尋ねられて、大臣と宮廷祭僧の二人は彼を見つめ、お辞儀してこのように答えた。(24.24)

「あなたのお体は健やかでありますか。私たち二人は息災であり、あなたの母君、またお妃様も、父君たる王様も、全くつつがなくあられます。」(24.25)

このようにすべての人たちの息災を告げながら、大臣と宮廷祭僧の二人は彼のそばに控えて立った。(24.26)

その後、木の根元に坐って感官を安らかに保って輝いている彼に対し、大臣と宮廷祭僧は正視してこのように語った。(24.27)

「高德のお方よ、私たちが何の目的でここに来たのかをあなたに申し上げますから、どうかあなたもそれを聞いて、聞き入れ、ご寛容であって下さいませ。(24.28)

あなたの父君であるあの王様は、あなたへの悲しみの火に焼かれ、幾度も意識を失って、地面にお倒れになりました。(24.29)

その後、ようやくついに起き上がると、あなたの徳性を思い出しては、流れる涙に顔をお濡らしになり、あなたに向かってこのように呟かれました。(24.30)

『真実の法と生類への益という目的を成し遂げようとするお前の思いを私は知っている。だが、まだその時ではないのに、お前が森へ去ったため、私は悲しみの火に焼かれている。(24.31)

だから今すぐ家へ戻ってくれ。わが一族にふさわしい義務を果たしなさい。愛しい子よ、その思いを捨てなさい。まだその時ではないのに、なぜ森で誓戒を行う必要があるのか。(24.32)

悪しき生き物や羅刹たちが棲む所である、人が近づき難い場所、冷風・炎熱・スコール・落雷が恐怖である場所に留まることに、お前がどうして耐えられよう。(24.33)

それ故まずは、若い間は転輪王の栄華を享受しなさい。もしお前が憐れみの心をもつなら、年老いてから森で誓戒を行じなさい。(24.34)

だが森でだけ、法が成就するわけではない。家にあっても成就するのだ。自性清浄心の故に誓戒が成就するのであって、〔宗教者の身の〕標識や森に何の意味があらう。(24.35)

自性の清浄たることにより、王たる義務に身を置いていても、また在家者であっても、勝れた知を持つ者たちは解脱の法を得たのだ。(24.36)

多くの王たちは、王たる義務の誓戒を実行しつつ、真実の法をも実践し、在家者であっても涅槃を得たのだ。(24.37)

あなたもまた同様に、専念して王たる義務の法に身を置いて、王の栄光の中で幸せを享受し、生の最後に、至福の境地へ赴きなさい。(24.38)

私は、大士たるお前を王の座に即位させ、王として就任させた後に、〔自ら〕森で誓戒を行じることにはしたい。』(24.39)

——そう、大地の主である王様はご自身の言葉をもってこのようにあなたにむかって呟かれました。それ故、その愛情に応えるために、あなたは父君のことを聞き入れて、実施なさって下さい。(24.40)

あなたへの悲しみの火に焼かれているお父上、あの大地の主たるお方は、強固なお心の持ち主でありながら、底知れぬ苦しみの海に沈んでいます。(24.41)

ですから、あなたは自ら速やかに行って、お父上を救ってあげ、安堵させて、幸せな状態へと安住させて下さい。(24.42)

かつてすべての王子たちが父王の喜ぶ行為をしたように、大慧者たるあなたもまた、望ましいことをなすべきです。(24.43)

またあなたへの悲しみという炎に身を焼かれている御母上に、あなたの視線という不死の甘露（アムリタ）の如き光線を浴びせてあげて、どうか生き返らせてやって下さい。(24.44)

あなたご自身の社会的義務を共になすべき伴侶である美しい容姿のヤショードラー様にも会い、姿をお見せすることで、彼女をよく納得させるべきです。(24.45)

またあなたへの悲しみという炎に身を焼かれている後宮のすべてのひとたちに、不死の甘露の光線を有する満月の如きあなたの姿をお見せして、清涼を与えるべきです。(24.46)

以上、王様から命じられて、私たち二人はあなたのもとに送られました。この父上のご教示を尊重して、姿をお見せになるべきです。」(24.47)

このように二人が語ったことを聞いて、菩薩はしばらく沈思し、それから二人を見つめ、このように言った。(24.48)

「父が自分の息子に抱く愛という感情を、私はよく理解しています。しかし私は老いと病と死を恐れる故、[その愛情を]捨てて森で誓戒を行じているのです。(24.49)

家族や友人や親戚をもっているなら、会いたいと思わない者がどこにいましょうか。しかし、この輪廻界においては、愛する者との別れは常に避けられないことなのです。(24.50)

輪廻的生存においては、ここで出会いがあっても、次の瞬間には別れが来ます。そのように考え、情愛深い父母をも捨てて、私は誓戒を行じているのです。(24.51)

父王がもつ悲しみが私のせいであることが[先ほど]言われましたが、この世界で、夢のような様相をもって出会いがあるなら、誰が別離に苦しまないでしょうか。(24.52)

このように輪廻的生存における常則を見て、あなた方の知性は決定的な確信に至るべきなのです、『父だ、息子だ、親友だ、敵だというのは、無知による迷妄である』と。(24.53)

旅人たちにとって、時が来れば互いに別れてゆくのが決まっているように、輪廻的生存においてはすべての生き物にとって、死がいつも目の前に迫り来ています。(24.54)

このように認識するなら、運命との連動に従って廻るこの輪廻界において、知という眼を有するいかなる賢者が、別離において悲しみを味わうのでしょうか。(24.55)

誰もが今世で親族を捨てて、次世でまた別の親族を得ますが、再びまた、今世でも他世でも、親族を捨てて去ってゆくことになります。(24.56)

運命との連動によってこのように次々に流転してゆく輪廻がある、この輪廻的生存においては、出会いでも別離でも、いったい誰が[特定の]人々に愛着を抱けるのでしょうか。(24.57)

胎児の時から生き物には既に死が目の前に現れています。それゆえ輪廻的生存においては、たとえ『今が時機でない』と言われようとも、誰もが正法の達成をなすべきなのです。(24.58)

官能的快樂を得るには不適切な時があり、財の達成には適切な時があります。しかし、時という死神はいつでも生類を〔死へと〕曳いてゆきます。正しい誓戒においては、何時であろうと〔それを始めるべき〕適切な時機なのです。(24.59)

父が私に王位の榮光を与えてから、〔ご自分の引退後の〕誓戒を望んでいるならば、そのことも、正法の達成において、わが父に相應しい気高い行為です。(24.60)

しかし、父からその王位を与えられても、私は受け取ることは出来ません。欲深さのため再び王国へ戻り、享樂することは、私にとって有益なことではありません。(24.61)

迷妄の巢である王位を、どうして私が再び受けることが出来ましょう。そこには他人を苦しめること、絶えざる心配、驕慢、鬭争の労苦があります。(24.62)

快い王位とは、災厄の巢であって、燃えている黄金の家、毒入りの美味の食事、鰐に満ちた蓮池です。(24.63)

このように昔の王たちは、王位というものが安樂でもなく正法でもないと考え、年老いと嫌気がさしてそれを捨て、森に去って誓戒を行じました。(24.64)

王位にいて好きなだけ享樂をなす幸せよりも、森にいて草を食べて誓戒を行じている幸せのほうが勝れています。(24.65)

王たちが王位を捨てて森の隱棲處に身を置くことは稱賛に値しますが、林住の人生期を捨てて、〔再び〕王位での人生期に身を置くことは、めでたいことではないのです。(24.66)

高い家柄に生まれ、苦行のために森に入った賢い者が、再び袈裟衣を脱ぎ捨てて、羞恥を感じているなら、そんな誰が天界に行けるでしょうか。(24.67)

強欲や迷妄や恐れから、吐いたものを再び食べようと欲することが出来る人なら、その人は法という依處を捨てて、再び愛欲の依處で楽しめるでしょう。(24.68)

燃え盛る家からどうかして外に逃げ出した者であるのに、欲に惑う者ならば、林を捨てて、迷妄から家に戻り行くでしょう。(24.69)

火と水の結合が無く、また真実と欺しの結合が無いように、寂靜（森の生活）と刑罰（王の生活）の結合は無く、また正法をもつ者と罪惡をもつ者の結合はありえないのです。(24.70)

言い伝えですが、それによれば、解脱を欲する王たちが家庭に留まっていたとのことです。しかし心の寂靜を最重要とする解脱と、刑罰を伴う王の義務とは〔相容れません〕。(24.71)

心の歡びが寂靜にある者は、王権に関心を持ちません。王法に関心がある者は、寂靜を楽しみません。(24.72)

寂靜と〔刑罰の〕厳しさとは、涼しさと暑さのように、決して交わることはありません。それは悪人と聖人が、火と水のように交わらないのと同じです。(24.73)

ですから、聖人たる王たちは寂静を求めて王権を捨て、林住の人生期に身を置いて、至高の誓戒を行じたのです。(24.74)

マヤー（迷妄）の罟を断ち切って、無束縛となった私は誓戒を行います。もう二度と、王権という名の束縛の中に私は入ろうと願いません。(24.75)

Buddhacarita 9.52 の逐語的借用	(24.76)
Buddhacarita 9.53 の逐語的借用	(24.77)
Buddhacarita 9.54 の逐語的借用	(24.78)
Buddhacarita 9.55 の逐語的借用	(24.79)
Buddhacarita 9.56 の逐語的借用	(24.80)
Buddhacarita 9.57 の逐語的借用	(24.81)
Buddhacarita 9.58 の逐語的借用	(24.82)
Buddhacarita 9.59 の逐語的借用	(24.83)
Buddhacarita 9.60 の逐語的借用	(24.84)
Buddhacarita 9.61 の逐語的借用	(24.85)
Buddhacarita 9.62 の逐語的借用	(24.86)
Buddhacarita 9.63 の逐語的借用	(24.87)
Buddhacarita 9.64 の逐語的借用	(24.88)
Buddhacarita 9.65 の逐語的借用	(24.89)
Buddhacarita 9.66 の逐語的借用	(24.90)
Buddhacarita 9.67 の逐語的借用	(24.91)
Buddhacarita 9.68 の逐語的借用	(24.92)
Buddhacarita 9.69 の逐語的借用	(24.93)
Buddhacarita 9.70 の逐語的借用	(24.94)
Buddhacarita 9.71 の逐語的借用	(24.95)
Buddhacarita 9.72 の逐語的借用	(24.96)
Buddhacarita 9.73 の逐語的借用	(24.97)
Buddhacarita 9.74 の逐語的借用	(24.98)
Buddhacarita 9.75 の逐語的借用	(24.99)
Buddhacarita 9.76 の逐語的借用	(24.100)
Buddhacarita 9.77 の逐語的借用	(24.101)
Buddhacarita 9.78 の逐語的借用	(24.102)
Buddhacarita 9.79 の逐語的借用	(24.103)
Buddhacarita 9.80 の逐語的借用	(24.104)
Buddhacarita 9.81 の逐語的借用	(24.105)
Buddhacarita 9.82 の逐語的借用	(24.106)

其処で二人はシュッドーダナ王のもとへ行き、そのすべての出来事を詳しく告げた。
(24.107)

それを聞くと王は、「ああ、息子よ、いつ戻るのか」と呻いて、泣いて地面に倒れ、意識を失った。(24.108)

その後久しく経って王は起き上がり、大臣や家来たちを眺めて、急いで近くに呼び寄せると、丁重にこのように命じた。(24.109)

「あの地でのわが息子の安否を毎日知るために、家来たちを絶えず送ることにしなさい。」(24.110)

王がそう命じたのを聞いて、大臣たちはすぐに家来たちを集めると、丁重にこう命じた。(24.111)

「家来たちよ。君たちは専心して王の命令を担い、かの比丘が坐している所、行った所、留まっている所へと、(24.112)

あちこちを眺めながら、その場所に行き、かの善慧者（菩薩）のお元気な生活の状況を見届けて、そこからすぐに戻ってきなさい。」(24.113)

そう大臣たちに命じられて、家来たちは「かしこまりました」と嬉しげに答え、其処から出発した。(24.114)

それからその家来たちは、菩薩がいる場所を聞きながらそこに向かって進んで行き、彼を見つけると、その近くに控えた。(24.115)

菩薩は彼ら全員が近くに控えて坐っているのを見て、彼らが同族の家来たちであることに気づき、親族知人の安否を尋ねた。(24.116)

それを聞かれてその家来たちも、その菩薩に拝礼して、「あなた様もお元気でられますか」と恭しく尋ねた。(24.117)

「主よ、あなた様お一人で、どうしてこの森で誓戒を行じることが出来ましょうか。そこで、私たちもあなた様と共に誓戒を行じたいと思います。(24.118)

あなた様は私たちの主であり師、この私たちはあなた様に仕える者です。ですから、私たちも正法における仲間とさせて下さい。」(24.119)

こう彼らが求めるのを聞き、菩薩は彼らを見つめ、彼らが善き幸せを望んでいると思い、見つめながらこのように説示した。(24.120)

「もしお前たちが私と一緒に誓戒を行じたいと願うなら、今この地では、お前たちが行をなすことは出来ないが、(24.121)

私が菩提を得て、正法を明らかに説き示しながら、あのわが都城へ行って如来の教えを説く時、(24.122)

その時、お前たちは集まり来て、私の最高の教えを聞き、出家して戒律を持し、私と一緒に行をしなさい。(24.123)

今は自分の都城に戻って、皆、専心して三宝への憶念を保ち、在家での誓戒を行じなさい。」(24.124)

このように教示すると、菩薩は立ち上がり、そこから出発して別の場所へと輝きながら去っていった。(24.125)

彼がこのような旅立つのを見て、家来たちも皆、後を追いたいと欲しつつも、その場に留まったまま、彼を仰いで見送った。(24.126)

菩薩は彼らが皆、後から追ってこうとしているのを認識すると、すぐに深い森の中に入り、姿を消して去った。(24.127)

その後家来たちは皆、彼が大きな森林に入ったのを見て、希望を絶たれ、やがてそこから引き返した。(24.128)

しずかに悄然として家来たちは皆、王宮へと戻ってきた。王に近づき、その両足に跪拝して、そばに控えた。(24.129)

その後家来たちは皆、かの比丘（菩薩）が話した内容と、すべての出来事を王の前で報告した。(24.130)

王はそれを聞いて、息子の帰還への希望を失い、身動きせずにとっても長い間沈思し、息子を想う心のままずつと過ごした。(24.131)

その事の成り行きを聞いて、プラジャーパティーやヤショードラー、そしてかのすべての女たちも、希望を失い、嘆き悲しんだ。(24.132)

このような状況で、父王は彼の息子が安寧かどうかを知るため、毎日その地へと家来たちを絶えず送った。(24.133)

家来たちも、その王の息子のもとへ行っては、その無事な様子を見て戻ってきて、報告した。(24.134)

このように父であるかの王は、自分の息子の安否を絶えず毎日聞きながら、気丈な態度で心を落ち着けて暮らした。(24.135)

また、彼の安寧を聞いて、プラジャーパティー、ヤショードラー、かのすべての女たちも、気丈な態度で暮らした。(24.136)

同様に〔都城の〕すべての人々も彼の安寧を嬉しく聞いて、正法を聴聞したいと思いながら、彼の修行の成就を願って過ごした。(24.137)

その後、菩薩は輝きながら別の地へと赴いた。其処でもかの大士は、あらゆる人たちから恭敬供養された。(24.138)

かの菩薩が輝きながら赴いたあらゆる土地で、彼は仙人たちからも敬意ある待遇をもって供養と尊崇を受けた。(24.139)

このように、あらゆる土地で見学するために仙人たちの隠棲処を巡り歩いているかの大士は、神々からも称賛された。(24.140)

こうしてかの菩薩は、十方を輝かせながら〔至る所で〕供養と尊崇を受けつつ、淨福をもたらしながら、世の生類の益のために歩み続けた。(24.141)

このようにすべての土地の人々の間に菩薩のその行為の名声が広まっているのを聞いて、あらゆる者が心に浄らかな信を得た。(24.142)

すべての護世王たち（四天王）もまた、大慧者たるその出家行者が示す確固として動じない心の性質の偉大さを見て、大いに喜んだ。(24.143)

また海や森や山々を伴ってすべての大地は、彼の確固として動じない心の性質を見て歓喜し、その時震え動いた。(24.144)

雲たちもまた、彼がもつ無上の確固として動じない心の性質を見て、よい香りが染著した花の雨を嬉しく降らせた。(24.145)

風たちもまた、彼の正法が甚だ偉大であるのを見て、彼を恭敬供養するために、涼しさと花蜜を伴って静かに吹いた。(24.146)

その時すべての『方角』の女神たちも、彼の心が堅固に定まっているのを見て、美しい眼の澄んだ明るい顔だちをした女たちの如くに歓喜した。(24.147)

すべての星辰も、彼の心が堅固に定まっているのを見て、嬉しく大きな輝きを放ちつつ、彼を見つめるかのように動いた。(24.148)

星々を伴ったすべての惑星も、彼の心が堅固に定まっているのを見て、自己知者たる彼を守護するために、見つめながら嬉しく動いた。(24.149)

同様に、シッダたち、サーディヤたち、ルドラたち、ヴィディヤダラたちも、またヴァスたち、葉叉たち、ガンダルヴァたち、クンバーンダたち、キンナラたちも、(24.150)

またグヒヤカたち、ガルダ（金翅鳥）たち、龍たち、ダヌジャたち、羅刹たちも、彼の心の堅固さと精進を見て、深く頭を下げ、称賛した。(24.151)

またヨーガ行者たち、仙人たち、出家行者たち、梵行者たちも、彼の心が堅固でよく安定しているのを見て、驚嘆していた。(24.152)

阿羅漢たち、比丘たち、独覺たちも、彼の心の無垢清浄なるを見て、歓びの心を抱いた。(24.153)

菩薩・大士たち、すべての仏子たちも、彼の心が堅固で、威神力に満ちているのを見つめながら、飲んだ。(24.154)

すべての善逝たち（諸仏）も、かの大慧者の、無煩悩で清らかな心の状態を見て、守り助けた。(24.155)

このように、世の生類の益のため大士・菩薩である彼は、菩提行の誓戒を堅持し、苦行を見学するために森を歩いていった。(24.156)

遊行して歩く彼を見ると、どんな人も安らかな浄信を得て、敬重して讃え、拝み、供養して喜んだ。(24.157)

このように、感官を制御した梵行者たるかのサルヴァールタシッダは、菩提行の誓戒を堅持し、世の生類の益のために遊行した。(24.158)

悟りへと心を定めている、清らかな感官をもつ菩薩を見て、マーラの群は皆、恐怖を抱いて憂悩した。(24.159)

彼の福德の輝く光に触れて、すべての世界の人々は浄行を具えもち、正法の聴聞を愛し、悟りに心を向けた心を持った。(24.160)

— 以上、私の師から聞いたことをそのまま私は語りました。これを聞いて喜びを得た者は、常に浄行を実施しなさい。(24.161)

私のこの語りを聞いて随喜する人は皆、感官が清らかになり、めでたい幸せと光輝と善き徳性の器たる者となり、菩提へと歩む者となろう。(24.162)

師・阿羅漢によって説かれたこれを聞いて、大地の守護者アショーカ王は {或いは：大慧者アーナンダは}、「わかりました」と随喜し、覺知を得て、歡喜した。(24.163)
菩薩を搜索して説得をなした [という名の] 品、第24章 [終わる]。

6. Tathāgatajanmāvadānamālā 第25章の校訂

A 177b8 ; B 262b5 ; D 228a1

athāsoko mahīpālaḥ {or: athānando mahāsattvaḥ} sāñjaliḥ samupāśrayan /
bhagava[178a]ntaṃ yatiṃ natvā sampāśyann evaṃ abravīt // 25.1
bhadantāsau mahāsattvas tataḥ kutra samācarat /
tad bhavān naḥ samādiśya sambodhayitum arhati // 25.2
iti samprārthite tena śrutvā so 'rhan mahāmatih /
*upagupto mahīpālaḥ {or: śākyasiṃhas tam ānandaṃ} sampāśyann evaṃ abravīt // 25.3
tataḥ samprasthitaś cāsau bodhisattvaḥ prabhāsayan /
vaiśālīnagaropānte tapovanam upāsarat // 25.4 ≈ L 238.14-15; H ii,158.17-18
tatrāśramastha ārāḍaḥ kālāma ṛṣisattamaḥ /
dūrāt taṃ samupāyātaṃ dadarśa prabhāsvaram // 25.5
dṛṣtvā sa ṛṣir āścaryavyākulaḥ subhitiśāyāḥ /
ko 'yam iha samāyāta ity uktvā samupāsarat // 25.6
tatropetya sa ārāḍaḥ kālāmas taṃ mahāmatim /
bodhisattvaṃ mahābhijñāṃ sampāśyann evaṃ abravīt // 25.7
svāgataṃ bho mahābhāga kas tvam kuta ihāgataḥ /
tat satyaṃ samupādiśya sarvān naḥ paribodhaya // 25.8
iti tenoditaṃ śrutvā bodhisattvaḥ sa sanmatih /
taṃ maharṣiṃ samālokyā sambodhitum abravīt // 25.9
maharṣe 'haṃ mahīndrasya śuddhodanasya nandanaḥ /
sarvasattvāhitādhānaṃ bodhicaryāvratam care // 25.10
tad atra bhavatāṃ cāpi tapovrataviśeṣatām /
saṃdraṣṭum aham āyāmi vimuktasukhavāñchayā // 25.11
iti tenoditaṃ śrutvā sa maharṣiḥ prabodhitaḥ /
tam āmantryāśrame nītvā vetrāsane nyaveśayat // 25.12
tatra tam āsanāsīnaṃ dṛṣtvā sa ṛṣir ādarāt /
yathāvidhi samabhyarcya bhojanaiḥ samatoṣayat // 25.13
tataḥ so 'pi mahāsattvo bhuktvā bhogyam yathocitam /

parṇasālāsanāsīnas tasthau dhyānahito niśi // 25.14	
tataḥ prātaḥ samutthāya bodhisattvaḥ sametya tam /	
ārāḍam ṛṣim āmantrya sampaśyann evam abravīt // 25.15	≈ L 238.19-20; H ii,160.1-3
maharṣe 'haṃ samicchāmi bhavatāṃ brahmasampadam /	
tad bhavān mām kṛpābuddhyā samanvāhartum arhati // 25.16	
iti saṃprārthitaṃ tena bodhisattvena saddhyā /	
sa ārāḍaḥ samāloky bodhisattvaṃ mudāvadat // 25.17	≈ L 238.20-22; H ii,160.3-4
sādhū cara mahābhāga [178b] brahmacaryam mamāśrame /	
alpakṛcchreṇa yatrāṣu vimuktiṃ samavāpnuyāt // 25.18	
iti tena samākhyātaṃ bodhisattvo niśamya saḥ /	
taṃ maharṣim arāḍaṃ ca papracchaivaṃ sa sādārāt // 25.19	≈ Bc 12.14
kīdrṣo bhavatāṃ dharmāḥ kathāṃ vā hy adhigamyate /	
tattvaṃ me draṣṭukāmāya bhavān ākhyātum arhati // 25.20	
iti saṃprārthitaṃ tena bodhisattvena saddhiyā /	
śrutvā maharṣir ārāḍo bodhisattvaṃ tam abravīt // 25.21	≈ Bc 12.15
sādhū śṛṇu mahābhāga yat tattvaṃ abhidhīyate /	
tad ahaṃ te pravakṣyāmi śrutvā samadhigamyate // 25.22	≈ Bc 12.16
prakṛtīvikārayos tattvaṃ tat kṣetram abhidhīyate /	
tad vijānāti yo vyaktaṃ kṣetrajñāḥ so 'bhidhīyate /	
tat kṣetrajñāṃ vidur vijñā ātmānam iti tadvidaḥ // 25.23	≈ Bc 12.17,18,20
yad utpādāvasānāc ca tad dharmaṃ maraṇātmakam /	
tad vyaktaṃ iti bodhavyam avyaktaṃ tu viparyayāt // 25.24	≈ Bc 12.22
ajñānaṃ karma tṛṣṇā ca bhavaprapṛtīhetavaḥ /	
tatrābhyavasthito jantuḥ sattvaṃ vinā na vartate // 25.25	≈ Bc 12.23
vipratyayo hy ahaṃkāraḥ sa saṃdeho 'bhisamplavaḥ /	
aviṣeṣo 'nupāyaś ca saṅgaś cābhyavapātaḥ // 25.26	≈ Bc 12.24
prāṇināṃ bhavahetur yat tad ālasyaṃ nigadyate /	
tamo moho viṣādaś ca tāmisram iti pañcamam // 25.27	≈ Bc 12.34,36
anayā'vidyayā pañcaparvayā baddhamānasaḥ /	
sa jātyādau mahadduḥkha āvartate punaḥ punaḥ // 25.28	≈ Bc 12.37
ahaṃ draṣṭātra śrotā ca mantā ca kāryakaraṇam /	
ity avagamya saṃsāre paribhramati sarvadā // 25.29	≈ Bc 12.38
etebhir hetubhir janmaśrotaḥ pravṛttir ucyate /	
hetvabhāvād dhi saṃsāre janmābhāva iti dhruvam // 25.30	≈ Bc 12.39
etac catuṣṭayaṃ dhīmān kṣetrajñāḥ samavāpya hi /	
sarvaduḥkhād hi nirmukteḥ padam akṣaram āpnuyāt // 25.31	≈ Bc 12.40,41
iti matvā vihāyādibījaṃ bhavanibandhanam /	
liṅgam ādāya saṃsāre 'py avṛttasukhotsahaḥ // 25.32	≈ Bc 12.46

saṃtoṣavān padaṃ śreṣṭhaṃ samavāptuṃ viśuddhadhīḥ / śuddhaśīlo viśuddhātmā yatir vased vanāśrame // 25.33	≈ Bc 12.47
paścāc ca rāgavairāgyaprabhave nirbhaye śive / matvā sarvendriyagrāmaṃ nigṛhya pariśuddhadhīḥ / manaḥśamaṃ samālambya tiṣṭhed dhyānasa[179a]māhitaḥ // 25.34	≈ Bc 12.48
tataḥ kāmaviviktaṃ yad vyāpādakleśavarjitaṃ / āścaryaṃ prathamam dhyānaṃ savitarkaṃ vivekajaṃ // 25.35	≈ Bc 12.49
evaṃvidhena bhadreṇa kāmakleśavigarhiṇā / śameṇābhisamāyukto lokālokaṃ samāpnuyāt // 25.36	≈ Bc 12.51
tān vitarkān viditvā ca manaḥ kṣobhakarān iti / tadvimuktaṃ dvitīyaṃ ca dhyānaṃ prītisukhātmakam // 25.37	≈ Bc 12.52
samāsādyā tayā prītyā hriyamānāmanāḥ punaḥ / ābhāswareṣu deveṣu samutpattiṃ samāpnuyāt // 25.38	≈ Bc 12.53
tataḥ prītisukhāt tasmāt cittam uccārayan punaḥ / prativirahitaṃ dhyānaṃ sukhaṃ labhet tṛtīyakam // 25.39	≈ Bc 12.54
tataś ca tṛtīye hi dhyāne nimagnamānasaḥ / śubhakṛtsneṣu deveṣu janma pratilabhed dhruvam // 25.40	≈ Bc 12.55
tādṛśaṃ sukham āsādyā yo 'py *upekṣāṃ karoti saḥ / caturthadhyānaṃ āśīdet sukhaduḥkhavivarjitaṃ // 25.41	≈ Bc 12.56
dīrghatvād āyusas tac ca caturthadhyānasatsukham / tyaktvā kecīt mahāsattvā vimuktiṃ samavāpnuyuḥ // 25.42	
sukhaduḥkhābhivicchedād *avyāpārāc ca cetasaḥ / br̥hatphalaiḥ surair nūnaṃ sāmānyaphalam āpnuyāt // 25.43	≈ Bc 12.57,58
tatsamādheḥ samutthāya doṣān ālokya dehinām / dehanirvṛttihetos tajjñānaṃ samabhisādhayet // 25.44	≈ Bc 12.59
vihāya tad api dhyānaṃ viśeṣasukhalālasaḥ / rūpādivirato dehe duḥkhāni ca cāvalokayet // 25.45	≈ Bc 12.60
tato vilokya śuddhātmā dravyeṣu ca ghaṇeṣv api / samākāśādhimuktiṃ ca samutpādyābhilokayet // 25.46	≈ Bc 12.61
ākāśagatam ātmānam abhisamkṣīpya lokayan / yathākāśam anantaṃ hi tathātmānaṃ vyalokayet // 25.47	≈ Bc 12.62
viśeṣādhigamād ātmakauśalyād api cātmani / ātmānam abhisamkṣīpya kiṃcin nāstīti cintayet // 25.48	≈ Bc 12.63
ākīṃcanyam iti jñātvā sarvaśūnyādhimuktikaḥ / śārīravirahān mukta ity abhidhīyate khalu // 25.49	≈ Bc 12.64
iti tenārṣiṇākhyātaṃ bodhisattvo niśamya saḥ / dhyātvā vicārayann eva manasā samacintayat // 25.50	≈ Bc 12.68
yadi cetayitāsty eva kuto muktir bhaviṣyati /	

tasmin sati [179b] pravartante kuśālākuśalakriyāḥ // 25.51	≈ Bc 12.69~71
yathāmbuvirahād bhūmyāṃ bījaṃ rūḍhaṃ na kenacit /	
tatpratyaye hi rūḍhaṃ syāt tadvad ātmāpi gr̥hyate// 25.52	≈ Bc 12.72
karmājñānaspr̥hātyāgāt mokṣo niścīyate yataḥ /	
saty ātmani tu tattyāgaṃ nopalabhāmahe khalu // 25.53	≈ Bc 12.73
tatparityajato mokṣaḥ kutaḥ kasya kathaṃ khalu /	
ity ahaṃkārasaṃtyāgaḥ saty ātmani kuto bhavet // 25.54	≈ Bc 12.73,74
ahaṃkāre sthitaṃ janmaśrotasīdam jagad api /	
nimagñitaṃ samālokya saddharmaṃ deśayeya hi // 25.55	
iti niścīya vijñō 'sau bodhisattvo mahāmatih /	
punar dhyātvā samādhāya manasaivaṃ vyacintayat // 25.56	
yan maharṣimahāprajñā ārāḍo 'yaṃ vicakṣaṇaḥ /	
nābhijānāti saṃbodhijñānaṃ nirvṛtisādhanam // 25.57	
svātmasukhārtham *evāyaṃ brahmacārī tapovratam /	
carate *muktisaṃprāptuṃ naiva jagaddhitam prati // 25.58	
ahaṃ jagadhitārthāya bodhicaryāvratam caran /	
bodhiṃ prāpya jagat bhadraṃ kṛtvecchāmi sunirvṛtim // 25.59	
aham api mahābhijñō vīryavān smṛtimān kṛtī /	
samādhisadguṇāpannaḥ prajñāśrīmān vicakṣaṇaḥ // 25.60	≈ L 239.1-2; H ii,160.5-6
tad yathāyaṃ samādhāya brahmacārī tapovratam /	
carate svātmamuktyartham careyāhaṃ jagaddhite // 25.61	
iti dhyātvā sa ātmajñō bodhisattvaḥ samāhitaḥ /	
eko 'pramatta ātāpi vyapakṛṣṭo 'carat tapaḥ // 25.62	≈ L 239.2-3; H ii,160.6-7
evaṃ sa virahe 'nyasminn alpakṛcchreṇa tadvṛṣam /	
samāsādy prasannātmā sāksātkṛtvābhyarājate // 25.63	≈ L 239.4-5; H ii,160.8-10
tataḥ sa bodhisattvas tam ārāḍam ṛṣisanmatim /	
samupetya samāmantrya saṃpaśyann evam abravīt // 25.64	≈ L 239.6-7; H ii,160.11-12
etāvata bhavata jñātaṃ tadvaraṃ kiṃ na manyate /	
yady asty etadvaraṃ jñānaṃ tat samādeṣṭum arhati // 25.65	
iti saṃprārthitaṃ tena bodhisattvena saddhiyā /	
sa ārāḍo muniḥ paśyan bodhisattvam abhāṣata // 25.66	≈ L 239.7-9; H ii,160.13-14
etad evābhijānāmi na manye 'ham ito varam /	
idam eva varaṃ jñānaṃ yena brahmam avāpnuyāt // 25.67	
iti tenārṣiṇā proktaṃ bodhisattvo niśamya saḥ /	
tam ārāḍam ṛṣiṃ paśyan punar evam abhāṣata // 25.68	
bho [180a] maharṣe tvayādiṣṭaṃ svātmanirvṛtisādhanam /	
ahaṃ sambodhim āsādy kartum icche jagaddhitam // 25.69	
etaddhetor ahaṃ rājyaṃ tyaktvā bodhivratam caran /	

jagad dharmamayam kṛtvā nirvṛtiṃ prāptum utsahe // 25.70
 etadarthe 'ham āyāmi draṣṭum vaḥ tapasāṃ vidhim /
 kasyāpi vidyate nātra sambodhisāadhanavratam // 25.71
 jñānam ca yat tvayā labdham tat mayāpy abhilabhyate /
 etan na bodhisamprāptyai na cāpi parimuktaye // 25.72
 apy etadvratapuṇyam tu divyaśrīśukhalabdhaye /
 atha vā brahmaloke 'pi samādhisukhaprāptaye // 25.73
 aham sambodhim āsādyā saddharmaṃ prakāśayan /
 jagad bhadramayam kṛtvā nirvṛtaye vrataṃ care // 25.74
 iti tena sudhīreṇa samākhyātaṃ nīsamya saḥ /
 ārāḍas taṃ mahāsattvaṃ sampaśyann punar abravīt // 25.75
 sādhu bhadra mahāsattva yas tvam sambodhikāṅkṣayā /
 bodhicaryāvrataṃ dhṛtvā saṃcarase jagaddhite // 25.76
 gautama yan mayā jñātaṃ tat tvayāpy abhilabhyate /
 tena hy āvām imāñ chiṣyān yojayāvaḥ susaṃvare // 25.77 ≈ L 239.9-11; H ii,160.14-17
 tan mamātrāśrame sthitvā bodhicaryāvrataṃ caran /
 sambuddhabhajanam kṛtvā sādhyā bodhim uttamam // 25.78
 yadā labdhā tvayā bodhis tadā mayāpi lapsyate /
 tata āvām jagallokaṃ prāpayiṣyāvahe 'mṛtam // 25.79
 ity uktvā sa maharṣis taṃ bodhisattvaṃ mahāmatim /
 samabhyarcya sadā bhaktyā śiṣyaiḥ saha samācarat // 25.80 ≈ L 239.12-13; H ii,160.18-19
 evaṃ tenarṣiṇā sārdham kānicid divasāni saḥ /
 bodhisattvas tathā sthitvā sarvān bodhau nyayojayat // 25.81
 evaṃ tatrāśrame sthitvā bodhisattvaḥ samāhitaḥ /
 sambodhipraṇidhiṃ dhṛtvā dhyātvaivaṃ acintayat // 25.82
 nāyam niryāṇiko dharma ārāḍasyāsa sanmateḥ /
 api sambodhisamprāptyai tat sthātum iha nārhyate // 25.83 ≈ L 239.14-16; H ii,160.20-22
 iti nīscitya vijño 'sau bodhisattvaḥ sametya tam /
 ārāḍam munim āmantrya saṃpaśyann evam abravīt // 25.84
 maharṣe 'ham gamiṣyāmi bodhiṃ prāptum jagaddhite /
 tadanujñāṃ pradattvā me suprasannaḥ samāca[181b]ra // 25.85
 iti tena suvīryeṇa samādiṣṭaṃ nīsamya saḥ /
 kālāma ṛṣir ālokyā bodhisattvaṃ tam abravīt // 25.86
 gaccha te vāñchitaṃ kāryam sidhyatu sādhyā drutam /
 bodhiṃ prāpya bhavān atra punar āyātum arhati // 25.87
 iti tenarṣiṇā proktaṃ bodhisattvaḥ prasāditaḥ /
 tathā hīti pratijñāya tataḥ saṃprasthito 'carat // 25.88
 tatrāśrameṣu sarveṣu dṛṣṭvā nānātapovidhīn /

tato gaṅgāṃ sa uttārya rājagṛham upāsarat // 25.89	≈ L 239.17-20; H ii,162.1-4
tatra sa pracaran paśyan puram pañcācalāṅkitam /	
viveśa hlādayaṃ lokān pūrṇendur iva bhāsayan // 25.90	≈ Bc 10.3
taṃ samīkṣya samāyātaṃ gāmbhīryadhairarocitam /	
sarve purāśrayā lokāḥ śrutvāpi vismayam yayuḥ // 25.91	≈ Bc 10.3
ko 'yaṃ brahmā surendro vā ravir vendur athānalaḥ /	
dharmarājo 'tha nairṛtyo varuṇo vānilo 'tha vā // 25.92	≈ L 240.5-7; H ii,162.11-13
yakṣādhīpo 'tha bhūteśo harir vidyādharo 'tha vā /	
siddhaḥ sādhyo 'tha vā rudro vidyādharo 'tha guhyakaḥ // 25.93	
yakṣo 'tha vā ca gandharvaḥ kinnaro vāpi rākṣasaḥ /	
kumbhāṇḍo vātha nāgendro garuḍo vātha dānavaḥ // 25.94	
maharddhika ṛṣir vāpi mantrī māyāvicakṣaṇaḥ /	
bhikṣuveśadharo nūnaṃ draṣṭum iha samāgataḥ // 25.95	
iti vitarkya lokās te taṃ paśyann abhitasthire /	
kecit tam eva paśyantaḥ prānvacaran savismayāḥ // 25.96	
kecit taṃ yatim āmantrya suprasannāśayā mudā /	
vanditvā svagrhe nītvā śuddhāsane nyaveśayat // 25.97	
tataḥ sa taṃ samabhyarcya sapañcāmṛtabhojanaiḥ /	
*saṃkalpya sāñjalir natvā sampaśyan samupāśrayat // 25.98	
tataḥ sa bhikṣur ālokya tasmai dattvā śubhāśiṣam /	
saṃśobhayan pure tatra pracakramāviloladr̥k // 25.99	
taṃ dr̥ṣṭvā samupāyātaṃ kecit saṃharṣitāśayāḥ /	
samabhyarcyābhivandhitvā paśyanto 'nvacaran mudā // 25.100	
saṃkramantaṃ tam ālokya sarvāḥ striyo 'pi harṣitāḥ /	
sampaśyantyo 'bhivanditvā mahānandaṃ samāyayūḥ // 25.101	
narā api tam āyātaṃ dr̥ṣṭvā saṃharṣitāśayāḥ /	
sarve stutvābhivanditvā saṃpa[181a]śyanto mudācaran // 25.102	
rājaśrīr api taṃ bhikṣum rājalakṣaṇamaṇḍitam /	
bhūmīpālārham ālokya samāśrayitum aicchata // 25.103	
evaṃ sarvamanohārī śrīmān sa vijitendriyaḥ /	
vinodya sarvalokānāṃ cintāni niryayau tataḥ // 25.104	
tataḥ śrīmān sa ātmajño nirgato nagarād bahiḥ /	
pāṇḍavaṃ parvataṃ dr̥ṣṭvā muditaḥ samupācarat // 25.105	≈ Bc 10.14
tatra sa yatir āruhya guhāyāṃ praviśan mudā /	
tr̥ṇāsane samāśritya tasthau dhyātvā samāhitaḥ // 25.106	
tatra kaścij jano mārge saṃkramantaṃ śubhendriyam /	
taṃ bhikṣum varuṇaṃ dr̥ṣṭvā vismayākrāntamānasaḥ // 25.107	
samīkṣya sahasā gatvā bimbisārasya bhūpateḥ /	

purataḥ samupāsṛtya praṇatvāitan nivedayat // 25.108
 svāminn atra mahāsattvo bhadralakṣaṇamaṇḍitaḥ /
 nibhṛtātmā yuvā kānto bhikṣur ekaḥ samāgataḥ // 25.109
 so 'tra saṃbhāsayan dṛṣṭvā sarvān sattvān viśodhayan /
 sarvalokamano hṛtya nirgato nagarād bahiḥ // 25.110
 iti tat kathitaṃ śrutvā bimbisāro narādhipaḥ /
 kautukākāraṇācittas taṃ janam evam samādiśat // 25.111
 kva gato 'sau mahāsattvo gaccha tvam sahasā tataḥ /
 yatāśrito mahātmā sa tatra gatvābhidṛśyatām // 25.112
 dṛṣṭvā prṣṭvānvayaṃ tasya kāraṇaṃ cāgater iha /
 sahasāgaccha me cittaṃ saṃbodhayan prasādaya // 25.113
 iti rājñā samādiṣṭaṃ śrutvā sa jana utthitaḥ /
 tatheti prativijñāpya sahasā prācatat tataḥ // 25.114
 sa gacchan sahasā mārga dṛṣṭvā lokān samāgatān /
 kuha yāti yuvā bhikṣur iti sarvān aprcchata // 25.115
 tatprṣṭās te samālokya lokāḥ sarve 'pi taṃ janam /
 sa yāti pāṇḍavaṃ śailam iti pratibabhāṣire // 25.116
 tac chrutvā sa samālokya pāṇḍavaṃ nagam unmukhaḥ /
 āruhya sahasā tatra tadguhāyāṃ upācarat // 25.117
 tatra dhyātvā samāsīnaṃ taṃ yatim niścalendriyam /
 dṛṣṭvopetya mudā natvā saṃpāśyan samupāśrayat // 25.118
 tatra taṃ samupāśīnaṃ dṛṣṭvā sa yatir ātmavit /
 kimarthe tvam ihāyāsi tad vadasva yad icchasi // 25.119
 iti taduktam ākarṇya sa jano nṛpater mudā /
 taṃ yatim sāñjalir natvā saṃpāśayann evam abravīt // 25.120
 bhadantāhaṃ samākarṇya bhava[181b]tāṃ sadguṇaṃ mudā /
 etaṃ śrotuṃ samālabdhuṃ draṣṭuṃ ceha samāvraje // 25.121
 tad bhavān samupādiśya mām api paribodhayan /
 bhavaddharṃ samāruhya saṃtārayitum arhati // 25.122
 kasyānvaye kule jāto bhavān kaś ca bhavatpitā /
 pravrajito yuvā kasmāt kim artham iha tiṣṭhate // 25.123
 iti satyaṃ samākhyātum arhati me bhavān api /
 yadi mayi kṛpā te 'sti vrataṃ me dātum arhati // 25.124
 iti tenoditaṃ śrutvā bodhisattvaḥ sa sanmatiḥ /
 yatis taṃ janam ālokya saṃbodhayitum ādiśat // 25.125
 mama śākyakule janma pitā śuddhodano nṛpaḥ /
 sarvasattvahitārthe 'haṃ bodhicaryāvrataṃ caran // 25.126
 ṛṣṇāṃ iha sarveṣāṃ āśrameṣu samantataḥ /

≈ L 240.5-8; H ii,166(vss).10,11

≈ L 241.7; H ii,166(vs.)11ab

nānātapovidhīn dṛṣṭvā draṣṭuṃ cāham ihāvraje // 25.127
 yadīcchasi vrataṃ me tvaṃ tadā cara vrataṃ mudā /
 bodhiṃ prāpyeha saddharmam upadeśyāmy ahaṃ dhruvam // 25.128
 iti tena samādiṣṭaṃ śrutvā sa paribodhiṭaḥ /
 prañatvā taṃ mahāsattvaṃ tataḥ saṃmodito 'carat // 25.129
 sahasā sa samāgatya nṛpateḥ samupācaran /
 pādaṃ natvā puraḥ sthitvā saṃpaśyaṃs taṃ nyavedayat // 25.130
 svāminn asau mahāsattvaḥ śuddhodananṛpātmajaḥ /
 sarvasattvahiṭārthena bodhicaryāvrataṃ caran // 25.131
 ṛṣiṇām iha sarveṣāṃ āśrameṣu samantataḥ /
 nānāvratavidhīn dṛṣṭvā draṣṭuṃ ceha samāgataḥ // 25.132
 idānīṃ sa mahāsattvo yatir ekaḥ samāhiṭaḥ /
 guhāyāṃ pāṇḍave śaile dhyātvāsane niṣīdati // 25.133
 evaṃ dṛṣṭvā tadākhyātaṃ śrutvāhaṃ vismitāśayaḥ /
 nivedituṃ prabhor agre bhavataḥ sahasāvraje // 25.134
 nūnam asau mahābhijño bodhisattvo jagaddhite /
 sambodhijñānam āśādy saṃbuddho dharmarāḍ bhavet // 25.135
 iti tenoditaṃ śrutvā bimbisāro nṛpo mudā /
 atyadbhutam iti proktvā taṃ samīkṣituṃ aicchata // 25.136
 tataḥ so 'śvaṃ samāruhya mantribhṛtyajanānvitaḥ /
 sahasā pracaraṃs tatra pāṇḍave 'drau mudāsarat // 25.137
 tatra paśyan samāruhya guhāyāṃ samupāsaran /
 dhyātvāsanasamāsīnaṃ taṃ yatiṃ samapaśyata // 25.138 ≈ Bc 10.18
 samīkṣya taṃ [182a] sukhāsīnaṃ nṛpatiḥ sa pramoditaḥ /
 prañatvā suprasannāsyāṃ saṃpaśyan samupāśrayat // 25.139 ≈ Bc 10.19
 taṃ narendraṃ samāsīnaṃ bodhisattvaḥ samīkṣya saḥ /
 suprasannamukhāmbhojaḥ saṃpaśyann evaṃ ādiśat // 25.140
 ārogyam astu te rājan sarvatrāpi śivaṃ sadā /
 dharmābhisādhanaṃ kāryaṃ sidhyatu ca samīhitam // 25.141 ≈ Bc 10.20
 tatpradattāśīsaṃ śrutvā bimbisāro narādhipaḥ /
 bhūyas taṃ sāñjalir natvā saṃpaśyann evaṃ abravīt // 25.142
 bhadanta bhavato janma kasyānvaye kule ca te /
 kaḥ pitā jananī kā ca satyam etad bravītu me // 25.143 ≈ L 242.20-22; H ii,172(vs.)28
 iti saṃprārthitaṃ rājñā bodhisattvo niśamya saḥ /
 taṃ narendraṃ samāloky vihasann evaṃ abravīt // 25.144
 yo 'sau śuddhodano rājā nṛpādhipaḥ pitā mama /
 māyākyā jananī yā sā mātā yā gautamī smṛtā // 25.145 ≈ L 243.2-3; H ii,172(vs.)29
 iti tena samākhyātaṃ śrutvā śreṇyo narādhipaḥ /

taṃ yuvānaṃ yaṭiṃ bhikṣuṃ samīkṣyaivam abhāṣata // 25.146
 asau śuddhodano rājā cakravartī mahīpatiḥ /
 asmākam adhipo bhartā guruḥ śāstābhipālakaḥ // 25.147
 yad bhavataḥ pituḥ śiṣyā vyaṃ sarve nṛpā api /
 tad bhavān api naḥ śāstā rājyādhipo 'pi sanmate // 25.148 ≈ L 243.5-6; H ii,174(vs.)30
 tad atraiva sadā svāmin rājyāśrame samāśrayan /
 yathākāmaṃ sukhaṃ bhuktvā saṃcarasva yatheccchayā // 25.149
 saṃpradāsyāmy ahaṃ te 'rdharājyaṃ sarvārthasaṃyutam /
 tad atra sarvadāśritya sukhaṃ bhuktvā samācara // 25.150 ≈ L 241.13-14; H ii,168(vs.)14
 yāvad bhavān yuvā kānto daharo divyasundaraḥ /
 tāvan nṛpāśrame sthitvā rājadharmavrataṃ cara // 25.151 ≈ L 241.17-18; H ii,168(vs.)16
 dāsyāmi te subhadrāṅgī rāmā dharmānucāriṇīḥ /
 tābhiś ca saha *saṃrakṣan kulacaryāvratam cara // 25.152
 mayā saha sadā rājyakāryaṃ kṛtvā prajā avan /
 dattvārthibhyo yathākāmaṃ saṃcarasva kulavratam // 25.153 ≈ L 241.19-20; H ii,168(vs.)17
 kim anenātiduṣṭena bhikṣucaryāvratena te /
 śmaśāne jaṃgale 'raṇye niḥsahāyaḥ katham vaseḥ // 25.154 ≈ L 241.21-22 H ii,168(vs.)18
 cakravartikule jātaḥ pravrajito yuvādhunā /
 sukule duḥkule bhikṣaṃ yācitvā katham āhareḥ // 25.155
 divyakāśikaśubhrābhadūṣyacīṇāṃśukāvṛtaḥ /
 tāni tyaktvā [182b] katham śobheḥ kāśāyacīvarāvṛtaḥ // 25.156
 sarvaratnamayaṃ kāntaṃ makuṭaṃ bhūṣaṇāny api /
 ratnamayāni hitvaivaṃ muṇḍako nābhiśobhase // 25.157
 sugandhitailasaurabhyacūrṇaprasādītāśrayaḥ /
 dhūsarapāṃśuliptāṅgo naivābhiśobhito 'dhunā // 25.158
 saṅgītinṛtyasaṃcāramahotsāhair divānīśam /
 mandire 'bhiramitvātra vane katham sukhaṃ rameḥ // 25.159
 khaṭvātūle sugandhyāḍhyasukomalāmbarāstrīte /
 śayyāsane sukhaṃ suptaḥ śayīthā bhūtrṇe katham // 25.160
 praṇītabhojanaṃ tyaktvā varṇagandharasānvitam /
 bhaikṣalūhānnaṃ āsvādyā katham saṃtoṣito bhaveḥ // 25.161
 sugandhi surasaṃ pāṇaṃ hitvā divyāmṛtopamam /
 pītva nīrasam evāmbu katham saṃtṛpito bhaveḥ // 25.162
 viprarājasutāmātyamantrijanasamanvitaḥ /
 ramitvātrādhunāraṇye niḥsahāyo rameḥ kuha // 25.163
 stūyamānaḥ sadā viprair bandibhiś ca vicakṣaṇaiḥ /
 bhyasiṣyase 'dhunāraṇyaiś ca jambukāḍijantubhiḥ // 25.164
 pācakaṃ surasaṃ tyaktvā tāmbulādirasāyanam /

skandhamūlapalāśāś ca bhuktṡā katham sukham labheḥ // 25.165
 gajās ca yānam utsrjya katham padbhyām vane careḥ /
 pūrapātrotsavam tyaktṡā kim utsāham vane labheḥ // 25.166
 nityam sabhāsanāsīnaḥ sarvalokābhivanditaḥ /
 katham eko vane durge nīvaser duṣṭacauravat // 25.167
 dattvārthibhyo yathākāmam sadā sarvahitārthabhṛt /
 phaladalatṛṇāny eva bhuktṡā puṣṭo bhaveḥ katham // 25.168
 svapuram svargasamkāśam bhadraśrīsadguṇāśrayam /
 vihāya durgame 'raṇye katham eko vaseḥ careḥ // 25.169
 evam nānābhayasthāne duḥkhāni vividhāny api /
 bhuktṡā caran tapo 'raṇye kim puṇyasukham āpsyasi // 25.170
 divyaśrīsukhasampattis tyaktṡā pravrajito yuvā /
 kim anyatsukhasampattiṃ samprāpsyasi katham kutaḥ // 25.171
 evam matvā mahatkaṣṭam pravrajyāvratam utsrjeḥ /
 kim etadvratapuṇyena sadgatisukham āpsyasi // 25.172
 yadi puṇye 'sti te vāñchā tyaktvedam duṣkaravratam /
 [183a] kulacaryāvratam dhṛtvā saṃcarasva samāhitaḥ // 25.173
 dattṡā dānam sadārthibhyaḥ kṛtvā lokahitam mudā /
 yathākāmam sukham bhuktṡā saṃcarasva kulavratam // 25.174
 etadvratam mahatsiddham svaparātmahitamkaram /
 etatpuṇyānubhāvena sadātra bhadrasatsukham // 25.175
 paratrāpi sadā svarge divyaśrīsukham āpnuyāt /
 sadāpi sadgatau yāyād durgatau na kadāpi hi // 25.176
 iti matvā mahāsattva rājyāśrame samāśritaḥ /
 mayā sārddham sukham bhuktṡā saṃcarasva kulavratam // 25.177
 tathā cet te sadāpīha maṅgalasatsukham bhavet /
 paratrāpi sadā svarge divyaśrīsukham āpsyasi // 25.178
 iti tena narendreṇa samākhyātam nīsamya saḥ /
 bodhisattvo mahāsattvas tam nṛpam evam abravīt // 25.179
 sādhu rājan tvayākhyātam saṃsārasukhasāadhanam /
 tathāpīha pravakṣye 'ham abhiprāyam śṛṇuṣva me // 25.180
 yad aham kleśāgnisamtaptaṃ jagat traidhātukodbhavam /
 dṛṣṭvā dayārditasvāntaḥ saṃsārabhogyaniḥsprhaḥ // 25.181
 tadduḥkhāgnimahattāpaṃ dharmāmṛtābhivarṣayan /
 śamīkṛtya jagad bhadram kartum icchāmi bhūpate // 25.182
 etad dhetor aham rājyam tyaktṡā saddharmalālasaḥ /
 pravrajyāsaṃvaram dhṛtvā saṃbodhiṃ prāptum utsahe // 25.183
 etadarthe 'ham utsrjya divyātisundarāny api /

ṣaṣṭibhāryāsahasrāṇi sarvāṃś cāpi parigrahān /
 jñātibandhusuhṛdbhrtyān pravrajya svayam āgataḥ // 25.184
 nāhaṃ kāmagaṇe rakto rājyaśrīsatsukheṣv api /
 saddharma eva rakto 'smi sambodhijñānasādhane // 25.185
 kāmā anekadoṣā hi narakaduḥkhaḥetavaḥ /
 praṇītāḥ surasā bhogyāḥ saviṣā iva duḥkhadāḥ // 25.186 ≈ L 242.3-4; H ii,170(vs.)20
 kāmārthe hi sadā devā yudhyante saha dānavaiḥ /
 kāmārthe kṣatriyā naṣṭā yuddhe hatvā parasparam // 25.187
 kāmārthe brāhmaṇā vijñā ṛṣayo 'pi tapasvinaḥ /
 kleśānalābhisamṭaptā bhraṣṭāḥ sattvāpakāriṇaḥ // 25.188
 sarvadravvyādhipā vaiśyā api kāmābhirāgiṇaḥ /
 veśyāvaśābhisamṣaktā nirdravyā duritāśayāḥ // 25.189
 sādhave dhaninaḥ śūdrā śreṣṭhi[183b]naḥ sajjanā api /
 kāmārthe sevakāḥ strīṇāṃ vaśagā dāsatām gatāḥ // 25.190
 vaṇijaḥ sārthavāhāś ca dravyārthino mahodadhau /
 nipatitāḥ saha dravyais tad api kāmahetunā // 25.191
 tathānye vaṇijaś cāpi dravyārthinaḥ samantataḥ /
 bhramanto duḥkhasamkliṣṭāś tad api kāmakāraṇāt // 25.192
 kṛṣṇo 'pi sadā nityakṛṣikarmābhisamrataḥ /
 aviśrāntātiduḥkhartāś tad api kāmahetunā // 25.193
 tathā bhāravahanto 'nye laṅghitvā parvatān api /
 aviśrāntātikhedartāś tad api kāmakāraṇe // 25.194
 daridrā api kāmārthe parakarmaratāḥ sadā /
 kṛpaṇā api bhikṣārthaṃ bhramanto duḥkhakheditāḥ // 25.195
 kulīnāḥ sajjanāś cāpi kāmakleśākulāśayāḥ /
 nīcānām api nārīṇāṃ vaśagā dāsatām gatāḥ // 25.196
 amātyā mantriṇo bhrtyā sainyaś cābhyanujīvināḥ /
 kāmamadābhimānāndhā daśākuśalacāriṇaḥ // 25.197
 nṛpā api ca kāmārthe nītidharmanirādarāḥ /
 svacchandacāriṇo mugdhā samcarante 'śubheṣv api // 25.198
 paṇḍitā brāhmaṇā vijñāḥ sarvavidyāvīdo 'pi ca /
 bhūpānām dhaninām bhrtyā bhavanti kāmahetunā // 25.199
 kim evaṃ bahunoktena sarve 'pi kāmahetunā /
 tyaktvā dharmāṇi pāpāṇi kṛtvā vrajanti durgatau // 25.200
 tatratiduḥkhabhuñjānāḥ samvṛtisabhyānindakāḥ /
 mahāpātakasamraktāḥ pracarante sadāśubhe // 25.201
 evaṃ te hy atipāpiṣṭhā asahyavedanāturāḥ /
 cirāt kṛcchreṇa hitvāṅgaṃ gaccheyur narakeṣu ca // 25.202

evaṃ kāmaraṭā duṣṭā daśākuśalacāriṇaḥ /
 bhramanto durgatiṣv eva bhavanty evātiduḥkhitāḥ // 25.203
 iti vijñāya saṃsāre kāmaṃ sadbhir vigarhitam /
 duṣṭā hi saṃnibhaṃ mīḍhaghaṭam ivābhipūtikam // 25.204
 iti matvā mahāpāpaṃ kāmaṃ saddharmanāśakam /
 tyaktvā gṛhāśramaṃ santo vanāśrame samāsthitaḥ // 25.205
 skandhapattraphalāny eva bhuñjānās tuṣitendriyāḥ /
 samādhisadrasāhārā nivasanti mahāsukham // 25.206
 sarve 'pi sugatās tyaktvā kāmāśrayaṃ gṛhāśramam /
 pravra[184]jyāsaṃvaram dhṛtvā nivasanto vanāśrame // 25.207
 samādhinihitātmāno jivā māragaṇān api /
 sambodhiratnam āsādyā bhūtvā śrīsadguṇākaraḥ // 25.208
 saddharmaṃ samupādiśya traidhātubhuvaneṣv api /
 jagad dharmamayaṃ kṛtvā saṃprayātā jinālayam // 25.209
 aham api tathā rājan bodhicaryāvratam caran /
 jagad dharmamayaṃ kartuṃ sambodhiṃ prāptum utsahe // 25.210
 etaddhetor ahaṃ tyaktvā rājyaṃ sarvān parigrahān /
 kāmabhogyanirutsāhaḥ pravrajitaḥ samācare // 25.211
 pravrajyāsaṃvaram dhṛtvā bhadraṃ kurvan samantataḥ /
 sambodhim abhisamprāptum iha draṣṭuṃ mudā vraje // 25.212
 rṣiṇām api sarveṣāṃ āśrameṣu samantataḥ /
 nānātapovidhīn dṛṣṭvā draṣṭuṃ ihāpi prāsare // 25.213
 kuhāpi kasyacin nāsti sambodhisādhanaṃ vratam /
 ato 'haṃ tatra yāsyāmi yatrāsti bodhir uttamā // 25.214
 yāvan nādhigatā bodhis tāvad rājye na yāsyate /
 yadā saṃprāpyate bodhis tadābhigamyate mayā // 25.215
 nūnaṃ saṃprāpya sambodhiṃ saddharmaṃ saṃprakāśayan /
 jagad bhadramayaṃ kṛtvā saṃyāsyāmi jinālayam // 25.216
 tadādiṣṭam iti śrutvā bimbisāro narādhipaḥ /
 prabodhito mahāsattvaṃ taṃ paśyann evaṃ abravīt // 25.217
 sādhu saṃdṛśyate śāstā bhavān iha samāgataḥ /
 vayaṃ hi bhavataḥ śiṣyāḥ śaraṇe sarvadā sthitaḥ // 25.218 ≈ L 243.5-6; H ii,174(vs.)30
 yan mayā vītarāgo 'pi brahmacārī jīten-driyaḥ /
 mayā rājātimattena rāgadhar-me nimantritaḥ // 25.219
 tan me 'parādhātāṃ śāstar bodhisattvo bhavān yatiḥ /
 saṃpaśyan kṛpayā dṛṣṭvā kartum arhati sarvadā // 25.220
 yadā sambodhim āsādyā sambuddho bhagavān bhavet /
 tad ihāpi samāgatya dharmam ādeṣṭuṃ arhati // 25.221 ≈ L 243.7-8; H ii,174(vs.)31

vayaṃ sarve 'pi saddharmaguṇābhilāṣiṇā mudā /
bhavataḥ samupāśritya dharmam śroṣyāmy ahaṃ khalu // 25.222
satkārair bhavatāṃ nityaṃ śaraṇe samupasthitāḥ /
samabhyarcyābhinandantaḥ prabhajīṣyāmahe mudā // 25.223
bhavatā yad yathādiṣṭam tan niśamya tathādarāt /
vahantaḥ śirasā nityaṃ saṃcariṣyāmahe sadā // 25.224
iti bhavān anusmṛ[184b]tvā samāgatyeḥa bhāsayan /
saddharmam samupādiśya vihartuṃ sarvadārhati // 25.225
iti saṃprārthitaṃ rājñā śrutvā sa yatir ātmavit /
tathā hīti samādiśya tūṣṇībhūtvādhyuvāsa tat // 25.226
tataḥ sa nṛpatī rājā bimbisāraḥ samutthitaḥ /
bodhisattvaṃ tam ānatvā sajanaḥ svapuraṃ yayau // 25.227 ≈ L 243.9-10; H ii,174(vs.)32
tataḥ sa bodhisattvo 'pi samutthāya prabhāsayan /
samīkṣya bhadraṭam kurvan vindhyācalam upācarat // 25.228
iti mama purā *śrutam {or: vṛttam} sāmpratam tan mayocyate /
tvam apy etan mahāsattva śrutvānumodanāṃ kuru // 25.229
śrutvedaṃ ye 'numodanti buddhajanmasubhāṣitam /
te bhaveyur mahāsattvo bhadrāśrīsadguṇāśrayāḥ // 25.230
iti śāstrā samādiṣṭam śrutvā*śoko *nṛpo {or: śrutvānando yatir} mudā /
tathety abhyānumoditvā prābhyanandat sapārśadaḥ // 25.231

// iti magadhādhipatibimbisāraṃrāṇpābhisamgatiparivarto nāma pañcaviṃśatitamo 'dhyāyaḥ
samāptaḥ //

Apparatus criticus of the chapter 25

- 1a athāśoko mahīpālaḥ] A(ante corr.): athānando mahāsattvaḥ A(post corr.) B D.
1c bhagavantaṃ yatiṃ natvā] A: śākyasiṃhas tam ānandaṃ B D.
3c *upagupto mahīpālaḥ] A(ante corr.): śākyasiṃhas tam ānandaṃ A(post corr. marg.).
6b °kṣubhitāśayaḥ] A: °sobhitāśayaḥ BD.
14b yathocitam] A: yathepsitam B D.
16c bhavān māṃ kṛpābuddhyā] A: bhavāṃ svam kṛpān dṛṣṭvā B D.
31c nirmukteḥ] corr.: nimukteḥ A.
39a tasmāt] corr.: tasmā A B D.
41b yo 'py *upekṣām] ex con: yo py apekṣām A: tpyo(?) vyapakṣām B D.
43b *avyāpārāc] ex con: avyāpādāc A: avyāpādā D: evyāpādā B.
43d sāmānyaphalam] corr.: sāmānyaphalam A B D.
49a ākiṃcanyam] corr.: ākiṃcinyam A B D.

51a eva] A: evaṃ B D.
 58a *evāyaṃ] ex conī: evāryaṃ A B D.
 58c *muktisaṃprāptaṃ] ex conī: vimuktiprāptaṃ A: vimuktisaṃprāptaṃ B D.
 69d jagaddhitam] A: jagaddhite B D.
 76a bhadra] A B: vraja D.
 78a mamātrāśrame] corr.: mamātra śrame A B D.
 83a niryāṇiko] corr.: niryāniko A B: nirvāniko D.
 98c *saṃkalpya] ex conī: sāmkaḷpya A B: sāmkaḷpa D.
 102c sarve stutvā] corr.: sarva stutuvā B D: sarve bhistutvā A.
 104a evaṃ] A B: sarvaṃ D.
 111a tatkaḥhitam] A: tatvāthinam B: tatvārtham D.
 135c samādhijñānam] A: sambodhijñānam D.
 138a atra paśyan] A: tatra aśvan D.
 139d samupāśrayat] corr.: samupāśrayan A D.
 152c *saṃrakṣan] ex conī: saṃrakṣaḥ A D.
 159b °mahotsāhair] corr.: °mahautsāhair A: °mahotsāhai B D.
 182d bhūpate] A B: bhūtale D.
 197b cābhyanuḥjivinaḥ] A(post corr. marg.) B D: cānuḥjivinaḥ (ante corr.).
 222d dharmam] A(post corr. marg.) B: dharma D: sadā (ante corr.).
 226 tūṣṇībhūtvā] A: tuṣṇībhūtvā B: tuṣṇībhūtā D.
 229a iti mama purā *śrutaṃ] ex conī: iti mama purā vṛttaṃ] A B D. — In A, letters of mama purā vṛttaṃ sāmpratam are newly overwritten letters.
 231b śrutvā*śoko *nṛpo] ex conī (cf. TJAM 8.242): śrutvānando yatir A B D. — In manuscript A, the words ānando yatir show traces of later overwriting.
 (Colophon:) iti magadhā°] A: iti śrīlālitavistare magadhā° A(marg.) B D || paṃcaviṃśatitamo]
 A B: trayaviṃśatitamo D.

『マガダの君主ビンビサーラ王が会いに来た』という第25章

さて大地の守護者アショーカ王は {或いは：大士アーナンダは} 合掌して近づき、世尊・出家行者に拝礼し、見つめてこのように言った。(25.1)

「尊師よ、かの大士は、その後どこに歩いて行かれたのですか。それを私に教示し、よく理解させてください。」(25.2)

こう、彼が求めたのを聞いて、かの大慧者・阿羅漢ウパグプタは王を {或いは：釈尊はアーナンダを} 見つめて、このように語った。(25.3)

— その後、かの菩薩は出発し、輝きながら、都城ヴァイシャーリーの近くにある苦行林にやってきた。(25.4)

その地の隠棲処に住む、最も勝れた仙人たるアーラーダ・カーラーマは、遠くから彼が輝きながらやってくるのを見た。(25.5)

その仙人は見ると、驚きに心を乱し、気を動転させた。『ここにやって来た方はどなただろう』と呟き、彼に近づいていった。(25.6)

そのアーラーダ・カーラーマはそこにやって来ると、大慧者・大通慧者たる菩薩を見つめて、このように言った。(25.7)

「おお、ようこそいらした。大きな天恵の方よ。あなたはどなたですか。どこから来られたのですか。その本当のことを教えて、私たちすべての者に理解させて下さい。」(25.8)

彼がそう尋ねたのを聞き、善慧者たるその菩薩は、その大仙を見つめ、よく理解させるために答えた。(25.9)

「大仙よ、私はシュッドーダナ王の息子です。すべての生類に益をもたらす、菩提行の誓戒を行じています。(25.10)

それ故に解脱の安楽を求めて、あなた方がなす此処での苦行誓戒の勝れた性質を見るために、やってきました。」(25.11)

彼が語ったことを聞いて、その大仙はよく理解し、彼を招いて隠棲処に導き、籐の椅子に坐らせた。(25.12)

そこに彼が坐ったのを見て、その仙人は丁重に、作法通りに敬意を示し、食事をもって満足させた。(25.13)

その後、かの大士は適切な食物を食べてから、その草庵の座に坐り、夜じゅう禪定に耽って過ごした。(25.14)

その後明け方に立ち上がると、菩薩はそのアーラーダ仙のもとへ行き、話しかけ、見つめながらこう言った。(25.15)

「大仙よ、あなたがお持ちの『聖知（ブラフマンの知）の完全達成』を私は欲します。それ故、同情の思いにより、どうか私をお導き下さい。」(25.16)

立派な志をもつ菩薩からそのように懇請されて、そのアーラーダは菩薩をじっと見つめ、嬉しく語った。(25.17)

「善い哉。大きな天恵の人よ、私の隠棲処で、梵行を行いなさい。労苦少なく、速やかに解脱に達することであろう。」(25.18)

そう彼が答えたのを聞き、菩薩はその大仙アーラーダに丁重に質問した。(25.19)

「あなたの法（教え）とはどのようなものでしょうか。また、それはどのようにして到達されるのでしょうか。真理を見極めたいと願う私に、あなたはどうかお説き下さい。」(25.20)

立派な志を持った菩薩がそのように懇請するのを聞き、大仙アーラーダはその菩薩にこう語った。(25.21)

「善い哉、大きな天恵の人よ、よくお聞きなさい。真理と呼ばれるところのもの、それを私はあなたに語ろう。聞いて、学びなさい。(25.22)

『元のもの』(prakṛti)と『変化の結果生じたもの』(vikāra)の真理、それが『場』(kṣetra)と呼ばれる。それを明瞭に知る者は『場を知る者』(kṣetrajña)と呼ばれる。また賢者たちは『場を知る者』がアートマン[とも呼ばれる]と知っている、とそれを知る者たちは説く。(25.23)

生と滅から出来ている法(現象)は死の性質を具えている。それが『現れているもの』(vyakta)であると理解せよ。その逆が『現れていないもの』(avyakta)である。(25.24)

無知、行為(業)、欲望(渴愛)は、輪廻的生存の流転の原因である。そこに置かれている生き物は『有の性質』(sattva)なしに存在しない。(25.25)

それは誤った理解(vipratyaya)、自己中心たること(ahaṁkāra)、混同(saṁdeha)、混乱(abhisamplava)です。区別不能(aviśeṣa)であり、間違った方法(anupāya)であり、執着(saṅga)であり、思考の転落(abhyavapātaka)である。(25.26)

生き物にとっての輪廻的生存の原因、それは「怠惰」(ālasya)と呼ばれる。そして「暗愚」(tamas)、「蒙昧」(moha)、「落胆」(viṣāda)、そして第五の「暗黒」(tāmisra)がある。(25.27)

五つの肢節を有するこの無明(avidyā)によって縛られた心を持つ者は、誕生などにおいて大きな苦しみをもち、何度も何度も輪廻する。(25.28)

ここで『見る者、聞く者、考える者、結果をもたらす者は私である』と思い込んで、彼は輪廻の中をいつまでも彷徨う。(25.29)

これらの原因によって、生涯が水の流れのように生じると言われる。原因がなければ、輪廻において生涯の発生がないのは確かである。(25.30)

『場を知る者』(kṣetrajña)たる賢者はこの四つから成るものを理解し、すべての苦しみから解放され、不滅の境地を得るであろう。(25.31)

そのように考え、輪廻的生存の束縛である本源の種子を捨て、宗教者の標識(liṅga)を携え、輪廻界の中にあっても快樂への意欲を起こさない者として、(25.32)

知足を有し、淨らかな知性と清い戒律、清い心を有する出家行者は、至高の境地を得るために、森の隠棲処に住むべきである。(25.33)

その後、愛欲の離欲から生じる、恐れを離れた至福について考えつつ、淨らかな知性をもつ者は、すべての感官の群を抑制し、心の寂靜に依り、禪定に集中しながら過ごすべきである。(25.34)

そうすれば、欲望を離れ、悪意や煩悩を離れた、驚くべき第一の禪定(初禪)に達する。それは『大まかに探る働きの思考(尋)』を伴った、分別の結果として生じたものだ。(25.35)

欲望や煩悩を拒否する、このような幸いなる寂靜をそなえもつ者は、[ブラフマン(梵)の]世界の光を得るであろう。(25.36)

それらの『大まかに探る働きの思考（尋）』が心に動揺を引き起こすものだと知って、それらから解放された、『喜』と『楽』より成る第二の禪定に達し、(25.37)

その〔禪定の〕『喜』に魅了される心の者は、更に、アーバースヴァラという天界の神々の中に誕生を得るであろう。(25.38)

その後、その『喜』と『楽』から心を離れさせて、彼は更に、『喜』を伴わない『楽』だけがある第三の禪定を得るであろう。(25.39)

そしてその第三禪定に沈潜した心の者は、遍浄天の神々の中に必ず再生を得るであろう。(25.40)

そのような『楽』に達した後、『捨』をなす者は、安楽も苦痛も離れた第四の禪定に達するであろう。(25.41)

寿命が長いがゆえの、その第四禪定がもつ本当の安楽さえ捨てて、或る大士たちは解脱を得ることであろう。(25.42)

また安楽と苦痛を断絶することによって、心の活動が停止することによって、広果天の神々と等しい果報を得るであろう。(25.43)

その三昧から出て、肉体を持つ者たちの欠点を見て、肉体の消滅の原因となるその智慧を完成させよ。(25.44)

その禪定さえ捨てて、格別な安楽を願う者は、[美しい] 姿かたちなどを喜ばず、肉体での様々な苦を観よ。(25.45)

その後、淨らかな心で、物体や固い塊においても等しい虚空（空間）があることに確信を生じさせながら、それらを観よ。(25.46)

虚空に存在するものとしての、アートマンを収斂させ、見つめながら、虚空が無限であるように、アートマンもそのようなものとして観よ。(25.47)

特別な達成により、またアートマンの熟達により、アートマンの内にアートマンを収斂してゆき、「何ものも存在しない」と考えよ。(25.48)

『無所有』（いかなるものも存在しない）と知って、すべてが空であるという確信を持つ者は、肉体を離れた後に解脱者になると、そう説かれる。」(25.49)

以上のその仙人が説いたことを聞いて、菩薩は沈思し、よく検討して、心の中でこのように考えた。(25.50)

「もし『意識する者』（cetayitr = アートマン）が依然として残るなら、どうして解脱があり得ようか。それが存在する限り、善悪の行為が生じ続ける。(25.51)

水を欠いては大地に種子は決して芽吹かないが、その機縁がある時[大地に] 芽吹く。それと同じ様にアートマンも理解される。(25.52)

行為（業）と無知と欲望（渴愛）を捨てることで解脱が決定される、との意見であるが、アートマンが存在する限り、それら三者を捨てることは実際にはありえない。(25.53)

それらを捨て去ることによる解脱が、何故に、誰に、どのようにしてあるのか。アートマンが存在する限り、どうして我執（アハンカーラ）を捨てることができようか。(25.54)

我執の中にいて〔再〕誕生の流れの中に沈んでいるこれらの生類をみつめながら、私は正法を説こう。」(25.55)

このように決意すると、大慧者、かの菩薩・大士は、再び沈思し、思いを定めて心中にこのように考えた。(25.56)

「この大仙、大智慧者アーラーダは、賢者ではあるが、寂滅の至福（涅槃）の成就である菩提の智慧をもたない。(25.57)

この梵行者は自分自身の安楽のためだけに解脱を得ようとして、苦行の誓戒を行じている。それは世の生類の益をめざして、ではない。(25.58)

私は世の生類の益のために菩提行の誓戒を行じ、菩提を得て、生類に安寧をもたらし、よき涅槃を欲する。(25.59)

私もまた大通智をもち、精進力があり、正念を有し、善巧者であり、三昧の善き徳性を具足し、智慧の栄光を有する賢者だ。(25.60)

だから、この梵行者が自身の解脱のために心を定めて苦行の誓戒を行じるように、私は世の生類の益のために行じよう。」(25.61)

このように沈思すると、自己知者たる菩薩は集中して、たった独り、不放逸に熱心に〔人なき場所に〕遠離をなし、苦行を行じた。(25.62)

このように彼は、或る遠離した場所で労苦少なくしてその勝れた法を達成し、明るく澄んだ心でついに現証を成し遂げ、輝いた。(25.63)

その後菩薩は、仙人の善慧者たるそのアーラーダのもとに近づき、挨拶をして見つめながらこのように言った。(25.64)

「あなたはこのような範囲まで〔の境地を〕お知りになりましたが、それより勝れたものを考えていないのですか。もしこれよりも勝れた、お知りになったものがあれば、それをお教えてください。」(25.65)

勝れた洞察をもつ菩薩からそのように求められ、アーラーダ仙は菩薩を見つめて語った。(25.66)

「これのみを私は知っている。これより勝れたものがあるとは私は思わない。これこそが、それによってブラフマン（梵）が得られる、勝れた知である。」(25.67)

そう、その仙人が答えたのを聞くと、菩薩はアーラーダ仙を見つめて再びこのように語った。(25.68)

「ああ、大仙よ、あなたは自分自身のためだけの涅槃の成就をお説きになられます。しかし私は菩提に達して世の生類を益したい。(25.69)

その目的のために私は王位を捨てて菩提の誓戒を行じており、世の生類を善法から成る者に変えてから、涅槃を得たいと希望するのです。(25.70)

その目的のため、私はあなた方の苦行のしかたを見に参りました。ここには誰一人として、菩提を成就する誓戒をもつ者はおりません。(25.71)

あなたが獲得した〔瞑想の〕知は、私もまた得ています。しかしこの知は菩提の達成のためにも、完全な解脱のためにも役立ちません。(25.72)

むしろ〔あなたの〕この誓戒の功德は、天界の栄光と安樂を得るため、あるいは、ブラフマー神たちの世界（梵天界）で三昧の安樂を得るためのものです。(25.73)

私は、菩提に達して正法を明らかに示し世の生類を幸せな存在に変えて、それから涅槃に入るために、〔今〕誓戒を行じています。」(25.74)

こう、確たる心をもつ彼が語ったことを聞くと、アーラーダはその大士を見つめて、再び言った。(25.75)

「善き哉。幸ある人、大士よ。あなたは菩提を希求し、菩薩行の誓戒を堅持して、世の生類の益のために歩んでいる。(25.76)

ガウタマよ、私が知り得たことは、あなたも得られている。それ故、われら二人でこれらの弟子たちを、よき禁戒において教導しようではないか。(25.77)

そこで、あなたは私のこの修行所に留まって、菩提行の誓戒を行じながら、仏たちを尊崇し、最高の菩提を成就しなさい。(25.78)

あなたが菩提を得たなら、その時それを私も得られるであろう。そうしたら我ら二人で世の生類・人類に不死の甘露を得させよう。」(25.79)

このようにその大仙は語って、大慧者たるその菩薩を恭敬供養しながら、弟子たちと共に常に篤い尊崇の念をもって暮らした。(25.80)

このようにかの菩薩はその仙人と一緒に、何日もの間そこに滞在し、すべての人々を菩提〔への道〕に導き入れた。(25.81)

このように菩薩はその隠棲処に滞在しながら、心を集中させ、菩提への弘誓を堅持して、沈思してこのように考えた。(25.82)

「あの善慧者アーラーダのこの教法は、解脱に導くものではなく、菩提の獲得にも役立たない。それ故、ここに居ることは私にふさわしいことではない。」(25.83)

こう、賢明な菩薩は決意すると、その仙人アーラーダのもとへ行き、彼を呼んで、見つめながらこう述べた。(25.84)

「大仙よ、私は世の生類の益のため、菩提を得るべく出発いたします。私にその許可をお与えになり、明るく澄んだ心でお過ごし下さい。」(25.85)

このように、強い精進者たる彼が告知したのを聞き、カーラーマ仙人は菩薩を見つめてこう答えた。(25.86)

「行きなさい。あなたの求める目的が達成されますように。速やかに成就しますように。菩提を得たら、あなたはここに再び戻ってきて下さい。」(25.87)

そう、その仙人が答えたのを聞いて菩薩は喜び、「そうします」と約束してそこから出発し、歩みを進めた。(25.88)

その地のすべての隠棲処で様々な苦行のしかたを見た後、彼はガンジス河を渡り、王舎城（ラージャグリハ）へと向かった。(25.89)

其処で彼は歩きながら五つの山を特徴とする都城（王舎城）を眺め、満月が輝くが如く人々に清涼な快さを与えながら、入城した。(25.90)

重厚な泰然自若たる態度によって美しく輝く彼がやって来たのを見て、都城に住むすべての人々は、噂を聞いていたとはいえ、驚いた。(25.91)

「この方はブラフマー神か、インドラ神か。はたまた太陽神か、月神か、火神か。或いは法王（ヤマ）か、ニルリティの子か。或いはヴァルナ神か、風神か。(25.92)

或いは薬叉の王（クペーラ神）か。はたまたブータの主（シヴァ神）か、ハリ（ヴィシュヌ神）か。或いはヴィディヤードラか、シッダか、サーディヤか。或いはルドラか、グヒヤカか。(25.93)

或いは薬叉か、ガンダルヴァか。はたまたキンナラか、羅刹か。或いはクンバーンダか、龍王か。またはガルダか、阿修羅（ダーナヴァ）か。(25.94)

または大神通力ある仙人か。或いは幻術（マヤー）に長けた呪術師か。きっと「そのような者が」比丘の姿をとって、ここを見るために来たのではないか。」(25.95)

そのように、あれこれ考えながら、彼ら民衆は彼を見つめて立ち止まり、或る者たちは、驚きとともに、彼だけを見つめてその後ろを歩いた。(25.96)

或る者は明るく澄んだ心でその出家行者に嬉しく挨拶し、お辞儀すると自分の家へ招き入れ、清らかな座に坐らせた。(25.97)

そして彼を尊び供養して、五種の甘露（乳・醃酵乳・バター・蜜・砂糖）の食事を用意し、合掌して拝し、見つめながら彼のそばに控えた。(25.98)

その後かの比丘（菩薩）はその彼を見つめて祝福の言葉を与えると、その都城を輝かせながら、落ち着いた一定の視線を保って歩行した。(25.99)

彼が近づいて来るのを見て、或る者たちは歓喜の心を抱き、深く敬意を示し、お辞儀し、嬉しく見つめながら、ついて歩いた。(25.100)

彼が歩いてゆくを見て、女たちは皆歓喜し、見つめながらお辞儀し、大きな喜びを得た。(25.101)

男たちもまた、彼がやって来るのを見て歓喜の心をもち、誰もが称えつつお辞儀し、嬉しく見つめながら歩んだ。(25.102)

国王のシュリー（繁栄の女神）もまた、王としての特徴を具えたその比丘たちを見て、王者にふさわしいその彼のもとに身を寄せたいと願った。(25.103)

このように、諸感官を制御した彼（菩薩）は、あらゆる人の心を奪う輝かしい姿で、すべての人々から憂いを忘れさせ、其処（都城）から出て行った。(25.104)

その後、光輝あり自己知を有するかの人（菩薩）は、都城の外に出ると、パーンダヴァ山を眺めて喜び、そこへ赴いた。(25.105)

その出家行者はそこに登ると、洞窟に入り、嬉しく草の座に坐って、心を集中させて瞑想しながらそこに留まった。(25.106)

さて或る人はその都城で、淨らかな感官をもつその比丘が道を歩いているのを見て、ヴァルナ神ではないかと、驚愕に圧倒された心を抱いた。(25.107)

彼はそれを見ると、さっそく去ってビンビサーラ王の御前に進み、跪拝して次の様に報告した。(25.108)

「わが主よ、この地に、身体が吉祥なる相に飾られた大士、自己を抑制した若くて美しい一人の比丘がやって来ています。(25.109)

彼はこの地で輝きながら「歩行し」、すべての衆生を眺め、浄化しながら、すべての人の心を奪い、都城の外へ出て行きました。」(25.110)

そう、彼が報じたのを聞き、ビンピサーラ王は、強い好奇心に襲われ、その人物にこのように命じた。(25.111)

「その大士はどこへ行かれたのか。君は直ちにそこに行きなさい。その偉大な方が滞在している場所に行って、会ってきなさい。(25.112)

会って、彼の家系とこの地に來た理由を尋ね、すぐに戻って来なさい。そして私によく理解させて、私の心を喜ばせてくれ。」(25.113)

こう、王が命じたのを聞き、その男は立ち上がり、「承知いたしました」と答えて、直ちにそこから出発した。(25.114)

彼はすばやく道を進みながら、集まっている人たちを見ては、「あの若い比丘はどこへ行ったのか」と、すべての者に尋ねた。(25.115)

彼に尋ねられたその人たちは皆、その男を見て、「彼はパーンダヴァ山へ向かいしました」と答えた。(25.116)

それを聞くと彼はパーンダヴァ山を見上げて眺め、急いで登って行って、その山にある洞窟に近づいた。(25.117)

其処で瞑想しながら諸感官の活動を鎮めて坐っている、その出家行者を見つけ、近づいて嬉しく拝し、見つめながらそばに近づいた。(25.118)

其処でそばに控えた彼を見て、自己知を有するその出家行者(菩薩)は、「あなたは何故にここへいらしたのか。あなたが望むことを言いなさい」と言った。(25.119)

そう彼が尋ねたのを聞いて、その王の家來は、嬉しくその出家行者に合掌し、拝すると、見つめながらこう言った。(25.120)

「尊者よ、私はあなた様の立派な徳性を耳にしまして、それについてお聞きすることを得るため、お会いしようとしてここに参りました。(25.121)

それ故あなた様はお教え下さって、私にもよく理解させ、あなた様の法へと導き、お救い下さい。(25.122)

あなた様はどのような家系、家門にお生まれになったのですか。あなた様の父君はどなたですか。なぜ若くして出家し、また何のためにこの地に留まっておられるのですか。(25.123)

それについて本当のことを私にお話し下さい。あなた様が私を憐愍をお持ちでしたら、私に誓戒をお与え下さい。」(25.124)

そう彼が語ったのを聞き、その菩薩、善慧者たる出家行者は、その人物を見つめ、彼によく理解させるためにこう説き示した。(25.125)

「私は釈迦族に生まれました。父はシュッドーダナ王です。私は一切衆生を益する目的のため、菩提行の誓戒を行じながら、(25.126)

この地にいるあらゆる仙人の隠棲処で周く様々な苦行のしかたを見学し、[彼らと] 出会うためにここにやって来ました。(25.127)

もしあなたが私の誓戒を欲するなら、喜心をもってその誓戒を実行しなさい。私が菩提を得たとき、必ずここで正法を説くでしょう。」(25.128)

彼の説き示したことを聞き、よく理解したその男は、かの大士を拝すると、喜びながらそこを去った。(25.129)

彼は急いで戻って来て、王のもとへ参上すると、その両足を拝して、御前に立ち、見つめながらこのように報告した。(25.130)

「わが主よ、あの大士はシュッドーダナ王の息子です。一切衆生を益する目的のために菩提行の誓戒を行じつつ、(25.131)

この地にいるあらゆる仙人の隠棲処において周く様々な苦行のしかたを見て、[彼らと] 出会うためにここにやって来られたのです。(25.132)

今、あの大士・出家行者は独りで心を集中させ、パーンダヴァ山の洞窟で禅定して坐っておられます。(25.133)

私は以上のように会い、彼が語ったことを聞いて、驚愕の心を抱き、主君であるあなた様の御前に、急いで報告に参りました。(25.134)

確かにあの方は大通智ある菩薩であり、世の生類の益のため菩提の智慧に達して、仏陀、法王となられることでしょう。」(25.135)

そう、その者が語ったことを聞いて、ビンビサーラ王は「はなはだ驚くべきことだ」と嬉しく語って、彼と会ってみたいと欲した。(25.136)

その後、王は馬に跨ると、大臣や家来たちを連れて急いで進みゆき、嬉しくそのパーンダヴァ山へと赴いた。(25.137)

其処で[山を] 眺めて、登ってゆき、洞窟に近づいていった彼は、禅定しながら座に坐っているその出家行者の姿を目にした。(25.138)

安らかに坐っている彼を見て、その王は歓喜して拝し、顔が淨らかに澄んだ彼を見つめながら、そばに近づいた。(25.139)

その王が坐ったのを見て、かの菩薩は清澄な蓮の如き顔で彼を見つめ、このように[祝福を] 告げた。(25.140)

「あなたが無病でありますように。王よ、どこでも、いつでも至福に恵まれますように。正法を成就する仕事は、望む通りに成し遂げられますように。」(25.141)

彼から与えられた祝福の言葉を聞き、ビンビサーラ王は再び彼に合掌し、拝すると、見つめながらこう言った。(25.142)

「尊者よ、あなたの誕生はどのような家系、家門においてでしょうか。あなたの父君はどなたで、母君はどなたですか。その本当のことをどうか私にお語りください。」(25.143)

王からそう求められ、かの菩薩はそれを聞くと、その王を見つめて微笑みながらこう答えた。(25.144)

「かの王中の王、シュッドーダナ王が私の父です。マーヤーと呼ばれる女性が生母、そしてガウタミーとして知られる女性が継母です。」(25.145)

そう彼が語ったのを聞くと、シュレーニヤ王は、その若い出家修行僧を見つめてこう言った。(25.146)

「あのシュッドーダナ王は転輪王であり、大地の主です。私たちの王、主長であり、グルであり、師であり、守護者です。(25.147)

あなたのお父上の弟子がわれわれ、すべての王ですから、善慧者よ、あなたもまた私たちの師であり、王国の王でもあるのです。(25.148)

ですから、主よ、どうかずっとここで王位の生活期に留まり、欲するがままに快楽を享受し、思いのままにお過ごし下さい。(25.149)

私はあなたに、あらゆる財産を伴った王国の半分を差し上げましょう。それ故、ずっとこの地に留まり、快楽を味わいつつお暮らし下さい。(25.150)

あなたが若くて愛される、神々しい美しい若者である間は、どうか王の住まいに留まり、王法の誓戒を行って下さい。(25.151)

私はあなたに、夫を法として敬い従う、美しい肢体の女たちを与えましょう。彼女たちと共に、家系の世襲の仕事という誓戒を守り、行って下さい。(25.152)

私と一緒にずっと国政の業務を運営し、民衆を保護し、乞い求める者たちには望むとおりに与え、家系の仕事の誓戒を行って下さい。(25.153)

このあまりに過酷な比丘の行法の誓戒が、あなたに何の用があるというのでしょうか。墓場や無人の地、森林に、どうしてあなたが助ける人もなく、住めるでしょうか。(25.154)

転輪王の家柄に生まれながら、今、若くして出家して、どうして善い家も卑しい家でも〔区別せずに〕あなたは施食を乞い、受け取れるのでしょうか。(25.155)

見事なカーシ産の純白に輝く綿布や、絹の衣に包まれていたあなたが、それらを捨てて、袈裟衣を纏って、どうして輝かしく見えるのでしょうか。(25.156)

あらゆる宝石で出来た美しい冠、宝石の装飾品も捨ててしまい、頭を剃髪した姿では、あなたは美しく輝いて見えません。(25.157)

とても香ばしい油や、芳しいおしろいの粉で化粧されていたそのお体は、今や全身が灰色の埃にまみれてしまって、美しく見えません。(25.158)

歌や踊りの上演がある、大変な活気を伴った宮殿で、昼も夜もあなたは楽しんでいたのに、この森でどのように快く楽しむのでしょうか。(25.159)

ベッドの綿布団の上で、よい香りに満ちたとても柔らかい衣類に覆われた寝椅子の上で、気持ちよく眠っていたあなたが、どうして地面の草の上で横たわれるでしょう。(25.160)

色も香りも味もそなわった上等な食事を捨てて、托鉢で得た粗末な食事を味わって、あなたはどのように満足できるのでしょうか。(25.161)

神々のアムリタ（不死の甘露）のようなよい香りの美味しい飲み物を捨てて、不味い水だけを飲んで、どうして満足できるでしょう。(25.162)

バラモンや王族の息子たち、大臣や顧問官たちに囲まれて楽しんでいたのに、今やこの深い森の中で付き合う人もなく、どこで楽しむのですか。(25.163)

いつもバラモンたち、王宮付きの詩人たちや学者たちに讃えられていたあなたが、今や深い森の中で、ジャッカルなどの獣たちに恐怖することでしょう。(25.164)

美味しい料理を捨て、キンマの葉などの口直しの妙味も捨てて、茎や根や葉を食べて、どうやって幸福感を得るのですか。(25.165)

象や乗り物を捨てて、徒歩であなたがどうして森の中を歩きましょう。都城でのお祭り行列や祝祭を捨てて、森の中でどのような歓喜の高揚が得られるでしょう。(25.166)

いつも集会場の座に坐って、すべての人々から恭しく挨拶されていたあなたが、どうしてたった一人で森の奥の近づき難い場所に、まるで悪党や泥棒のように、住めるでしょうか。(25.167)

乞い求める者たちに望むがままに与え、常にすべての人の益を目的として叶えていたあなたが、果実や葉や草だけを食べて、どうやってわが身を養おうというのですか。(25.168)

天界のように光り輝くご自分の都、めでたい幸せと光輝と善き徳性が依拠する場所を捨てて、どうして一人で、近づきたい森の奥にあなたは住んだり歩いたり出来ましょうか。(25.169)

このように様々な危険がある場所で多様な苦しみを味わい、森の奥で苦行をしながら、いったい何のめでたい幸せが得られるというのですか。(25.170)

神々しい栄光と幸せの達成を捨てて、若くして出家して、いったい他にどんな幸せの達成を、いかに、どうやって、得ようというのですか。(25.171)

このように考えて、あまりにも苦しい出家の誓戒を捨てなさい。この誓戒の功德で、いかなる善趣（善き再生の世界）の幸せが得られるのですか。(25.172)

もしあなたに、功德を積むことに強い望みがあるのだしたら、この苦行の誓戒を捨て、家の世襲の仕事の誓戒を堅持し、専心して行いなさい。(25.173)

常に乞い求める者たちに施しを与え、嬉しく世の人々を益し、望むがままに幸せを享受して、家系の伝統の仕事の誓戒を行いなさい。(25.174)

その誓戒は大きな成就をもたらし、身内・他者・自分を益するものです。この功德の力によって、常にこの世ではめでたい幸せとよき安楽があります。(25.175)

〔そうすれば〕来世においても、人は常に天界で輝かしい栄光と幸せを得るでしょう。常に善趣（善き再生の世界）に輪廻し、決して悪趣（地獄・餓鬼・畜生界）へ行くことはありません。(25.176)

このように考えて、大士よ、王位の生活期に留まり、私と一緒に幸せを享受しながら家系の伝統の仕事の誓戒を行いなさい。(25.177)

そうすれば、あなたにはこの世で常に幸運なよき安楽があり、来世においても常に天界で輝かしい栄光と幸せを得ることでしょう。」(25.178)

かようにその王が説得するのを聞いて、菩薩・大士は、その王にこのように答えた。(25.179)

「善い哉、王よ、あなたは輪廻界での幸福を成し遂げる方法をお語りになりました。しかしながら、私はここで私の所願をお話します。どうかお聞きなさい。(25.180)

私は煩惱の炎に焼かれている三界に生まれた生類を見て、憐憫の思いが心に逼り、輪廻界の享受を厭うに至りました。(25.181)

王よ、彼らの苦悩の火の凄まじい熱さを、私は法（ダルマ、真理の教法）という甘露の雨水を降らせることで鎮めて、世の生類にめでたい幸をもたらしたいと欲します。(25.182)

その目的のため、私は王位を捨て、正法を切望し、出家の禁戒を堅持しつつ、菩提を得んと強く思っているのです。(25.183)

そのために、私は神々しいほど極めて美しい六万人の妻たちや、すべての所有物を、また親族、眷属、親友、家来たちも捨てて、自ら出家して、ここにやって来たのです。(25.184)

私は感官の享樂の対象にも、王国の榮華のよき安樂にも執着していません。ただ正法に、菩提の智慧の達成に、私は執着しています。(25.185)

もろもろの欲望は多くの過惡をもたらし、地獄での苦の諸原因となります。上等の極めて美味な食事の享受は、毒を含むかのように苦しみを与えるものです。(25.186)

欲望のために神々は常に阿修羅たちと戦っています。また欲望のためにクシャトリヤたち（王族）は戦争で互いに殺し合って滅びます。(25.187)

欲望のために賢明なバラモンたち、苦行をなす仙人たちすら、煩惱の炎に焼かれ、道を踏み外して、生き物に危害をなす者となります。(25.188)

またあらゆる財産の主となったヴァイシャたち（第三身分、平民）も欲望に耽り、娼婦たちの支配に陥って夢中になり、邪惡な心を抱き、財産を失ってしまいます。(25.189)

また有徳で財産家のシュードラたち（第四身分、隷属民）も、長者や善人たちでも、欲望のために女たちの召使いとなり、その支配下で奴隸となります。(25.190)

商人たちや隊商主たち、富を求める者たちは、大海であらゆる財物と一緒に沈んでしまいます。それもまた、欲望が原因です。(25.191)

同様にほかの商人たちも、富を求めてあらゆる所を歩き回り、苦しみに悩まされていますが、それもまた欲望が原因です。(25.192)

農民たちもまた、絶えざる農作業に夢中になり、休息もなく大変な苦しみに悩まされていますが、それもまた欲望が原因です。(25.193)

同様にほかの、荷物運びの者たちも、山々を越え、休息もなく大変な疲労に苦しみますが、それもまた欲望が原因です。(25.194)

貧しい者たちもまた、欲望のためにいつも他人への奉仕に懸命です。哀れな乞食たちも物貰いのために彷徨い歩いて、苦しみに疲労困憊しています。(25.195)

高い家柄の善人たちも、欲望・煩惱に心を乱され、卑しい女たちの支配に陥り、奴隸状態になっています。(25.196)

大臣や顧問官たち、家来たち、兵士や従者たちも、欲望と自負・驕慢に盲目となり、十不善の行為をしています。(25.197)

また王たちも欲望のため、政治の法の義務を軽んじ、好き勝手に振る舞い、愚かにも諸々の不善行さえしています。(25.198)

学者やバラモンや賢者たち、あらゆる学問に通じた者たちでさえ、欲望のために諸王や資産家たちの使僕となってしまっています。(25.199)

これ以上多くを語る必要はないでしょう。誰もが欲望のために、正法に適った行為を捨て、罪深い行為を犯し、悪趣（悪しき再生の世界）に赴くのです。(25.200)

その世界でひどい苦しみを味わいながらも、善良な世俗の人々を罵り、大きな罪の行為に愛着し、ずっと不善なことを行っています。(25.201)

このようにして、極めて罪深い彼らは耐え難い苦痛に悩み、やがてその肉体を捨てた後、地獄へと落ちてゆきます。(25.202)

こうして欲望を楽しんで墮落した、十不善の行為をなす者たちは、悪趣を彷徨いながら、極めて苦しむことになります。(25.203)

このように善き人々は認識して、輪廻界における欲望を咎めるのです。墮落した者たちは、悪臭を発する糞瓶に喩えられます。(25.204)

このように欲望というものを、正法を破壊する、大きな害悪とみなして、聖者たちは『家住の人生期』を捨てて、『林住の人生期』にわが身を置いたのです。(25.205)

彼らは茎や葉や果実だけを食べながら諸感官を満足させ、三昧（定）のすばらしい味わいを糧として、大きな安楽の中に住んでいます。(25.206)

あらゆる善逝たち（諸仏）も、欲望の拠点である『家住の人生期』を捨てて、出家の禁戒を堅持し、『林住の人生期』に住しながら、(25.207)

三昧に心を定め置き、マーラ（魔）の軍勢に打ち勝ち、菩提という宝を手に入れ、光輝ある善き徳性の蔵を有する者となって、(25.208)

三界において正法を説き示し、世の生類を善法から成るものに変えて、仏の住まい（涅槃）へと赴かれたのです。(25.209)

王よ、私もまた同様に、菩提行の誓戒を実践し、世の生類を善法から成るものに変え、菩提を獲得せんと意欲しているのです。(25.210)

そのために私は王位とすべての所有物を捨て、欲望の享受を欲せず、出家して暮らしています。(25.211)

出家の禁戒を堅持し、遍くめでたい幸をもたらしながら、菩提を獲得するためにこの地も見学しようと嬉しくやって来たのです。(25.212)

あらゆる仙人たちの隠棲処において、遍く様々な苦行のしかたを見ながら、私はこの地を見るため、やって来ました。(25.213)

しかし、何処でも誰一人、菩提を達成する誓戒を持っていませんでした。それ故、私は最高の菩提がある場所へと行こうと思います。(25.214)

菩提に達しないうちは、お国に行くことはありません。菩提を得た時、私は行くでしょう。(25.215)

必ず菩提を得て、正法を説き示し、世の生類を幸せな存在に変えてから、仏の住まい（涅槃）に私は赴くことでしょう。」(25.216)

そのように説かれたのを聞いて、ビンビサーラ王はよく理解を得て、大士を見つめてこう言った。(25.217)

「素晴らしい。あなたは現れたのです、ここにやって来られたわが師として。私たちはあなたの弟子として、常に帰依いたします。(25.218)

離欲者・梵行者、諸感官を制した者であるあなたに対し、私は王としてあまりにも高慢に、愛欲の法へと誘ってしまいました。(25.219)

師よ、菩薩であり出家行者であるあなたは、私の犯した罪をみつめ、どうかどんな時も憐れみの心で見えてお赦し下さい。(25.220)

あなたが菩提に達し、仏・世尊となられた時、どうかこの地にもやって来られて、法をお説きになって下さい。(25.221)

私たちは皆、正法の徳性を希求する者として、嬉しくあなたのもとに参上し、私は法を聴聞いたします。(25.222)

私たちはあなたを敬い、常に帰依いたします。歓喜して尊重し、嬉しく供養いたします。(25.223)

私たちはあなたがご教示になることを、注意深くその通りに聞いて、常に頭上に戴き、絶えず実行してまいります。(25.224)

あなたは以上の〔私の言葉を〕記憶に留め、輝きながらここにやって来られて、正法をお説きになりながら、ずっと滞在なさって下さい。』(25.225)

王がそのように請うのを聞いて、自己知をもつその出家行者は「そうします」と承諾の意を示し、沈黙をもってそれに同意した。(25.226)

そこでビンビサーラ王は立ち上がり、その菩薩を拝すると、自らの都へと家来たちと共に去っていった。(25.227)

その後、その菩薩も立ち上がると、輝きながら、観察して恵みを与えながら、ヴィンディヤ山へと向かった。(25.228)

— 以上、私の過去に聞いたことを〔或いは：私の過去の出来事を〕、今私は語りました。大士よ、あなたもこれを聞いてあなたも随喜を得なさい。(25.229)

これを聞いて仏の誕生という善説を随喜する者、その者たちは、大士となり、めでたい幸せと光輝と善き徳性の依る器となるであろう。(25.230)

このように師が説いたのを聞いて、アショーカ王は〔或いは：出家行者阿難は〕「わかりました」と随喜して、聴聞の衆と共に歓びました。(25.231)

マガダの君主ビンビサーラ王が会いに来た〔という名の〕品、第25章〔終わる〕。

7. Tathāgatajanmāvadānamālā 第26章の校訂

A 184b4 ; B 272b3 (folio 273 and later are missing) ; D 228b1

athā*śoko {or: athānando} mahāsattvaḥ sāñjalis taṃ yatim mudā /
 natvā puraḥ samāśritya saṃpaśyann evaṃ abravīt // 26.1
 bhadanto 'sau mahāsattvo bodhisattvas tataś caran /
 kutra gato vrataṃ draṣṭuṃ tat samādeṣṭuṃ arhasi // 26.2
 iti saṃprārthitaṃ tena śrutvā so 'rhan mahāmatiḥ /
 *aśokaṃ *taṃ *mahārājaṃ {or: śākyasiṃhas tam ānandaṃ} saṃpaśyann evaṃ ādiśat // 26.3
 śṛṇv *aśoka {or: ānanda} samādhāya yathā me *guruṇādiṣṭam {or: kṛtapūrvakam} /
 tathāhaṃ saṃpravakṣyāmi tava mano'bhibodhane // 26.4
 tadā vindhyācale tatra rāmātmajo maharddhikaḥ /
 rudrābhidho mahāprājñas tasthau tapovanāśrame // 26.5
 saha saptaśataiḥ śiṣyais tapasvibhir jitendriyaiḥ /
 brahmacaryāvrataṃ dhṛtvā pracacāra samāhitaḥ // 26.6 ≈ L 243.15-18; H ii,176.3-6
 sa dharmenaiva saṃjñānāsāñjñāyatanam uttamam /
 ārabhya sarvaśiṣyebhyaḥ saddharmaṃ samupādiśat // 26.7
 tam ṛṣim dūratas tatra śiṣyasabhāsanāśritam /
 bodhisattvaḥ samālokyā saṃdraṣṭuṃ samupācarat // 26.8
 tatra sa munir ātmajño bodhisattvaḥ samīkṣya tam /
 sarvaṛṣisaṅghaśāstāraṃ sarvalokābhipūjitam // 26.9 ≈ L 243.18-19; H ii,176.6-8
 ayam ṛṣir mahābhijñāḥ sarvaṛṣisaṅghanāyakaḥ /
 upadiśati [185a] kiṃ dharmam iti draṣṭuṃ acintayat // 26.10
 evaṃ asyāntike gatvā prārabheyaṃ tapovratam /
 nāyaṃ me maṃsyate dharmam viśiṣṭaṃ bodhisāadhanam // 26.11 ≈ L 243.21-244.1; H ii,176.11-12
 tadyathame mahābhijñā ṛṣayo brahmavādināḥ /
 bhavyeṃ mama saddharṃe pratyakṣā bodhipākṣike // 26.12 ≈ L 244.3-5; H ii,176.14-178.2
 tathā sambodhipakṣāṇāṃ dharmāṇāṃ samprakāśane /
 asya śiṣyatvam āsādyā careyaṃ bodhimānasah // 26.13 ≈ L 244.6-7; H ii,178.2-4
 saṃsārasaṃskṛtadhyānasamādhīnām asāratām /
 samupadarśya saddharmaṃ darśayeyaṃ susaṃvaram // 26.14 ≈ L 244.1-3; H ii,176.12-14
 iti dhyātvā mahāsattvo bodhisattvaḥ sa sanmatiḥ /
 rudrakaṃ taṃ samāmantrya saṃpaśyann evaṃ abravīt // 26.15 ≈ L 244.8-10; H ii,178.5-8
 maharṣe bhavataḥ śāstā ko dharmābhyanuśāsakaḥ /
 kiṃ ca dharmaviśeṣaṃ tat samupādeṣṭuṃ arhati // 26.16
 iti saṃprārthitaṃ tena bodhisattvena saddhiyā /
 niśamya sa mahāvijño rudraka evaṃ abravīt // 26.17 ≈ L 244.11-14; H ii,178.8-12
 kaścic chāstā na me mārṣa svayam evādhigamyate /
 yad dharmam naivasāñjñānāsāñjñāyatanam uttamam // 26.18
 iti tat samupādiṣṭaṃ bodhisattvo niśamya saḥ /

gatvaikānte samāśritya tasthau taddhyānamānasah // 26.19	
tadā tasya suvijñasya pūrvapuṇyānubhāvataḥ /	
sa samādhisamāpattiśatāny abhimukhaṃ yayuḥ // 26.20	≈ L 244.18-245.1; H ii,178.16-180.4
tāni sarvāṇy anusmṛtvā bodhisattvaḥ samutthitah /	
samupetya samāmantrya rudrakam evam abravīt // 26.21	≈ L 245.1-2; H ii,180.5-7
kaścid anyo maharṣe 'sti tatsamādheḥ samuttaraḥ /	
tad bhavān me mahābhijña samupādeṣṭum arhati // 26.22	≈ L 245.2-4; H ii,180.7-8
taduktam iti saṃśrutvā rudrakas taṃ mahāmatim /	
bodhisattvaṃ samālokyā nāstīti samupādiśat // 26.23	
tac chrutvā bodhisattvo 'sau mahāsattvo viśuddhadhīḥ /	
tat sarvaṃ samabhiññāya punar evaṃ vyacintayat // 26.24	≈ L 245.5-7; H ii,180.9-11
asyāpi rudrakasyāsti śraddhā vīryaṃ ca saṃsmṛtiḥ /	
samādhir api prajñā ca samāpya tāni santi hi // 26.25	
iti svayaṃ samālokyā bodhisattvaḥ prasannadhīḥ /	
rudrakam taṃ samāmantrya punar evaṃ abhāṣata // 26.26	≈ L 245.8-9; H ii,180.12-13
maharṣe yatra niryāto bhavān dharme nirañjane /	
mayāpy adhigato hy eṣa dharmo bhava vimuktidaḥ // 26.27	
tac chrutvā sa mahāprājño rudrakas taṃ mahāmatim /	
bodhisattvaṃ samālokyā [185b] punar evaṃ abhāṣata // 26.28	≈ L 245.10-11; H ii,180.14-15
sādhv āgaccha mahāsattva mayā sārdham imaṃ gaṇam /	
samabhipūjya dharme 'tra viharasva sadā sukham // 26.29	
ity ādiśya mahāvijño rudrakas taṃ mahāmatim /	
samācāryapade svasminn adhiṣṭhāpyānucārayat // 26.30	
tataḥ sa bodhisattvas taddharmam anuvicintayan /	
naiṣa dharmo vimokṣāya nāpi saṃbodhiprāptaye // 26.31	≈ L 245.11-13; H ii,180.15-18
iti niścitya vijño 'sau bodhisattvo mahāmatih /	
rudrakam taṃ samāmantrya saṃpaśyann evaṃ abravīt // 26.32	
maharṣe tad vijñāni yadarthe 'ham ihāgataḥ /	
nāhaṃ saṃsārabhogārthī svargārthī vratam ācare // 26.33	
api tv ahaṃ samālokyā jagat kleśāgnitāpitam /	
tadduḥkhābhiśamīkartuṃ saṃbodhiṃ prāptum utsahe // 26.34	
etadarthe 'ham utsṛjya rājyaṃ sarvān parigrahān /	
pravrajyāvratam ādhāya pracarāmi samantataḥ // 26.35	
ṛṣṇām api sarveṣāṃ āśrameṣu vilokayan /	
nānāvratavidhīn dṛṣṭvā draṣṭum ihāpi prācare // 26.36	
kasyāpi dṛśyate naiva bodhicaryāvrataṃ kvacid /	
ato 'haṃ bodhisamprāptyai gantum icchāmi saṃpratam // 26.37	
iti taduktam ākarṇya sa maharṣir vicakṣaṇaḥ /	

bodhisattvaṃ sudhīmantam sampaśyann idam abravīt // 26.38
 kasyāpi vidyate nātra bodhicaryāvrataṃ kvacit /
 kaś carituṃ praśaknuyāt pañcakaṣāyite kalau // 26.39
 tathāpi tvaṃ mahāsattvo mahāvīrye parākramaḥ /
 subuddhānusrītiṃ dhṛtvā bodhicaryāvrataṃ cara // 26.40
 saṃbuddhānāṃ balenaiva bodhicaryāvrataṃ caran /
 duṣṭān māragaṇāñ jītvā saṃbodhiṃ samavāpnuyāt // 26.41
 iti matvā samādhāya parīsuddhatrimaṇḍalaḥ /
 saṃbuddhabhajanam kṛtvā carasva saugataṃ vrataṃ // 26.42
 gaccha tvaṃ sahasā bodhiṃ samāsādyā samantataḥ /
 saddharmaṃ samupādiśya kuru bhadramayam jagat // 26.43
 bhūyāt te sarvadā bhadraṃ sidhyatu ca samīhitam /
 jayasiddhiguṇādhārāṃ bodhilakṣmīm samāpnuhi // 26.44
 iti bhadraśiṣaṃ dattvā bodhisattvāya rudrakaḥ /
 suprasannāśayas tatra samāśrayan nijā[186a]śrame // 26.45
 tataḥ sa bodhisattvaś ca bodhicaryāsamāhitaḥ /
 saśiṣyam rudrakam hitvā draṣṭum anyatra prācarat // 26.46
 taṃ prayātaṃ samālokyā yatayo brahmacāriṇaḥ /
 pañcakā bhadravargīyāḥ sametyaivam samabruvan // 26.47 ≈ L 245.16-17; H ii,182.2-3
 yad vayam rudrakasyāya maharṣeḥ samupāśritāḥ /
 naitad brahmamayam jñānam saṃprāptum abhisaknumaḥ // 26.48 ≈ L 245.17-19; H ii,182.3-6
 anena bodhisattvena sukhenāśu samāpyate /
 tathāpy anena dharmeṇa naiva *tṛptim avāpyate // 26.49
 nūnam eṣa mahāsattvo jñānam paryeṣate varam /
 sa labdhā pravaram dharmam lokaśāstā bhaved api // 26.50 ≈ L 245.19-22; H ii,182.6-10
 tadaiva sarvalokebhyas taddharmaṃ samupādiśet /
 tad vayam asya saddharmaṃ prāptum anvāsaṃ mahi // 26.51
 iti saṃbhāṣya te bhadravargīyāḥ pañcakā api /
 tato 'pakramya taṃ bodhisattvam anuyayur mudā // 26.52
 tatra te sahasopetya praṇatvā taṃ mahāmatim /
 bodhisattvaṃ samāmantrya sampaśyanto mudāvanan // 26.53
 bhadanta bhavatā sārdham icchāmaś carituṃ vrataṃ /
 tad bhavān naḥ kṛpāṃ buddhvā samanvāhartum arhati // 26.54
 iti taiḥ prārthitaṃ śrutvā bodhisattvaḥ samīkṣya tām /
 pañcakāṃ bhadravargīyāṃ sampaśyann evam ādiśat // 26.55
 bhavatāpi mayā sārdham vāñchanti carituṃ yadi /
 saṃbodhipraṇidhiṃ dhṛtvā saṃcarantāṃ samāhitaḥ // 26.56
 iti tena samādiṣṭam śrutvā te pañcakā api /

sarvaṃ tasyānumodanto 'nubandhitvā sadācaran //	26.57	
tataḥ sa bodhisattvas tair bhikṣubhir anvitaś caran /		
tatra sarvatra deśeṣu pracacāra prabhāsayan //	26.58	≈ L 246.1-2; H ii,182.11-12
tadā tatrāntare mārge tapasvinaḥ samāśritāḥ /		
bodhisattvaṃ tam āyātaṃ samīkṣya samupācaran //	26.59	≈ L 246.3-5; H ii,182.13-16
tatra te taṃ mahāsattvaṃ sametya sahasā mudā /		
samāmantrya sabhaktena *vāsasāpi nyamantrayan //	26.60	
yathā tatra sa ālokya bhikṣubhis taiḥ samanvitaḥ /		
āśrame samupāśritya tasthau sambhāsayan niśi //	26.61	
[186b] tataḥ prātaḥ samutthāya sarve tapasvino mudā /		
sabhikṣuṃ taṃ mahāsattvaṃ bhojanaiḥ samatoṣayan //	26.62	
tataḥ samprasthito bodhisattvas tair bhikṣubhiḥ saha /		
gayābhidhasya rājarṣer āśramaṃ samupāśrayan //	26.63	≈ Bc 12.89
tato 'pi sa mahāsattvo bhikṣubhis taiḥ samanvitaḥ /		
gayāpure caran sarvaiḥ stūyamāno 'bhyarājata //	26.64	
tato 'py asau mahāsattvaḥ prahāṇārthaṃ mudā caran /		
gayāśīrṣe nage rāmye tasthau tṛṇāsanāśrayan //	26.65	≈ L 246.6-8; H ii,182.17-19
tatra sa suhasaṃvedī saṃcaritaṃ tapovratam /		
buddhapuṇyānubhāvena manasaivaṃ vyacintayat //	26.66	≈ L 246.8-9; H ii,184.1-2
kāmarāgādrakāyā ye kāmābhirañjītāsāyāḥ /		
kāmābhichanditāḥ kāmātrṣṇākleśādhivāsītāḥ //	26.67	≈ L 246.10-247.4; H ii,184.10-185.7
naivābhipariśuddhās te tapobhir duṣkarair api /		
kiṃ ta āryamahajjñānam adhigantaṃ praśaknuyuḥ //	26.68	
yathādrakāṣṭham ādāya prārdrāṃ cāpy uttarāraṇim /		
pratiṣṭhāpya sthale yaś ca mathnīyād agnilālasaḥ //	26.69	≈ L 247.12-22; H ii,186.16-188.11
so 'bhiśaknoti tadvahnim utpādayitum utprabham /		
tathā kāmavimuktātmā śaknoti jñānam uttamam //	26.70	
evaṃ niścīya śuddhātmā pariśuddhendriyo yatīḥ /		
caritaṃ duṣkaraṃ bodhiṃ saṃprāptyai vratam aicchata //	26.71	
tataḥ sa suprasannātmā prahāṇārthe jitendriyaḥ /		
urubilvāśrayaṃ grāmaṃ samīkṣitaṃ mudācarat //	26.72	
tatra sa bhikṣur ālokya bhadraṃ kurvan samantataḥ /		
piṇḍaṃ senāpater gehe yācitaṃ samupācarat //	26.73	≈ S ii,200.15-201.1; M ii,249.14-250.2
tatra taṃ bhikṣuṃ āyātaṃ dṛṣtvā senāpater sutā /		
sujātākhyā prasannāsyā sahasā samupācarat //	26.74	
taṃ samīkṣya sujātā sā snehasaṃdagdhamānasā /		
prakampitā suliptāsyā natvāhaivaṃ kṛtāñjaliḥ //	75	
bhadanta ko bhavān kānto yuvā divyātisundaraḥ /		

pravrajitaḥ kimarthe 'tra samāyāti tad ucyatām // 26.76
 iti tayoditaṃ śrutvā bodhisattvaḥ prasanna[187a]dṛk /
 sujātāṃ tām subhadrāṅgīm saṃpaśyann evaṃ ādiśat // 26.77
 mātār ahaṃ suto rājñāḥ śuddhodanasya bhūpateḥ /
 kāmāṃ tyaktvā jagadbhadrabodhicaryāvratam care // 26.78
 vivikte 'tra vane rāmye sthitvā saṃbodhimānasah /
 dhyātvā buddhān anusmṛtvā vratam caritum āvraje // 26.79
 ity uktam yatinā tena śrutvā sā paribodhitā /
 sujātā taṃ subhadrāṃśaṃ saṃpaśyann evaṃ ālapat // 26.80
 hā bhadra katham ajño 'si yat tvaṃ bhūpādhipātmajaḥ /
 yuvā rājyaṃ samutsṛjya pravrajita ihāgataḥ // 26.81
 rājaputra nivartasva mā carasva yativrataṃ /
 rājyāśrame samāśritya kulacaryāvratam cara // 26.82
 cakravartikule jāto yuvā kāntātisundaraḥ /
 bhikṣucaryāvratam dhṛtvā kṛpaṇavat katham careḥ // 26.83
 sukomalaśarīras tvaṃ kaṭhine bhūtale vane /
 katham vane niśīdeś ca katham ca nivaser api // 26.84
 vṛkṣamūle jaratparṇakuṭyāṃ darbhatarṇāsane /
 samāśritya katham dhyāyāḥ śayīthāś ca katham niśi // 26.85
 skandhamūlaphalāny eva bhuktvā saṃtoṣase katham /
 nirjharāmbu rajopūrṇatarṇaparṇakulāvilam /
 pītāvapi te katham tṛṣṇāśāntatṛptisukham labhe // 26.86
 śītavātātapākrānte dehe 'tikomale tava /
 tadrakṣāvaraṇaṃ kuryāt kaḥ katham nirjane vane // 26.87
 duṣṭajantuninādāṃś ca bhīṣaṇān aśubhān kharān /
 niśamya te mano bhītaṃ katham dhairyasukham labhet // 26.88
 durjanās taskarā dhūrtā vijñāya tvāṃ nṛpātmajam /
 hṛtvāmbarāṇi sarvāṇi kuryur vāri*gaṭam śavam // 26.89
 evaṃ nānābhaye 'raṇye durgame durjanāśrame /
 katham ekaḥ samāśritya kiṃ vratam tvaṃ samācareḥ // 26.90
 avaśyaṃ tvaṃ paribhraṣṭaḥ parikhinnendriyāśrayaḥ /
 duḥkhāny *eko 'tra bhuñjānaḥ kiṃ puṇyaṃ [187b] sukham āpnuyāḥ // 26.91
 evaṃ matvā nivartasva kulacaryāvratam cara /
 mācara nirjane 'raṇya āśritya bhikṣukavratam // 26.92
 iti tayoditaṃ śrutvā bodhisattvo yatīḥ sudhīḥ /
 sujātāṃ tām samāloky vihasann evaṃ ādiśat // 26.93
 ā evaṃ vadase mātāś tāvad gṛhaṃ vrajeya hi /
 saṃbodhijñānam āsādyā gamiṣyāmi svayaṃ mudā // 26.94

sarvatrāpi svayaṃ gatvā dharmāmṛtaṃ pravarṣayan /
 sarvāṃl lokāṃś ca saddharṃe cārayiṣyāmy ahaṃ sadā // 26.95
 etaddhetor ahaṃ mātā anivartī jagaddhite /
 bodhicaryāvrataṃ dhṛtvā saṃcareyaṃ tapovane // 26.96
 kandaṃūlapalāśāni puṣpāny api phalāni ca /
 bhuktvā saṃtoṣitātmāhaṃ tiṣṭheyaṃ vrataṃ ācaran // 26.97
 nāhaṃ bibhemi sarvatra bhaveṣu vividheṣv api /
 bhūmīṭṛṇāsanāsīno dhyātvā lapsyāmi satsukham // 26.98
 muṇḍito 'pi jaratkaṇṭhācīvarāprāvṛto 'py ahaṃ /
 saṃśobhito 'smi sarvatra bodhicaryāvrataṃ caran // 26.99
 na me 'tra khidyate cittaṃ nāpi saṃkliṣyate kvacit /
 bodhipraṇidhisampraktaṃ sānandam eva sarvadā // 26.100
 janmavyādhijarāmṛtyubhayaṃ dṛṣṭvā nirākulam /
 sarvasattvāhitādhānaṃ bodhicaryāvrataṃ caran // 26.101
 mṛto vā sadgatiṃ yāyāṃ jīvito 'pi jagaddhite /
 saṃbodhiṃ prāpya saddharmaṃ prakāśayan samantataḥ // 26.102
 sarvadāpi śubhaṃ kṛtvā sarvatra bhuvaneṣv api /
 jagad dharmamayam kṛtvā saṃyāsyāmi jinālayam // 26.103
 iti niścitya saṃsāraratisaṃbhogaṇiḥspṛhaḥ /
 dharmāmṛtarasaṃ bhoktuṃ bodhicaryāvrataṃ caran // 26.104
 vivikte 'tra vane ramye pūrvabuddhānusevite /
 samāśṛitya sadā bhadravrataṃ caritum *utsahe // 26.105
 etadbodhivrate me 'tra kṛtvānumodanāṃ sadā /
 saṃbodhipraṇidhiṃ dhṛtvā saṃca[188a]rasva susaṃvaram // 26.106
 etatpuṇyavipākena paṇiśuddhatrimaṇḍalaḥ /
 krameṇa bodhisambhāraṃ pūrayitvā maharddhikaḥ // 26.107
 bodhisattvo mahāsattvo bhadrāśṛisadguṇāśrayaḥ /
 sarvasattvāhitaṃ kṛtvā daśabhūmīśvaro *bhaveḥ // 26.108
 tatas tvam paṇiśuddhātmā vratacārijitendriyaḥ /
 arhan mārāgaṇān jitvā sambodhiṃ samavāpnuyāḥ // 26.109
 tataḥ sarvatra lokeṣu saddharmaṃ saṃprakāśayan /
 jagad dharmamayam kṛtvā saṃyāsyasi jinālayam // 26.110
 iti satyaṃ pariñāya saṃbodhinihitāśayā /
 mama vrate 'numodantī bodhicaryāvrataṃ cara // 26.111
 ity ādiṣṭaṃ sudhīreṇa yatinā tena bhikṣuṇā /
 śrutvā bhadrā sujātā sā prābhyanandat prabodhitā // 26.112
 tatas taṃ yatim abhyarcya sā sujātābhimoditā /
 saha pañcāmṛtaiḥ śuddhair bhojanaiḥ samatoṣayat // 26.113

tataḥ sā suprasannāsyā sambodhinihitāśayā /	
bodhisattvaṃ tam ānāmya saṃpaśyanty evam abravīt // 26.114	
sādhū gaccha mahāsattva saṃcarasva susaṃvaram /	
sidhyatu te mahatkāryaṃ nirvighnam astu sarvadā // 26.115	
tadākhyātāṃ samākārya bodhisattvaprasāditam /	
suajātāṃ tām samālokyā saṃprasthitas tato 'carat // 26.116	
tatra so 'nucaran sattvān samīkṣya sudṛṣā mudā /	
nadīm svacchodakāṃ ramyām nairāñjanām apaśyata // 26.117	≈ L 248.6-10; H ii,188.18-190.2
samīkṣya sūpatīrthānām padmotpalādisobhitām /	
puṣpibhiḥ phalibhir vṛkṣais taṭaruhair alaṃkṛtām // 26.118	
bodhisattvaḥ prasannātmā saṃpaśyan samupācaran /	
tattīre samupāśritya manasaivaṃ vyacintayat // 26.119	
batāyaṃ bhūpradeśo 'tiraṃyāyo 'bhiśobhitaḥ /	
saṃlayanānūrūpo hi prahāṇā*rthina āśramāḥ // 26.120	≈ L 248.10-12; H ii,190.2-5
[188b] aham atra prahāṇārthī samādhinihitāśayaḥ /	
buddhān anusmaran dhyātvā tiṣṭheyaṃ bodhiprāptaye // 26.121	
iti nīcitya śuddhātmā bodhisattvas tadantike /	
tapovane manoramye vivikte samupācarat // 26.122	
tatrāpaśyad asau parṇaśālāṃ śakrābhinirmīṭāḥ /	
tām samīkṣya prasannātmā bodhisattvo mudācarat // 26.123	
tatra sa samupāviśya tṛṇāsane samāśrayan /	
sarvān buddhān anusmṛtvā tasthau dhyānasamāhitaḥ // 26.124	
tadā buddhānubhāvena bodhisattvo viśuddhadhīḥ /	
manasābhisamālokyā dhyātvāivaṃ samacintayat // 26.125	≈ L 248.13; H ii,190.6
ihādhunāvātīrṇo 'haṃ jambudvīpe kalau yuge /	
kaśāyiteṣu sarveṣu hīnādhimukticārīṣu // 26.126	≈ L 248.13-14; H ii,190.6-7
atrāpi tīrthikā nānātapovratābhisamratāḥ /	
svātmāsaukhyāśubhākāṅkṣāḥ saṃcarante yatheccayā // 26.127	≈ L 248.14-15; H ii,190.7-8
nānāvidhatapaḥpuṇyair svātmābhitāpanodbhavair /	
kāyaśuddhim abhīcchanti prajñāpayanti conmadāḥ // 26.128	≈ L 248.15-16; H ii,190.8-9
kecin mantrābhijalpanto dhyātvā smṛtvā kuleśvaram /	
samabhyarcya sadā nityaṃ bhajanty ātmasukhecchayā // 26.129	≈ L 248.16-17; H ii,190.10
kecin mantrair manaḥśuddhim bhāvayanto 'vicārikāḥ /	
svaparātmasamācārāḥ saṃcarante tapovratam // 26.130	
hastapralehakaṃ nāma vratam kecin caranty api /	
caranti māninaḥ kecid ayācanakasaṃvaram // 26.131	≈ L 248.17; H ii,190.10
anāmantraṇakaṃ kecin kecin ca mūlikaṃ vratam /	
kecin nirāmiṣaṃ kecin surātuṣāmbu*varjanam // 26.132	≈ L 248.17-18; H ii,190.10-12

tathaiva kulabhaikṣyaṃ ca [189a] tṛtīyaṃ kulabhaikṣakam /	
pañcamakulabhaikṣyaṃ ca saptamaṃ kulabhaikṣakam // 26.133	≈ L 248.18; H ii,190.12
kecin mūlaphalāhāraṃ keci chaivālikāṃ vratam /	
kuśapatratṛṇāhāraṃ puṣpabījāśanavratam // 26.134	≈ L 248.18-19; H ii,190.12
kecit pañcāmṛtāhāraṃ pañcagavyāśanam vratam /	
keci ca pauṣṭikāhāraṃ kecit kṣīraudanāśanam // 26.135	≈ L 248.19; H ii,190.12-13
pakṣisaṃdamśikotsrṣṭaprakṣāliyaphalāśanam /	
grāmakṣetravanodbhūtaśākaskandhāśanam tathā // 26.136	≈ L 248.20; H ii,190.13-14
gomṛgāśvavarāhaś ca vānarebhavratam tathā /	
ekasthānāśanam kecin maunavīrāśanam vratam // 26.137	≈ L 248.21; H ii,190.14-15
tathaikālopikāṃ yāvat *saptālopikṛtavratam /	
dinaikabhaktam evaṃ ca tathāhorātrikāṃ vratam // 26.138	≈ L 248.21-22; H ii,190.15-192.1
yāvat saptābhaktam ca pakṣopavāśakam tathā /	
vratam māsopavāśam ca keci candrāyaṇam vratam // 26.139	≈ L 249.1; H ii,192.1
gr̥dhrapakṣadharāḥ keci ulūkapakṣapāṇayaḥ /	
muñjavalkalavastrāś ca keci balbajavāśanā // 26.140	≈ L 249.1-2; H ii,192.1-2
keśakambalavastrāś ca keci carmāvṛtāśrayāḥ /	
śāṇa*kanthāvṛtāṅgāś ca keci ca cīvarāvṛtāḥ // 26.141	≈ L 249.2-3; H ii,192.2-4
tṛṇāśayyāśanāḥ keci keci bhasmasamāśritāḥ /	
keci ca śarkalāsīnāḥ keci ca *dṛṣadāśritāḥ // 26.142	≈ L 249.3; H ii,192.4
keci *upalakāsīnās phalakakaṇṭakāśritāḥ /	
keci ca sthaṇḍilāsīnāḥ keci utkuṭukāsthītāḥ // 26.143	≈ L 249.3-4; H ii,192.4-5
keci eva vināvāsā dvitridinanivāsikāḥ /	
catuḥpañcamaṣṭasaptabahudinānivāsikāḥ // 26.144	≈ L 249.4-5; H ii,192.5
nagnā bhasmābhiliptāṅgāḥ sthānāsthānāvikalpikāḥ /	
dīrghakeśa[189b]nakhaśmaśrujaṭāmakuṭadhārikāḥ // 26.145	≈ L 249.5-6; H ii,192.5-7
nirmālyapāṃśuliptāṅgā muktakeśādīgambarāḥ /	
keci uṣṇāmbupānāś ca taṇḍulodakapāṇakāḥ // 26.146	≈ L 249.6-7; H ii,192.7-9
syanditodakapānāś ca sadātīrthāmbupānakāḥ /	
nadīhradasarovāpīkūpaśītāmbupānakāḥ // 26.147	
keci tridaṇḍikā muṇḍāḥ kuṇḍikā pātradhārikāḥ /	
keci kapālakhaṭvāṅgaḍamarukhaḍgapāṇayaḥ // 26.148	≈ L 249.8-10; H ii,192.10-11
makhāgnidhūmapānāś ca bālādityanīrīkṣaṇāḥ /	
keci pañcāgnitaptāṅgāḥ keci tīrthajalāśritāḥ // 26.149	≈ L 249.10; H ii,192.11-194.1
sadordhvaḥbāhavaḥ keci keci eka*pade sthitāḥ /	
evaṃ nānātapahpuṇyaṃ cinvanty ātmasukhecchayā // 26.150	≈ L 249.10-11; H ii,194.1
yatāgnau patitāḥ keci keci prapātapātītāḥ /	
tīrthajalanimagṇāś ca tyajanty asūn sukhecchayā // 26.151	≈ L 249.11-13; H ii,194.1-3

tathaumkāravaṣatkārasvadhāsavādhādijalpanaiḥ /	
dhāraṇīmantrapāṭhaiś ca sādhayanty ātmasadgatim // 26.152	≈ L 249.13-14; H ii,194.3-5
kecid brahmāṇam ārādhya saṃcinvanti vṛṣaṃ mudā /	
kecid rudraṃ samārādhya hariṃ kecit samāhitāḥ // 26.153	
tathenduṃ bhāskaraṃ śakraṃ sarvāṃl lokādhipān api /	
satārakān grahān kecit samārādhyārcayanty api // 26.154	
sagaṇā mātṛkāḥ skandhamahākālavināyakān /	
bhairavān bhagavatīdurgāṃ samārādhya bhajanty api // 26.155	
keci ca ḍākinīr ḍākān siddhān sādhyāṃś ca guhyakān /	
gandharvān kinnarān yakṣān kecid vidyādharaṇ api // 26.156	
nāgendrān garuḍān daityān kumbhāṇḍān rākṣasān api /	
bhūtān pre[190a]tān piśācāṃś ca bhujanty ātmasukhecchayā // 26.157	≈ L 249.16-19; H ii,194.7-10
keci ca parvate kuñje darīśūpatyakāsu ca /	
nadīhradasaraḥkūpamahodadhitaṣv api // 26.158	≈ L 249.19-20; H ii,194.10-11
pīṭhakaṣṭraśmaśāneṣu śṛṅgāṭake ca maṇḍape /	
sattre maṭhe vihāreṣu vṛkṣamūleṣu goṣṭhake // 26.159	≈ L 249.20-21; H ii,194.11-12
evam anyatra deṣeṣu vivikte nirjane vane /	
samāśritya samādhāya saṃcarante tapovratam // 26.160	
keci caivaṃ gr̥hastambham upalamuṣalaṃ dhanuḥ /	
śaraśaktitriśūlāśibhindipālān bhajanty api // 26.161	≈ L 249.21-22; H ii,194.12-13
dadhisarpiryaṅvakṣīradhāturatnaiś ca sarṣapaiḥ /	
dūrvā*pratisarābhyāṃ ca *pratigacchanti maṅgalaṃ // 26.162	≈ L 249.22-250.2; H ii,194.13-196.1
kecid apy ātmajaiḥ putir manyante svātmasadgatim /	
evam nānāvidhānāni kurvanti tīrthikā ime // 26.163	≈ L 250.3-4; H ii,196.2-3
mithyāmārgaprayātāś te 'śaraṇe *śaraṇotsavāḥ /	
amāṅgalye 'pi māṅgalyaṃ saṃjñinaḥ śuddhimāninaḥ // 26.164	≈ L 250.4-5; H ii,196.3-4
yan nv ahaṃ tādr̥śaṃ bhadraṃ ārabheyaṃ tapovratam /	
yatheme tīrthikā mattā bhaveyur nirmadotsavāḥ // 26.165	≈ L 250.5-6; H ii,196.4-6
puṇyakriyāpraṇaṣṭānāṃ kuryāṃ cittam vṛṣotsukam /	
dhyānābhilāṣināṃ dhyānaviśeṣaṃ darśayeya hi // 166	≈ L 250.6-8; H ii,196.6-8
iti dhyātvā sa śuddhātmā bodhisattvaḥ samāhitaḥ /	
sarvān buddhān anusmṛtvā duṣkaraṃ tapa ālabhat // 26.167	≈ L 250.9-10; H ii,196.9-11
tatra paryāṅkam ābhujya dhyātvā buddhān anusmaran /	
samādhinihitātmā sa pracacāra vrataṃ mudā // 26.168	
tadvratapālanārthena pratyahaṃ sa viśuddhadhīḥ /	
ekakolaphalaṃ bhuktvā tasthau dhyānasamāhitaḥ // 26.169	
evam e[190b]kaphalaṃ kolaṃ pratidinaṃ samāhitaḥ /	
bhuktvāṣṭādaśamāsāni tapovratam samācarat // 26.170	≈ S ii.231.7-12; M ii,289.5-10

tataḥ so 'tikṛśāṅgo pi pratyaham ekataṇḍulam /	
bhuktvāṣṭādaśamāsāni samācarat tapovratam // 26.171	
tataś cāpi kṛśāṅgo 'pi tilam ekaṁ dinaṁ prati /	
bhuktvāṣṭādaśamāsāni samāhito 'carad vratam // 26.172	
tataḥ so 'tikṛśāṅgo 'pi nirāhārasamāhitaḥ /	
dhyātvāṣṭādaśamāsāni tapovratam samācarat // 26.173	
tataś cāpi kṛśāṅgo 'sau bodhisattvaḥ samādhibhṛt //	
triratnaśaraṇaṁ kṛtvā sarvān buddhān anusmaran // 26.174	≈ L 250.10-14; H ii,196.11-15
nirudhyāśvāsaprasāvāsau samsthāpya hṛdayāmbuje /	
dhyānam āsphānakaṁ nāma dhṛtvā tasthau samāhitaḥ // 26.175	
abalā ca suguptākhyā priyā ca supriyābhidhā /	
tathā vijayasenā cātimuktakamalābhidhā // 26.176	≈ L 265.1-8; H ii,236.3-10
sundarī kumbhakārī ca tathā cāpy uluvilvikā /	
jaṭilakā sujātā ca daśaitā grāmikātmajāḥ // 26.177	
pratyaham taṇḍulam kolaṁ tilam dattvā prasāditāḥ /	
nityam samīkṣya vanditvā paryupāsya mudābhujan // 26.178	
tatas tasyānile ruddhe nāsikāmukhayor api /	
uccaiḥ śabdaś ca tacchrotaśchidrābhyām samudācarat // 26.179	≈ L 251.15-17; H ii,200.5-7
tatas teṣu niruddheṣu śrotonāsāmukheṣv api /	
vāyur ūrddhvaṁ gatas tasya prāpa *jaghanamastakam // 26.180	≈ L 251.22-252.4; H ii,200.12-17
evam nirudhya sarveṣu chidreṣu vāyucālanam /	
dhyātvā *cāsphānakaṁ kṛtvā tasthau sa niścalendriyaḥ // 26.181	
evam sthitaṁ tam ālokya devās tatra samāgatāḥ /	
kālagato mahāsattvo batāyam iti prāvan // 26.182	≈ L 251.22-252.4; H ii,200.17-202.1
tato 'nye tam sa[191a]māsīnaṁ samīkṣyaivaṁ mudāvan // 26.183	≈ L 252.6-7; H ii,202.1-3
*arhann eṣa mahāsattvo dhyātvā sthitaḥ samāhitaḥ // 26.183	≈ L 252.6-7; H ii,202.1-3
ayaṁ śākyakuloddīpaḥ kṛtvā dharmaprakāśanam /	
aparipūrṇasaṁkalpo naivābhinirvṛtiṁ vrajet // 26.184	≈ L 252.9-10; H ii,202(vs.)1
ity uktā te 'marā bhūyaḥ samīkṣya tam prabodhitāḥ /	
natvā pradakṣiṇīkṛtya mudācaran surālayam // 26.185	
tatra te sahasāgatvā māyādevyāḥ puraḥsthitāḥ /	
sarvam etat pravṛttāntam vistareṇa nyavedayan // 26.186	≈ L 252.13-14; H ii,202.14-15
tan niveditam ākarṇya māyādevī viśādītā /	
taṁ draṣṭuṁ sahasā māyā sahāpsarogaṇair niśi // 26.187	≈ L 252.15-16; H ii,202.16-17
tatra sābhigatā mātā nairāṇjanānadīte /	
gīrīprasthe samāsīnaṁ nirīkṣya tam upāsarat // 26.188	
tatra sā tam samālokya kālagatam ivāsthitam /	
snehaduḥkhāgnisaṁtaptā rudanty evam abhāṣata // 26.189	≈ L 252.16-17; H ii,202.17-19

yadā jāto 'si me putra suramye lumbinīvane /	
sametya brahmaśakrābhyāṃ grhītas tvam mṛgendravat // 26.190	≈ L 252.19-20; H ii,204(vs.)3abc
prakrāntas tvam tadā tatra saptapadāni sūryavat /	
caturdikṣu samālokyā vācam evam udācaraḥ // 26.191	≈ L 252.20-21; H ii,204(vss.)3d-4ab
iyam me paścimā jātir atrāhaṃ bodhim uttamām /	
samāsādyā jagadbhadraṃ kṛtvā yāyāṃ sunirvṛtim // 26.192	≈ L 252.22; H ii,204(vs.)4cd
iyam te mahatī tāta pratijñā naiva pūritā /	
nṛpaśrīśukhasampattir api tvayānubhujyate // 26.193	
maharṣer asitasyāpi samādiṣṭaṃ mṛṣā bhavet /	
saṃbodhim anabhiprāpto yāto 'si nidhanaṃ vane // 26.194	≈ L 253.1-4; H ii,204(vss.)5-6
putrārthe kaṃ prapadyāmi kasya krandāmi duḥkhitā /	
ko vaded ekaputrasya kiṃcit prāṇasya jīvitam // 26.195	≈ L 253.5-6; H ii,204(vs.)7
iti tadvilāpitaṃ śrutvā bodhisattvo mṛdusvaraḥ /	
jānann api samālo[191b]kyā mātaraṃ tām samālapat // 26.196	
kaiṣātra rudate 'tīva karuṇaṃ kīrṇamūrdhajā /	
putreti vilapantī me puro mahītalāśritā // 26.197	≈ L 253.8-9; H ii,204(vs.)8
iti tatkaṭhitam śrutvā māyādevī pramoditā /	
na mṛto 'yam iti dhyātvā saṃpaśyantī tam abhāṣata // 26.198	
mayā tvam daśamāsāni garbhe vajraṃ ivādhṛtaḥ /	
sāhaṃ te janani putra vilapāmīha duḥkhitā // 26.199	≈ L 253.11-12; H ii,206(vs.)9
iti mātroditaṃ śrutvā bodhisattvaḥ samāsthitaḥ /	
jananīm tām samāśvāsya saṃpaśyanty evam ādiśat // 26.200	≈ L 253.13; H ii,206.4
mātar atra na bhetavyaṃ śramaṃ te saphalaṃ bhavet /	
maharer asitasyāpi nirdeśaṃ na mṛṣā bhavet // 26.201	≈ L 253.14-15; H ii,206.4-6
vyākṛtaṃ ca munīndreṇa dīpaṃkareṇa me yathā /	
yathāsatyaṃ bhaved evaṃ sarvaṃ saṃpatsyate dhruvam // 26.202	≈ L 253.16; H ii,206.6-7
śatadhā bhūr vikīryeta merur dikṣu bhṛamed *api /	
satārakā grahāḥ sarve pateyur yadi bhūtale // 26.203	≈ L 253.17-18; H ii,206(vs.)10abc
nāhaṃ bodhim anāsādyā sarvatra bhuvaneṣv api /	
anupadiśya saddharmaṃ nirvṛtim samavāpnuyām // 26.204	≈ L 253.18; H ii,206(vs.)10d
tasmāc choko 'tra mā kāryo vraja tvam abhinanditā /	
paśya tvam acirād bodhim āpnuyām śrīghanaṃ jinam // 26.205	≈ L 253.19; H ii,206(vs.)10ef
iti putrasamākhyātaṃ māyādevī nīsamya sā /	
satyam eva pariññāya prābhyanandat prabodhitā // 26.206	≈ L 253.20; H ii,206.15
tataḥ sā janani divyaiḥ puṣpais tam ātmajaṃ mudā /	
abhyavakīrya saṃstūya saṃpaśyanty evam abravīt // 26.207	≈ L 253.20-21; H ii,206.15-16
utthiṣṭha te tapaḥ siddhaṃ kuruṣva vratapālaṇaṃ /	
sarvasattvahiṭadhānaṃ bodhicaryāvrataṃ cara // 26.208	

yathā tvayā samākhyātaṃ saṃsidhyatu tathā tava /	
sarvatrāpi sadā bhūyān maṅgalaṃ nirupadravam // 26.209	
ity ākhyāyāpi sā māyādevī samabhinanditā /	
jayasaṃvādanotsāhair bodhisattvaṃ vyamodayat // 26.210	
tatas ta[192a]m ātmajaṃ vīkṣya sā māyā jananī mudā /	
tridhā pradakṣiṇīkṛtya natvāpsarogaṇānvitā // 26.211	≈ L 253.21-22; H ii,206.16-17
bhadrasaṃvādanotsāhaiḥ samabhinanditāśayā /	
rātrau saṃbhāsayaṇtyāśu svarge nijālayaṃ yayau // 26.212	
tatra sā svālayāsīnā sahāpsarogaṇair mudā /	
bodhisattvaguṇodbhāve cārayantī sadāvasat // 26.213	
tataḥ so 'pi mahāsattvaḥ kṛśāṅgo durvalendriyaḥ /	
*viśuṣkaraktamāṃsāsthicarmāvaśeṣitāśrayaḥ // 26.214	
vṛṣṭivātātapākṛāntarajovyāptavivarnitaḥ /	
svayaṃ pramṛjya hastena sarvāṅgaṃ samaśodhayat // 26.215	
tadā pramṛjatas tasya *tanujāni samantataḥ /	≈ L 255.1-2; H ii,210.3-4
keśalomāni sarvāṇi viśīrṇāny aharan marut // 26.216	(= ≈ L 256.4-5; H ii,212.16)
ativichanditāṅgo 'bhūt kālavarṇo durākṛtiḥ /	≈ L 255.2-3; H ii,210.4-6
kaṅkālabhīṣaṇākāraḥ śmaśānastho yathā śavaḥ // 26.217	(= ≈ L 256.5-6; H ii,212.17-18)
taṃ kaṅkālāśrayaṃ kālavarṇam *anabhiśobhitam /	≈ L 255.3-4; H ii,210.6-7
samīkṣya grāmikā lokāḥ sarve 'py evam abhāṣire // 26.218	(= ≈ L 256.6-7; H ii,212.18-19)
batāyaṃ śramaṇaḥ kālāḥ śyāmako mudguracchaviḥ /	≈ L 255.4-6; H ii,210.7-10
yāpy asya śubhavarṇā sā *tanur antarthitādhunā // 26.219	(= ≈ L 256.7-10; H ii,212.19-214.3)
tam evaṃ sthitam ālokya sarve grāmyāḥ kumārikāḥ /	
pāṃśupīśācam ity uktvā pāṃśubhir abhyavākiran // 26.220	≈ L 257.3-6; H ii,214.19-216.2
evaṃ nānāprakāraiḥ sa nindyamāno 'pi bhūtavat /	
kiñcid api manobhinnadīnatvaṃ nābhyadarśayan // 26.221	
vṛṣṭivātātapatrāṇachāyām api cakāṅkṣa *sa /	
daṃśamaśakasarpādīn kiṭān naiva nyavārayat // 26.222	≈ L 256.19-20; H ii,214.12-13
*malaṃ noccārapraśrāvaśleṣmasiṃhāṇakān api /	
utsasarja vyadhān no vā samīñjanapra[192b]sāraṇam // 26.223	≈ L 256.20-21; H ii,214.13-15
pāṇināpi kvacit kāye naiva prachādanam vyadhāt /	
kaṇḍūyanaṃ tathā kvāpi na cakāra kadācanaḥ // 26.224	≈ L 257.1-2; H ii,214.17-18
apithayad *bhayotpanno nendriyāṇi kadācana /	
na cendriyārtham ālokya grhṇīte sma kadācana // 26.225	≈ L 257.2-3; H ii,214.18-19
evam asau mahāsattvaḥ ṣaḍvarṣāṇi suduṣṭaraṃ /	
tapovrataṃ samādhāya pracacāra jagaddhite // 26.226	
tatra ya āgatā devā yakṣagandharvakinnarāḥ /	
daityāś ca garuḍā nāgāḥ kumbhāṇḍā rākṣasā api // 26.227	≈ L 257.13; H ii,216.9-10

tasya guṇeṣu dharmeṣu pratyakṣās te pramoditāḥ /
 adhiṣṭhāya *paraprāhṇapūjāṃ kṛtvā sadābhajan // 26.228 ≈ L 257.14-15; H ii,216.10-12
 evaṃ sa bodhisattvaḥ ṣaḍvarṣāṇi duṣkaravratam /
 caran devān asaṃkhyeyān saddharṃe samajjayat // 26.229 ≈ L 257.16-17; H ii,216.13-15
 tathā daityā manuṣyās ca yakṣagandharvakinnarāḥ /
 guhyakā siddhasādhyās ca kumbhāṇḍā rākṣasā api // 26.230
 vidyādharaś ca nāgās ca garuḍās ca mahoragāḥ /
 saṃbodhisādhane dharme samābhilāṣiṇo vyadhān // 26.231
 evaṃ sattvahiṭam kṛtvā bodhisattvaḥ samāhitaḥ /
 ṣaḍvarṣāṇi jinān smṛtvā saṃcere duṣkaravratam // 26.232
 tasyaitatsarvavṛttāntaṃ pratyahaṃ sa pitā nṛpaḥ /
 śuddhodanaḥ samākarmaṇya vismayaṃ samupāyayau // 26.233
 kālaṃgata iti śrutvā naivāsau paribodhitaḥ /
 samādhinihitātmā sa iti cittaṃ vyanodayat // 26.234
 tathā prajāpatiṃ mātā bhāryā yaśodharāpi ca /
 kālaṃ naiva vrajen nūnaṃ bodhisattvaḥ sa sarvavit // 26.235
 saṃbodhipraṇidhānena samādhinihitāśayaḥ /
 niścayātmasthito nūnaṃ iti [193a] śokaṃ vyamuñcatām // 26.236
 etad*apūrvavṛttāntaṃ sarvatra saṃprasāritam /
 śrutvā sarve 'pi lokās ca vismayaṃ samupāyayau // 26.237
 evaṃ sarve 'pi devās ca sarve lokādhipā api /
 śrutvā dṛṣṭvānumodantas tadvratam abhileṣire // 26.238
 iti śāstrā samādiṣṭaṃ śrutaṃ mayā tathocyate /
 tvam apy etat mahāsattva śrutvā samanumodaya // 26.239
 ye 'numodanti śrutvedaṃ duṣkaravratacālanam /
 te sarve syur mahāsattvā bhadrāśrīsadguṇāśrayāḥ // 26.240
 iti śāstrā samādiṣṭaṃ śrutvā*śoko *nṛpo {or: śrutvānando yatir} mudā /
 tatheti pratijñāpya prābhyānandan sapārṣadaḥ // 26.241

// iti śrīlālitaṣṭarāvadāne duṣkaravratācāryāparivartā nāma ṣaḍviṃśatitamo 'dhyāyaḥ //

Apparatus criticus of the chapter 26

1a athā*śoko] ex con: A B D.

3c *aśokaṃ *taṃ *mahārājāṃ] ex con: śākyasiṃhas tam ānandaṃ A B D. — In A the words śākyasiṃhas tam ānandaṃ are letters of later overwriting. Here *śākyasiṃhas tam ānandaṃ* in the manuscript A are the letters of later rewritten by someone.

4a śṛṇv *aśoka] ex con: śṛṇvānanda A B D.

- 4b *guruṇādiṣṭam] ex conī: kṛtapūrvakaṃ A B D.
- 4 note] *ānandaḥ* and *kṛtapūrvakaṃ* in A are letters of later overwriting.
- 39c kaś carituṃ praśaknuyāt] A: praśaknuyāt kaś carituṃ D.
- 39d pañcakaṣāyite] A: pañcakaṣāyate D.
- 40b mahāvīrye] A: mahāvīryā D.
- 44c °ādhārām] A: °ādhārī D.
- 49d *ṛptim] ex conī. (or *tuṣṭim?): sṛstim A2 D.
- 57c sarvaṃ] D: sarvaṇ A2.
- 60d *vāsaṣāpi] ex conī: vāsaṭāpi A2 D.
- 62b tapasvino] corr.: tapasvinām A2: tapasvinā D.
- 67a kāmarāgādrakāyā] A2: kāmanāgādrakāyā D.
- 74b sūtā] D: sūtaḥ A2.
- 86ef tṛṣṇāśānta°] corr.: tṛṣṇāśānta° D: tṛṣṇāśāta° A2.
- 88b bhīṣaṇān aśubhān kharān] = bhīṣaṇān aśubhān_ kharām A2: bhīṣaṇān_ śubhan_ kharām D.
- 89d vāri*gaṭaṃ śavaṃ] ex conī: cārigatāsavaṃ A2: vārigatāśavaṃ D.
- 90d samācareḥ] corr.: samācare A2: samācaraḥ D.
- 91a paribhraṣṭaḥ] A2: paribhraṣṭaṃ D.
- 91c *eko 'tra] ex conī: ekatra D: eka A2.
- 94b vrajeya hi] A2: vrajemahi D.
- 97a kandamūla] D: skandamūla A2.
- 98a nāhaṃ bibhemi] A2: nāḍaṃ bibhemi D.
- 99a jaratkaṇṭhā] corr.: jaratkaṇṭhā A2 D.
- 100b saṃkliśyate] A2 śaktiśyate D.
- 105d *utsahe] ex conī: āsane A2: āsaneḥ D.
- 106a °vrate me 'tra] corr.: °vrata metra D; °vrata meva A.
- 106d saṃcarasva] A2: saṃcareyaṃ D.
- 107b maṇḍalaḥ] maṇḍalāḥ A2 D.
- 107d maharddhikaḥ] corr.: maharddhikāḥ A2 D.
- 108a bodhisattvo mahāsattvo] corr.: bodhisattvā mahāsattvā A2 D.
- 108b °guṇāśrayaḥ] °guṇāśrayā D: °guṇāśrayāḥ A2.
- 108d *bhavē] ex conī: bhavē D: bhavet_ A2.
- 109a tatas tvam pari°] A2: ato 'haṃ pari° D.
- 109d samavāpnuyāḥ] A; samavāpnuyāḥ D.
- 110d saṃyāsyasi] A2: saṃyāsyāmi D.
- 111b °nihatāśayā] D: °nihatāśayāḥ A2.
- 111c vrata numodaṃtī] A2: vrata numodaṃti D.
- 112d prābhyānandat prabodhitā] corr.: prābhyānandan prabodhitāḥ A2 D.
- 113d samatoṣayat] samatoṣayan A2 D.

- 114b suprasannāsyā sambodhinihitāśayā] D: suprasannāsyāḥ sambodhinihitāśayāḥ A2.
- 116b bodhisattvaḥprasāditaḥ] A2: bodhisattvaprasāditam D.
- 116c sujātām tām] D: sujātātām A2.
- 118b °śobhitām] A2: °śobhitāḥ D.
- 120d prahāṇā*rthina āśramaḥ] ex coni: prahāṇārthiḥ sa āśramaḥ A2: prahāṇārthi āśramaḥ D.
- 121b nihitāśayaḥ] D: nihitāśayā A2.
- 122c tapovane] A2: tapovanaṃ D.
- 122d samupācarat] A2: samupācaran D.
- 123c tām] A2: tā D.
- 128c abhīcchanti] corr.: abhicchanti A2 D.
- 128d prajñāpayanti] corr.: prajñāpayati A2 D || conmadāḥ] A2: vonmadāḥ D.
- 132d °*varjanam] ex coni (cf. LV): °sarjanaṃ A2 D.
- 134d °bījāśana°] A2: °bījāsana° D.
- 135d kecit kṣīrauda°] corr.: kecit kṣīroda° A2: kecīchiroda° D.
- 136c grāmakṣetra°] corr.: grāmakṣatra° A2 D.
- 138a tathaikālōpikaṃ] corr.: tathaikālāpikaṃ A2 D.
- 138b *saptālōpikṛtavratam] corr.: samālāpikaṃ vratam A2: samālāvirkṛtavrtam D.
- 141c śāṇa*kanthā°] ex coni: śāṇakaṇṭhā° AD.
- 142d *dṛṣadāśritāḥ] ex coni: vṛṣadāśritāḥ A2 D.
- 143a *upalakāśīnās] ex coni: ugalakāśīnās A2 D.
- 143c sthaṇḍilāsīnāḥ] A2: syaṇḍilāsīnāḥ D.
- 147a syanditodakapānāś] corr.: syanditodakapānaś A2 D.
- 150b eka*pade sthitāḥ] ex coni: ekapadotthitāḥ A2 D.
- 151d asūn] corr.: amūn A2 D.
- 152b svadhā] A2: svadā D.
- 153b saṃcinvanti vṛṣaṃ] A2: saṃcinvan nirvṛṣaṃ D.
- 155c bhagavatīdurgām] A2: bhagavatīm durgām D.
- 156a ḍākinīr ḍākān] B: ḍākinīḍākān A2.
- 158b darīṣūpa°] corr.: darīṣupa° A2 D.
- 159c maṭhe] A2: paṭhe D.
- 161b upala°] A2 (cf. LV): utpala° D.
- 162c dūrvā*pratisarābhyām] ex coni (cf. LV): durvāgnibhiḥsarābhyām D: irvāgnabhisarābhyām A2(ante corr.): iṣṭāgnibhisarābhyām A2(post corr.).
- 162d *pratigacchanti maṅgalaṃ] ex coni: pratiganti__maṅgalaṃ A2: pratiganti<su>maṅgalaṃ D.
Here A2 wrote __ to indicate one missing character. D wrote "su" in the margin instead of it.
- 163a kecid apy ātmajaiḥ] A2: kecidavyātmajaiḥ D.
- 164b *śaraṇotsavāḥ] ex coni: śaraṇe psavāḥ A2 D.
- 175a nirudhyāśvāsapraśvāsau] A2: nirudhyāśvāsapatyāśvāsau D.

180d prāpa *jaghanamastakaṃ] ex conī: prāpa jaṃghānamastakaṃ A2: prāpa jaṃghrānamastakaṃ D.

181c *cāsphānakaṃ] māsphānakaṃ A2 D.

182c kālagato] A2: kālaṃ gato D.

183c *arhann eṣa] ex conī: arhat eṣa A2 D.

189b kālagatam] D: kālaṅgatam A2.

200c jananiṃ tām] corr.: jananiṅtām D: jananiṅtām A2.

202d saṃpatsyate] corr.: saṃsaśyate D: saṃspatsyate A2.

203b bhramed *api] ex conī: bhramed yaṭiḥ (or, bhrame ghaṭiḥ) A2 D.

204d samavāpnuyām] corr.: samavāpnuyāt A2 D.

206c satyam eva] A2: satyam evaṃ D.

208d cara] A2: caraḥ D.

210c jayasamvādano°] corr.: jayāsamvādano° A2 D.

214c *viśuṣka°] ex conī: niśuṣka° A2 D.

215d sarvāṅgaṃ] corr.: sarvāṅga A2 D.

216b *tanujāni] ex conī: natujāni A2 D.

218a kaṅkāḷāśrayaṃ] A2: kaṅkāṛāśrayaṃ D.

218b *anabhiśobhitam] ex conī: anāśiśobhitam D: ānoviśobhitam A2.

219d *tanur antar] ex conī: marvāpy antar° A2 D.

220c uktvā] A2: uktā D.

221ab sa nindyamāno] D: saṃnindyamāno A2.

222b cakāṅkṣa *sa] ex conī: ca kāmṣanaḥ A2: ca kāmṣana D.

223c vyadhān no] D: vyadhāko vā A2.

225ab *bhayotpanno nendriyāṇi] bhayotpannenendriyāṇi D: bhayotpantanendriyāṇi A2.

228c *paraprāhṇa°] ex conī: parātprahnaḥ A2(post corr. marg.): parāhṇāhnaḥ A2(ante corr.): parātprahnu D.

228d °pūjāṃ kṛtvā] corr.: °pūjākṛtvā A2 D.

229d saddharṃe samayojayat] corr.: saddharmasamayojayat A2 D.

230b °kinnarāḥ] corr.: °kinnarān A2 D.

230cd kumbhāṇḍā rākṣasā api] corr.: kumbhāṇḍān rākṣasān api A2 D.

231b mahoragāḥ] corr.: mahoragān A2 D.

231d vyadhān] corr.: vyadhāt A2 D.

236d vyamuṇcatām] A2: vyamuṣcatām D.

237a etad*apūrvavṛttāntam] ex conī: etatpūrvavṛttāntam A2 D.

241b śrutvā*soko *nṛpo] ex conī (cf. TJAM 8.242): śrutvānando yatir A2 D.

(Colophon:) śrīlālitavistarāvadāne duṣkaravratācaryāparivartto nāma ṣaḍviṃśatitamo 'dhyāyaḥ A2: śrīlālitavistarāvadāne duṣkaravratācaryāparivartto nāma caturviṃśatitamo 'dhyāyaḥ D.

『苦行誓戒を行じた』という第26章

さて、大士たるアショーカは {或いは：アーナンダは}、合掌して嬉しくかの出家行者を拝すると、前に進み出て、見つめながらこのように言った。(26.1)

「尊師よ、かの大士・菩薩はその後歩いていって、誓戒を見るためにどこへ行かれたのでしょうか。それをお説き下さい。」(26.2)

そう彼が求めるのを聞き、大慧者たるかの阿羅漢はアショーカ王を {或いは：釈迦族の獅子はアーナンダを} を見つめ、次のように説いた。(26.3)

アショーカよ {或いは：アーナンダよ}、専心して聞きなさい。わが師によって語られた通りに {或いは：私が以前になした行為をその通りに} 語ろう。あなたの心の目覚めのために、私はそれを語ろう。(26.4)

その時ヴィンディヤ山には、大神通の者たる、ルドラ・ラーマプトラという名の、偉大な智慧者が或る苦行林の隠棲処にいた。(26.5)

彼は弟子たる七百人の、諸感官を制した苦行者たちと共に、梵行の誓戒を持し、専心して修行していた。(26.6)

彼は教法に従い、最高の境地である『非想非非想定』について、すべての弟子たちに正法を説いていた。(26.7)

菩薩は遠くから、其処で弟子たちの集合した座の中にいるその仙人を眺めて、彼に会うために近づいた。(26.8)

そこで、自己知者たる菩薩は、あらゆる仙人の集団の師であり、すべての人に崇められている彼を見て、(26.9)

「この仙人は大神通力をもち、あらゆる仙人の集団の指導者である。どのような法を説いているのだろう」と、会うために考えた。(26.10)

「私はこうして彼のもとへ行って苦行誓戒を始めよう。しかしこの法（非想非非想定）は私にとって菩提を達成する特別な法ではないと思われる。(26.11)

これらの大神通力を持ちブラフマン（梵）を説く仙人たちは、わが正法である菩提分法において、現前知を得た者（明白な認知者）となりうる。(26.12)

〔彼らに〕菩提分法を明示するために、菩提を志す心をもつ私は、彼の弟子となつて、行をなそう。(26.13)

輪廻に属する有為法に対する瞑想や三昧が空虚なることを教え、正法と正しい禁戒（律儀）を私は示そう。」(26.14)

このように沈思した大士・菩薩、かの善慧者は、そのルドラカに話しかけて、見つめながらこう言った。(26.15)

「大仙よ、その法を教示されたあなたの師はどなたですか。そしてまた、その特別な法を私に説明して下さいませんか。」(26.16)

勝れた志あるその菩薩にそう求められると、大智慧者ルドラカは聞いて、このように語った。(26.17)

「きみ、私に師はいません。自分で、最高の『非想非非想定』という法を会得したのです。」(26.18)

そう、その事が説明されたのを聞き、菩薩は一所に退いて留まり、その禅定に心に向けた状態でずっと過ごした。(26.19)

その時、前世の功德の力によって、勝れた知をもつ彼は、数百の三昧・等至（定）がありありと眼前に現れ出るのを視た。(26.20)

それらすべての事を思い出してから、菩薩は立ち上がり、ルドラカに近づいて話しかけ、このように言った。(26.21)

「大仙よ、その三昧よりも勝れた、何か別の境地がありましたら、大賢者よ、あなたはそれを私にお説きになって下さい。」(26.22)

そう彼が尋ねたのを聞くと、ルドラカは大慧者たる菩薩を見つめて、「それ以上のものは存在しない」と答えた。(26.23)

それを聞いて、浄慧者たる大士・菩薩は、そのすべてを証智し、再びこのように考えた。(26.24)

「あのルドラカが有するところの信・精進・念・定・慧は、それらが達成されて[私にも]有る。」(26.25)

明澄な思考を持つ菩薩は、このように自ら見極めると、そのルドラカに話しかけ、再びこのように語った。(26.26)

「大仙よ、あなたが無染著の法に到達された、その法に私も到達しました。この法は輪廻的生存からの解脱を与えるものです。」(26.27)

それを聞くと、大智慧者ルドラカは、大慧者たるその菩薩を見つめ、再びこのように語った。(26.28)

「素晴らしい。大士よ、さあ来なさい、私と一緒にこの集団を率い、この法において供養を受けながら、いつまでも安らかに過ごしなさい。」(26.29)

大賢者ルドラカはこのように告げ、大慧者たる彼（菩薩）を自分と同等の導師の地位に据えて、共に自身の教団を導かせた。(26.30)

その後かの菩薩は彼の法について熟考し、「この法は解脱に導かず、菩提の獲得に導かない」と見極め、(26.31)

そう決意すると、かの賢者、大慧者たる菩薩は、そのルドラカに話しかけて、見つめながらこう言った。(26.32)

「大仙よ、私が何のためにここに来たのかをお知り下さい。私は輪廻界における享樂を求めたり、天界を求めるために、誓戒を行っているわけではありません。(26.33)

そうではなく、私は煩悩の炎に焼かれている世の生類を見て、彼らの苦を鎮めるために、菩提を得ようと努めているのです。(26.34)

その目的のため、私は王位とすべての所有物を捨て、出家の誓戒を守り、至る所を遊行しているのです。(26.35)

すべての仙人たちの隠棲処を見て回り、様々な誓戒のしかたを見て、ここも見つめ、やって来ました。(26.36)

しかしどなたの所でも、どこにも菩提行の誓戒は見出せませんでした。それ故今、私は菩提を得るために旅立ちたいのです。」(26.37)

そう彼が語るのを聞き、賢いその大仙は、とても聡明な菩薩を見つめてこう言った。(26.38)

「ここには誰の所にも、菩提行の誓戒はどこにも存在しない。五濁のこのカリの時代(末世)に、誰が〔菩提行を〕実践できよう。(26.39)

それでも、大士たるあなたは大きいなる精進と勇猛心を持っている。諸仏への憶念を持して、菩提行の誓戒を行いなさい。(26.40)

人は諸仏の力づけによって、菩提行の誓戒を行いながら、悪しきマーラの群に打ち勝ち、菩提が得られるであろう。(26.41)

このように考え、専心して三輪(身口意)を清め、諸仏を敬信し、善逝たちの誓戒を行いなさい。

さあ行かれるがよい。あなたは速やかに菩提を得て、広く普く正法を説いて、世の生類を幸せな存在に変えなさい。(26.43)

あなたに常に吉祥あれ。あなたの望みが成就しますように。勝利達成の徳性を持つ、菩提という栄光の女神を手に入れなさい。」(26.44)

ルドラカはこのように菩薩に吉祥の祈願の言葉を与えると、明るく澄んだ心で、その地の自らの隠棲処に留まった。(26.45)

その後、菩提行に専念する菩薩は、ルドラカと弟子たちのもとを離れ、他の場所を見るために進んだ。(26.46)

彼が去るのを見て、梵行をなす出家行者たちである賢善なる五人組は、集まってこのように語り合った。(26.47)

「われらはあのルドラカ大仙のもとに留まっていて、かのブラフマン(梵)所成の智慧を得ることが出来ないままにいる。(26.48)

しかしあの菩薩はそれをやすやすと速やかに達成してしまい、しかも彼はこの法に満足を得ていない。(26.49)

確かにこの大士はもっと勝れた智慧を求めているのだ。彼が最も勝れた法を得たなら、彼は世界の師となるであろう。(26.50)

その時、彼はすべての人にその法を説くであろう。それ故、われらは彼の正法を得るために、彼の後に従ってゆこう。」(26.51)

このように語り合うと、彼ら賢善なる五人組もそこを立ち去って、嬉しくその菩薩の後を追った。(26.52)

彼らは速やかに近づくと、かの大慧者たる菩薩に深くお辞儀し、嬉しく話しかけて、見つめて言った。(26.53)

「尊者よ、我らはあなたと共に誓戒を行じたいと欲しております。それ故、どうか憐れみを覚え、われらを受け容れて下さい。」(26.54)

彼らの請願を聞くと、菩薩はその賢善なる五人組を見つめ、こう告げた。(26.55)

「もしあなた方が私と一緒に修行したいと願うなら、菩提への誓願を堅持し、専心して修行しなさい。」(26.56)

彼がそう告げたのを聞くと、その五人は、彼の告げたすべてに同意して喜び、常に従って、行をなした。(26.57)

その後、かの菩薩はそれらの比丘たちを伴って歩み行き、その国のあらゆる地域を輝きを放ちながら進んだ。(26.58)

その時、行く道の途中で、その地に住していた苦行者たちは菩薩がやって来るのを見ると、近づいてきた。(26.59)

其処で彼らはかの大士のもとに急いで嬉しげに集まり来ると、招いて、尊崇の心をもって夜の宿処を与えた。(26.60)

其処で彼は見学しながら、それらの比丘たちを伴って隠棲処に身を寄せ、夜に語り合いながら留まった。(26.61)

その後翌朝、起きると、すべての苦行者たちは喜心をもってその大士と比丘たちを食事で満足させた。(26.62)

その後、菩薩は比丘たちと共にそこを出発し、ガヤという名前の一人の王仙（王族出身の仙人）の隠棲処へと赴いた。(26.63)

その後、かの大士は比丘たちを伴い、ガヤーという都城を歩み、すべての人々から讃えられながら、輝いた。(26.64)

そこから大士は断滅の〔行法の〕目的のため、嬉しく歩みを進め、ガヤーシールシャ（象頭山）の美しい山で、草の座に坐って過ごした。(26.65)

其処で安らぎを感じた彼は、苦行の誓戒を実行しようとして、仏たちの功德の威神力により、心の中でこのように思考した。(26.66)

「欲望・愛欲に濡れた身体をもち、欲望に心が染まり、欲望に飲ばされ、欲望・渴愛・煩悩に占められた者たちは、(26.67)

たとえ困難な苦行を行っても、彼らは決して浄らかな者にならない。どうして彼らが聖なる大いなる智慧を得ることが出来よう。(26.68)

それは、火を欲する者が濡れた材木を取って、濡れ湿った発火用の摩擦木を上置いて、地面でこする如くである。(26.69)

そのような者が、輝く火を生じさせることが出来るだろうか。その様に、欲望から解放された心を持つ者だけが、最高の智慧を得ることが出来るのだ。」(26.70)

このように確信した、浄らかな心と浄らかな諸感官をもつ出家行者（菩薩）は、菩提を得るために、困難な苦行の誓戒を実行せんと欲した。(26.71)

その後明るく澄んだ心をもち、断滅の目的のために諸感官を統御した彼は、ウルビルヴァーの地にある村を見るため、嬉しく歩んで来た。(26.72)

其処でかの比丘（菩薩）は、至る所に幸をもたらしながら、セナーパティの家へと食を乞うために赴いた。(26.73)

其処でその比丘がやって来たのを見て、セナーパティの娘である、スジャーターという名の、明るく澄んだ顔をした女が急いで近づいてきた。(26.74)

スジャーターはその彼を見て、愛情に燃え立った心で、打ち震えながら、きれいに「化粧油を」塗った顔で、お辞儀し、合掌してこう言った。(26.75)

「尊師よ、あなたはどなたですか。美しく、若く、神のように大変きれいなお方ですのに、出家者として、何のためにここへいらしたのか、それをお語り下さい。」(26.76)

そう彼女が尋ねたのを聞き、菩薩は清らかな視線で、とても美しい肢体をもつスジャーターを見つめ、こう語った。(26.77)

「母御よ、私はシュッドーナ王の息子です。欲望を捨て、世の生類の幸いのため、菩提行の誓戒を行っています。(26.78)

菩提を求める心をもつ私は、閑静なこの地で美しい森に住み、禪定して、諸仏を憶念し、誓戒を行じるためにやって来ました。」(26.79)

その出家行者がそう語ったのを聞き、そのスジャーターはよく理解し、とても美しい体の彼を見つめてこう言った。(26.80)

「ああ、尊師よ。何とあなたは世間知らずなのでしょう、王中の王の子でありながら、若くして王国を捨て、出家してここへ来られるとは。(26.81)

王子よ、お戻りなさい。出家行者の誓戒を行ってはなりません。王位での生活期に留まり、家系の世襲の仕事の誓戒を行いなさい。(26.82)

転輪王の家柄に生まれ、若く美しい甚だきれいなお方が、比丘の行の誓戒を堅持して、哀れな貧しい人の様にどうして行えるのですか。(26.83)

あなたのお体は非常に繊細なのに、森の固い地面の上でどうやって坐り、森でどうやって住むのですか。(26.84)

樹下で、また枯れた葉っぱの小屋で、クシャ草の座で、あなたは坐って、どうやって瞑想し、夜にどうやって眠るのですか。(26.85)

茎や根や果実だけを食べて、どうやって満足できるのですか。埃まみれの草の葉が混じった濁った滝の水を飲んで、どうしてあなたの渇きが癒え、満足の幸福感が得られるというのですか。(26.86)

あなたの非常に繊細な体が冷たい風や陽の熱射に晒される時、この無人の森の中で、誰がどのようにそれを守ってくれるというのですか。(26.87)

悪しき獣たちの恐ろしい、厭わしい、荒々しい鳴き声を聞いて、あなたの恐怖した心はどうやって泰然自若の安らかさを得るのですか。(26.88)

悪党や泥棒、狡猾な者たちは、あなたが王の息子であることを知り、すべての衣を奪い、あなたを川の中の死体にするでしょう。(26.89)

このように様々な危難のある森、険阻な地、悪漢の巢で、独り住んで、どのような誓戒をあなたは行じるというのですか。(26.90)

必ずやあなたは道を失って墮落し、感官も身体も疲れ果て、この地で独り苦しみを味わいながら、何の功德も安楽も得られないでしょう。(26.91)

このように考えて、お戻りなさい。家の世襲の仕事の誓戒を行いなさい。無人の森で、比丘の誓戒に依拠して暮らしてはいけません。」(26.92)

彼女がそう言うのを聞き、理知すぐれた菩薩・出家行者は、そのスジャーターを見つめ、微笑みながらこう告げた。(26.93)

「ああ、母御よ、直ちに私が家に戻るよう、おっしゃるのですね。私は菩提の智慧を達成したら、自ら私は嬉しく戻ります。(26.94)

そして私はあらゆる場所にも自ら行き、法という不死の甘露を雨降らせながら、すべての人々をずっと正法において行動せしめるでしょう。(26.95)

母御よ、その目的のため、世の生類の益のために、私は退転することなく菩提行の誓いを持して、苦行林で行をします。(26.96)

球根や木の根や葉、また花や果実を食べながら、自足した心で、私は誓戒を行じながら暮らします。(26.97)

様々な輪廻の生存においても、私はあらゆる場所で、恐れません。地面の草の座に坐り、禅定して、本当の安樂を得るでしょう。(26.98)

剃髪し、古びた襤褸布の衣を纏っていても、私は輝いて、あらゆる場所で菩提行の誓戒を行じており、(26.99)

私の心はこの地で疲倦を感じることもなく、どこにしようとも決して悩苦しません。菩提の誓願を愛して、常に歓喜と共にあり、(26.100)

生老病死の恐れを、心乱すことなく見つめ、すべての衆生の益を実現する菩提行の誓戒を行じつつ、(26.101)

死んでも私は善き再生の世界（善趣）へ赴き、生きていれば生類の益のために菩提を得て、正法を遍く明示しながら、(26.102)

どんな時でも浄福をもたらし、どんな世界でも生類を法から成るものに変えて、仏の住まい（涅槃）へ私は赴きます。(26.103)

このように決意し、私は輪廻界の快樂の享受を望むことなく、法という不死の甘露の味を楽しむため、菩提行の誓戒を行いながら、(26.104)

過去の諸仏がしばしば住まわれた、この人里離れた美しい森に身を寄せ、賢善なる誓戒を絶えず行じようと、私は意気込んでいます。(26.105)

あなたはこの地でずっと私のこの菩提の誓戒に随喜し、[自ら]菩提への誓願を持して、正しい禁戒を行いなさい。(26.106)

そのことの功德の結果として、あなたは三輪清浄を得、次第に菩薩の資糧を満たし、大神通力をそなえ、(26.107)

めでたい幸せと光輝と善き徳性が依る器たる一人の菩薩・大士となり、一切衆生を饒益し、十地自在の者となるでしょう。(26.108)

その後、清浄な心をもつあなたは、誓戒を行い諸感官を制した者、阿羅漢となり、マール（魔）の群に打ち勝ち、菩提を得ることでしょう。(26.109)

その後、あらゆる人々に正法を明らかに教え示しながら、世の生類を善法から成るものに変え、あなたは仏の住まい（涅槃）に赴くことでしょう。(26.110)

このように真実をしっかりと認識して、菩提に心を定め置き、私の誓戒に対して随喜しながら、菩提行の誓戒を行じなさい。」(26.111)

このように確固たる心のその出家行者・比丘が教示した言葉を聞き、その善きスジャーターは覚知を得て、歓喜した。(26.112)

その後、その歡ぶスジャーターはその出家行者を供養して、五種の甘露食を伴う清らかな食事で満足させた。(26.113)

そして明るく澄んだ顔をした彼女は、菩提に心を定め置き、かの菩薩を拝して、見つめながらこう言った。(26.114)

「よかったです。では大士よ、どうかお行きになってください。よき禁戒を行じて下さい。あなたの偉大な目的が成就しますように。どんな時も障害がありませんように。」(26.115)

菩薩によって心に浄信を得た彼女の言葉を聞き、彼はそのスジャーターを見つめると、そこから発って歩いていった。(26.116)

その地で彼は次第に歩いてゆきながら、やさしい眼差しで生き物たちを嬉しく眺めていて、とても澄んだ水を持つ美しい川、ナイランジャンナーを目にした。(26.117)

「その川が」よき沐浴段の紅蓮や青蓮などで美しく彩られ、花や果実をつけた岸辺に生えた樹々によって美しく飾られているのを眺めると、(26.118)

菩薩は明るく澄んだ心で、見ながら近づき、その岸辺に身を置いて、心中このように考えた。(26.119)

「ああ、この土地はとても美しく、きれいだ。独り隠れ住むのに相応しく、断滅を求める者のための隠棲処となる。(26.120)

私はこの地で断滅を求め、三昧に心を定め置き、諸仏を憶念し、禅定しながら、菩提を得るため暮らすことにしよう。」(26.121)

このように浄らかな心の菩薩は決意し、その近くにある、閑寂で心に快い苦行林に向かった。(26.122)

其処で彼は、インドラ神によって化作された木葉の小屋（草庵）を見た。それを見ると、明るく澄んだ心の菩薩は嬉しく歩み寄った。(26.123)

其処に入って草の座に坐り、彼はすべての諸仏を憶念しつつ、禅定に集中して過ごした。(26.124)

その時諸仏の威神力を伴って、浄慧者たる菩薩は心で観察しながら禅定して、このように考えた。(26.125)

「この地、閻浮提で私は今、カリ・ユガの時代に、[五]濁の者たち、劣悪なものを信解する者たちの中にいる。(26.126)

ここに外道師たちがいて、様々な苦行誓戒に満足し、自らの幸せと浄福を願い、好きなように行をしている。(26.127)

自分自身に熱苦を与えることから生じる多種多様な苦行の功德によって、身体の清浄なることを望む、半狂いの者たちは、[その様な行を]説いている。(26.128)

或る者たちはマントラ（呪文）を唱え、瞑想し、シヴァ神を念じ、自分の幸せを願って絶えず供養し、信奉する。(26.129)

或る者たちは思慮もなく、呪文によって心の浄化を想像し、身内・他者・自分の平等（無差別）の行為者として苦行誓戒を行う。(26.130)

或る者たちは『手を舐める』という誓戒を行い、高慢な或る者たちは『人に乞わない』という禁戒を行う。(26.131)

或る者たちは『会話しない』を、或る者たちは『根を食する』の誓戒を、或る者たちは『肉を食べない』を、或る者たちは『スラー酒・穀穀・水を避ける』をなし、(26.132)

また『一軒の家の乞食』や『三軒目ずつの乞食』や『五軒目ずつの乞食』や『七軒目ずつの乞食』をなし、(26.133)

或る者たちは『根と果実だけの食事』を、或る者たちは『シャイヴァーラ水草』の誓戒を、或いは『クシャ草や木葉や草の食事』、『花や種を食べる』という誓戒をなし、(26.134)

或る者たちは『五種の甘露（アムリタ）の食事』や『五種の乳製品の食事』の誓戒を、或る者たちは『[体を]養育する食事』、或る者たちは『乳粥の食事』をなし、(26.135)

また『鳥が啄んで落とした果実を洗って食べる食事』をなし、『村の畑や森に生える野菜や茎の食事』をなし、(26.136)

また『牛の、鹿の、馬の、猪の、猿の、象[の模倣]』の誓戒をなし、或る者たちは『一場所のみの食事』や『沈黙』や『勇者の坐り方』の誓戒をなし、(26.137)

また『一口の食事』から『七口の食事』までの誓戒を、また『一日一食』『一昼夜[の断食]』の誓戒をなし、(26.138)

また『七日ごとの食事』『半月間の断食』『一月間の断食』を、或る者たちは『月の満ち欠けに沿った断食』の誓戒をなし、(26.139)

或る者たちは『禿鷲の翼を持つ』『梟の翼を手を持つ』『ムンジャ草・樹皮の衣を着る』を、或る者たちは『バルバジャ草の座に坐る』を、(26.140)

或る者たちは『髪で作った上衣を着る』『獣皮を身に纏う』『麻の襪襦布を身に纏う』をなし、或る者たちは『僧衣を纏う』をなし、(26.141)

或る者たちは『草の坐臥具』を、或る者たちは『灰の中に居る』を、或る者たちは『砂利の上に坐る』、或る者たちは『大石の上に居る』をなし、(26.142)

或る者たちは『小石の上に坐る』、『木の板や棘の上に居る』を、或る者たちは『裸地の上に座る』を、或る者たちは『蹲踞して坐る』をなし、(26.143)

或る者たちは『住まい無く二、三日だけ滞在する』を、また『四、五、六、七日、多数日滞在する』をなし、(26.144)

また『裸で灰を身体に塗る』『場所の適不適を決めない』『髪・爪・顎鬚を長く伸ばし弁髪を髷をもつ』をなし、(26.145)

また『供花の残余や塵を体に塗る』『髪をほだき裸形でいる』を、また或る者たちは『熱い水を飲む』『米の研ぎ汁を飲む』をなし、(26.146)

また『流れる水を飲む』『常に聖地の水を飲む』をなし、『川・水たまり・湖・池・井戸で冷水を飲む』をなし、(26.147)

或る者たちは『三岐杖をもつ』『頭を剃る』『水瓶・鉢を携える』をなし、或る者たちは『髑髏・カトヴァーンガ杖・ダマル太鼓・剣を手に持つ』をなし、(26.148)

また『祭祀の火の煙を吸う』『昇る太陽を凝視する』をなし、或る者たちは『五火により体を焼く』を、或る者たちは『聖地の水に身を浸す』をなし、(26.149)

或る者たちは『常に腕を高く上げる』をなし、或る者たちは『片足で立ち続ける』をなす。このようにして彼らは自分の幸福を欲し、様々な苦行の功德を積んでいる。(26.150)

或る者たちは『抑制された火の中に身を投げる』をなし、或る者たちは『断崖から投げ落としてもらう』をなし、また『聖地の水に沈む』をなし、幸福を欲して命を捨てる。(26.151)

また『オーム、ヴァシャト、スヴァダー、スヴァーハーなど[の聖句]を低く唱える』をなし、また『ダーラニー（陀羅尼）やマントラ（真言）の唱誦』をなして、自分の善趣への再生を成就させる。(26.152)

或る者たちは『ブラフマー神（梵天）』を信奉して嬉しく善行を積む。また或る者たちは『ルドラ神（自在天）』、或る者たちは『ハリ神（ヴィシュヌ）』をいっしんに信奉し、(26.153)

また或る者たちは『月』を、『太陽神』を、『インドラ（帝釈天）』を、『護世王の神々すべて』を、また『星々を伴った惑星たち』を信奉し供養する。(26.154)

また『マートリカー（七母神）と眷属』を、『スカンダ（韋駄天）』を、『マハーカーラ（大黒）』を、『ヴィナーヤカ（ガネーシャ）』を、『バイラヴァ（怖畏神）たち』を、また『母神ドゥルガー』を信奉し供養する。(26.155)

また或る者たちは『ダーキニーたちとダーカたち』を、『シッダたち』を、『サーディヤたち』を、『グヒヤカたち』を、『ガンダルヴァ（乾闥婆）たち』を、『キンナラ（緊那羅）たち』を、『葉叉たち』を、或る者たちは『ヴィディヤダラたち』を、(26.156)

また『龍王たち』を、『ガルダ（金翅鳥）たち』を、『ダイティヤ（阿修羅）たち』を、『クンバーンダたち』を、『羅刹たち』を、さらには『ブータ（鬼）たち』を、『プレータ（餓鬼）たち』を、また『ピシャーチャ（食肉鬼）たち』すら、自分の幸福を欲して崇拝する。(26.157)

また或る者たちは『山』や『藪林』において、諸々の『洞』において、諸々の『峡谷』で、或いは『川』『泉池』『湖』『井戸』や『海の岸边』において、(26.158)

また『座の聖地』『聖域』『墓場』において、『四つ辻』『旅人の休憩所』において、また『施療宿泊所』『僧院』『寺院』『樹の根元』や『牛舎』において、(26.159)

同様にまた他の場所として、『閑寂の地』や『人なき森林』において、彼らは身を置き、心を集中させ、苦行の誓戒を行じる。(26.160)

同様にまた或る者たちは『家』『柱』や、『石』『杵』や、『弓』『矢』『槍』『三叉戟』『剣』『投げ槍』などを崇拜する。(26.161)

また『ヨーグルト』『バターオイル』『大麦』『乳』『鉱物』『宝石』『芥子の実』、また『ドゥールヴァ草』や『護符紐』をもって、彼らはめでたいものと見なす。(26.162)

また或る者たちは自分の息子たちにより、自分が死後に善趣（善き再生の世界）を得られると考えている。このように多種多様な行為を、これらの外道師たちはしている。(26.163)

彼らは邪見に陥って、『依り処たりえないもの』に対して『依り処』として喜悦を見出し、『めでたさが無いもの』に『めでたさ』を想って、浄らかであると考えている。(26.164)

されば、いざ、私は勝れてめでたい、その様な苦行の誓戒を開始しよう。それによって慢心に酔ったあの外道たちが、慢心を離れて、大きな歓喜を得るように。(26.165)

福德の行為を失った者たちの心を、有徳の行為を熱望するように変えたい。禪定をなさんと欲する者たちに、格別な禪定を示したい。」(26.166)

このように沈思し、浄らかな心をもつ菩薩は集中して、一切の諸仏を憶念し、なし難い苦行を開始した。(26.167)

その場所で彼は結跏趺坐して禪定し、諸仏を念じ、心を三昧に定め置き、嬉しく〔苦行の〕誓戒を行じた。(26.168)

その誓戒を堅持するために、浄らかな思いをもつ彼は毎粒一粒のナツメの実を食べながら、禪定に集中して過ごした。(26.169)

このようにして十八箇月の間、毎日ナツメの一粒の実を食べて、集中して苦行の誓戒を行じた。(26.170)

その次に、彼はひどく体が痩せてしまっている、十八箇月の間、毎粒一粒の米を食べ、苦行の誓戒を行じた。(26.171)

さらにその後、痩せた体をもちながら、彼は十八箇月の間、毎粒一粒の胡麻を食べ、誓戒を行じた。(26.172)

その後、体がひどく痩せ切っている、十八箇月の間、断食の行に集中し、禪定して苦行の誓戒を行じた。(26.173)

そしてその後、体の痩せ細ったかの菩薩は、三昧を保ちつつ、三宝に帰依しつつ、一切の諸仏を憶念しつつ、(26.174)

彼は吸う息と吐く息を止めて、心臓の蓮の中に留め、『呼吸の停止』（止息）という禪定を堅持して、集中して過ごした。(26.175)

アバラー、スグプター、プリーヤ、スプリーヤ、ヴィジャヤセーナー、アティムクタカマラーという名の娘たちと、(26.176)

スンドリー、クンバカーリー、ウルヴィルヴィカー、ジャティラカー、そしてスジャーターの、それら十人の村長の娘たち、(26.177)

浄信をもつ彼女たちは、毎日彼に米粒やナツメや胡麻を与えつつ、常に見つめ、拝し、親しく仕え、嬉しく供養していた。(26.178)

その後、彼がその鼻と口の両方で風（息）を止めた時、高い音がその両耳の穴から発出した。(26.179)

次に、耳と鼻と口とが塞がれた時、風（息）は上に昇り、後ろの頭蓋へと達した。(26.180)

このように彼は全ての穴において風（息）の動きを塞ぎ、止息定を行って、禪定し、諸感官の活動を鎮めたままで住した。(26.181)

このような状態のままでいる彼を見て、そこに集まった神々は、「ああ何と、この大士は命終してしまった」と言った。(26.182)

その後他の神々は、そのように坐ったままでいる彼をよく眺めて、嬉しくこう言った。「この大士・阿羅漢は禪定し、心を集中して住しておられるのだ。(26.183)

この釈迦族の灯火たるお方が、法の火を輝やかせる前に、その願望を満たすことなく、消えてしまうことは決してない。」(26.184)

そう言って、彼ら神々は再び彼を眺めて、納得し、拝し、右繞すると、嬉しく天界へと帰っていった。(26.185)

速やかにそこに戻ると、彼らはマーヤー夫人の前に立ち、その出来事の全てを詳しく報告した。(26.186)

その消息を聞くと、マーヤー夫人は憂悩した。夜、マーヤーは速やかに天女たちの群と一緒に彼を見るために、(26.187)

そこに赴き、かの母はナイランジャンナー川の岸辺で山の切り立った場所に坐っている彼を見つけて、近づいた。(26.188)

その場所で、死んだような有様でいる彼を見て、愛情の苦しみの火に焼かれ、泣きながらこのように語りかけた。(26.189)

「ああわが子よ、とても快適なルンビニーの園であなたが生まれた時、やってきたブラフマー神とインドラ神によって、まるでライオンの子のようにあなたは抱き取られました。(26.190)

その時其処で、太陽のようなあなたは七歩を歩み、四方を眺めて、このような言葉を発したのです。(26.191)

『これが私の最後の生である。ここで私は最高の菩提を成就して、世の生類に幸をもたらし、よき寂滅の至福（涅槃）に入るであろう』と。(26.192)

ああわが子よ、あなたのこの偉大な誓いの言葉はまだ果たされていない。王の栄光と安楽の達成すら、あなたは享受していない。(26.193)

アシタ大仙の予言も偽りになってしまうのですか。菩提を得ることなく、森の中で死んでしまうのですか。(26.194)

わが息子のため、私は誰にすがったらよいのでしょうか。悩苦する私は、誰に哀願したらよいのでしょうか。たった一人の息子の命が、まだわずかに生きて続けていると、いったい誰が告げてくれるのでしょうか。(26.195)

かように彼女が悲嘆する声を聞いて、菩薩は「その声が誰かを」知りながらも、その母を眺めて、語りかけた。(26.196)

「ここで髪をふり乱し、ひどく哀れに泣いているこのひとは誰か。『息子よ』と嘆きながら、私の前で地面に伏しているひとは誰か。」(26.197)

そう、彼が語ったのを聞いて、マーヤー夫人は歓喜した。「この子は死んでいなかった」と思い、彼を見つめながら語りかけた。(26.198)

「十箇月の間、あなたは私によって胎内で金剛石のように受持されたのです。わが子よ、あなたの母である私がここで苦しみ嘆いているのです。」(26.199)

こう、母が語ったのを聞くと、菩薩は落ち着いた態度でその母を安心させながら、見つめてこのように説いた。(26.200)

「母よ、恐れるようなことは、ここにありません。あなたの労苦は実を結ぶでしょう。アシタ大仙が説かれたことも、偽りにはなりません。(26.201)

牟尼の王たるディーパンカラ（燃燈仏）が私に授記された通りに、そのすべてが必ず本当になって成就するでしょう。(26.202)

たとえ大地が百に碎かれようと、またメール山（須弥山）が全方位に揺れ動こうとも、あらゆる惑星と星々が地上に落ちてこようと、(26.203)

私が菩提に達せず、あらゆる世界に正法を説かずに、寂滅の至福（涅槃）に達することはありません。(26.204)

ですから、ここで悲しむ必要はないのです。あなたは歓喜してお戻りになって下さい。あなたは間もなく、私が菩提を得て、光輝に充ちたジナ（仏陀）になるのをご覧になることでしょう。」(26.205)

そう、息子が語ったのをマーヤー夫人は聞くと、それがまさに本当であると知り、よく理解して、歓喜した。(26.206)

その後、かの母は天の花々を嬉しくその息子の上に振りまいて讃美し、見つめながらこう語った。(26.207)

「立ち上がりなさい。あなたのこの苦行は成就した。誓戒の遵守を全うしなさい。一切衆生に益をもたらすために、菩薩行の誓戒を行いなさい。(26.208)

あなたが今語ったその通りに、それがあなたに成就しますように。どんな場所においても常に災いなく、めでたい幸がありますように。」(26.209)

このように語って、飲むそのマーヤー夫人は、勝利の言葉と激励によって菩薩を喜ばせた。(26.210)

その後、母マーヤーは嬉しくその息子を見つめ、三度右繞し、拝すると、天女の群と共に、(26.211)

幸せな会話と激励によってとても喜悅した心で、夜を輝かせながら、速やかに天界の自らの住まいへと戻っていった。(26.212)

其処で自らの住まいに坐った彼女は、天女の群と共に、嬉しく菩薩の徳性の出現のために働きかけながら、ずっと過ごした。(26.213)

その後、かの大士（菩薩）は体が痩せ細り、諸感官が弱まり、血と肉が乾ききって、体に骨と皮ばかりが残った姿となった。(26.214)

雨や風や熱い日差しにさらされ、塵埃にまみれてうす黒くなった彼は、自ら手で全身を拭って洗い清めた。(26.215)

するとその時、彼が体を拭うと、彼の全身の毛や髪が至る所でばらばら抜け落ちてしまい、風に運ばれた。(26.216)

彼はひどく優美さを失った体となり、肌の色は黒ずみ、醜い姿となった。まるで墓場にある屍体の如き、骸骨のような恐ろしい姿であった。(26.217)

黒ずんで輝きを失い、骸骨のような体の彼を見て、村の人々は皆、このように語り合った。(26.218)

「ああ、この沙門は黒く、青黒く、マドゥグラ魚の肌色をしている。かつての彼の美しい輝きを放っていた体は失われてしまった」と。(26.219)

そのような状態でいる彼を眺めて、あらゆる村の少年や少女たちは、「塵埃まみれのピシャーチャ（食肉鬼）だ」と言って、塵埃をあびせかけた。(26.220)

このようにして、様々なやり方で鬼霊のように嘲られ続けても、彼は少しも心をかき乱されたり落ち込んだりすることを見せなかった。(26.221)

彼は雨や風や熱い日差しを避けるための日陰すら欲しなかった。虫類、虻や蚊や蛇などを追い払うこともしなかった。(26.222)

汚れ、糞尿、痰、鼻水などを排泄することもせず、また手足の屈伸もしなかった。(26.223)

手で体のどこかを覆い庇おうともせず、また、どこでもどんな時でも、体を掻いたりすることがなかった。(26.224)

恐れを生じて、決して諸感官（目や耳）を塞がなかった。どんな感官の対象を見ても、決して気にかけることがなかった。

このように、かの大士は六年の間極めてなし難い苦行誓戒を、世の生類を益するため、専心して実行した。(26.226)

その場に來た神々、薬叉やガンダルヴァやキンナラたち、ダイティヤたち、ガルダたち、龍たち、クンバーンダたち、羅刹たちも、(26.227)

彼の徳性と教法とを目の当たりにして彼らは喜び、加持し、午後と午前に供養して、常に彼を尊崇した。(26.228)

このように、その菩薩は六年の間、難行の誓戒を行じながら、無数の神々を正法に導いた。(26.229)

そうしてダイティヤたち、人間たち、薬叉・ガンダルヴァ・キンナラたちを、またグヒヤカたち、シッダやサーディヤたち、クンバーンダたち、ラクシャサたちをも、(26.230)

またヴィディヤラたち、龍たち、ガルダたち、マホーラガたちをも、菩提を成就する法を希求する者たちに変えた。(26.231)

このように衆生を饒益しながら、菩薩は専心して六年の間、諸仏を憶念しつつ、難行の誓戒を行じた。(26.232)

彼のその出来事の全てを毎日、父であるシュッドーダナ王は聞いていて、驚嘆していた。(26.233)

「亡くなった」と聞かされた時も、彼は決して納得しなかった。「彼は三昧に心を定め置いているのだ」と自分の心を励ました。(26.234)

同じ様に、母のプラジャーパティーと妻のヤショーダラーも、「一切知たるあの菩薩が命終するはずがない、(26.235)

彼は菩提への誓願によって心に決意を宿し、三昧に心を定め置いているに違いない」と、そう考え、悲しみを免れた。(26.236)

このかつてない出来事の報せはあらゆるところに広まり、それを聞いて、すべての人も驚嘆した。(26.237)

同様に、すべての神々、すべての護世王たちも、それを聞き、見て、随喜し、彼の誓戒を願った。(26.238)

——以上、師がお説きになったことを、聞いたその通りに私は語りました。大士よ、あなたもこれを聞いて、共に歓びなさい。(26.239)

聴聞して、この『難行の誓戒の実行』[という法話]を随喜する者は皆、大士として、めでたい幸せと光輝と善き徳性が依る器となることでしょう。[26.240]

このように師が説かれたのを聞いて、アショーカ王 {或いは：アーナンダ出家行者} は嬉しく「わかりました」と答え、集会の出席者たちと共に喜んで信受した。(26.241)

苦行誓戒を行じた [という名の] 品、第26章 [終わる]。

第20章～第26章における Lal, Bc, Mvu が使われた箇所と自由作文の箇所

以下に七つの章の内容とソースを簡単に示したい。今回は各章ごとに以下のような数値を記した表を作成した。

表の左端に章全体の偈数を挙げ、その右に①～⑤の数字を示す。

- ① ソースが Lalitavistara (= Lal) であるらしい記述をなす箇所すべての合計の偈数。
- ② ソースが Mahāvastu (= Mvu) であるらしい記述をなす箇所すべての合計の偈数。
- ③ ソースが Buddhacarita (= Bc) であるらしい記述をなす箇所すべての合計の偈数。
- ④ オリジナルな自由作文による記述の箇所すべての合計の偈数。
- ⑤ 章の冒頭と末尾にある、枠物語をつくる偈の合計の数。

表中の ①～⑤のそれぞれにおいて、その合計の偈数が章全体の偈数に占める割合の％の数字（小数点1桁より下の数値を四捨五入した）を挙げる。

このように作った表を章ごとに示しながら、第20章～第26章の各章の内容とソースについての簡潔な説明を行いたい。以下に「中巻」と記すのは Lal の校訂本たる外蘭幸一2019の中巻（大東出版社）をさす⁽¹⁷⁾。また「平岡上」と記すのは Mvu の全訳たる平岡聡2010の上巻（大蔵出版）をさす。

TJAM 第20章 Antaḥpurāvalokanābhiniṣkramaṇotsāhaparivarta 後宮の女たちを見て出離を意欲する〔という名の〕品

内訳

第20章全体の偈数	① Lal に依る箇所の偈数	② Mvu に依る箇所の偈数	③ Bc に依る箇所の偈数	④ 自由作文の箇所の偈数	⑤ 枠物語の箇所の偈数
213	合計126偈 (章の59.2%)	合計0偈	合計0偈	合計80偈 (章の37.6%)	合計7偈 (章の3.3%)

本章は菩薩の出家を阻止するため都城全体が嚴重な警護に入った、出家直前の状況から始まって、菩薩が後宮の女たちの醜惡な寝姿を見て厭嫌の思いを抱いたところで章が終わる。ソースとしてLal の第15章に依る記述が本章全体の六割を占め、残りの四割をオリジナルな自由作文が占めている。本章では Mvu や Bc は使われていない。

TJAM 20章1～4（計4偈）章の枠組

TJAM 20章5～37（計33偈）⇔ Lal 15章中巻44～50頁（訳455～457頁）

TJAM 20章38～113（計76偈）自由作文

TJAM 20章114～180（計67偈）⇔ Lal 15章中巻50～62頁（訳458～465頁）

17. Lal つまり Lefmann 本 (1902) の頁は、この外蘭幸一校訂本の梵文の頁を開けばわかるので、私はここで Lefmann の頁をいちいち記さなかった。

TJAM 20章181～184（計4偈）自由作文

TJAM 20章185～210（計26偈）⇔ Lal 15章中巻62～66頁（訳465～470頁）

TJAM 20章211～213（計3偈）章の枠組

TJAM 第21章 Purābhiniṣkramaṇaparivarta 都城から出離する〔という名の〕品 内訳

第21章全体 の偈数	① Lal に依る 箇所偈数	② Mvu に依 る箇所偈数	③ Bc に依る 箇所偈数	④ 自由作文の 箇所偈数	⑤ 枠物語の 箇所偈数
539	合計221偈 (章の41.0%)	合計9偈 (章の1.7%)	合計66偈 (章の12.2%)	合計236偈 (章の43.8%)	合計7偈 (章の1.3%)

本章は菩薩がカピラヴァストウの城から真夜中に出てゆく「出離」の出来事を語るため、仏伝の大きな山場として、TJAM のこれまでの章と比べて偈の数が増し、539 偈もある。冗長すぎるほどの本章の長い語りから、TJAM の作者がいかにこの場面を力を入れているかがわかる。本章の骨組みは Lal に基づいており、その骨組みの中にあちこちにオリジナルな自由作文の出来事を差し挟むことで肉付けがなされている。

Mvu は TJAM では Lal や Bc に記述がない場合、それを補うための資料として使われているにすぎず、本章では210～217と426の二箇所利用されている。

本章の終わりのほうで Bc 第6章2, 4～68のテキストの丸ごとの借用がなされているが、この Bc 借用の部分は恐らく Jayamuni が書いた A 写本の原形には無く、ずっと後の時代に追加的に別の人物により写本に付加された可能性が高い。

TJAM 21章1～4（計4偈）章の枠組

TJAM 21章5～83（計79偈）⇔ Lal 15章中巻66～80頁（訳470～477頁）

TJAM 21章84～106（計23偈）自由作文

TJAM 21章107～115（計9偈）⇔ Lal 15章中巻60頁（訳464～465頁）

TJAM 21章116～124（計9偈）自由作文

TJAM 21章125～141（計17偈）⇔ Lal 15章中巻74～78, 82～86頁（訳474～476, 479～481頁）

TJAM 21章142～152（計11偈）自由作文

TJAM 21章153～155（計3偈）⇔ Lal 15章中巻 86～88頁（訳481～482頁）

TJAM 21章156～209（計54偈）自由作文

TJAM 21章210～217（計8偈）⇔ Mvu Marciniak II 186-187 (Senart II 146) 平岡上374頁

TJAM 21章218～274（計57偈）自由作文

TJAM 21章275～333（計59偈）⇔ Lal 15章中巻92～108頁（訳484～493頁）

TJAM 21章334～336（計3偈）自由作文

TJAM 21章337～352（計16偈）⇔ Lal 15章中巻108～114頁（訳493～495頁）

TJAM 21章353～358（計6偈）自由作文

TJAM 21章359～362 (計4偈) ⇔ Lal 15章中巻114頁 (訳495～496頁)
 TJAM 21章363～365 (計3偈) 自由作文
 TJAM 21章366～374 (計9偈) ⇔ Lal 15章中巻116頁 (訳496～497頁)
 TJAM 21章375～384 (計10偈) 自由作文
 TJAM 21章385～402 (計18偈) ⇔ Lal 15章中巻118～120頁 (訳497～499頁)
 TJAM 21章403～424 (計22偈) 自由作文
 TJAM 21章425 (計1偈) ⇔ Lal 15章中巻120頁 (訳499頁)
 TJAM 21章426 (計1偈) ⇔ Mvu Marciniak II 206, 235, 243 (Senart II 164, 189, 195) 平岡上
 390, 409, 413頁
 TJAM 21章427 (計1偈) ⇔ Bc 6章2 (計1)
 TJAM 21章428 (計1偈) ⇔ Lal 15章中巻120頁 (訳499頁)
 TJAM 21章429～435偈 (計7) 自由作文
 TJAM 21章436～490 (計55偈) ⇔ Bc 6章4～58 (計55)
 TJAM 21章491～492 (計2偈) 自由作文
 TJAM 21章493～498 (計6偈) ⇔ Bc 6章59～64 (計6)
 TJAM 21章499～501 (計3偈) ⇔ Lal 15章中巻122頁 (訳500～501頁)
 TJAM 21章502～503 (計2偈) ⇔ Lal 15章中巻120頁 (訳499頁)
 TJAM 21章504～528 (計25偈) 自由作文
 TJAM 21章529～532 (計4偈) ⇔ Bc 6章65～68 (計4)
 TJAM 21章533～536 (計4偈) 自由作文
 TJAM 21章537～539 (計3偈) 章の枠組

TJAM 第22章 Chandakanivartanasarvāntaḥpurikāśokavinodanakanthakasvargābhiro- hana-parivarta チャンダカが帰還してすべての後宮の女たちの悲しみを慰め、カ ンタカが昇天した [という名の] 品

内訳

第22章全体 の偈数	① Lal に依る 箇所偈数	② Mvu に依 る箇所偈数	③ Bc に依る 箇所偈数	④ 自由作文の 箇所偈数	⑤ 枠物語の 箇所偈数
484	合計30偈 (章の6.2%)	合計40偈 (章の8.3%)	合計128偈 (章の26.4%)	合計272偈 (章の56.2%)	合計14偈 (章の2.9%)

本章は、カピラヴァストウの都を出離した釈尊が語り得ない内容の、彼が去った後の都で起こった出来事を扱うため、自由作文で書かれた箇所がひどく増える一方、Lal を利用した偈の数は前章に比べて大きく減っている。本章の19～27, 207～211, 220～222, 231, 258～269 (合計30偈) が Lal を利用した箇所である。

本章の後半では Bc の第8章「後宮での嘆き」と第6章「馬丁を返す」からの翻案及び原文の丸ごとの借用の部分が多く出てくる。本章の272～295, 351, 414 は Bc からの翻案であり、また本章の296～332, 352～413, 415～417は Bc のテキストの丸ごとの借用であ

る。また馬カンタカが昇天し神になったというエピソード（Marciniak II 236～242）では Mvu がソースとして使われて、本章の第425～461偈の箇所がそれに該当する。

TJAM 22章1～10（計10偈）章の枠組

TJAM 22章11～18（計8偈）自由作文

TJAM 22章19～27（計9偈）⇔ Lal 15章中巻124～126頁（訳502～503頁）

TJAM 22章28～206（計179偈）自由作文

TJAM 22章207～211（計5偈）⇔ Lal 15章中巻136頁（訳509頁）

TJAM 22章212～216（計5偈）自由作文

TJAM 22章217～219（計3偈）⇔ Mvu Marciniak II 235 (Senart II, 189) 平岡上408-409頁

TJAM 22章220～222（計3偈）⇔ Lal 15章中巻146頁（訳514頁）

TJAM 22章223～230（計8偈）自由作文

TJAM 22章231（計1偈）⇔ Lal 15章中巻146頁（訳514～515頁）

TJAM 22章232～257（計26偈）自由作文

TJAM 22章258～269（計12偈）⇔ Lal 15章中巻130頁（訳505～506頁）

TJAM 22章270～271（計2偈）自由作文

TJAM 22章272～295（計25偈）⇔ Bc 8章32～50（計19）[類似]

TJAM 22章296～332（計37偈）⇔ Bc 8章51～87（計37）

TJAM 22章333～350（計18偈）自由作文

TJAM 22章351（計1偈）⇔ Bc 6章1（計1）[類似]

TJAM 22章352～413（計62偈）⇔ Bc 6章2～63（計62）

TJAM 22章414（計1偈）⇔ Bc 6章64（計1）[類似]

TJAM 22章415～417（計3偈）⇔ Bc 6章65～67（計3）

TJAM 22章418～424（計7偈）自由作文

TJAM 22章425～461（計37偈）⇔ Mvu Marciniak II 236 (Senart II, 190) 平岡上409-410頁

TJAM 22章462～480（計19偈）自由作文

TJAM 22章481～484（計4偈）章の枠組

TJAM 第23章 Mahārṣitapovratasaṃdarśanaparivarta 大仙たちの苦行の誓戒を觀る [という名の] 品

内訳

第23章全体 の偈数	① Lal に依る 箇所の偈数	② Mvu に依 る箇所の偈数	③ Bc に依る 箇所の偈数	④ 自由作文の 箇所の偈数	⑤ 枠物語の 箇所の偈数
217	合計16偈 (章の7.4%)	合計6偈 (章の2.8%)	合計56偈 (章の25.8%)	合計130偈 (章の59.9%)	合計9偈 (章の4.1%)

出離後、菩薩はまず苦行者たちの修行を見るため、苦行林を訪れる。その出来事を語る本章の7～17は Bc 第7章2～13を簡略化して翻案して出来ている。また本章の18～62はBc 7章14～58のテキストの丸ごとの借用である。

本章の63～68は Mvu のヴァシシュタ仙への訪問の記述を利用している。また本章の90～102, 126, 179～180 は Lal の記述に基づくものである。しかし本章全体の約六割は自由作文によって作られている。Lal からヒントを得て、婆羅門女シャクティ・婆羅門女パドマー・ライヴァタ仙・聖者ラージュヤカの四人との出会いの出来事を自由に膨らませて詳述しており、仏伝として独自の語りを行っている。伝統法たる家住期・林棲期に沿った、天界をめざす生き方を拒絶して、生類を益するために出家して正覚をめざす、大乘の菩薩道 (bodhicaryā) の立場からの記述を行う点に、TJAM の仏伝としての独自性がある。

TJAM 23章1～6 (計6偈) 章の枠組

TJAM 23章7～17 (計11偈) ⇔ Bc 7章2～13 (計12) [類似]

TJAM 23章18～62 (計45偈) ⇔ Bc 7章14～58 (計45)

TJAM 23章63～68 (計6偈) ⇔ Mvu Marciniak II 243-245 (Senart II, 195-197) 平岡上 413-414頁

TJAM 23章69～89 (計21偈) 自由作文

TJAM 23章90～102 (計13偈) ⇔ Lal 16章中巻158頁 (訳520頁)

TJAM 23章103～125 (計23偈) 自由作文

TJAM 23章126 (計1偈) ⇔ Lal 16章中巻158頁 (訳520頁)

TJAM 23章127～178 (計52偈) 自由作文

TJAM 23章179～180 (計2偈) ⇔ Lal 16章中巻158頁 (訳520頁)

TJAM 23章181～214 (計34偈) 自由作文

TJAM 23章215～217 (計3偈) 章の枠組

TJAM 第24章 Bodhisattvānveṣaṇābhībodhanaparivarta 菩薩を搜索して説得をなした [という名の] 品

内訳

第24章全体の偈数	① Lal に依る箇所 の偈数	② Mvu に依る箇所 の偈数	③ Bc に依る箇所 の偈数	④ 自由作文の箇所 の偈数	⑤ 枠物語の箇所 の偈数
163	合計0偈	合計0偈	合計91偈 (章の55.8%)	合計67偈 (章の41.1%)	合計6偈 (章の3.7%)

本章は Bc の第8章の最後の2詩節と第9章の章全体で語られる出来事、すなわち菩薩が出家した後に、浄飯王により大臣と宮廷祭官の二人が菩薩の搜索に派遣され、菩薩を見つかるも説得に失敗した出来事を語る。そのため本章は Bc を依用した部分が多く、章全体の約56%を占める。本章の4～16, 20～22, 27～42, 48～75は Bc の第8章と第9

章の諸詩節を利用し翻案したものである。また本章の76～106は Bc の第9章52～82を丸ごと借用している。本章の残る部分は自由作文によって作られている。本章では Lal も Mvu も利用されていない。なお本章の最初の研究として松本昌巳が九州大学に提出した修士論文（2012年）がある。

TJAM 24章1～3（計3偈）章の枠組

TJAM 24章4～16（計13偈）⇔ Bc 8章81, 86, 87, 9章1～3, 5～7（計9） [類似]

TJAM 24章17～19（計3偈）自由作文

TJAM 24章20～22（計3偈）⇔ Bc 9章8～10（計3） [類似]

TJAM 24章23～26（計4偈）自由作文

TJAM 24章27～42（計16偈）⇔ Bc 9章11～24（計13） [類似]

TJAM 24章43～47（計5偈）自由作文

TJAM 24章48～75（計28偈）⇔ Bc 9章30～51（計22） [類似]

TJAM 24章76～106（計31偈）⇔ Bc 9章52～82（計31）

TJAM 24章107～160（計54偈）自由作文

TJAM 24章161～163（計3偈）章の枠組

TJAM 第25章 Magadhādhīpatibimbisāraṇṛpābhisamgatiparivarta マガダの君主ビンビサーラ王が会いに来た [という名の] 品

内訳

第25章全体の偈数	① Lal に依る箇所 の偈数	② Mvu に依る箇所 の偈数	③ Bc に依る箇所 の偈数	④ 自由作文の 箇所 の偈数	⑤ 枠物語の 箇所 の偈数
231	合計51偈 (章の22.1%)	合計0偈	合計47偈 (章の20.3%)	合計131偈 (章の56.7%)	合計6偈 (章の2.6%)

ヴァイシャリーでのアーラーダ・カーラーマとの出会い、そして王舎城におけるビンビサーラ王との出会いを語る本章は、Bc の第12章と第10章の積極的な利用が創作における一つの特徴となる。本章の19～54 は Bc の第12章の14～18, 20, 22～24, 34, 36～41, 46～49, 51～64, 68～74 の諸詩節を簡略化して用いている。その後に、Bc 第10章の 2, 3, 14, 18～20 による翻案が本章の 90, 91, 105, 138～141 で見られる。

本章で Lal を利用している箇所は、章全体の約二割であって、4, 5, 15～18, 60～67, 77～83, 89, 92, 108, 111, 112, 142～154, 186, 217～227 である。

TJAM 25章1～3（計3偈）章の枠組

TJAM 25章4～5（計2偈）⇔ Lal 16章中巻158頁（訳521頁）

TJAM 25章6～14（計9偈）自由作文

TJAM 25章15～18（計4偈）⇔ Lal 16章中巻160頁（訳521頁）

TJAM 25章19～54（計36偈）⇔ Bc 12章14～18, 20, 22～24, 34, 36～41, 46～49, 51～64, 68～74（計41）〔類似〕

TJAM 25章55～59（計5偈）自由作文

TJAM 25章60～67（計8偈）⇔ Lal 16章中巻160頁（和訳522）

TJAM 25章68～76（計9偈）自由作文

TJAM 25章77～83（計7偈）⇔ Lal 16章中巻160頁（和訳522～523）

TJAM 25章84～88（計5偈）自由作文

TJAM 25章89（計1偈）⇔ Lal 16章中巻162頁（和訳523）

TJAM 25章90～91（計2偈）⇔ Bc 第10章2, 3（計2）〔類似〕

TJAM 25章92（計1偈）⇔ Lal 16章中巻162頁（和訳523-524）

TJAM 25章93～104（計12偈）自由作文

TJAM 25章105（計1偈）⇔ Bc 第10章14（計1）〔類似〕

TJAM 25章106～107（計2偈）自由作文

TJAM 25章108（計1偈）⇔ Lal 16章中巻166頁（和訳523-524）

TJAM 25章109～110（計2偈）自由作文

TJAM 25章111～112（計2偈）⇔ Lal 16章中巻166頁（和訳523-524）

TJAM 25章113～137（計25偈）自由作文

TJAM 25章138～141（計4偈）⇔ Bc 第10章18～20（計3）〔類似〕

TJAM 25章142～148（計7偈）⇔ Lal 16章中巻172～174頁（和訳530-531）

TJAM 25章149～154（計6偈）⇔ Lal 16章中巻168頁（和訳527～528）

TJAM 25章155～185（計31偈）自由作文

TJAM 25章186（計1偈）⇔ Lal 16章中巻168頁（和訳528）

TJAM 25章187～216（計30偈）自由作文

TJAM 25章217～227（計11偈）⇔ Lal 16章中巻174頁（和訳531）

TJAM 25章228（計1偈）自由作文

TJAM 25章229～231（計3偈）章の枠組

TJAM 第26章 Duṣkaravratācaryāparivarta 苦行誓戒を行じた〔という名の〕品 内訳

第26章全 体の偈数	① Lal に依る 箇所 の 偈 数	② Mvu に依 る箇所 の 偈 数	③ Bc に依る 箇所 の 偈 数	④ 自由作文の 箇所 の 偈 数	⑤ 枠物語の 箇所 の 偈 数
241	合計150偈 (章の62.2%)	合計9偈 (章の3.7%)	合計1偈 (章の0.4%)	合計74偈 (章の30.7%)	合計7偈 (章の2.9%)

本章では、ルドラカ・ラーマプトラ、五群賢者たちの合流、ガヤーシールシャ山での思考、ウルヴィルヴァー到着、外道たちの種々の誤った修行法と信仰に関する思考、菩薩の六年間の激しい苦行、生母マーヤーの天界からの来訪、菩薩の肉体の極度の衰弱

等の出来事が語られるが、それらの記述はほぼ Lal に基づくものである。本章の約六割はそのソースとして Lal を用いている。Mvu を用いたらしい箇所も二箇所ある。ウルヴィルヴァーに來たばかりの菩薩と娘スジャーターの最初の出会いと会話は Mvu の伝承をヒントにして作ったものであろう。また本章の内容の三割は自由作文である。

TJAM 26章1～4 (計4偈) 章の枠組

TJAM 26章5 (計1偈) 自由作文

TJAM 26章6～31 (計26偈) ⇔ Lal 17章中巻176～182頁 (訳533～536頁)

TJAM 26章32～46 (計15偈) 自由作文

TJAM 26章47～52 (計6偈) ⇔ Lal 17章中巻182頁 (訳536～537頁)

TJAM 26章53～57 (計5偈) 自由作文

TJAM 26章58～62 (計5偈) ⇔ Lal 17章中巻182頁 (訳537頁)

TJAM 26章63 (計1偈) ⇔ Bc 第12章89 (計1) [類似]

TJAM 26章64～71 (計8偈) ⇔ Lal 17章中巻182～188頁 (訳537～540頁)

TJAM 26章72 (計1偈) ⇔ Lal 17章中巻188～190頁 (訳540頁)

TJAM 26章73～75 (計3偈) ⇔ Mvu Marciniak II 249 (Senart II, 200) 平岡上416頁

TJAM 26章76～116 (計41偈) 自由作文

TJAM 26章117～121 (計5偈) ⇔ Lal 17章中巻188～190頁 (訳540頁)

TJAM 26章122～124 (計3偈) 自由作文

TJAM 26章125～167 (計43偈) ⇔ Lal 17章中巻190～196頁 (訳540～544頁)

TJAM 26章168～173 (計6偈) ⇔ Mvu Marciniak II 289 (Senart II, 231) 平岡上437～438頁

TJAM 26章174～175 (計2偈) ⇔ Lal 17章中巻196頁 (訳545頁)

TJAM 26章176～178 (計3偈) ⇔ Lal 17章中巻236頁 (訳568頁)

TJAM 26章179～229 (計51偈) ⇔ Lal 17章中巻200～216頁 (訳545～555頁)

TJAM 26章230～238 (計9偈) 自由作文

TJAM 26章239～241 (計3偈) 章の枠組

〈文献表〉

Lefmann, Salomon. 1902, 1908. *Lalita Vistara. Leben und Lehre des Śākya-buddha*, erster Teil: Text, 1902; zweiter Teil: Varianten-, Metren- und Wörterverzeichnis, 1908, Halle.

Marciniak, Katarzyna. 2019-2020. *The Mahāvastu. A New Edition*, Vol. II (2020), Vol. III (2019), Bibliotheca Philologica et Philosophica Buddhica XIV, Tokyo.

Senart, Émile. 1882-1897. *Le Mahāvastu-Avadhāna*, 3 vols, Paris.

Tatelman, Joel. 1996. *The Trials of Yaśodharā : a critical edition, annotated translation and study of Bhadrakalpavadana II-V*. Thesis (Ph. D.), University of Oxford.

黒田親 1951 「神通遊戯譬喩鬘経 (Padya Lalita Vistara)」、『日本文化』30: 91-111 (1951).

- 1958 「Padya Lalita Vistara (神通遊戯譬喻鬘経)」、『日本文化』37: 1-20 (1958).
- 1960 「百八法明門 (Aṣṭottaraśatam nāma dharmālokaṃ mukhaṃ) (Padya-lalitavistara, Chapter V)」、『日本文化』39: pp. 1-9.
- 平岡聡 2010 『ブッダの大いなる物語: 梵文「マハーヴァストゥ」全訳』、上下、大蔵出版.
- 外蘭幸一 2019 『ラリタヴィスタラの研究 中巻』、大東出版社.
- 松本昌巳 2012 『Padya Lalitavistara 24 章の研究』 (九州大学人文科学府修士論文)
- 岡野 潔 2013a 「ネパールの仏伝アヴァダーナ・マーラー Tathāgatajanmāvadānamālā」、『印度學佛教學研究』62(1): 330-323.
- 2013b 「Kalpalatā と Avadānamālā の研究 (4) — Nārakapūrvika, Preṭibhūtamaharddhikā など —」『南アジア古典学』8: 161-264. [TJAM 第8章の校訂]
- 2014 「Kalpalatā と Avadānamālā の研究 (5) — TJAM 第1章 と Virūpāvadāna と Padmākṣāvadāna —」『南アジア古典学』9: 101-198. [TJAM 第1章の校訂]
- 2015 「Kalpalatā と Avadānamālā の研究 (6) — Kalpalatā 第83章、TJAM 第3章と第4章、SMRAM 第38章 —」『南アジア古典学』10: 1-104. [TJAM 第3, 4章の校訂]
- 2017 「Kalpalatā と Avadānamālā の研究 (7) — 第93章 Sumāgadhā 及び TJAM 第13章 —」『南アジア古典学』12: 1-91. [TJAM 第13章の校訂]
- 2019 「Kalpalatā と Avadānamālā の研究 (8) — Jayamuni, TJAM 第14章 (I), SMRAM 第21章, Kalpalatā 第84章 —」『南アジア古典学』14: 1-123. [TJAM 第14章前半の校訂]
- 2020 「Kalpalatā と Avadānamālā の研究 (9) — Devātīśayastotra, SMRAM 第20章, TJAM 第14章 (II) —」『南アジア古典学』15: 89-227. [TJAM 第14章後半の校訂]
- 2021 「Kalpalatā と Avadānamālā の研究 (10) — Jayamuni の仕事と TJAM 第15章 —」『南アジア古典学』16: 51-138. [TJAM 第15章の校訂]
- 2022 「Kalpalatā と Avadānamālā の研究 (11) — TJAM 第16章～第19章 —」『南アジア古典学』17: 1-123. [TJAM 第16, 17, 18, 19章の校訂]
- 2025 「ネパールの梵語仏伝文献『如来出生アヴァダーナマーラー』第20章～第26章について」、『印度學佛教學研究』第74巻1号、2025年12月、(114)-(120)頁。

※本研究は JSPS 科研費 (23K20418) の助成を受けたものである。

<キーワード> Tathāgatajanmāvadānamālā, Lalitavistara, Mahāvastu, Buddhacarita,
Jayamuni, 仏伝, アヴァダーナマーラー

(九州大学名誉教授, Ph.D.)